

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第207集

倍田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

倍田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所にあふ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日の課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の倍田Ⅳ遺跡は、七時雨山の山麓丘陵上に立地し、平成4年の発掘調査によって縄文時代や平安時代の集落跡が発見されました。引き続き出土資料の整理をすすめ、ここに報告書として発刊するはこびとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまで発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手北部土地改良事業所、岩手町教育委員会をはじめ関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡岩手町大字黒内第2地割木谷内9-52ほかに所在する倍田IV遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、岩手地区広域農道整備事業にかかわる広域農道建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手北部土地改良事業所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はKE 06-0215、調査略号はBTIV-92である。
4. 調査面積は5,800㎡、野外調査期間は平成4年4月14日から11月20日である。
5. 野外の発掘調査は神敏明・藤村敏男・斎藤実・佐藤修一・工藤剛司が担当し、室内整理は神敏明・斎藤実・佐藤修一が担当した。
6. 本報告書の執筆は縄文時代を神敏明が、平安時代を斎藤実・藤村敏男・神敏明が担当した。
7. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。

縄文時代の竪穴住居跡	37棟	土坑	21基	墓塚	20基	配石遺構群
焼土遺構	5基	平安時代の竪穴住居跡	11棟			
8. 分析・鑑定は、次の方々に依頼した。

石質鑑定	佐藤二郎氏（長内水源工業株式会社）
鉄器・鉄滓分析	赤沼英男氏（岩手県立博物館）
樹種同定	早坂松次郎氏（社団法人岩手県木炭協会）
9. 本報告書では、国土地理院発行の50,000分の1の地形図、岩手北部土地改良事業所作成の500分の1の用地図を使用した。
10. 土層の色調観察には、農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を用いた。
11. 発掘調査および室内整理に際しては、次の機関の御協力と御教示を賜った。

岩手北部土地改良事業所	岩手町教育委員会
-------------	----------
12. 野外調査にあたっては、地元の方々の御協力をいただいた。
13. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序
例言

〔本文〕

I. 調査に至る経過	3	1. 竪穴住居跡	19
II. 遺跡の立地と環境	4	2. 土坑	175
1. 遺跡の位置	4	3. 土壌	195
2. 地形	4	4. 焼土遺構	202
3. 周辺の遺跡	6	5. 配石遺構群	204
4. 基本土層	13	6. 遺構外出土遺物	207
III. 調査方法と整理方法	14	V. まとめ	232
1. 野外調査	14	付編 倍田IV遺跡出土鉄器・鉄滓の金属学的 解析	242
2. 室内整理	15		
IV. 検出された遺構と遺物	19		

〔図版〕

第1図 岩手県全図	1	第12図 II B 9 i 住居跡遺物	25
第2図 遺跡位置図	2	第13図 II C 3 i 住居跡	26
第3図 地形分類図	5	第14図 II C 3 i 住居跡遺物	27
第4図 岩手町の遺跡位置図	9	第15図 II C 4 d 住居跡	28
第5図 基本土層図	13	第16図 II C 4 d 住居跡遺物	29
第6図 スクリーントーン ・器面調整の表し方	16	第17図 II C 6 g 住居跡 (遺構・遺物)	30
第7図 倍田IV遺跡遺構配置図	17	第18図 II C 7 c 住居跡 (遺構・遺物)	32
第8図 I C 7 j 住居跡	20	第19図 II C 7 e 住居跡	34
第9図 I D 6 a 住居跡	21	第20図 II C 7 e 住居跡遺物(1)	35
第10図 I D 6 a 住居跡遺物	22	第21図 II C 7 e 住居跡遺物(2)	36
第11図 II B 9 i 住居跡	24		

第 22 図	Ⅱ C 7 e 住居跡遺物(3) ……………	37	第 53 図	Ⅲ B 3 g - 2 住居跡遺物(1) ……	78
第 23 図	Ⅱ C 7 f 住居跡 ……………	39	第 54 図	Ⅲ B 3 g - 2 住居跡遺物(2) ……	79
第 24 図	Ⅱ C 7 f 住居跡遺物(1) ……………	40	第 55 図	Ⅲ B 5 g 住居跡 ……………	81
第 25 図	Ⅱ C 7 f 住居跡遺物(2) ……………	41	第 56 図	Ⅲ B 5 g 住居跡遺物 ……………	82
第 26 図	Ⅱ C 7 f 住居跡遺物(3) ……………	42	第 57 図	Ⅲ B 5 g - 2 住居跡 (遺構・遺物) ……………	84
第 27 図	Ⅱ C 8 a 住居跡 (遺構・遺物) ……………	43	第 58 図	Ⅲ B 5 g - 3 住居跡 ……………	85
第 28 図	Ⅱ C 8 d 住居跡 ……………	45	第 59 図	Ⅲ B 5 g - 3 住居跡遺物 ……	86
第 29 図	Ⅱ C 8 d 住居跡遺物 ……………	46	第 60 図	Ⅲ B 6 i 住居跡 ……………	88
第 30 図	Ⅱ C 9 a 住居跡 ……………	47	第 61 図	Ⅲ B 6 i 住居跡遺物 ……………	89
第 31 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(1) ……………	50	第 62 図	Ⅲ B 8 f 住居跡 ……………	91
第 32 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(2) ……………	51	第 63 図	Ⅲ B 8 f 住居跡遺物 ……	92
第 33 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(3) ……………	52	第 64 図	Ⅲ B 9 h 住居跡 ……………	93
第 34 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(4) ……………	53	第 65 図	Ⅲ B 9 h 住居跡遺物 ……	94
第 35 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(5) ……………	54	第 66 図	Ⅲ C 1 b 住居跡 ……………	95
第 36 図	Ⅱ C 9 a 住居跡遺物(6) ……………	55	第 67 図	Ⅲ C 1 b 住居跡遺物 ……	96
第 37 図	Ⅱ C 9 d 住居跡 ……………	57	第 68 図	Ⅲ C 1 d 住居跡 ……………	97
第 38 図	Ⅱ C 9 d 住居跡遺物(1) ……	58	第 69 図	Ⅲ C 2 a 住居跡 ……………	99
第 39 図	Ⅱ C 9 d 住居跡遺物(2) ……	59	第 70 図	Ⅲ C 2 a 住居跡遺物(1) ……	100
第 40 図	Ⅱ C 9 e 住居跡 ……………	61	第 71 図	Ⅲ C 2 a 住居跡遺物(2) ……	101
第 41 図	Ⅱ C 9 e 住居跡遺物(1) ……	62	第 72 図	Ⅲ C 2 e 住居跡 ……………	103
第 42 図	Ⅱ C 9 e 住居跡遺物(2) ……	63	第 73 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(1) ……	106
第 43 図	Ⅱ C 9 e 住居跡遺物(3) ……	64	第 74 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(2) ……	107
第 44 図	Ⅲ B 2 i 住居跡 ……………	66	第 75 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(3) ……	108
第 45 図	Ⅲ B 2 i 住居跡遺物 ……	67	第 76 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(4) ……	109
第 46 図	Ⅲ B 2 j 住居跡 ……………	69	第 77 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(5) ……	110
第 47 図	Ⅲ B 2 j 住居跡遺物(1) ……	70	第 78 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(6) ……	111
第 48 図	Ⅲ B 2 j 住居跡遺物(2) ……	71	第 79 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(7) ……	112
第 49 図	Ⅲ B 3 g 住居跡 ……………	73	第 80 図	Ⅲ C 2 e 住居跡遺物(8) ……	113
第 50 図	Ⅲ B 3 g 住居跡遺物(1) ……	74	第 81 図	Ⅲ C 3 b 住居跡 (遺構・遺物) ……………	115
第 51 図	Ⅲ B 3 g 住居跡遺物(2) ……	75	第 82 図	Ⅲ C 3 b - 2 住居跡 ……	117
第 52 図	Ⅲ B 3 g - 2 住居跡 ……………	77			

第 83 図 III C 3 b - 2 住居跡遺物 118

第 84 図 III C 4 b 住居跡 119

第 85 図 III C 4 b 住居跡遺物 120

第 86 図 III C 4 d 住居跡遺構
・遺物(1) 122

第 87 図 III C 4 d 住居跡遺物(2) 123

第 88 図 III C 5 a 住居跡 125

第 89 図 III C 5 a 住居跡遺物 126

第 90 図 III C 7 b 住居跡 128

第 91 図 III C 7 b 住居跡遺物 129

第 92 図 VA 7 j 住居跡 131

第 93 図 VA 7 j 住居跡遺物 132

第 94 図 VB 2 b 住居跡
(遺構・遺物) 133

第 95 図 VIA 1 h 住居跡 135

第 96 図 VIA 1 h 住居跡遺物 136

第 97 図 III B 9 d 住居跡(1) 139

第 98 図 III B 9 d 住居跡遺構
・遺物(1) 140

第 99 図 III B 9 d 住居跡遺物(2) 141

第 100 図 III C 0 a 住居跡(1) 143

第 101 図 III C 0 a 住居跡遺構(2)
・遺物 144

第 102 図 IV B 3 a 住居跡(1) 146

第 103 図 IV B 3 a 住居跡(2) 147

第 104 図 IV B 3 a 住居跡遺物(1) 148

第 105 図 IV B 3 a 住居跡遺物(2) 149

第 106 図 IV B 3 d 住居跡(1) 152

第 107 図 IV B 3 d 住居跡(2) 153

第 108 図 IV B 3 d 住居跡遺物 154

第 109 図 IV B 6 d 住居跡 156

第 110 図 IV B 6 d 住居跡遺物 157

第 111 図 IV B 8 f 住居跡 159

第 112 図 IV B 8 f 住居跡遺物 160

第 113 図 VA 1 f 住居跡
(遺構・遺物) 162

第 114 図 VA 9 f 住居跡(1) 164

第 115 図 VA 9 f 住居跡(2)・遺物 165

第 116 図 VA 0 j 住居跡 167

第 117 図 VA 0 j 住居跡遺物 168

第 118 図 VB 2 c 住居跡 170

第 119 図 VB 2 c 住居跡遺物 171

第 120 図 VB 4 b 住居跡 173

第 121 図 VB 4 b 住居跡遺物 174

第 122 図 土 坑(1) 184

第 123 図 土 坑(2) 185

第 124 図 土 坑(3) 186

第 125 図 土 坑(4) 187

第 126 図 土 坑(5) 188

第 127 図 土 坑(6) 189

第 128 図 土 坑(7) 190

第 129 図 土坑内出土遺物(1) 191

第 130 図 土坑内出土遺物(2) 192

第 131 図 土坑内出土遺物(3) 193

第 132 図 土坑内出土遺物(4) 194

第 133 図 土壇配置図 196

第 134 図 土 壇(1) 197

第 135 図 土 壇(2) 198

第 136 図 土 壇(3) 199

第 137 図 土 壇(4) 200

第 138 図 土 壇(5)
・土壇内出土遺物 201

第 139 図 焼土遺構 203

第 140 図 配石遺構群(1) 205

第 141 图	配石遺構群(2) ……………	206	第 150 图	遺構外出土遺物 (石器 1) ……	224
第 142 图	遺構外出土遺物 (土器 1) ……	216	第 151 图	遺構外出土遺物 (石器 2) ……	225
第 143 图	遺構外出土遺物 (土器 2) ……	217	第 152 图	遺構外出土遺物 (石器 3) ……	226
第 144 图	遺構外出土遺物 (土器 3) ……	218	第 153 图	遺構外出土遺物 (石器 4) ……	227
第 145 图	遺構外出土遺物 (土器 4) ……	219	第 154 图	遺構外出土遺物 (石器 5) ……	228
第 146 图	遺構外出土遺物 (土器 5) ……	220	第 155 图	遺構外出土遺物 (石器 6) ……	229
第 147 图	遺構外出土遺物 (土器 6) ……	221	第 156 图	遺構外出土遺物 (石器 7) ……	230
第 148 图	遺構外出土遺物 (土器 7) ……	222	第 157 图	遺構外出土遺物 (石器 8 · 石製品 · 鉄器) ……	231
第 149 图	遺構外出土遺物 (土器 8) ……	223			

[写真 图版]

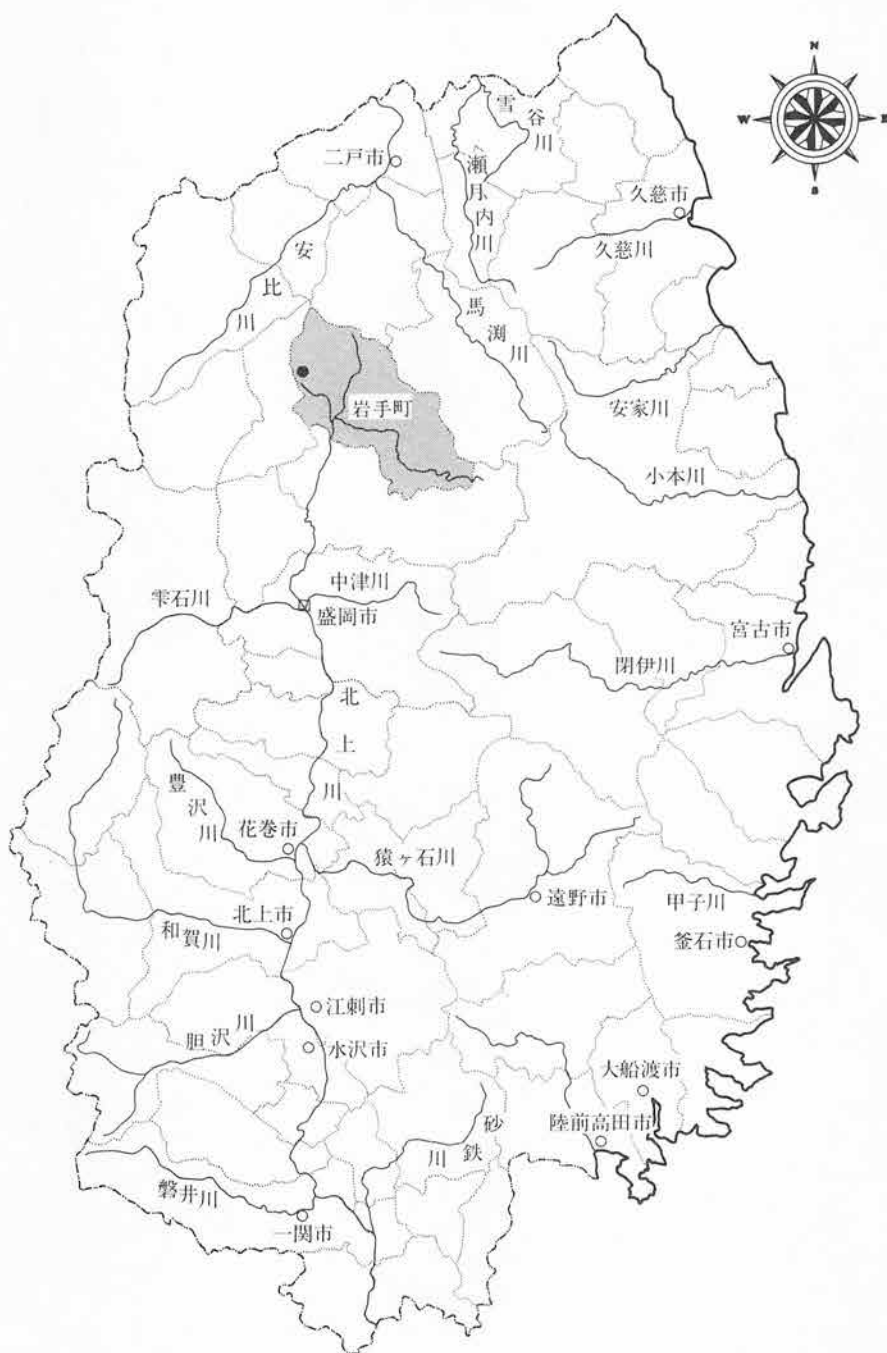
图版 1	遺跡全景 (空中写真) ……………	256	图版 22	Ⅲ B 5 g 住居跡……………	277
图版 2	遺跡全景 ……………	257	图版 23	Ⅲ B 5 g - 2 住居跡……………	278
图版 3	土層断面 ……………	258	图版 24	Ⅲ B 5 g - 3 住居跡……………	279
图版 4	I C 7 j 住居跡 ……………	259	图版 25	Ⅲ B 6 i 住居跡……………	280
图版 5	I D 6 a 住居跡 ……………	260	图版 26	Ⅲ B 8 f 住居跡 ……………	281
图版 6	Ⅱ B 9 i 住居跡 ……………	261	图版 27	Ⅲ B 9 h 住居跡……………	282
图版 7	Ⅱ C 3 i 住居跡 ……………	262	图版 28	Ⅲ C 1 b 住居跡……………	283
图版 8	Ⅱ C 4 d 住居跡 ……………	263	图版 29	Ⅲ C 1 d 住居跡……………	284
图版 9	Ⅱ C 6 g 住居跡 ……………	264	图版 30	Ⅲ C 2 a 住居跡……………	285
图版 10	Ⅱ C 7 c 住居跡……………	265	图版 31	Ⅲ C 2 e 住居跡……………	286
图版 11	Ⅱ C 7 e · Ⅱ C 7 f 住居跡……………	266	图版 32	Ⅲ C 3 b 住居跡……………	287
图版 12	Ⅱ C 7 f 住居跡……………	267	图版 33	Ⅲ C 3 b - 2 住居跡……………	288
图版 13	Ⅱ C 8 a 住居跡……………	268	图版 34	Ⅲ C 4 b 住居跡……………	289
图版 14	Ⅱ C 8 d 住居跡……………	269	图版 35	Ⅲ C 4 d 住居跡……………	290
图版 15	Ⅱ C 9 a 住居跡……………	270	图版 36	Ⅲ C 5 a 住居跡……………	291
图版 16	Ⅱ C 9 d 住居跡……………	271	图版 37	Ⅲ C 7 b 住居跡……………	292
图版 17	Ⅱ C 9 e 住居跡……………	272	图版 38	V A 7 j 住居跡……………	293
图版 18	Ⅲ B 2 i 住居跡……………	273	图版 39	V B 2 b 住居跡……………	294
图版 19	Ⅲ B 2 j 住居跡……………	274	图版 40	V I A 1 h 住居跡……………	295
图版 20	Ⅲ B 3 g 住居跡……………	275	图版 41	Ⅲ B 9 d 住居跡……………	296
图版 21	Ⅲ B 3 g - 2 住居跡……………	276	图版 42	Ⅲ C 0 a 住居跡……………	297

图版 43	IV B 3 a 住居跡……………	298	图版 72	II C 9 a · II C 9 d 住居跡遺物 ……………	327
图版 44	IV B 3 d 住居跡……………	299	图版 73	II C 9 d 住居跡遺物……………	328
图版 45	IV B 6 d 住居跡……………	300	图版 74	II C 9 e 住居跡遺物……………	329
图版 46	IV B 8 f 住居跡……………	301	图版 75	II C 9 e 住居跡遺物……………	330
图版 47	VA 1 f 住居跡……………	302	图版 76	III B 2 i 住居跡遺物……………	331
图版 48	VA 9 f 住居跡……………	303	图版 77	III B 2 j 住居跡遺物……………	332
图版 49	VA 0 j 住居跡……………	304	图版 78	III B 3 g 住居跡遺物……………	333
图版 50	VB 2 c 住居跡……………	305	图版 79	III B 3 g - 2 住居跡遺物……………	334
图版 51	VB 4 b 住居跡……………	306	图版 80	III B 5 g - 1 · 2 · 3 住居跡遺物 ……………	335
图版 52	土坑(1)……………	307	图版 81	III B 5 g - 3 · III B 6 i · III B 8 f 住居跡遺物 ……………	336
图版 53	土坑(2)……………	308	图版 82	III B 9 h · III C 1 b · III C 2 a 住居跡遺物 ……………	337
图版 54	土坑(3)……………	309	图版 83	III C 2 a 住居跡遺物……………	338
图版 55	土坑(4)……………	310	图版 84	III C 2 e 住居跡遺物……………	339
图版 56	土坑(5)……………	311	图版 85	III C 2 e 住居跡遺物……………	340
图版 57	土坑(6)……………	312	图版 86	III C 2 e 住居跡遺物……………	341
图版 58	土壙(1)……………	313	图版 87	III C 2 e 住居跡遺物……………	342
图版 59	土壙(2)……………	314	图版 88	III C 2 e 住居跡遺物……………	343
图版 60	土壙(3)……………	315	图版 89	III C 2 e 住居跡遺物……………	344
图版 61	土壙(4)……………	316	图版 90	III C 3 b · III C 3 b - 2 · III C 4 b 住居跡遺物 ……………	345
图版 62	土壙(5) · 配石遺構……………	317	图版 91	III C 4 d 住居跡遺物……………	346
图版 63	烧土遺構……………	318	图版 92	III C 5 a · III C 7 b 住居跡遺物 ……………	347
图版 64	ID 6 a · II B 9 i · II C 3 i · II C 4 d 住居跡遺物 ……………	319	图版 93	VA 7 j · VB 2 b · VIA 1 h 住居跡遺物 ……………	348
图版 65	II C 4 d · II C 6 g · II C 7 c · II C 7 e 住居跡遺物 ……………	320	图版 94	III B 9 d 住居跡遺物……………	349
图版 66	II C 7 e 住居跡遺物……………	321	图版 95	III C 0 a · IV B 3 a 住居跡遺物 ……………	350
图版 67	II C 7 f 住居跡遺物……………	322			
图版 68	II C 7 f · II C 8 a · II C 8 d · II C 9 a 住居跡遺物 ……………	323			
图版 69	II C 9 a 住居跡遺物……………	324			
图版 70	II C 9 a 住居跡遺物……………	325			
图版 71	II C 9 a 住居跡遺物……………	326			

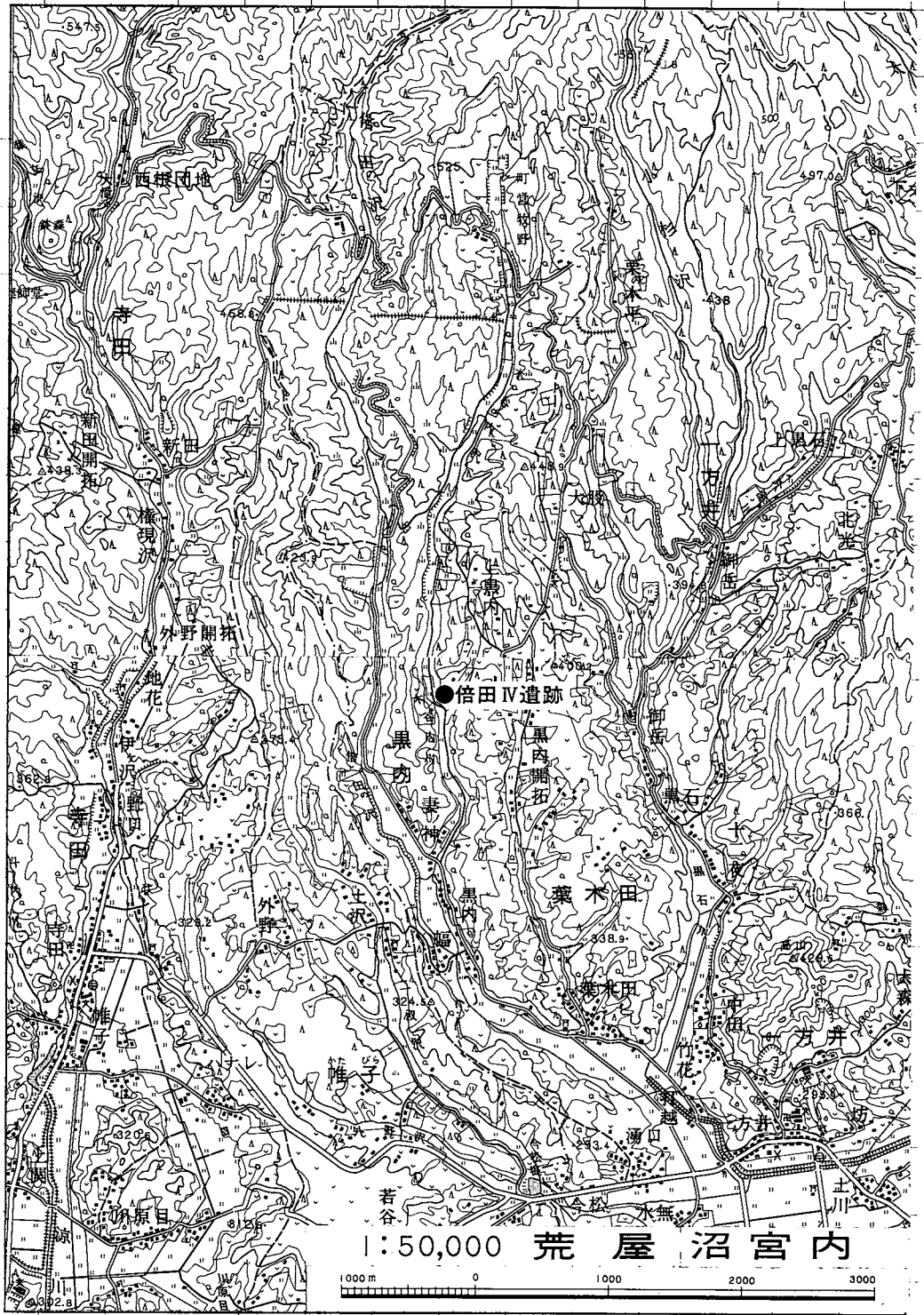
図版 96	IV B 3 d ・ IV B 6 d ・ IV B 8 f 住居跡遺物 …………… 351	図版 103	遺構外出土遺物（土器 3） …… 358
図版 97	VA 1 f ・ VA 9 f ・ VA 0 j 住居跡遺物 …………… 352	図版 104	遺構外出土遺物（土器 4） …… 359
図版 98	VB 2 c ・ VB 4 b 住居跡遺物 …………… 353	図版 105	遺構外出土遺物（土器 5） …… 360
図版 99	土坑内出土遺物(1)…………… 354	図版 106	遺構外出土遺物（石器 1） …… 361
図版 100	土坑内出土遺物(2) ・ 土坑内出土遺物 …………… 355	図版 107	遺構外出土遺物（石器 2） …… 362
図版 101	遺構外出土遺物（土器 1） …… 356	図版 108	遺構外出土遺物（石器 3） …… 363
図版 102	遺構外出土遺物（土器 2） …… 357	図版 109	遺構外出土遺物（石器 4） …… 364
		図版 110	遺構外出土遺物 （石器 5 ・ 石製品） …………… 365
		図版 111	遺構外出土遺物 （土製品 ・ 鉄器） …………… 366

〔表〕

表 1	岩手町の遺跡一覧表(1) …………… 11	表 6	石器 ・ 石製品計測表(3) …………… 238
表 2	岩手町の遺跡一覧表(2) …………… 12	表 7	石器 ・ 石製品計測表(4) …………… 239
表 3	土壌計測表 …………… 195	表 8	石器 ・ 石製品計測表(5) …………… 240
表 4	石器 ・ 石製品計測表(1) …………… 236	表 9	鉄器 ・ 鉄滓計測表 …………… 241
表 5	石器 ・ 石製品計測表(2) …………… 237		



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

岩手町・西根町・松尾村を結ぶ県営岩手地区広域農道整備事業は、農業経営の安定と向上を目的に昭和55年に事業化された。この事業に関して、昭和55年6月に岩手県教育委員会事務局文化課が事業計画ルートに沿って遺跡の分布調査を実施し、岩手町25遺跡、西根町14遺跡、松尾村4遺跡の計41遺跡を確認した。この結果をもとに遺跡立地と路線ルートの関わりや工事工法の変更を含めて協議が重ねられ、止むを得ず工事によって破壊されたり、遺跡の現況が大きく変わる遺跡については、事前に発掘調査を実施して記録保存をする措置を取ることとした。こうして昭和58年には岩手町一方井地区で黄金堂遺跡が、平成元年には西根町荒木田地区で間館Ⅰ遺跡が当埋蔵文化財センターによって調査された。

葉木田・黒内地区については、平成2年8月23日付け「教文第410号」による県教育委員会文化課長から盛岡地方振興局長あての「平成2年度における埋蔵文化財関連土木工事等の調査について」で照会し、盛岡地方振興局岩手北部土地改良事業所からの平成2年9月21日付け「盛地（岩土地）第255号」による回答をうけ、遺跡の取扱いについて両方で協議が行われた。

岩手町葉木田地区および隣接する黒内地区に所在する宮沢Ⅰ遺跡・宮沢Ⅱ遺跡・倍田Ⅳ遺跡・黒内Ⅷ遺跡・黒内Ⅻ遺跡については、平成3年度に前者3遺跡について文化課によって試掘調査が実施された。この結果、宮沢Ⅰ遺跡・宮沢Ⅱ遺跡からは遺構・遺物が検出されなかったが、倍田Ⅳ遺跡からは土器がまとまって出土し、黒内Ⅷ遺跡・黒内Ⅻ遺跡とともに平成4年度に調査を実施することとし、岩手県教育委員会の調整のうえ、岩手県文化振興事業団の委託事業とした。

これにより、当埋蔵文化財センターは平成4年4月1日付け委託契約にもとづき、調査に着手することとした。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

倍田IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線沼宮内駅の西北西約8km、岩手町一方井の中心部からは北西に約4kmの距離に位置している。遺跡の所在する岩手町は、県都盛岡市から北方に28km、岩手郡の北端部にある。町の中央部を北上川が北流し、東北本線と国道4号線が南北に縦断している。岩手町は、昭和30年に沼宮内町を中心として、川口村、一方井村、御堂村の一町三村が合併してできた町である。東側は葛巻町、西側は西根町、南側は玉山村、北側は二戸郡一戸町と隣接し、総面積は360.93km²である。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「沼宮内」(NJ-54-13-13)、および2万5千分の1地形図「沼宮内」(NJ-54-13-13-1)の図幅に含まれ、北緯39度59分52秒、東経141度8分40秒付近にある。

2. 地形

岩手町をはじめ、西根町や松尾村は北上山地と奥羽山脈を画して流れる北上川の上流域にあって、東に北上山系が連なり、北部・西部・南部は、奥羽山脈に属する七時雨山、八幡平、岩手山の連峰によって取り巻かれ、中央部は凹地となっている。

凹地域は、低高度の丘陵地、北上川およびその支流の松川・赤川・一方井川沿いの段丘および氾濫原(谷底平野)、そして丘陵間や段丘上に送仙山・白屋山・丹谷山・野駄森等の残存的に残る幾つかの孤立山体より構成されている。

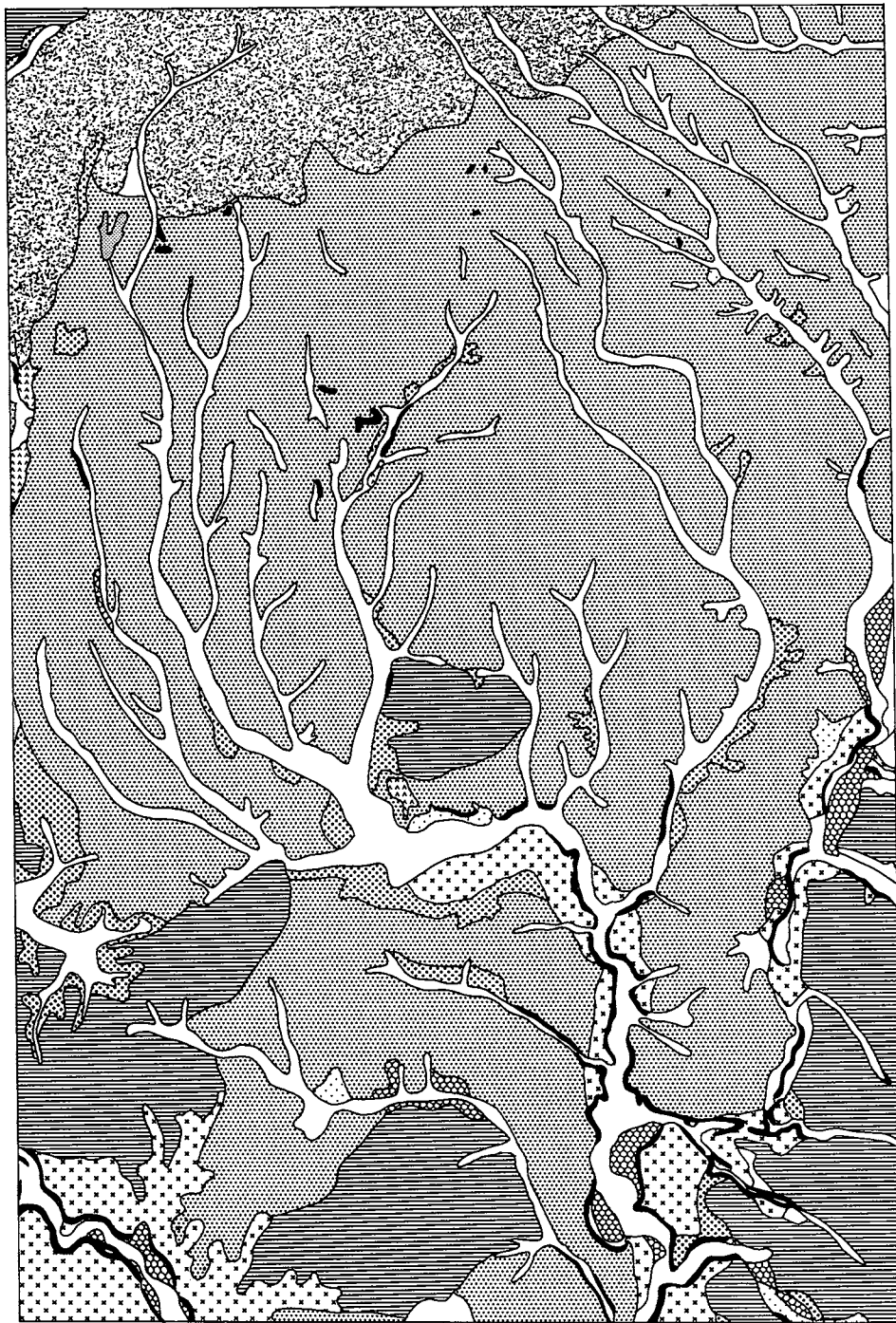
一方井周辺において最も広い範囲を占める丘陵地は、七時雨山の山地が南部分において丘陵に移行し、赤川と北上川にさえぎられて好摩まで広がる。


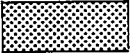

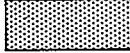


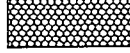




全て起伏量100m以下の丘陵地であるが、一方井川を境にして北と南の丘陵は地形的に明瞭な差がある。

北部の丘陵は七時雨山より放射状に走る水系によってきざまれる山麓丘陵(七時雨山山麓丘陵)である。起伏量は70～100mと南の丘陵と比較して幾分大きくなっている。

これに対して南の丘陵(土川丘陵)は全て北西～南東方向に一定の間隔をおいて平行して走る水系をもち、七時雨山からは独立した地形であると言える。この土川丘陵は起伏量50～60m以下と非常に低起伏で、標高270～280mの定高性がみられる。また、頂部に平坦地を残す所もあり、台地の開析による丘陵であることを示す。

河岸段丘は、好摩をはじめ多くの集落をのせ最も発達のよい段丘を中位段丘とした。この河岸段丘は平坦性がよく、北上川や松川・赤川・一方井川沿いに連続して分布し、主な台地である好摩台地・大更台地・松内台地とともに、一方井台地・高屋敷台地を形成している。



-  山地
-  山麓地面
緩斜面
-  丘陵地 I
(起伏量
200~100m)
-  丘陵地 II
(起伏量
100m未満)
-  砂礫丘陵 I
-  砂礫丘陵 II
-  砂礫丘陵 III
-  扇状地
-  崖錐性扇状地
-  谷底平野
氾濫平野
-  崖

第3図 地形分類図

この段丘を盛岡段丘（1962 中川他）または好摩段丘（1960 小野）と呼び、小野はこの段丘の形成を平館盆地の湖水化による堆積段丘としている。

低地としては、各河川沿いに氾濫原が谷底平野となって分布する。また、山麓や丘陵地の端には随所に緩斜面がみられるほかに、小規模な扇状地や崖錐扇状地が発達している。

倍田IV遺跡にかぎって地形を見ると、七時雨山山麓丘陵上を流れる木谷内川がつくる谷底平野と山麓丘陵の境に位置し、谷底平野と遺跡の最高地点との比高差は約 20 m である。遺跡の現況は畑地・山林・牧草地として利用されていた。調査区域東側のⅦ区・Ⅷ区は数年長芋畑として利用され、幅 20 cm、深さ 1.2 m ほどの長芋栽培用トレンチャーの跡が多数残っており、攪乱をうけている。調査区域中央部付近のⅣ区・Ⅴ区は山林である。Ⅱ区・Ⅲ区は牧草地で、山林を牧草地に造成する際に上面がかなり削られ、山林との境は 40 cm ほどの段差となっている。西側は急傾斜となって落ち込む。西側のⅠ区はとうもろこし畑として利用されている。

3. 周辺の遺跡

岩手県教育委員会文化課遺跡台帳によると、本遺跡のある岩手町の縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世の遺跡数は 174 カ所である。（表においては遺跡登録番号のみ記入されている 2 遺跡は割愛した。） そのうちで最も多いのは縄文時代の遺跡で 140 カ所を越える。続いて古代の遺跡、弥生時代の遺跡が多く、中世は 9 遺跡を数える。

縄文時代 早期

台帳に記載されている早期の遺物出土遺跡は、尾呂部Ⅰ遺跡、四本木遺跡、浮島ガンジャ（蟹沢）遺跡、桐ヶ久保遺跡の 4 カ所であるが、今回の発掘調査で倍田IV遺跡からも早期の土器が出土している。浮島ガンジャ（蟹沢）遺跡出土のものは沈線文と貝殻文の土器であり、四本木遺跡もほぼ同様である。

前期

台帳では前期の土器の出土は 14 遺跡を数えるが、その他にも数遺跡で破片が出土している。しかし未発掘なので資料は少ない。苗代沢遺跡や尾呂部遺跡からは初頭の丸底や尖頭の土器、丹藤遺跡と細沢遺跡からは大木系の土器が出土している。また秋浦遺跡などから円筒下層 a 式の土器が、宮沢遺跡からは円筒上層 d 式の土器が出土している。

中期

岩手町では円筒系の土器では円筒上層 a 式・b 式・c 式の出土が知られており、黒内開拓遺跡からは上層 a 式が、木谷内遺跡からは上層 c 式が出土している。大木式の土器では 8 式の文様の土器の出土例が多く、木谷内遺跡、黒内開拓遺跡、どじの沢遺跡、秋浦遺跡などから出土している。

後期

後期の土器を出土する遺跡は町内に非常に多く、表面採集だけで40カ所を越えている。どじの沢遺跡は晩期の完形土器を多く出土する遺跡であるが、後期初頭の土器も数多く出土している。同時期の土器は高梨遺跡、横沢遺跡、黒内開拓遺跡、江刈内遺跡、秋浦遺跡などから出土している。後期中葉の加曾利B式に併行する土器の出土する遺跡は高梨遺跡、上横沢遺跡、横沢遺跡がある。後期末葉の安行I式に併行する土器は笈ノ窪遺跡、横沢遺跡、豊岡遺跡などから出土している。また、当町川口の秋浦地区には秋浦貝塚と呼ばれる内陸性貝塚があり、中期や後期の土器・石器とともに淡水産の貝類の貝殻や獣骨が出土することが知られており、山間地の小河川沿いに立地する小貝塚として今後に示唆するものが大である。

晩期

晩期の遺跡としては豊岡遺跡、どじの沢遺跡が著名である。豊岡遺跡は昭和30年に草間俊一氏等によって発掘調査され、その際に非常に多くの晩期の土器や石器・土偶等を出土し、この遺跡が晩期に属することを明らかにした。どじの沢遺跡は昭和35年に同氏によって発掘調査されており、検出された4棟の竪穴住居跡は大洞B C式土器を共伴する晩期の住居跡として県内で初例であるばかりでなく、竪穴住居跡の検出例としても貴重な資料となった。また、昭和58年には高梨遺跡が東北大学によって発掘調査されており、報告書が未刊のため詳細は不明であるものの住居跡が検出されている。この遺跡は昭和31年に晩期の完形土器が8点出土するなど、後・晩期の土器や石器を出土することで著名である。その他でもこの時期の土器を出土する遺跡が数多くあり、土器の出土量では最も多い。

弥生

仏沢遺跡、江刈内遺跡、芦田内遺跡、前ヶ沢遺跡、蟹沢遺跡からは大洞A'式の土器と弥生時代の土器が共伴して出土している。また、乙茂内遺跡からは弥生時代の土器のみが出土している。天王山系の土器が出土した遺跡は川口松原遺跡、大坊遺跡、尾呂部遺跡、黒内遺跡、豊岡遺跡、仙波堤遺跡、仏沢遺跡、新道平遺跡などである。

古代

古代の土師器や須恵器が出土した遺跡として20カ所が知られている。古代の住居跡で注目すべきことは、埋没しきらない竪穴住居跡が一方井地区を中心に数多く存在することである。このことは最初小田島祿郎氏によって注目され、その概要が大正13年に発表されている。氏の論文によると、一方井地区の宮沢・葉木田・十二夜・輪台・今松・鴨沢・新田・浮島・土川、御堂地区の仙波堤・久保等10カ所に合計151の竪穴住居跡があるとされている。氏はそれらの中の何棟かずつを調査した結果、土師器や須恵器を出土し、中にはロクロ使用成形土師器を含むことを上げ、これらの住居跡が奈良時代や平安時代に属することを明らかにした。以上

のような小田島氏の調査成果をもとにして、仙波堤・今松両堅穴群は大正 15 年 2 月に仮指定史跡となり、昭和 32 年に県の史跡指定を受け、現在に至っている。この遺跡は、その後昭和 43 年に草間俊一氏によって発掘調査を含む精細な調査が行われ、その結果が報告書として刊行されている。このような一方井地区の堅穴住居跡群は、隣接する玉山村の釜崎や谷地田、西根町谷助平等を含む大きな広がりをもって分布しており、これらがいずれも近接した時期の集落であることが明らかにされている。その他では昭和 33 年に沢口遺跡の奈良時代の堅穴住居跡 2 棟が発掘調査され、翌 34 年に報告されている。

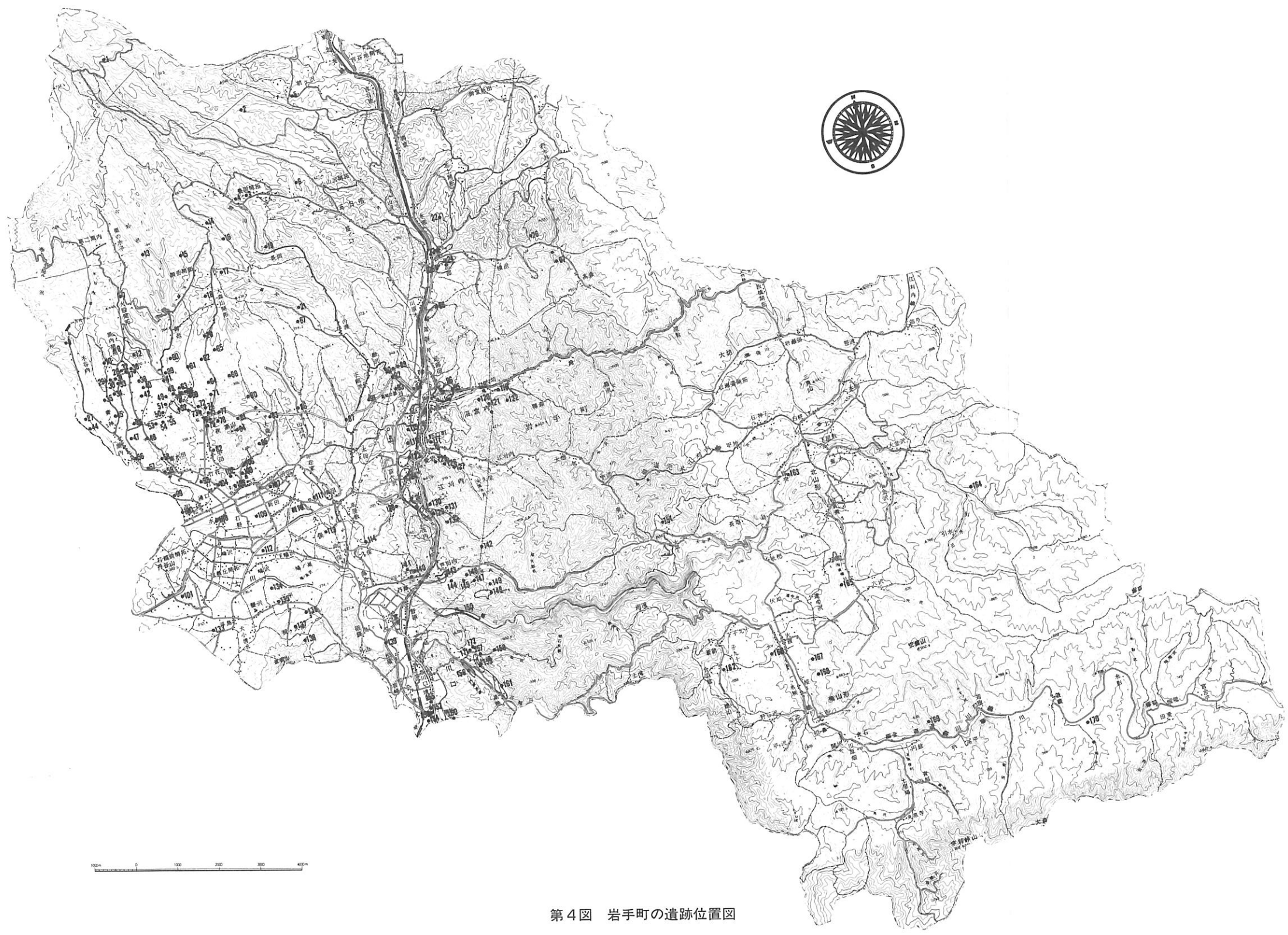
古墳は浮島古墳のみが知られている。当地域では他に玉山村の永井沢古墳、西根町の谷助平古墳があり、これらは先の古代の堅穴住居跡群を囲むような位置関係を示し、集落跡を残した先人の墳墓と考えることができる。この古墳に最初に注目したのは小田島禄郎氏である。氏はその報告書の中で、大正 12 年に内務省史蹟名勝天然記念物調査会考査官であった柴田常恵氏が実地踏査したことや、同年 9 月にその時京都大学の考古学教室に教務嘱託で勤務していた梅原末治氏が発掘調査したこと等を記している。これらの報告書では、浮島古墳群には 14 基の古墳が存在することを述べ、さらにその中の 1 基が既に盗掘されていることや、一号墳とした墳丘を発掘し、その状況を詳しく報告している。また昭和 32 年には、草間俊一氏が 4 基を発掘調査し、昭和 34 年に報告書を発刊している。

寺院跡と言われているのは一方井大森にある「黄金堂遺跡」である。同地の研究者田中定一氏によって礎石列の検出や鉄鑿の出土が発表されて後、古代寺院跡の存在が推定されていた。それが昭和 58 年の発掘調査によって平安時代の集落跡と寺院跡と推定される掘立柱建物跡が検出され、寺院跡としての可能性が強くなった。

祭祀遺跡とされているのは大森どじの沢で発見された「小堂跡」である。この遺跡は草間俊一氏によって昭和 35 年に発掘調査され、小高い丘の頂上部で 3 間×3 間の掘立柱建物跡を検出し、遺物として須恵器破片、青銅鏡（端花双鸞八稜鏡）、小鰐口が出土したことから、この建物跡は平安時代の小規模な堂社跡であろうとしている。

中世城館跡は 9 カ所掲載されているが、日本城郭大系には 15 カ所存在すると記載されている。この中には一方井刑部が住し、南部信直が出生した城といわれる一方井城（輪台城ともいう）や沼宮内民部が城主といわれる沼宮内城、川口氏の川口城等が含まれる。

当地区では、発掘調査された遺跡が多くあり、また地元の研究者によって多くの遺物が表面採集され、それらが地元保管されて状況が報告書として刊行されていることは特筆すべきことである。



第4図 岩手町の遺跡位置図

整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考
1	J E-77-1066	ネズバク	散布地	大字一方井	縄文土器	
2	J E-87-0384	石堀	散布地	大字御旗字前ヶ沢	縄文(中期末~晩期)土器、石器、フレーク	
3	J E-87-2289	羽の	散布地	大字一方井字黒石湯の沢	縄文(晩期)土器	
4	J E-87-2297	豊	散布地	大字一方井字久保第1地割329	縄文(晩期)土器	
5	J E-88-0097	前	散布地	大字御旗字前ヶ沢第5地割396	縄文(中・晩期)土器、弥生、石器、フレーク	
6	J E-88-2092	袋ノ	散布地	大字一方井字黒石湯の沢	縄文(晩期)土器	
7	J E-96-1323	大股開拓	散布地	大字一方井字大股開拓	縄文(後期)土器、壺、土偶、打製石斧、石鏃、石匙	
8	J E-96-2138	黒内開	散布地	大字一方井字黒内	土器	
9	J E-96-2259	黒内内	集落跡	大字一方井字黒内	縄文(中~後期)土器	
10	J E-96-2265	黒内内	集落跡	大字一方井字黒内	縄文土器	
11	J E-96-2361	黒内内	集落跡	大字一方井字黒内	縄文(中期)円筒系土器	
12	J E-96-2391	黒内内	集落跡	大字一方井字黒内	縄文土器	
13	J E-97-0052	黒内内	集落跡	大字一方井字黒内	縄文(後期)土器(安行2式併行)、香炉型土器	
14	J E-97-0129	黒内内	集落跡	大字一方井第1地割字坊主長峯	縄文(晩期)土器	
15	J E-97-0191	黒内内	集落跡	大字黒石1-215字仏沢	縄文(晩期)土器(大洞A'式)	
16	J E-97-0272	黒内内	集落跡	大字一方井字黒石ニカルモチ	縄文(後・晩期)土器	
17	J E-97-1149	黒内内	集落跡	大字一方井字黒石道達	縄文(後期)土器	
18	J E-97-1193	黒内内	集落跡	大字一方井字黒石甘酒	縄文土器、加曽利BⅡ2式1ヶ 大木9~10	
19	J E-97-1311	黒内内	集落跡	大字一方井	縄文(晩期)土器、石器	
20	J E-97-2181	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割	縄文(後期)土器(壺)	
21	J E-97-2374	黒内内	集落跡	大字一方井	縄文土器	
22	J E-98-1383	黒内内	集落跡	大字沼宮内字登戸	縄文土器	
23	J E-98-2331	黒内内	集落跡	大字沼宮内字尾呂部22-66-2	縄文(早・前期)(織維)土器、弥生	
24	J E-98-2381	黒内内	集落跡	大字沼宮内字19地割荻前向	空堀、土塁	
25	J E-98-2382	黒内内	集落跡	大字沼宮内字19地割荻前向	縄文(後期)土器、土師器	
26	J E-98-2183	黒内内	集落跡	大字沼宮内	縄文(後・晩期)土器	
27	K E-06-0197	黒内内	集落跡	大字黒内字倍田	縄文土器	
28	K E-06-0208	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字倍田	縄文土器	
29	K E-06-0214	黒内内	集落跡	大字黒内第2地割9-58	縄文(前~晩期)土器、石器	
30	K E-06-0215	黒内内	集落跡	大字黒内第2地割9-58	縄文(後?・晩期)土器	
31	K E-06-0217	黒内内	集落跡	大字黒内第2地割9-58	縄文土器	
32	K E-06-0219	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	縄文土器	
33	K E-06-0227	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字倍田	縄文土器、土師器	
34	K E-06-0245	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字木谷内	縄文(中期)土器	
35	K E-06-0262	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文土器	
36	K E-06-0301	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	縄文(中期?)土器 土偶 フレーク	
37	K E-06-0311	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	弥生土器 天王山系土器	
38	K E-06-0332	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	縄文土器、石器、フレーク	
39	K E-06-0349	黒内内	集落跡	大字一方井1-198	縄文土器(後・晩期?)	
40	K E-06-0362	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	縄文土器	
41	K E-06-0368	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字宮沢	縄文土器	
42	K E-06-0371	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割	土師器	
43	K E-06-0398	黒内内	集落跡	大字一方井第1地割字御嶽	縄文(後期?)土器	
44	K E-06-1118	黒内内	集落跡	大字黒内字倍田	縄文(前期)土器	
45	K E-06-1204	黒内内	集落跡	大字黒内字倍田	縄文(中期)土器、石器	
46	K E-06-1238	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割	縄文(中~晩期)土器、石器	
47	K E-06-1266	黒内内	集落跡	大字黒内字倍田	縄文(中・後期)土器	
48	K E-06-1289	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割	縄文(前・晩期)土器	
49	K E-06-1307	黒内内	集落跡	大字一方井第1地割字御嶽	縄文土器	
50	K E-06-1315	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文土器	
51	K E-06-1316	黒内内	集落跡	大字一方井第1地割字御嶽	縄文土器	
52	K E-06-1339	黒内内	集落跡	大字一方井第1地割字御嶽	縄文土器	
53	K E-06-1343	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文土器	
54	K E-06-1344	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文土器、土師器	
55	K E-06-1347	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文土器	
56	K E-06-2215	黒内内	集落跡	大字黒内第6地割字福欠	縄文(後期)土器、石器	
57	K E-06-2258	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字山王	縄文(前期)土器	
58	K E-06-2332	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字(蟹沢)	土師器、鏃、鏃(?)	
59	K E-06-2361	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文(中期)土器	
60	K E-07-0000	黒内内	集落跡	大字一方井字黒石岩佐	縄文土器	
61	K E-07-0034	黒内内	集落跡	大字黒内	縄文(後期)土器	
62	K E-07-0037	黒内内	集落跡	大字黒内第1地割字黒石(妻の神)	縄文(晩期)土器	
63	K E-07-0080	黒内内	集落跡	大字一方井御嶽	縄文土器	
64	K E-07-0088	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	縄文(晩期)土器	
65	K E-07-0111	黒内内	集落跡	大字黒内第16地割	須恵器、端花双翼八稜鏡、銅口、板状鉄器	
66	K E-07-0183	黒内内	集落跡	大字一方井字大森(ヌカツカ)	土器、亀ヶ岡式土器片、石器、磨製石斧、石鏃	
67	K E-07-0208	黒内内	集落跡	大字一方井第7地割字大森	縄文(晩期)土器	
68	K E-07-1001	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜112	縄文(後期)土器	
69	K E-07-1002	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	縄文(晩期)土器	
70	K E-07-1010	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文土器	
71	K E-07-1018	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	縄文(晩期)土器	
72	K E-07-1023	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文(後期)土器	
73	K E-07-1044	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文(後~晩期?)土器、土師器	
74	K E-07-1055	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文土器	
75	K E-07-1065	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	縄文(前・晩期)土器	
76	K E-07-1076	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文土器	
77	K E-07-1079	黒内内	集落跡	大字一方井第12地割字十二夜	縄文土器	
78	K E-07-1088	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割字大森	縄文土器	
79	K E-07-1095	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字十二夜	縄文土器	
80	K E-07-1146	黒内内	集落跡	大字一方井字大森	縄文(中期)土器、石匙、石鏃	
81	K E-07-1193	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器、土師器	
82	K E-07-2044	黒内内	集落跡	大字一方井第2地割字四本木91番地	縄文(早・晩期)土器、須恵器	
83	K E-07-2109	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器	
84	K E-07-2113	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器	
85	K E-07-2165	黒内内	集落跡	大字一方井字大森(土蔵館)	縄文(晩期)土器	
86	K E-07-2227	黒内内	集落跡	大字一方井第16地割字大森(黄金堂)	縄文土器	

表1 岩手町の遺跡一覧表(1)

整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考
87	K E-07-2368	千刈田	I 散	大字久保第4地割字千刈田	縄文土器、土師器	
88	K E-07-0275	川原	I 散	大字五日市川原毛	縄文土器	
89	K E-08-1184	五土	I 散	大字五日市字五土	縄文土器	
90	K E-08-1192	土峰	I 散	大字五日市第2地割字土峰	縄文土器	
91	K E-08-2053	刈田	II 散	大字久保第4地割字千刈田	縄文土器、土師器、壺	
92	K E-08-2112	土峰	II 散	大字五日市第7地割字土峰	縄文土器	
93	K E-08-2141	神	I 散	大字久保第9地割字宮手	縄文土器	
94	K E-08-2155	天沼	I 散	大字五日市第7地割字天神前	縄文土器	
95	K E-08-2272	宮内	I 散	大字沼宮内第11地割字寺山	空堀、土器、石椀、石器	
96	K E-08-2293	城上	I 散	大字沼宮内第11地割字寺山	縄文(後期)土器	
97	K E-09-0158	中田	I 散	大字沼宮内第26地割上横沢	縄文(後・晩期)土器	
98	K E-16-0319	上田	II 集	大字一方井字中田(竹花)	土器	
99	K E-16-0322	銅	II 集	大字一方井第8地割字水無	土師器、須恵器	
100	K E-16-0362	ベ	II 集	大字一方井第8地割字水無	土師器、鉄片	
101	K E-16-2267	ゴ	II 集	大字土川第4地割字新田277	縄文(後期)土器、土師器、須恵器	
102	K E-17-0026	輪	II 集	大字一方第13地割字輪台	土師器、須恵器	
103	K E-17-0029	一方	II 集	大字一方井町裏15-75-4	縄文土器、土師器	
104	K E-17-0033	打	II 集	大字一方井字打越	三重空堀、土塁	
105	K E-17-0047	輪	II 集	大字一方井字輪台第13地割2番地	土師器	
106	K E-17-0100	フ	II 集	大字一方井字中田	縄文(後・晩期)土器	
107	K E-17-0175	ざ	II 集	大字一方井字坊第1地割神田	土師器	
108	K E-17-1010	今	II 集	大字一方井第7地割字今松	土師器	
109	K E-17-1120	大	II 集	大字一方井跡土川(松長祖神社)	土師器、須恵器	
110	K E-17-1148	大	II 集	大字久保第7地割字沢口	土師器、須恵器	
111	K E-17-1224	大	II 集	大字久保字沢口	土師器、切子玉、磁石、紡錘車、土製匂玉	
112	K E-17-2018	大	II 集	大字土川字鶴沢	土師器	
113	K E-17-2214	大	II 集	大字久保字落合		
114	K E-17-2363	大	II 集	大字土川第4地割字長日向		
115	K E-18-0152	石	II 散	大字五日市	縄文土器	
116	K E-18-0170	石	II 散	大字五日市	弥生土器	
117	K E-18-0185	石	II 散	大字沼宮内第6地割字加徳沢		
118	K E-18-0302	大	II 散	大字大坊	縄文(後期)土器	
119	K E-18-0306	大	II 散	大字大坊	縄文(後期)土器	
120	K E-18-0320	大	II 散	大字江刈内第19地割下松ヶ久保	縄文(後期)土器、弥生土器	
121	K E-18-0332	大	II 散	大字江刈内第19地割下松ヶ久保	二重空堀、土塁	
122	K E-18-0345	大	II 散	大字江刈内第20地割字萩野	縄文土器、弥生土器(大泉式天王山系)	
123	K E-18-1045	大	II 散	大字五日市	縄文土器、江別式土器	
124	K E-18-1009	大	II 散	大字五日市字苗代沢	弥生(後期)土器 後北式土器	
125	K E-18-1126	大	II 散	大字江刈内第6地割字入口	弥生(前期)土器、縄文(晩期)土器、石椀	
126	K E-18-1147	大	II 散	大字江刈内第6地割字入口	縄文(前・後・晩期)土器、弥生土器、石器	
127	K E-18-1159	大	II 散	大字江刈内第6地割字入口	二重空堀、土塁	
128	K E-18-2019	大	II 散	大字子抱第5地割字笹川久保	縄文(前・後期)土器	
129	K E-18-2022	大	II 散	大字江刈内第3地割乙茂内平	縄文(後期)土器、弥生土器、土師器	
130	K E-18-2159	大	II 散	大字江刈内第3地割乙茂内平	縄文(後期)土器、弥生土器	
131	K E-18-2144	大	II 散	大字江刈内第3地割乙茂内平	縄文(後期)土器	
132	K E-18-2164	大	II 散	大字江刈内第3地割乙茂内平	縄文(後期)土器、弥生土器	
133	K E-26-0372	浮	II 古	大字土川字浮島第4地割144-110	列露品、土師器、直刀、鉄鏃	
134	K E-27-0018	浮	II 散	大字土川字土川	土師器	
135	K E-27-0049	浮	II 散	大字土川第1地割字浮島	縄文(早期)土器(貝殻文)	
136	K E-27-0185	浮	II 散	大字土川字桐ヶ久保1-304	縄文(早・前期)土器(貝殻文)	
137	K E-27-1111	浮	II 散	大字土川字土川第1地割浮島	土器	
138	K E-27-1152	浮	II 散	大字土川字土川1-318	縄文(後・晩期)土器、石器、土師器、須恵器	
139	K E-27-2321	浮	II 集	大字子抱第17地割字岩嶋地	縄文(後期)土器	
140	K E-28-0073	子	II 集	大字子抱第6地割子抱		
141	K E-28-0082	子	II 集	大字子抱第6地割川原新田	縄文(後・晩期)土器、石椀、石匙、石斧、フレーク	
142	K E-28-0250	子	II 集	大字江刈内第2地割乙刈内	弥生(前期)土器、石椀、石皿、石鏃	
143	K E-28-1059	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	円筒下層式土器、縄文(晩期)土器、弥生土器、石器	
144	K E-28-1120	子	II 集	大字川口第48地割丹藤	縄文(後期)土器、弥生土器(中期)	
145	K E-28-1123	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	縄文(後期)土器、弥生土器(谷超島式)、石器	
146	K E-28-1125	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	縄文(晩期)土器、弥生土器、石椀	
147	K E-28-1136	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	縄文(早・前・後・晩期)土器、弥生土器	
148	K E-28-1158	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	縄文(後期)土器、弥生土器、赤焼き土師器、石器、壺穴	
149	K E-28-1250	子	II 集	大字川口第49地割芦田内	縄文(後期)土器、弥生土器(中期)	
150	K E-28-2009	子	II 集	大字川口第48地割丹藤	縄文(前・後期)土器、石器	
151	K E-29-1234	大	II 散	大字川口字大平47地割	縄文(後期)土器、石器	
152	K E-37-1317	大	II 散	大字川口第12地割字ニッ森	縄文(後期)土器、石器	
153	K E-37-1337	大	II 散	大字川口第12地割字ニッ森	縄文土器、土師器、フレーク	
154	K E-37-1346	大	II 散	大字川口第12地割字ニッ森	縄文土器	
155	K E-37-0387	大	II 集	大字川口第12地割字ニッ森	縄文(後期)土器、土師住居跡、陥し穴、後北	
156	K E-38-0039	大	II 集	大字川口字秋浦	縄文(前・中期)土器	
157	K E-38-0112	大	II 集	大字川口字秋浦	縄文(前~後期)土器、土師器	
158	K E-38-0126	大	II 集	大字川口字秋浦	縄文(後・晩期)土器	
159	K E-38-0131	大	II 集	大字川口字秋浦	縄文(中・後期)土器、土師器、貝	
160	K E-38-1041	大	II 集	大字川口字華桁	縄文土器	
161	K E-38-1105	大	II 集	大字川口第21地割字高梨	縄文(後・晩期)土器、石器	
162	K E-39-2218	大	II 集	大字川口字北山形杖把		
163	K F-20-1116	大	II 散	大字川口第44地割	縄文(後期)土器	
164	K F-21-2168	大	II 散	大字川口大金沢	土器	
165	K F-30-1201	大	II 散	大字川口穴沢第6地割	縄文(後期)土器、フレーク	
166	K F-30-2011	大	II 散	大字川口第26地割字大渡	縄文(後・晩期)土器、石斧、石鏃	
167	K F-30-2059	大	II 散	大字川口第28地割字桜	縄文(後期)土器、土俵、磨製石斧	
168	K F-30-2099	大	II 散	大字川口第28地割字桜	空堀	
169	K F-40-1382	大	II 散	大字川口第28地割字南山形	縄文(晩期)土器、フレーク	
170	K F-41-2298	大	II 散	大字川口字穀蔵(カバユリ)	縄文(前期)土器	
171	K E-28-2099	大	II 散	大字川口		
172	K E-28-2191	大	II 散	大字川口	縄文(中・後期)土器、石器	

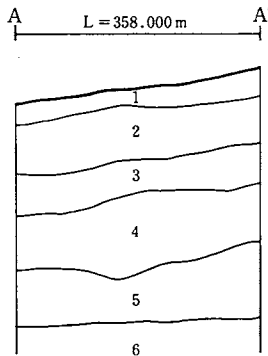
表2 岩手町の遺跡一覧表(2)

4. 基本土層

本遺跡の調査区は東西方向に細長く、西側は斜面となって急激に落ち込み、中央部付近では牧草地開墾による段差もみられる。現況は畑、牧草地、山林として利用されていたが、畑地として利用されていた土地のなかでも耕作物が異なり、調査区東側は長芋栽培によって著しく攪乱を受けている。そのため上層部に多少違いがあるものの、基本的な層序は次の4層に分けられる。

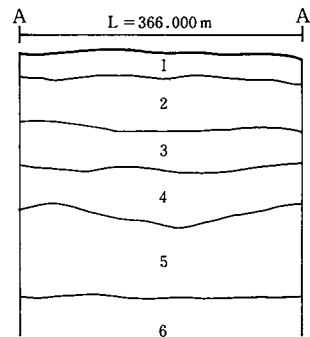
- I層 黒褐色土 (10 YR 2/3～3/2) シルト。表土及び畑の耕作土である。牧草地跡では薄いもののほぼ調査区全域に認められる。粘性なく柔らかい。層厚 10～20 cm。
- II層 暗褐色土 (10 YR 3/3～3/4) シルト。調査区中央部からやや東側の山林部に存在し、平安時代の遺構の検出面である。層厚 0～30 cm。
- III層 褐色土 (10 YR 4/4～4/6) 粘土質。調査区全域で認められる。縄文時代の遺構検出面で、遺物を多数包含する。層厚 20～50 cm。
- IV層 におい黄褐色土 (10 YR 4/3～5/4) 粘土質。粘性に富み、堅くしまっている。礫を多数含む。層厚は不明である。

牧草地北側深掘



- 1. 10 YR 4/4～4/6褐色土 しまっている 粘性なし 表土 植物根が多数混入する
- 2. 10 YR 5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性なし
- 3. 10 YR 5/8黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし
- 3. 10 YR 5/8黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし
- 4. 10 YR 5/6黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし 径1 cmまでの礫が混入
- 5. 10 YR 4/6褐色土 粘土質 非常にかたくしまっている 粘性あり
- 6. 10 YR 4/6褐色土 粘土質 非常にかたくしまっている 赤褐色のパミス・砂粒を含む

山林部北側断面



- 1. 10 YR 2/3黒褐色土 やわらかい 粘性なし 表土 植物根多数混入
- 2. 7.5 YR 4/4褐色土 やわらかい 粘性なし
- 3. 7.5 YR 5/8明褐色土・粘土質 しまっている やや粘性あり
- 4. 7.5 YR 3/6明褐色土 粘土質 非常にかたくしまっている 粘性あり 角礫が混入する
- 5. 7.5 YR 6/8 におい褐色土 粘土質 非常にかたくしまっている 粘性あり 角礫が混入する
- 6. 7.5 YR 褐色土 粘土質 非常にかたくしまっている

第5図 基本土層図

Ⅲ 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡の調査区域は、東西約 240 m、南北約 30 m と東西に細長く、調査区中央付近から南西方向に湾曲している。そこで岩手北部土地改良事業所が設定した調査区域中央北側の工食用基準杭と調査区域東側の道路中心杭を結ぶ直線を基準線とした。調査区域は起伏がはげしく、工食用基準杭の位置からは中心杭が見通せないことから、工食用基準杭を基準点 1、基準線上で基準点 1 から東 30 m の点を基準点 2、基準線の直交線上で基準点 1 から南に 30 m の点を基準点 3 とした。

各基準点の平面直角座標値（第 X 系）は下記の通りである。

基準点 1 X = - 157.855 Y = 26,582.413 H = 362.934 m

基準点 2 X = - 158.340 Y = 26,621.413 H = 366.310 m

基準点 3 X = - 187.849 Y = 26,581.927 H = 360.175 m

調査区は基準点を基点に、東西南北方向を調査区域全体をカバーするように 30 m 単位で区画し、西側から東側に I ~Ⅷ、北側から南側に A ~D の名称を付した。さらに大区画内を 3 m 単位で区画し、西側から東側に 1 ~0、北側から南側に a ~ j の名称を付し、1 調査区はこれらの組み合わせで I A 1 a ・ II B 3 d 等と呼ぶこととした。

遺構名は調査区名と遺構の種類を組み合わせ、Ⅲ B 6 d 住居跡、Ⅲ B 2 b 土坑等と呼称した。なお、1 調査区内に同種の遺構がある場合はⅢ B 3 g - 1 住居跡・Ⅲ B 3 g - 2 住居跡等と呼び、区別した。

(2) 粗掘り

本調査区域は、現況が畑地・山林・牧草地などに分かれるため、それぞれの場所に数カ所、幅 1.5 m の試掘トレンチを設定したところ、遺構の一部と思われる暗褐色土及び土器等の遺物が検出されたため、重機による表土除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。

(3) 精査と実測

遺構の精査は、住居跡は 4 分法、土坑は 2 分法を原則として実施したが、斜面で斜面下方が流失している住居跡については 2 分法を用いた。遺構の実測は簡易遣り方測量で行った。平面図は、調査区区画線を基準とした 1 m 間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線として実測した。土層断面図は水平水糸を張って、それを測量基線とした。

実測図の縮尺率は平面図・土層断面図とも 20 分の 1 を原則としたが、細部の実測では 10 分の 1 で行った。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

(4) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、35 mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）と6×7判（モノクロ）1台を使用した。

2. 室内整理

(1) 遺物の処理

遺物は水洗、ラベルの記入、接合復元、土器拓影図作成、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作成の順に行った。

(2) 遺物図版

図版は、遺構から出土したものは遺構別に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。縮尺は、土器が4分の1、土器拓影図が3分の1、土製品2分の1、剥片石器2分の1、礫石器2分の1・3分の1、石製品2分の1・3分の1、鉄器2分の1を原則としたが器種の大小によって適宜縮尺を変えて掲載した。なお土師器の器面調整については、次ページのような表現方法を用いた。

(3) 遺構図面の処理

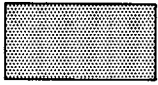
図面は第1原図の点検、修正、合成、トレース、遺構図版の作成の順に整理した。

(4) 遺構図版

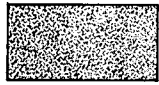
図版の縮尺は住居跡40分の1、土坑40分の1、その他40分の1を原則としたが、遺構の大きさにより適宜縮尺を変えて掲載した。その場合、各図版に縮尺率を明記した。図中の調査区域外、攪乱箇所、炭化材の分布範囲、焼土には次ページのようなスクリーントーンを使用した。また、柱穴の番号については P_1 ・ P_2 ・ P_3 ……、小石や礫についてはS、土器についてはPを付した。

(5) 写真図版

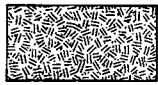
遺構写真・遺物写真とも縮尺は不定である。遺物写真の番号は遺物図版の番号と符号している。



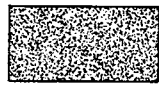
焼土



炭化材分布



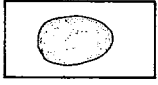
調査区域外



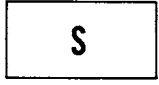
攪乱



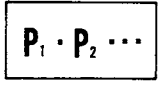
炭化材



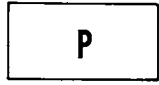
石・礫



石・礫

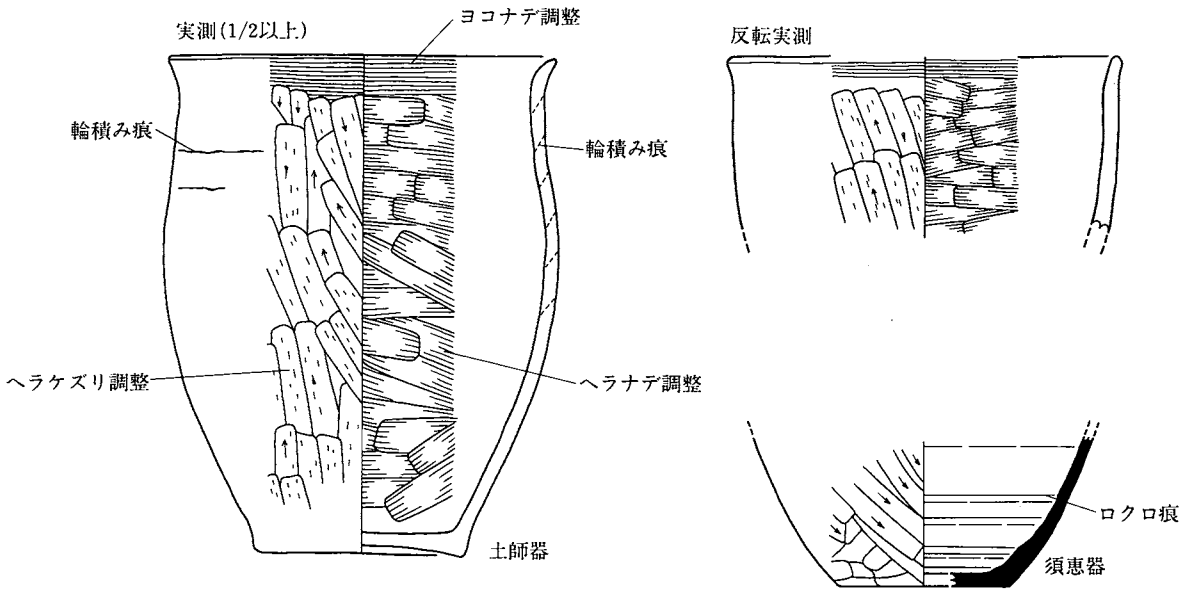


柱穴



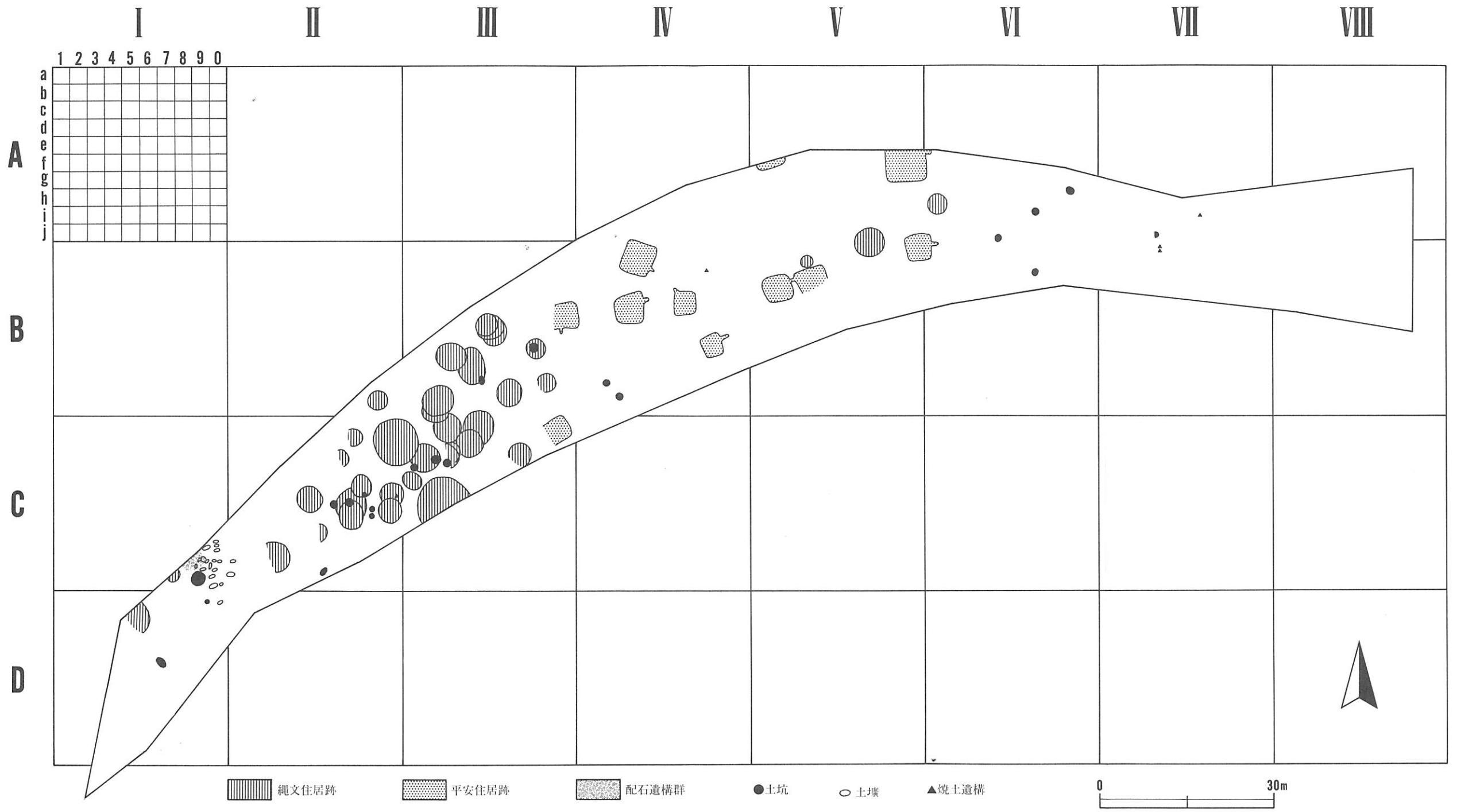
土器

スクリーントーンを表し方



土器の器面調整の表し方

第6図 スクリーントーン・器面調整の表し方



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡 37 棟、土坑 21 基、墓墳 20 基、配石遺構群、焼土遺構 5 基、平安時代の竪穴住居跡 11 棟が検出された。出土した遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品、土師器、須恵器、鉄器である。

1. 竪穴住居跡

I C 7 j 住居跡（第 8 図、写真図版 4）

本遺構は調査区西端の斜面下方の平坦地に位置しており、本遺構の西側には I D 6 a 住居跡が、東側には墓墳群と配石遺構が存在する。検出は耕作土除去後のⅡ層上面における黒褐色土の広がりによる。平面形は、耕作地内に遺構が続くため詳細は不明であるが、円形を呈すると思われる。

規模は開口部径 2.7 m、床面部径 2.5 m を測る。壁はⅡ層中にあり、床面から急傾斜で外傾して立ち上がる。壁高は西壁が 10～13 cm、南壁が 16～18 cm、東壁が 22～25 cm である。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で、全体に暗褐色土が混入し、しまっている。床面はⅡ層中に形成されており、ほぼ平坦でしまっているが、コブシ大の礫が散在している。柱穴は検出されなかった。

炉は床面中央部付近で赤褐色の焼土が検出された。耕作地内に続くため詳細は不明であるが地床炉と思われる。

本遺構からの出土遺物はなく、時期不明である。

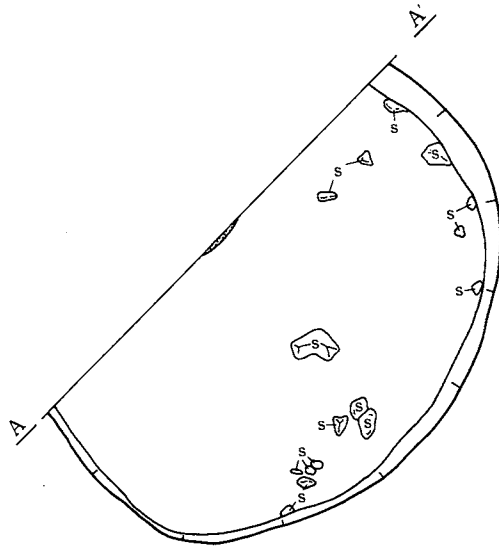
I D 6 a 住居跡（第 9 図、写真図版 5）

本遺構は、調査区西側斜面下方の平坦地に位置している。本遺構の東側には I C 7 j 住居跡が、南側には I D 7 d 土坑が存在する。検出はⅡ層上面における黒褐色土の広がりによるものである。

本遺構は、一部が調査区域外に続くことと西側が流失あるいは削平されているため、平面形及び規模等の詳細は不明であるが、残存する部分から平面形は不正な楕円形を呈すると推定される。また、残存最大長は 4.5 m である。壁はⅡ層中にあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は残存する東側で 20～25 cm である。

埋土は黒褐色シルト質土の単層で小礫と微小な炭化材が混入し、やわらかい。床面はⅡ層中にあり、平坦でしまっている。柱穴は検出されなかった。

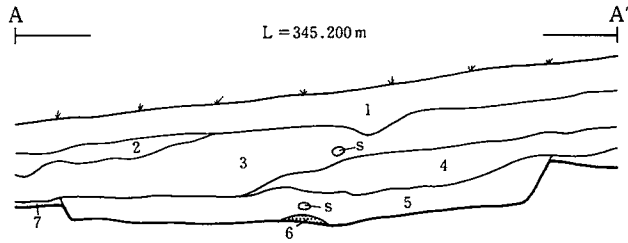
IC7j



S = 1/40

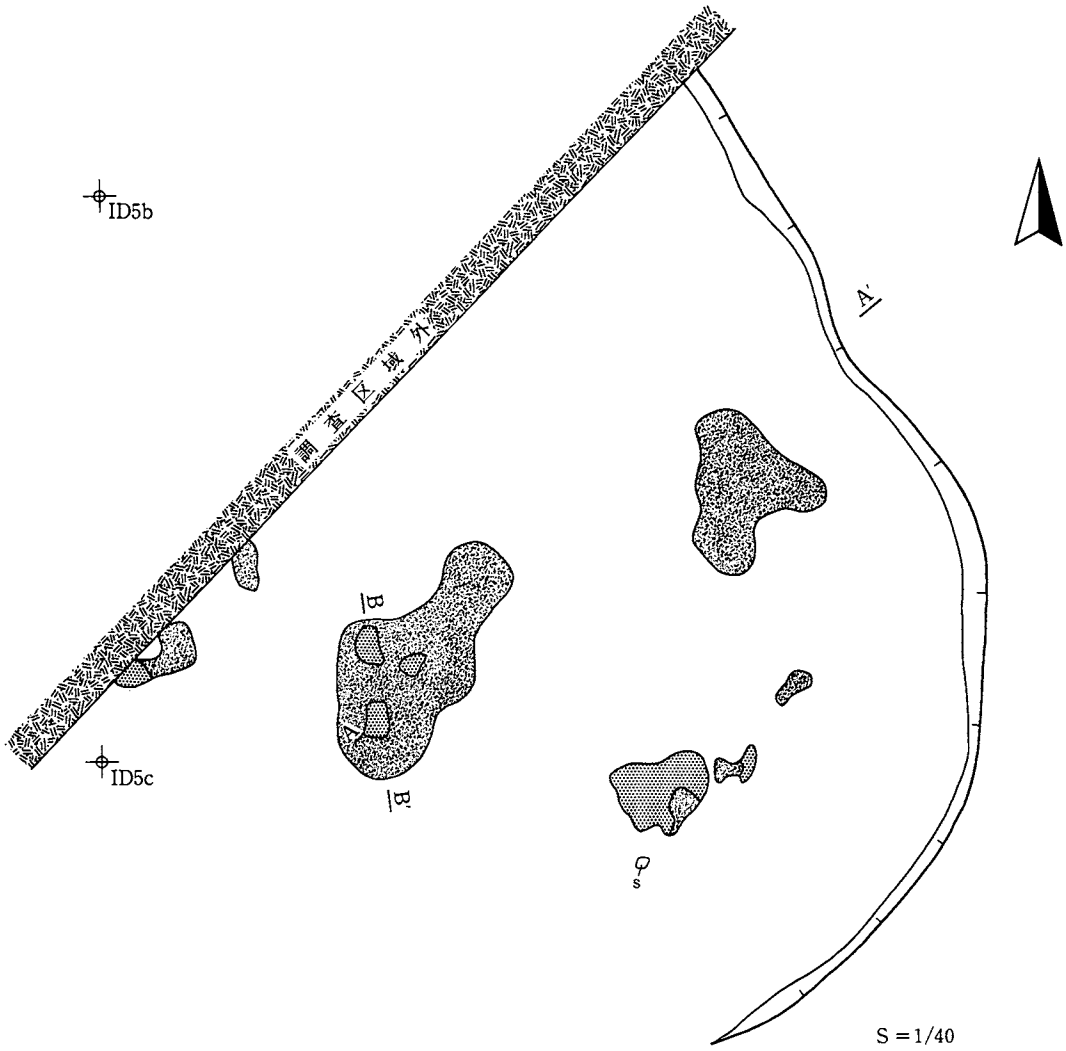
IC7a

ID8a



1. 10Y R2/3黒褐色土 耕作土 やわらかい 粘性なし
2. 10Y R2/3黒褐色土 やわらかい 粘性なし にぶい黄橙色土の火山灰がブロック状に混じる
3. 7.5Y R3/1黒褐色土 しまっている 粘性あり
4. 10Y R2/2黒褐色土 しまっている 粘性あり 10Y R2/3黒褐色土をまだらに含む
5. 10Y R2/3黒褐色土と10Y R3/4暗褐色土の混合土 しまっている 粘性あり
6. 5Y R4/6赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
7. 10Y R3/3暗褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり

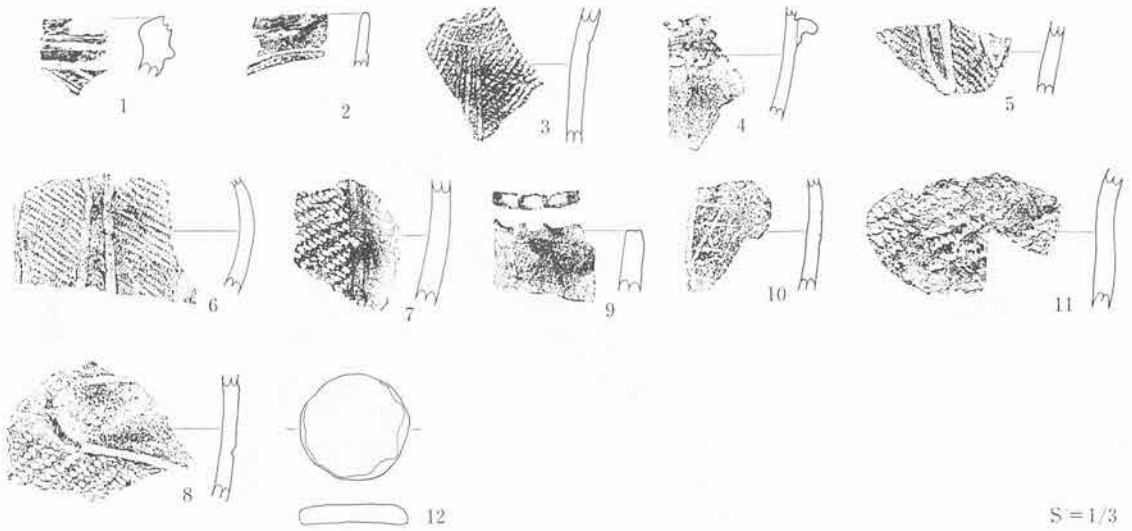
第8図 IC7j住居跡



1. 7.5Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし 炭・小礫が少量混入する
壁際に褐色土が混じる

1. 2.5Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている
2. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10Y R2/3黒褐色土 しまっている 粘性なし
4. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり

第9図 ID6a住居跡



第10図 ID6a 住居跡遺物

炉は調査区域外に続く壁際で焼土が検出された。詳細は不明であるが、地床炉と思われる。

出土遺物（第10図、写真図版64）

1は口縁部付近に隆帯がまわっている。2は弧状沈線が施された口縁部破片である。3はR L縦回転の地文の上に縦位の平行沈線と弧状沈線が施文されている。4は隆帯の両側に棒状の器具によって連続した刺突が施されている。5～7は楕円あるいは逆U字状に沈線によって区画され、区画内が磨り消されており、大木9式に相当する土器と思われる。8は沈線によって区画され、区画内が磨消されており、鱗状の突起がつくことから大木10式に相当する。9は口唇部に指頭圧痕が施されている。10は網目状の撚糸文が施文されている。11は粗製土器の体部でR L縦回転の地文が施されている。12は円盤状土製品で、粗製土器の破片を2次利用したものである。

本住居跡は出土遺物から縄文時代中期末葉に属するものと思われる。

Ⅱ B 9 i 住居跡 (第 11 図、写真図版 6)

本遺構は、調査区西側の斜面上方の北壁沿いに位置し、南側にはⅡ C 8 a 住居跡とⅡ C 9 a 住居跡が存在する。検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。

平面形は円形で、北壁の一部が試掘トレンチによって削平されている。規模は東西 3.68 m、南北 3.86 m を測る。壁はすべてⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は 25 ～ 65 cm で、北壁は試掘トレンチにより削平され、20 cm 程である。

埋土は大きく 3 層に分けられる。埋土上位は基本層序のⅡ層に相当するシルト質の暗褐色土でやわらかい。埋土中位は褐色のシルト質土、下位は褐色の粘土質土でしまっている。床面はⅢ層中に形成されており、床面中央部がやや盛り上がり、しまっている。柱穴は検出されなかった。

炉は中央部から東壁側に寄った地点で長径 1.1 m、短径 0.75 m の楕円形の石囲炉が検出された。石囲炉内の焼土はそれほど発達しておらず、暗褐色土中に焼土粒と微小な炭化材が散在していた。また炉の東側の石は他の炉石に比べて大きく、外傾させて深く埋め込まれている。その東側には土器が埋め込まれており、周囲には赤褐色の焼土が広がっていた。周辺に 14 ～ 25 cm 程の礫が散在することから土器を埋設した複式炉と思われる。

出土遺物 (第 12 図、写真図版 64)

13 は体部上半に横位の隆帯が複数めぐる。14 は頸部に平行して細い棒状の工具によって刺突が施され、体部には沈線で逆 U 字文が施文されている。15 は沈線によって楕円もしくは逆 U 字状に区画され、区画内に縄文と刺突が充填されている。16 は炉の埋設土器で、沈線によって逆 S 字状に区画され、区画内が磨消されている。区画の始まりと終わりには鱗状の突起が付き、内部の区画線に半截竹管による刺突が施されている。17 は平縁の粗製土器で、L R 縦回転の単節斜行縄文が施文されている。

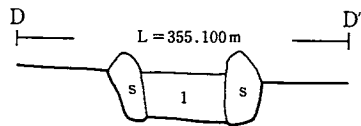
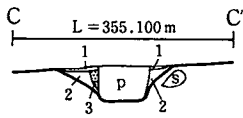
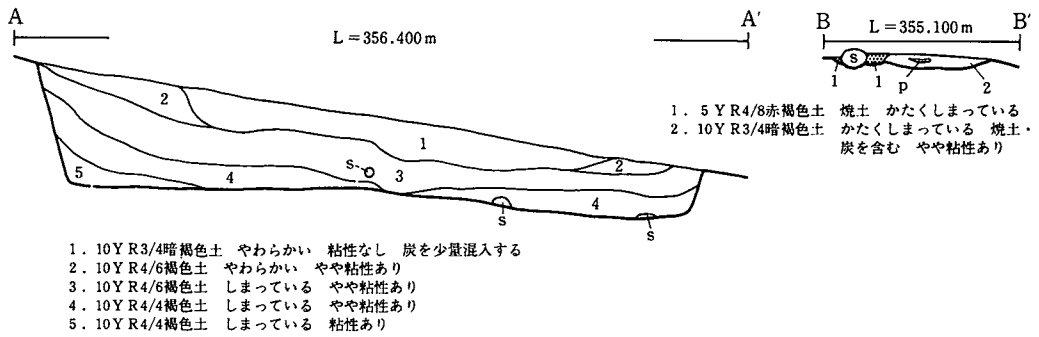
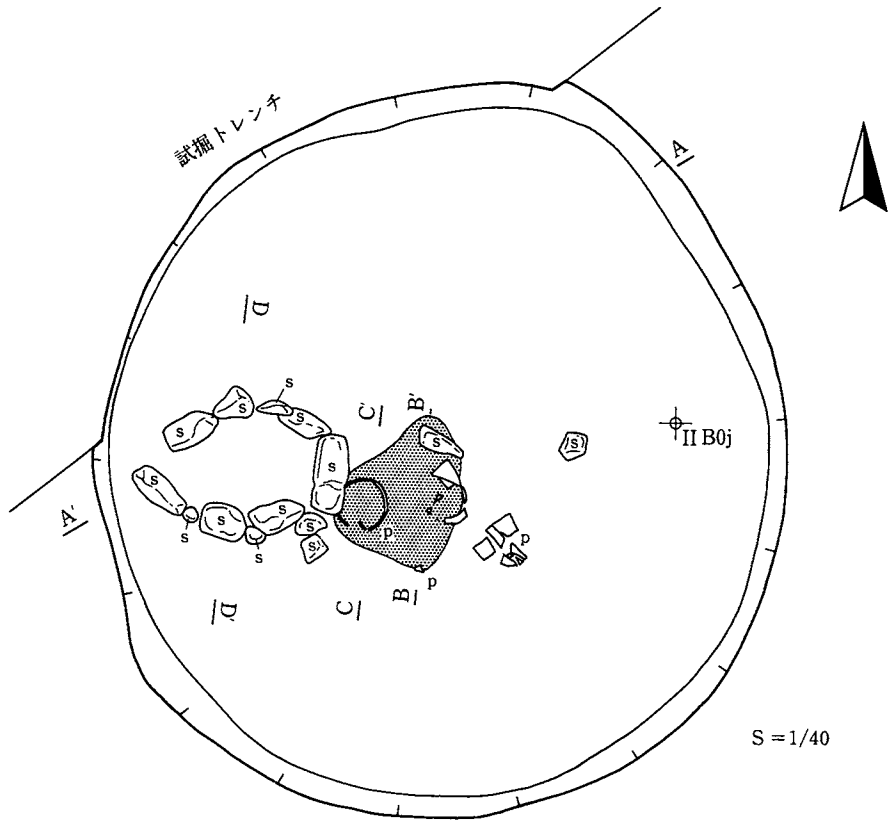
出土遺物及び遺構の形態から縄文中期末葉の住居跡と推定される。

Ⅱ C 3 i 住居跡 (第 13 図、写真図版 7)

本遺構は調査区西側の斜面中位に位置している。検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の半円状の広がりや斜面中位の焼土の検出による。本遺構は西側の斜面下方が流失しているため平面形の詳細は不明であるが残存する形状から推察すると円形あるいは楕円形を呈すると思われる。

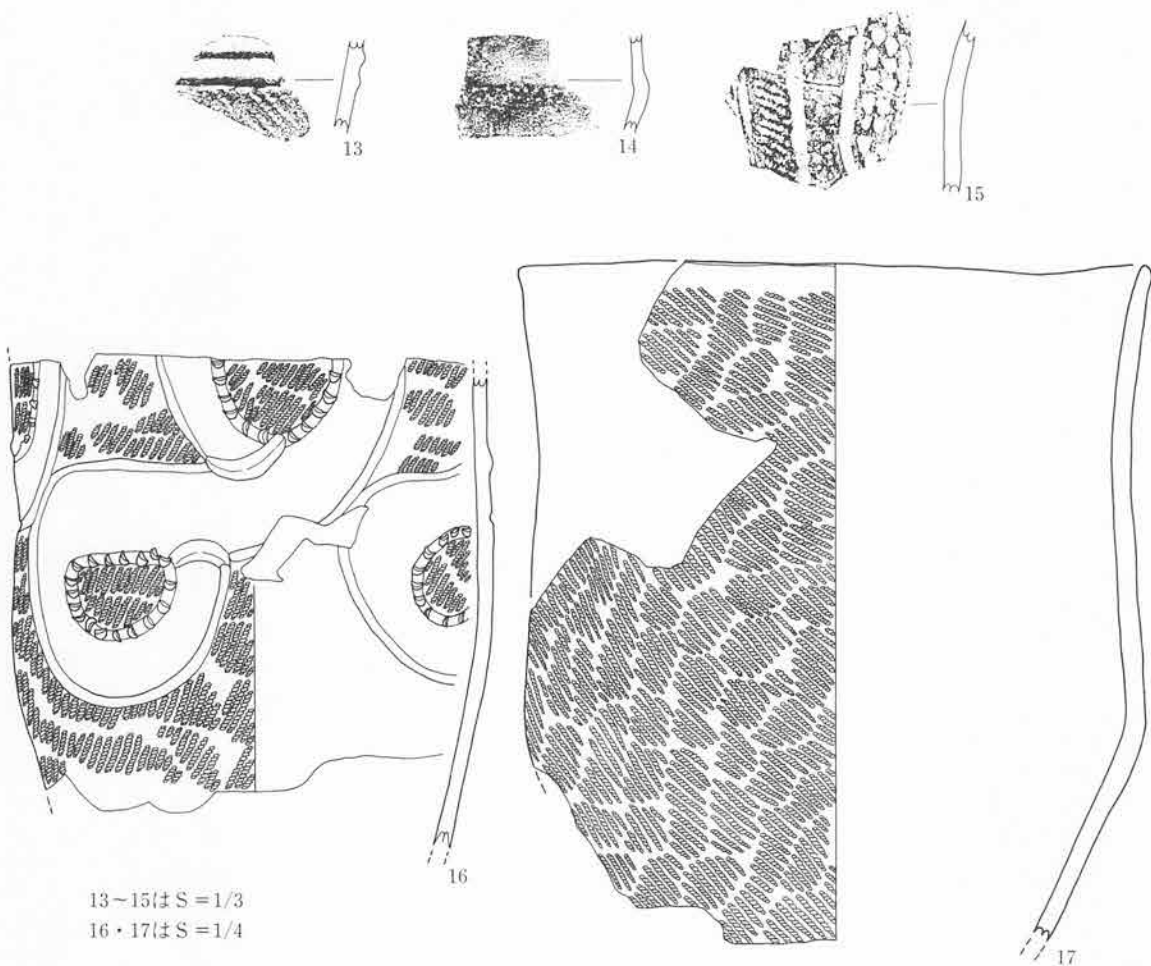
規模は南北が 5.2 m 程で、東西は不明である。壁はすべてⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁が 70 cm、南壁が 35 cm、北壁が 44 cm を測る。

埋土は 4 層に細分される。上位は褐色のシルト質土、中位は暗褐色のシルト質土と黄褐色の



1. 10 Y R4/4褐色土 しまっている 粘性なし 少量の炭・焼土を含む
 2. 10 Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし 炭・焼土を含む
 3. 5 Y R4/6赤褐色土 焼土 しまっている
 1. 10 Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし 少量の炭・焼土を含む

第11図 II B9i 住居跡



13-15は S=1/3

16・17は S=1/4

第12図 II B9i 住居跡遺物

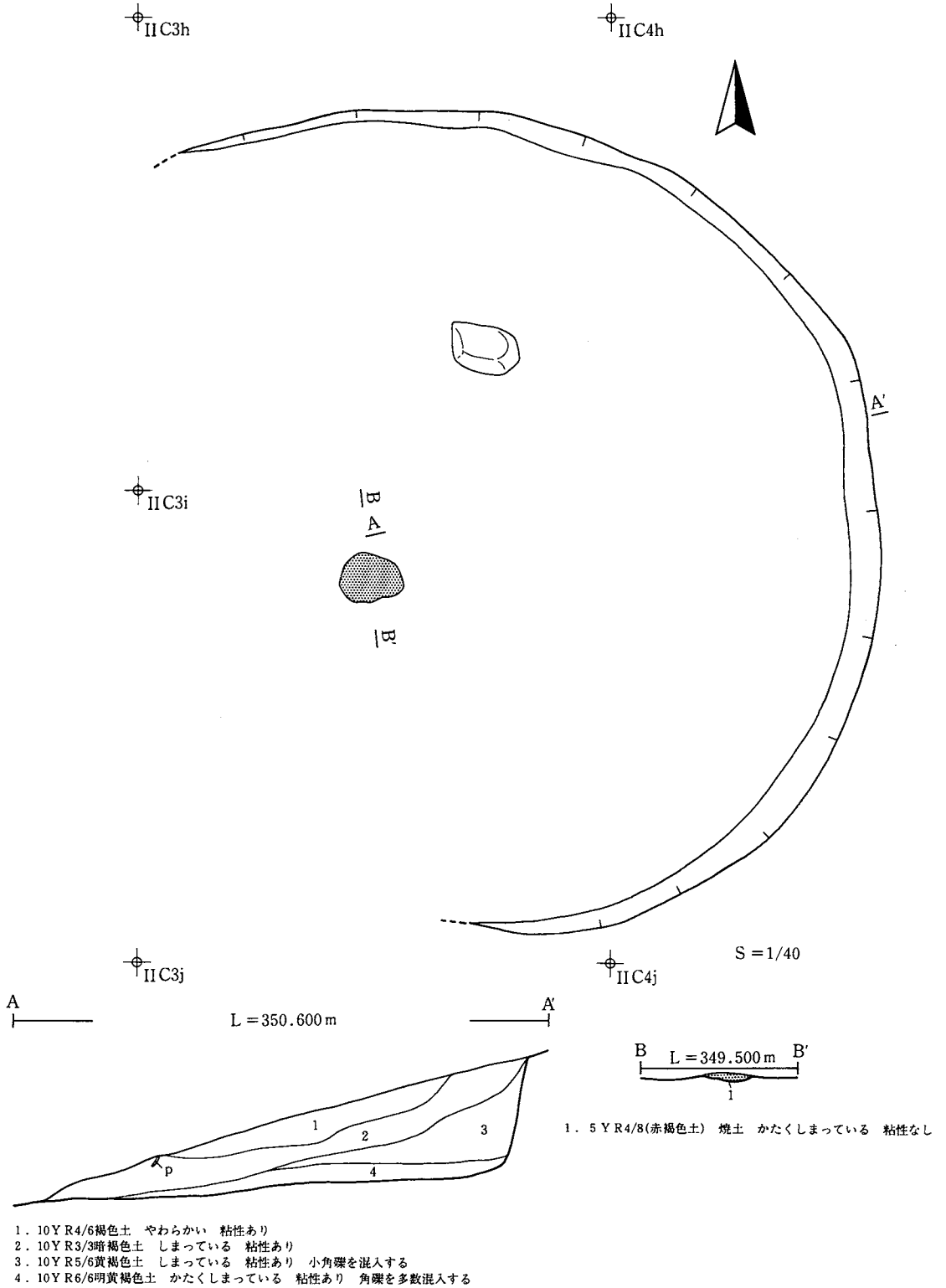
粘土質土、下位は明黄褐色の粘土質土で角礫を多数混入する。床面はIV層中に形成されており角礫が散在し小さな凹凸が見られる。柱穴は確認されなかった。

炉は西側の斜面となって落ち込む地点で長径 40 cm、短径 30 cmの楕円形の地床炉が検出された。焼土は発達がよく、かたくしまっている。

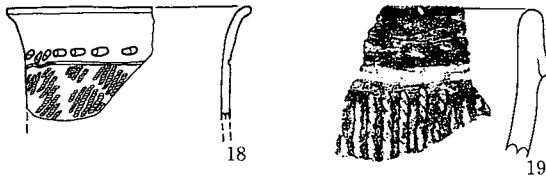
出土遺物（第14図、写真図版64）

18は平縁の深鉢の口縁部破片で、横位の沈線とそれに平行する刺突によって区画され、口縁部は無文となる。19は隆帯によって区画された無文の口縁部をもち、体部には燃糸文が施されている。

本遺構は出土遺物が少なく時期は不明である。



第13図 II C3i 住居跡



18は $S = 1/4$ 19は $S = 1/3$

第14図 II C3i 住居跡遺物

II C 4 d 住居跡 (第15図、写真図版8)

本遺構は調査区西側の斜面中位に位置し、南側にはII C 6 g 住居跡が、東側にはII C 7 e 住居跡が隣接する。検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は不正な楕円形を呈する。

規模は東西が4.93 m、南北が4.85 mを測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成され、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁が84 cm、西壁が12 cm、北壁が50 cm、南壁が55 cmである。

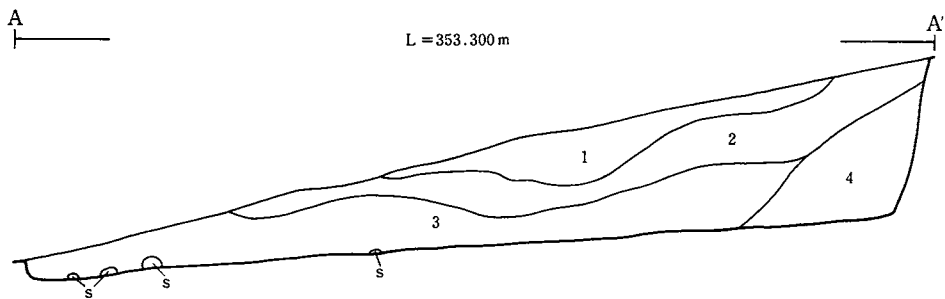
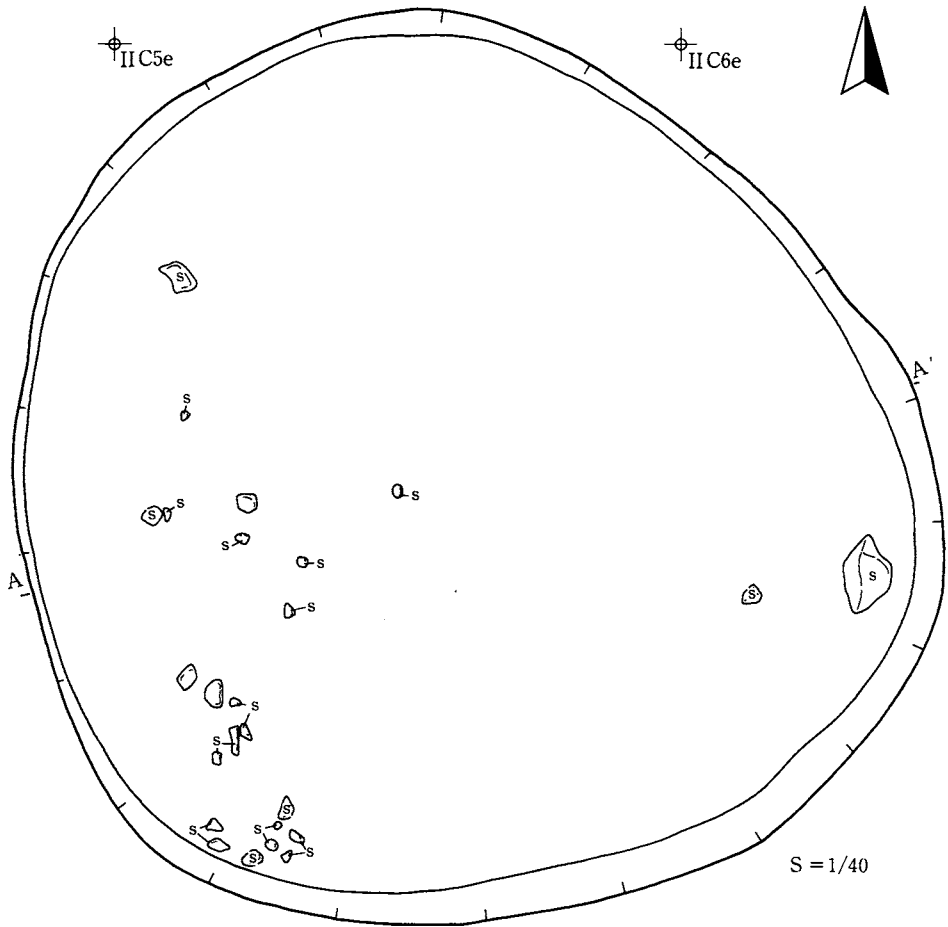
埋土は3層に大別され、上位はシルト質の暗褐色土、中位は暗褐色土を混入する褐色土、下位は微小な炭化材を含む暗褐色土で、東壁際には壁の崩落土と思われる褐色土が存在する。床面はⅣ層中に形成され、平坦であるが角礫が散在する。炉および柱穴が検出されなかったことから竪穴状遺構とも考えられる。

出土遺物 (第16図、写真図版64・65)

20～22は粘土紐を貼り付けて施文されている土器で、20・21は山形の突起部分である。23は沈線で渦巻文が描かれており、大木8式の土器と推定される。24・25は沈線で楕円文が施されており、24の楕円文内には細長い刺突が施文されている。26は横位の隆帯上に刻目が施されている。27～31は沈線によって区画され、縄文が充填されている土器である。31には沈線区画に沿って刺突が施されている。32は平縁の深鉢の口縁部で、口唇部に原体圧痕がみられる。33・34は粗製土器で、33は撚糸文が、34はRL縦回転の単節斜行縄文が施されている。また、34には補修孔が土器の半ばまで穿たれている。

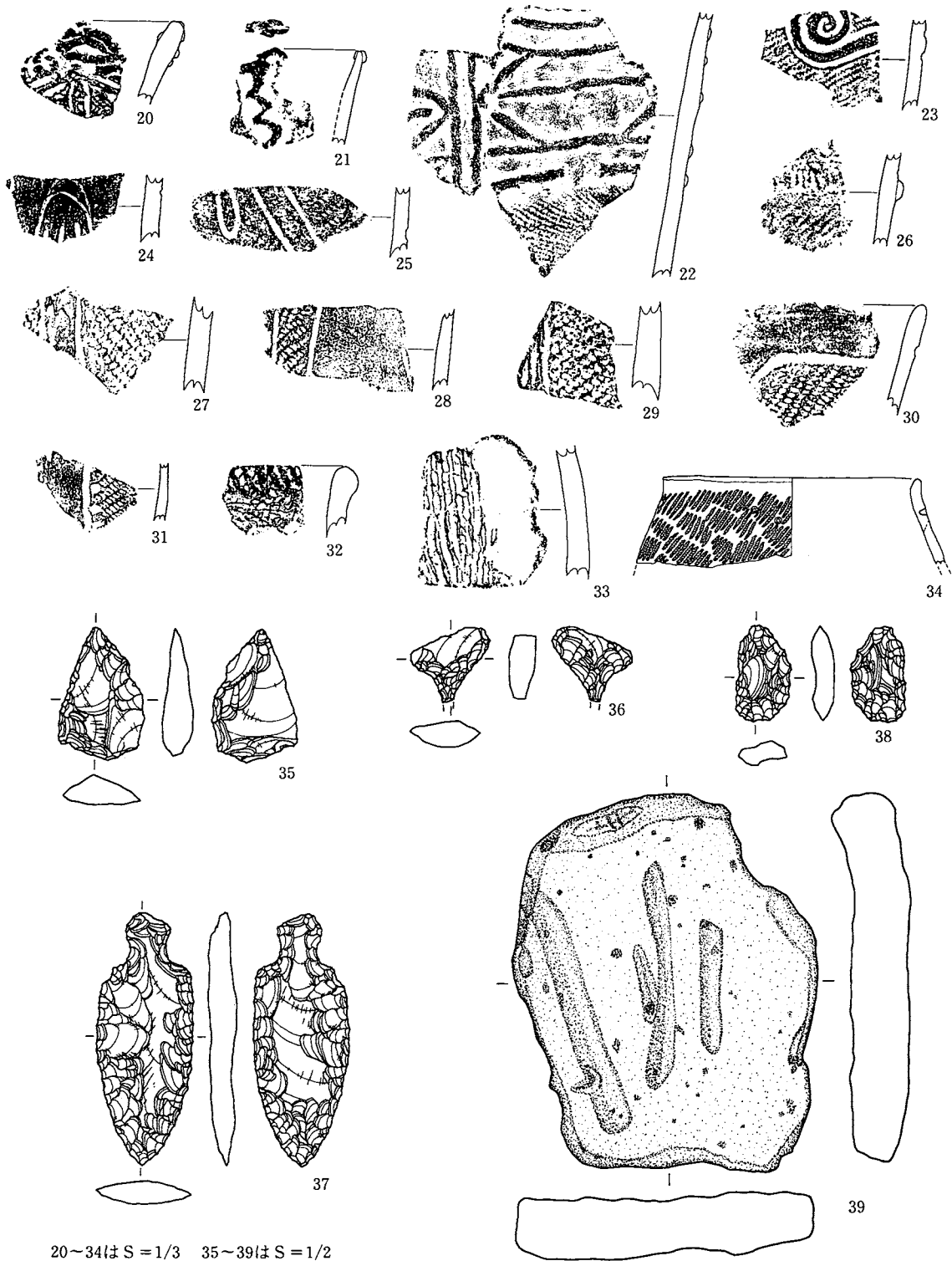
石器は5点出土している。35は木の葉型をした尖頭器で石質は硬質泥岩である。36は石錐のつまみ部分で、身部が欠損しており残存長は2.4 cm程である。37は縦型の石匙で、両側辺に刃部が形成されている。38は不定形石器で、ほぼ全縁にわたって刃部が形成されている。石質は36・38がチャート質粘板岩、37が粘板岩である。39は多孔質の両輝石安山岩(熔岩)の有溝砥石で浅い溝をもつ。

出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と推定される。



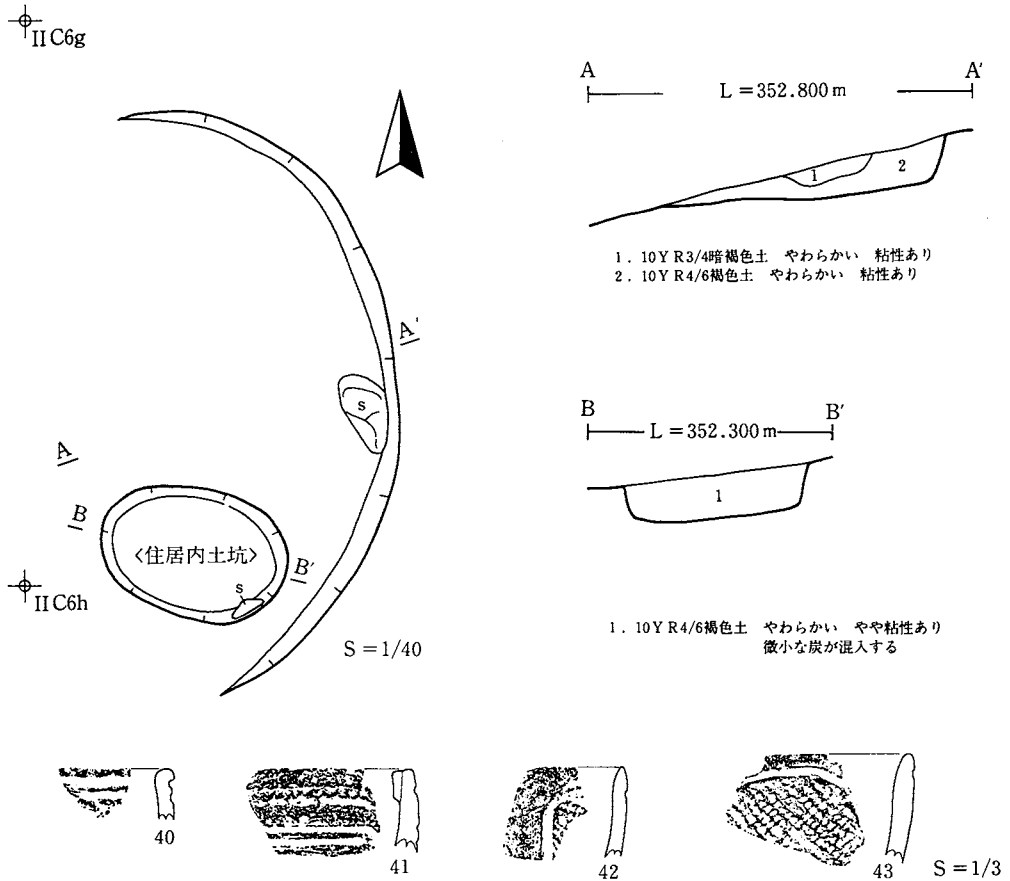
1. 7.5Y R 3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 褐色土がまだらに混入する
2. 7.5Y R 4/6褐色土 やわらかい 粘性なし 暗褐色土がまだらに混入する
3. 7.5Y R 3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の炭が混入する
4. 7.5Y R 4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の炭が混入する

第15図 II C4d 住居跡



20~34は S = 1/3 35~39は S = 1/2

第16図 II C4d 住居跡遺物



第17図 II C6g 住居跡(遺構・遺物)

II C 6 g 住居跡 (第 17 図、写真図版 9)

本遺構は調査区西側の斜面中位に位置し、北側には II C 4 d 住居跡、東側には II C 7 f 住居跡が存在する。検出はⅢ層上面における暗褐色土の広がりによる。平面形は西側斜面下方が流失しているため詳細は不明であるが残存する部分から円形あるいは楕円形と推定される。

規模は残存の最長部分で南北 3.1 m を測る。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する東壁が 25 cm である。

埋土は 2 層に分けられ、上位がシルト質の暗褐色土、下位が粘土質の褐色土となっている。床面はⅢ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

炉および柱穴は検出されなかったが、南側に住居内土坑が検出された。土坑は平面形が楕円形ないし小判型で、規模は開口部径が 100 × 68 cm、底部径 88 × 58 cm、深さ 22 cm を測る。埋

土は1層で、褐色土に微小な炭化材が少量混入する。遺物等は出土していない。この住居内土坑については住居跡の床面からの検出であるが、住居跡の残存部分から推定される規模と比較して、住居内土坑の床面に占める割合が多くなるため、住居跡とはまったく別個の土坑が重複している可能性もある。しかし、埋土等からは重複関係が確認できなかったため、住居内土坑として登録する。

出土遺物（第17図、写真図版65）

本住居跡からは土器片が少量出土している。40は平縁の深鉢の口縁部破片で、口唇部下に平行する沈線がめぐっている。41は口縁部に隆帯が張り付けられ、口唇部には連続する刺突が施されている。42・43はいずれも沈線によって区画され、区画内に縄文が充填され、大木9あるいは10式に属する土器と思われる。

出土遺物から縄文時代中期末葉の住居跡と推定される。

ⅡC7c住居跡（第18図、写真図版10）

本遺構は、調査区西側斜面上方に位置している。本遺構の南側にはⅡC7e住居跡・ⅡC8d住居跡が、東側にはⅡC9a住居跡、北東側にはⅡC8a住居跡がある。検出は表土除去後のⅢ層上面における焼土の検出による。本遺構の平面形は西側が流失しているため詳細が不明であるが、残存部分から円形と推定される。規模は径が2.7m程と思われる。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は残存する東壁で18cmを測る。

埋土は2層に分けられ、上位がシルト質のいぶい黄褐色土、下位がシルト質の褐色土で、いずれもかたくなっている。残存する部分の床面はほぼ平坦で堅くしまっている。

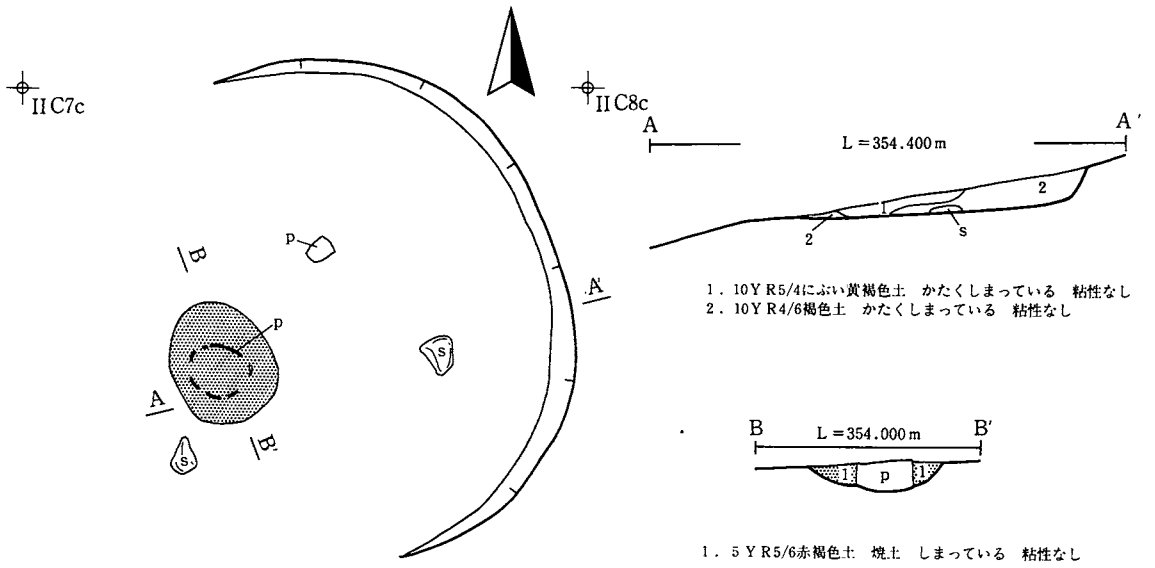
柱穴は検出されなかった。

炉は床面の中央部付近とおもわれる地点から土器埋設炉が検出された。炉は長径が70cm、短径が53cmのややいびつな楕円形を呈し、中央に径30cm程の土器が埋設されていた。焼土は土器の周辺によく発達しているが、埋設土器の内部には少量の微小な炭化材と焼土粒が含まれる褐色土が堆積しているだけで、焼土は発達していない。埋設されている土器は深鉢の口縁部から体部までを利用している。

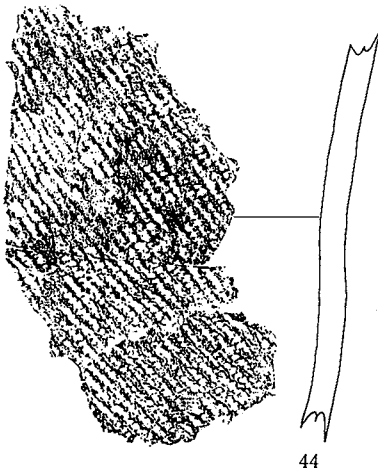
出土遺物（第18図、写真図版65）

44は粗製の深鉢の体部破片で、LR縦回転の単節斜行縄文が施されている。45は炉に埋設されていたもので、平縁の深鉢である。口縁部に浅い沈線がめぐり、その上位は無文帯で、下位にはRL縦回転の単節斜行縄文が施文されている。

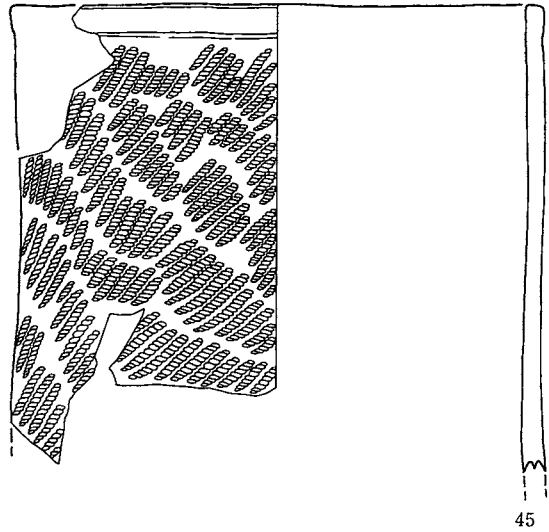
本住居跡からの出土は少量であり、すべて粗製土器であるため土器の文様から住居跡の時期を判断することはできないが、炉の形態から縄文時代中期末葉の遺構と推定される。



II C7d



II C8d



44は S = 1/3 45は S = 1/4

第18図 II C7c住居跡(遺構・遺物)

II C 7 e 住居跡（第 19 図、写真図版 11）

本遺構は調査区西側斜面上方に位置している。南側は II C 7 f 住居跡と重複関係にあり、北東側は II C 8 d 住居跡と重複関係にある。また西壁を切るような形で II C 7 e 土坑が、東壁を切るような形で II C 8 e 土坑が、床面には II C 7 e - 2 土坑が存在する。検出は II C 7 f 住居跡から続く炭化材まじりの暗褐色土と褐色土、および II C 8 d 住居跡床面における暗褐色土の広がりによる。本住居跡の構築時期は II C 7 f 住居跡および II C 8 d 住居跡より古い。また II C 8 d 土坑より古く、II C 7 e 土坑・II C 7 e - 2 土坑より新しい。平面形は、重複関係にあるため詳細が不明であるが、残存する部分から円形あるいは楕円形と推定される。規模は残存する東西径で 5.1 m を測る。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は北壁が 64 cm、東壁が 66 cm、西壁が 11 cm を測る。

埋土は 5 層に細分される。上位は褐色のシルト質土、下位は暗褐色のシルト質土で双方とも微小な炭化材を混入する。壁際には黄褐色の粘土質土が存在する。床面はⅢ層中に形成され、かたくしまっている。壁際と住居跡中央で床面の高さに差があることから、野外調査の際は確認できなかったが、II C 7 f 住居跡の床面とは若干の段差があったものと思われる。床面中央部付近には炭化材の広がりがみられ、その下からは II C 7 e - 2 土坑が検出された。

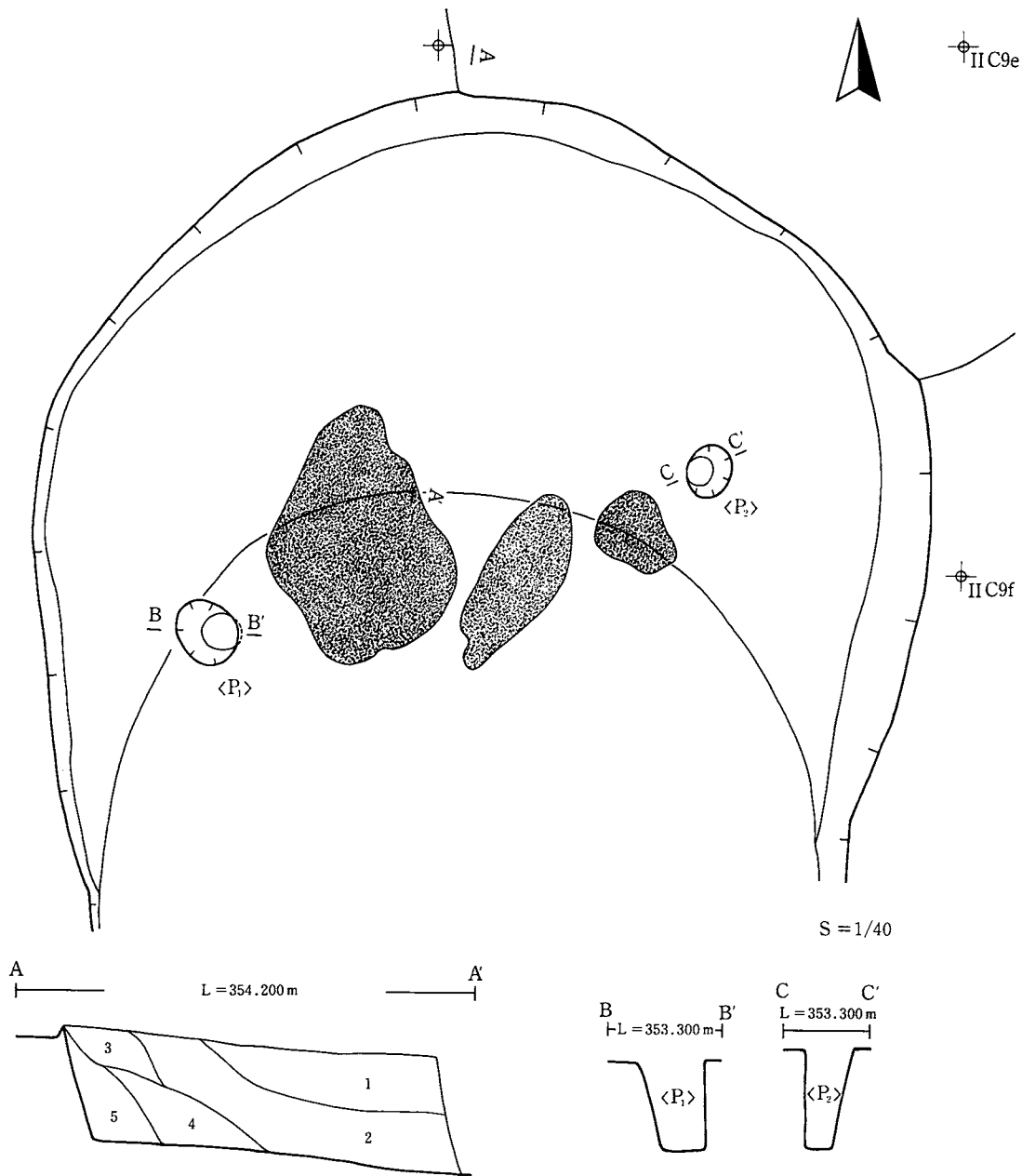
柱穴は P₁・P₂ が検出された。ともに円形の掘り方を有し、径は 39・31 cm、深さは 50・56 cm を測る。柱痕の径は不祥である。

No.	P ₁	P ₂
径 cm	39 × 33	31 × 25
深さ cm	50	56

炉は検出されなかったが、II C 7 f 住居跡の 2 号炉が本住居跡の炉の可能性もある。（埋設土器は本住居跡の図版に掲載）

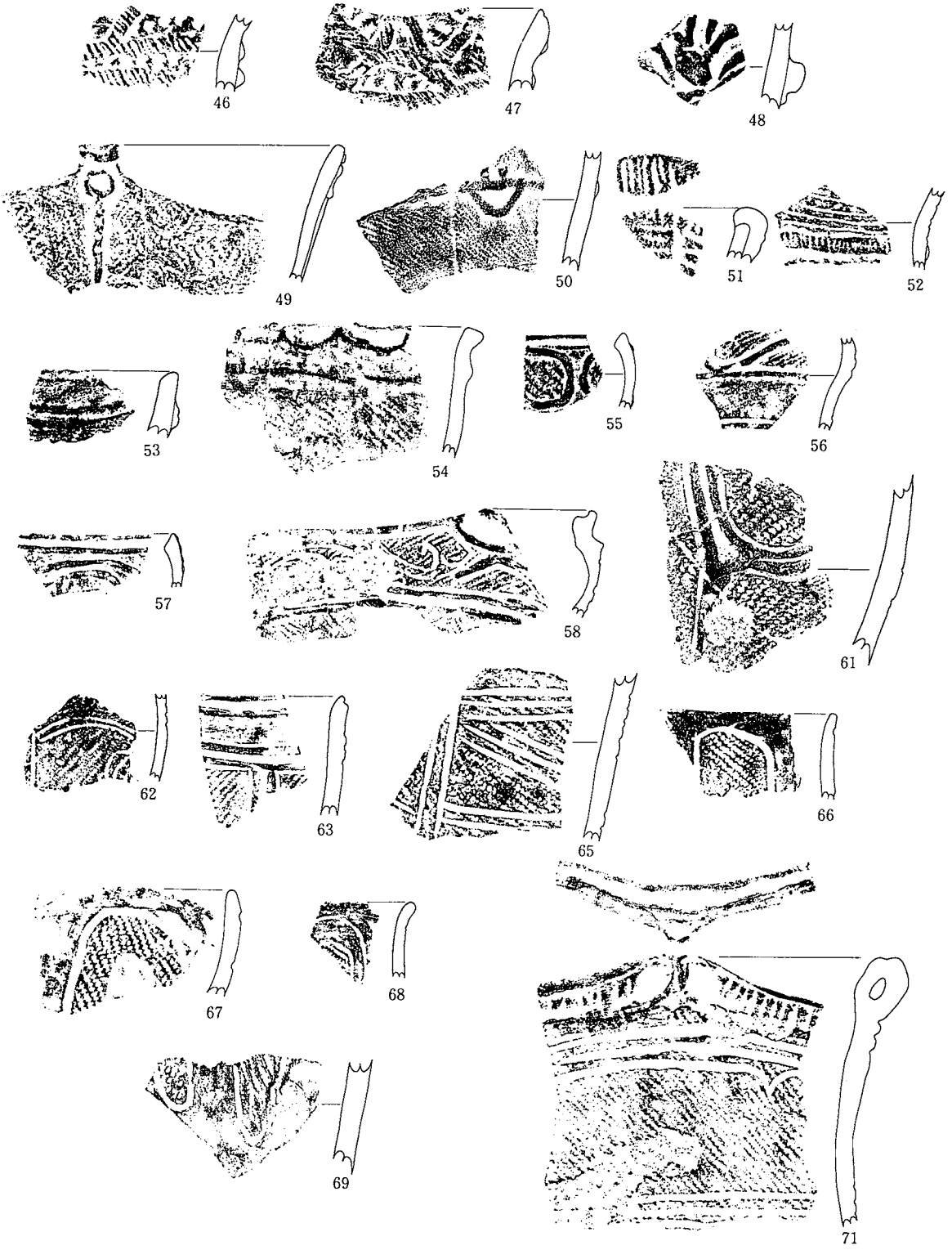
出土遺物（第 20 ～ 22 図、写真図版 65・66）

46・47 は粘土紐が張り付けられ、その上に原体が圧痕されている。また、粘土紐間に半截竹管による連続した刺突が施される。48・49 は粘土紐とともにコブ状の粘土が貼られている。49 は口縁部に突起をもつ深鉢である。50 も粘土紐を貼り付けて施文されている。51 は口縁部の一部が折り返され、原体が押圧されている。52 は粘土紐上に刻目が付けられ、その上部に横位の撚糸文が施されている。53 は比較的幅の広い粘土紐が貼付されている。54 は口縁部に連続して半円状の隆帯が施文される。55～60 は口縁部が強く内湾する器形の土器で、∞状や楕円状の文様が施されている。61～65 は体部に沈線あるいは隆沈線によって曲折文や渦巻文が描かれるものである。66～70 は沈線によって楕円あるいは逆 U 字状に区画され、区画の内部に縄文が充填される土器である。71・72 は橋状把手をもつ。73～75 は粗製の深鉢で、73 は R L 縦回転の単節斜行縄文が施されている。74・75 は II C 7 f 住居跡の 2 号炉の埋設土器であるが、本遺構の炉とも考えられるので本住居跡の図版に掲載した。74 には R L 横回転の単節斜行縄文が、



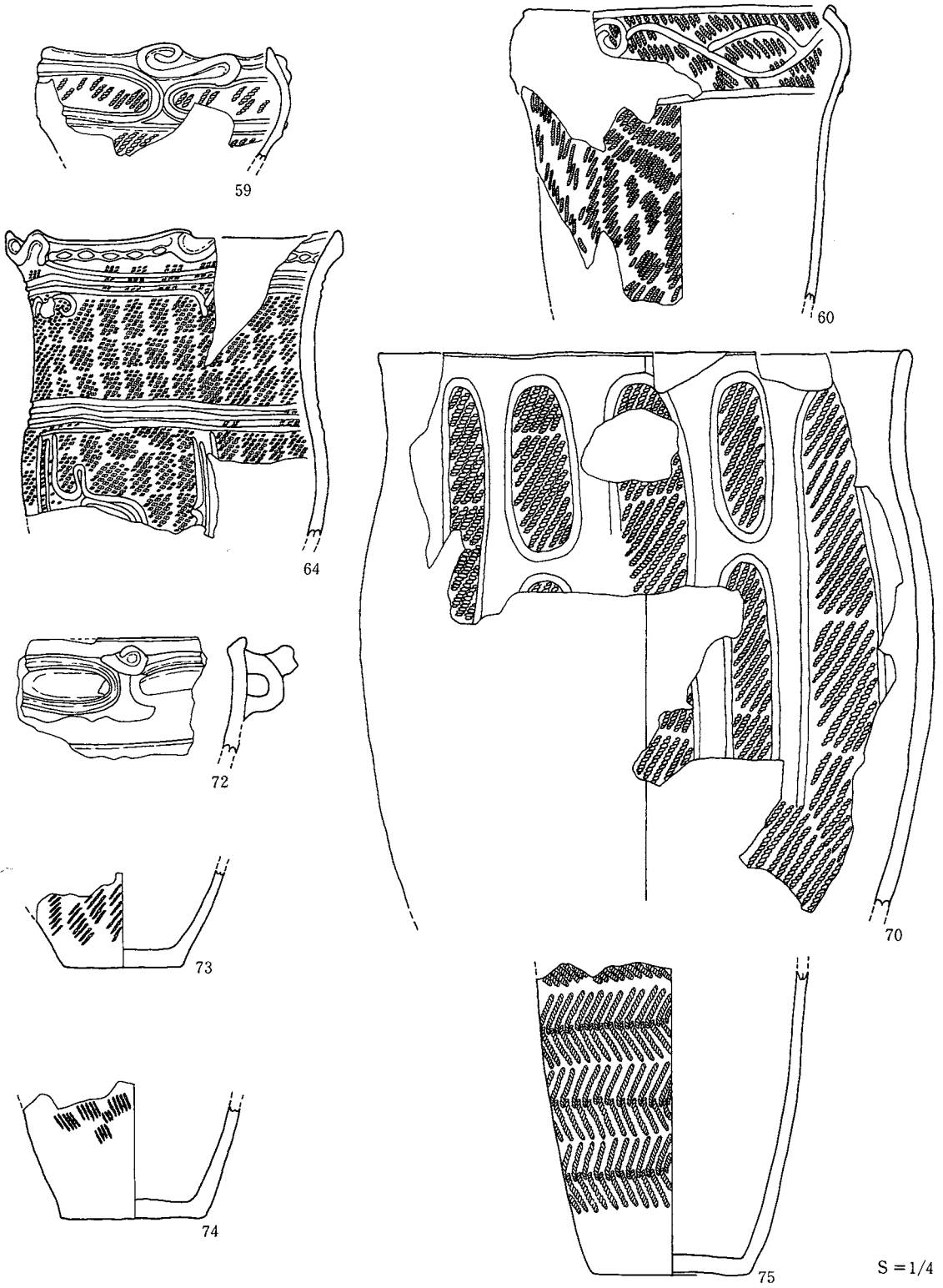
1. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の微小な炭が混入する
2. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の微小な炭が混入する
3. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり
4. 10Y R4/6~5/6褐~黄褐色土 しまっている 粘性あり 少量の炭が混入する
5. 10Y R5/8黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

第19図 II C7e 住居跡



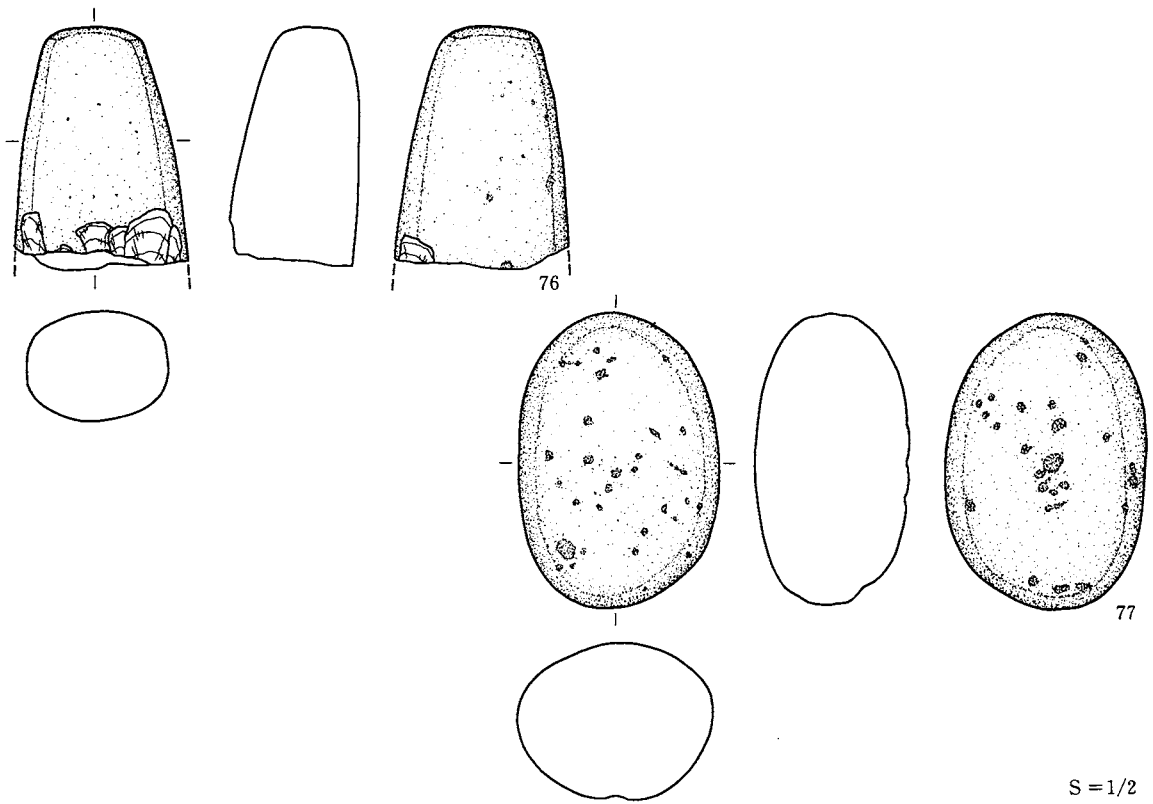
第20圖 II C7e住居跡遺物(1)

S=1/3



S = 1/4

第21图 II C7e 住居跡遺物(2)



第22図 II C 7 e 住居跡遺物(3)

75には結束羽状縄文が施されている。石器は2点出土している。76は磨製石斧で、中央部から刃部にかけて欠損している。石質は玢岩である。77は磨石で、石質は両輝石安山岩である。

出土遺物から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

II C 7 f 住居跡 (第23図、写真図版12)

本遺構は調査区西側斜面上方に位置している。本遺構の北側には重複関係のII C 7 e 住居跡とII C 8 d 住居跡が、西側にはII C 4 d 住居跡とII C 6 g 住居跡が、東側にはII C 9 e 住居跡が存在する。また、床面北側からはII C 7 e - 2 土坑が検出された。検出はⅢ層上面における明褐色土と暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は楕円形で、規模は東西5.1 m、南北4.25 mを測る。壁はⅢ層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。西側の上部が流失しているため、壁高は西壁が8 cm、南壁が36 cm、東壁が65 cm、北壁が44 cmを測る。

埋土は6層に細分され、上位はシルト質の黄褐色土、中位は少量の微小な炭化材を混入する暗褐色シルト質土、下位は褐色土で中央部付近では少量の炭化材と焼土粒が混入する。床面はⅢ層中に形成され、中央部がやや盛り上がり、一部に炭化材が散在する。

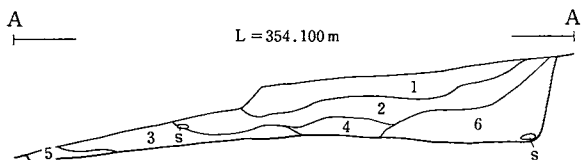
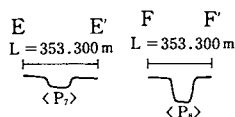
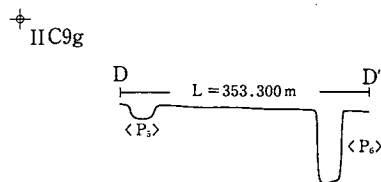
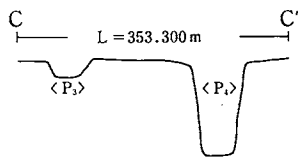
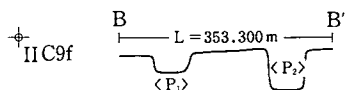
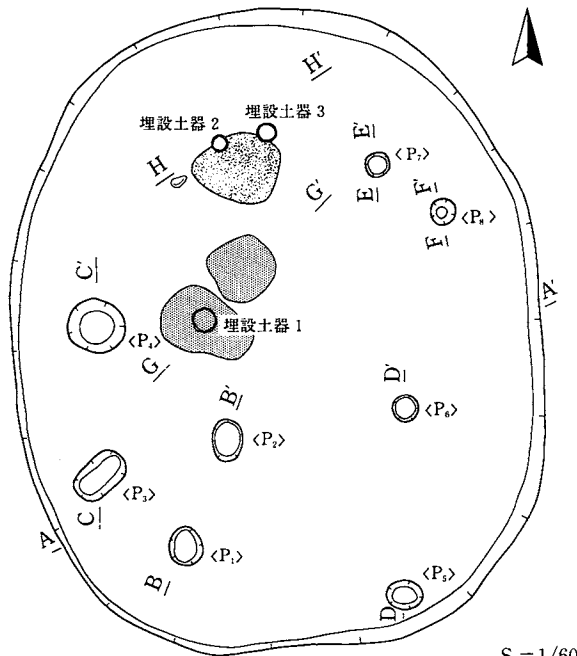
小穴・柱穴はP₁～P₈が検出された。柱穴はいずれも円形ないしは楕円形の掘り方を有し、その径は23～47 cmで、深さは12～74 cmを測る。柱痕の径は不詳である。

炉は床面中央やや西寄りの地点と北寄りの地点で土器埋設炉が検出された。中央やや西寄りの1号炉は径20 cm程の深鉢が用いられており、土器の周辺の焼土はよく発達し、かたくしまっている。北寄りの2号炉は径13 cmと16 cm程の深鉢が用いられており、炉の埋土の上位は炭化材が多数混入し、下位は赤褐色の焼土がよく発達している。なお、2号炉については、重複関係にあるⅡC7e住居跡の炉とも考えられる。

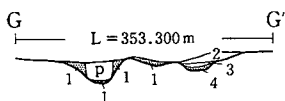
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	31 × 27	34 × 25	34 × 28	47 × 42	30 × 25	23 × 21	20 × 20	23 × 20
深さ cm	15	32	12	74	12	58	8	20

出土遺物（第24～26図、写真図版67・68）

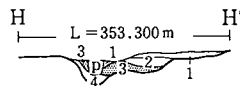
78・79は口縁部に横位の捺糸文が施されており、79は口唇部に原体の圧痕がみられる。80は突起付口縁をもつ深鉢形土器の口縁部破片でコブ状の粘土が貼付されている。81は横位の粘土紐を貼り付けることで区画され、上位には刻目がつけられ、下位には単節斜行縄文が施されている。82は平縁の深鉢形土器で、口縁部及び口唇部に隆帯がめぐっている。83は突起をもつ土器の口縁部で、縦位の平行する隆帯の両側に沈線で渦巻文が施文されている。84・85は平行沈線が描かれている。86～88は口唇部に沈線が施される土器である。86・87は平縁であるが、88は波状口縁で頂部に渦巻状の文様がつけられている。89も突起部分の口唇部に渦巻文が施されている。90・91は比較的大きな隆帯により文様がつけられている。91～96は体部に沈線あるいは隆沈線によって渦巻文や曲折文が施されている土器である。97～101は口縁部が内湾するいわゆるキャリパー形土器で、隆帯及び隆沈線によって波状文や渦巻文が描かれている。101には体部に縦位の波状沈線が施文されている。102～105は楕円または逆U字状に沈線によって区画され内部に縄文が充填されている。103・104は楕円文が中央で連結され、H状になっている。106は浅鉢で口縁部に粘土が厚く貼られ、楕円及び渦巻状に掘り取られている。また、内部には漆状の物質が十字に塗られた痕跡がみられ、外部には朱が塗られていることから儀式等に用いられたものと推定される。107・108は粗製土器で107はRL縦回転の単節斜行縄文が、108には結束羽状縄文が施文されている。108は1号炉の埋設土器である。（2号炉の埋設土器は第21図に記載）



1. 7.5Y R5/6明褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性なし 少量の炭が混入する
3. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている 粘性なし 少量の炭が混入する
4. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 炭・焼土が混入する
5. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
6. 7.5Y R4/4褐色土 かたくしまっている やや粘性あり

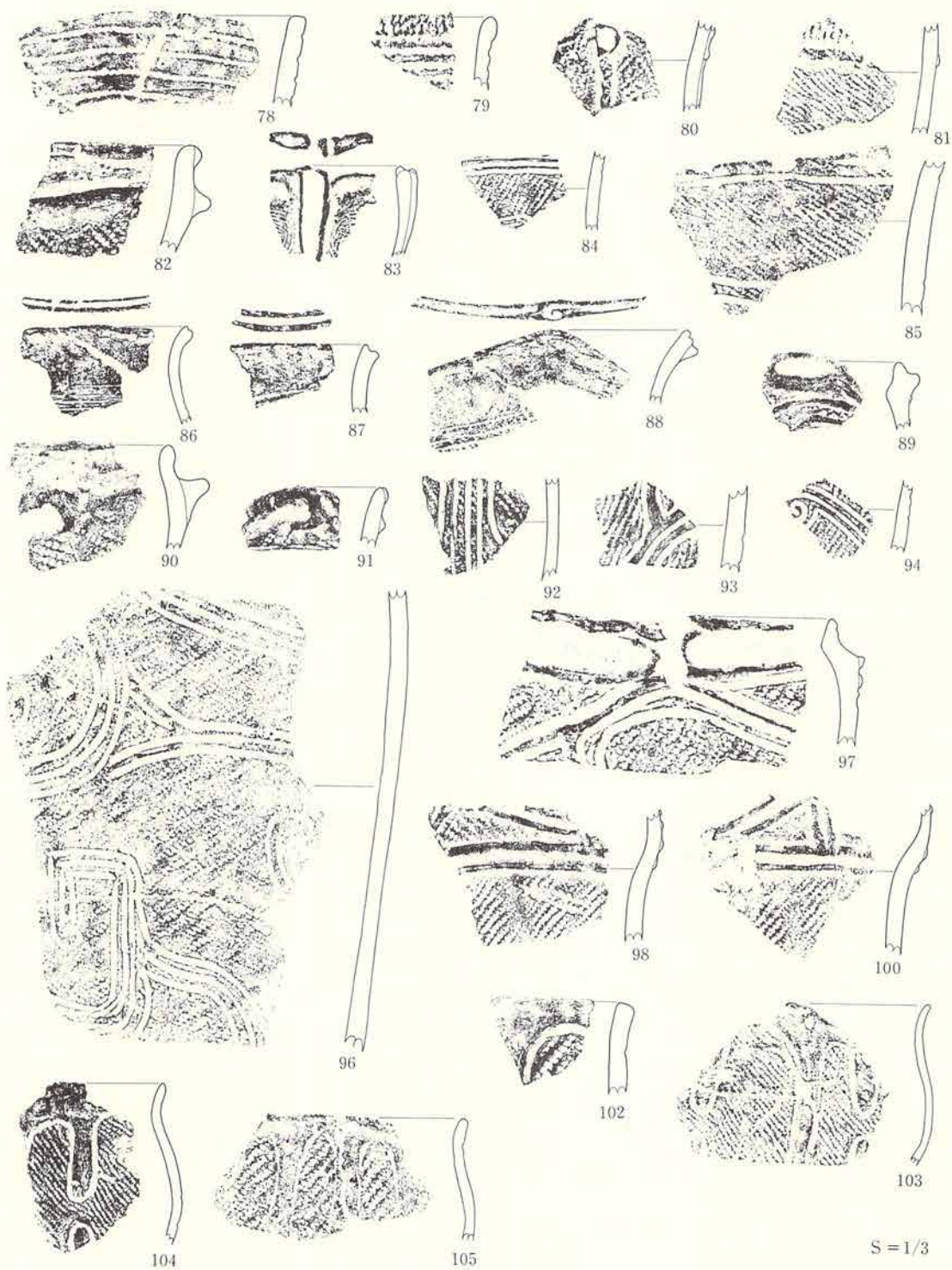


1. 2.5Y R4/8暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
2. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 7.5Y R2/2黒褐色土 しまっている 粘性なし 少量の炭・焼土を含む
4. 2.5Y R3/4暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし 炭が混入する

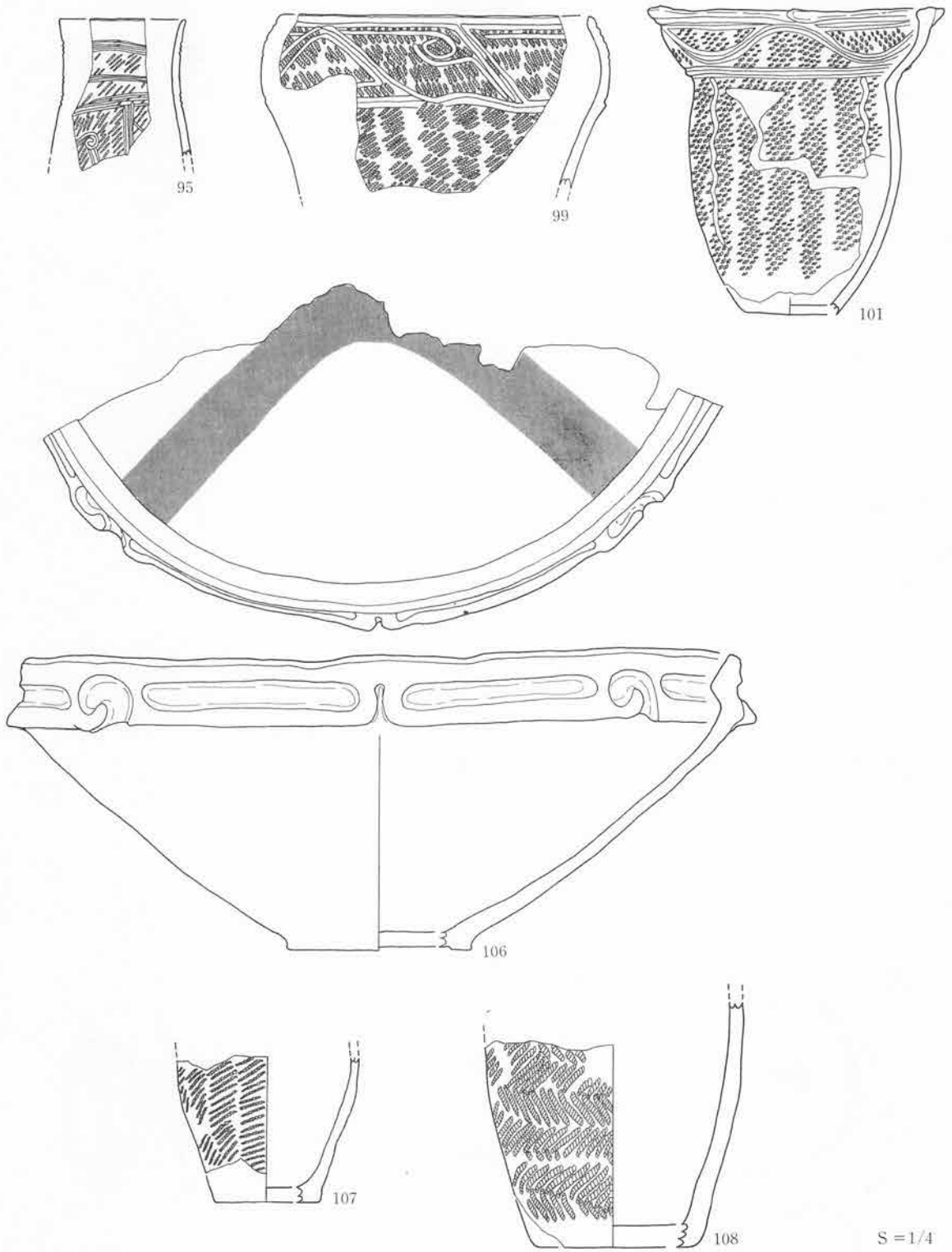


1. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている やや粘性あり 炭・焼土を含む
2. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり 焼土を含む
3. 5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 炭が混入する
4. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

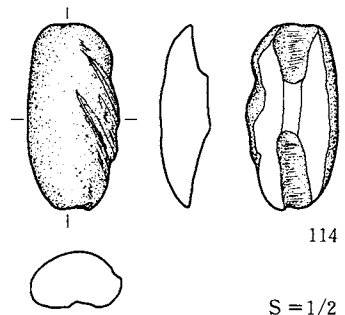
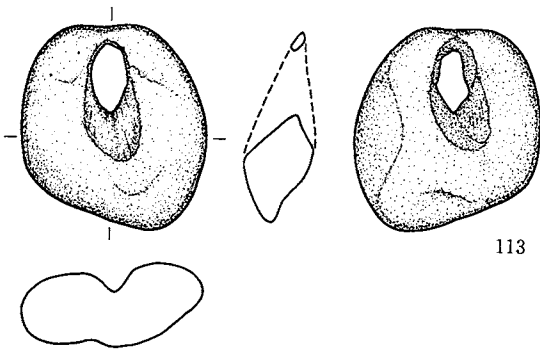
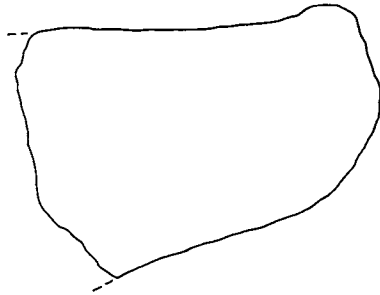
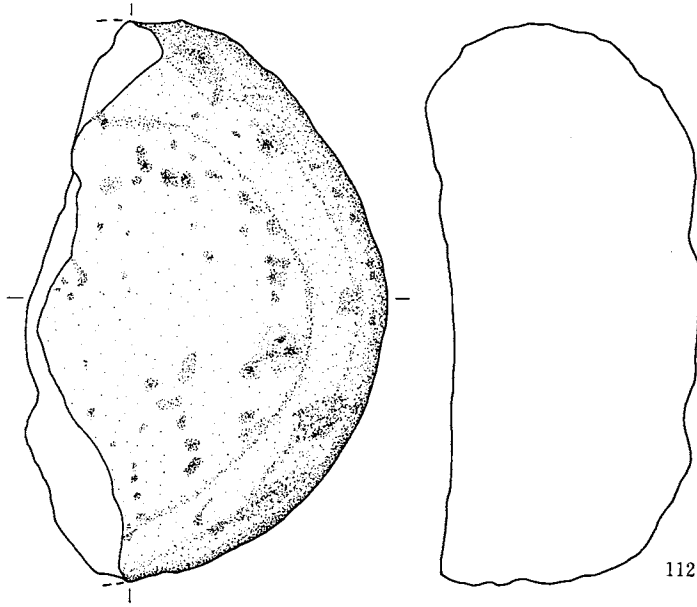
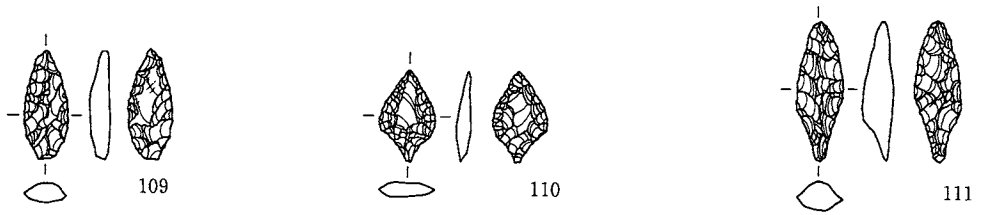
第23図 IIC7f住居跡



第24图 II C7f住居跡遺物(1)

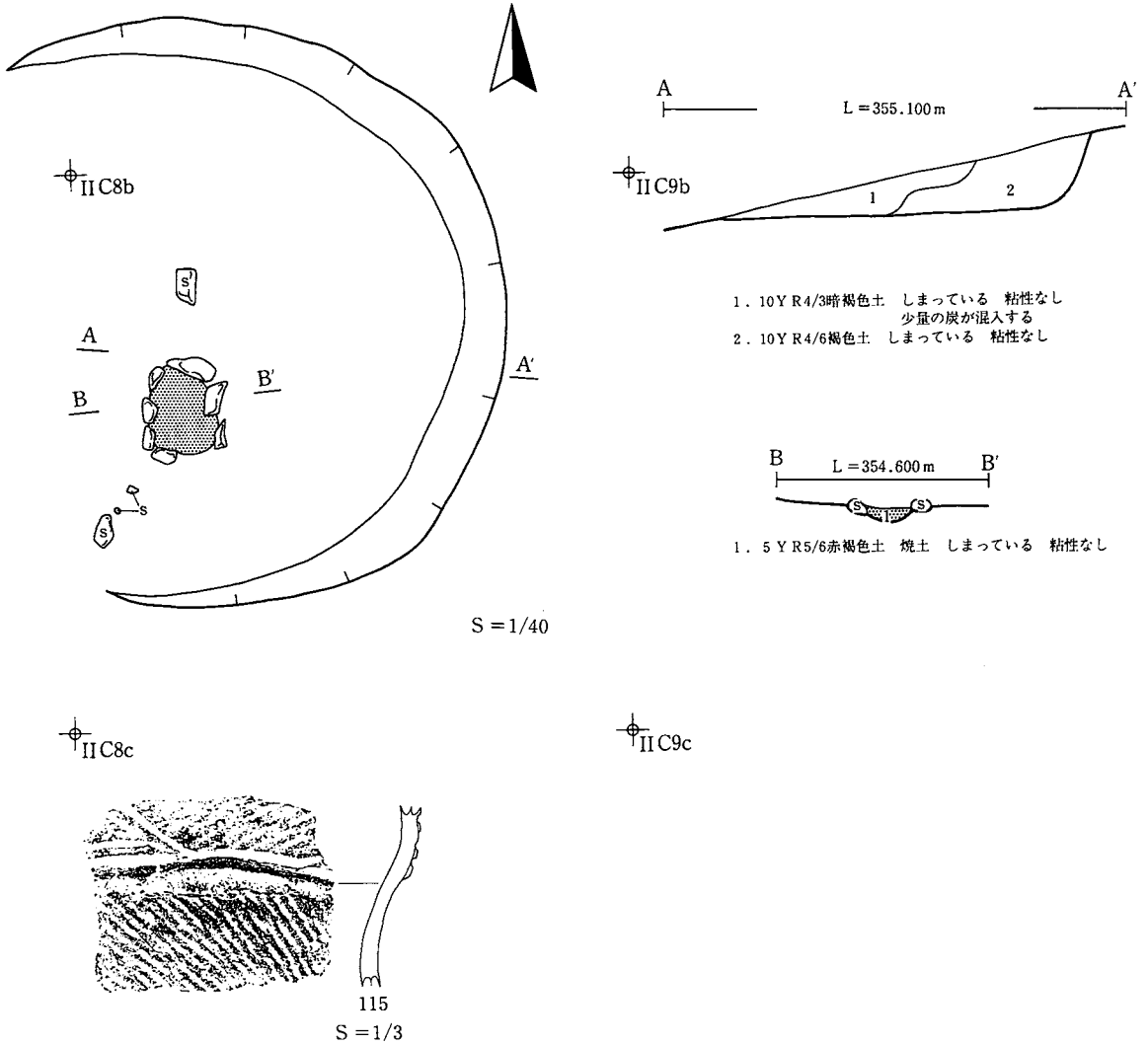


第25図 II C7f住居跡遺物(2)



S = 1/2

第26图 II C7f 住居跡遺物(3)



第27図 II C8a住居跡遺構・遺物

石器・石製品は6点が出土している。109～111は石鏃で、109は凸基有茎鏃、110・111は尖基鏃である。112は多孔質の両輝石安山岩（熔岩）の石皿である。約半分が欠損している。113は有孔石製品で、自然石の両側から孔が穿たれている。114は管状石製品の半製品と思われる。両側から管状に孔が穿たれているが管の中央部の径が非常に狭く、製作途中で破損したものと思われる。

出土遺物から本遺構は縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

II C 8 a 住居跡 (第 27 図、写真図版 13)

本遺構は、調査区西側斜面上方に位置している。本遺構の南西側には II C 7 c 住居跡、東側には II C 9 a 住居跡、北東側には II B 9 i 住居跡がある。検出はⅢ層上面における暗褐色土の広がりによる。本遺構も II C 7 c 住居跡と同様に斜面下方が流失しており、平面形の詳細は不明であるが、残存部分から円形と推定される。規模は径が 3.16 m を測る。壁はⅢ層中にあり、外傾して立ち上がる。壁高は残存する東壁で 41 cm を測る。

埋土は 2 層に分けられ、上位は微小な炭化材を少量混入する暗褐色シルト質土、下位は褐色のシルト質土でいずれもしまっている。残存する床面はほぼ平坦でしまっている。柱穴は検出されなかった。

炉は床面中央からやや南に寄った地点で石囲炉が検出された。炉の規模は長径が 58 cm、短径が 45 cm で楕円形を呈する。炉を構成する石は 14 ～ 26 cm で、南側の一部の礫が失われている。焼土はよく発達し、しまっている。

出土遺物 (第 27 図、写真図版 68)

115 は口縁部が強く内湾する器形の深鉢形の土器で、隆沈線によって口縁部に文様が描かれている。他に粗製土器が細片で少量出土している。

出土遺物及び遺構の形態から本遺構は縄文時代中期後葉の住居跡と推定される。

II C 8 d 住居跡 (第 28 図、写真図版 14)

本遺構は調査区西側の斜面上方に位置している。本遺構の南側は II C 7 e 住居跡と重複し、北側には II C 7 c 住居跡、東側には II C 9 d 住居跡が存在する。また、南壁に重複して II C 8 e 土坑が検出された。本住居跡は II C 8 e 土坑より構築時期が新しい。検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、規模は東西 3.9 m、南北 4.15 m を測る。

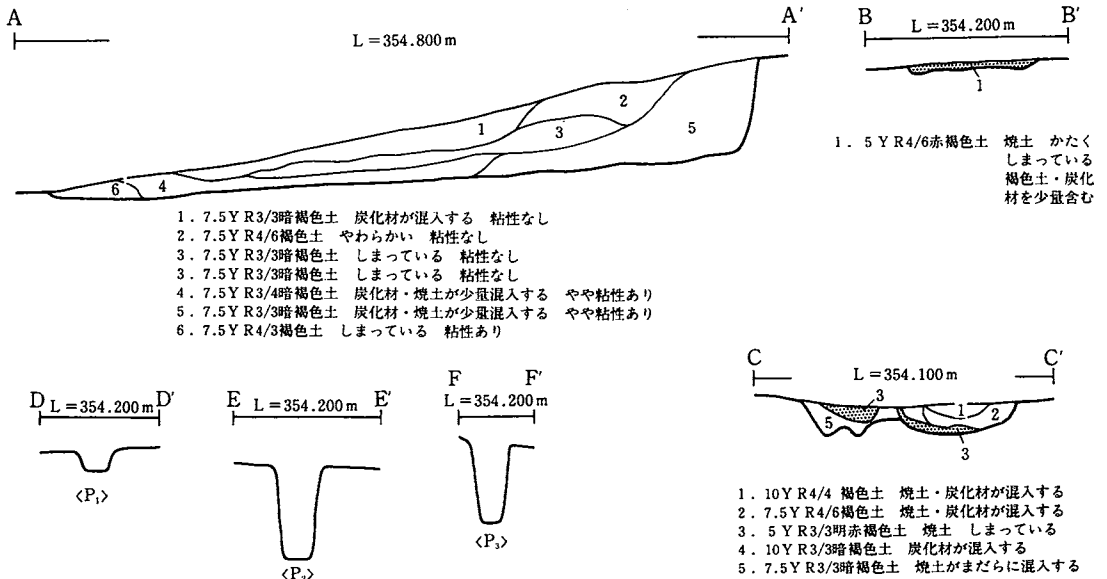
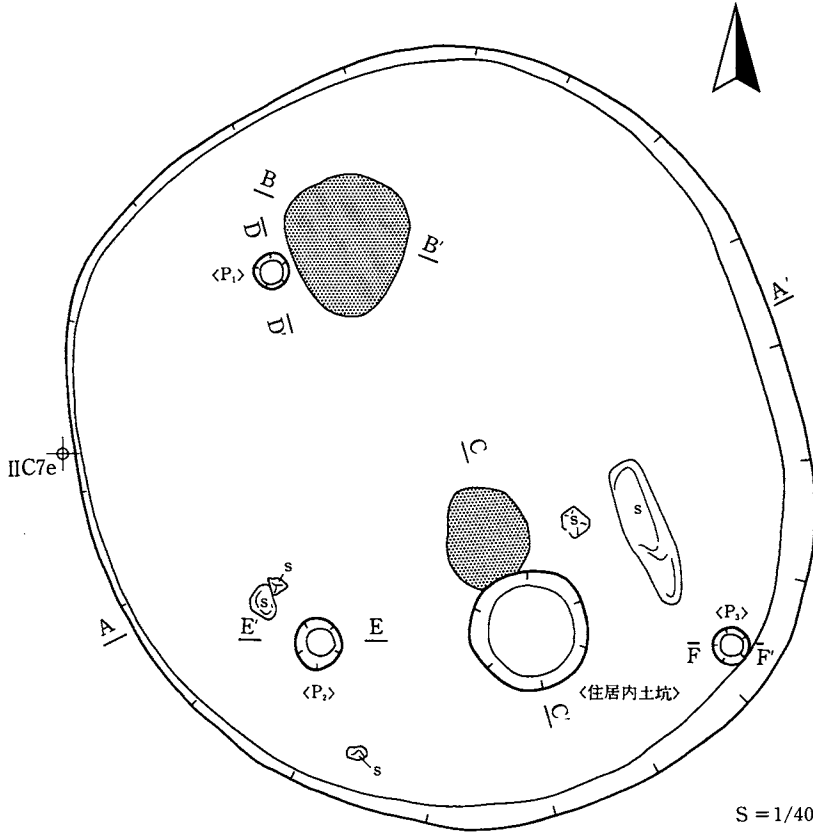
壁はⅢ層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁 50 cm、南壁 30 cm、西壁 5 cm、北壁 32 cm を測る。

埋土は 6 層に細分される。上位の一部に褐色土が混入するほかは暗褐色土が主体で、下位には微小な炭化材と焼土粒が含まれる。床面はⅢ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。また、床面の中央やや東寄りの地点に長さ 80 cm、幅 22 cm ほどの石がおかれているが、用途等は不明である。

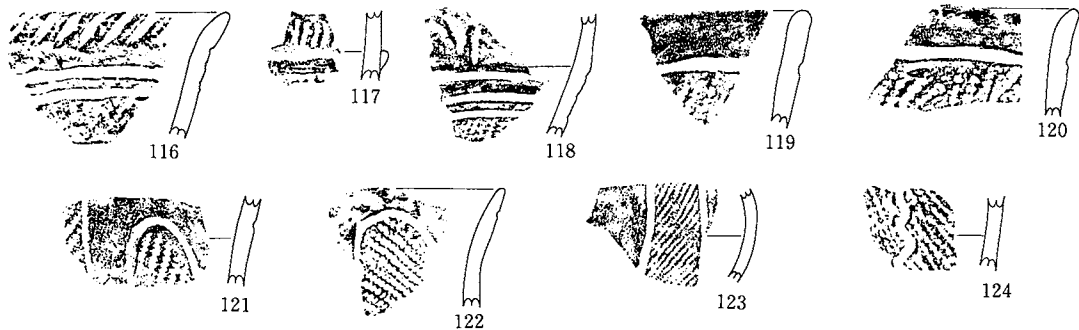
柱穴は P₁～P₃ が検出された。柱穴の掘り方は円形で、規模は径 20 ～ 27 cm、深さは 15 ～ 63 cm を測る。柱痕の径は不詳である。床面中央南寄りでは住居内土坑が検出された。平面形は円形で、規模は開口部径が 64 × 63

No.	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	20 × 19	27 × 25	20 × 20
深さ cm	15	53	63

された。平面形は円形で、規模は開口部径が 64 × 63



第28図 II C8d 住居跡



S = 1/3

第29図 II C 8 d 住居跡遺物

cm、底部径が 47 × 46 cm、深さ 17 cm を測る。埋土下位に焼土が存在し、炉跡に隣接することから炉の付属施設の可能性もある。

炉は床面中央やや南寄りで地床炉が検出された。焼土はよく発達しており、周囲の褐色土には焼土粒と炭化材が混入している。また、床面中央からやや北に寄った地点で焼土が検出されているが、褐色土がまだらに混入し、焼土も薄いことから炉の可能性は低い。

出土遺物（第 29 図、写真図版 68）

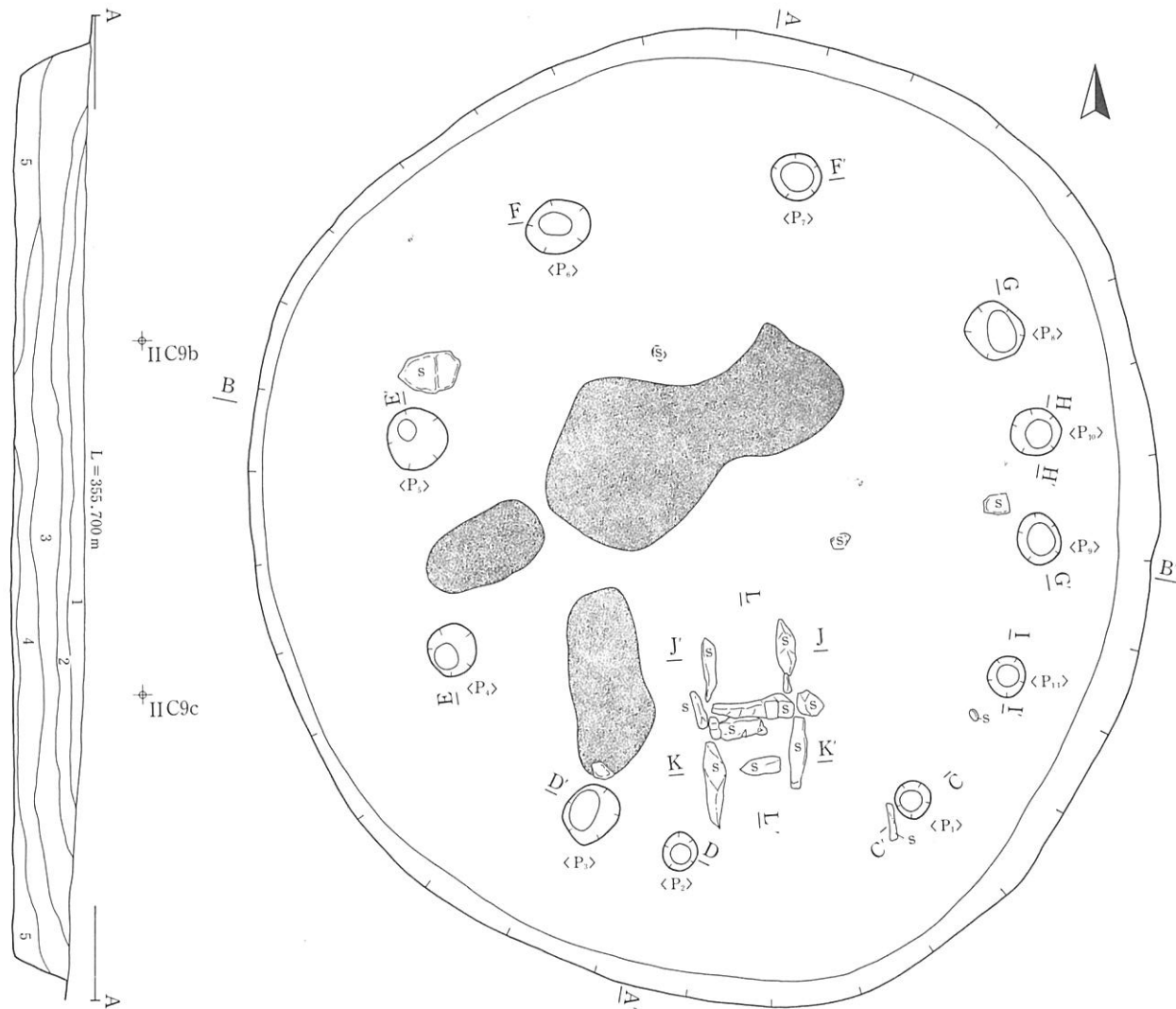
116 は平縁の深鉢の口縁部破片で、口唇部に刻目がつけられている。117 は体部破片で、横位に粘土紐を貼り付けて区画し、区画の上部に刻目をもつ。118 は口縁部が内湾する器形の土器で、口縁部と体部が 3 本の沈線によって区画され、上位には隆帯により文様がつけられている。119・120 は共に口縁部に沈線によって区画された無文帯をもつ土器である。121～123 は沈線によって楕円文や逆 U 字文、あるいはアルファベット文が描かれ、その内部に縄文が充填される土器である。124 は L R 縦回転の単節斜行縄文の地文の上に縦位の波状沈線が施文されている。

出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

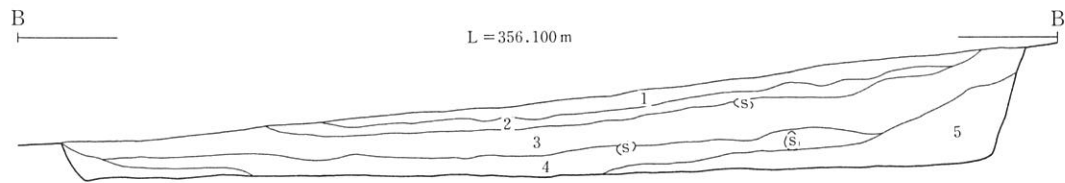
II C 9 a 住居跡（第 30 図、写真図版 15）

本遺構は調査区西側斜面上方のやや平坦となる地点に位置している。本遺構の北側には II B 9 i 住居跡、西側には II C 8 a 住居跡、南側には III C 1 d 住居跡、東側には III C 2 a 住居跡が存在する。また、南東側にある III C 1 b 住居跡とは重複関係にある。検出は表土除去後の III 層上面における黒褐色土の広がりによる。平面形は円形を呈し、規模は東西 7.71 m、南北 8.31 m と他の住居跡に比べて大型である。壁はすべて III 層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁 89 cm、西壁 29 cm、南壁 47 cm、北壁 57 cm を測る。

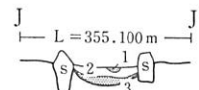
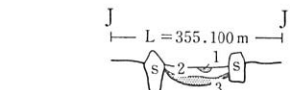
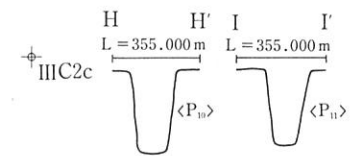
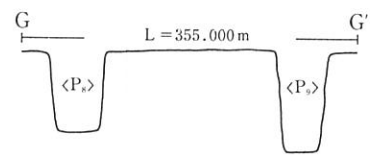
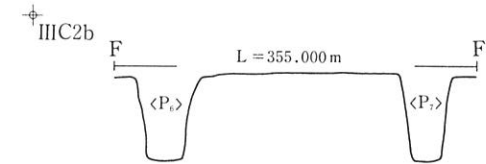
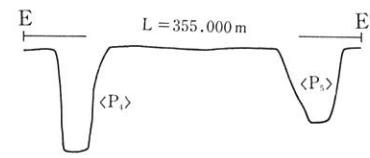
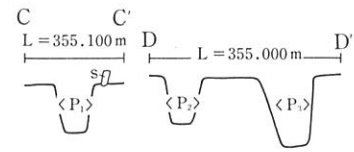
埋土は 5 層に細分される。上位は黒褐色土と褐色土で火山灰が混入する。中位はシルト質の



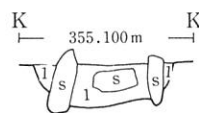
S = 1/60



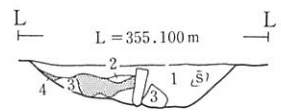
1. 7.5 Y R2/2 黒褐色土 やわらかい 火山灰が混入する 粘性なし
2. 10 Y R4/4 褐色土 やわらかい 火山灰が混入する 粘性なし
3. 7.5 Y R3/3 暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 褐色土がまだらに混入する
4. 7.5 Y R2/3 極暗褐色土 しまっている 微小な炭と焼土が混じる 褐色土が混入する
5. 10 Y R4/4 褐色土 かたくしまっている 粘性あり



1. 10 Y R4/4 褐色土 しまっている 5 Y R4/8 焼土との混合土 粘性なし
2. 10 Y R4/4 褐色土 しまっている 焼土を少量含む やや粘性あり
3. 5 Y R4/8 赤褐色土 焼土 かなかしまっている やや粘性あり



1. 10 Y R4/6 褐色土 かなかしまっている 少量の微小な炭が混入する やや粘性あり



1. 10 Y R4/4 褐色土 やわらかい 粘性あり 炭が混入する
2. 5 Y R4/8 赤褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり
3. 10 Y R4/6 褐色土 かなかしまっている 粘性あり
4. 5 Y R4/8 赤褐色土 焼土 かなかしまっている やや粘性あり

第30図 II C9a 住居跡

暗褐色土に褐色土がまだらに混入し、微小な炭化材を含む。下位はシルト質の極暗褐色土で微小な炭化材・焼土粒と褐色土を少量含む。壁際から下位にかけては壁の崩落土と思われる粘土質の褐色土が存在する。床面はⅢ層中に形成され、平坦でしまっている。床面中央部付近に3カ所、炭化材と少量の焼土粒の散布がみられる。柱穴はP₁～P₁₁が検出された。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は33～56 cm、深さは38～83 cmを測る。柱痕の径は不祥である。

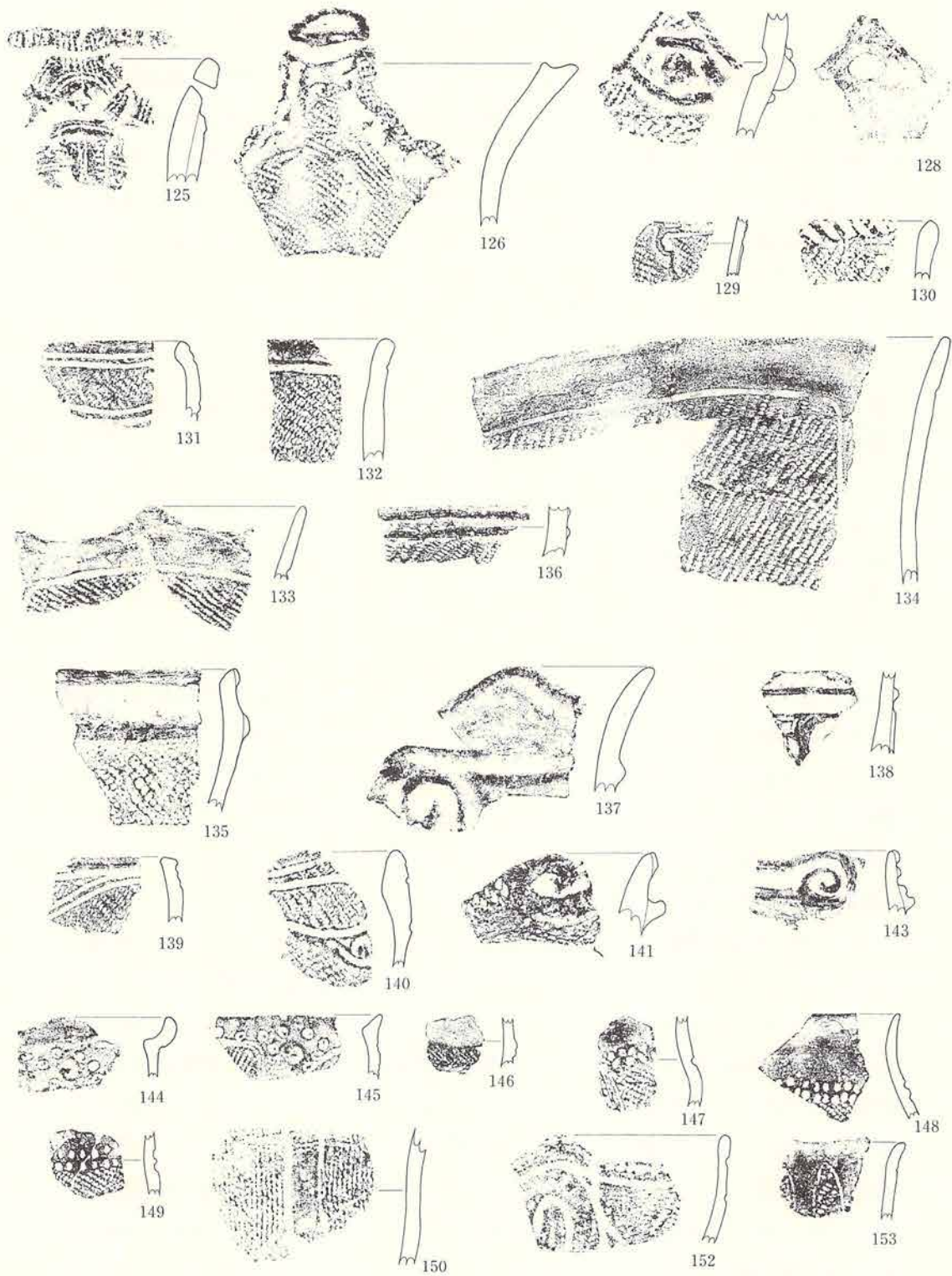
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	33 × 31	33 × 30	52 × 50	45 × 43	53 × 52	56 × 46	43 × 40	51 × 50	44 × 37
深さ cm	38	38	57	83	61	68	68	64	80

No.	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	44 × 41	35 × 32
深さ cm	67	60

炉は床面中央から南に寄った地点で複式炉が検出された。平面形は50～70 cmほどの比較的大きな石をH型に組んだもので、規模は1.63 × 1.1 mと大型である。北側は8 cm程掘り込まれ、その下に中央部付近で8 cm程焼土が発達している。焼土の発達をよく、かたくしまっている。焼土の上面には焼土粒を含む褐色土がのる。南側には焼土がまったくみられず、少量の微小な炭化材を含む褐色土のなかに37 × 12 cmの石が埋め込まれていた。

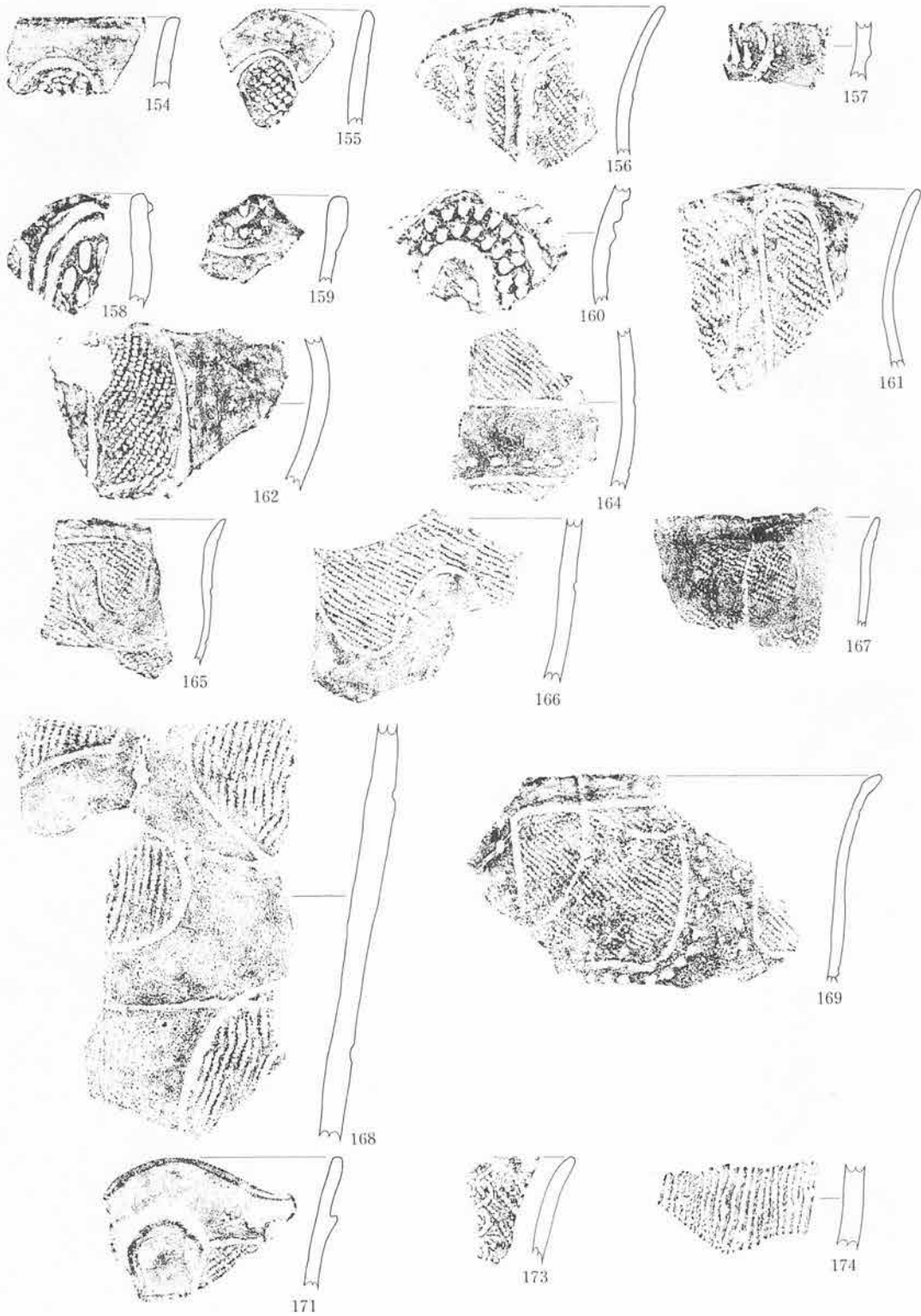
出土遺物（第31～36図、写真図版68～72）

125～129は粘土紐を貼り付けて文様を施している土器である。125は突起部分に孔を穿ち、Y字状に粘土紐を貼り付け、原体を押圧している。126・127は突起部分及び口唇部に粘土紐を不規則に貼り付け、原体を圧痕している。127は突起にコブ状の粘土がつけられている。28もコブ状の粘土を貼り付けているが、コブの裏面に窪みをもつ。129は粘土紐を縦位に波状に貼り付けている。130は口唇部に刻目をもつ。131～134は沈線によって区画され口縁部が無文帯となる土器である。136は地文の上に横位に粘土紐が貼り付けられている。135・137・138は幅の広い隆帯によって文様が施されている。137は波状の口縁で渦巻状の文様が施されている。139・140は地文上に沈曲線により文様が施されている。141・143は口縁部に渦巻文をもち、突起状になる。144～149は刺突を伴う土器である。144・145は管状の器具によって、146～149は棒状の器具によって刺突が付けられている。150は沈線によって縦位に区画され、区画内には燃糸文が充填されている。151は縦位の沈線間が磨り消される。152～162は沈線に



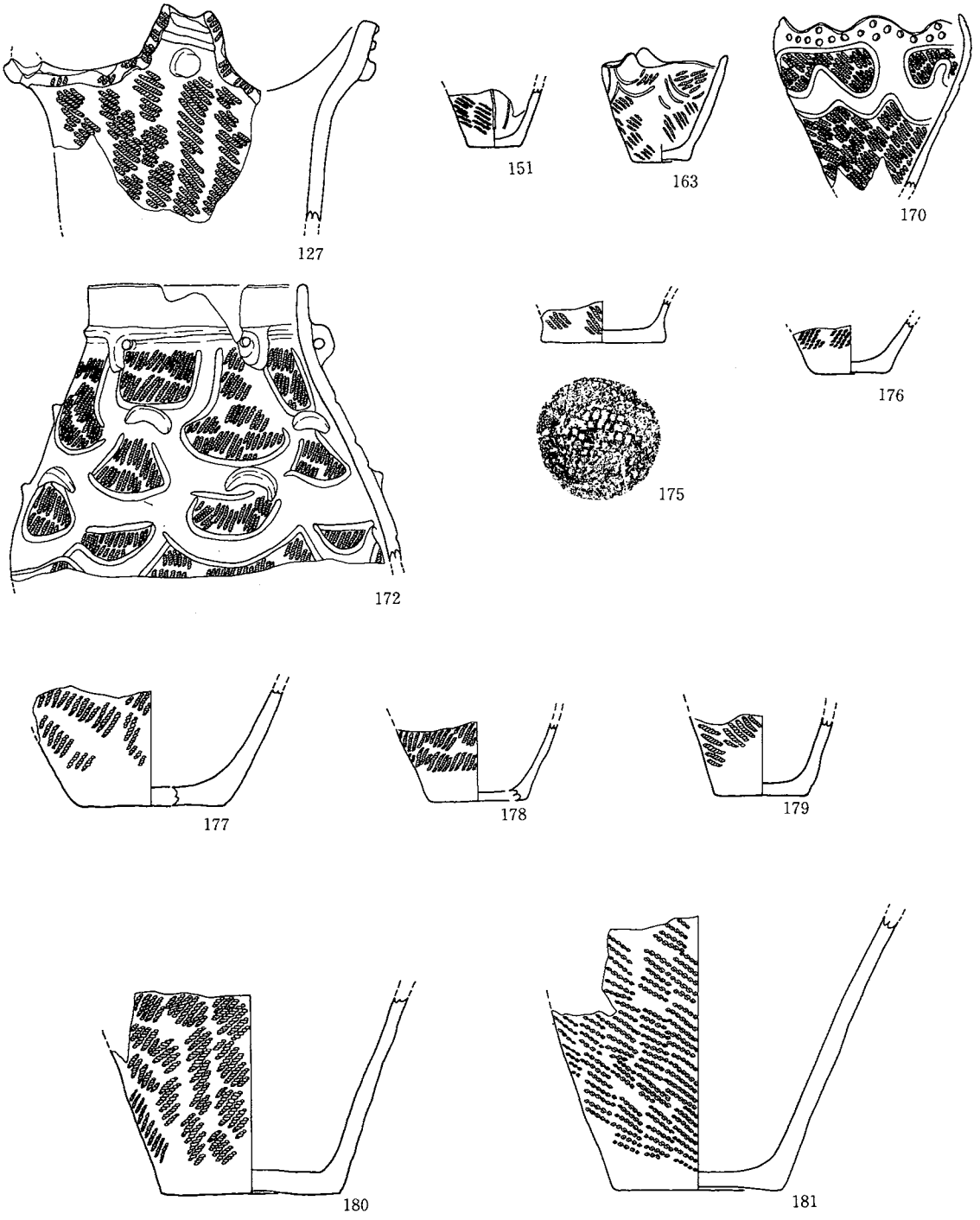
第31図 II C9a住居跡遺物(1)

S = 1/3



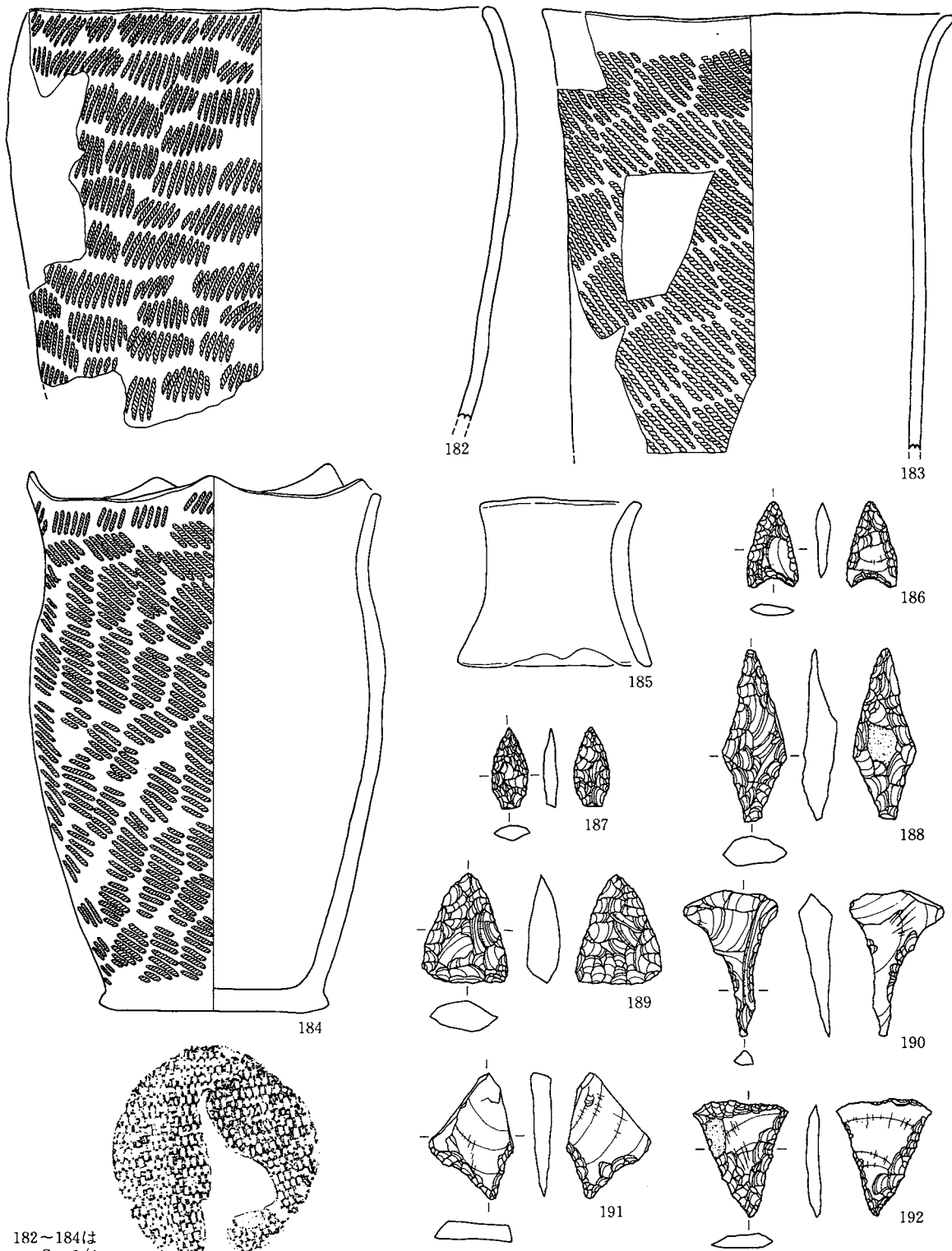
第32图 II C9a 住居跡遺物(2)

S = 1/3

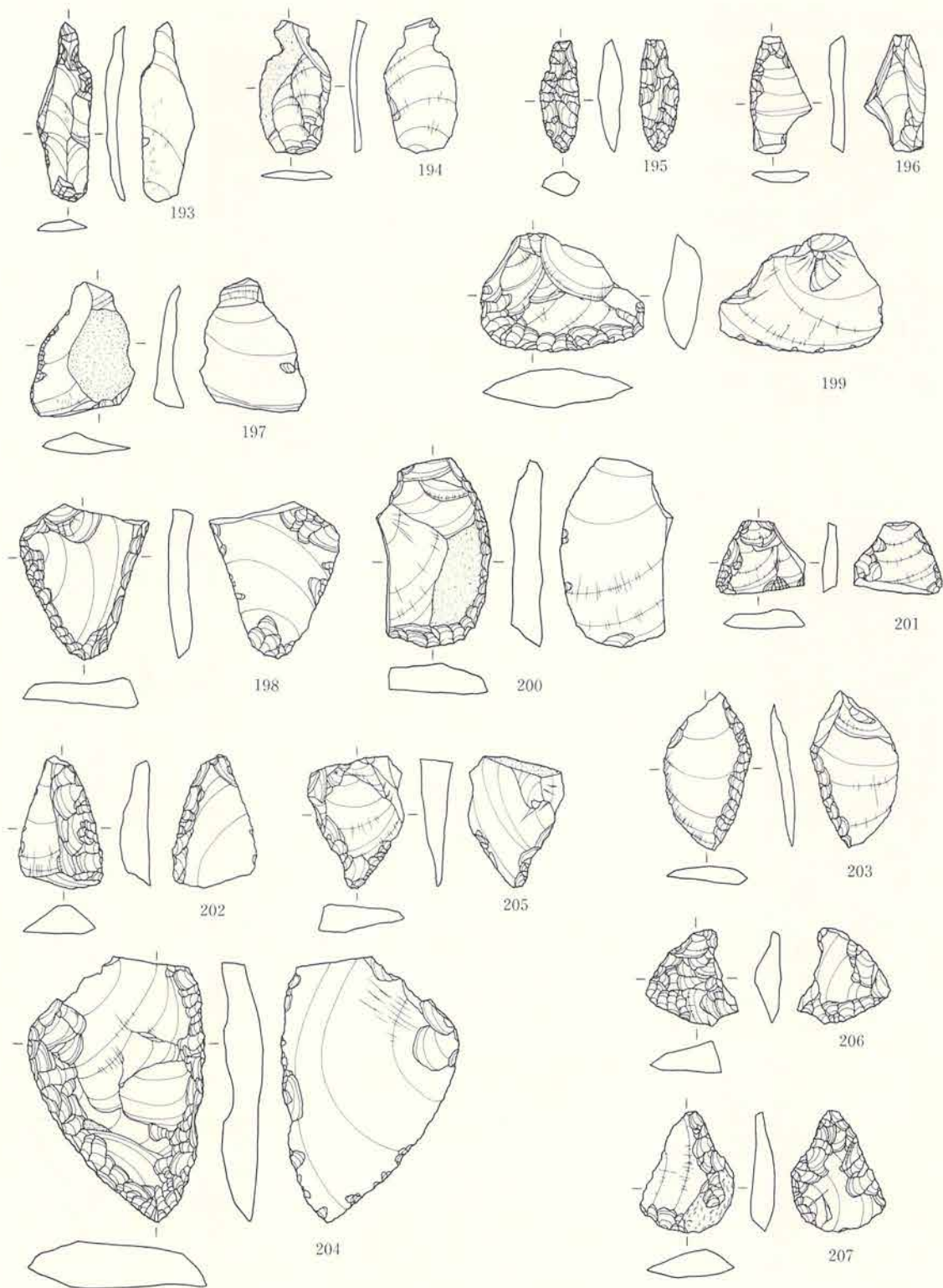


第33图 II C9a 住居跡遺物(3)

S=1/4

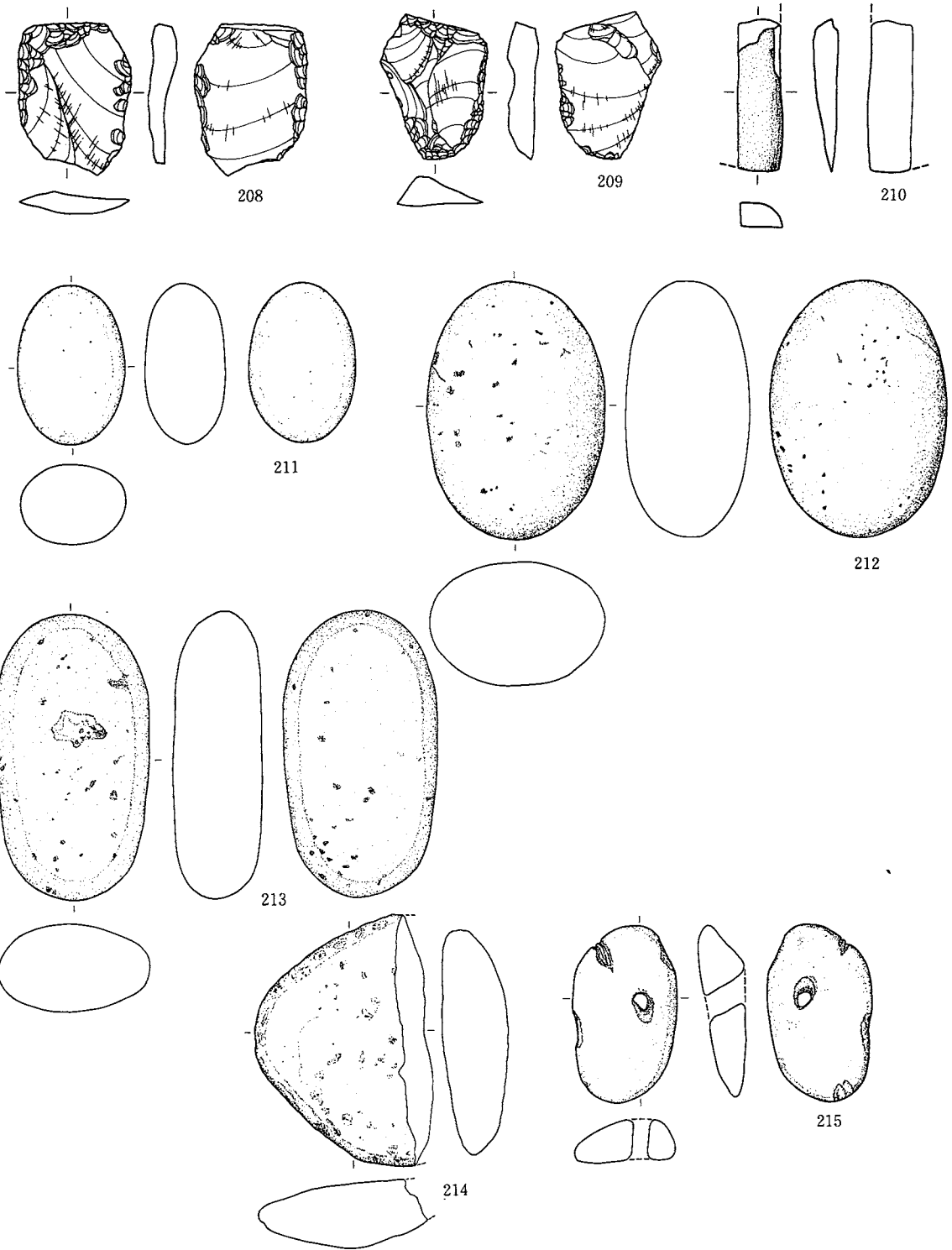


第34図 II C9a 住居跡遺物(4)



第35图 II C9a住居跡遺物(5)

S=1/2



208~210は S = 1/2
 211~213, 215は S = 1/3
 214は S = 1/6

第36図 II C9a 住居跡遺物(6)

よって楕円あるいは逆U字状に区画される文様をもつ土器である。157～160は刺突を伴う。163～166は沈線区画の充填縄文帯がアルファベット文状に展開する土器である。167～172は無文の沈線区画帯が文様を展開するものである。171・172は部分的に鱗状の突起を有する。173は綾絡文が、174は撚糸文がそれぞれ施文されている。175～184は粗製の深鉢形土器で、175・184は底部に網代痕をもつ。181はLRL縦回転の複節斜行縄文が施されている。

土製品は1点出土している。185は環状土製品で、長さは5.5cm、径が6.2cm程である。

石器は29点が出土した。186・187は石鏃で、186は凹基無茎鏃、187は凸基有茎鏃である。石質はいずれも硬質泥岩である。188・189は尖頭器で、188は槍先形、189は木葉形を呈する。190～192は石錐で、191・192は身部の作り出しが明確でない。193・195は縦型の石匙である。193・194は両側辺と末端の3辺に刃部を有し、195は末端が尖り、両側辺に刃部を有する。196～209は不定形石器である。210は磨製石斧で、破損しており残存長は4.8cm程である。211～213は磨石である。213は片面中央に窪みがあり、凹石としての利用も考えられる。214は石皿で半分が欠損している。磨り面はほぼ平坦である。

石製品は1点が出土している。215は有孔石製品で、自然石にやや斜めに孔が穿たれている。用途は不明である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

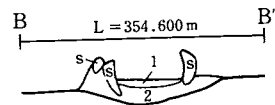
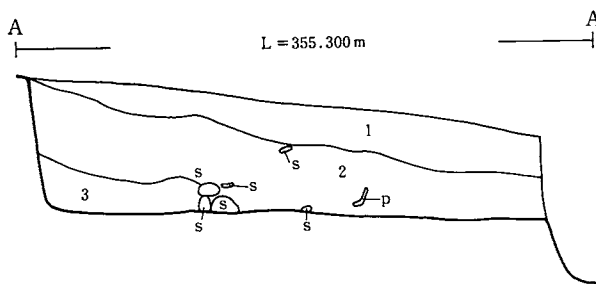
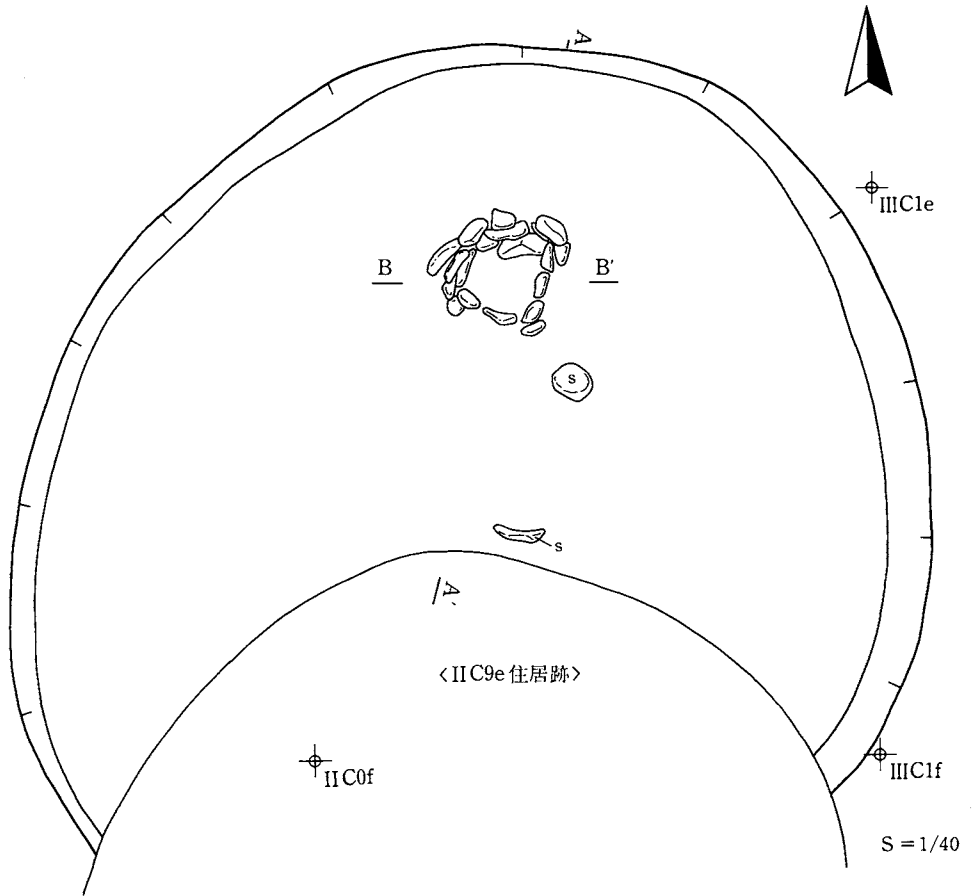
II C 9 d 住居跡（第37図、写真図版16）

本遺構は調査区西側斜面上方のやや平坦になる地点に位置している。本住居跡の南側はII C 9 e 住居跡と重複し、東側にはIII C 1 d 住居跡が、北側にはII C 9 a 住居跡が、西側にはII C 8 d 住居跡が存在する。本住居跡とII C 9 e 住居跡ではII C 9 e 住居跡の方が新しい。本住居跡の検出はII C 9 e 住居跡の北壁に検出された微小な炭化材まじりの暗褐色土層による。平面形は南側が重複しているため詳細は不明であるが、残存部分から円形と推定される。規模は東西が4.8mを測る。壁はほとんどがIII層中であるが、北壁の一部にIV層が見られ、ほぼ直に立ち上がる。壁高は北壁が68cm、西壁が42cm、東壁が65cmを測る。

埋土は3層に分けられ、上位は褐色のシルト質土、中位はごく少量の微小な炭化材と焼土粒を含む暗褐色シルト質土、北壁に沿って微小な炭化材と焼土粒を含む黄褐色土がみられる。床面はIII層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。柱穴は検出されなかった。

炉は床面中央から北に寄った地点で石組炉が検出された。長さ12～25cm程の円礫を径55cm程に円形に組み合わせている。炉の底部には黄褐色の粘土質土があり、石はその上に配置されている。炉内には発達した焼土は見られず、少量の焼土と炭化材が混入する程度である。

出土遺物（第38・39図、写真図版72・73）



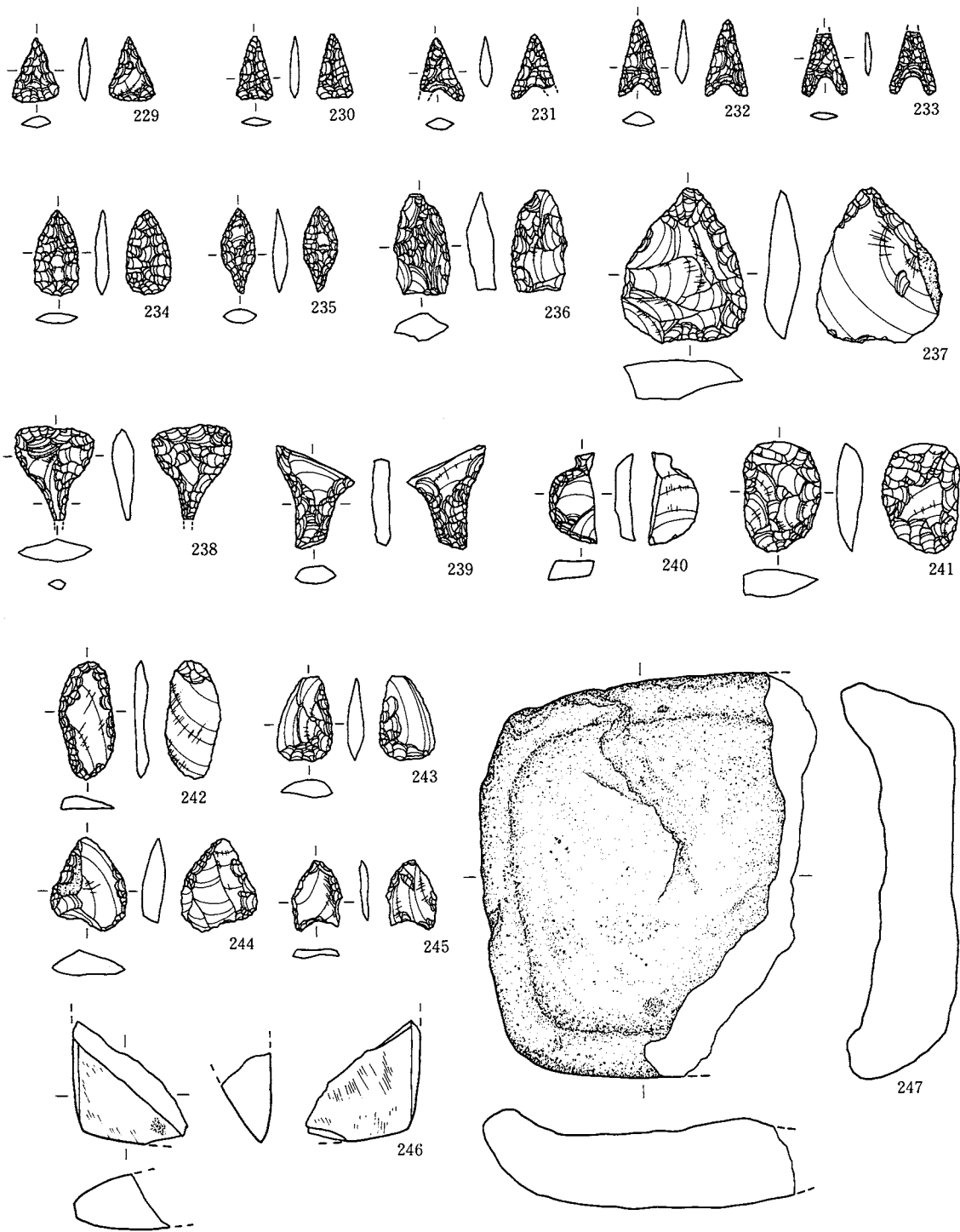
1. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている 少量の炭化材と焼土を含む
2. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 少量の炭化材と焼土を含む

1. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性なし 草根が混入する
2. 10Y R3/5暗褐色土 やわらかい 微粒の炭化材・焼土をごく少量含む
3. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 微粒の炭化材・焼土をごく少量含む

第37図 IIC9d 住居跡



第38図 II C9d 住居跡遺物(1)



229~246は S=1/2
247は S=1/4

第39図 II C9d 住居跡遺物(2)

216 は沈線によって山形の文様が描かれている。口唇部には棒状工具による刺突が付けられている。217 は横位に粘土紐が貼け付られる。218 は波状口縁をもつ土器で、隆帯によって区画され、縄文が充填されている。219～222 は逆U字文や楕円文が施された土器で、219 は地文の上に逆U字文が沈線で描かれている。220 は沈線と隆帯によって区画され、内部に縄文が充填されている。221 は沈線によって区画され、縄文が充填される。222 は区画内が磨り消されている。223 は横位の沈線によって区画され、上位は無文帯となっている。224 は壺形の土器で幅の広い橋状の把手をもつ。225 は地文上に粘土紐が波状に貼り付けられている。226・227 は粗製の土器で、226 はR L R縦回転の複節斜行縄文、227 はR L縦回転の単節斜行縄文が施されている。228 は円盤状土製品で、粗製土器の体部を利用したものである。

石器は19点出土している。229 は平基無茎鏃、230～233 は凹基有茎鏃、234 は円基鏃、235 は尖基鏃である。236・237 はともに尖頭器である。238・239 は石錐で、両方とも身部が途中から欠損しているが、身部は明瞭に作り出されている。240 は縦形の石匙で一側辺にのみ刃部を有する。241～245 は不定形石器である。245 は縁辺の一部に抉入の刃部をもつ。246 は磨製石斧の刃部破片である。247 は石皿で、半分程が欠損している。表面は磨られて凹状になっている。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と考えられる。

II C 9 e 住居跡 (第40図、写真図版17)

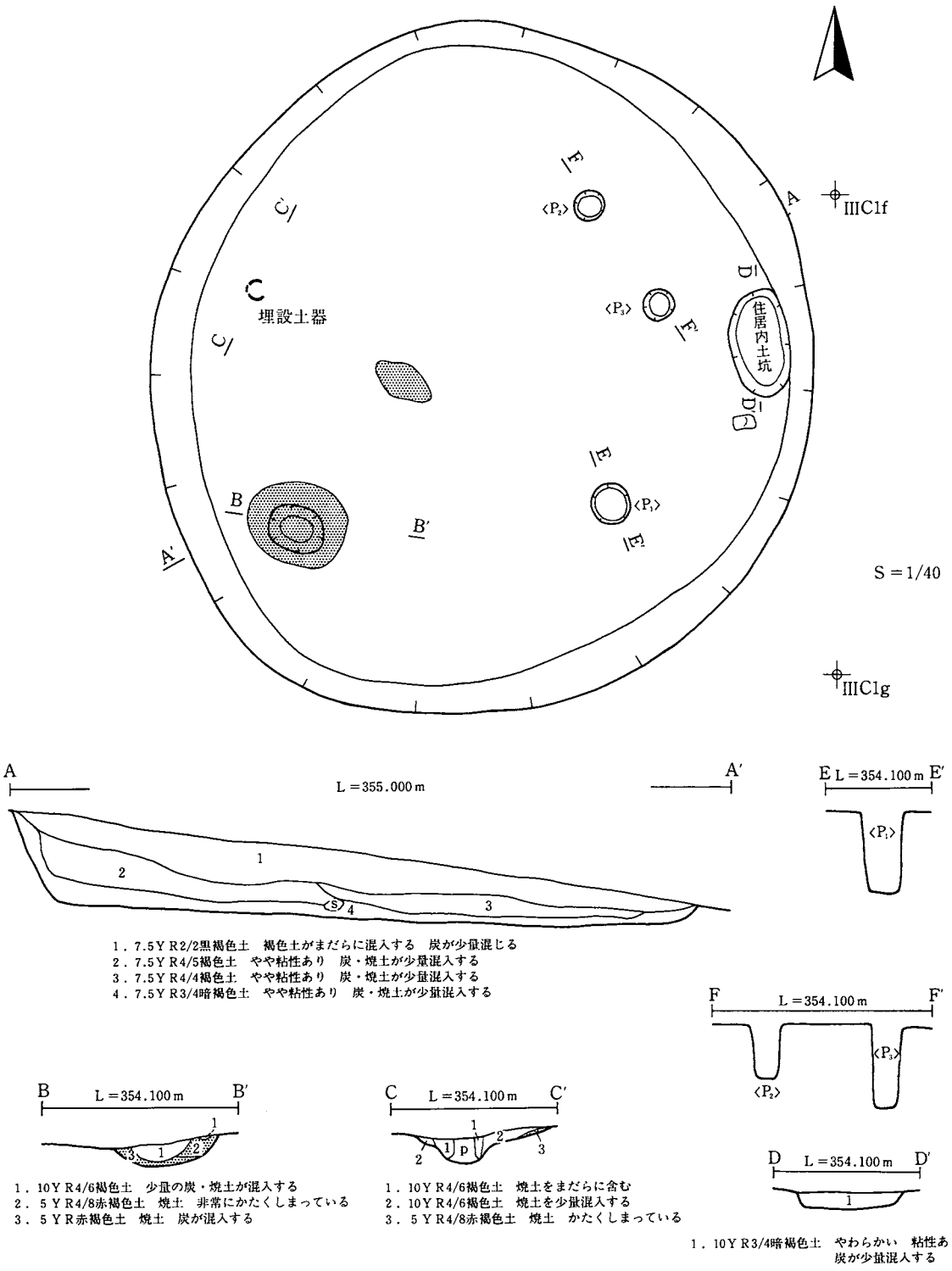
本遺構は調査区西側斜面上方のやや平坦になる地点の南側に位置している。本住居跡の西側にはII C 7 f 住居跡、東側にはIII C 2 e 住居跡があり、北側はII C 9 d 住居跡と重複している。本住居跡はII C 9 d 住居跡より新しい。検出はIII層上面における黒褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形を呈する。

規模は東西4.13 m、南北4.34 mを測る。壁はIII層中に形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が56 cm、西壁14 cm、南壁35 cm、北壁は46 cmである。

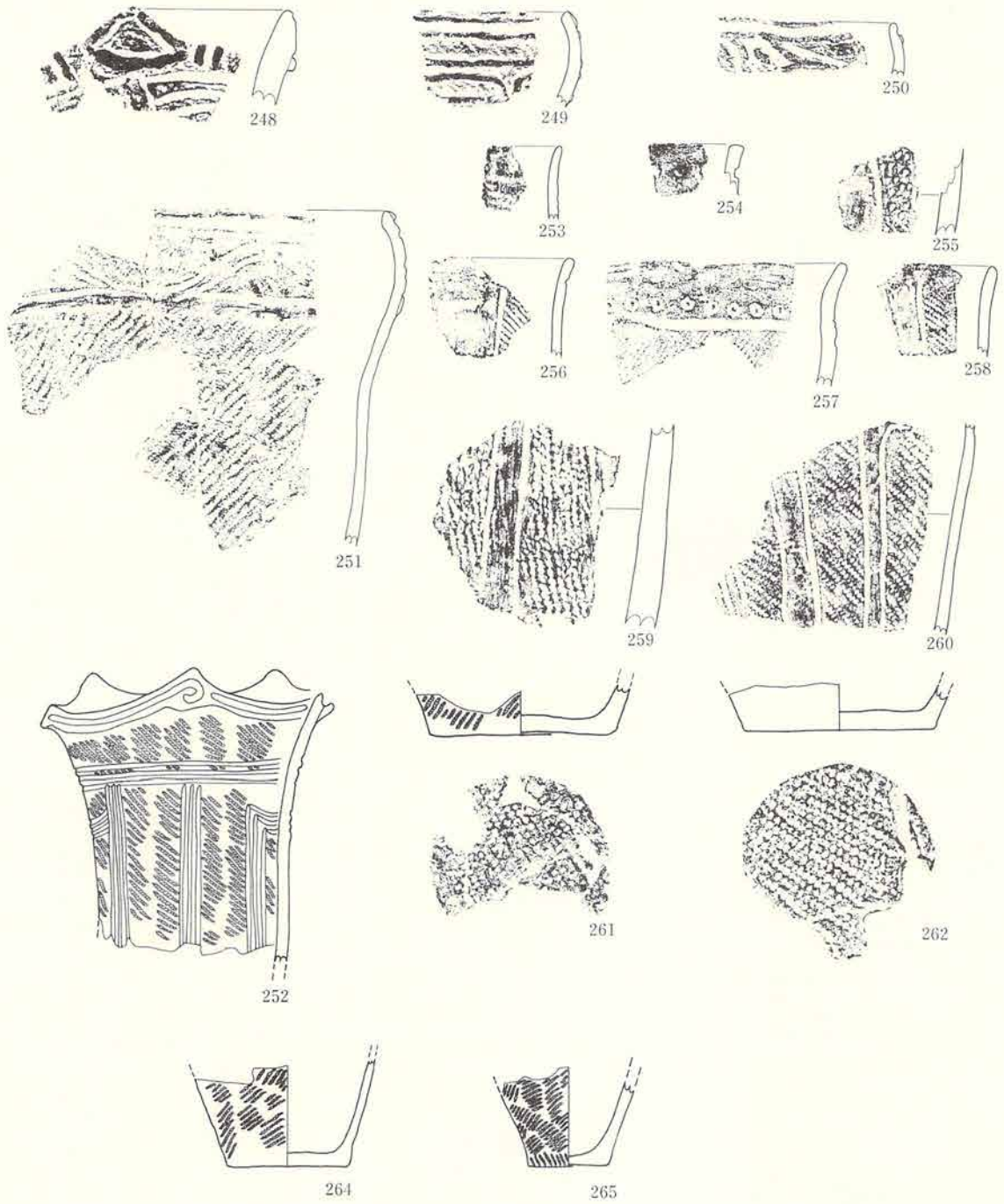
埋土は4層に細分され、上位は黒褐色のシルト質土で褐色土がまだらに混入する。中位は褐色のシルト質土で少量の微小な炭化材と焼土粒が含まれている。埋土下位は暗褐色のシルト質土で中位と同様に少量の微小な炭化材と焼土粒が混入する。床面はIII層中に形成され、平坦でしまっている。

柱穴はP₁～P₃を検出した。掘り方は円形で、規模は径20～26 cm、深さ33～50 cmを測る。柱痕の径は不明である。また、東壁に接して土坑が検出された。平面形は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は開口部径が67×36 cm、底部径55×26 cm、深さ11 cmを測る。

No.	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	20×18	20×20	26×25
深さ cm	33	50	50

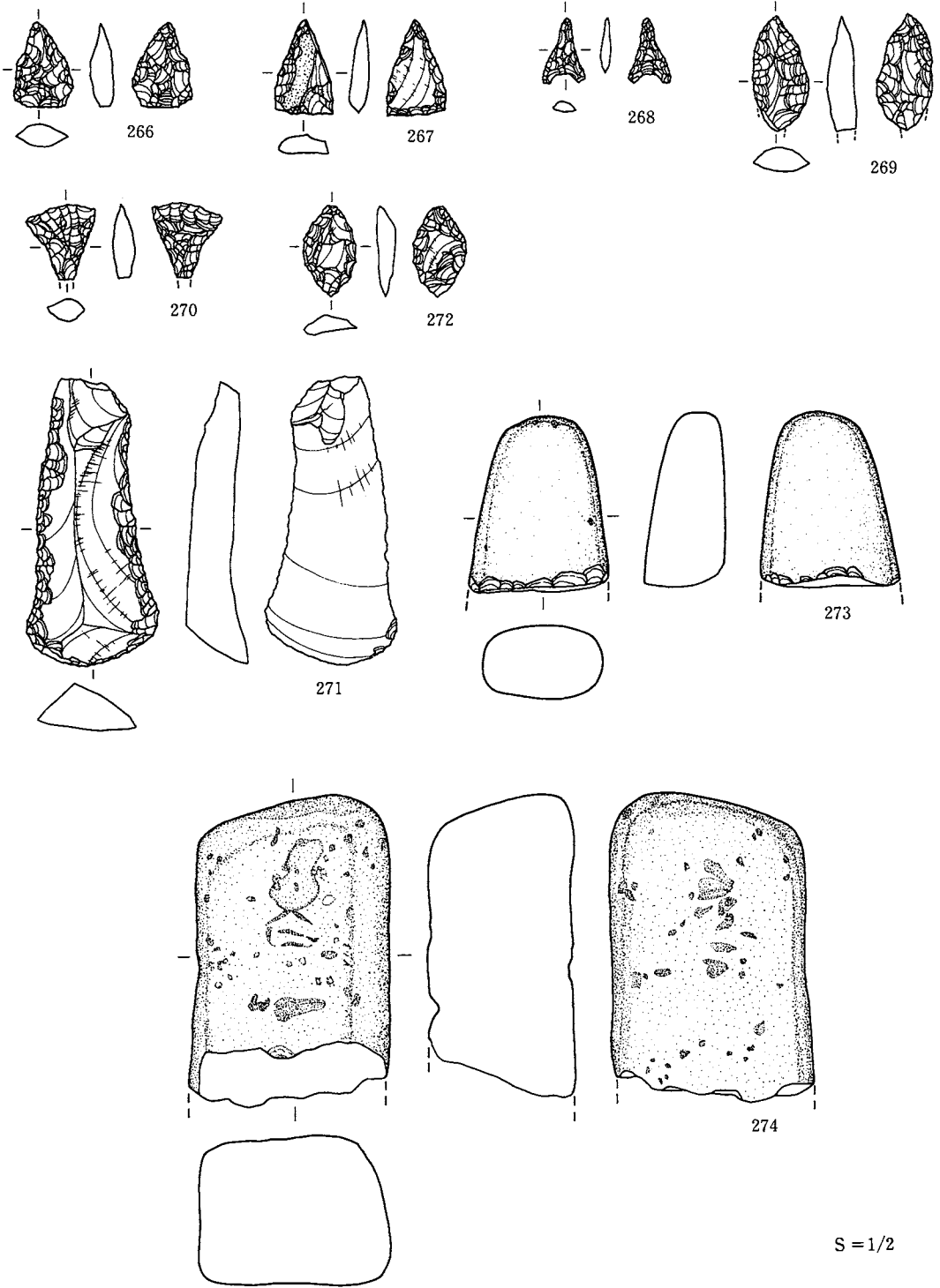


第40図 II C9e 住居跡



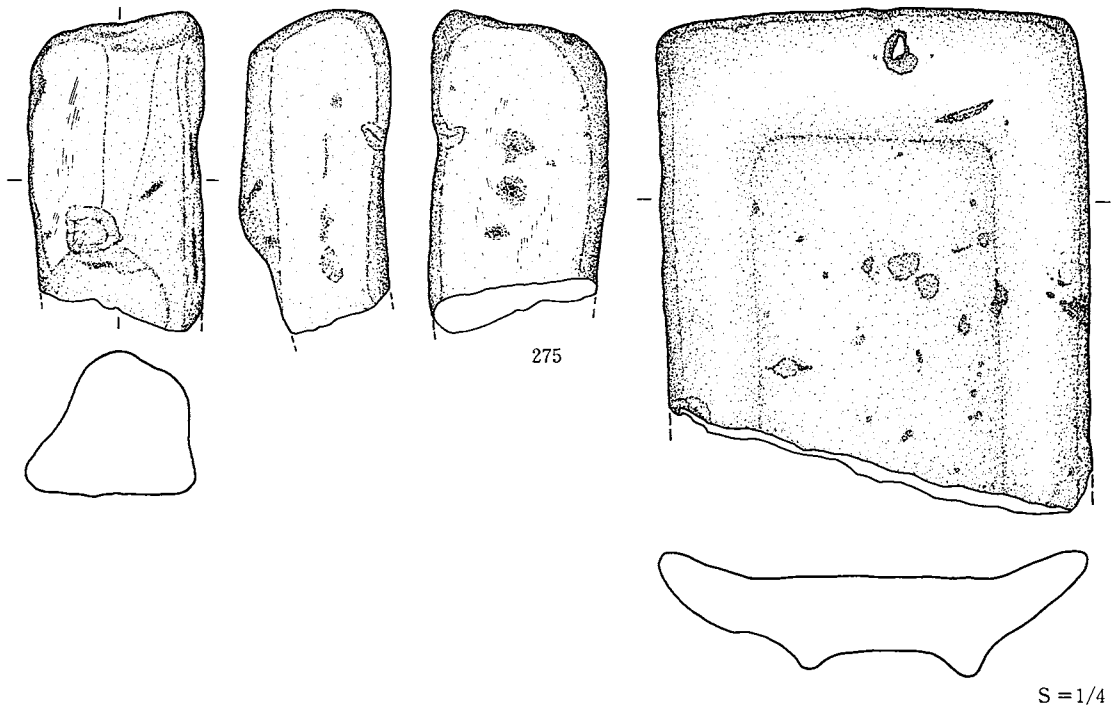
248~260は S = 1/3
 252・261~265は S = 1/4
 263は欠番

第41図 II C9e 住居跡遺物(1)



S = 1/2

第42图 II C9e 住居跡遺物(2)



第43図 II C9e 住居跡遺物(3)

埋土は暗褐色シルト質土で微小な炭化材が混入する。炉は床面中央から南西に寄った地点で地床炉が検出された。炉は床面を12 cm程楕円形に掘り込んで作られており、その周りに4～17 cmにわたって焼土が発達している。掘り込みの規模は開口部が36×28 cmで、底部径は21×15 cmである。掘り込み部分の埋土は褐色の粘土質土で微小な炭化材と焼土粒が含まれている。床面中央付近でも焼土が検出されたが、あまり発達しておらず、褐色土を混入することから現地性のものではない。

西壁に沿った地点では深鉢の口縁部から体部までを逆さに埋め込んだ埋設土器が検出された。土器の周囲に発達した焼土および焼土粒を含む褐色土が存在することから土器埋設炉の可能性がある。

出土遺物（第41・42・43図、写真図版74・75）

248は山形の突起をもつ深鉢形土器の口縁部で粘土紐貼り付けおよび沈線によって施文されている。249～251は口縁部が強く内湾する器形の土器で隆帯により波状文や曲折文が施されている。252は3波状口縁の深鉢形土器で、口縁部には沈線により渦巻文が施され、体部には曲折文が施されている。253～257は刺突文をもつ土器である。253・254・257は竹管によって、

255 は丸棒状の工具で、256 は角棒状の工具によって刺突されている。259・260 は沈線によって区画され、内部に縄文が充填されている。261・262 は底部に縄代痕をもつ。264・265 は粗製土器で264 はL R縦回転の、265 はR L縦回転（一部横回転）の単節斜行縄文が施文されている。

石器は11点出土している。266・267 は平基無茎鏃、268 は凹基無茎鏃、269 は円基鏃である。270 は石錐で身部を欠くが、残存部分から身部は明瞭に作り出されているものと思われる。271 は籠状石器で、両側辺および先端部に刃部が形成されている。272 は不定形石器ではほぼ全縁に刃部が形成されている。273 は磨製石斧で、中央部から刃部までが欠損している。274・275 は磨石である。274 は4面を、275 は3面を使用している。276 は石皿で、欠損しているものの非常に精巧に形作られており、底部には脚が作り出されている。

本遺構は出土遺物、遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ B 2 i 住居跡（第44図、写真図版17）

本遺構は調査区西側斜面上方の平坦部中央付近に位置している。本住居跡の北側にはⅢ B 3 g 住居跡が、東側にはⅢ B 3 g - 2 住居跡が、西側にはⅡ B 9 i 住居跡が存在し、南側はⅢ B 2 j 住居跡が重複して占地している。本住居跡はⅢ B 2 j 住居跡より新しい。検出はⅢ層上面における黒褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形を呈し、規模は東西5.65 m、南北5.8 mを測る。壁はⅢ層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁が96 cm、西壁が36 cm、南壁が67 cm、北壁が60 cmである。

埋土は5層に細分され、上位は黒褐色および暗褐色のシルト質土で、暗褐色土には明黄褐色の火山灰が混入する。中位は褐色の粘土質土で微小な炭化材が少量混入する。壁際と下位にはぶい黄褐色の粘土質土が堆積している。床面はⅢ層中に形成され、平坦でしまっている。床面中央やや南西寄りの地点に73×24 cm程の石が置かれているほか、径20～30 cmの礫が散在している。

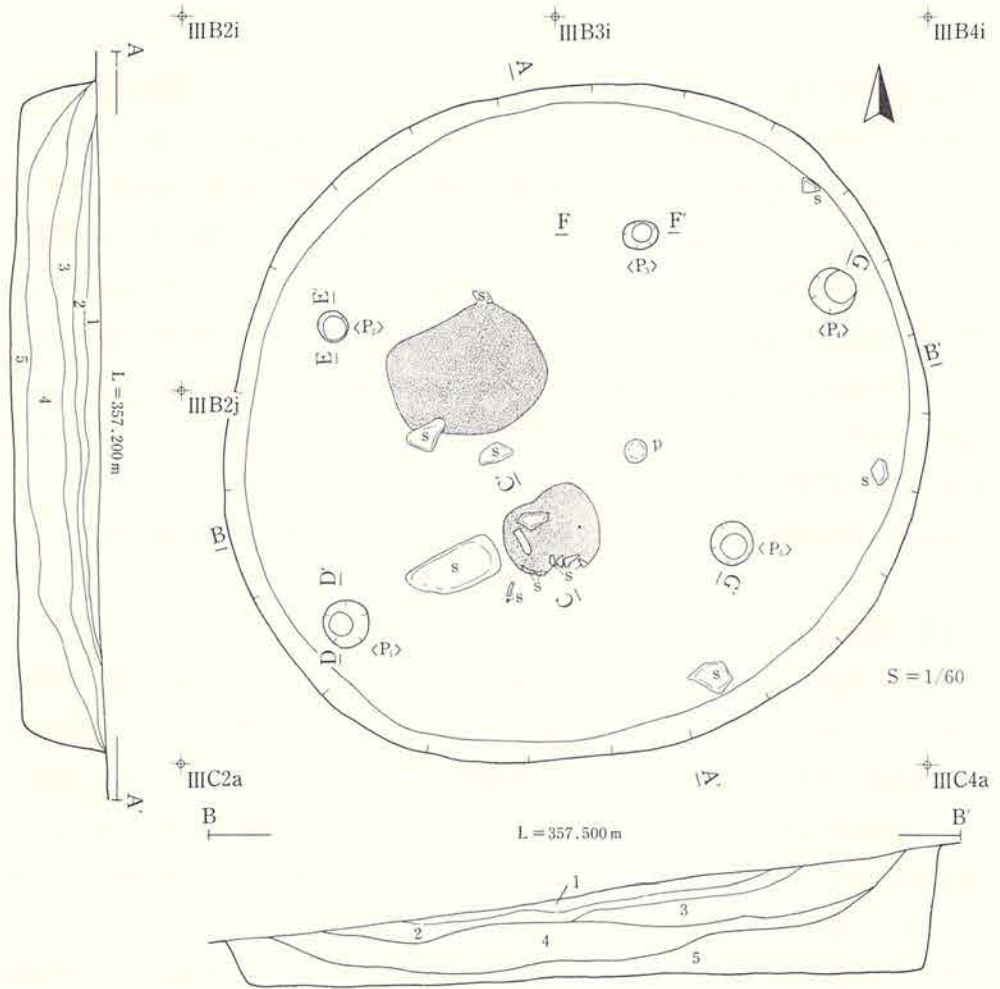
柱穴はP₁～P₅が検出された。掘り方は円形を基調とし、径は25～39 cm、深さは21～81 cmを測る。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	39×37	25×25	28×23	35×35	35×35
深さ cm	81	21	62	64	62

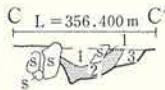
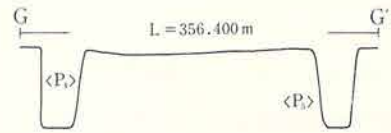
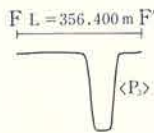
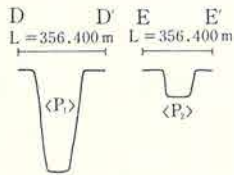
炉は中央やや南寄りで焼土を検出した。焼土の一部に石が埋設されており、周辺に石が散在することから石囲炉の可能性が高いが、石の抜き取り痕は確認されなかった。炉の規模は径50 cm程で、焼土はよく発達している。

出土遺物（第45図、写真図版76）

277 は幅の広い横位の隆帯によって区画され、下部に沈曲線で施文されている。278 は口唇部に原体圧痕が施されている。279～281 は口唇部下に平行沈線が施文されており、280 は口唇部

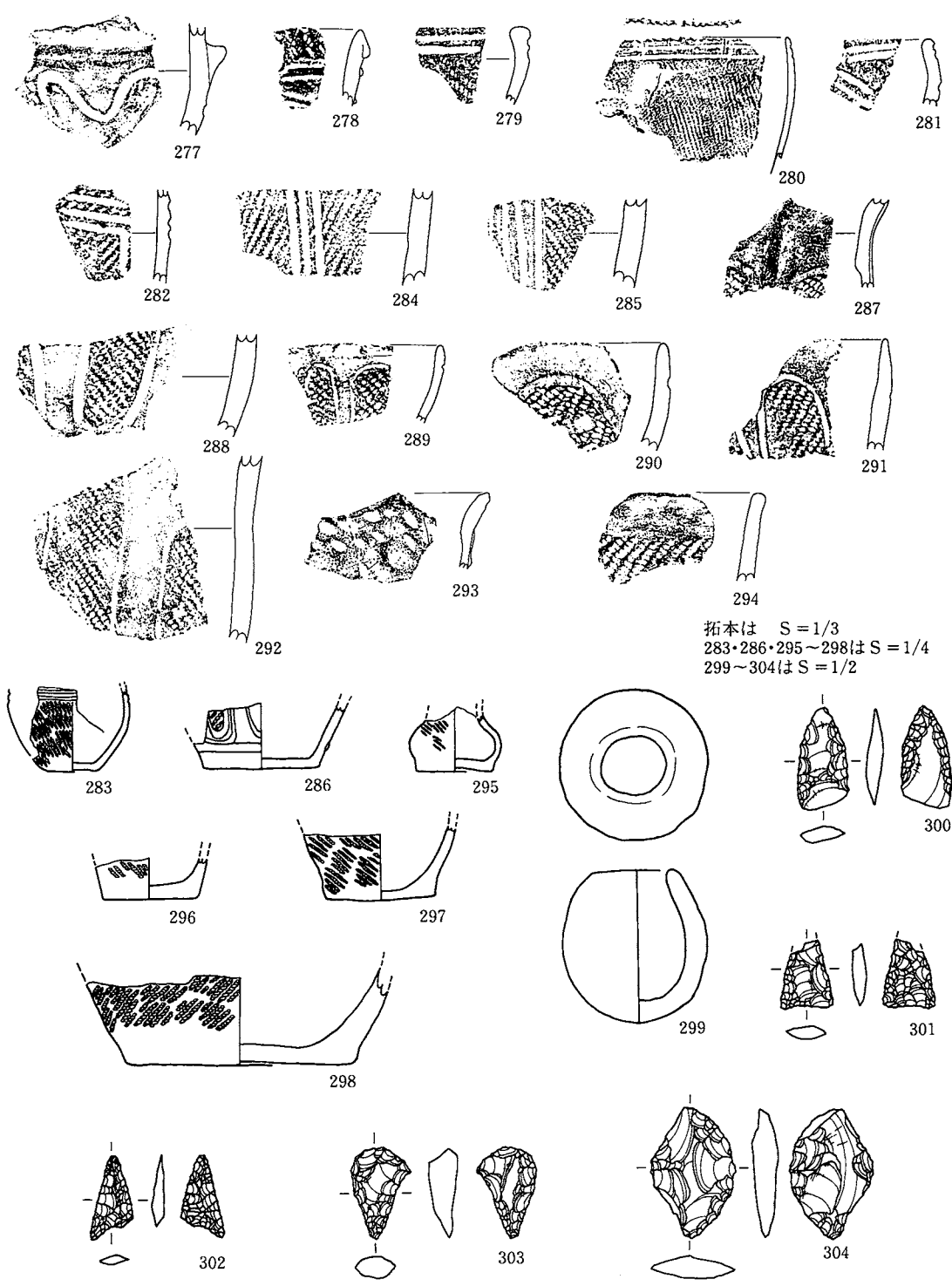


1. 10Y R3/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 10Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 明黄褐色の火山灰を含む
3. 10Y R4/6褐色土 やわらかい やや粘性あり
4. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の炭を混入する
5. 10Y R4/3にぶい黄褐色土 しまっている やや粘性あり



1. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 少量の炭 焼土が混入する
2. 2.5Y R4/8赤褐色土 焼土 非常にかたくしまっている 粘性なし
3. 10Y R5/8黄褐色土 にかたくしまっている やや粘性あり 少量の炭が混入する

第44図 III B 2 i 住居跡



第45図 III B2i住居跡遺物

が鋸歯状になっている。282・284は地文上に縦位あるいは横位の沈線によって文様が描かれている。283・285は沈線間が磨り消されている。286～292は楕円あるいは逆U字状に沈線によって区画され、縄文が充填される土器で、287は波状口縁となる。293は山形の突起部分で口縁部に平行して刺突が施されている。294は口縁部に無文帯をもつ。294は壺形土器、295～298は粗製の深鉢形土器で、単節斜行縄文が施文されている。

土製品は1点出土している。299はミニチュア土器で文様は施されていない。

石器は5点出土した。300～302は石鏃で、300は平基無茎鏃、301・302は凹基無茎鏃である。303は石錐で、身部が明瞭には作り出されておらず、つまみ部の一部が身部となっている。304は不定形石器で、一つの側辺にのみ刃部を有する。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ B 2 j 住居跡 (第46図、写真図版19)

本遺構は調査区西側斜面上方の平坦地に位置している。本住居跡は北側がⅢ B 2 i 住居跡と重複関係にあり、Ⅲ B 2 i 住居跡より構築時期が古い。また南側はⅢ C 2 a 住居跡と重複関係にあり、Ⅲ C 2 a 住居跡が本住居跡の上にある。したがって構築時期は本住居跡のほうが古いと考えられる。本住居跡の西側にはⅡ C 9 a 住居跡が、東側にはⅢ C 5 a 住居跡が存在する。検出はⅢ B 2 i 住居跡の南壁において石囲炉の炉石と焼土を検出したことによる。平面形の詳細は重複関係にあるため不明であるが、残存する部分から楕円形を呈するものと思われる。

規模は東西5.2mを測る。壁はⅢ層中に形成され、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は南壁が25cm、西壁が28cm、北壁が53cmである。

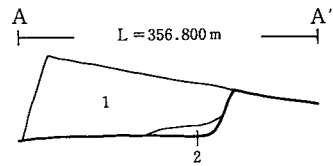
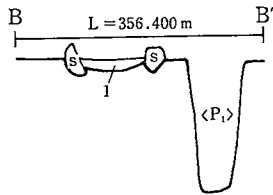
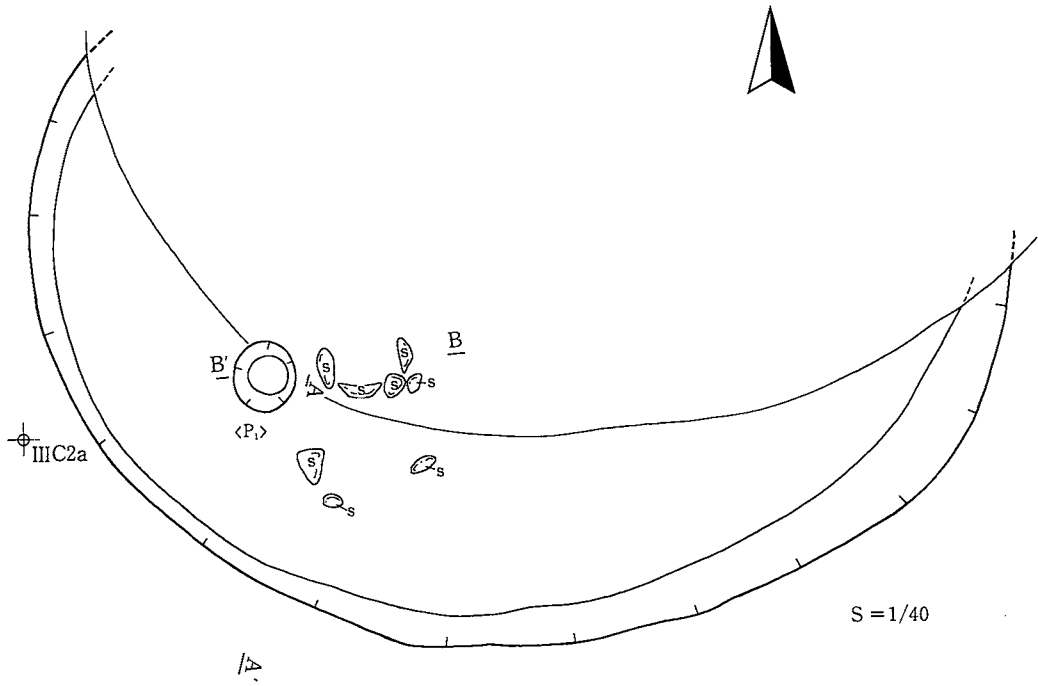
残存する部分の埋土は2層に細分されるが、ほぼ褐色粘土質土の単層であり、壁際に壁の崩落土が見られる。床面はⅢ層中にあり、ほぼ平坦でしまっている。柱穴はP₁が検出された。径は37×35cm、深さは70cmである。炉は床面中央やや南西寄りで石囲炉が検出された。規模は径が50cm程で、長さ20cm前後の円礫によって囲まれている。北側の石は失われているが石の抜き取り痕が見られる。焼土はあまり発達しておらず、褐色土に焼土粒と微小な炭化材が混じる程度である。

出土遺物 (第47・48図、写真図版77)

305は口縁部下に幅の広い隆帯をめぐらせ、下段の隆帯には沈線が施されている。306は隆帯によって曲線文が描かれている。307・308は隆帯によって渦巻文が描かれ、その部分が突起状に盛り上がる。309～311は沈線によって楕円あるいは逆U字状に区画される文様をもつ土器である。309・310は区画の内部に単節斜行縄文が充填されており、311は角棒状の工具によって刺突がなされている。また311は底部に木葉痕をもつ。312は無文の沈線区画帯がアル

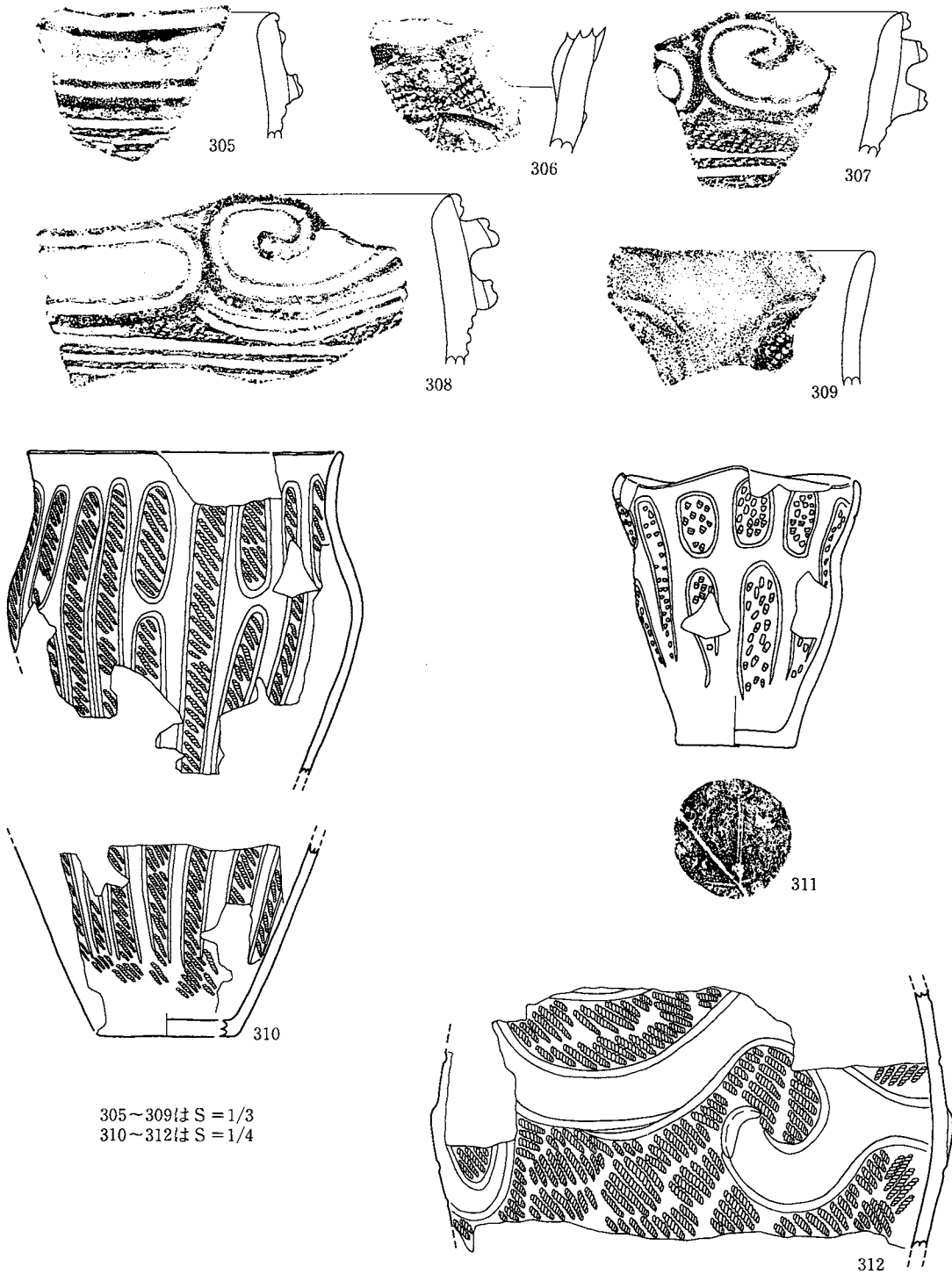
III B2j

III B3j

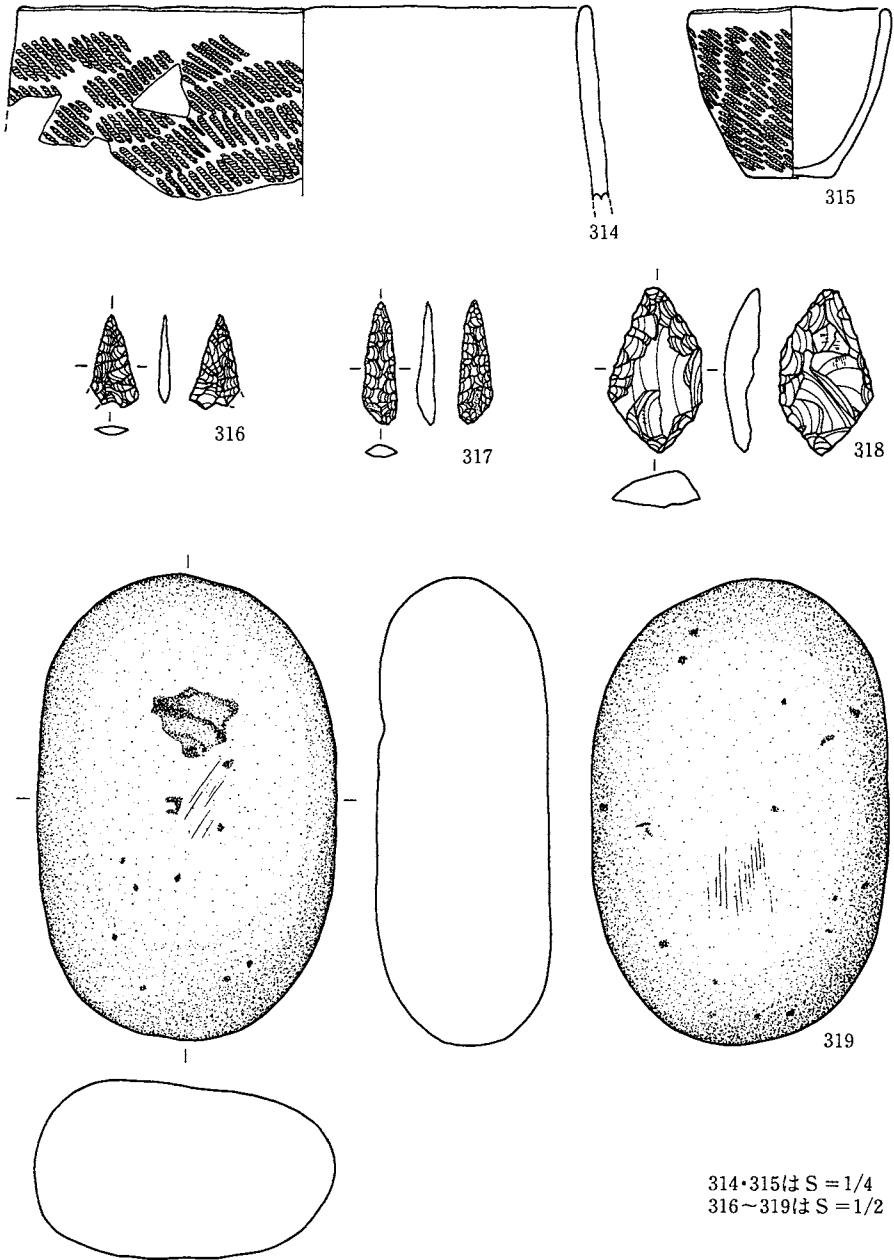


- 1. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
- 2. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり

第46図 III B2j住居跡



第47图 III B2j住居跡遺物(1)



第48図 III B2j 住居跡遺物(2)

ファベット状の文様を展開する土器で、鱗状突起を有する。314・315は粗製の深鉢形土器で、両方ともLR縦回転の単節斜行縄文が施文されている。

石器は4点出土している。316・317は石鏃で、316は凹基無茎鏃、317は尖基鏃である。318は不定形石器で2つの刃部が隣り合い、二次調整が両面から施されている。319は磨石で全体が使用されている。また片面に窪みがあり、凹石としての利用も考えられる。

本住居跡は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の遺構と推定される。

ⅢB3g住居跡（第49図、写真図版20）

本遺構は、調査区西側の緩斜面北側に位置している。本住居跡はⅢB3g-2住居跡と重複関係にあり、構築時期は本住居跡の方が新しい。本住居跡の南側にはⅢB2i住居跡が存在する。検出はⅢ層上面での褐色土の広がりによる。平面形は円形で、規模は東西5.2m、南北5.5mを測る。壁はすべてⅢ層中にあり、壁高は東壁が65cm、西壁が32cm、南壁が34cm、北壁が47cmである。

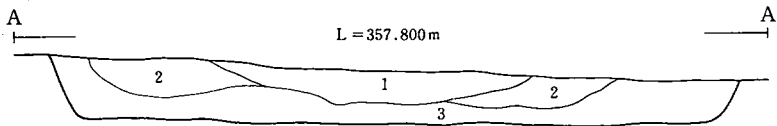
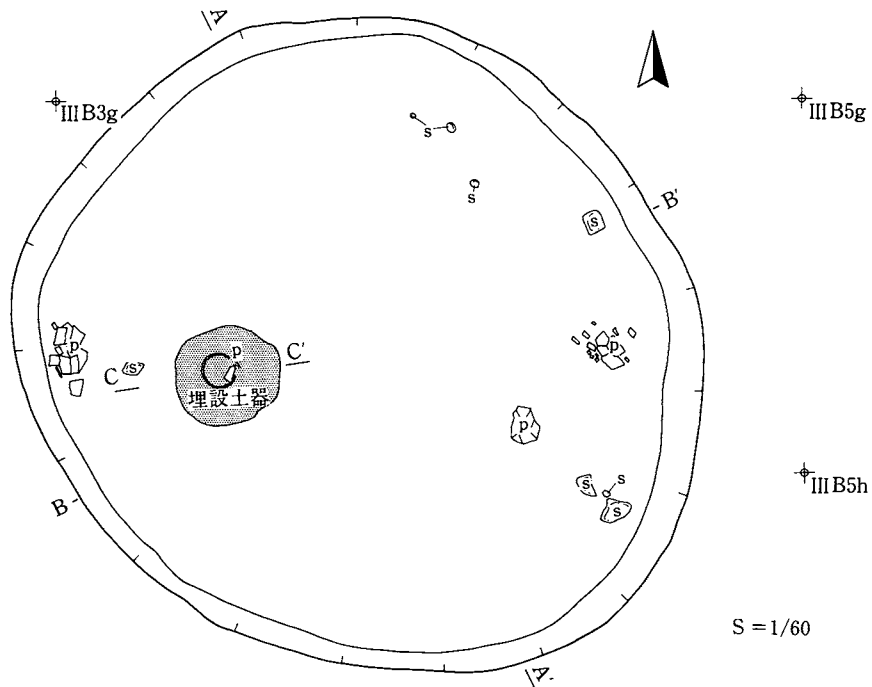
埋土は5層に細分され、埋土上位の中央部はシルト質の褐色土、中位から下位にかけては粘土質の褐色土が広がり、西壁際には粘土質の明褐色土が堆積している。床面はかたくしまっており、中央部付近から西側にかけて若干傾斜している。柱穴は検出されなかった。炉は床面中央からやや西に寄った地点で土器埋設炉が検出された。径25cm程の口縁部を欠損する深鉢が埋め込まれており、周囲に径80cmほどに焼土が広がっている。焼土の発達はかなり良く、かたく焼きしまっている。

出土遺物（第50図、写真図版78）

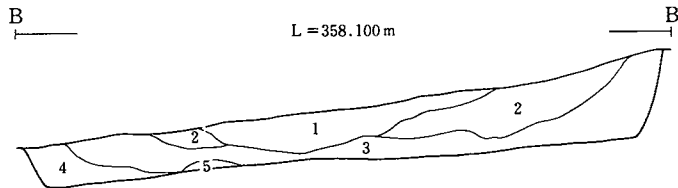
320～324は沈線を主体に文様が施されている土器である。320は山形の突起をもつ深鉢形土器の口縁部で、突起部分及び口唇部に粘土紐が貼り付けられている。322も山形の小突起をもち、突起部分に粘土紐が貼り付けられている。また、口唇部には縄文原体の圧痕が見られる。325は口唇部に隆帯によって渦巻文がつけられ、口縁部には3本の沈線がめぐっている。326は沈線による渦巻文がつけられている。327は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器で、隆帯によって区画されている。328・329は地文上に沈線による逆U字状の文様が施されている。330・333は楕円あるいは逆U字状の沈線によって区画され、縄文が充填されている。333は逆U字状の区画が横に連結されたH字状の区画をもつ。334～336は無文の沈線区画帯が文様を展開する土器である。335・336は体部中央が沈線による波形文によって区画されている。336は炉の埋設土器である。337・339は粗製の深鉢形土器で、338には綾絡文が施文されている。

石器は2点出土しており、340は尖頭器、341は不定形石器で、石質はともに硬質泥岩である。

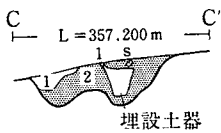
本住居跡は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の遺構と推定される。



1. 7.5 Y R 4/4 褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり

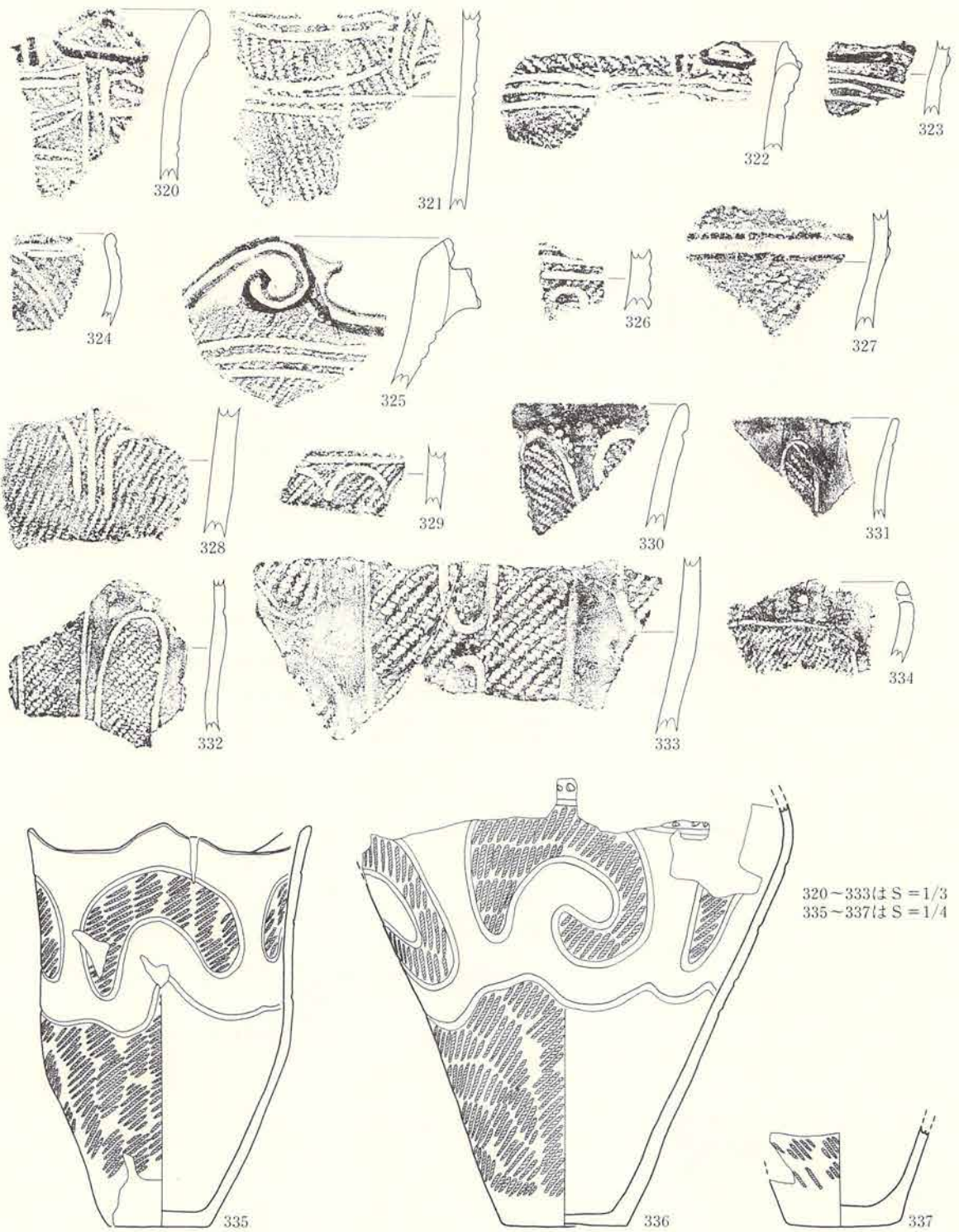


1. 7.5 Y R 4/4 褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5 Y R 5/8 明褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 7.5 Y R 5/6 明褐色土 しまっている やや粘性あり
5. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている 粘性なし 赤褐色焼土が混入する

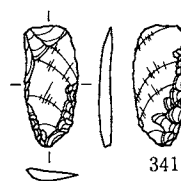
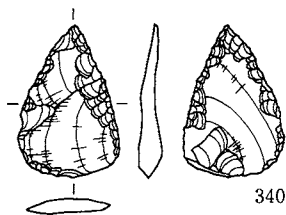
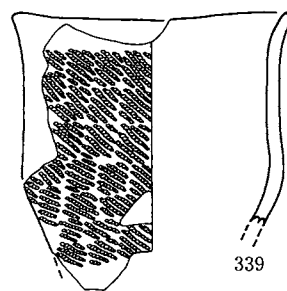
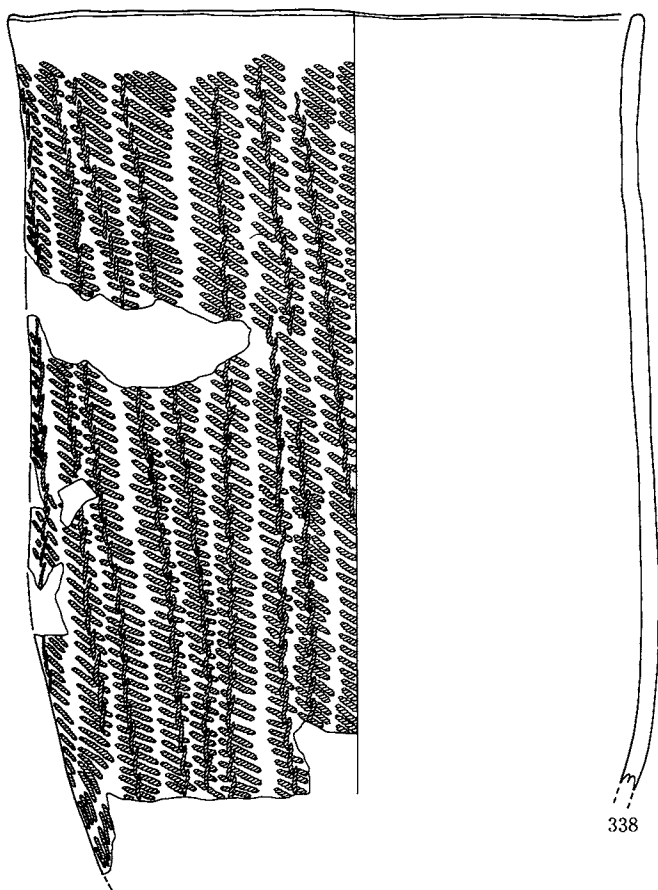


1. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり
2. 5 Y R 4/6 赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

第49図 III B3g 住居跡



第50図 III B3g住居跡遺物(1)



338・339は S = 1/4
340・341は S = 1/2

第51図 III B3g住居跡遺物(2)

Ⅲ B 3 g - 2 住居跡 (第 52 図、写真図版 21)

本遺構は、調査区西側の緩斜面北側に位置している。本住居跡の西側はⅢ B 3 g 住居跡と重複関係にあり、Ⅲ B 3 g 住居跡の方が新しい。また南壁の一部がⅢ B 5 h 土坑と重複関係にあり、構築時期は本住居跡の方が新しいと考えられる。検出はⅢ B 3 g 住居跡の壁面で焼土粒混じりの褐色土が水平に広がることと、その面からまとまって土器が出土したことによる。

平面形は楕円形で、規模は東西 4.6 m、南北 6.9 m を測る。壁はⅢ層中に形成され、壁高は東壁が 64 cm、西壁は 5 cm、南壁は 9 cm、北壁は 32 cm を測る。

埋土は 3 層に分かれ、上位は粘土質の黄褐色土、下位は粘土質の褐色土で微小な炭化材と砂礫を少量混入する。また東壁際には壁の崩落土と思われる褐色土が見られる。床面はⅢ層中に形成され、ほぼ平坦でかたくしまっている。南側のⅢ B 3 g 住居跡と接する床面で土器がまとまって検出された。

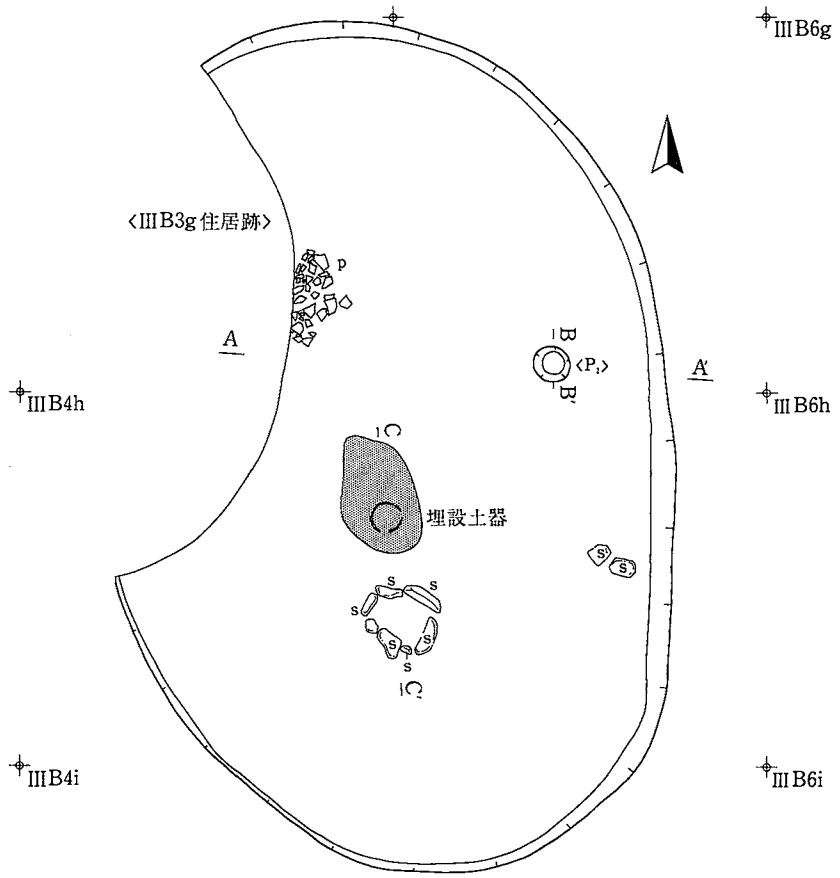
柱穴は床面中央から北東によった地点で P₁1 基のみが検出された。規模は径が 31 × 28 cm、深さが 53 cm である。炉は床面中央から南に寄った地点で石囲炉と土器埋設炉を検出した。土器埋設炉は径 23 cm 程の深鉢の体部が埋め込まれており、周囲に焼土が不整な楕円形状に広がっている。焼土の発達はかなりよく、かたくしまっている。石囲炉は長さ 10 ~ 35 cm の礫を径 65 cm ほどに円形に組んで作られており、内部には炭化材と焼土を含む褐色土と赤褐色の焼土がみられる。焼土は 6 cm 程に発達し、かたく焼きしまっている。

出土遺物 (第 53・54 図、写真図版 79)

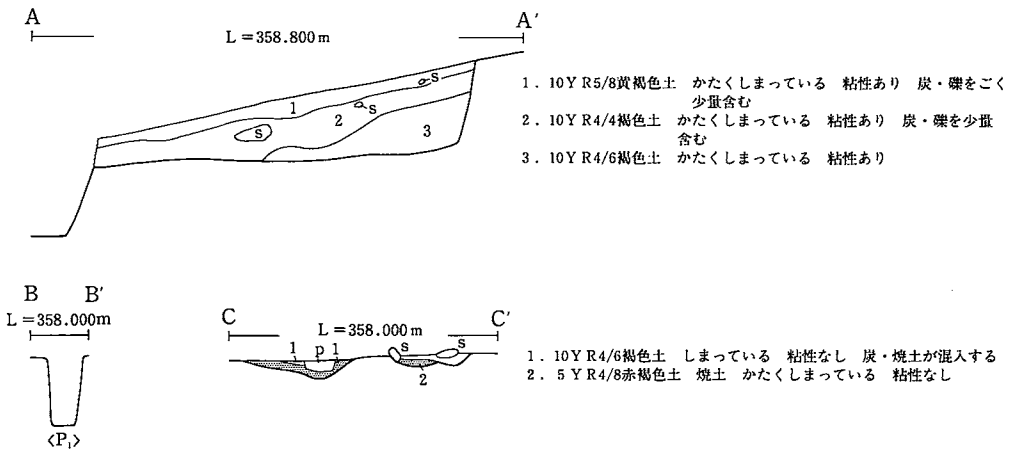
342 は地文上に孤状の沈線が施されている。343 は口縁部が若干折り返され、その下に隆帯がめぐっている。344 は口縁部に 4 つの突起をもつ深鉢形土器で、突起下部に粘土紐を貼り付けて渦巻文が施文されている。また、突起部分の裏面にも隆帯による渦巻文が描かれている。地文には R L R 縦回転の複節斜行縄文が施される。347 ~ 350 は楕円あるいは逆 U 字状の沈線区画が施された土器で、区画の内部には 347 は刺突が、348 は撚糸文が、349・350 は単節斜行縄文が施文されている。345 は頸部が平行沈線によって区画され、口縁部に縦位の沈線及び曲折文が描かれている。346 は壺形土器で、口縁部は無文で体部は隆帯によって逆 U 字状に区画され、内部に縄文が充填されている。351 は無文の沈線区画帯が J 字状の文様を展開する土器である。地文は R L 縦回転の単節斜行縄文である。352 ~ 355 は粗製の深鉢形土器で、352・354 は L R 縦回転の、355 は R L 縦回転の単節斜行縄文が施されている。353 の地文は L R L 縦回転の複節斜行縄文である。356 は粗製の浅鉢形土器の底部付近の破片で、L R 横回転の単節斜行縄文が施文されている。

石器は 1 点出土しており、357 は凸基有茎鏃で、石質はチャート質粘板岩である。

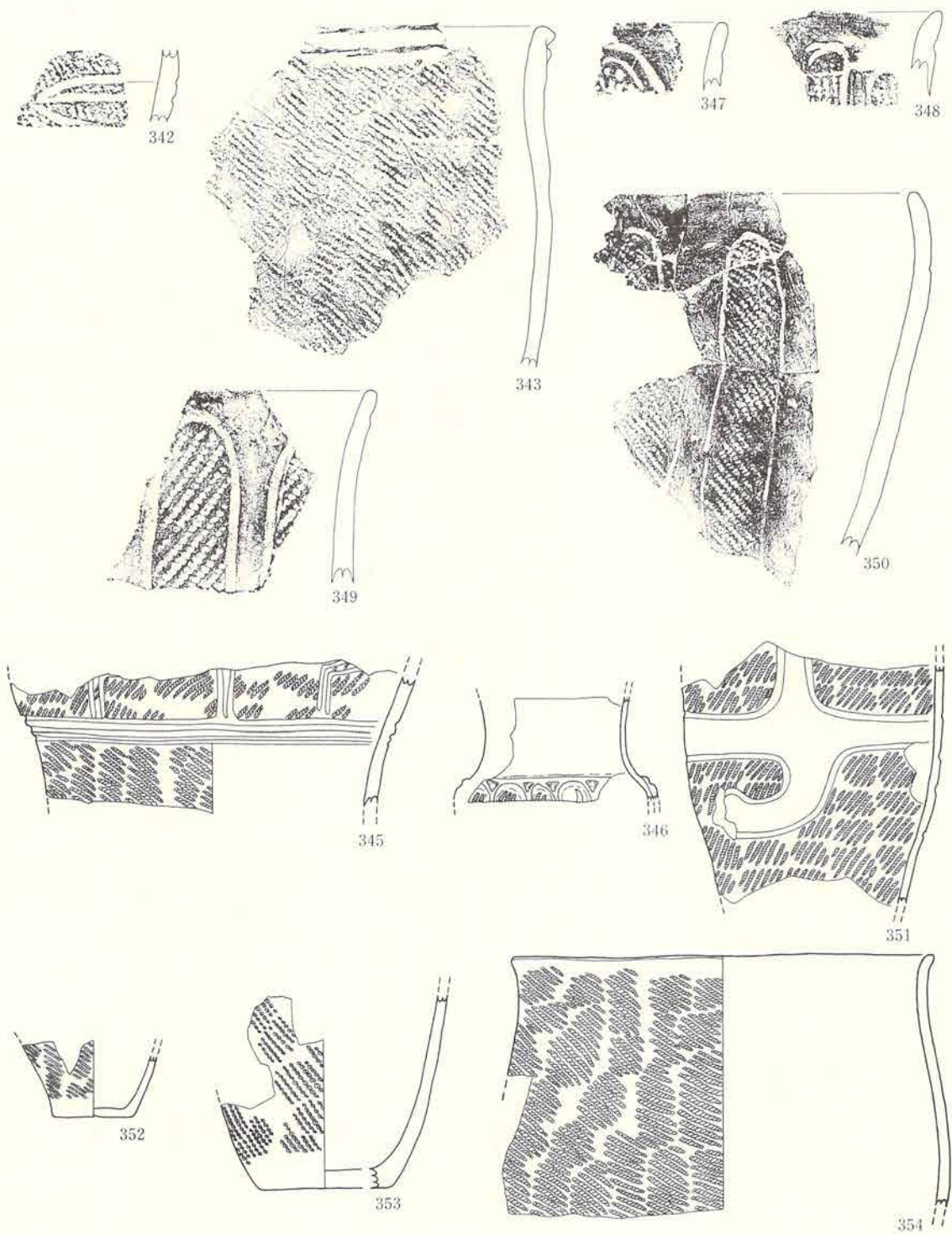
本遺構も出土遺物及び遺構の形状から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。



S = 1/60

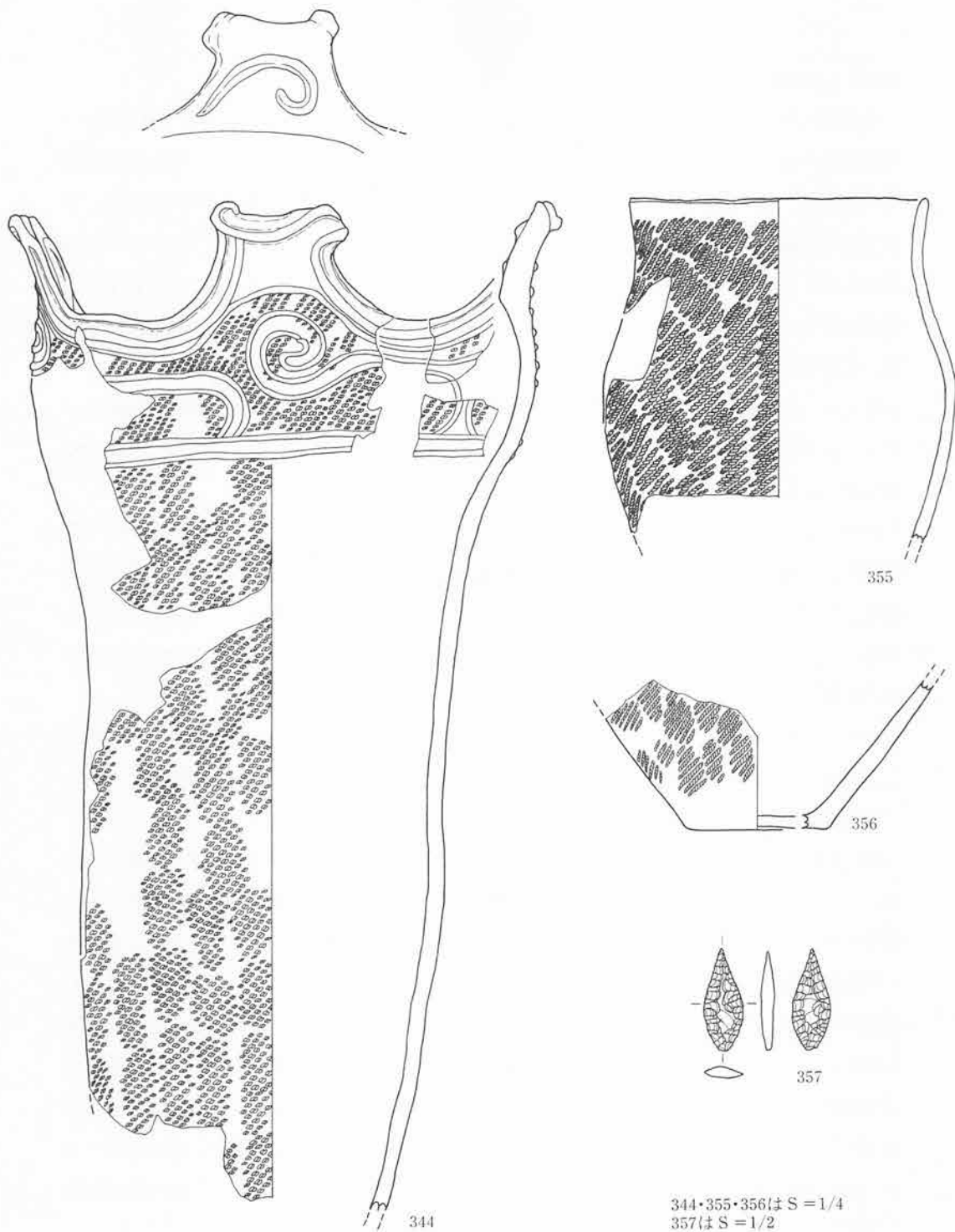


第52図 III B3g-2住居跡



342・343・347～350は S = 1/3
 345・346・351～354は S = 1/4

第53図 III B3g-2住居跡遺物(1)



第54図 III B3g-2 住居跡遺物(2)

Ⅲ B 5 g 住居跡 (第 55 図、写真図版 22)

本遺構は調査区西側の緩斜面に位置している。本住居跡はⅢ B 5 g-2 住居跡・Ⅲ B 5 g-3 住居跡と重複関係にあり、構築時期はⅢ B 5 g-2 住居跡とⅢ B 5 g-3 住居跡は本住居跡より古い、Ⅲ B 5 g-2 住居跡とⅢ B 5 g-3 住居跡との新旧関係は不明である。また、本住居跡の西側にはⅢ B 3 g 住居跡・Ⅲ B 3 g-2 住居跡が、東側には平安時代のⅢ B 9 d 住居跡が占地している。検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、規模は東西 4.75 m、南北 4.33 m を測る。壁はすべてⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 92 cm、西壁が 47 cm、南壁が 81 cm、北壁が 60 cm を測る。

埋土は 7 層に細分され、上位は暗褐色のシルト質土、中位は黒褐色のシルト質土で褐色土がブロックで少量混入する。下位はにぶい黄褐色土と褐色土の粘土質土で、壁際に粘土質の黄褐色土がみられる。床面はⅢ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。

柱穴は検出されなかったが、住居内土坑 2 基が検出された。住居内土坑 1 は平面形が楕円形、断面形が浅鉢状を呈し、規模は開口部径が 64 × 52 cm、底部径が 52 × 35 cm で、深さは 16 cm である。住居内土坑 2 は平面形が楕円形、断面形がピーカー状を呈し、規模は開口部径が 103 × 85 cm、底部径が 95 × 75 cm、深さ 18 cm を測る。土坑の埋土は共に褐色の粘土質土で、微小な炭化材が混入する。

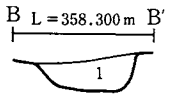
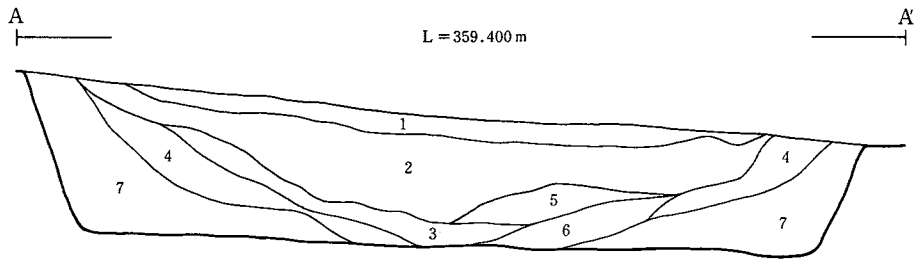
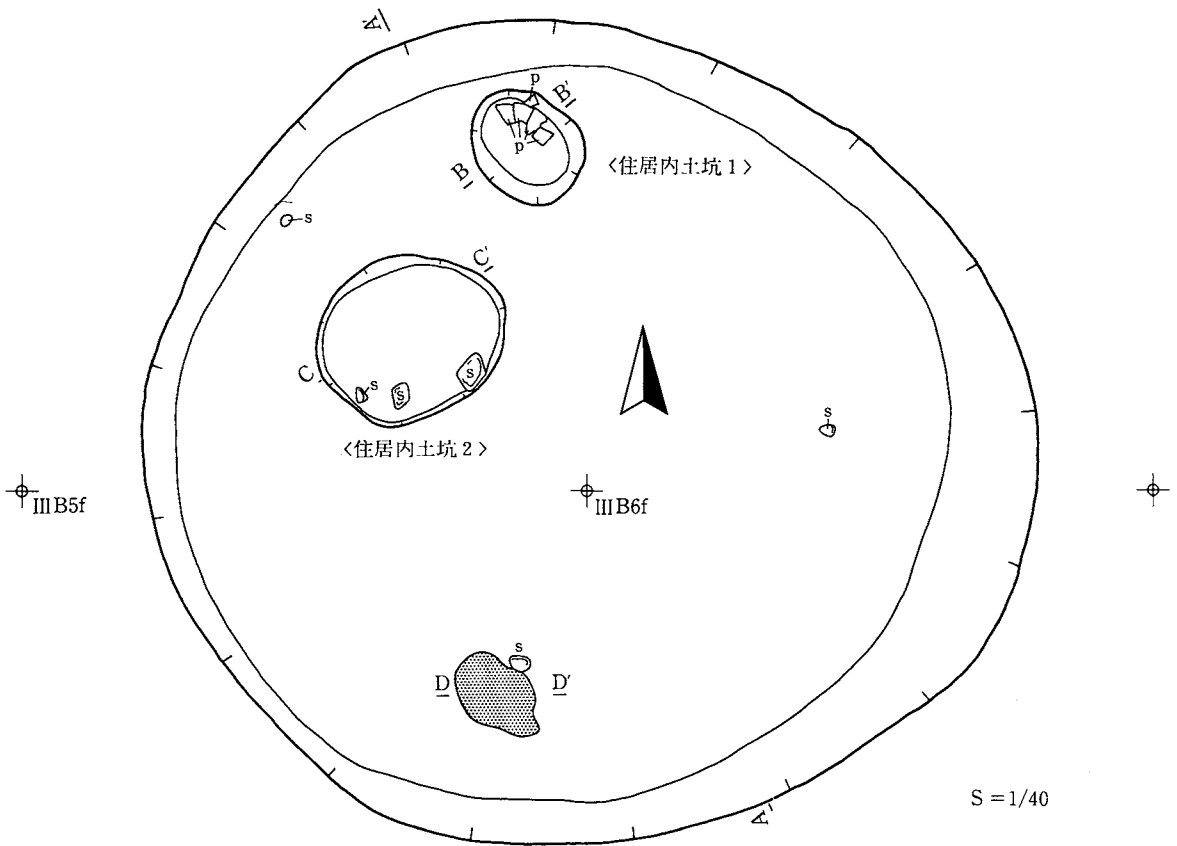
炉は床面中央から南に寄った地点で地床炉が検出された。焼土の広がり是不整な楕円形を呈し、規模は 54 × 35 cm である。焼土はよく発達しており、非常にかたくしまっている。

出土遺物 (第 56 図、写真図版 80)

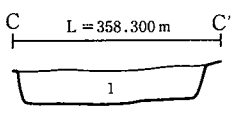
358 は区画沈線内部に刺突及び充填縄文が施されている。359 は横位の沈線及び破線状の沈線によって口縁部が区画され、その上位には楕円文が描かれ、内部に細い板状の工具によって刺突が施されている。360 ~ 363 は沈線によって楕円あるいは逆 U 字状に区画される文様をもつ深鉢形土器で、360 ~ 362 は波状口縁となる。360 は区画内が窪み、無文となっている。361 は区画内部に単節斜行縄文が充填されている。362 は 2 重の沈線により区画され、内部に棒状の工具によって刺突が施されている。363 は浅鉢状の土器の底部付近の破片で、沈線区画内には単節斜行縄文が充填される。364・365 は山形の突起をもつ深鉢形土器の口縁部で、364 は無文、365 は縄文を充填した沈線区画と鱗状の突起をもつ。366・367 は沈線区画の無文帯がアルファベット状に展開する文様をもつ土器である。366 は平縁で口縁部が無文となる。368 は無文の深鉢形土器で完形での出土である。

石器は 1 点出土している。369 は不定形石器で、一つの側辺にのみ刃部が形成されており、二次調整は両面から施されている。石質は珪質泥岩である。

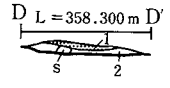
出土遺物および遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。



1. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり 少量の微小な炭が混入する



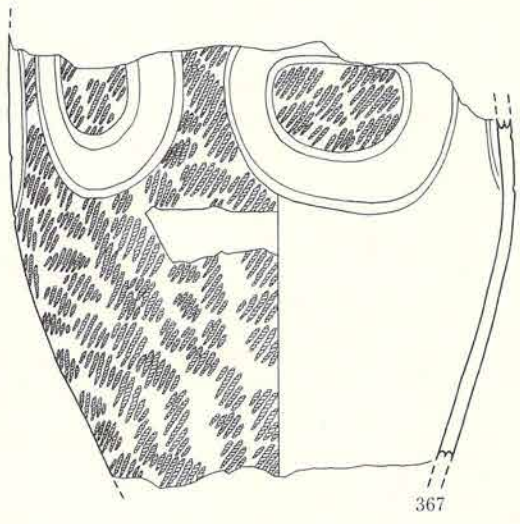
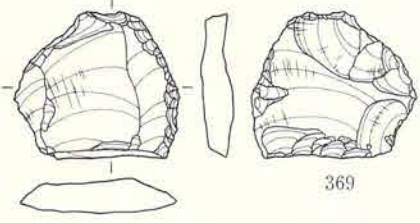
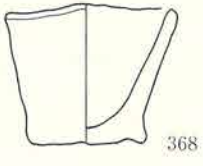
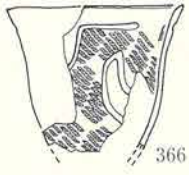
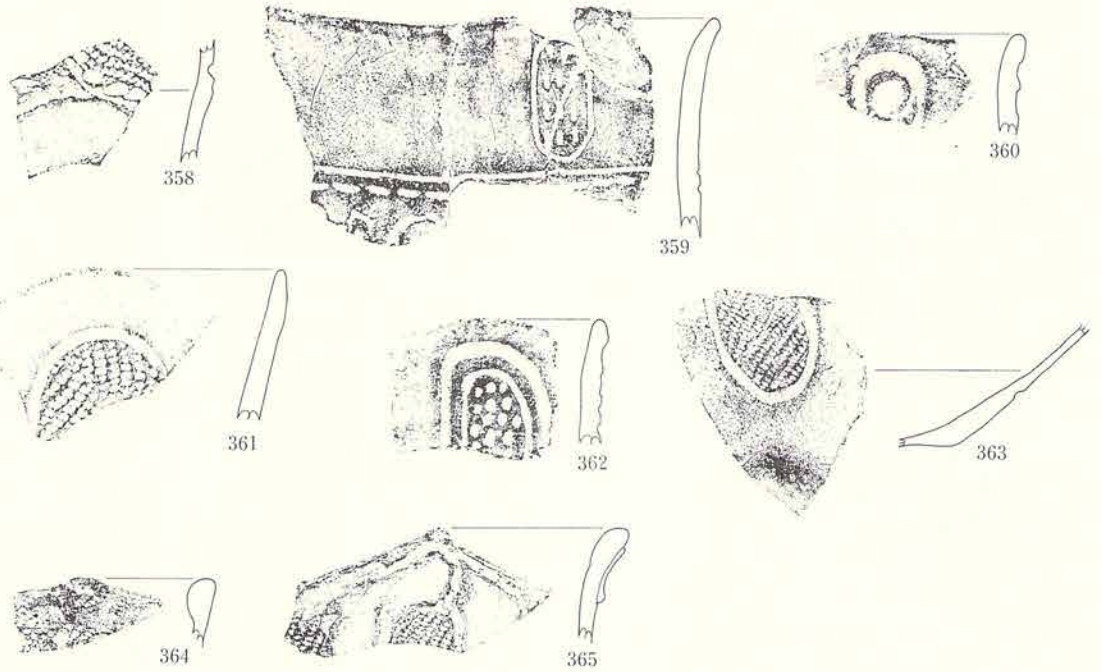
1. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり 少量の微小な炭が混入する



1. 5Y R5/8明赤褐色土 塊土 非常にかたくしまっている 粘性なし
 2. 10Y R5/8黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり

1. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10Y R2/3黒褐色土 しまっている 粘性なし 褐色土が少量ブロックで混入する
3. 10Y R4/3にふい黄褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 暗褐色土が少量ブロックで混入する
5. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性あり
6. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 5層がブロックで混入する
7. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

第55図 III B5g住居跡



358~365は S = 1/3
 366~368は S = 1/4
 369は S = 1/2

第56図 III B5g 住居跡遺物

Ⅲ B 5 g - 2 住居跡 (第 57 図、写真図版 23)

本遺構は調査区西側の緩斜面に位置し、Ⅲ B 5 g 住居跡の床面から重複して検出された。構築時期はⅢ B 5 g 住居跡の方が新しい。検出はⅢ B 5 g 住居跡の住居内土坑 2 の精査中に、炉石および炉の焼土を検出したことによる。平面形は円形で、規模は東西 3.95 m、南北 3.95 m を測る。壁はⅢ層中に形成され、壁高は重複関係にあるため不明であるが、Ⅲ B 5 g 住居跡の床面からは 18 ~ 22 cm ほど下がる。

埋土は粘土質の褐色土 1 層で、かたくしまっている。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。床面はⅣ層上面にあり、ほぼ平坦でかたくしまっているが、床面に 10 ~ 23 cm の礫が散在している。

柱穴は検出されなかった。炉は床面のほぼ中央で石囲炉が検出された。一部炉石を欠くが 15 ~ 28 cm の礫が楕円形に組まれており、長径が 63 cm、短径が 41 cm 程の規模となっている。炉内の焼土はあまり発達しておらず、褐色土中に焼土粒を混入する程度である。

出土遺物 (第 57 図、写真図版 80)

370 は口縁部が強く内湾する器形の深鉢形土器の口縁部で、沈線により渦巻状の文様が施されている。371 は波状口縁の深鉢形土器で、体部中央が波状の沈線によって区画され、体部上半に縄文が充填された楕円状の沈線区画帯をもつ。

出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ B 5 g - 3 住居跡 (第 58 図、写真図版 24)

本住居跡は調査区西側の緩斜面に位置し、Ⅲ B 5 g 住居跡の東側に重複して検出された。構築時期の新旧関係はⅢ B 5 g 住居跡の方が本住居跡より新しい。検出はⅢ B 5 g 住居跡の南壁において焼土を検出し、それに続く褐色の水平に広がる層を確認したことによる。平面形の詳細は不明であるが、残存部分の形状から楕円形を呈するものと推定される。規模は南北 4.85 m、東西は不明である。壁はⅢ層中に形成され、壁高は南壁 58 cm、東壁 72 cm を測る。

埋土は 4 層に細分され、上位は草根が入り込み、微小な炭化材をごく少量混入するシルト質の褐色土、中位は小礫を含むシルト質の褐色土、下位は黄褐色土がブロック状に混じる褐色土で、壁際に壁の崩落土と思われる粘土質の褐色土が見られる。床面はⅢ層中に形成され、平坦でしまっている。柱穴は検出されなかった。

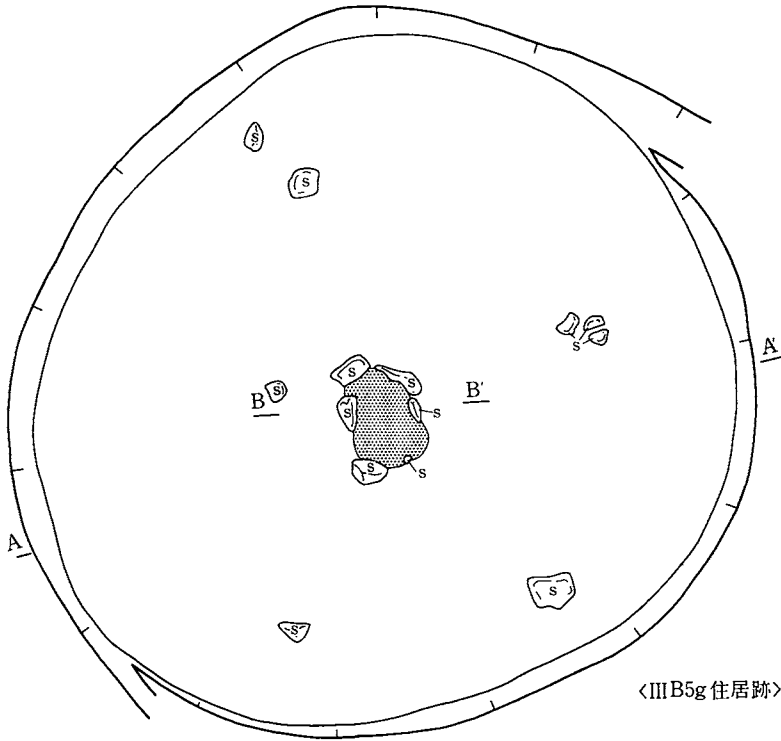
炉は床面中央と思われる位置から南西に寄った地点で検出された。炉の北側はⅢ B 5 g 住居跡によって截られており、形状の詳細は不明であるが残存部分から楕円形あるいは隅丸方形を呈すると思われる。規模は幅が 48 cm である。焼土の東西縁に長さ 16 cm と 30 cm の礫が配されており、石囲炉と考えられるが、焼土の南側には石がなく、石の抜き取り痕も確認できなかった。

III B5e

III B6e

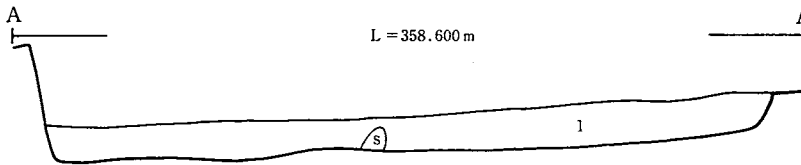


III B5f

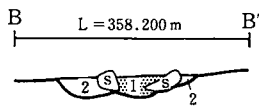


<III B5g 住居跡>

S = 1/40



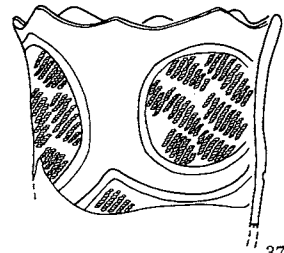
1. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている やや粘性あり



1. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 焼土が混入する
 2. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり



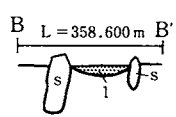
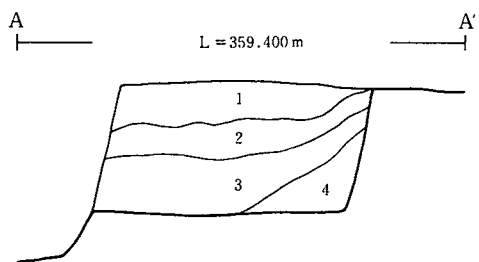
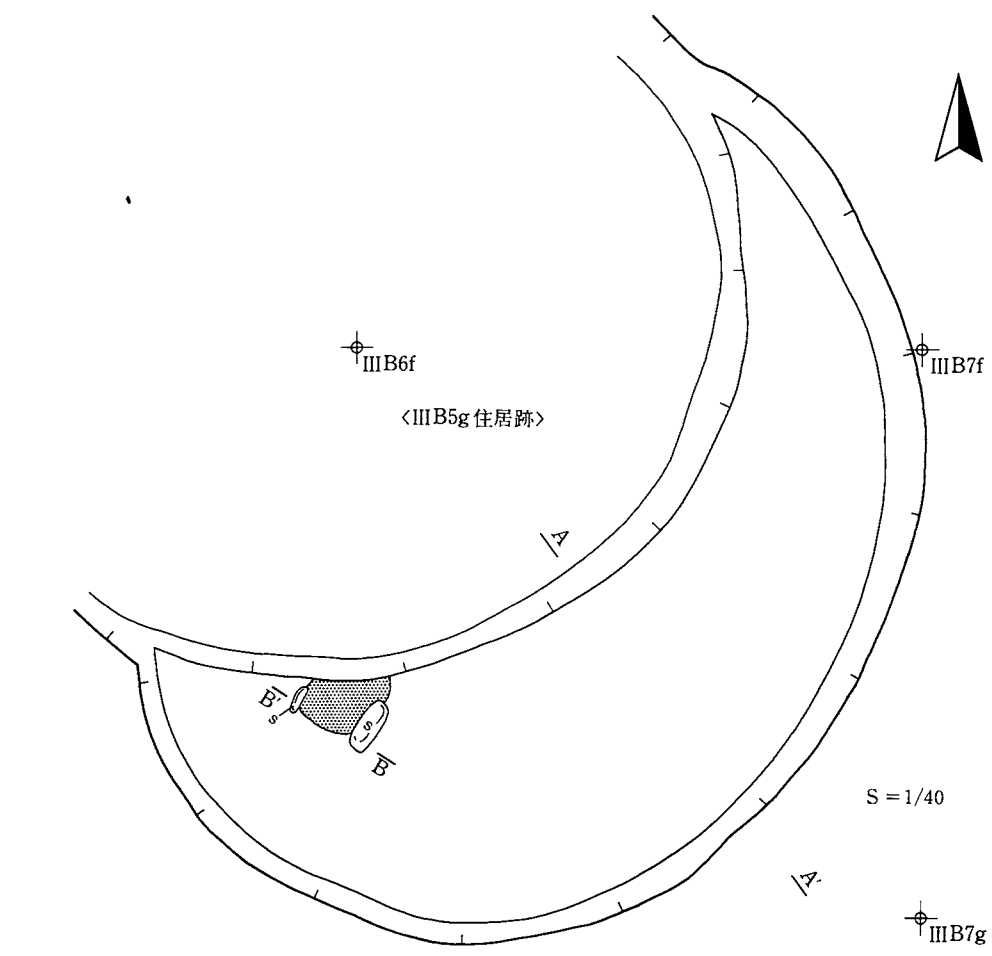
370



371

370は S = 1/3 371は S = 1/4

第57図 III B5g-2住居跡(遺構・遺物)



1. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土が混入する

- 1. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている 草根・微小な炭が混入する 粘性なし
- 2. 7.5 Y R 4/6 褐色土 しまっている 小礫が混入する 粘性なし
- 3. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている 黄褐色土がブロック状に混じる やや粘性あり
- 4. 7.5 Y R 4/4 褐色土 かたくしまっている 粘性あり

第58図 III B5g-3 住居跡



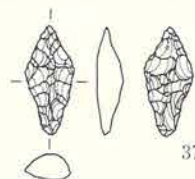
372



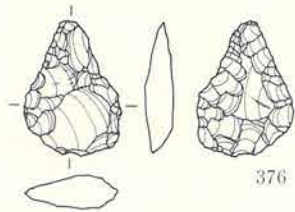
373



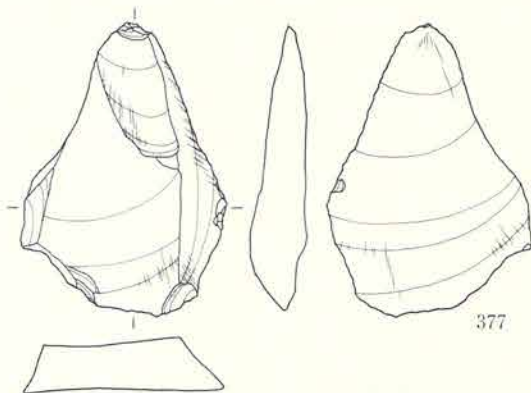
374



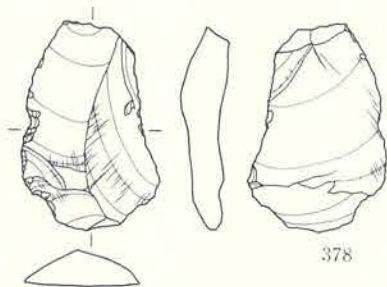
375



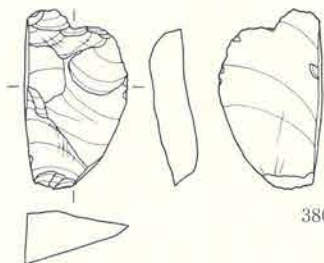
376



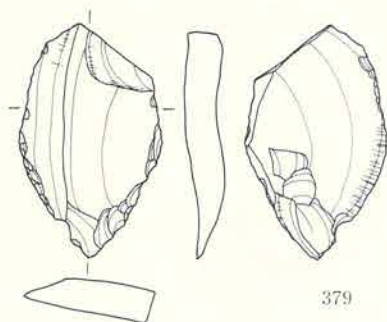
377



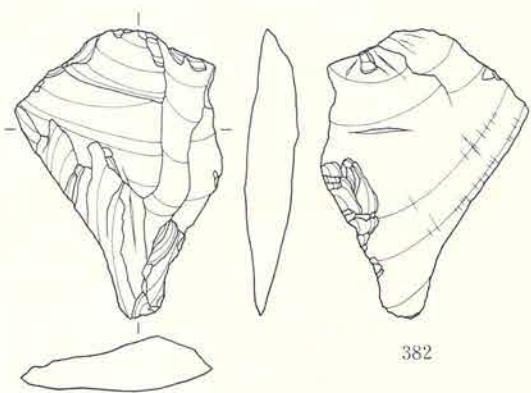
378



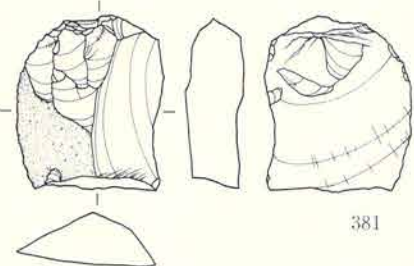
380



379



382



381

372は S = 1/3
373・374は S = 1/4
375～382は S = 1/2

第59図 III B5g-3 住居跡遺物

焼土は発達しておらず、褐色土に焼土粒が混入する程度である。なお、炉の南側の焼土中から多量のフレークが出土している。

出土遺物（第 59 図、写真図版 80・81）

372 は平縁の深鉢形土器の口縁部で、文様は横位の沈線のみで、補修孔が穿たれている。373 は逆 U 字状の区画内に縄文が充填されている。374 は小型の深鉢形土器で無文である。

石器は 8 点が出土し、他にフレークが多数出土している。375 は尖基鏃で中茎をもつ。376 は尖頭器で木葉形を呈する。377～382 は不定形石器で、377～379 は一つの側辺にのみ刃部を有する。380～382 は微小剝離を有するものである。

出土遺物及び遺構の形状から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ B 6 i 住居跡（第 60 図、写真図版 25）

本住居跡は調査区西側の緩斜面中央に位置している。本住居跡の東側にはⅢ B 9 h 住居跡が、北側にはⅢ B 8 f 住居跡が、北西にはⅢ B 3 g-2 住居跡が、南西にはⅢ C 5 a 住居跡がそれぞれ占地している。本住居跡の検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、規模は東西 4.65 cm、南北 4.55 cm を測る。壁はⅢ層中に形成され、壁高は東壁 101 cm、西壁 44 cm、南壁 54 cm、北壁 75 cm である。

埋土は 5 層に細分され、上位および中位中央はシルト質の褐色土、中位外縁部及び下位は粘土質の褐色土が見られる。また、東西の壁際の一部には粘土質の黄褐色土が堆積している。

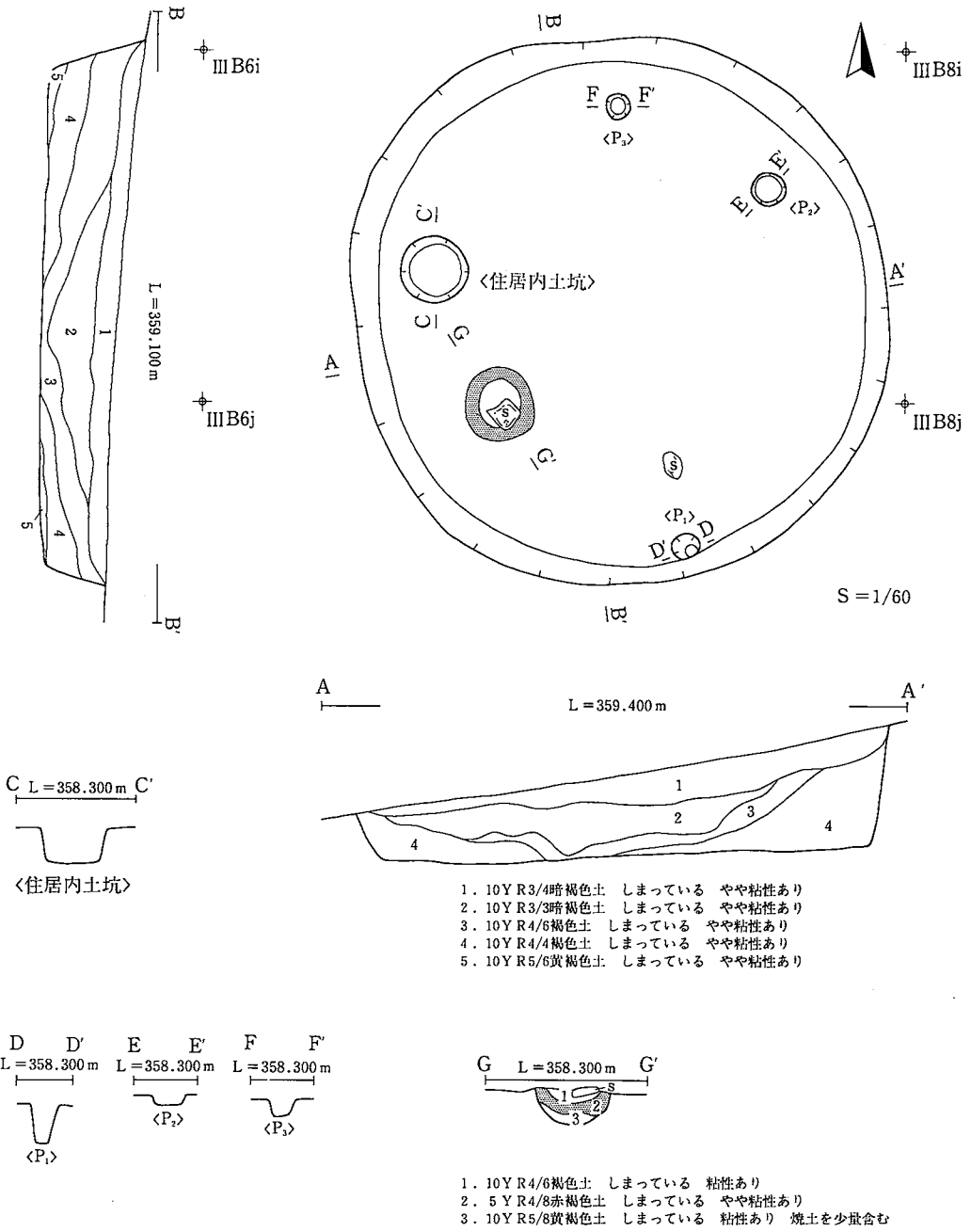
床面はⅢ層中にあり、平坦でしまっている。床面からは柱穴 P₁～P₃ と住居内土坑が 1 基検出された。掘り方は円形を基調とし、径 23～30 cm、深さ 9～33 cm を測る。住居内土坑は平面形が円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が 58×56 cm、底部径が 45×44 cm、深さは 27 cm である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	23×21	30×29	25×21
深さ cm	15	9	33

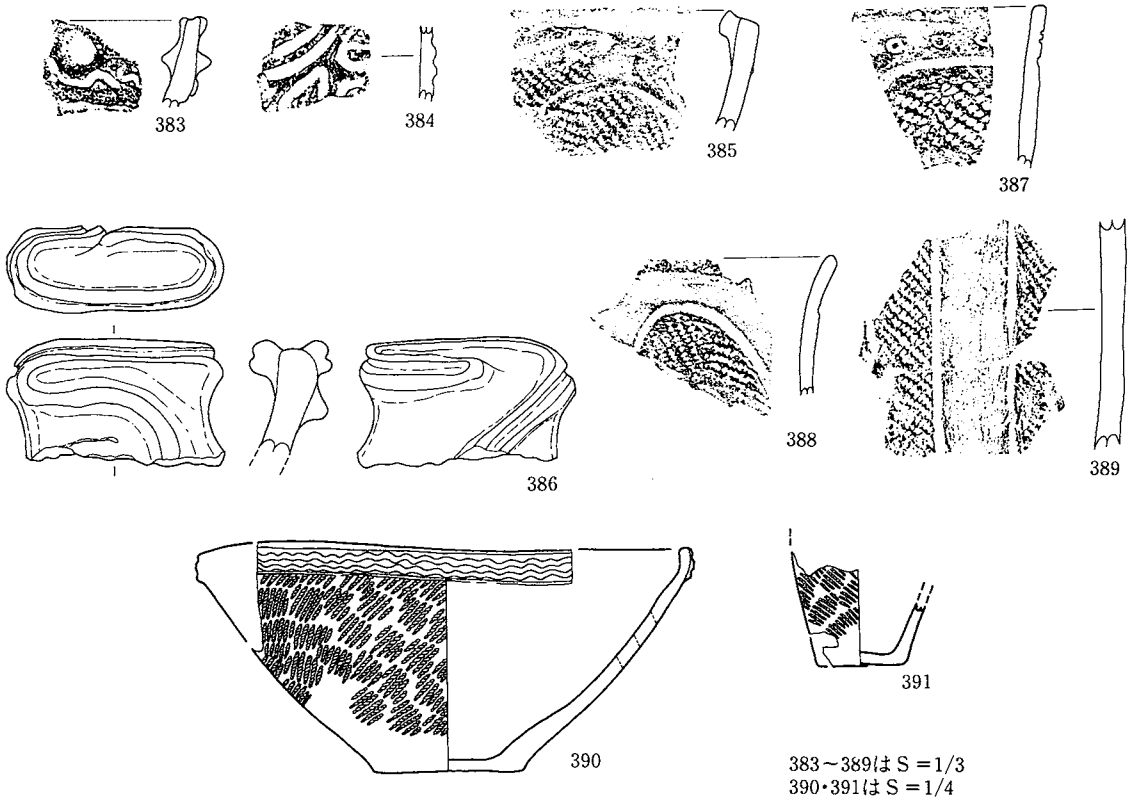
炉は床面中央から南西に寄った地点で地床炉を検出した。炉は楕円形を呈し、床面が半円状に掘り込まれている。規模は長径が 41 cm、短径が 36 cm で、深さは 12 cm である。炉の周囲および底部には厚さ 9～15 cm にわたって焼土が発達している。底部の焼土下に焼土粒混じりの黄褐色土が存在するが、貼ったものかどうかは不明である。また、炉内に 20×21 cm 程の石が存在したが、投げ込まれたものと思われる。

出土遺物（第 61 図、写真図版 81）

383 は突起をもつ深鉢形の土器の口縁部破片で、粘土紐が環状に貼り付けられている。384 は隆沈線により渦巻状の文様が施される。385 は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器の口縁部で、



第60図 III B6i住居跡



第61図 III B6i 住居跡遺物

粘土紐を貼り付けて施文されている。386 は土器の突起部分で、長楕円の渦巻状に形作られている。388・389 は楕円あるいは逆U字状に沈線によって区画され、区画内部に縄文が充填される土器である。390 は浅鉢形の土器で、口唇部に粘土帯が貼り付けられ、その上に波状の沈線が施されている。391 は粗製の深鉢形土器で、LR縦回転の単節斜行縄文が施文されている。出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ B 8 f 住居跡 (第 62 図、写真図版 26)

本遺構は調査区西側の緩斜面上方に位置している。本住居跡の北東側には平安時代のⅢ B 9 d 住居跡が、南側にはⅢ B 9 h 住居跡が占地している。検出は表土除去後のⅢ層上面において基本層序のⅢ層とは微妙に異なる褐色土の広がりを確認したことによる。平面形は不整な円形を呈し、規模は東西 3.27 m、南北 3.26 m を測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、壁高は東壁 76 cm、西壁 32 cm、南壁 53 cm、北壁 59 cm である。

埋土は 7 層に細分される。上位はシルト質の褐色土、中位はシルト質の暗褐色土で、下位には粘土質の褐色土と黄褐色土、にぶい黄褐色土が堆積している。埋土状況から自然堆積と思われる。床面はⅣ層中に形成されており、細かい凹凸があるがほぼ平坦で非常にかたくしまっている。なお、本住居跡の床面からはフラスコ状のⅢ B 8 f 土坑が検出されており、本住居跡はその土坑を埋め戻した上に構築されている。本住居跡からは柱穴・小穴は確認されなかった。

炉は床面中央から南に寄った地点で土器を埋設した石囲炉が検出された。炉は長さ 10 ～ 26 cm の礫が径 60 cm 前後に円形に組まれており、その中央に直径 15 cm 程の土器が埋め込まれている。土器は深鉢の体部が利用されている。焼土は土器の周囲に厚さ 12 cm 前後に発達しており、かたくしまっている。

出土遺物 (第 63 図、写真図版 81)

392 は沈線によって逆 U 字状に区画され、区画内に単節斜行縄文が充填されている。393 は無文の沈線区画帯がアルファベット状の文様を構成するもので、文様の一部に鱗状の突起が貼り付けられている。393 は炉の埋設土器である。394 ～ 396 は粗製土器で、394 は R L 縦回転の単節斜行縄文が、395 は羽状縄文が施文されている。396 は口唇部には R L 横回転の、体部には R L 縦回転の単節斜行縄文が施されている。

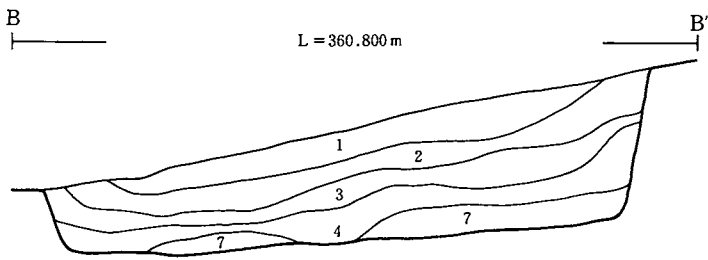
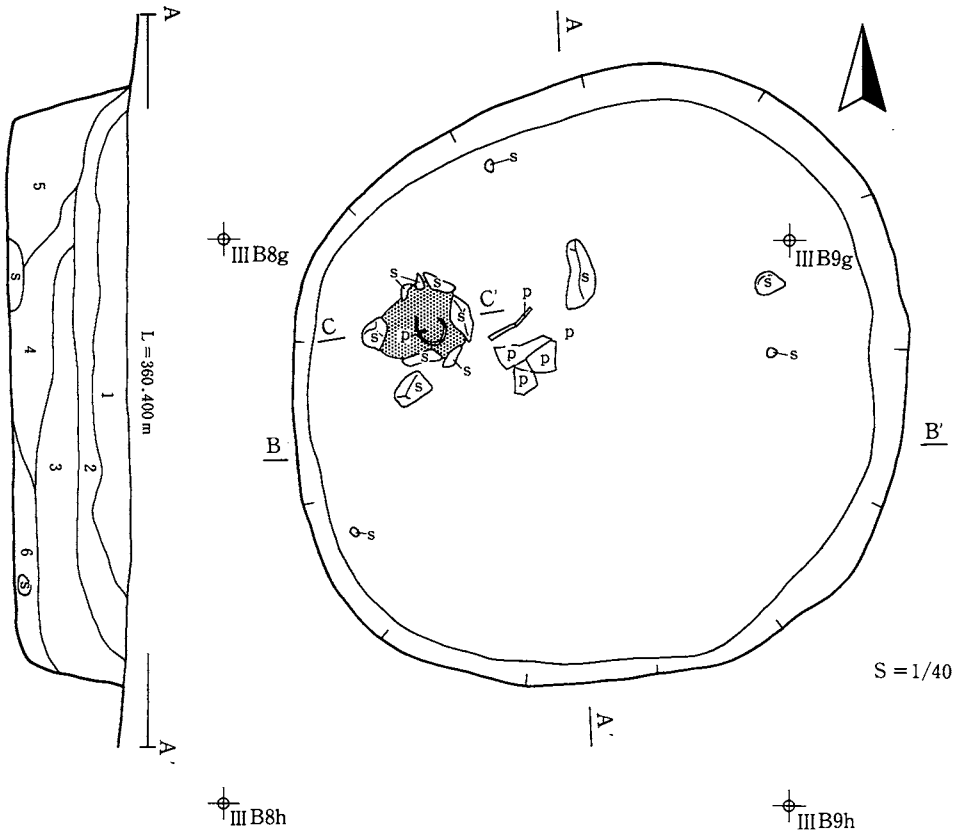
石器は 1 点出土している。397 は磨石で、全面が使用されている。また、片面の中央部付近に窪みがみられ、凹石としての使用も考えられる。

出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

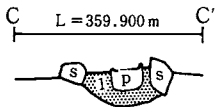
Ⅲ B 9 h 住居跡 (第 64 図、写真図版 27)

本遺構は調査区西側の緩斜面上方に位置している。本遺構の北側にはⅢ B 8 f 住居跡が、西側にはⅢ B 6 i 住居跡が、南側には平安時代のⅢ C 0 a 住居跡が占地している。検出は表土除去後のⅢ層上面において、Ⅲ層とはやや色調の異なる褐色土が円形に広がっていたことによる。

平面形は円形を呈すると思われるが、斜面下方にあたる西壁が流失しており、詳細は不明である。規模は東西が 3.6 m 前後、南北 3.5 m を測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁 37 cm、北壁 28 cm、南壁が 11 cm、西壁は流失のため不明

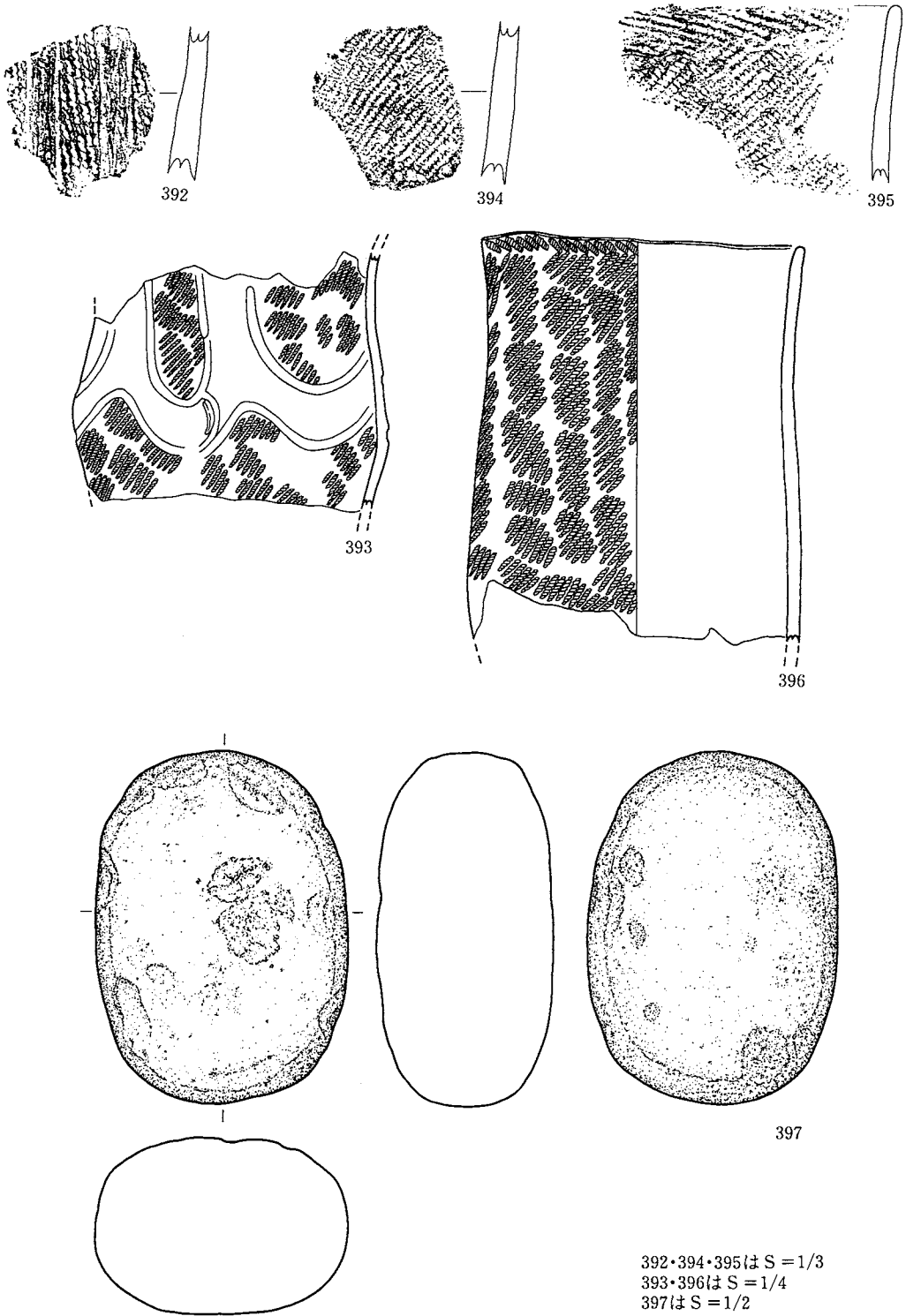


1. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性なし
3. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし
4. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性あり
5. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり
6. 10Y R5/3にぶい黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし
7. 10Y R5/4にぶい黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし

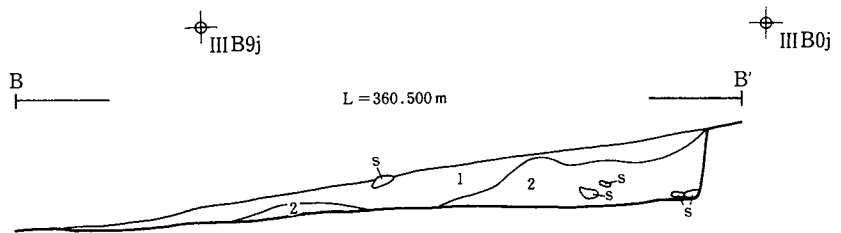
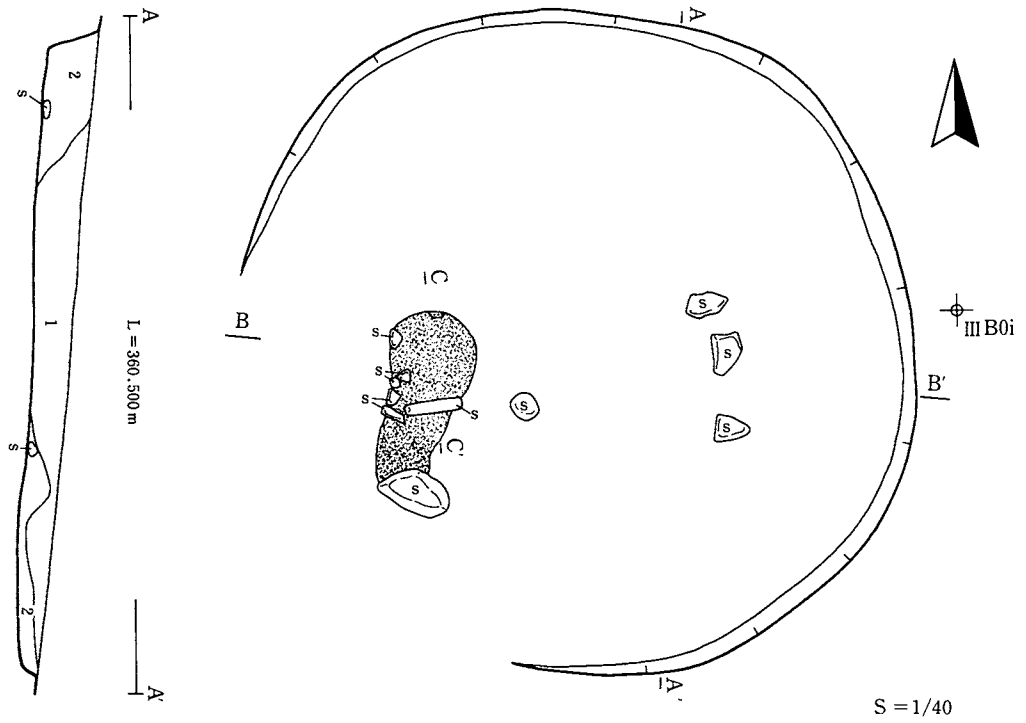


1. 5 Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

第62図 III B8f住居跡

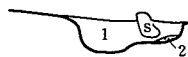


第63図 III B8f住居跡遺物



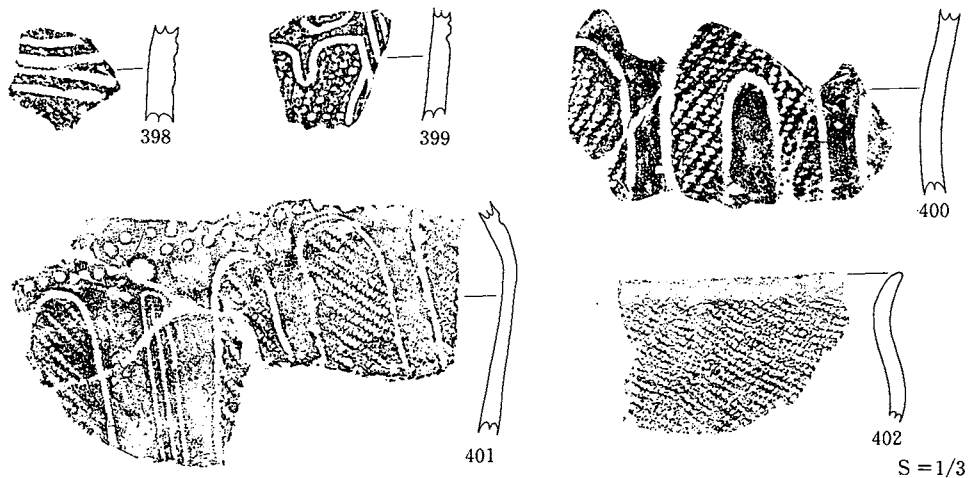
1. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
2. 10Y R5/8黄褐色土 なたくしまっている 粘性あり 小角礫が混入する

C L=360.100 m C'



1. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 炭・焼土が混入する
2. 5Y R4/8赤褐色土 焼土 非常になたくしまっている

第64図 III B9h住居跡



第65図 III B9h住居跡遺物

である。なお、本遺構から西側は牧草地として造成されており、造成時に削平をうけている。

埋土は2層に分けられ、上位が粘土質の褐色土、下位および壁際はIV層起源の黄褐色土で小角礫を混入し、かたくしまっている。床面はIV層中に形成され、小角礫を含むため小さな凹凸があるが、ほぼ平坦でかたくしまっている。床面には径5～38 cmの礫が散在する。柱穴は検出されなかった。

炉は床面中央やや西寄りの地点で、微小な炭化材と少量の焼土粒の広がりが見出された。付近に小礫が散在するが石囲炉かどうかは不明である。規模は径45 cm前後で、15 cmほど掘り込まれており、南側に少量の非常にかたくしまった焼土が存在する。

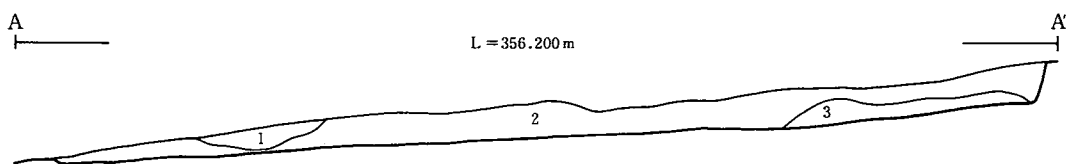
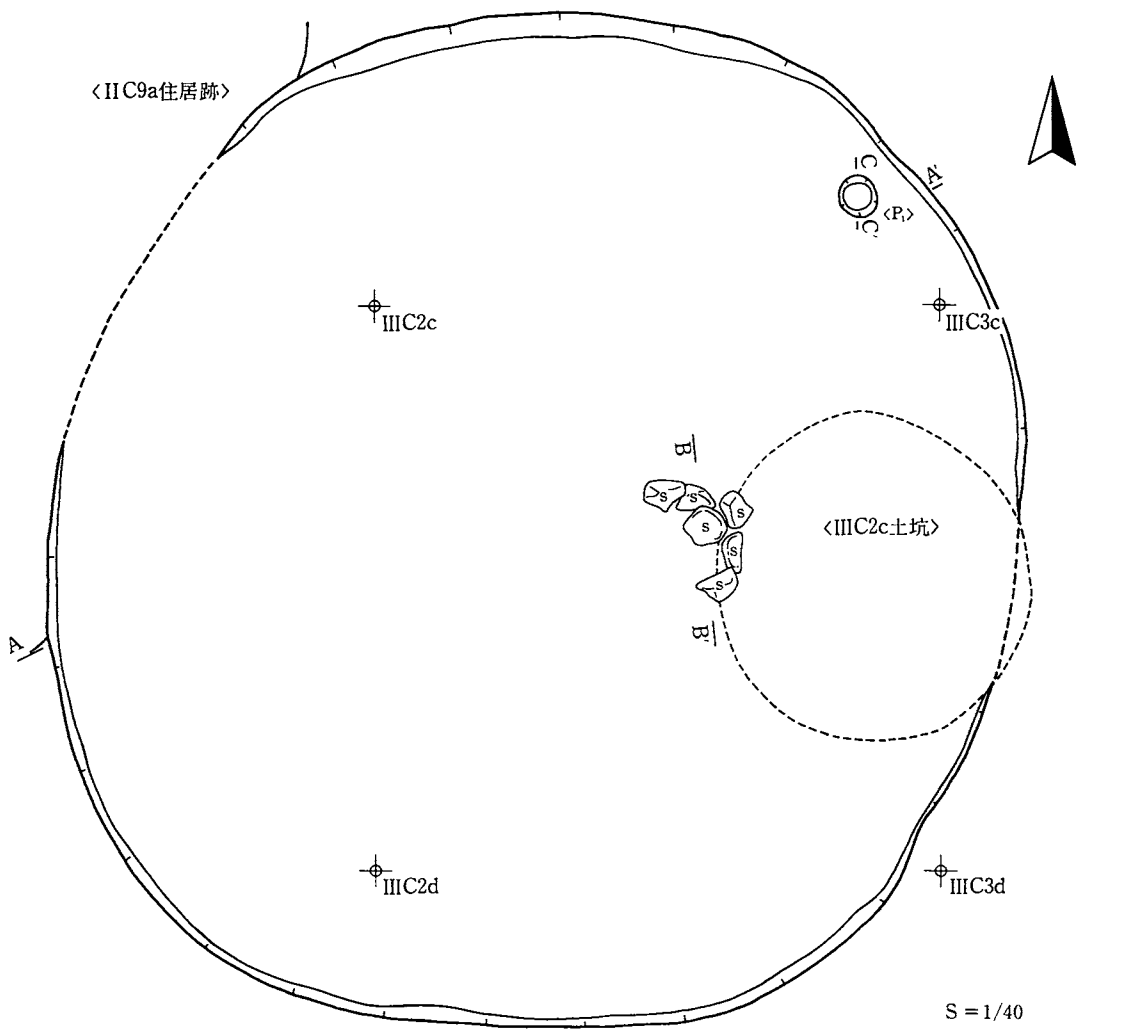
出土遺物（第65図、写真図版82）

398・399は地文上に沈曲線によって文様が描かれる土器である。398には弧状沈線が、399には曲折文が施文されている。400は充填縄文の沈線区画帯が逆U字状の文様を展開する土器である。401は沈線によって楕円あるいは逆U字状に区画され、区画内部に縄文が充填されている。また区画の上部には2種類の棒状の工具によって刺突が施されている。402は粗製の深鉢形土器でLR縦回転の単節斜行縄文が施されている。

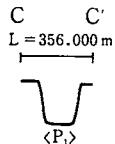
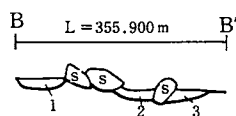
本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

III C 1 b 住居跡（第66図、写真図版28）

本遺構は調査区西側の緩斜面中央部に位置している。本遺構の北西にはII C 9 a 住居跡が、南側にはIII C 1 d 住居跡が存在する。II C 9 a 住居跡とは重複関係にあり、構築時期は本遺構の方が新しい。また、東壁の一部がIII C 2 c 土坑と、南壁の一部がIII C 1 d 土坑と重複関係に

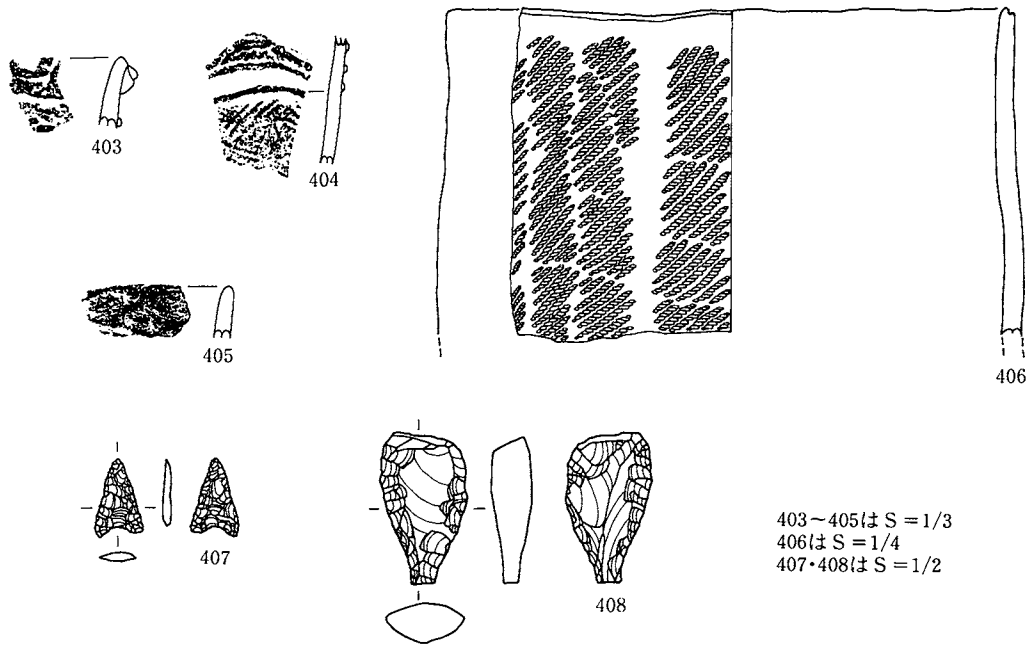


- 1. 10 Y R 4/4 褐色土 やわらかい やや粘性あり 少量の炭が混入する
- 2. 10 Y R 4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり
- 3. 10 Y R 5/6 黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり



- 1. 7.5 Y R 4/6 褐色土 しまっている 粘性あり 赤褐色焼土を混入する
- 2. 10 Y R 4/6 褐色土 やわらかい 粘性なし 赤褐色焼土を少量混入する
- 3. 10 Y R 4/6 褐色土 やわらかい 粘性なし

第66図 III C 1b 住居跡



第67図 III C1b住居跡遺物

あり、本住居跡の構築時期は2基の土坑より新しい。検出は少量の微小な炭化材を含む褐色土の広がりおよび炉石と思われる礫を検出したことによる。平面形は円形を呈し、規模は東西5.35 m、南北5.1 mを測る。壁はすべてⅢ層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁20 cm、西壁5 cm、南壁が9 cm、北壁が29 cmを測る。本住居跡は残存状況が悪く、牧草地造成のために削平されたものと思われる。

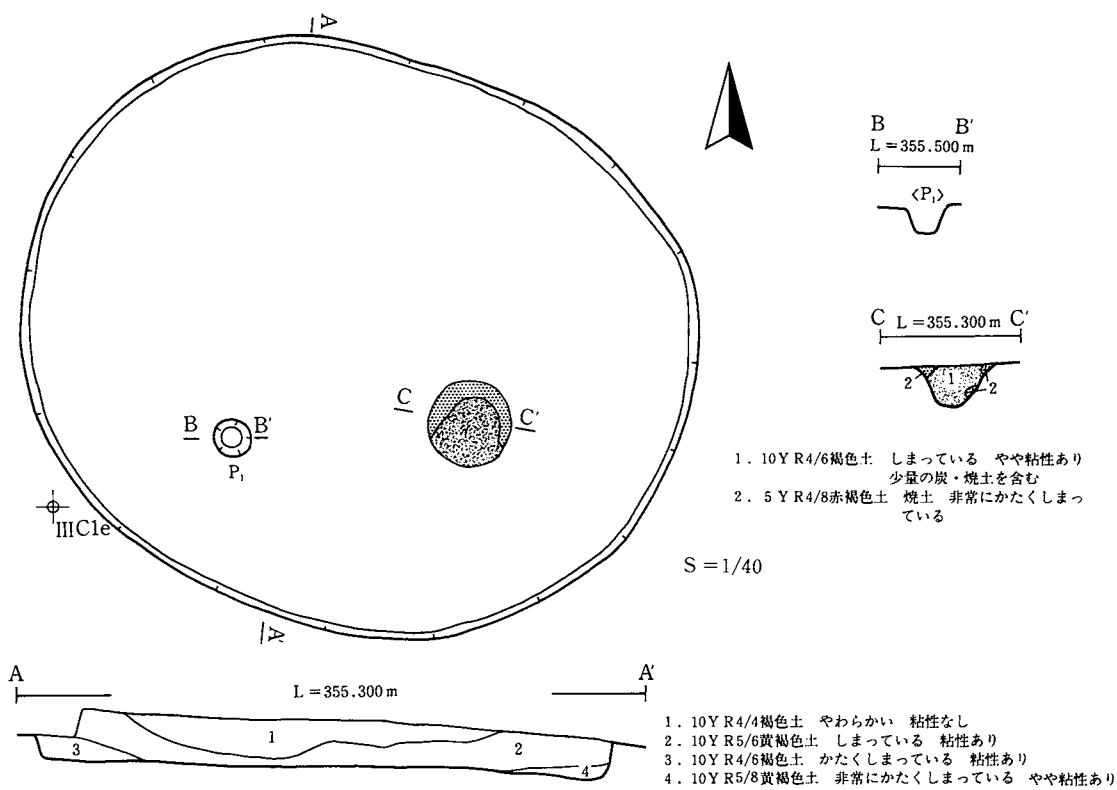
埋土は3層に分けられ、上位の一部に微小な炭化材を含む褐色土、下位の北東側に黄褐色の粘土質土がみられるほかは褐色の粘土質土が堆積している。床面はⅢ層中に形成され、南側にやや傾斜するが、平坦でしまっている。柱穴は北東の壁際で1基検出された。柱穴は円形の掘り方を有し、規模は22 cm、深さは22 cmを測る。柱痕の径は不明である。

炉は床面中央からやや東に寄った地点で石囲炉を検出した。径20 cm前後の礫が半円状に組まれている。西側の礫および礫の抜き取り痕は確認されなかった。炉内の焼土はあまり発達しておらず、褐色土に少量の焼土粒が含まれる程度である。

出土遺物（第67図、写真図版82）

403・404は粘土紐を貼り付けて文様を施している土器である。405は平縁の土器の口縁部破片で無文である。406は粗製の深鉢形土器でR L縦回転の単節斜行縄文が施文されている。

石器は2点出土している。407は凹基無茎鏃で、石質はチャート質粘板岩である。408は石錐で



第68図 III C 1 d住居跡

身部を欠損するが、身部は明瞭に作り出されていたものと推定される。石質は硬質泥岩である。

本遺構は出土遺物が少なく構築時期は不明である。

III C 1 d住居跡 (第68図、写真図版29)

本住居跡は調査区西側の緩斜面に位置している。本住居跡の北側にはIII C 1 b住居跡とIII C 1 d土坑が、南側にはIII C 2 e住居跡が、西側にはII C 9 d住居跡が存在する。検出はIII層上面においてトレンチを設定したところ焼土が検出されたことによる。平面形は楕円形を呈し、規模は東西3.6 m、南北3.0 mを測る。壁はすべてIII層中にあり、外傾して急角度で立ち上がる。壁高は東壁が22 cm、西壁23 cm、南壁は20 cmを測る。北壁はトレンチによって一部削られて残存部分は14 cmである。

埋土は4層に分けられ、上位はシルト質の褐色土、下位は粘土質の黄褐色土で壁際に粘土質の褐色土および黄褐色土がみられる。床面はIII層中に形成され平坦でかたくしまっている。柱穴は床面中央部から南西に寄った地点で1基検出された。柱穴は掘り方が円形で、規模は径が

20 cm、深さは 14 cmを測る。柱痕は確認されなかった。

炉は床面中央やや南東寄り地床炉が検出された。中央に少量の炭化材と焼土粒の混じった褐色土があり、その周りに三日月状に焼土が発達している。焼土の発達はかなりよく非常にかたくしまっている。

本遺構は出土遺物はなく、構築時期は不明である。

Ⅲ C 2 a 住居跡（第 69 図、写真図版 30）

本住居跡は調査区西側の緩斜面に位置している。本遺構は北側がⅢ B 2 j 住居跡と、東側がⅢ C 4 b 住居跡と、南側がⅢ C 3 b 住居跡と重複関係にある。構築時期の新旧関係は不明である。検出はⅢ層上面における黄褐色土の広がりによる。平面形は円形を呈すると思われ、規模は東西 5.17 m、南北 5.0 mを測る。壁はすべてⅢ層中に形成され、ほぼ直に立ち上がる。壁高は東壁 75 cm、西壁 13 cm、南壁 24 cm、北壁 71 cmを測る。

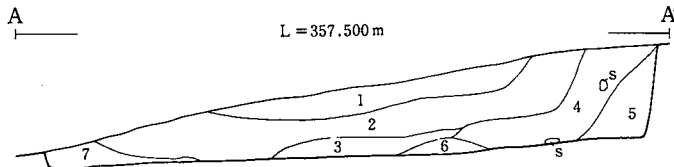
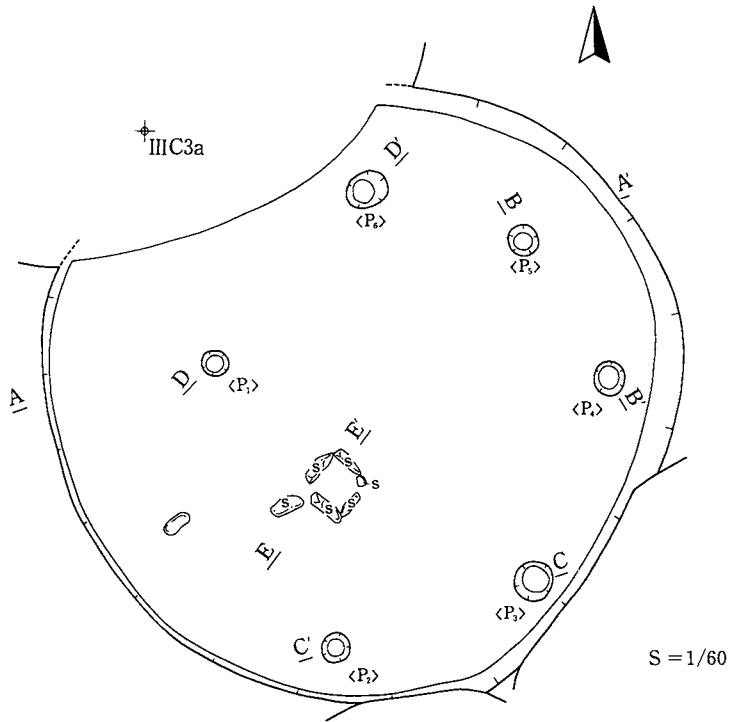
埋土は 7 層に細分されるが、下位に一部褐色土がみられるほかは黄褐色土が堆積している。床面はⅢ層中に形成され、平坦でかたくしまっている。柱穴は壁に沿って P₁～P₆が検出された。検出された柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、径は 23～35 cm、深さは 33～58 cmを測る。柱痕の径は不明である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	23 × 21	25 × 23	32 × 31	28 × 25	26 × 24	35 × 28
深さ cm	58	33	35	56	48	55

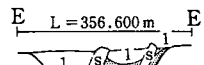
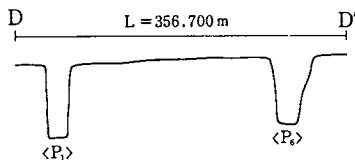
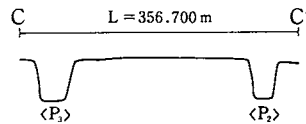
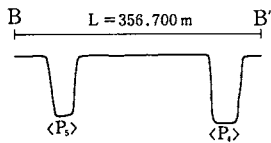
炉は床面中央からやや南寄りの地点で石囲炉が検出された。30 cm前後の礫が径 50 cm程に円形に組まれている。石組みの内部には少量の炭化材と焼土粒混じりの褐色土が存在し、その下に焼土が発達している。焼土は置かれた礫の下を越えて発達しており、炉の南西側に径 25 cm程の礫が 1 個存在することから複式炉あるいは炉の作り替えの可能性も考えられる。

出土遺物（第 70・71 図、写真図版 82・83）

409 は口縁部に、410 は体部に横位の平行沈線が施文されている。411 は口縁部に粘土紐が貼り付けられ、その下に棒状工具による刺突が施されている。412 は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器の口縁部破片で、平行沈線及び波状の沈線が施されている。413・414 はともに細い棒状の工具によって刺突が施されている。415 は隆帯によって渦巻状の文様が形作られる。416 は橋状に粘土紐が貼り付けられている。417～425 は沈線によって区画され、区画内に縄文が充填されている土器である。418 は区画内に刺突が施されている。424 は土器の表の無文帯と口

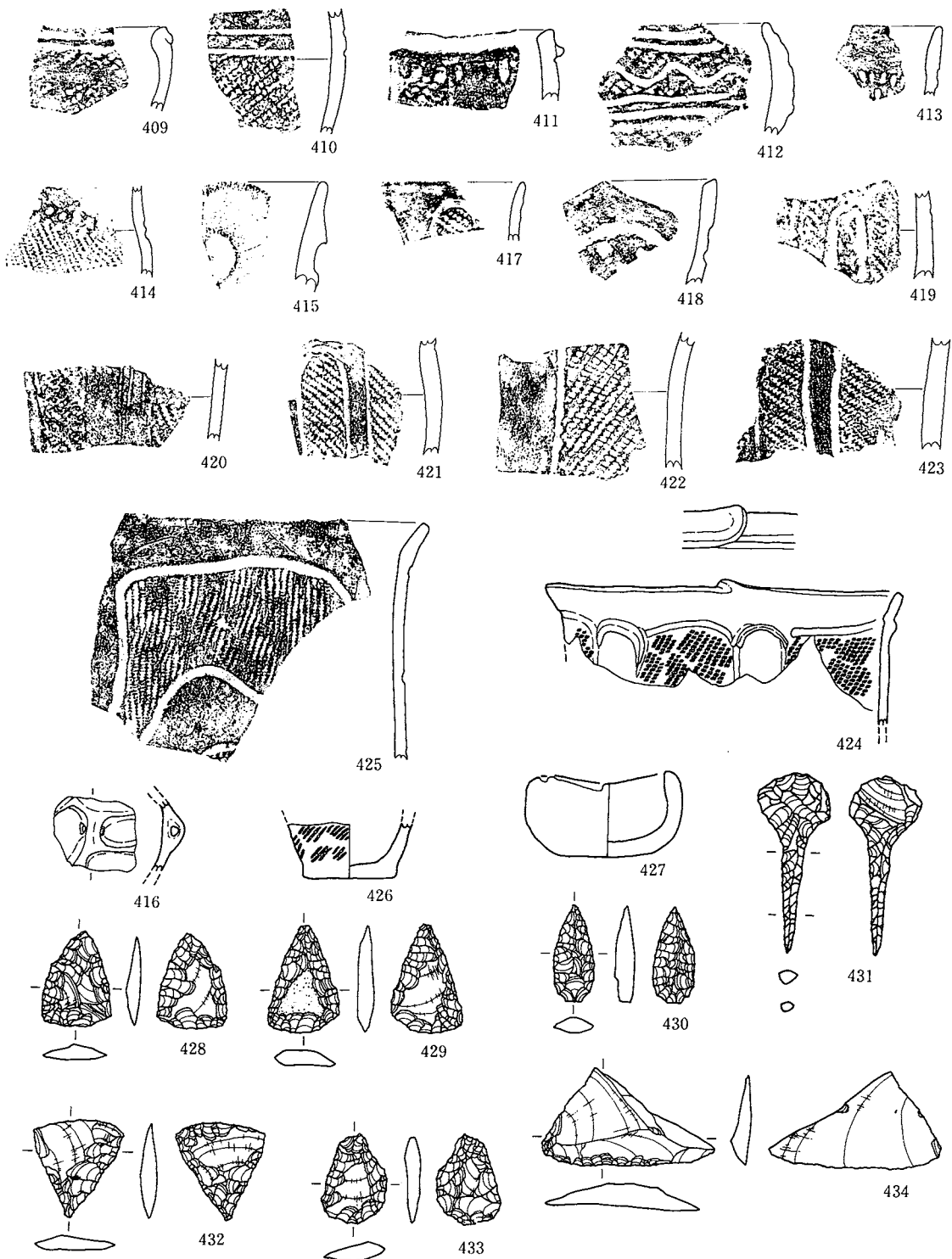


1. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている やや粘性あり
2. 10Y R5/8黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 少量の炭が混じる
3. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり 炭・焼土が混じる
4. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 少量の炭・焼土が混じる
5. 10Y R5/8黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり
6. 10Y R5/8黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり 炭・焼土が混じる
7. 10Y R5/6黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり



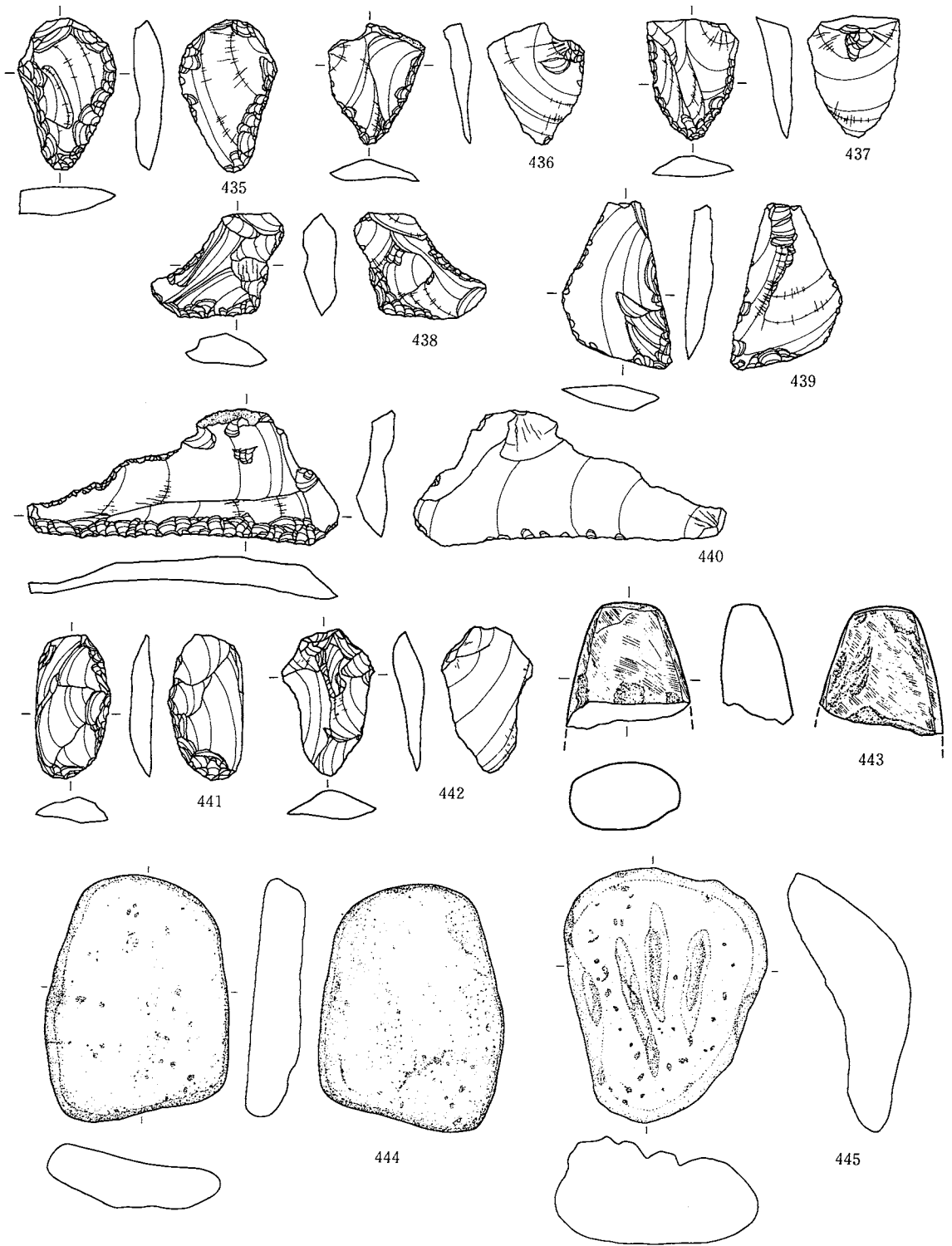
1. 10Y R4/4褐色土 やわらかい やや粘性あり 炭・焼土が混入する
2. 5Y R4/8赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし

第69図 III C2a住居跡



416・424・426・は S = 1/4
 427-434は S = 1/2
 他は S = 1/3

第70図 III C2a住居跡遺物(1)



435~443は S = 1/2
 444・445は S = 1/3

第71図 III C2a住居跡遺物(2)

縁部の裏側に鱗状の突起をもつ。426 は粗製の深鉢形土器の底部付近でR L縦回転の単節斜行縄文が施文されている。427 は土製品で、無文のミニチュア土器である。

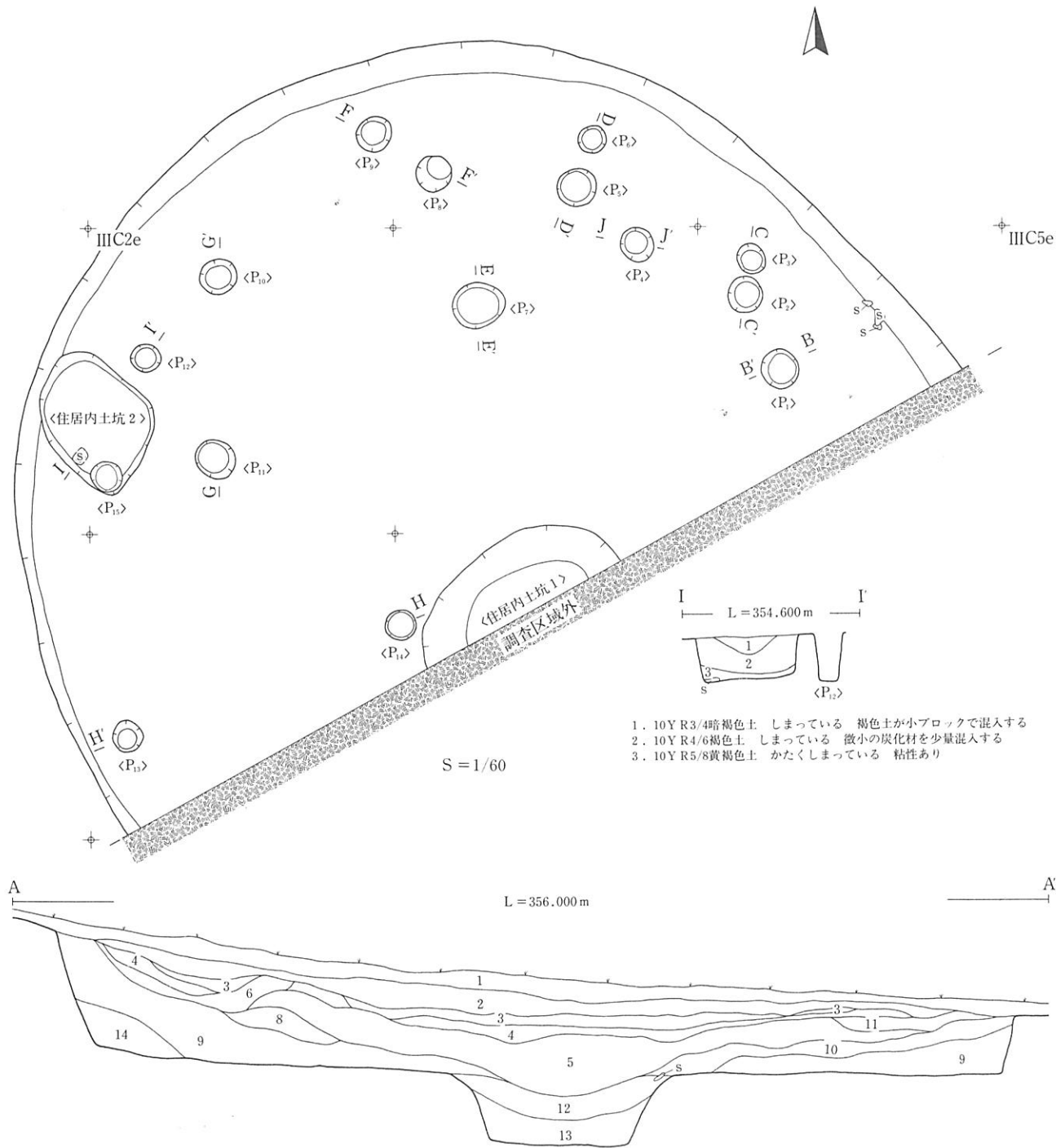
石器は 18 点出土している。428～430 は石鏃である。428・429 は平基無茎鏃、430 は凸基有茎鏃で、すべて粘板岩で作られている。431・432 は石錐で、431 は身部が明瞭に作り出されており、432 はつまみの一部を身部としている。433～442 は不定形石器で、433 は全縁に刃部が形成されている。434・435 は一つの側辺にのみ刃部を有し、436～439 は二つの刃部が隣り合っている。440 は二つの刃部が直接には隣り合わず、二次調整が片面からのみ施されている。441・442 は微小剥離を有する。443 は磨製石斧で中央部付近から刃部にかけて欠損している。455 は有溝砥石で、石質は多孔質の両輝石安山岩（熔岩）である。

Ⅲ C 2 e 住居跡（第 72 図、写真図版 31）

本住居跡は調査区西側の緩斜面南側に位置している。本住居跡の西側にはⅡ C 9 d 住居跡・Ⅱ C 9 d 住居跡が、北側にはⅢ C 1 b 住居跡・Ⅲ C 1 d 住居跡が、東側にはⅢ C 4 d 住居跡がそれぞれ存在する。検出は表土除去後のⅢ層上面における黒褐色土の広がりによる。平面形は遺構が調査区域外に続くため詳細は不明であるが、検出部分から円形を呈するものと推定される。規模は東西 9.4 m を測り、今回の調査で検出された住居跡のなかで最大のものである。壁はⅢ層およびⅣ層中に形成され、やや外傾して急角度で立ち上がる。壁高は東壁が 111 cm、西壁が 58 cm、北壁が 72 cm を測る。

埋土は 10 層に細分される。上位は黒褐色のシルト質土で層厚 20 cm 前後で広がっており、その下に火山灰と思われる砂質のにぶい黄褐色土が最大で 15 cm ほどに堆積している。中位は暗褐色のシルト質土が、中位から下位にかけては黒褐色のシルト質土と褐色土の粘土質土が堆積している。また、東壁際にはⅣ層起源のにぶい黄褐色土がみられ、壁の崩落土と思われる。床面はⅤ層上面に形成されており、細かな凹凸がみられるがほぼ平坦で非常にかたくしまっている。床面からは柱穴 P₁～P₁₅ と住居内土坑 2 基が検出された。柱穴は円形あるいは楕円形の掘り方を有し、規模は径が 29～52 cm、深さ 19～84 cm を測る。15 基の柱穴のうち深さが 40 cm 以上の P₁・P₂・P₄・P₈・P₁₀・P₁₂・P₁₃ と住居内土坑 2 の底部から検出された P₁₅ が支柱穴と思われる。柱痕の径は不明である。

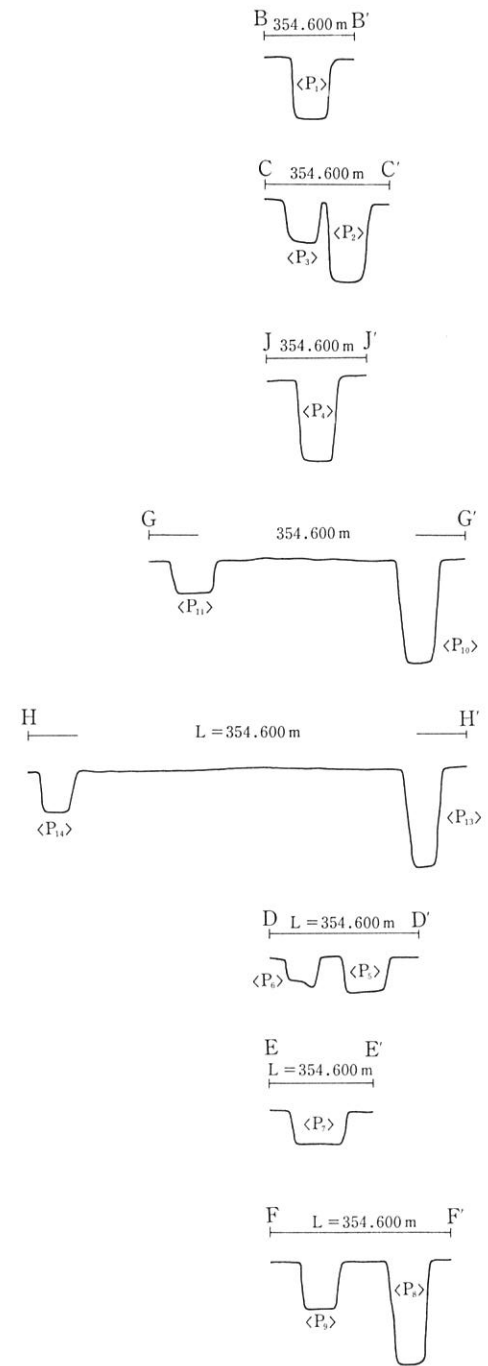
住居内土坑 1 は床面のほぼ中央に位置すると思われる、調査区域外に続くことから詳細は不明であるが、平面形は円形あるいは楕円形を、断面形はピーカー状を呈するものと推定される。検出された部分の規模は開口部の長径が 2.16 m、底部の長径が 1.35 m で、床面からの深さは 0.61 m を測る。埋土は上位が暗褐色のシルト質土で、下位は褐色の砂質シルトである。双方とも水分を多く含んでいる。住居内土坑 2 は西壁際に位置し、平面形は隅丸方形形状で断面形は



1. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 褐色土が小ブロックで混入する
2. 10Y R4/6褐色土 しまっている 微小の炭化材を少量混入する
3. 10Y R5/8黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

1. 10Y R3/2黒褐色土 表土 やわらかい 粘性なし 植物根が多数混入する
2. 10Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10Y R5/4にぶい黄褐色土 十和田 a 降下火山灰 しまっている 粘性なし
4. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性あり
5. 10Y R2/3黒褐色土 しまっている 粘性あり
6. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり
7. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり 暗褐色土をまだらに含む

8. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材をごく少量混入する
9. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性あり 炭化材をごく少量混入する
10. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性あり 黒褐色土をまだらに含む
11. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性あり 少量の炭化材を含む
12. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性あり 小角礫を含む
13. 10Y R4/6褐色土 砂質 しまっている 粘性なし 水分を多く含む
14. 10Y R5/4にぶい黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり



第72図 III C2e住居跡

ピーカー状を呈する。規模は開口部が1.2 × 0.98 m、底部が1.07 × 0.86 m程で、深さは40 cmである。底部はほぼ平坦で南壁沿いに径15 cmの礫が1個みられた。また、南の隅からは柱穴P₁₅が検出されている。この柱穴P₁₅は本住居跡の柱穴間の間隔からいって支柱穴と思われるが、土坑との関係は不明である。住居内土坑2の埋土は上位が暗褐色のシルト質土、中位が粘土質の褐色土で下位には黄褐色の粘土質土が堆積している。

本住居跡からは炉が検出されなかったが、調査区域外に続く部分に存在する可能性もある。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	40 × 36	35 × 35	30 × 27	35 × 32	40 × 37	29 × 27	52 × 45	35 × 35	37 × 34
深さ cm	48	63	33	67	31	19	26	84	38

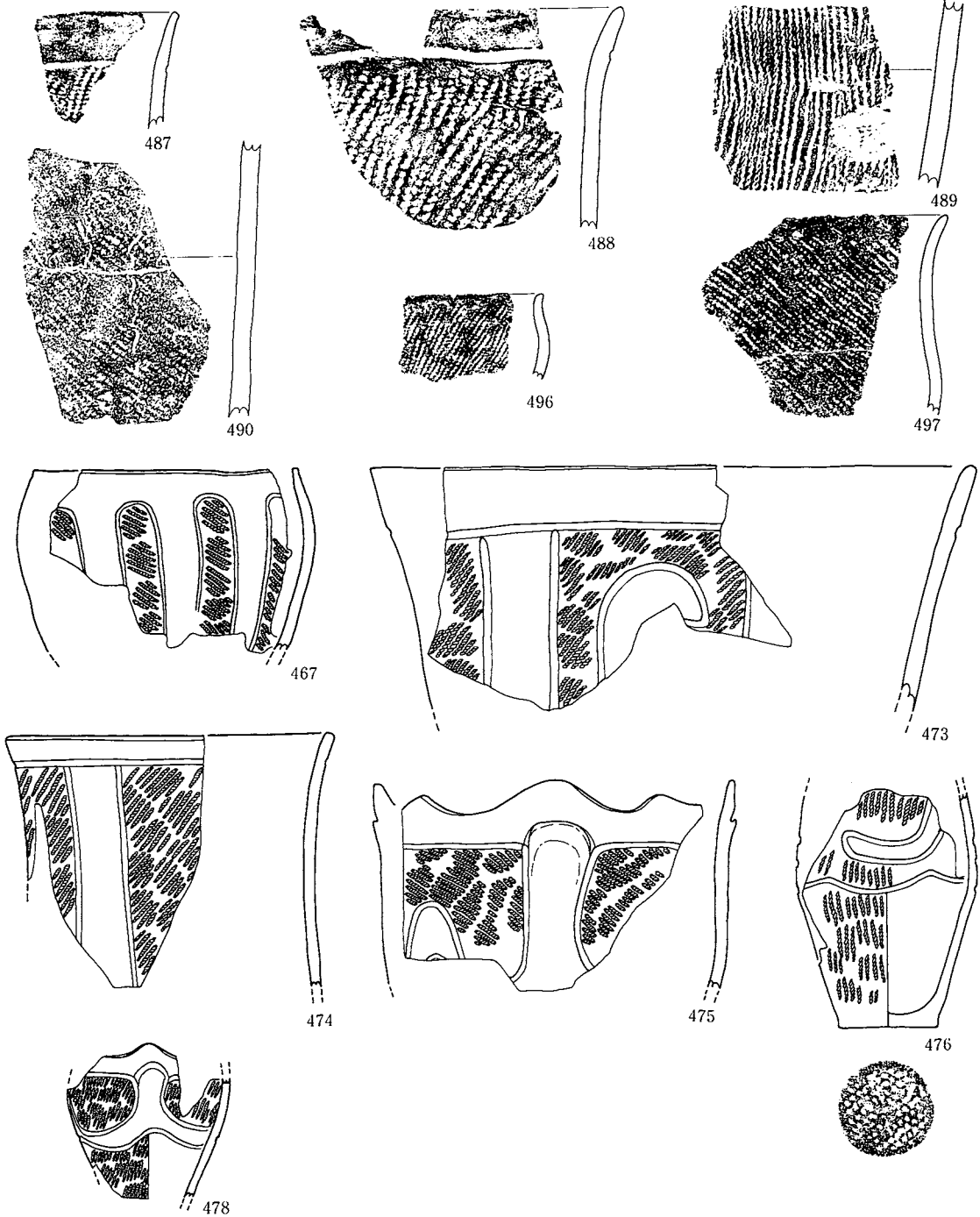
No.	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	38 × 34	40 × 36	30 × 27	32 × 31	30 × 30	32 × 28
深さ cm	82	27	47	78	33	(32)

出土遺物（第73～80図、写真図版84～89）

446は口唇部に粘土紐が縦位に連続して貼りつけられている。447は山形の突起部分で、沈曲線により文様が施されている。また、裏面にも三叉文状の隆帯による文様が見られる。448は隆沈線により曲折文が描かれる土器である。449は波状口縁をもつ土器の口縁部で、隆帯による円形の文様と刺突が施されている。450は横位に平行して粘土紐が貼り付けられている。451は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器で、二重の隆帯によって口縁部と体部が区画され、口縁部には波状の沈線が施文されている。452～461は竹管や棒状の工具によって刺突が施された土器である。452～460は口縁部あるいは突起部分に刺突が施されている。461は体部の沈線区画内に刺突が施されている。462は地文上に縦位の沈線が施文されており、逆U字状の文様の一部と推定される。463～467は楕円あるいは逆U字状に沈線によって区画され、区画内部に縄文が充填される大木9式の土器である。468・469は鰭状の突起をもつ土器である。470～485・503は無文の沈線区画帯が文様を構成する土器で、いずれも大木10式の土器と推定される。475・479・481・485には鰭状の突起が貼り付けられている。また476・483は底部に網代痕をもつ。これらは口縁部が平縁あるいは波状口縁で、頸部がややくびれ口縁部が外傾するものと口縁部が内湾する器形のものがある。486は口縁部が無文で把手が付けられている壺形土器である。487・488は口縁部に沈線で区画された無文帯をもつ土器である。489～502・504は粗製土器である。489には撚糸文が、490には綾絡文が施されている。496にはR L R縦

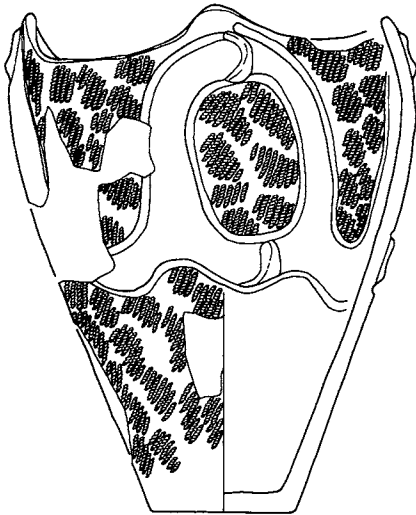


第73图 III C2e住居跡遺物(1)

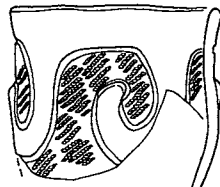


487~490・496・497は S = 1/3
 他は S = 1/4

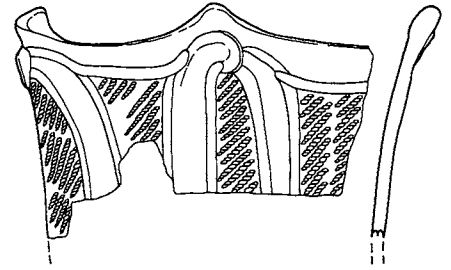
第74図 III C2e住居跡遺物(2)



479



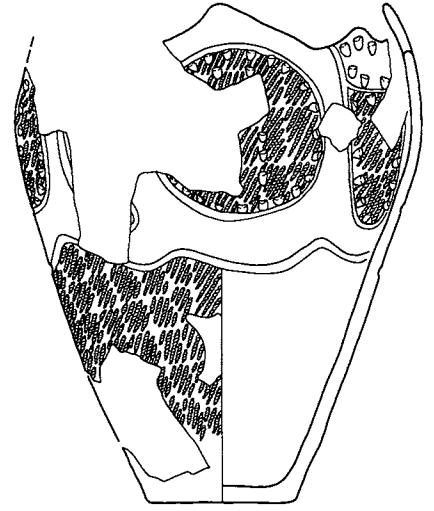
480



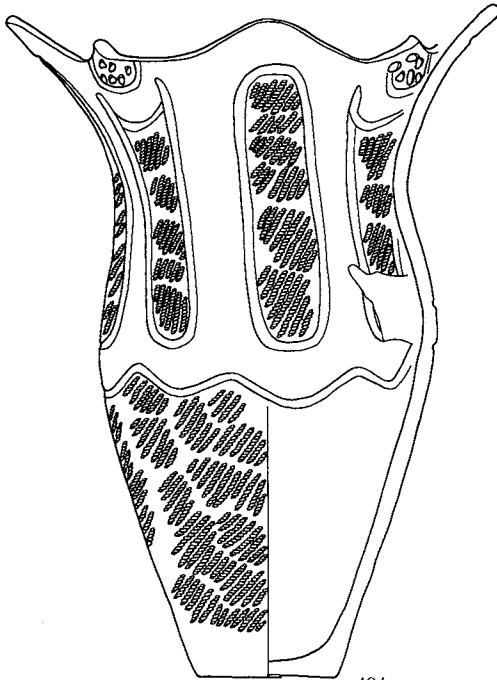
481



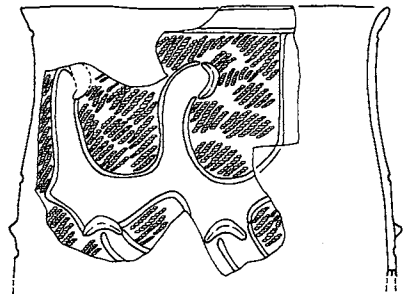
482



483



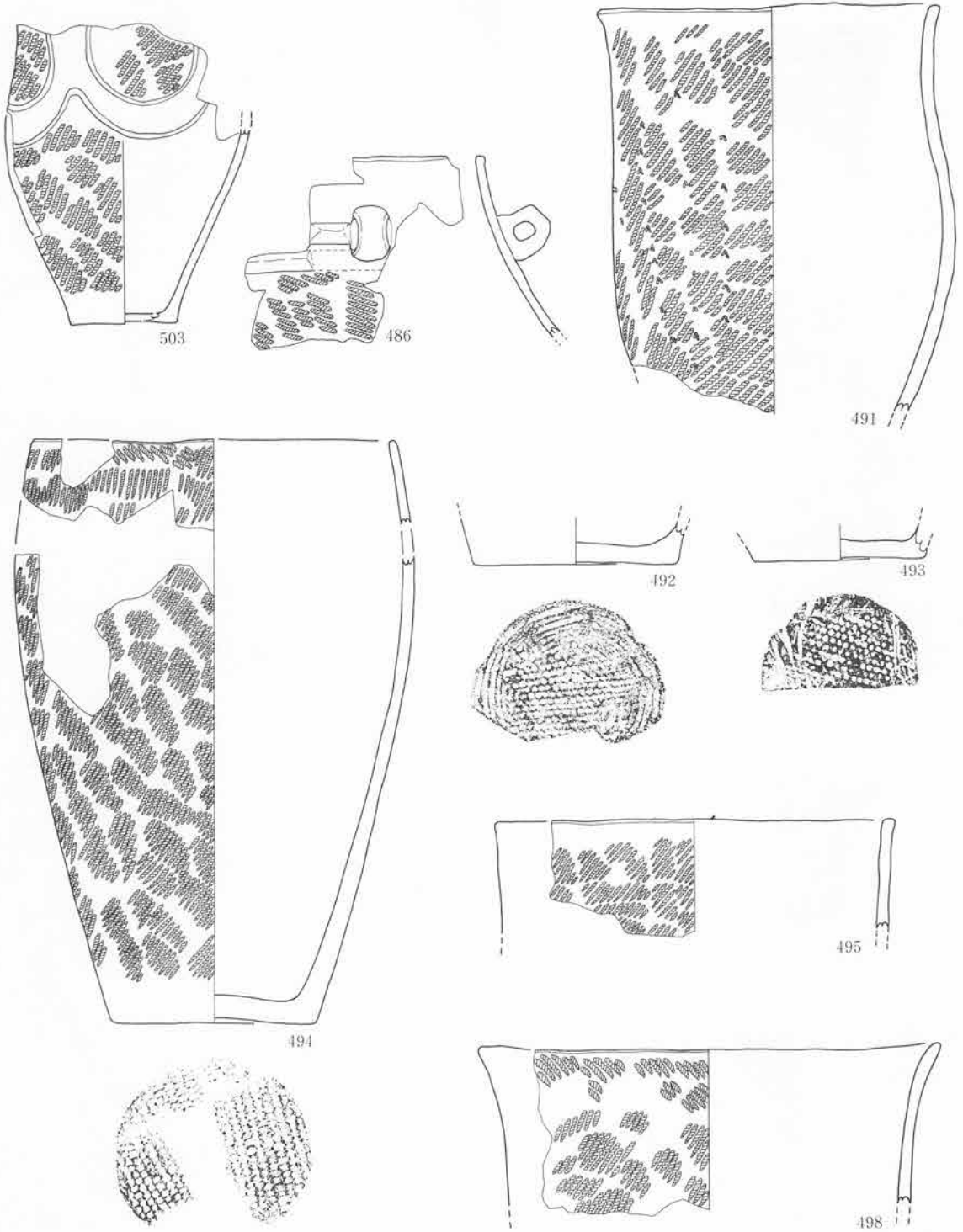
484



485

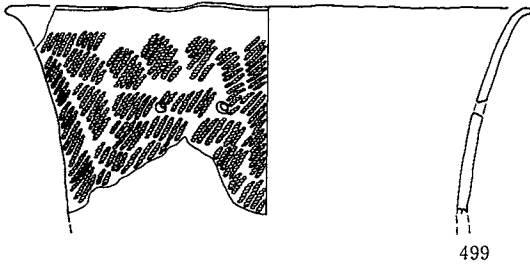
S = 1/4

第75図 III C2e住居跡遺物(3)

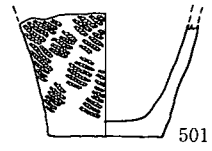


S = 1/4

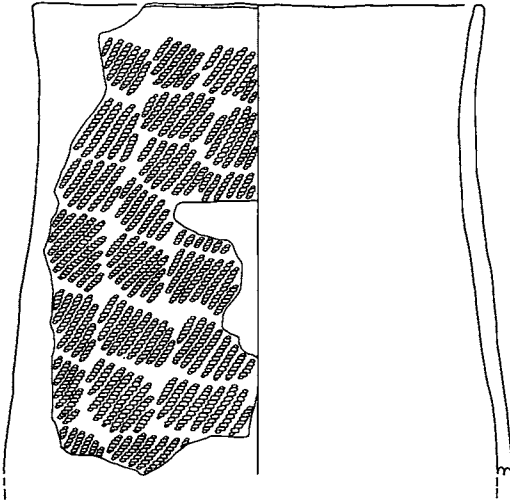
第76図 III C2e住居跡遺物(4)



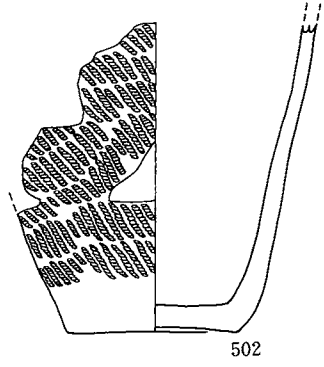
499



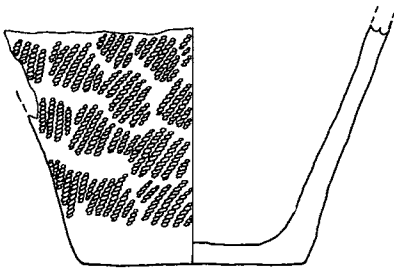
501



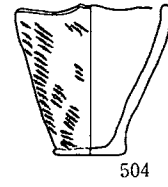
500



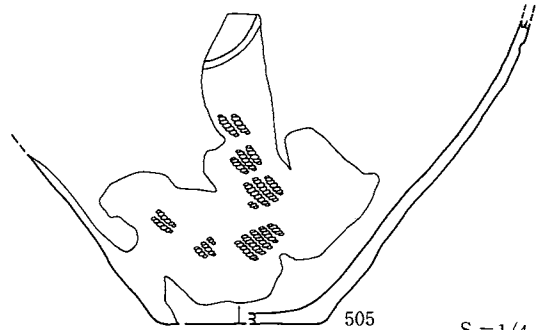
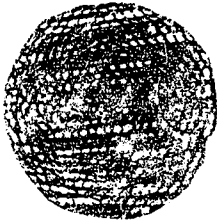
502



500



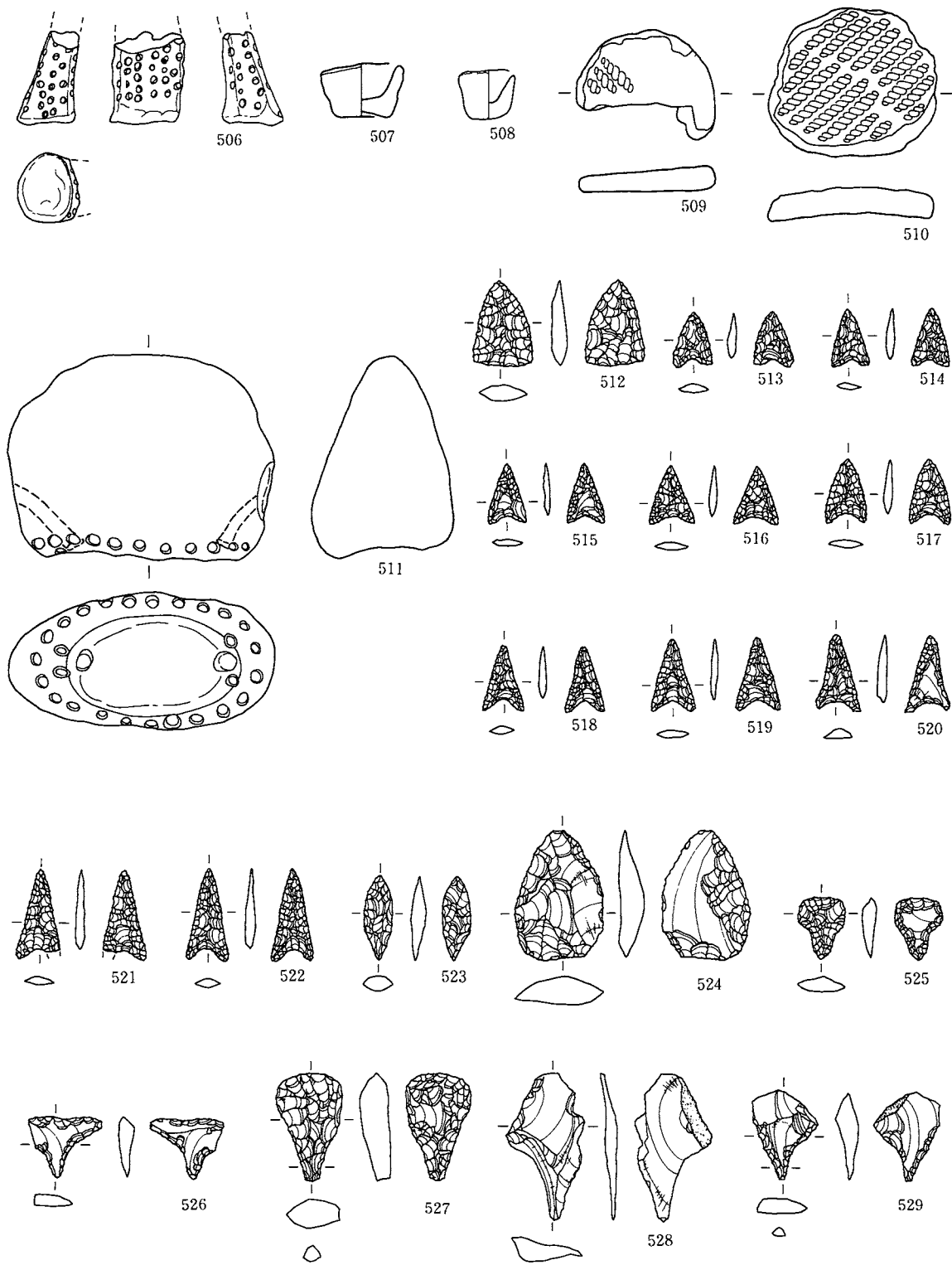
504



505

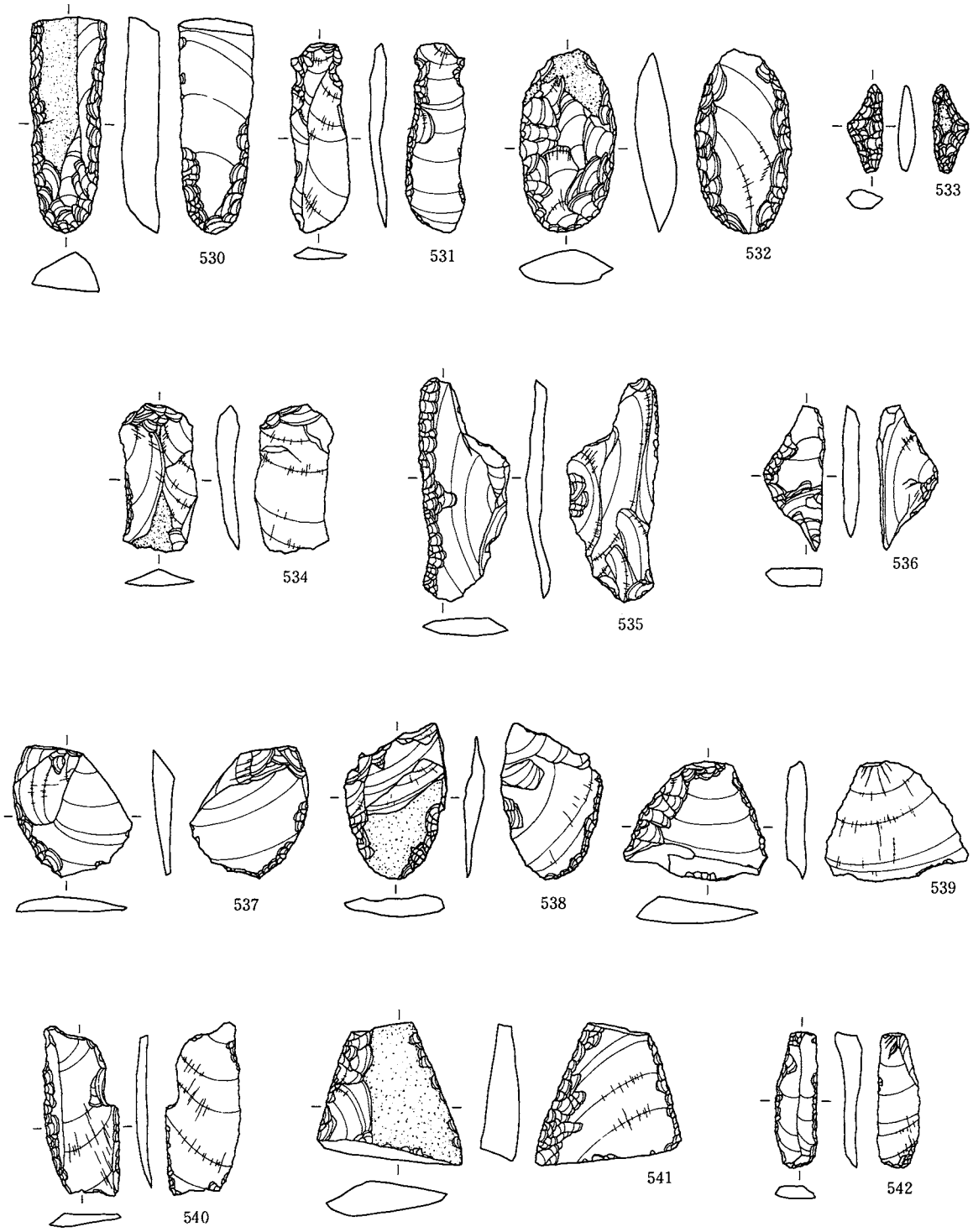
S = 1/4

第77图 III C2e住居跡遺物(5)



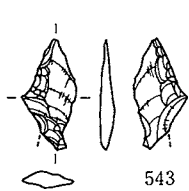
第78图 III C2e住居跡遺物(6)

S = 1/2

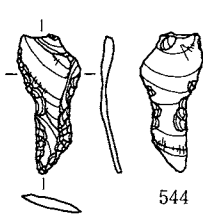


S = 1/2

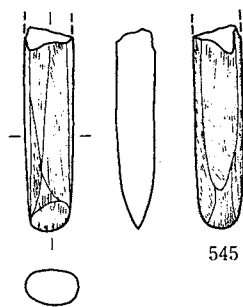
第79図 III C2e住居跡遺物(7)



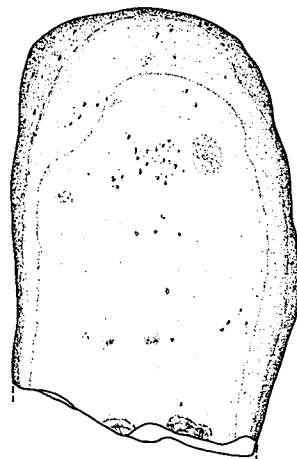
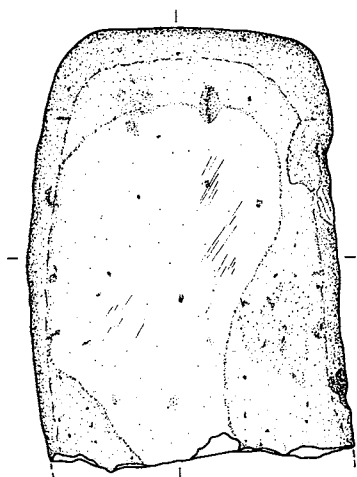
543



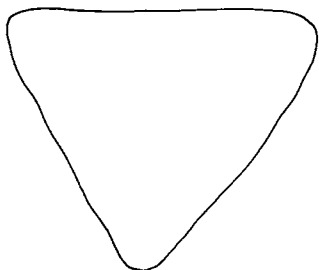
544



545



546



543~545は S = 1/ 2
546は S = 1/4

第80図 III C2e住居跡遺物(8)

回転の複節斜行縄文が、497には無節斜縄文が、他は単節斜行縄文が施文されている。また、491には曲折した原体の圧痕が規則的に付くが、これは原体の端の処理によるものと思われる。492～494・500は底部に網代痕をもち、502は底部に木葉痕をもつ。505は浅鉢形の土器で沈線によって区画された無文帯が文様を構成するものと推定される。

土製品は6点出土している。506は土偶の脚の部分と推定されるもので、全体に刺突が施されている。507・508はミニチュア土器である。509・510は円盤状土製品で土器片を二次利用している。511は三角壺土製品（三角柱状土製品）で、側面に斜めに貫通孔をもつ。底部には刺突が施されている。

本遺構からは石器が35点出土している。512～523の12点は石鏃である。512は平基無茎鏃、513～522は凹基無茎鏃、523は尖基有茎鏃である。石質は硬質泥岩、珪質泥岩、チャート、粘板岩、チャート質粘板岩、流紋岩などである。524は尖頭器で、木葉状を呈する。525～529は石錐で、525～527は身部が明瞭に作り出されるもので、528・529は身部が明瞭に作り出されずつまみ部の一部を身部とするものである。530・531は縦長の石匙で、530はつまみ部を欠く。532は篋状石器で石質はチャート質粘板岩である。

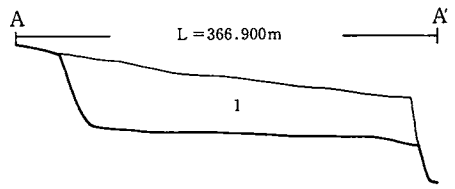
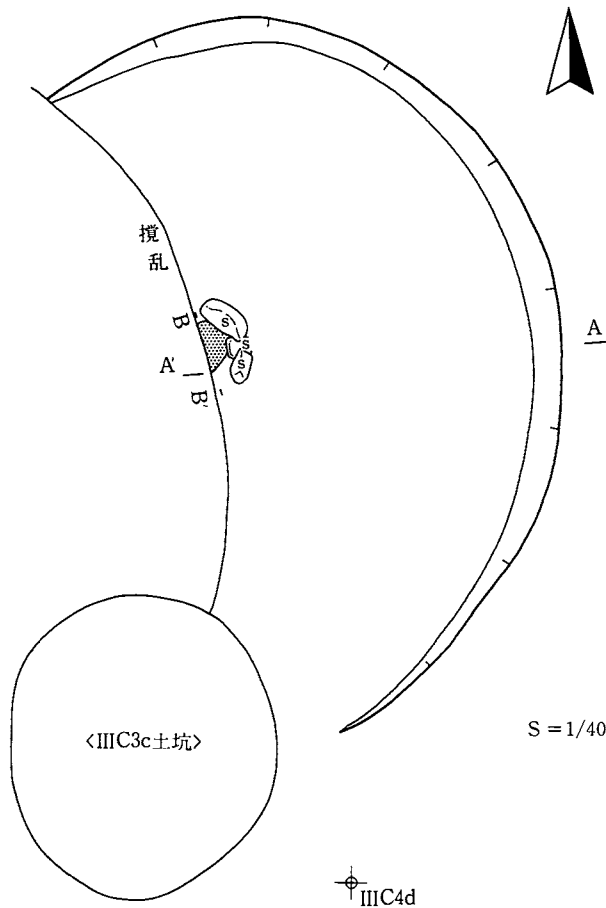
533～544は不定形石器である。533はほぼ全縁に二次調整を加えて刃部を形成している。534～537は一側辺にのみ刃部を有する。538は二つの刃部が隣り合う。539～542は二つの刃部が直接には隣り合わない石器である。543・544は縁辺の一部に抉入の刃部が形成されている。545は小型の磨製石斧で、上半が欠損している。546は磨石で三角柱状の形態をもち、その3辺に使用痕が認められる。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定されるが、他の住居跡に比べ規模が大きく、土偶や三角壺土製品などの他の遺構では見られない遺物が出土していることから、住居以外の集会所的な場の可能性もある。

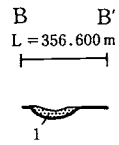
Ⅲ C 3 b 住居跡（第81図、写真図版32）

本住居跡は調査区西側の緩斜面に位置している。本住居跡はⅢ C 3 b - 2 住居跡およびⅢ C 4 b 住居跡と重複関係にあり、構築時期は本住居跡の方が新しい。また、南側にはⅢ C 3 c 土坑が重複して存在するが新旧関係は不明である。本住居跡の北側にはⅢ C 2 a 住居跡が、西側にはⅢ C 1 b 住居跡が、南側にはⅢ C 4 d 住居跡が存在する。なお、本住居跡の西半分は疑似現象精査の攪乱と流失により失われている。このためⅢ C 1 b 住居跡とも重複関係にあると思われるが新旧関係は不明である。

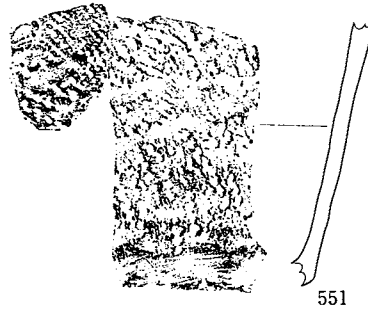
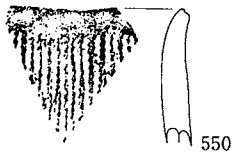
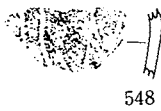
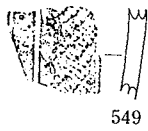
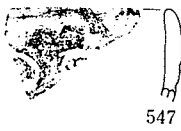
本住居跡の検出は、Ⅲ層上面における微小な炭化材を含む褐色土の広がりや疑似現象精査時に焼土を検出したことによる。平面形の詳細は攪乱のため不明であるが、残存部分から円形を



1. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性なし 少量の炭・焼土を含む



1. 5Y R4/8赤褐色土 焼土 かなかくしまっている 粘性なし 褐色土が混入する



S = 1/3

第81図 III C3b住居跡(遺構・遺物)

呈すると思われる。規模は径 3.7 m 前後と推定される。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 37 cm、北壁が 21 cm である。

埋土は微小な炭化材を少量含む褐色土の単層でしまっている。床面はⅢ層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。柱穴は検出されなかった。

炉は床面中央部と思われる地点で石囲炉を検出した。長さ 13～29 cm の礫が組まれており、西側は攪乱と流失により失われている。焼土はあまり発達しておらず褐色土と焼土粒が混じりあっている。

出土遺物（第 81 図、写真図版 90）

547 は沈線によって曲折文が施されている。548・549 は沈線区画内に縄文が充填される。550 は撚糸文が施文される深鉢形土器の口縁部である。551 は粗製の深鉢形土器の体部から底部付近の破片である。摩滅が激しく、地文は不明である。

本遺構は形態から縄文時代中期の住居跡と推定されるが、遺物が乏しく明確に時期を特定することは難しい。

Ⅲ C 3 b - 2 住居跡（第 82 図、写真図版 33）

本住居跡はⅢ C 3 b 住居跡と重複関係にあり、他の住居跡との位置関係はⅢ C 3 b 住居跡と同様である。検出は疑似現象精査時に焼土を検出したことによる。平面形は残存する部分から円形を呈すると思われる。規模は径 4.3 m 前後と推定される。

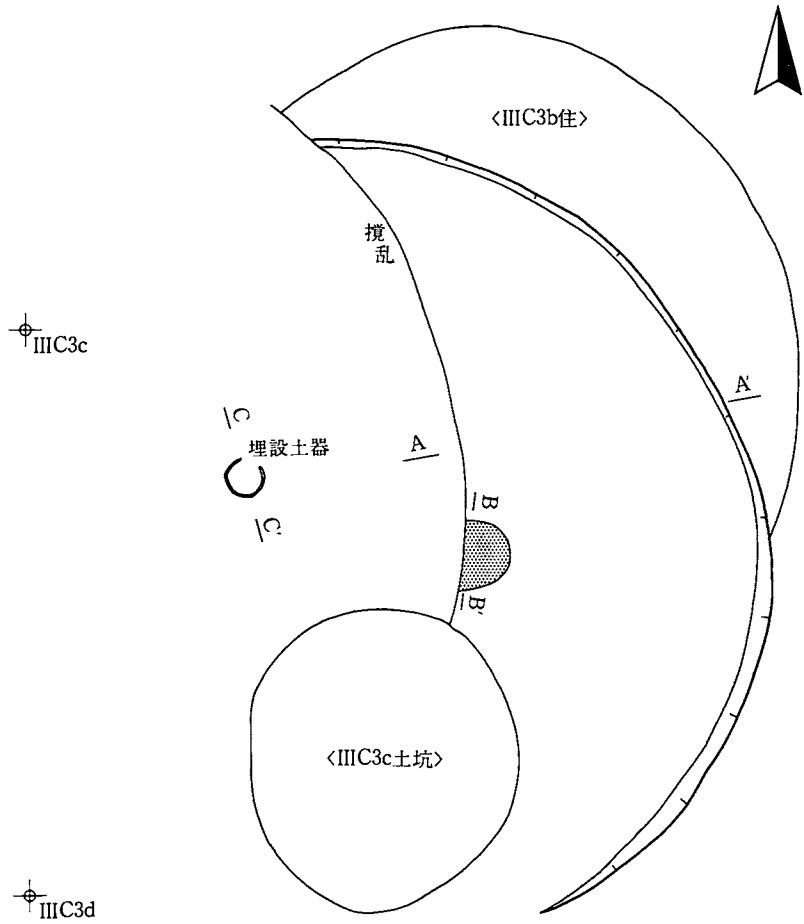
壁はⅢ層中にあり、最大で 28 cm を測る。埋土は褐色の粘土質土でしまっている。床面はほぼ平坦でかたくしまっている。住居跡状の疑似現象精査時に埋設土器が検出されたが、検出面が床面と同じ高さであることから本住居跡に伴うものと考えられる。埋設土器は深鉢の口縁部から体部までが正立して埋め込まれており、周囲の土には焼土は見られなかった。柱穴は検出されていない。

炉は床面中央からやや東寄りと思われる地点から地床炉が検出されている。炉は径が 35 cm 前後で楕円形を呈するものと思われる。焼土の発達は良く、かたく焼きしまっている。

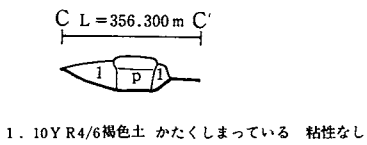
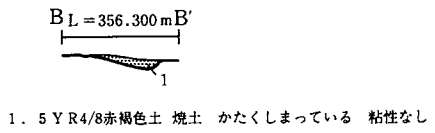
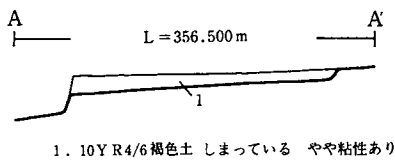
出土遺物（第 83 図、写真図版 90）

552 は埋設土器である。器形は口縁部が強く内湾する器形の土器で、口縁部は L R 横回転の単節斜行縄文の上に粘土紐が波状に貼り付けられている。体部には L R 縦回転の単節斜行縄文が施される。553 は体部が逆 U 字状を呈すると思われる沈線によって区画され L R 縦回転の単節斜行縄文が充填されている。

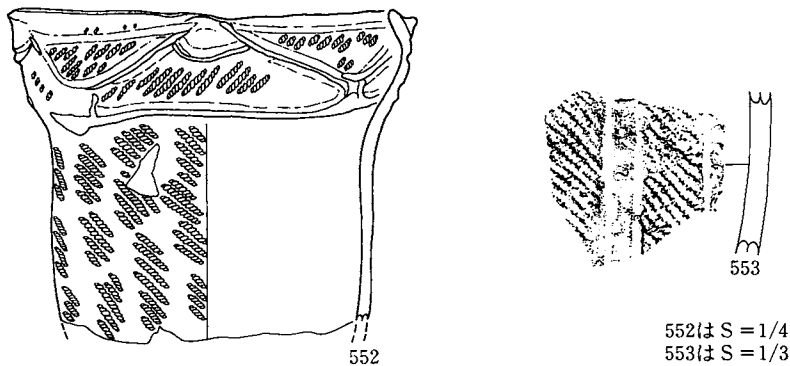
本遺構は出土遺物から縄文時代中期中葉から後葉にかけての住居跡と推定されるが、遺物が乏しく断定できない。



S = 1/40



第82図 III C3b-2住居跡



第83図 III C3b-2住居跡遺物

III C 4 b 住居跡 (第 84 図、写真図版 34)

本住居跡は調査区西側の緩斜面に位置している。本住居跡はIII C 3 b 住居跡・III C 5 a 住居跡と重複関係にあり、遺構の新旧関係はIII C 3 b 住居跡・III C 5 a 住居跡より古い。検出はIII層上面における黄褐色土の広がりによる。平面形の詳細は重複関係にあるため不明であるが、残存部分から円形を呈すると思われる。規模は東西 4.85 m、南北 4.66 mを測る。壁はIII層中にあり、外傾して立ち上がる。壁高は東壁 40 cm、西壁 28 cm、南壁 11 cm、北壁 17 cmである。

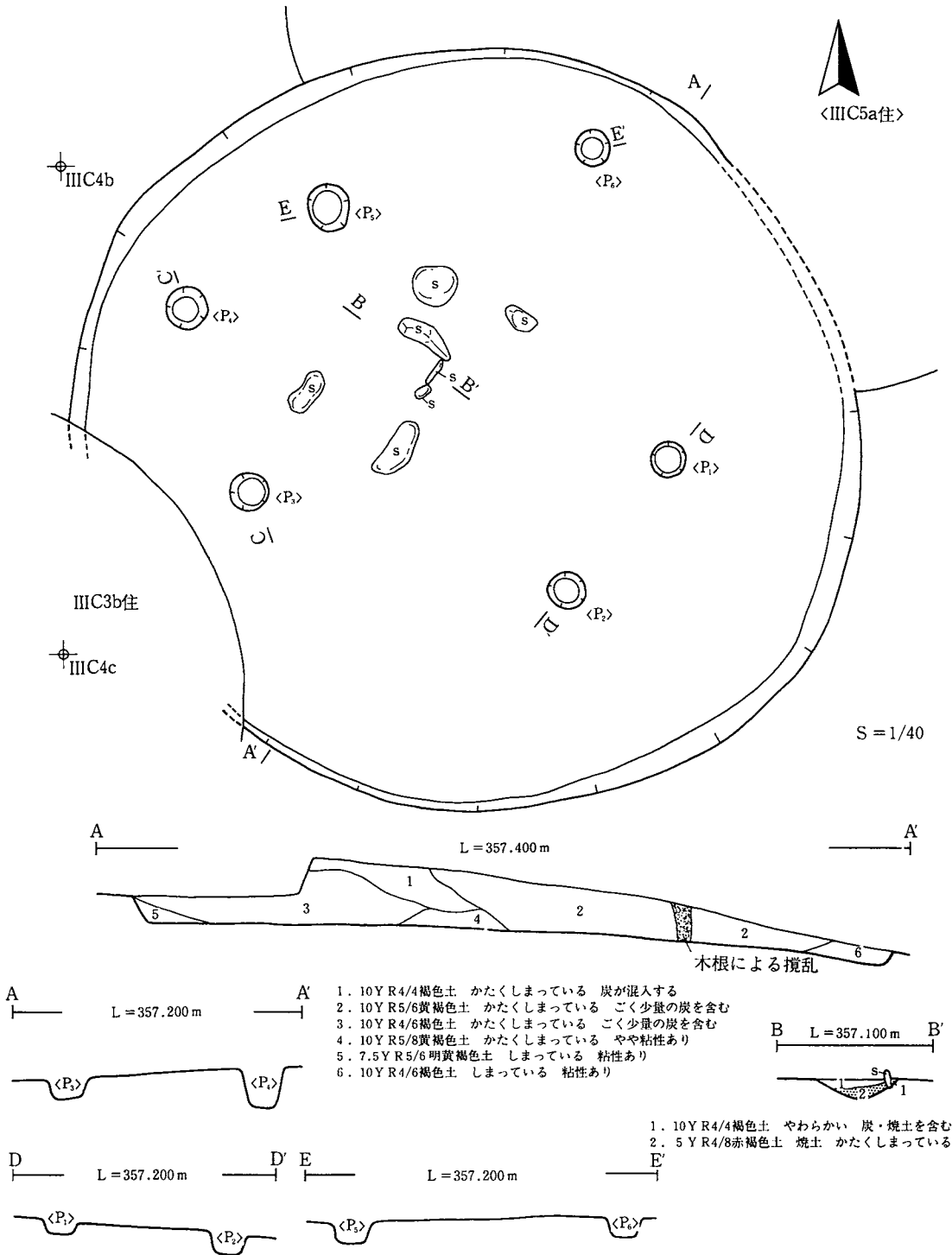
埋土は6層に細分され、粘土質の黄褐色土が主体で、壁に近い部分に褐色土が見られる。床面はIII層中に形成され、平坦でかたくしまっている。床面中央部付近には長さ 13 ~ 40 cmの礫が散在している。床面の壁に近い地点から柱穴P₁~P₆が検出された。柱穴は円形の掘り方を有し、径 22 ~ 30 cm、深さ 9 ~ 25 cmを測る。柱痕の径は確認されなかった。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	22 × 22	23 × 23	25 × 24	28 × 26	30 × 26	23 × 22
深さ cm	9	13	14	25	14	12

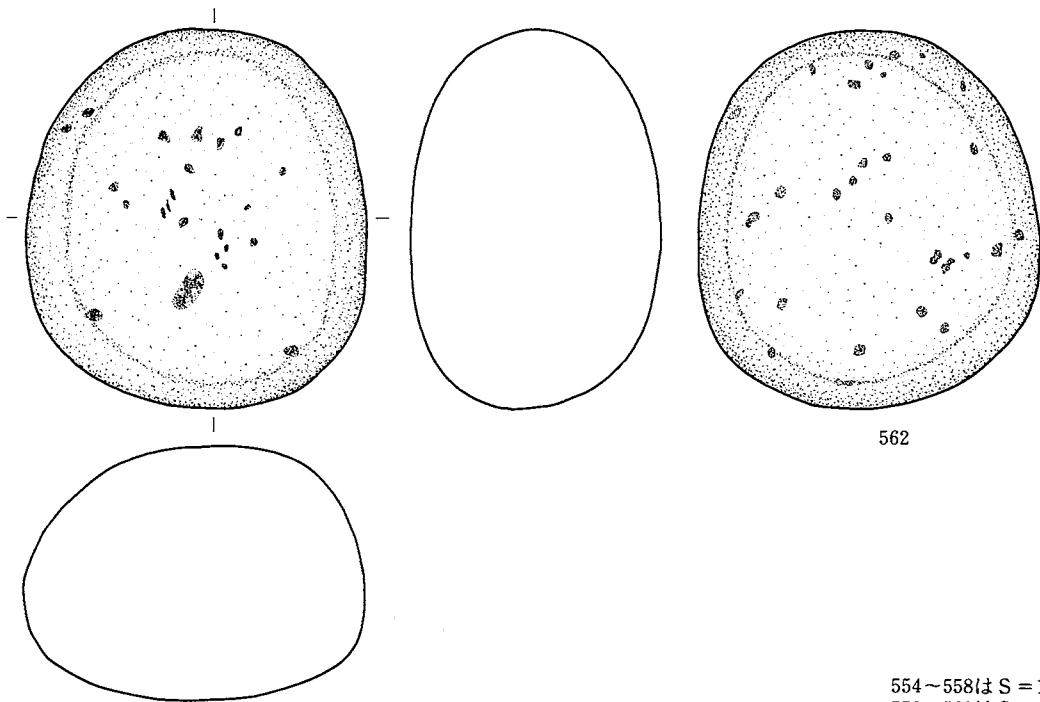
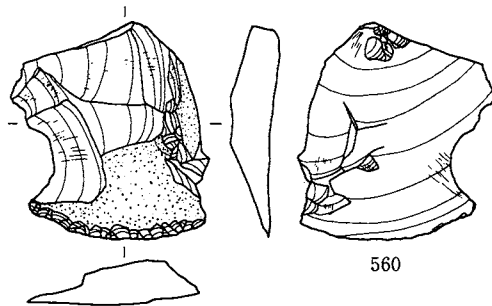
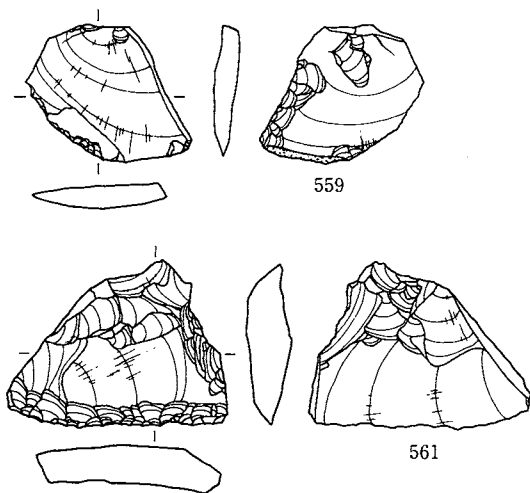
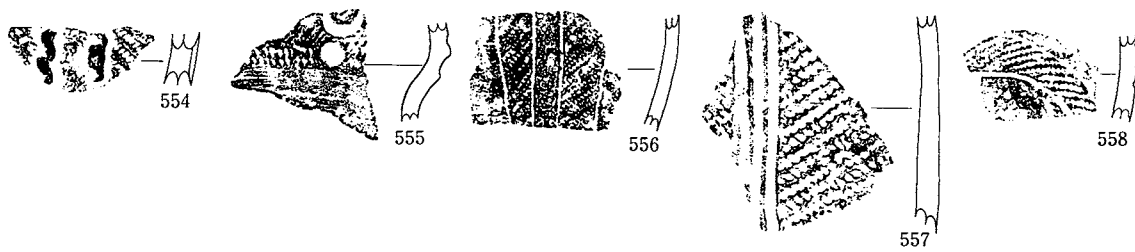
炉は床面中央からやや北に寄った地点で石囲炉を検出した。炉は西側の石が欠けているが、付近に散在する礫が炉石と思われる。炉の周囲からは炉石の抜き取り痕は確認されなかった。炉内の焼土はよく発達し、かたくしまっている。焼土の上位には微小な炭化材と焼土粒混じりの褐色土が堆積していた。

出土遺物 (第 85 図、写真図版 90)

554 は地文の斜行縄文上に粘土紐が縦位の波状に貼り付けられている。555 は頸部に二重の刺突と円形の窪みが施文され、口縁部には沈曲線が施される。556・557 は体部が縦位の沈線



第84図 III C4b住居跡



554~558は S = 1/3
 559~562は S = 1/2

第85図 III C4b 住居遺物

によって区画され縄文が充填されている。558は沈線区画の充填縄文帯がアルファベット文状の曲折文を展開する土器である。

石器は4点出土している。559～561は不定形石器である。これらはすべて一つの側辺にのみ刃部を構成するもので、二次調整は片面からのみ施されている。562は磨石で全面が使用されている。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

Ⅲ C 4 d 住居跡（第86図、写真図版35）

本住居跡は調査区西側の緩斜面南寄りに位置している。本住居跡の北側にはⅢ C 3 b - 2住居跡が、西側にはⅢ C 2 e 住居跡が存在する。検出はⅢ層上面において比較的やわらかな褐色土の広がりを確認したことによる。

平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西3.05 m、南北2.72 mを測る。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が50 cm、西壁が32 cm、北壁が67 cm、南壁が23 cmである。

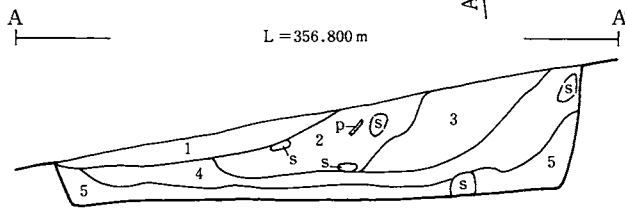
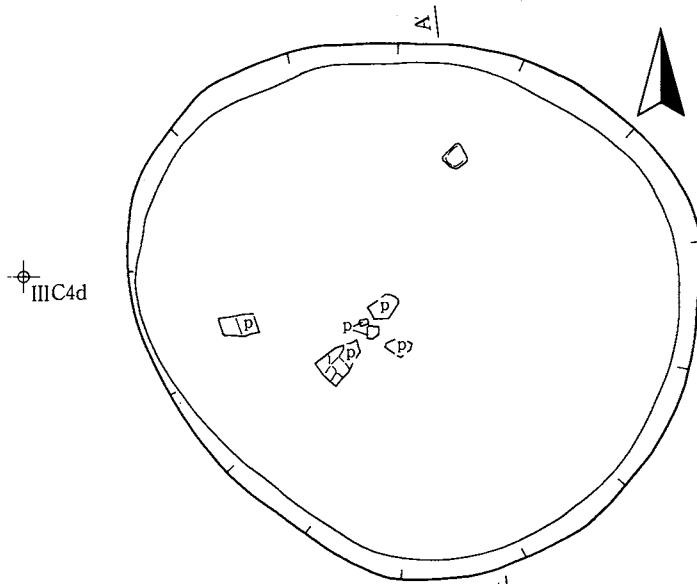
埋土は5層に細分され、上位はシルト質の褐色土、中位は微小な炭化材を混入する明褐色土、下位は粘土質の明褐色土である。床面はⅢ層中に形成されており、平坦でしまっている。床面からは若干の土器片が出土している。柱穴および炉は検出されなかった。

出土遺物（第86・87図、写真図版91）

563は深鉢形土器の口縁部で横位の原体圧痕が施されている。564は口縁部下に粘土紐が貼り付けられる。565は横位の隆沈線が施文されている。566～569は沈線によって楕円あるいは逆U字状に区画され、文様内部に縄文が充填されるものである。570・571は無文の沈線区画帯がアルファベット状の文様を展開する土器で、570には鱗状の突起が貼り付けられている。572と573は横位の沈線によって区画され、口縁部が無文帯となっている。574～579は粗製の土器である。574・575は撚糸文が施され、他は単節斜行縄文が施文されている。

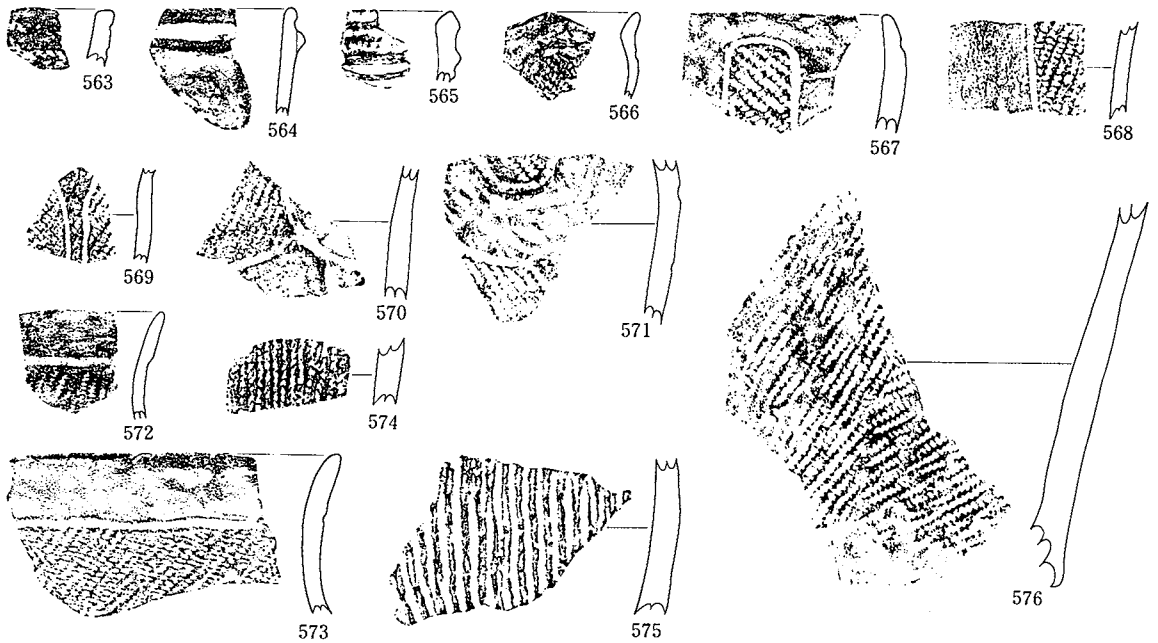
本遺構からは9点の石器が出土している。580～582は石鏃である。580は凹基無茎鏃、581は凸基有茎鏃で、582は基部が欠損しており、形は不明である。583・584は石錐で、どちらも身部が明瞭に作り出され、つまみ部との区別がなされている。585～587は縦長の石匙で、585は両側辺と末端の三辺に刃部を有し、586・587は両側辺に刃部を有する。588は不定形石器で、一つの側辺にのみ刃部を有し、二次調整は片面から施されている。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉から末葉の遺構と考えられる。明瞭な床面をもち、床面が土器が出土していることから本遺構は住居跡として登録したが、炉や柱穴等が検出されないことから竪穴状遺構の呼称も考えられる。



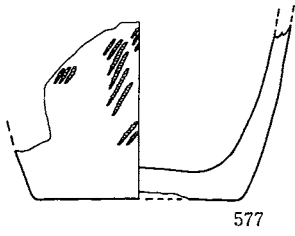
S = 1/40

1. 7.5Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10Y R4/4褐色土 やわらかい 粘性なし
4. 7.5Y R5/6明褐色土 しまっている 微小な炭が混入する
5. 7.5Y R5/8明褐色土 しまっている やや粘性あり

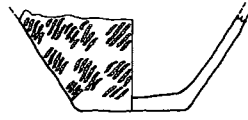


S = 1/3

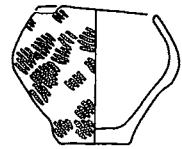
第86図 III C4d住居跡遺構・遺物(1)



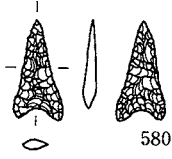
577



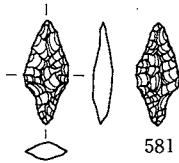
578



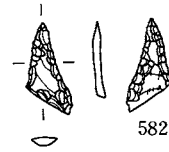
579



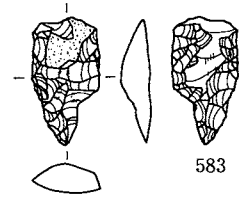
580



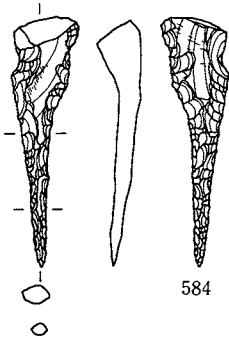
581



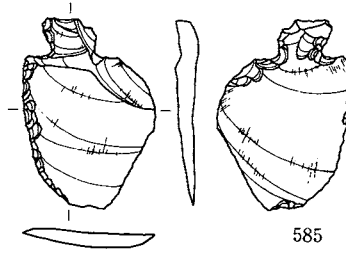
582



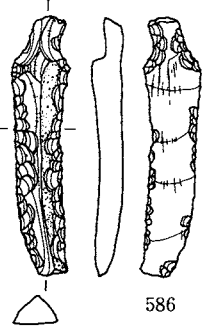
583



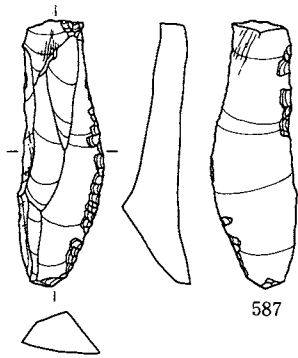
584



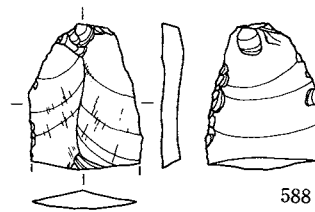
585



586



587



588

577~579は S = 1/4
580~588は S = 1/2

第87図 III C4d住居跡遺物(2)

Ⅲ C 5 a 住居跡 (第 88 図、写真図版 36)

本住居跡は調査区西側の緩斜面中央に位置している。本住居跡はⅢ C 4 b 住居跡と重複関係にあり、構築時期は本住居跡のほうが新しい。また、本住居跡の西側にはⅢ C 2 a 住居跡が存在する。検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形を呈するが、南西壁はトレンチ設定のため削平してしまった。規模は東西 5.93 m、南北 5.56 m を測る。壁はⅢ層中にあり、外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 40 cm、西壁が 33 cm、南壁が 36 cm、北壁が 43 cm である。

埋土は 5 層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位から下位にかけては少量の微小な炭化材が混入するシルト質の黒褐色土で北側の壁に近い部分には粘土質の褐色土および黄褐色土が見られる。床面はⅢ層中に形成されており、平坦でかたくしまっている。床面からは P₁～P₇ の 7 基の柱穴が検出された。柱穴は円形および楕円形の掘り方を有し、その規模は径 26～34 cm、深さは 20～48 cm を測る。柱痕の径は不明である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	34 × 30	26 × 26	28 × 27	31 × 30	27 × 24	27 × 24	32 × 29
深さ cm	28	44	28	48	38	35	20

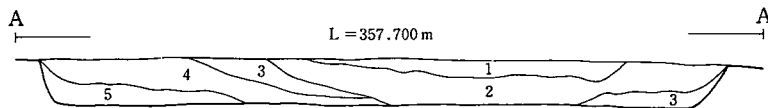
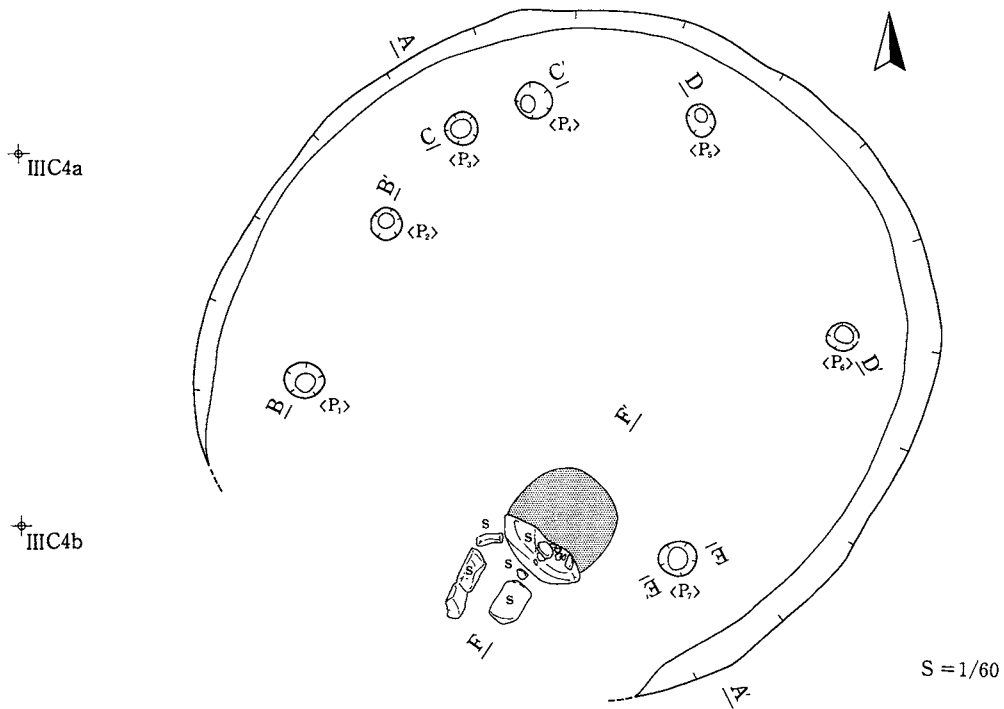
炉は床面中央から南側に寄った地点で焼土を検出した。焼土の南側には 80 × 58 cm の石が埋め込まれており、焼土側は火熱をうけている。石の南側にも礫がならび、底部から少量の焼土が検出されたことから複式炉的に使用された可能性もある。焼土は石から半円状に広がっており、よく発達している。焼土の下には黄褐色の粘土質土がみられたが、貼ったものかどうかは不明である。

出土遺物 (第 89 図、写真図版 92)

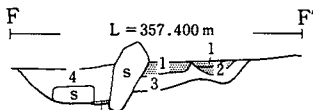
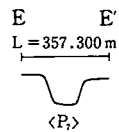
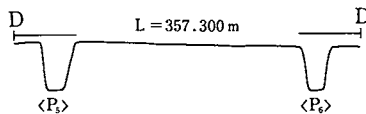
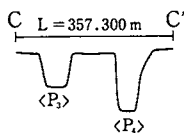
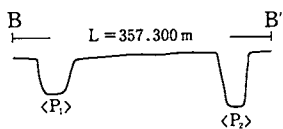
土器の出土は少量である。589 は平縁の深鉢形土器の口縁部で、口縁部は無文、口縁部下に L R 縦回転の単節斜行縄文が施されている。590 は縦位の複数の沈線によって区画され、縄文が充填される。591 は地文上に逆 U 字状の文様が沈線によって施文されている。594 は充填縄文の沈線区画帯が文様を展開する土器である。593 は土製品の一部と推定されるが全体の形状等は不明である。残存部分是指状を呈し、無文である。

石器・石製品は 4 点出土している。594・595 は不定形石器で、594 は二つの刃部が隣り合う。595 は微小剥離を有する。596 は磨石で、上下両面が使用されている。597 は石棒で一部欠損しており、残存長は 33.7 cm である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

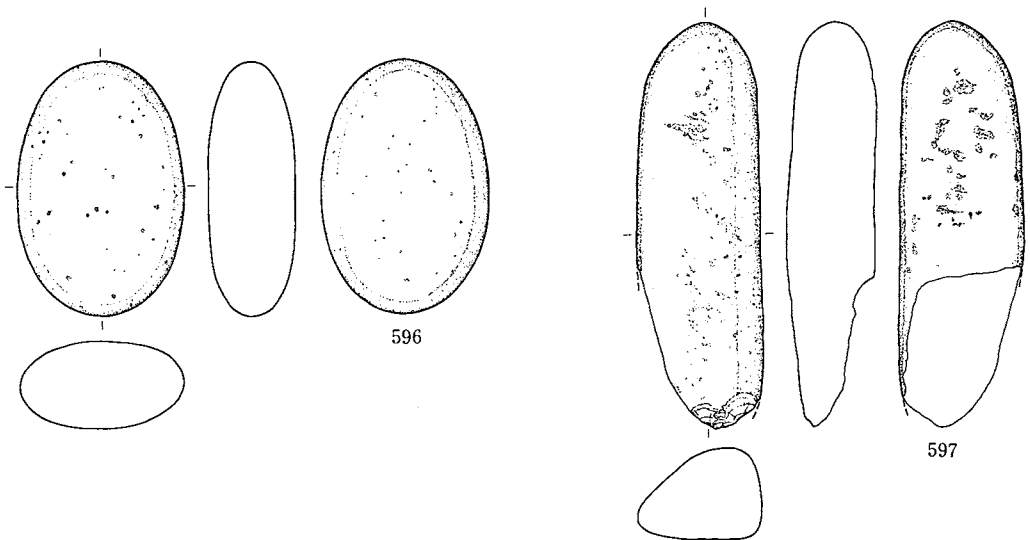
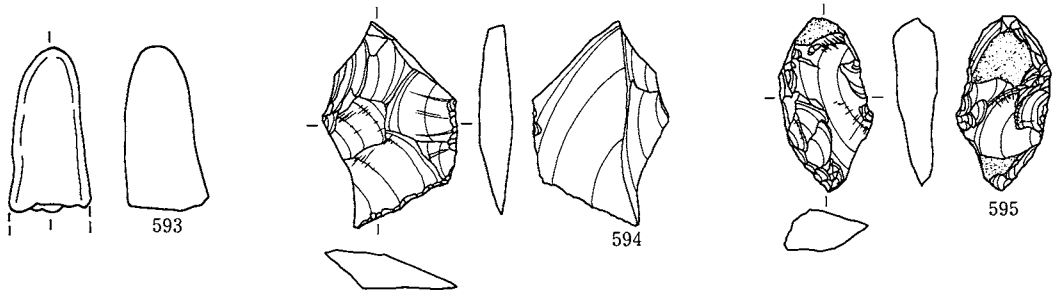
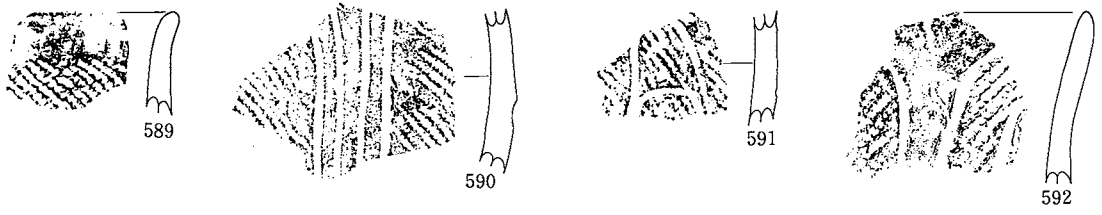


1. 10 Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり
2. 10 Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性あり 少量の炭が混入する
3. 10 Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性あり
4. 10 Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
5. 10 Y R5/6黄褐色土 かなかしまっている 粘性あり



1. 7.5 Y R5/6明褐色土 しまっている 粘性あり 焼土を含む
2. 5 Y R5/6赤褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり
3. 10 Y R5/6黄褐色土 かなかしまっている 粘性あり 少量の焼土を含む
4. 10 Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
5. 5 Y R5/6赤褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり

第88図 III C5a住居跡



589~592・596は S = 1/3
 593~595は S = 1/2
 597は S = 1/6

第89図 III C5a住居跡遺物

Ⅲ C 7 b 住居跡 (第 90 図、写真図版 37)

本住居跡は調査区西側の緩斜面南寄りに位置し、北側にはⅢ B 6 i 住居跡が、西側にはⅢ C 4 b 住居跡が、そして東側には平安時代のⅢ C 0 a 住居跡が存在する。本住居跡は南側の一部が調査区域外に続き、西側は流失しているため平面形の詳細は不明であるが、残存する部分から円形を呈すると思われる。検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の広がりによる。規模は東西は 3.95 m、南北は 4 m 前後と推定される。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 37 cm、西壁が 7 cm、北壁が 46 cm である。

埋土は上位東側はシルト質の褐色土、中位から下位にかけてはシルト質の暗褐色土で、下位はかたくしまっている。床面はⅢ層中の形成されており、小礫が散在し細かな凹凸があるものの平坦でかたくしまっている。床面からは柱穴・炉は検出されなかった。本遺構は住居跡で登録しているが、竪穴状遺構の可能性もある。

出土遺物 (第 91 図、写真図版 92)

598・599 は同一個体で、口縁部に長方形の文様が隆帯によって施され、体部には縦位の沈線が見られる。600～607 は沈線区画の充填縄文帯が文様を展開するものと沈線区画の無文帯が文様を展開するものである。604 は鱗状の突起をもち、区画された縄文の一部に刺突が施されている。607 は口縁部下に横位の沈線が施され口縁部は無文となる。

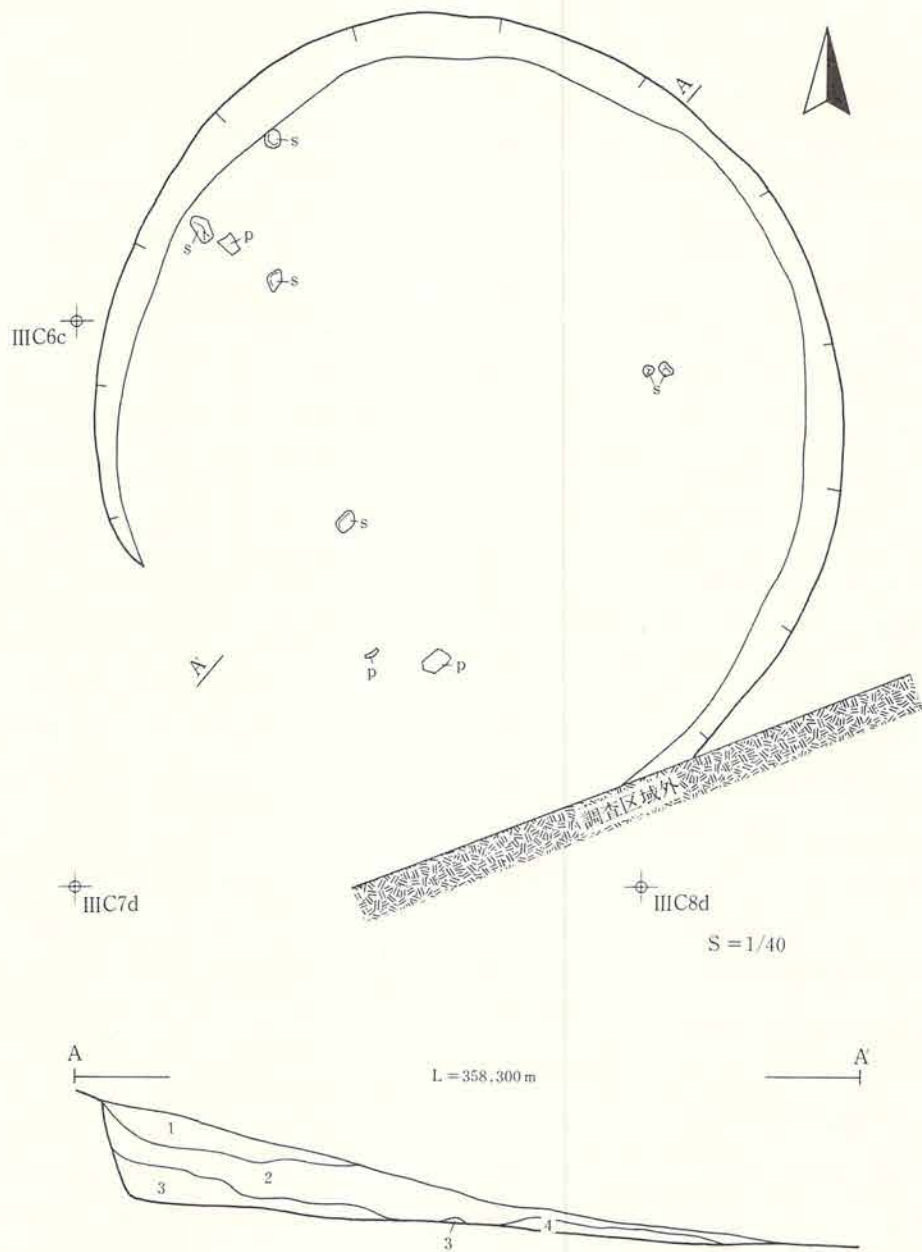
石器は 4 点出土している。608 は平基無茎鏃で、基部の両端が丸みを帯びる。609 は不定形石器である。二つの刃部が隣り合い、二次調整が片面のみから施されている。610・611 は磨製石斧で、610 は刃部側が、611 は両端が欠けている。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉から末葉の住居跡と推定される。

V A 7 j 住居跡 (第 92 図、写真図版 38)

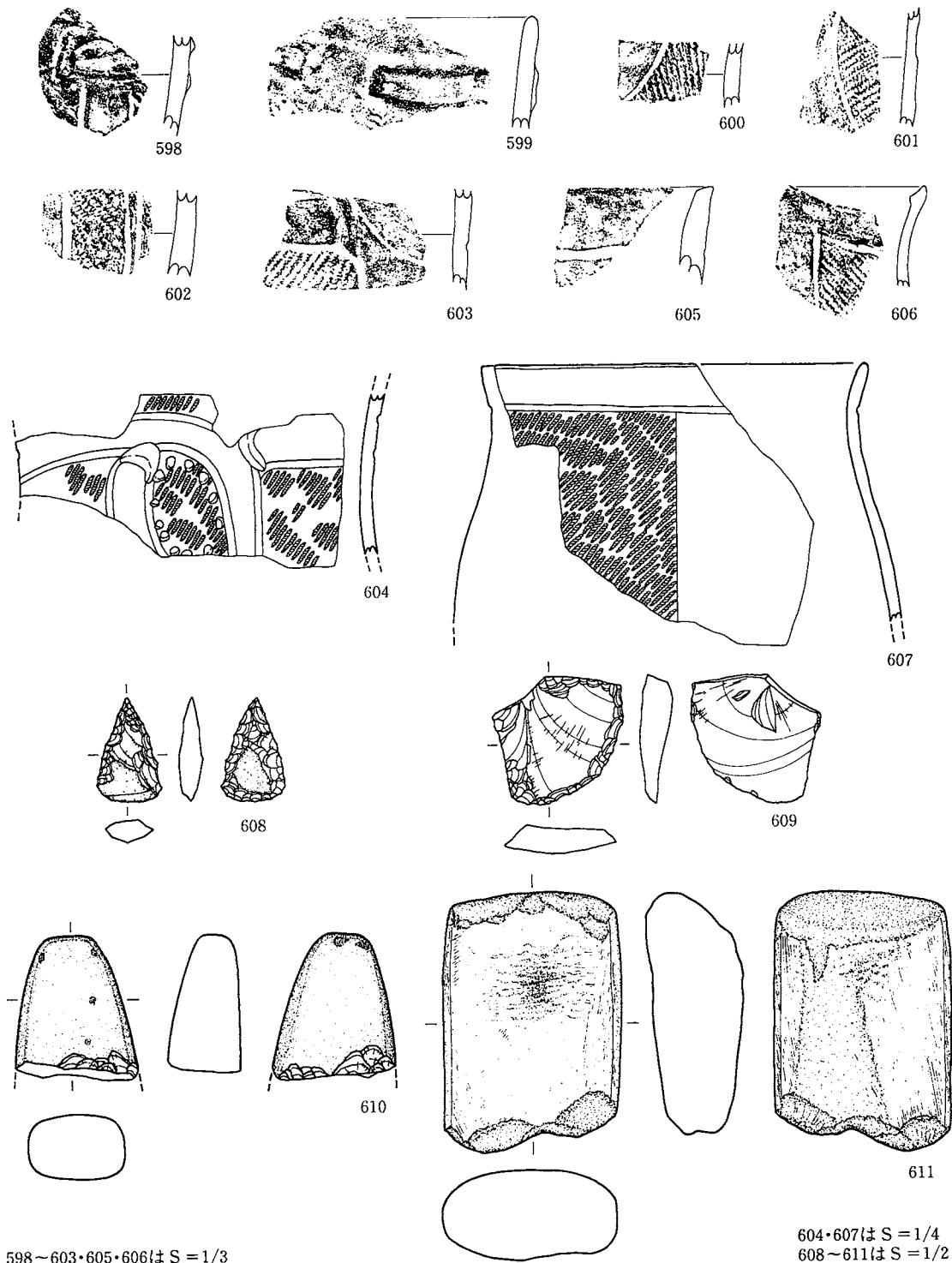
本住居跡は調査区中央からやや東に寄った尾根の頂部付近に位置している。本住居跡の東側には平安時代の V A 0 j 住居跡が存在する。検出はⅢ層に設定した試掘トレンチにおいて暗褐色土の広がりを確認したことによる。平面形は円形で、規模は東西 5.2 m、南北 5.0 m を測る。壁はⅢ層中にあり、北壁はほぼ直に、東西の壁は急角度で外傾して立ち上がる。南壁は斜面下方に当たるためほとんどが流失している。壁高は東壁が 50 cm、西壁が 38 cm、北壁が 82 cm、南壁が 3 cm を測る。

埋土は上位がシルト質の暗褐色土と黄褐色土、中位はシルト質の黒褐色土で、中位までは木根が多数混入する。下位は粘土質の褐色土でかたくしまっている。床面はⅢ層中に形成され、平坦でしまっている。床面直上の炉跡付近から土器がまとまって出土したほか、中央やや北西寄りの地点で完形の石皿が出土している。柱穴は壁際から P₁～P₅ の 5 基が検出された。柱穴は



1. 7.5Y R 4/4 褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5Y R 3/4 暗褐色土 しまっている 粘性なし 褐色土がまだらに混入する
3. 7.5Y R 3/4 暗褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 7.5Y R 3/3 暗褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 褐色土との混入土

第90図 III C7b住居跡



第91図 III C7b住居跡遺物

円形あるいは楕円形の掘り方を有し、規模は径が 26～35 cm、深さは 27～55 cm である。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	26 × 25	27 × 24	27 × 26	27 × 25	35 × 30
深さ cm	27	45	33	36	55

炉は床面中央から南に寄った地点で地床炉を検出した。焼土の形状は不整な楕円形で、長径 67 cm、短径 52 cm の規模をもつ。焼土はよく発達しており、かたくしまっている。

出土遺物（第 93 図、写真図版 93）

612 は口唇部に刻目をもち、口縁部には粘土紐が貼り付けられている。613 は波状口縁となる土器の口縁部破片で、口唇部に沿って沈線が施されている。614 は平縁の浅鉢形土器で口縁部は沈線によって区画された無文帯となり、体部には複節縄文（R L R 縦回転）が施文されている。615 は床面直上から検出された波状口縁の深鉢形土器で口唇部に沿って刺突が施され、体部には隆沈線によって渦巻文が描かれている。地文は R L R 縦回転の複節斜行縄文である。

石器は 2 点出土した。616 は石錐で、身部が明瞭には作り出されておらず、つまみ部の一部を身部としている。617 は石皿で、床面直上から完全な形で出土している。縁の部分が明瞭に作り出されており、一方の縁は緩やかに立ち上がり、他方の縁は急角度で立ち上がる。石質は多孔隙の両輝石安山岩（熔岩）である。

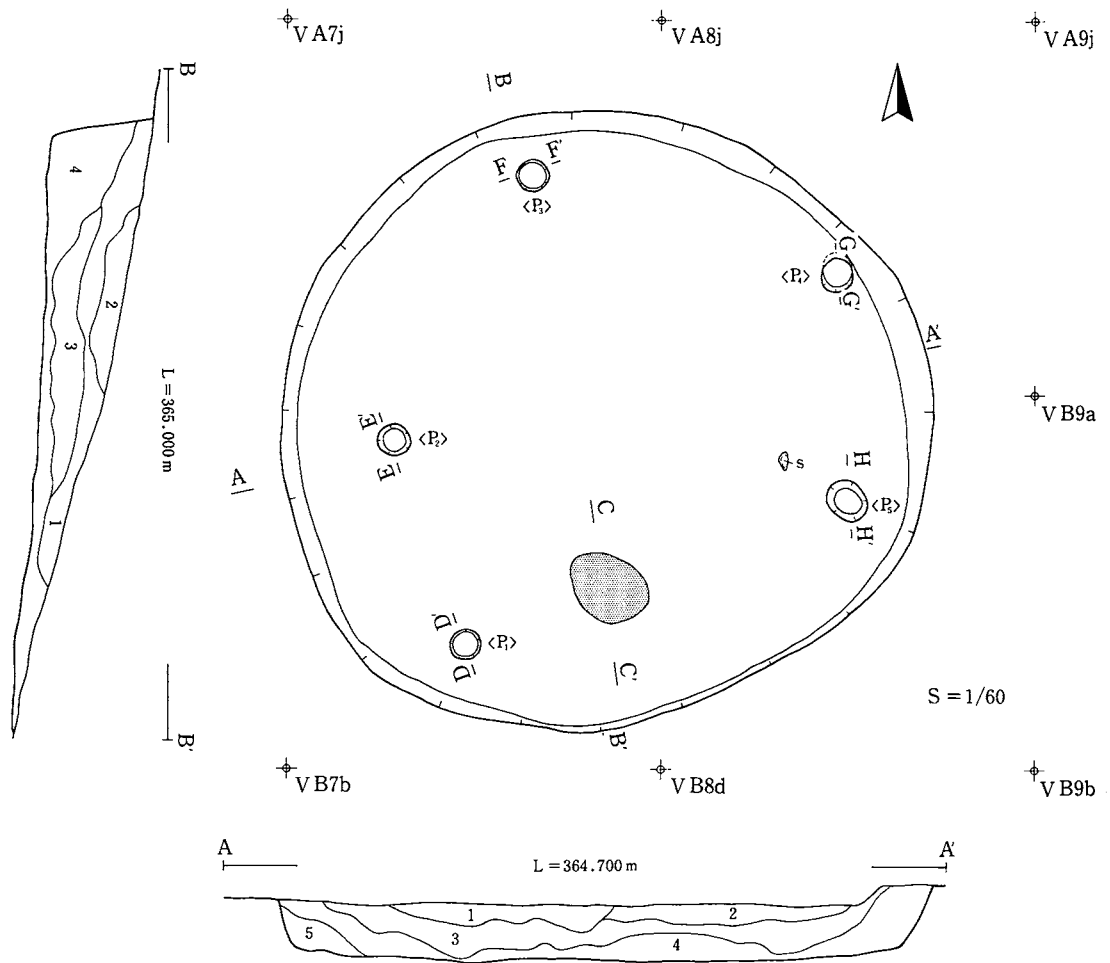
本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期中葉から後葉にかけての住居跡と推定される。

V B 2 b 住居跡（第 94 図、写真図版 39）

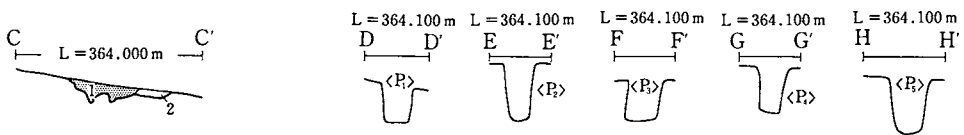
本住居跡は調査区中央の尾根の頂部付近に位置している。本住居跡の南側には平安時代の V B 4 b 住居跡が存在する。

検出はⅢ層上面において微小な炭化材まじりの褐色土の広がりを確認したことによる。平面形は円形で、規模は東西 2.3 m、南北 2.2 m を測る。壁はⅢ層からⅥ層にかけて形成されており、急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 35 cm、西壁が 37 cm、北壁が 32 cm、南壁が 46 cm を測る。

埋土は小礫を含むシルト質の褐色土が主体で、壁際にシルト質の暗褐色土が見られる。また、中位から下位にかけての一部に粘土質のにおい褐色土がみられる。埋土中には微小な炭化材が少量含まれる。床面はⅥ層中にあり、細かな凹凸があり北側から南側にかけてやや傾斜している。床面には炉のほかに炭化材の広がり が 2 カ所確認されが柱穴は確認されなかった。

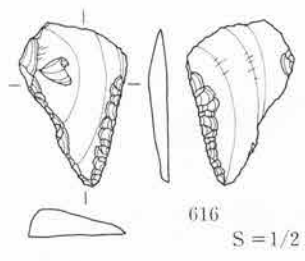
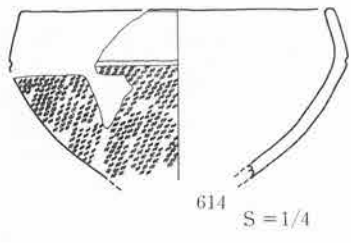
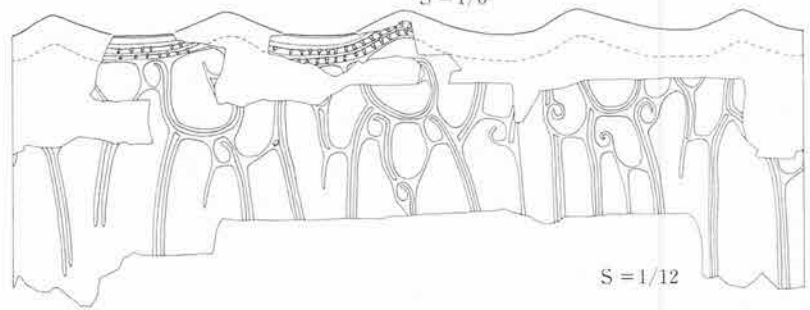
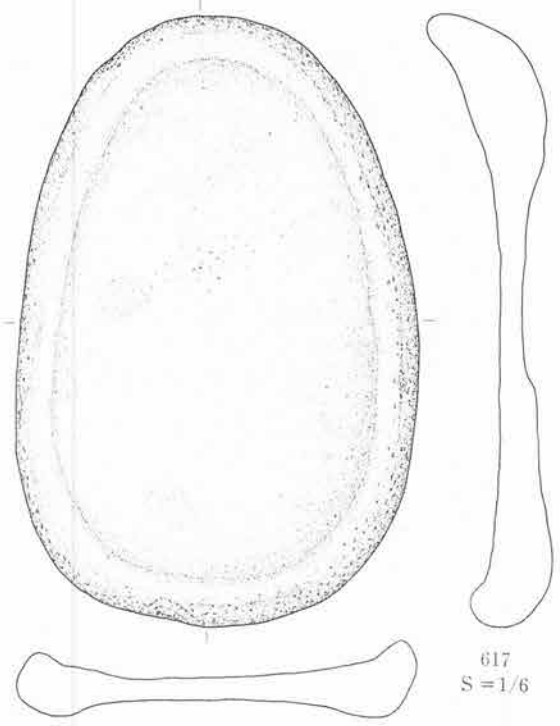
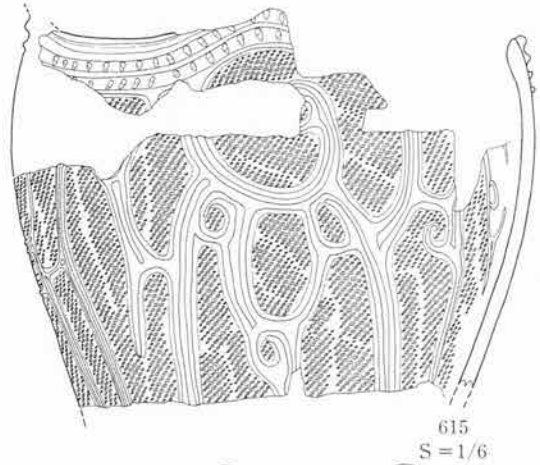
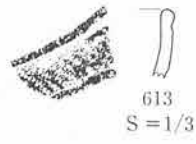
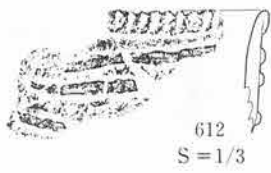


1. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている やや粘性あり 木根が混入する
3. 10Y R3/3黒褐色土 やわらかい やや粘性あり 木根が多量に混入する 4層及び5層がブロック状に混入する
4. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
5. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

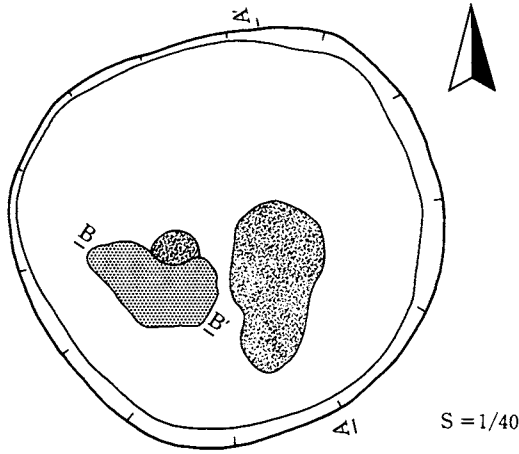


1. 5 Y R5/8明褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし 黄褐色土がまだらに混入する
2. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 炭化材が少量混入する

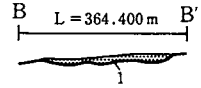
第92図 VA7j住居跡



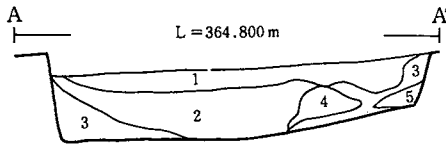
第93図 VA7j住居跡遺物



V B4b



1. 5 Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている
粘性なし 炭を少量含む



1. 7.5 Y R4/4褐色土 やわらかい 粘性あり 微小な炭・礫を含む
2. 7.5 Y R4/3褐色土 やわらかい 粘性あり 微小な炭・礫を含む
3. 7.5 Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性あり 微小な炭を含む
4. 7.5 Y R5/3にふい褐色土 しまっている 粘性あり 微小な炭・礫を含む
5. 7.5 Y R5/4にふい褐色土 しまっている 粘性あり 微小な炭・礫を含む



第94図 V B2b住居跡(遺構・遺物)

炉は床面中央から南西に寄った地点で地床炉が検出されている。炉の焼土は不整形で4 cm程の厚さに発達し、かたくしまっている。

出土遺物 (第94図、写真図版93)

遺物は縄文土器が細片でごく少量出土している。拓本に耐え得る土器は618の1点のみである。618は無文の土器の体部である。

本遺構は出土遺物が乏しく、時期は不明である。

VIA 1 h 住居跡（第 95 図、写真図版 40）

本住居跡は調査区中央からやや東に寄った尾根の頂部付近に位置している。本住居跡の北側にはVA 9 f 住居跡が、南側にはVA O j 住居跡が存在する。この 2 棟の住居跡は平安時代のものである。

検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、規模は東西 3.55 m、南北 3.5 m を測る。壁はすべてⅢ層中にあり急角度で外傾して立ち上がる。壁高は東壁が 30 cm、西壁が 4.2 cm、南壁が 18 cm、北壁が 51 cm である。

埋土は上位から中位にかけてがシルト質の暗褐色土、下位がシルト質の褐色土で、壁際に粘土質の黄褐色土が存在する。床面はⅢ層中に形成され、中央部付近から南側に若干傾斜している。床面からは柱穴と埋設土器および炉が検出されている。柱穴は壁際に近いところから P₁～P₄ の 4 基が検出されている。4 基の柱穴は円形の掘り方を有し、規模は径が 22～23 cm、深さが 28～40 cm である。

Na	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	22 × 20	23 × 21	22 × 20	22 × 22
深さ cm	38	28	37	40

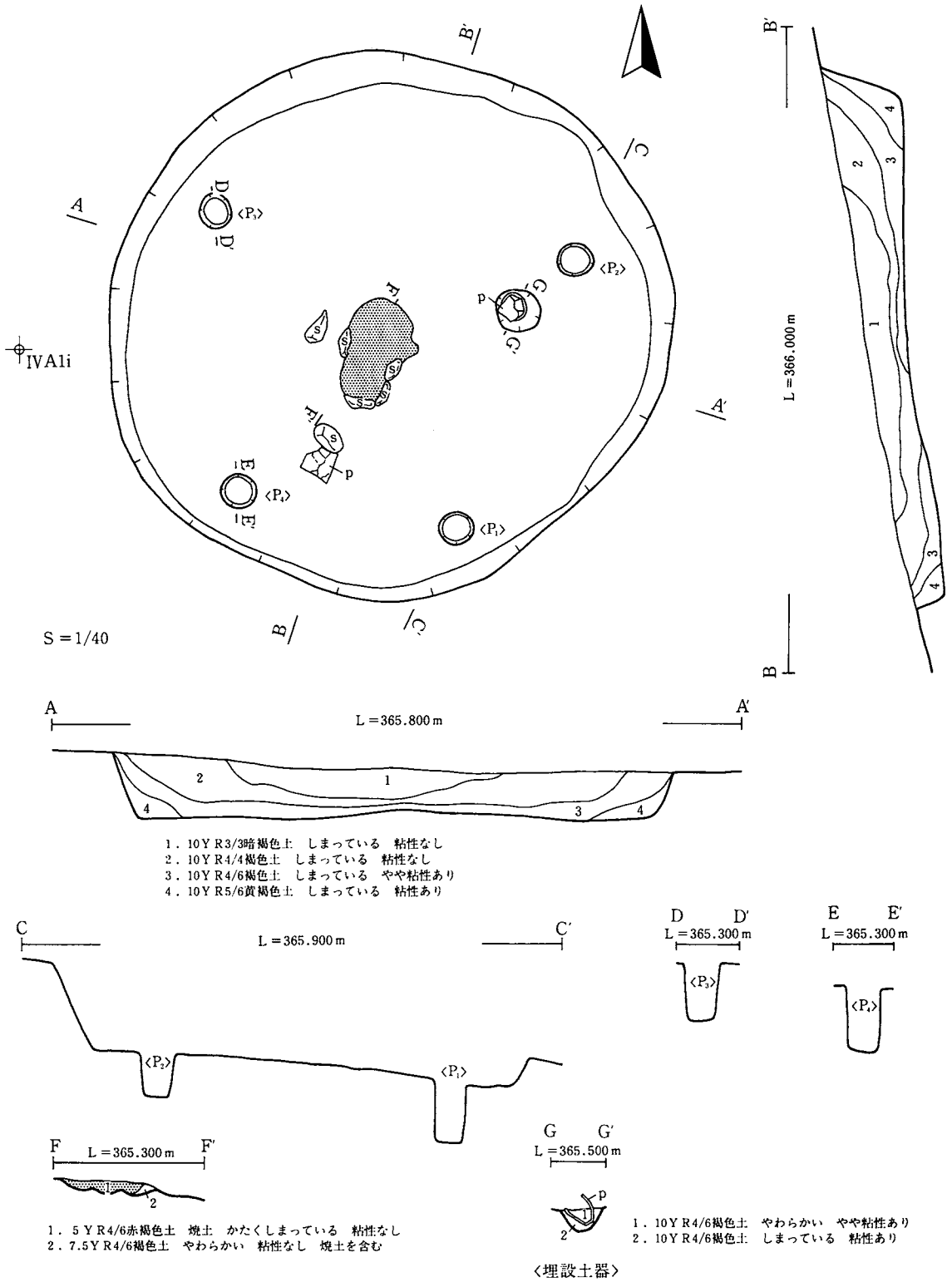
埋設土器は床面中央からやや東に寄った地点で検出された。完形の深鉢が斜めに埋め込まれている。炉は床面ほぼ中央で焼土を検出した。一部が礫で囲まれており、周囲に礫が散在することから石囲炉と思われる。平面形は不整な楕円形で規模は 75 × 45 cm で、長さ 16～20 cm の礫で囲われている。焼土の発達はかなり良好でかたく焼きしまっている。

出土遺物（第 96 図、写真図版 93）

619 は小波状口縁にをもつ深鉢形土器の口縁部破片で、横位の平行沈線間が無文となっている。620・622 は隆沈線による渦巻文が施された土器である。622 は大小 2 対の波状口縁をもつ土器で、大きな波状口縁の下部に貫通孔をもつ。621 は底部の破片であるが隆沈線が描かれており、体部には渦巻文が施されていたと推定される。623 は粗製の深鉢形土器で、RLR 縦回転の複節斜行縄文が施文されている。

石器は 1 のみ出土している。624 は不定形石器で、向かい合う 2 辺に刃部が形成されており、一方は片刃、他方は両刃である。

本遺構は出土遺物及び遺構の形態から縄文時代中期中葉から後葉にかけての住居跡と推定される。



第95図 VIA1h住居跡



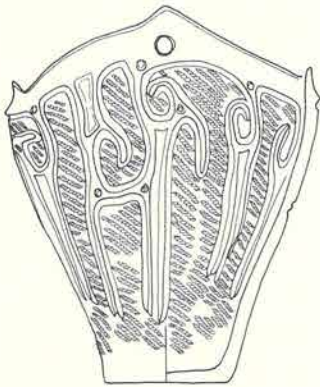
619



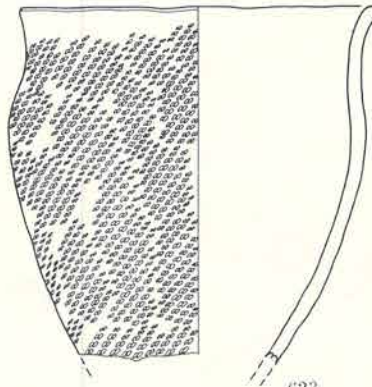
620



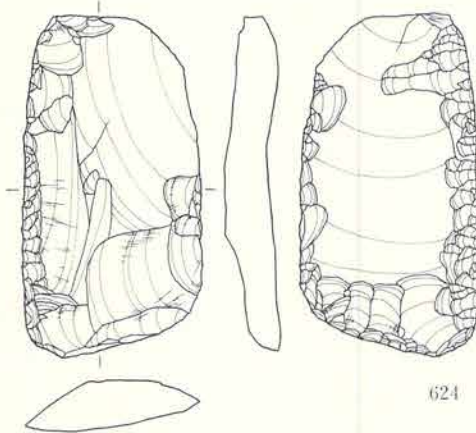
621



622



623



624

619・620は S = 1/3
621 ~ 623は S = 1/4
624は S = 1/2

第96図 VIA 1h 住居跡遺物

平安時代の遺構

平安時代の竪穴住居跡 11 棟は、調査区中央部からやや東側よりの山林部頂部付近から、沢状に向かう南側斜面沿いで検出されている。竪穴住居跡群は、現況から北側の尾根に沿って窪地が続いており、遺構群の存在が確認されている。

Ⅲ B 9 d 住居跡 (第 97・98 図、写真図版 41)

遺構は、調査区中央部の西側斜面にあり、Ⅲ B 9 d～9 f・Ⅳ B 1 d～1 f ラインのグリットの範囲に位置する。南西にⅢ C 0 a 住居跡、東にⅣ B 3 d 住居跡、北東にⅣ B 3 a 住居跡がある。

検出状況は、表土面からはやや窪み状となって観察されたが、住居跡として認定するまでには至らなかった。表土を除去した時点で方形に近い黒色土の輪郭を確認した。検出面はⅢ層上面である。遺構は山林から牧草地へ向かう斜面境にあり、牧草地開墾による削平が著しく、遺構上部とカマド上部から煙出し部まで及び西壁が消失しており、残存状態は不良である。そのため遺構についての詳細は不明な点が多い。住居跡内の壁面と床面に焼土・炭化材が分布しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は不整な隅丸方形を呈すると推定されるが、西壁を欠くため全体の形状は不明である。規模は、北-南方向 445 cm である。

埋土は遺構上面まで笹根・木根などが入り込んでいるが、黒色から黒褐色の軟らかいシルト質土が主体であり、埋土下面は焼土、炭化材が多量に混じる。

壁は床面からやや外傾して立ち上り、あとはほぼ垂直気味に立ち上るものと思われる。壁高は、東壁で最大 58 cm である。

焼土・炭化材は南東角から東壁に焼土、中央部付近に炭化材が分布している。焼土の厚さは 2～4 cm である。分布している炭化材の樹種は、ほとんどがクリである。

床面は基盤層の褐色土中であって堅くしまっており、やや凹凸が見られるが全体的に平坦である。床面の比高差は約 20 cm である。貼り床及び周溝は検出されていない。

柱穴は 4 基検出されている。平面形は不整の円形で、規模は径 34 × 34～69 × 69 cm、深さ 46～71 cm である。柱穴間は 238～280 cm と等間隔ではない。

土坑はカマドの北側で 1 基検出した。平面形が不整の楕円形、断面形が U 字状である。規模は 98 × 120 cm である。埋土は、焼失時の崩落により混入した焼土粒が含まれる粘性を持った褐色のシルト質土と炭化材が含まれる暗褐色のシルト質土が主体である。

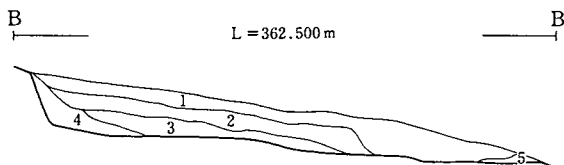
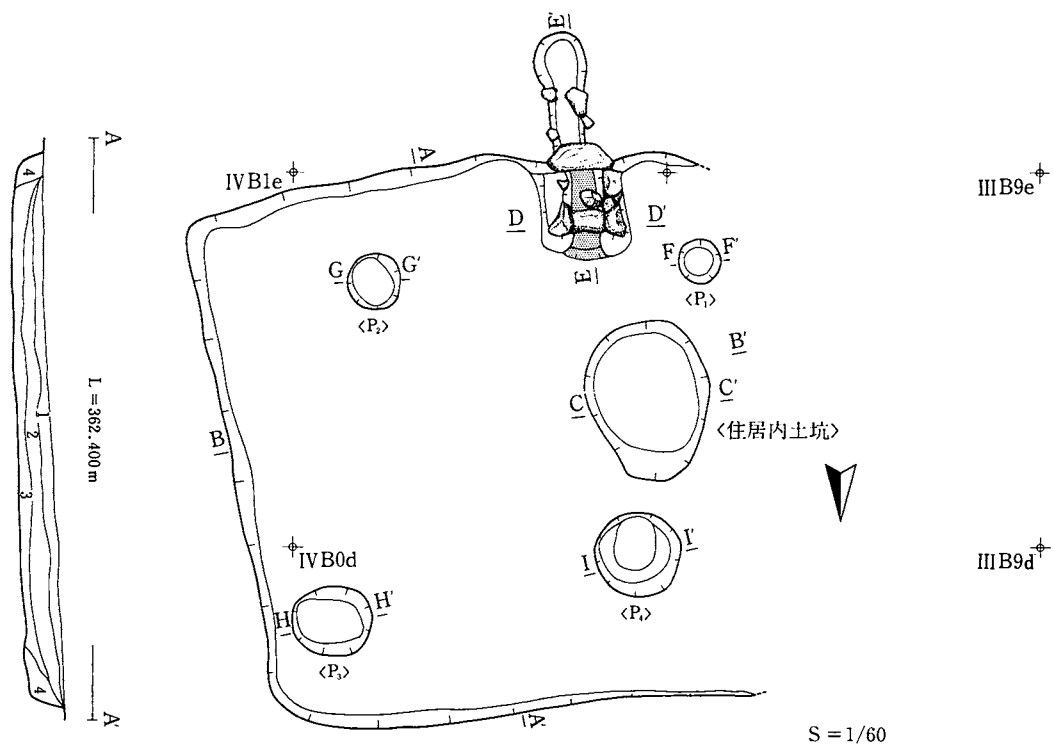
カマドは南壁中央から西側に寄った地点に構築されている。カマドの長軸方向は S-5°-E である。カマドの上部と袖部周辺は住居廃棄の際に完全に破壊された可能性がある。さらに後

世の開墾によってカマド・煙道部及び煙出し部上部は削平され、残存状態は不良である。燃焼部は、赤褐色の堅く締まった焼土が径 50 × 74 cm の規模で楕円状に存在し、層厚 6 cm の浅い皿状に形成されている。カマド吹き口付近の上部に 24 × 40 × 20 cm の垂角礫が置かれる。また、カマドから煙道部入口に 22 × 52 × 21 cm の垂角礫が置かれ、トンネル状に作られている。煙道部は掘り込み式であり、溝状の掘り込みの両側と上部に垂角礫が置かれていたものと思われる。煙道部の長さは 112 cm で、煙出し部へ向かって緩やかに上っている。煙出し部の平面形は円形を呈し、規模は径約 40 cm、深さ 10 cm である。カマド内と周辺の床面に土師器甕の破片が散在する。

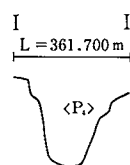
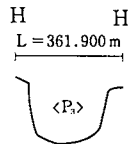
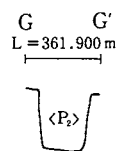
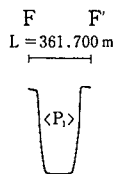
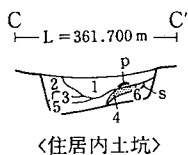
出土遺物（第 98・99 図、写真図版 94）

本住居跡の出土遺物は、すべてロクロ不使用の甕である。625 は小型の甕の口縁部と体部上半である。頸部は軽く括れ、口縁部は短く外傾する。口縁部の調整は内外ともヨコナデ、体部は外面が縦位及び横位のヘラナデ、内面が横位のヘラナデである。626 は口縁部付近の破片で、口縁部は短く外傾して立ち上がる。調整は口縁部が内外ともヨコナデが中心で、外面の一部にハケメが見られる。体部は外面が斜位のヘラナデで、内面は横位のヘラナデである。627 は口縁部付近の破片で、口縁部は極端に短く外反して立ち上がる。調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部は内外ともヘラナデである。628 は体部中央付近に最大径をもつ甕で底部を欠く。口縁部は短く外傾して立ち上がる。器面調整は内外面の口縁部がヨコナデ、体部外面が縦位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデである。629 は口縁部付近の破片で、口縁部がほぼ直立し体部へと続く。外面には明瞭な調整が見られず、内面は不規則なヘラナデである。630 は甕の口縁部と体部上半で、口縁部は短く外傾する。器面調整は口縁部は内外ともヨコナデ、体部外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデがなされている。631 は体部中央に最大径をもつ甕の口縁部と体部上半で、口縁部短く外反ぎみに立ち上がる。器面調整は内外とも口縁部はヨコナデ、体部はヘラナデである。632 は頸部付近に最大径をもつ甕で、器面調整は内外とも口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデである。633 は口縁部付近の破片で、口縁部は短く直立ぎみである。口縁部の調整は内外とヨコナデ、体部の調整は外面がヘラナデ中心で一部ハケメが見られる。内面は横位のヘラナデである。634 は頸部付近に最大径をもつ甕で、口縁部は外反する。器面調整は口縁部が内外とヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデである。635 は口縁部が極端に短く外反して立ち上がる。口縁部の調整は内外ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ調整で、内面はヘラナデ調整である。胎土に小石をふくんでいる。また、底部には木葉痕が見られる。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。



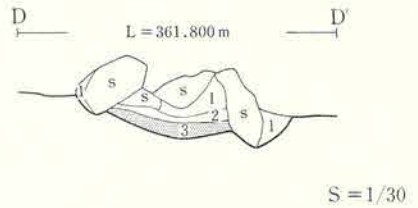
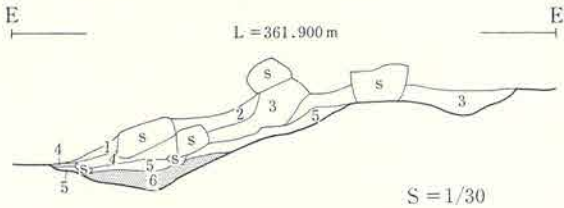
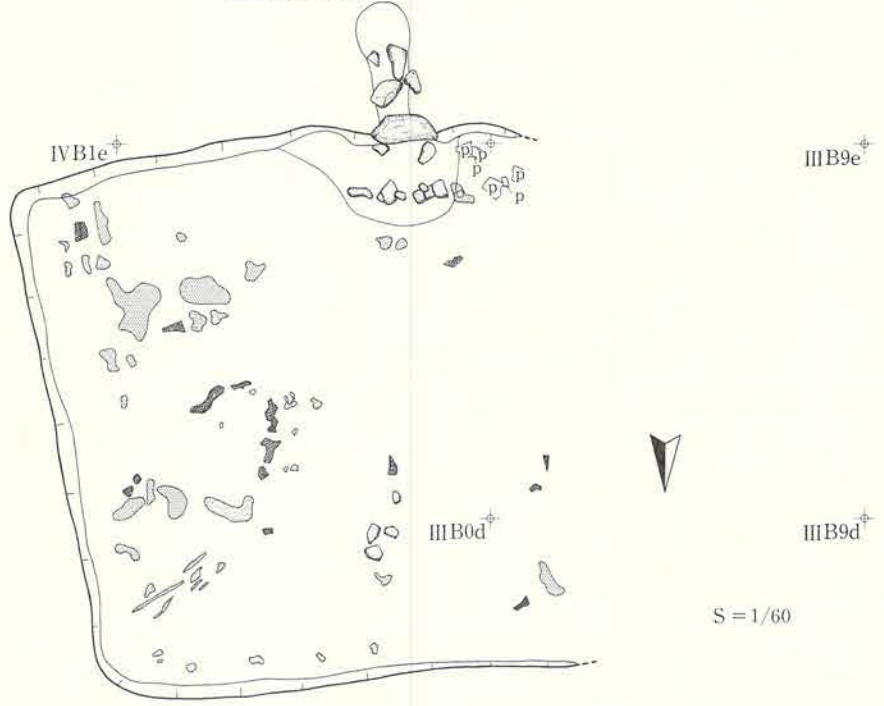
1. 7.5Y R2/1黒色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5Y R2/1黒色土 しまっている 粘性なし
3. 7.5Y R3/3暗褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土・炭化材が混入する
4. 7.5Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
5. 7.5Y R2/2黒色土 やわらかい 粘性なし



1. 7.5Y R3/1黒褐色土 やわらかい 焼土・炭化材・小礫を多量に混入する
2. 7.5Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性あり 炭化材が混入する
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材が混入する
4. 2.5Y R4/6赤褐色土 焼土 かたくしまっている 炭化材を混入する
5. 7.5Y R4/3褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土・炭化材を混入する
6. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土・炭化材を混入する

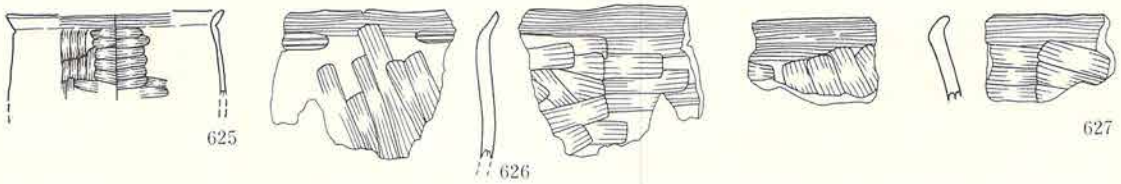
第97図 III B9d住居跡(1)

炭化材分布状況



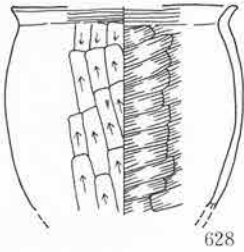
- 1. 7.5Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性あり 焼土・炭化材が混入する
- 2. 5 Y R3/4暗赤褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土が多量に混入する
- 3. 10Y R4/6 褐色土 やわらかい 粘性あり
- 4. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土が混入する
- 5. 7.5Y R2/2黒褐色土 やわらかい やや粘性あり 焼土が混入する
- 6. 5 Y R4/6赤褐色土 焼土 かたくしまっている 炭化材が混入する

- 1. 7.5Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土が混入する
- 2. 7.5Y R4/4褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土が混入する
- 3. 5 Y R4/6赤褐色土 かたくしまっている 炭化材が混入する

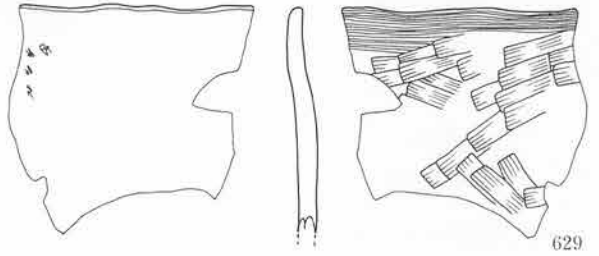


S=1/4

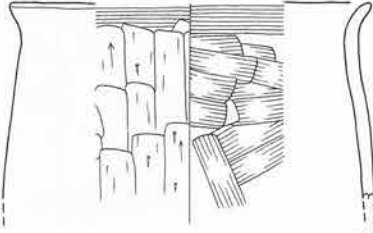
第98図 III B9d住居跡遺構・遺物(1)



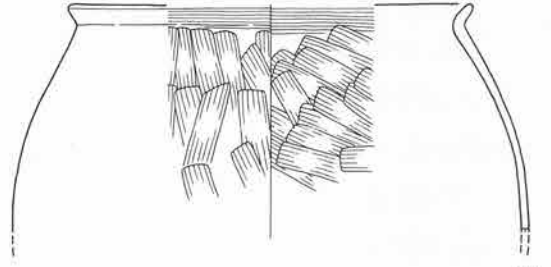
628



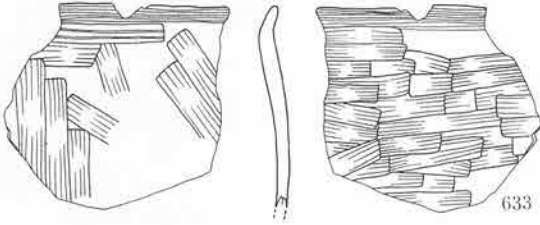
629



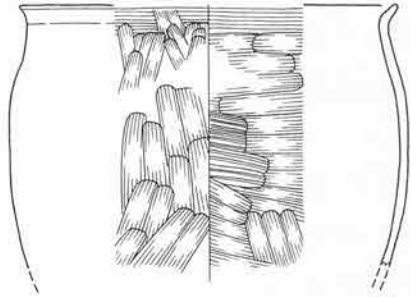
630



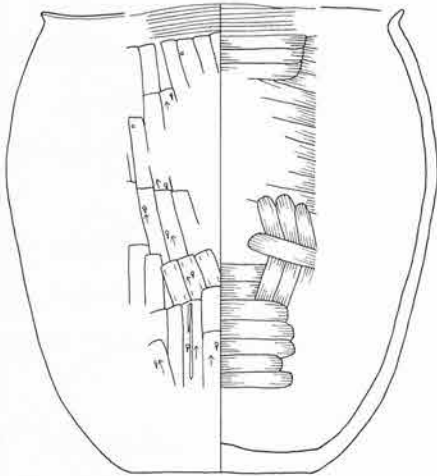
631



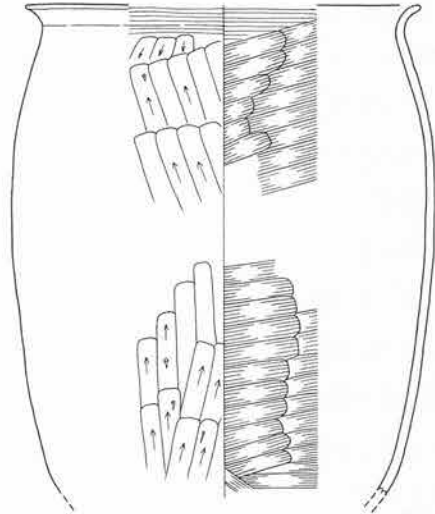
633



632



635



634

S = 1/4



第99図 III B9d住居跡遺物(2)

ⅢC0a 住居跡（第100・101図、写真図版42）

本遺構は、調査区中央部の西側斜面上にあり、ⅢC9a～9b・ⅢC0a～0bラインのグリットの範囲に位置する。北東側にはⅢB9d住居跡が存在する。

検出状況は、表土を除去した時点で方形に近い黒色土の輪郭を確認した。検出面はⅢ層上面である。遺構は山林から牧草地へ向かう斜面境にあり、牧草地開墾による削平が著しく、遺構上部、煙道部から煙出し部と西壁が消失しており、残存状態は不良である。そのため遺構についての詳細は不明な点が多い。住居跡内の壁面と床面には焼土・炭化材が分布しており、本遺構は焼失住居跡と思われる。

平面形は不整の隅丸方形を呈すると推定されるが、西壁を欠くため全体の形状は不明である。規模は北西－南東方向が425cmである。

埋土は、遺構上面まで笹根・木根などが入り込んでいるが、黒色から黒褐色のシルト質土が主体である。埋土下面は焼土・炭化材が多量に混じる。

壁は床面から緩やかに内湾し、ほぼ垂直気味に立ち上がる。壁高は北東壁で最大約40cmである。

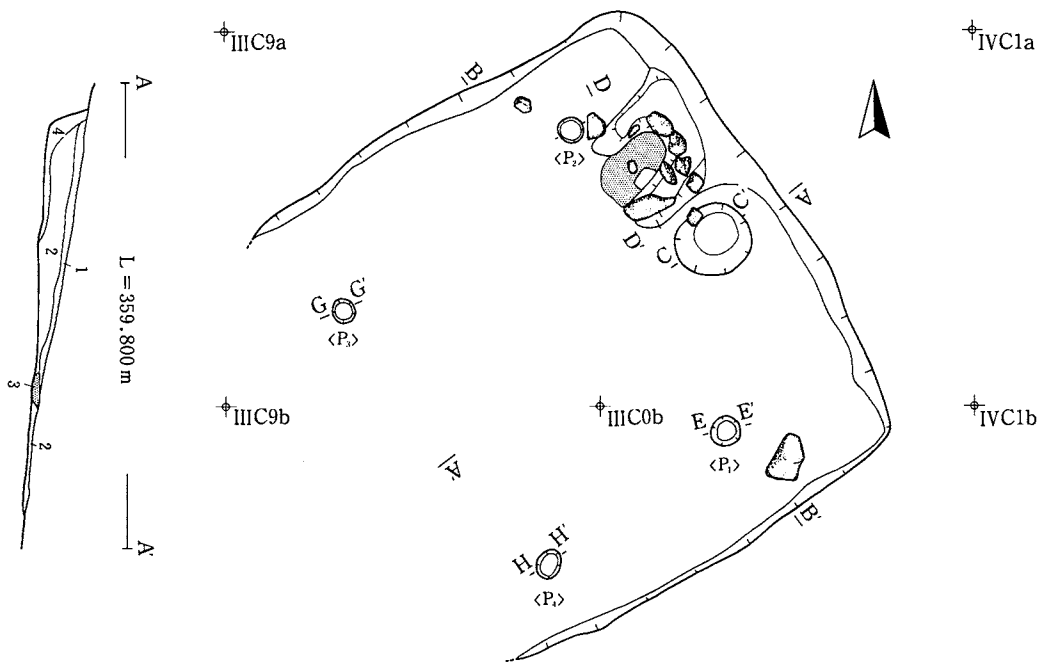
焼土・炭化材はカマド付近と南西壁に分布しており、焼土の厚さは2～4cmである。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリで、一部にケヤキがみられる。

床面は基盤層の褐色土中にあり、堅く締まり、やや凹凸がみられるが全体的に平坦である。床面の比高差は約10cmで、貼り床は見られない。壁際からは周溝は検出されなかった。

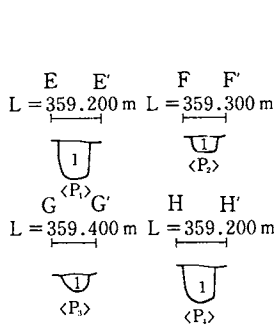
柱穴は4基検出されている。平面形は不整の円形であり、規模は径9×10～13×13cm、深さ6～16cmである。柱穴間は90～135cmと等間隔ではない。

土坑はカマド脇の南側に1基検出した。平面形は不整の円形で、断面形はU字状を呈する。規模は径が30cm、深さ15cmである。埋土は暗褐色の軟らかいシルト質土が主体であり、カマド廃棄時に投げ込まれたと思われる構築土と、焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる。

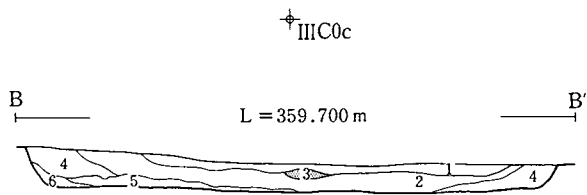
カマドは北東壁中央から北側に寄った地点に構築されている。カマドの長軸方向はN－53°－Eである。カマドの上部と袖部周辺には、大小の垂角礫が多数散乱しており、住居廃棄の際に完全に破壊された可能性がある。さらに後世の開墾により削平されるなど、残存状態は不良である。また、カマド上部の埋土については精査中の不手際で掘り取ってしまった可能性がある。右袖部には37×15×26cmの長方形の垂角礫が残っている。燃焼部は、暗赤褐色の堅く焼き締まった焼土が径68×57cmの規模で楕円状に存在し、層厚10cmの浅い皿状に形成されている。その中央には支脚に利用されたと思われる11×5×4cmの小礫がある。煙道部から煙出し部は削平され消失しているため、詳細は不明である。カマド周辺の床面には土師器甕の破



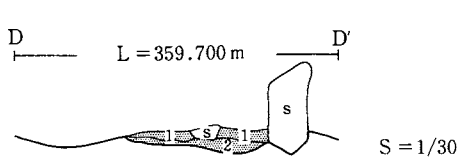
S = 1/60



1. 7.5 Y R3/4暗褐色土: しまっている やや粘性あり



1. 7.5 Y R1.7/1黒色土: やわらかい やや粘性あり 草根・木根が混じる
2. 7.5 Y R3/2黒褐色土: しまっている やや粘性あり
3. 5 Y R3/2暗赤褐色土: しまっている やや粘性あり 炭化材が混じる
4. 7.5 Y R4/6褐色土: しまっている 粘性あり
5. 7.5 Y R5/6明褐色土: しまっている やや粘性あり 炭化材が混じる
6. 10 Y R4/6褐色土: しまっている 粘性あり

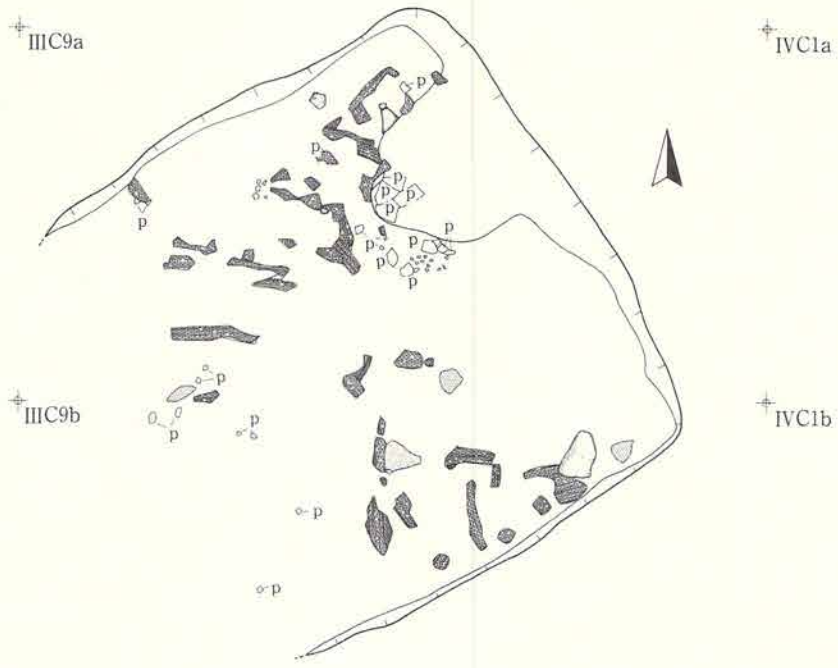


1. 5 Y R3/6暗赤褐色土: 焼土: しまっている カマド上部崩壊土がまだらに混入する
2. 5 Y R4/6赤褐色土: 焼土: 焼成をうけかたくしまっている

L = 359,400 m

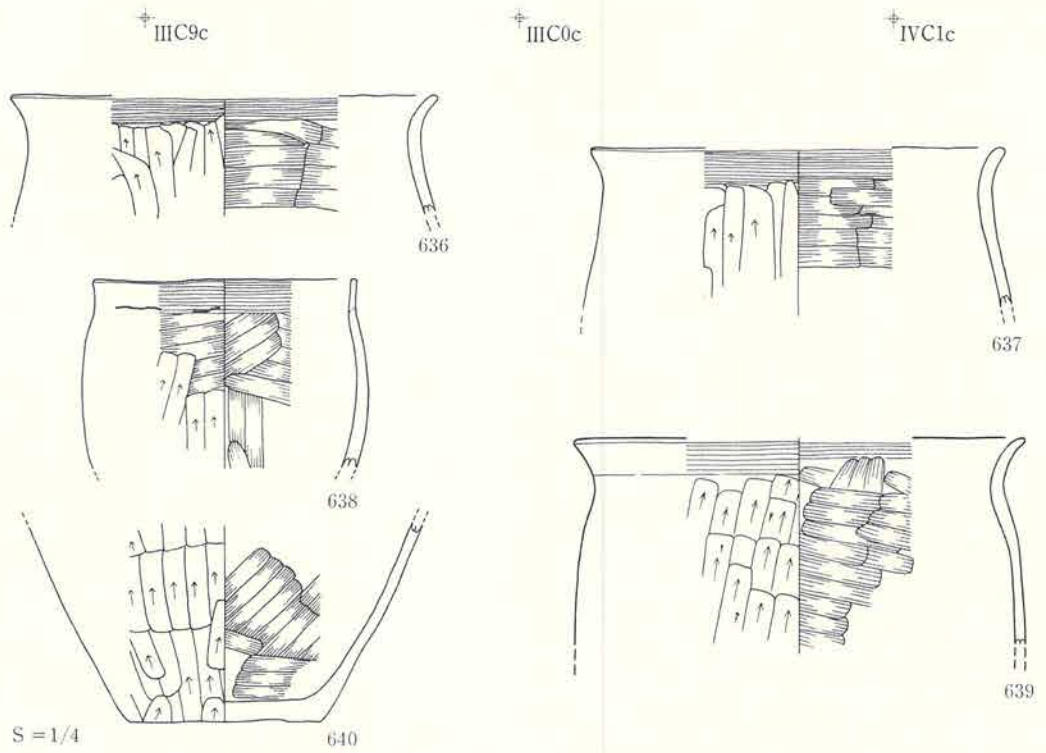
1. 10 Y R3/3暗褐色土: やわらかい やや粘性あり 小粒の焼土が混じる
2. 10 Y R3/4暗褐色土: やわらかい やや粘性あり 小粒の焼土が混じる
3. 10 Y R3/4暗褐色土: やわらかい やや粘性あり

第100図 III COa住居跡(1)



炭化材分布状況

S = 1/60



第101図 III C0a住居跡遺構(2)・遺物

片が散在している。

出土遺物（第101図、写真図版95）

本遺構からの出土遺物は5点あり、すべてロクロ不使用の土師器の甕である。636・637は口縁部付近で、636は口縁部が頸部付近から外反して立ち上がり、637は直立ぎみに立ち上がる。器面調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。638は体部中央部に最大径をもつ甕で、底部を欠いている。器面調整は口縁部内外ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラナデである。頸部には輪積み痕が見られる。639は口縁部と体部上半の部分で、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。640は体部下半と底部の部分で、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

IV B 3 a 住居跡（第102・103図、写真図版43）

本遺構は、調査区中央部からやや東寄りのIV B 3 a～3 b・IV B 5 a～5 bラインのグリットの範囲に位置する。南西側にはⅢ B 9 d住居跡、南側にはIV B 3 d住居跡、南東側にIV B 6 d住居跡が隣接する。

検出状況は、尾根頂部に平坦部分が観察され、その箇所が住居跡を示唆するわずかな窪地となっていた。そこでセクション・ベルトを表土面から設定し、表土を除去した時点で方形に近い黒色土の輪郭を確認した。検出面は表土面である。本遺構は住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が分布しており、焼失住居跡と思われる。

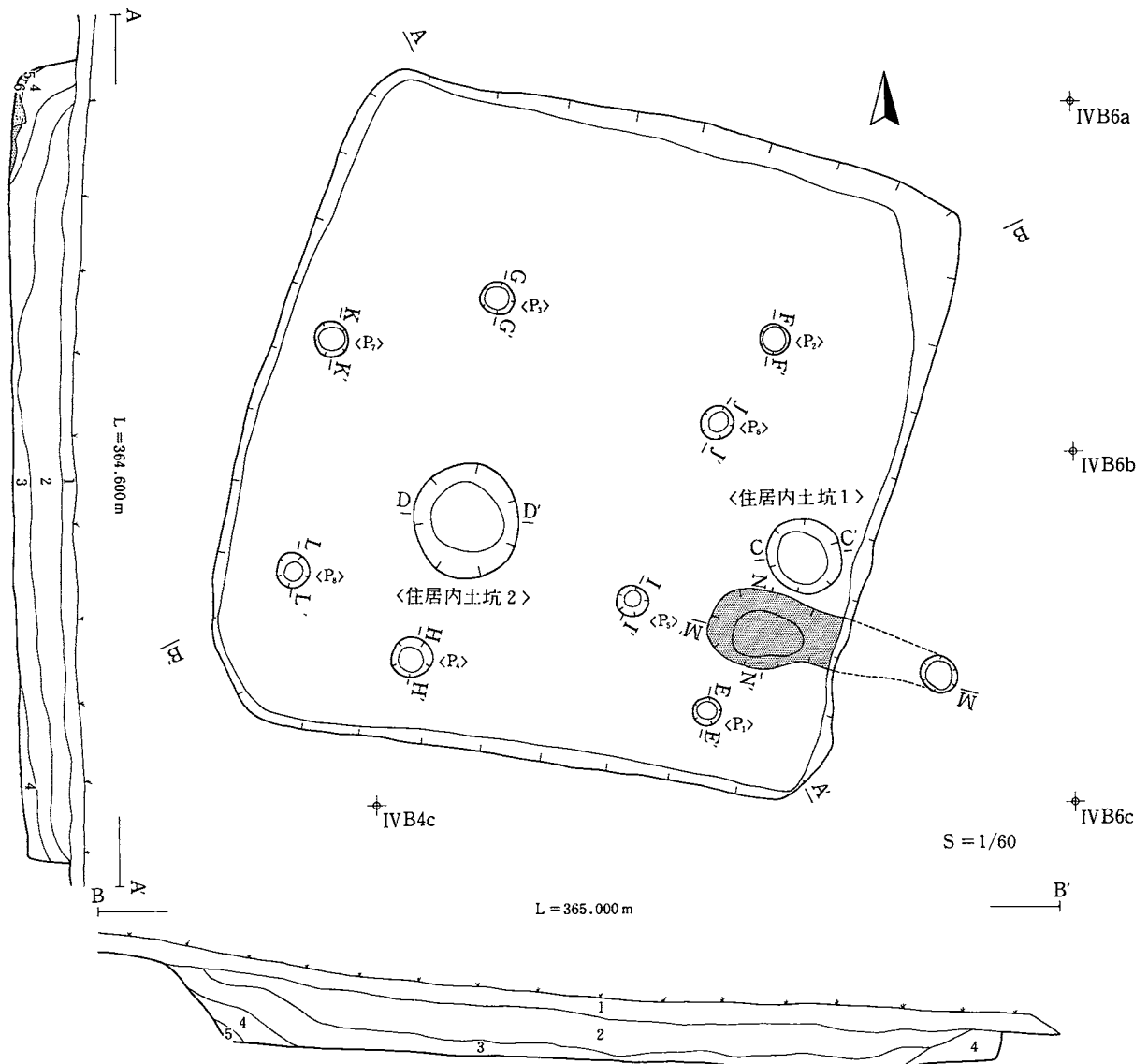
平面形は不整の隅丸方形を呈する。規模は、北-南方向569 cm、東-西方向548 cmである。

埋土状況は、表土面が平坦になる箇所の中央部が窪み、遺構が尾根上にあるため埋没しきれない状態が観察された。埋土中位まで笹根・木根などが入り込み、攪乱を受ける箇所も見られるが、やや軟らかい黒色から黒褐色のシルト質土が主体である。埋土下位は焼土、炭化材が多量に混じる。

壁は床面から急角度で外傾して立ち上がる。壁高の最大値は、北東壁約60 cm、南東壁約62 cm、南西壁約38 cm、北西約44 cmである。

焼土・炭化材は、北西壁角から北東壁沿いと中央部から南西壁寄りに分布している。焼土の厚さは北東壁沿いで2～14 cm、南西壁寄りでは2～7 cmである。分布している炭化材の樹種はすべてクリである。

床面は基盤層の褐色土中であって堅く締まり、やや凹凸が見られ西方向にいくぶん深くなる傾向がみられるが、全体的には平坦であり、比高差は約25 cmである。貼り床および周溝は検出



1. 10Y R2/3黒褐色土 表土 やわらかい 粘性なし 草根・木根を含む
2. 10Y R2/1黒色土 やわらかい やや粘性あり 草根・木根を含む
3. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土・炭化材を含む
4. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 壁の崩落土
5. 7.5Y R3/3 暗褐色土 しまっている やや粘性あり 壁の崩落土
6. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 壁の崩落土
7. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 炭化材を多量に含む
8. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土塊を含む

C C'
L=364.000m

〈住居内土坑1〉

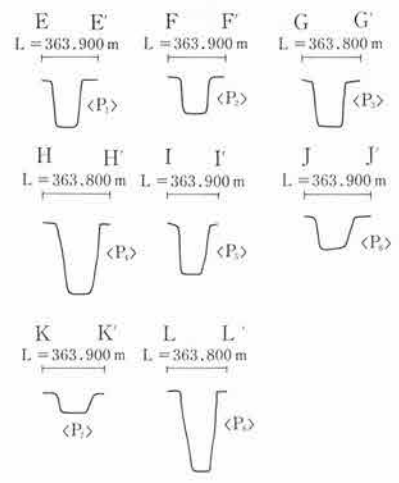
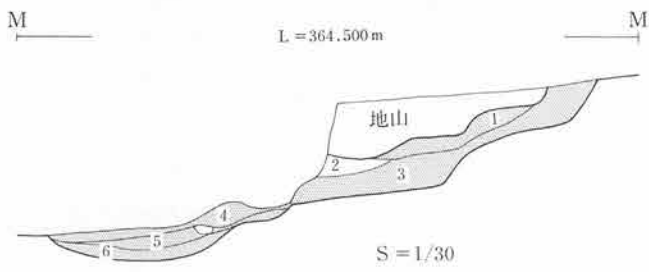
1. 5Y R3/4暗褐色土 しまっている 焼土・炭化材がまだらに混入する
2. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり

D D'
L=363.700m

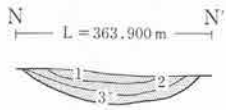
〈住居内土坑2〉

1. 7.5Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土・炭化材を多量に混入する
2. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 小礫が混入する

第102図 IVB3a住居跡(1)

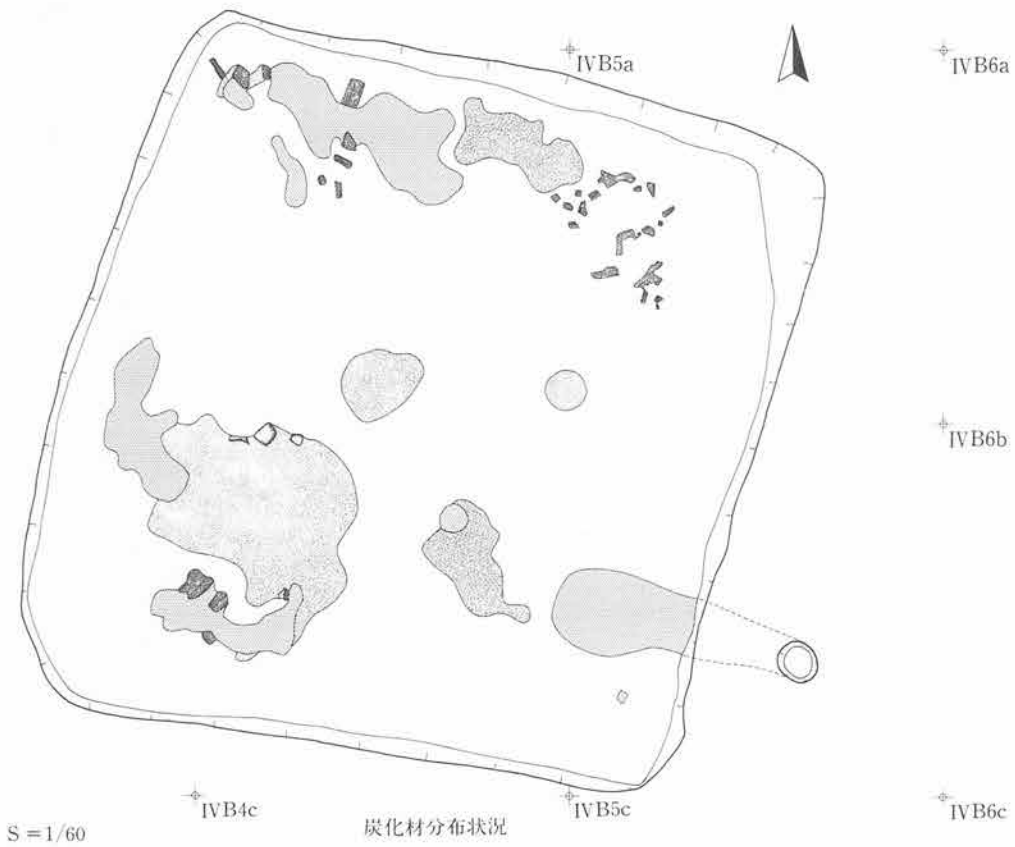


1. 5 Y R 4/6赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし
2. 10 Y R 4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 焼土・炭化材が混入する
3. 5 Y R 4/4にふい赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし
4. 5 Y R 4/6赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし
5. 2.5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 非常にかたくしまっている 粘性なし
6. 2.5 Y R 5/8明赤褐色土 焼土 かなかたくしまっている 粘性なし



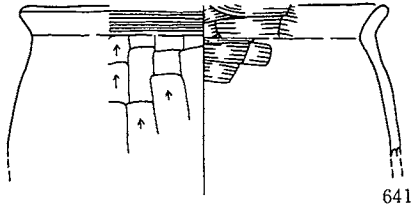
1. 5 Y R 4/6赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし
2. 2.5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 非常にかたくしまっている 粘性なし
3. 2.5 Y R 5/8明赤褐色土 焼土 かなかたくしまっている 粘性なし

S = 1/30

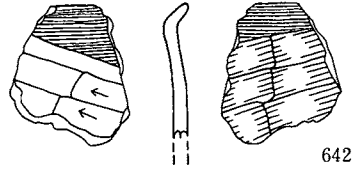


炭化材分布状況

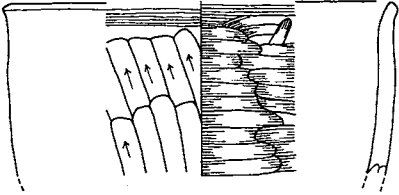
第103図 IV B3a住居跡(2)



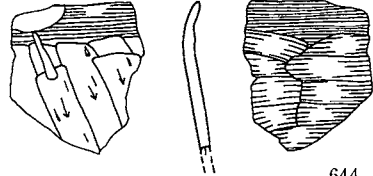
641



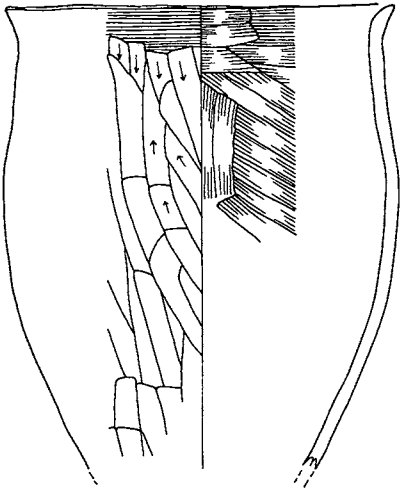
642



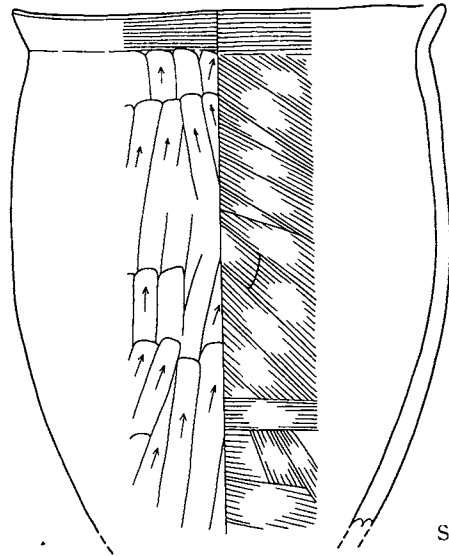
643



644

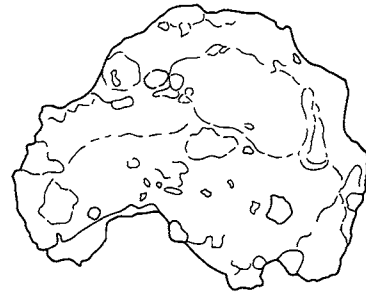
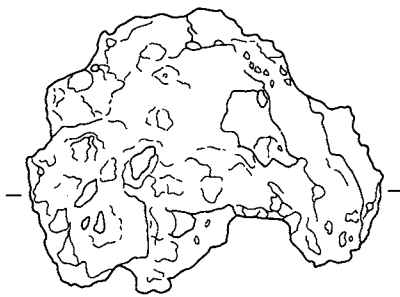


645



640

S = 1/4

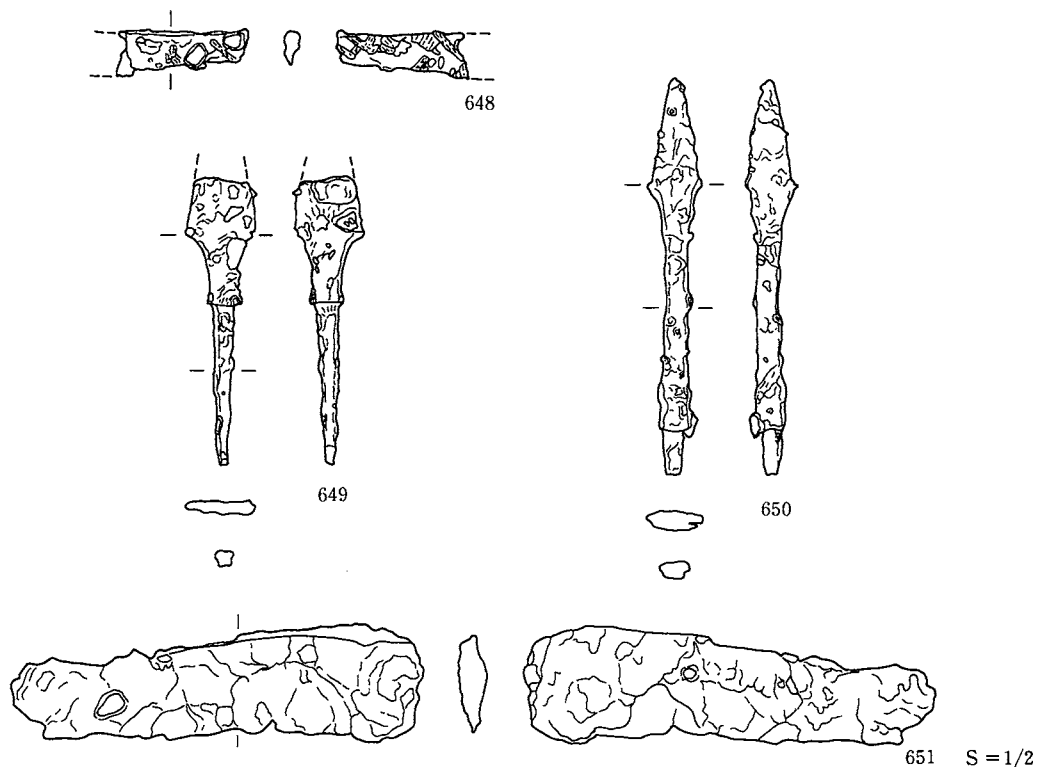


647



S = 1/2

第104図 IVB3a住居跡遺物(1)



第105図 IVB3a住居跡遺物(2)

されなかった。

柱穴は8基検出されている。平面形は不整の円形を呈し、規模は径が $24 \times 25 \sim 31 \times 33$ cm、深さは $15 \sim 65$ cmである。柱穴の対応関係は、 $P_1 - P_2 - P_3 - P_4$ で柱穴間が $60 \sim 80$ cm、 $P_5 - P_6 - P_7 - P_8$ で柱穴間が $43 \sim 85$ cmである。

土坑は北側のカマド脇と床面中央から南西に寄った地点から2基検出されている。カマド脇の土坑は、平面形が不整の円形で、断面形はU字状を呈し、底面には凹凸が見られる。規模は径 63 cm、深さ約 20 cmを測る。埋土は褐色のやや締まった粘性あるシルト質土が主体で、カマド廃棄時に投げ込まれたと思われる構築土と、焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる。南西寄りの土坑は、平面形が不整の円形、断面形がU字状で、規模は径 90 cm、深さ約 20 cmである。埋土は、焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる暗褐色のシルト質土が主体である。

カマドは南東壁中央より南側に寄った所に構築されている。カマドの長軸方向は $E - 16^\circ - S$ である。カマドの上部と袖部は左右とも検出されず、袖部周辺には大小の亜角礫が多数散乱

しており、住居廃棄の際に完全に破壊された可能性が高い。残存状態は不良である。燃焼部には暗赤褐色の堅く締まった焼土が径 68 × 110 cm の規模に楕円状に存在し、層厚 20 cm の浅い皿状に形成されている。煙道部は割り貫き式である。煙道は長さ 190 cm で、煙出し部へ向かって緩やかに立ち上がるが、煙道部中央部から煙出し部へ移る箇所が一段高くなっている。煙出し部は円形で、径が約 25 cm、深さ 25 cm である。

出土遺物（第 104・105 図、写真図版 95）

641～646 はすべてロクロ不使用の土師器の甕である。641 は甕の口縁部と体部上半で、口縁部は外反する。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、内面はヘラナデである。体部は外面がヘラケズリ、内面にはヘラナデ調整が施されている。642 は口縁部付近の破片で、口縁部は強く外反する。643 は口縁部と体部上半で、口縁部は極端に短く、直立ぎみである。644 は口縁部付近の破片で、口縁部は直立ぎみである。645 は体部中央に最大径をもつ甕で底部付近を欠く。口縁部は短く外傾する。646 も体部中央に最大径をもつ甕で、底部を欠いている。口縁部は外反している。642 から 646 まで器面調整は、口縁部の内外がヨコナデで、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。647 は碗型の鉄滓である。調査区内からは鍛冶炉は検出されていないが、付近に鍛冶遺構の存在が推定される。648 は刀子とみられる鉄製品で、両端が欠損しており残存長は 3.5 cm である。649・650 はともに鉄鏝で、649 は先端部が欠損している。651 は鎌と推定される鉄製品で、先端部を欠く。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

IV B 3 d 住居跡（第 106・107 図 写真図版 44）

本遺構は、調査区中央部からやや東寄りの IV B 3 c～3 e・IV B 4 c～4 e ラインのグリット範囲に位置し、カマドの煙道部から煙出し部が IV B 5 d グリットにある。また、遺構の北東角が IV B 4 c グリットに入る。北西側に III B 9 d 住居跡、南東側に IV B 6 d 住居跡、北東側に IV B 3 a 住居跡が隣接する。

本住居跡の占地部分は尾根から南方向への緩やかな斜面上の平坦部分で、その箇所が住居跡を示唆するわずかな窪地となっていたことによって検出された。そこで表土面からセクション・ベルトを設定し、表土を除去した時点で方形状に近い黒色土の輪郭を確認した。検出面は表土面である。住居跡内の壁面と床面に焼土・炭化材が分布しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は不整の隅丸方形を呈する。規模は北-南方向 528 cm、東-西方向 458 cm である。

埋土断面からは、表土面が平坦になる箇所の中央部が窪み、遺構が尾根上にあるため埋没しきれない状態が観察された。埋土状況は遺構中位まで笹根・木根などが入り込み、攪乱を受けた箇所も見られるが、やや軟らかい黒色から黒褐色のシルト質土が主体となっている。埋土下

位は焼土、炭化材が多量に混じる。

壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高の最大値は東壁約 35 cm、南壁約 27 cm、西壁約 32 cm、北約 55 cmである。

焼土・炭化材は、床面全域に広がり、その分布状況は遺構中央に向かっている。特に北西壁角から西壁沿いに、焼土と炭化材が密に分布している。焼土の厚さは西壁沿いで 1～3 cm、北西壁角寄りでは 2～8 cmである。また、南壁の中央部にカマドに使用されたとと思われる垂角礫がまとまって出土している。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリで、一部ケヤキが見られる。床面は基盤層の褐色土中であって堅く締まり、全体的には平坦で、比高差は約 5 cmである。貼り床と壁際からの周溝は検出されていない。

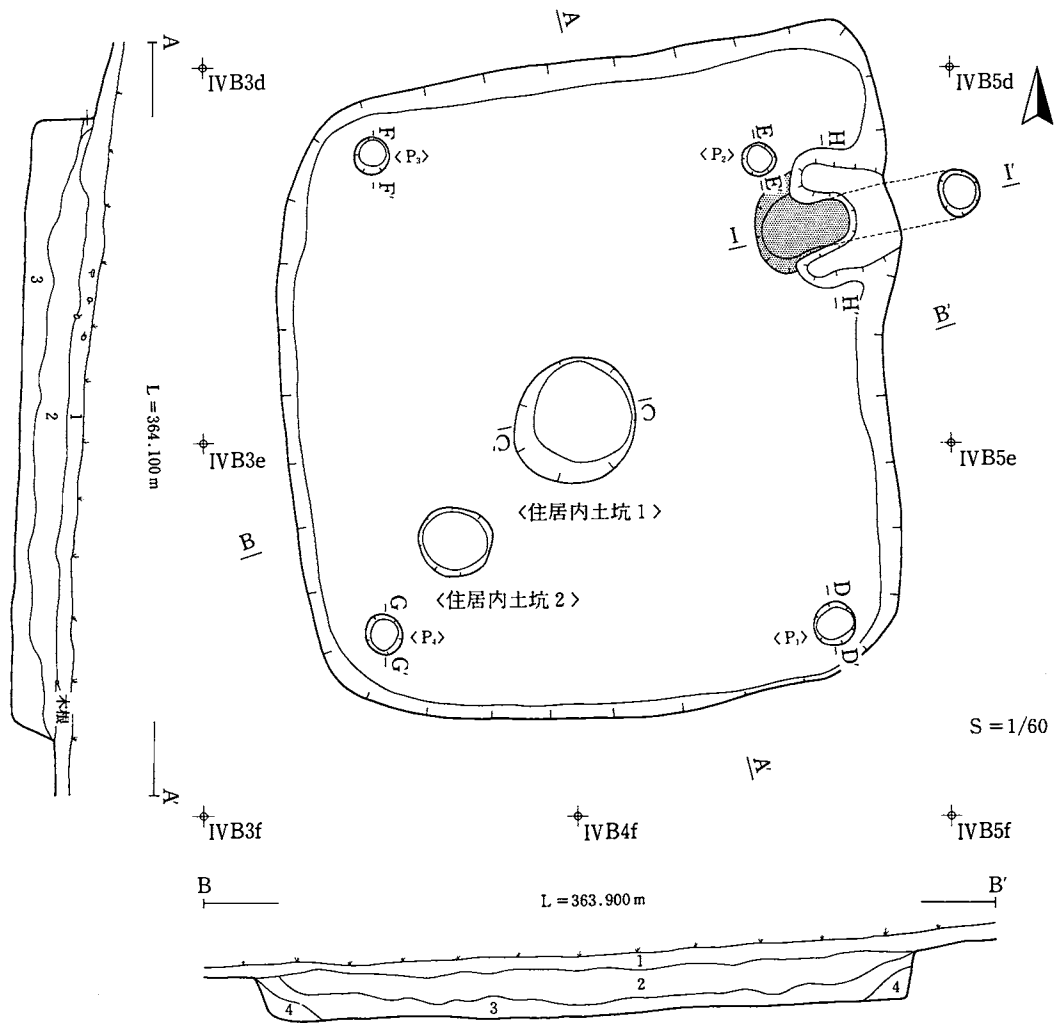
柱穴は住居内の角に近い場所から 4 基検出されている。平面形は不整の円形であり、規模は径 27 × 27 ～ 34 × 36 cm、深さ 9 ～ 24 cmである。柱穴間は 310 ～ 375 cm と等間隔ではない。

住居内の土坑は床面中央部と南西角付近から 2 基検出された。床面中央部から検出された土坑は、平面形が不整の円形を呈し、断面形は U 字状である。規模は径が 95 cm、深さ 40 cm を測る。埋土は焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる暗褐色のシルト質土が主体である。南西角付近から検出された土坑は、平面形が不整の円形で、規模は径が 55 cm、深さは 40 cm である。埋土はやや堅く多少粘性のある暗褐色シルト質土が主体であり、焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる。

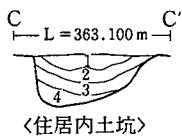
カマドは東壁中央より北側に寄った所に構築されている。カマドの長軸方向は E - 13° - N である。カマドの上部と袖部は左右とも住居廃棄の際に破壊された可能性があり、残存状態は不良である。周辺には袖部の芯材に使用されたとと思われる礫がある。燃焼部は、赤褐色の堅く締まった焼土が径 100 × 145 cm の規模で楕円状に存在し、層厚 30 cm の浅い皿状に形成されている。燃焼部の中央に支脚に利用されたと推定される 7 × 5 × 5 cm の小礫がある。煙道部は割り貫き式である。煙道は長さ 160 cm で、燃焼部から煙道部入口でやや段をもつが、煙出し部へ向かって緩やかに上がる。煙出し部の平面形は円形で、径は約 30 cm、深さ 20 cm である。

出土遺物（第 108 図、写真図版 96）

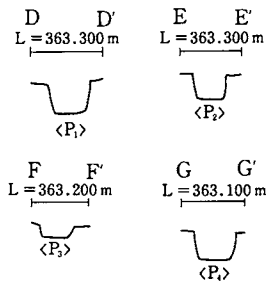
652 はロクロ不使用の甕の口縁部から体部上半で、頸部でやや括れ、口縁部は外傾する。器面調整は口縁部が内外ともヨコナデで、体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のヘラナデである。653 はロクロ不使用の甕の口縁部から体部で、口縁部は外反する。調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面が斜位のヘラケズリ、内面が横位がヘラナデである。654 はロクロ不使用の甕の体部下半から底部で、外面はヘラケズリとヘラナデ、内面はヘラナデである。655 は底部の破片で、木葉痕が残っている。石器は 1 点出土で 656 は磨石である。埋土からの出土であり、本遺構に伴うものかは不明である。657 は鑿状の鉄製品で、先端部が扁平になっている。



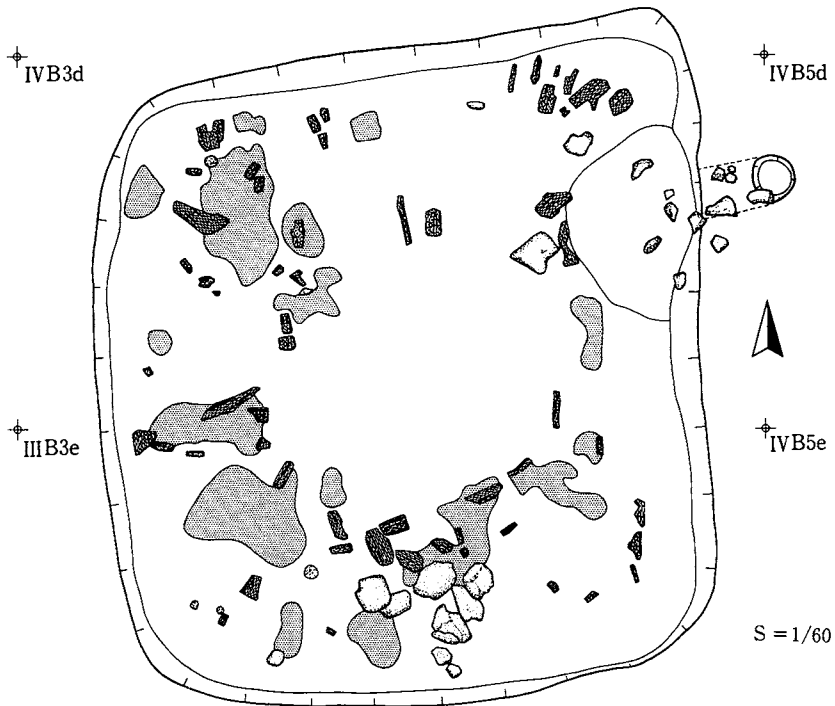
1. 7.5Y R2/3黒褐色土 表土 やわらかい 粘性なし 草根・木根を多量に含む
2. 10Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし 草根・木根を多量に含む
3. 7.5Y R4/4褐色土 やわらかい やや粘性あり 粘性なし 焼土・炭化材を含む
4. 7.5Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり



1. 10Y R2/3黒褐色土 やわらかい 粘性なし 焼土・炭化材を含む
2. 10Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし 黄褐色土が混入する
3. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 黄褐色土が混入する
4. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり



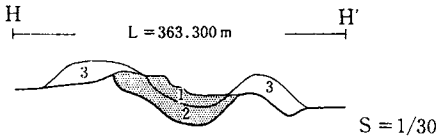
第106図 IVB3d住居跡(1)



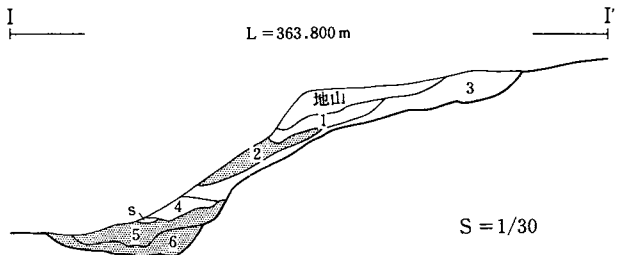
炭化材分布状況

IVB3f IVB4f IVB5f

S = 1/60

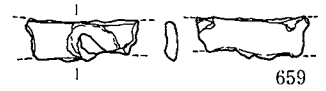
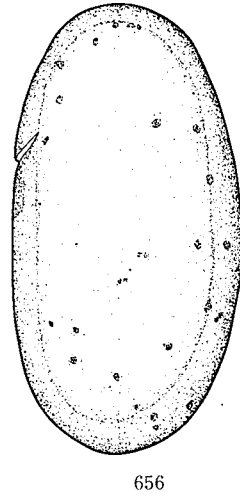
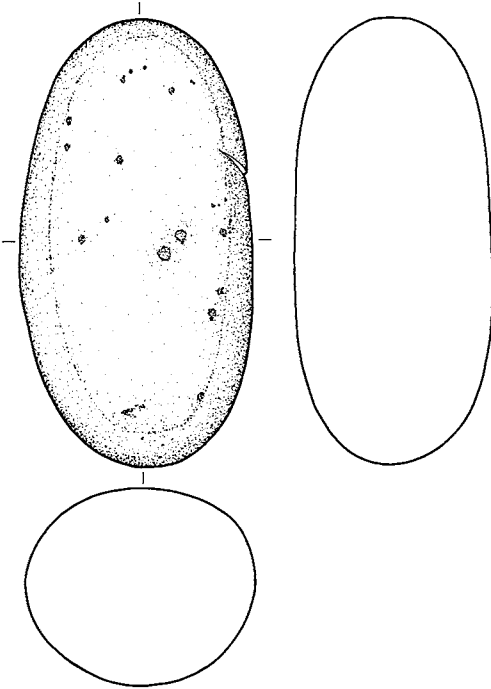
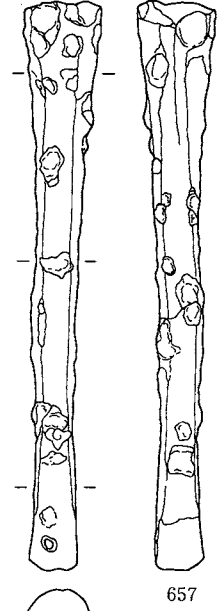
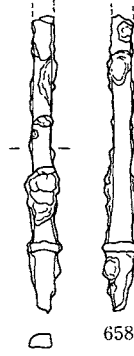
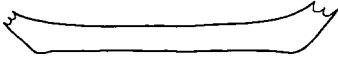
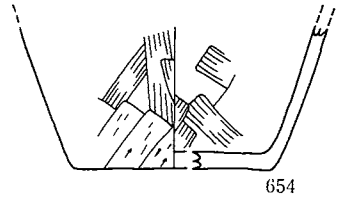
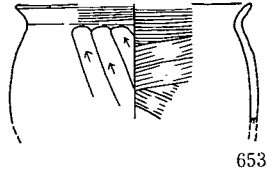
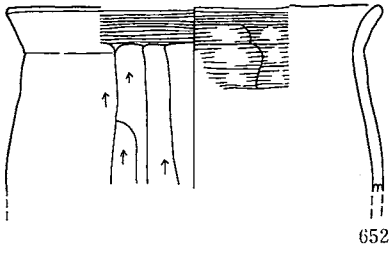


1. 5 Y R 4/8 赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
2. 2.5 Y R 6/8 橙色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
3. 10 Y R 4/4 褐色土 やわらかい やや粘性あり



1. 7.5 Y R 4/6 褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土粒が多量に混入する
2. 2.5 Y R 4/6 赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性あり
3. 10 Y R 4/6 褐色土 やわらかい 粘性あり
4. 10 Y R 5/8 黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 小礫を含む
5. 5 Y R 4/8 赤褐色土 焼土 かたくしまっている 炭化材が混入する
6. 2.5 Y R 6/8 橙色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

第107図 IVB3d住居跡(2)



652~654は S = 1/4
655~659は S = 1/2

第108図 IV B3d住居跡遺物

658 は鉄鏝の柄の部分と思われる鉄製品で住居内土坑からの出土である。鏝部分が欠損しており、残存長は 7.9 cm である。659 は刀子の一部とみられる鉄製品で、両端が欠損している。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

IV B 6 d 住居跡（第 109 図、写真図版 45）

本遺構は、調査区中央部からやや東寄りの IV B 6 d～6 e・IV B 8 d～8 e ラインのグリット範囲に位置する。遺構の北西壁角と煙道部から煙出し部が IV B 6 c グリットに入る。本遺構の西側には III B 3 d 住居跡、北西側に IV B 3 a 住居跡、東側に IV B 8 f 住居跡が隣接する。遺構は南側が沢状に落ちこむ斜面上に構築されているため、南壁の上部は幾分流失している。

遺構の占地箇所は、尾根から南方向への緩やかな斜面上に平坦部分が観察され、その箇所が住居跡を示唆するわずかな窪地となっていた。そこで表土面からセクション・ベルトを設定し、表土を除去した時点で方形に近い黒色土の輪郭を確認した。検出面は表土面である。住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が分布しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は不整の隅丸方形を呈する。規模は、北-南方向 364 cm、東-西方向 360 cm である。

埋土状況は、表土面の斜面が平坦部になる箇所のやや中央部が窪み、遺構が尾根上にあるため埋没しきれない状態が観察された。埋土は、遺構中位まで笹根・木根などが入り込んでいるが、黒褐色から暗褐色のシルト質土が主体である。埋土下位は焼土・炭化材がわずかに混じる。

壁はやや外傾気味に立ち上る。壁高の最大値は、北壁で約 62 cm、東壁で約 50 cm、南壁で約 19 cm、西壁で約 36 cm である。

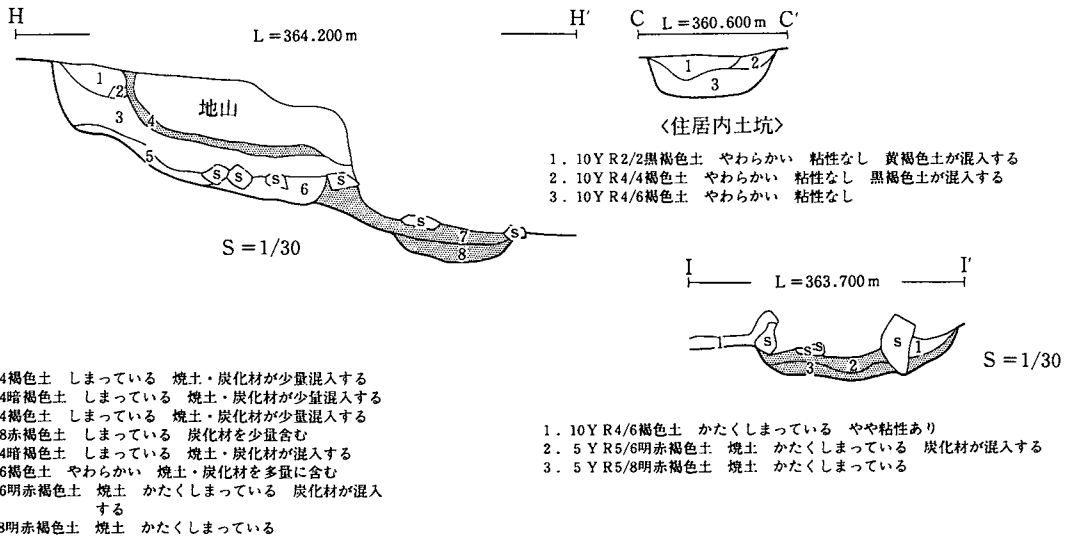
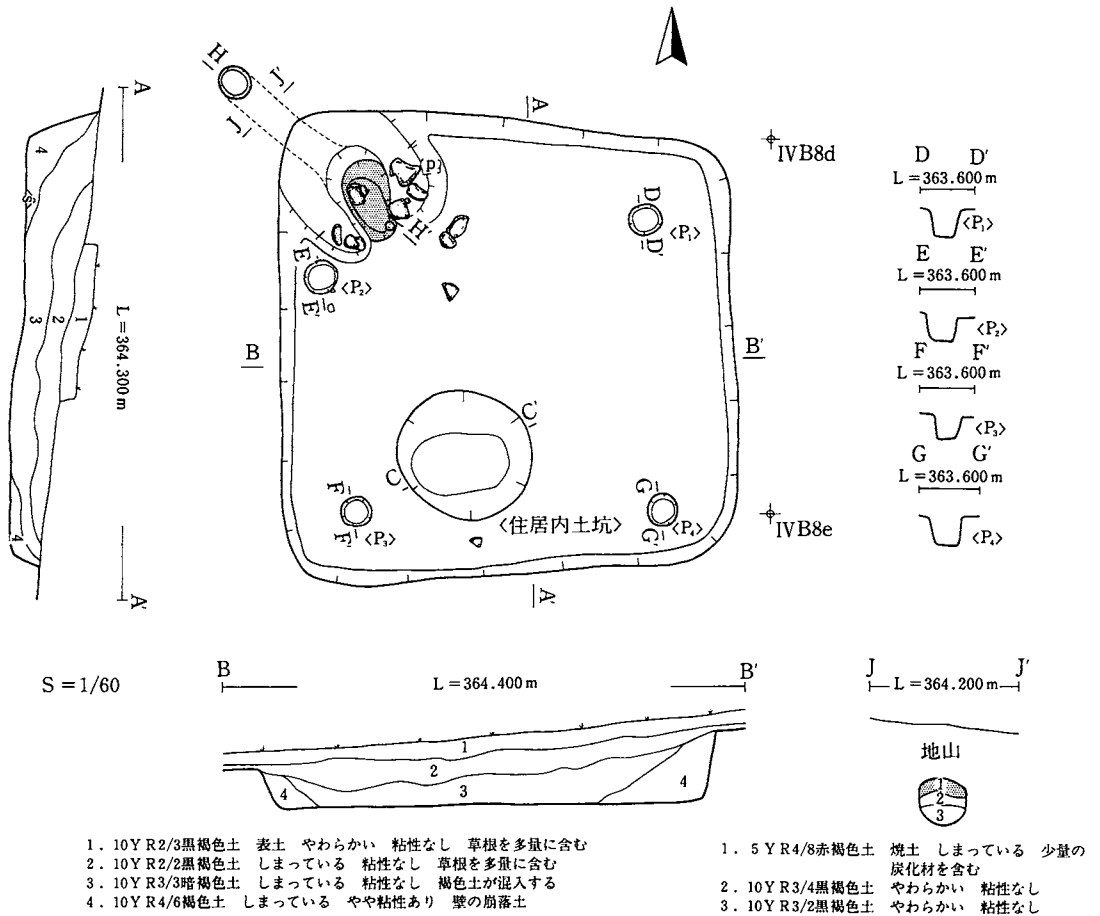
焼土・炭化材はカマド付近を中心にわずかに分布している。

床面は基盤層の褐色土中にあり、堅く締まり、全体的に平坦で比高差は約 8 cm である。貼り床及び周溝は検出されていない。

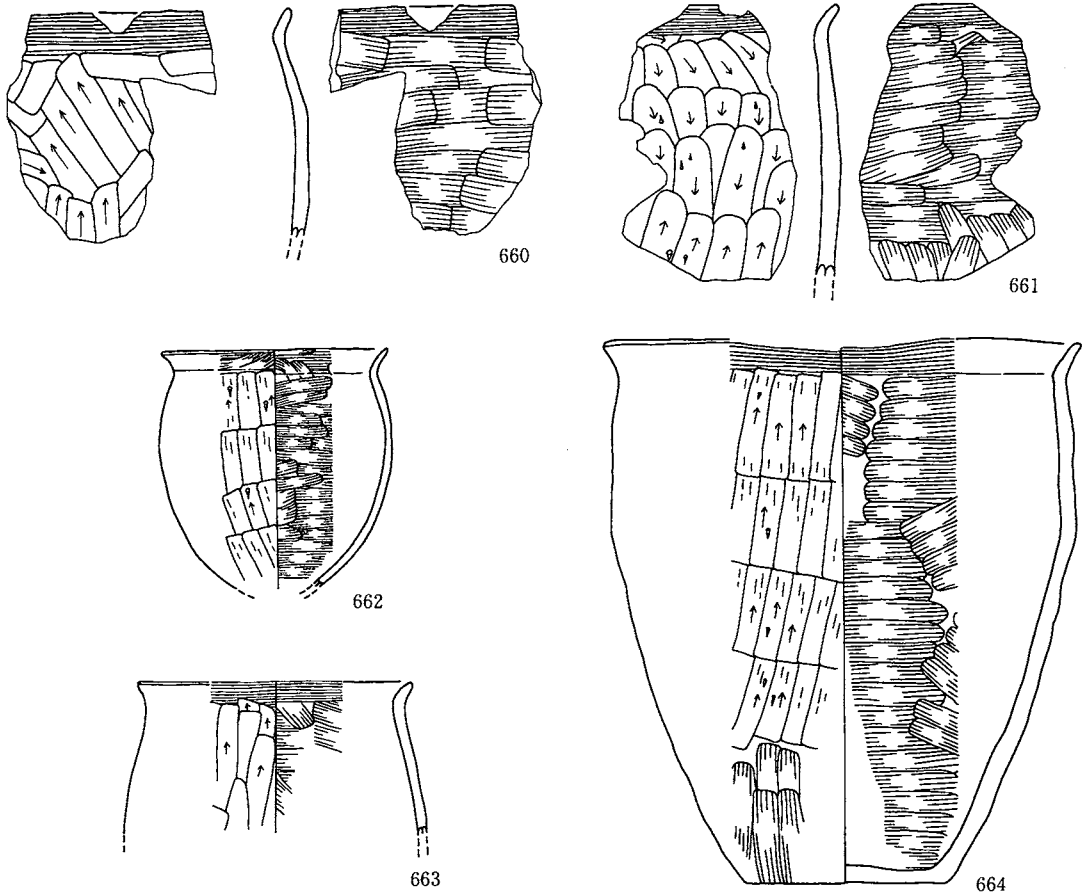
柱穴は 4 基検出されている。平面形は不整の円形で、規模は径 34 × 34～69 × 69 cm、深さ 46～71 cm である。柱穴間は 200～260 cm と等間隔ではない。

土坑は南壁付近で 1 基検出している。平面形は不整の楕円形、断面形が U 字状である。規模は径 98 × 120 cm、深さ 32 cm を測る。埋土は黒褐色と褐色のシルト質土で、遺構上部から入り込んだ木根による攪乱が見られるとともに、焼失時の崩落により混入した焼土粒、炭化材が含まれる。

カマドは北西壁角に構築され、カマドの長軸方向は N - 50° - W である。カマドの上部と袖部は左右とも、住居廃棄の際に破壊された可能性はあるが、残存状態は良好である。周辺に小礫が少量散在しているがカマド構築に関係するか否かは不明である。カマド袖部は左右とも芯材に亜角礫を用い、褐色のシルト質土で被って作られている。芯材の亜角礫は、右が 15 × 23



第109図 IVB6d住居跡



S = 1/4

第110図 IV B6d住居跡遺物

× 35 cm、左が 10 × 8 × 15 cm である。燃焼部には明赤褐色の堅く締まった焼土が径 50 × 65 cm の規模に楕円状に存在し、層厚 15 cm の浅い皿状に形成されている。燃焼部の中央に支脚に利用されたと思われる 20 × 15 × 5 cm の小礫が存在する。燃焼部から煙道部へは煙道部入口付近で段をもち、扁平な礫が置かれている。煙道部は割り貫き式である。燃焼部からの長さは 190 cm で煙出し部に向かって緩やかに上がる。煙道部の天井は焼成を受けた痕跡があり、炭化材を含む赤褐色の焼土が残る。煙出し部は円形で底面が丸く窪んでおり、径約 30 cm、深さ 30 cm である。

出土遺物 (第 110 図、写真図版 96)

660・661 はともに甕の口縁部破片で、口縁部は短く外傾して立ち上がる。器面調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。661 は胎土に砂粒を含

む。662は体部中央に最大径をもつ甕で、底部を欠いている。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のヘラナデである。663は甕の口縁部と体部上半で、口縁部はやや外反ぎみである。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面が縦位のヘラケズリ、内面がヘラナデである。664は体部上半が直立ぎみになる甕で、口縁部は外傾する。器面調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面は縦位のヘラケズリ中心で底部付近にヘラナデ調整がみられる。内面は横位のヘラナデである。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

IV B 8 f 住居跡（第111図、写真図版46）

本遺構は、調査区調査区中央部東寄りの南斜面上にあり、IV B 8 f～8 g・IV B 9 f～9 g ラインのグリットの範囲に位置し、カマドの煙道部から煙出し部がIV B 9 f グリットにある。北側にIV B 6 d 住居跡が隣接する。検出は、表土面を除去した時点で黒褐色土の方形の広がりを確認したことによる。検出面はⅢ層上面である。遺構は南側斜面に構築されているため、南東壁が流失しており、残存状態は極めて不良で遺構についての詳細は不明な点が多い。住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡と推定される。

平面形は不整の隅丸の方形を呈する。規模は、東－西方向約330 cmである。

埋土状況は、遺構中位まで笹根・木根などが入り込み攪乱を受けている箇所も見られるが、やや軟らかい黒褐色から暗褐色のシルト質土が主体である。埋土下位には焼土、炭化材が混じる。

壁は床面からやや内湾ぎみに立ち上がる。壁高は、北壁が最大約90 cmである。

焼土・炭化材は、カマド付近と北壁沿いに密に分布している。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリである。

床面は基盤層の褐色土中にあり、堅く締まり、ほぼ平坦で、比高差は約10 cmである。貼り床や壁際からの周溝は検出されなかった。

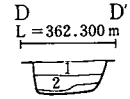
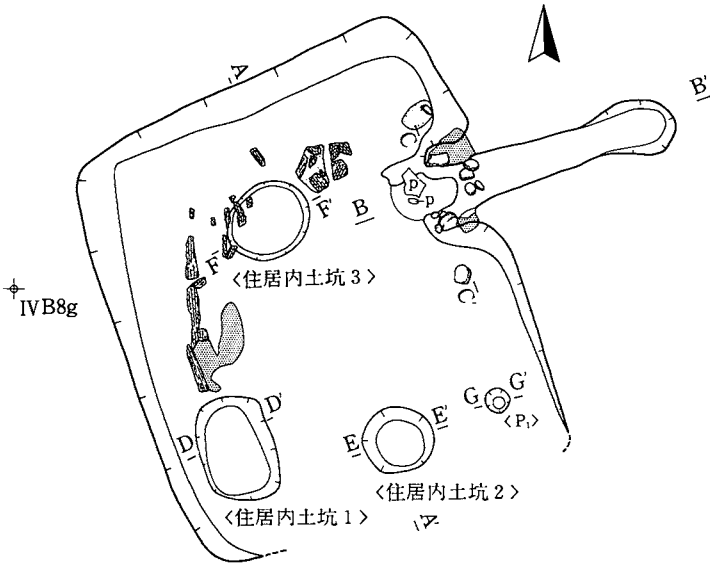
柱穴は住居内の東壁に近い場所から1基検出され、4隅に対応する他の柱穴は検出されなかった。平面形は不整の円形で、規模は径20 cm、深さ35 cmである。

土坑は3基検出されている。北壁寄りの土坑は平面形が不整の楕円形、断面形がU字状を呈し、規模は径58×72 cm、深さ約20 cmを測る。埋土は炭化材と焼土が含まれる黄褐色から暗褐色のシルト質土が主体である。西壁寄りの土坑は、平面形が不整の小判形で、断面形がややビーカー形を呈し、規模は径60×85 cm、深さ25 cmである。埋土は下位に多量の焼土を含む褐色から暗褐色のシルト質土が主体である。南側の土坑は、平面形が不整の円形で断面形が皿状を呈する。径は55 cm、深さ30 cmで、埋土は炭化材と焼土が含まれる暗褐色から褐色のシルト

IVB8f

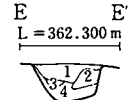
IVB9f

IVB0f



〈住居内土坑 1〉

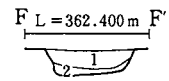
- 10Y R4/4 褐色土 やわらかい 粘性あり
- 10Y R3/4 暗褐色土 やわらかい 粘性なし 赤褐色焼土を多量に含む



〈住居内土坑 2〉

- 10Y R3/4 暗褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材・焼土を含む
- 10Y R4/4 褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材・焼土を含む
- 7.5Y R4/6 褐色土 しまっている やや粘性あり 炭化材・焼土を含む
- 10Y R4/6 褐色土 やわらかい 粘性あり

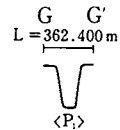
S = 1/60



IVB0h

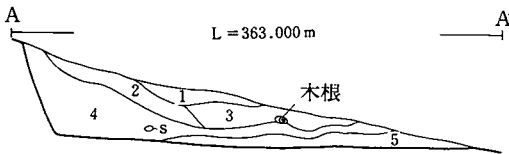
〈住居内土坑 3〉

- 10Y R5/6 黄褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材・焼土を含む
- 10Y R3/3 暗褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材・焼土を含む

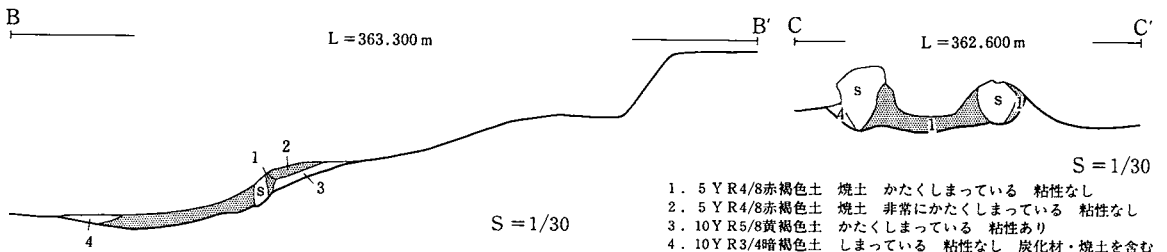


IVB8h

IVB9h

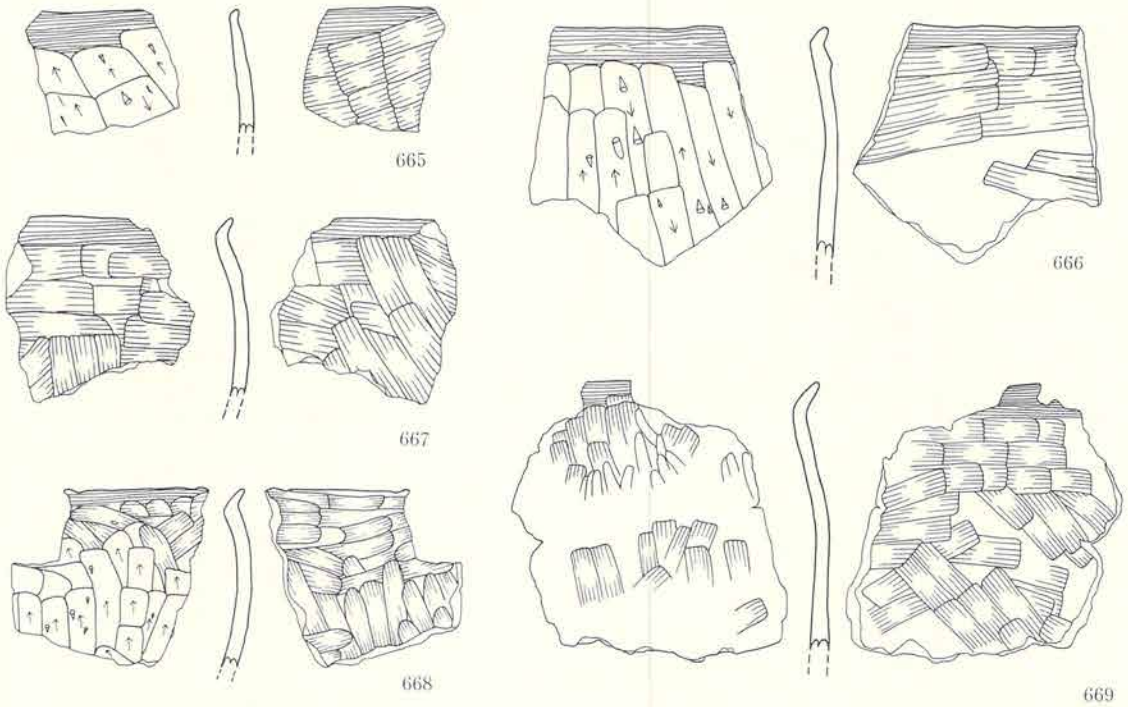


- 10Y R2/3 黒褐色土 しまっている 粘性なし
- 10Y R3/4 暗褐色土 しまっている 粘性なし
- 10Y R3/4 暗褐色土 しまっている 粘性なし 黒褐色土がまだらに混入する
- 10Y R5/6 黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
- 10Y R4/4 褐色土 やわらかい 粘性なし 少量の炭化材が混入する



- 5Y R4/8 赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 5Y R4/8 赤褐色土 焼土 非常にかたくしまっている 粘性なし
- 10Y R5/8 黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり
- 10Y R3/4 暗褐色土 しまっている 粘性なし 炭化材・焼土を含む

第111図 IVB8f住居跡



第112図 IV B8f住居跡遺物

S=1/4

質土が主体である。

カマドは東壁の中央から北側に寄った所に構築されている。カマド本体はほとんど残存せず構築に使用したと思われる亜角礫が周辺に散在している。両袖部は、黄褐色の粘性土で構築礫が押さえられ、構築された状態で残存する。カマドの長軸方向はE-17°-Nである。カマドの上部と袖部周辺は、住居廃棄の際に破壊された可能性がある。また流失などにより構築時の原形を留めず、残存状態は極めて不良である。燃烧部には赤褐色の堅く締まった焼土が径35×50 cmの規模に楕円状に存在し、層厚5 cm浅い皿状に形成されている。煙道部は他の遺構から剝り貫き式と推定されるが、構築時の状態は不明である。煙道は燃烧部から長さ235 cm、燃烧部から煙道部へは緩やかに傾斜し、煙道部中央から煙出し部移る箇所やや段を持つ。煙出し部へは緩やかに立ち上がる。煙出し部の平面形は円形で、規模は径が45 cm、深さ25 cmである。

出土遺物（第112図、写真図版96）

出土遺物はすべてロクロ不使用の甕の口縁部付近の破片である。665は口縁部が極めて短く外傾して立ち上がる。調整は、口縁部が内外ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。胎土には砂粒が含まれる。666は口縁部が極めて短く立ち上がり、体部上半が

直立する。口縁部内外はヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整が施されている。胎土には砂粒が多く含まれる。667～669は口縁部が短く外傾する甕で、口縁部内外はすべてヨコナデ、体部は667と669は内外面ともヘラナデ、668は外面がヘラケズリを主体とし、一部にヘラナデが見られる。体部内面はヘラナデである。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

V A 1 f 住居跡（第113図、写真図版47）

本遺構は、調査区中央部からやや東寄りのV A 1 f～3 fグリットの範囲に位置する。遺構の北側の大半は調査区域外に延びており、詳細は不明である。

検出状況は、表土を除去した時点で住居跡の埋土と思われる黒色土の広がりを確認した。検出面はⅢ層上面である。住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。検出規模は、東－西方向488cmである。

埋土は、調査区域外との境界にある埋土断面によると、住居跡中央部の表土面がやや窪み、埋没しきれない状態が観察された。埋土は遺構上面まで笹根・木根などが入り込んで攪乱を受けている箇所が見られるが、黒色から黒褐色の締まりのあるシルト質土が主体となっている。

壁は床面からやや外傾して立ち上る。壁高の最大値は、西壁で約25cm、南壁で約33cm、東壁で約30cmである。

床面は基盤層の褐色土中にあり、堅く締まっている。全体的に平坦で、比高差は約7cmである。貼り床及び周溝は検出されなかった。

柱穴・土坑・カマドは北側の調査区域外の部分に存在するものと思われる。

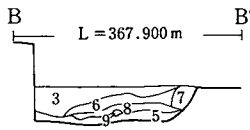
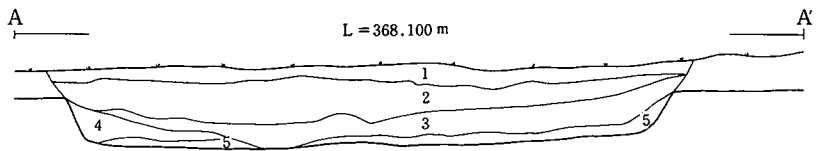
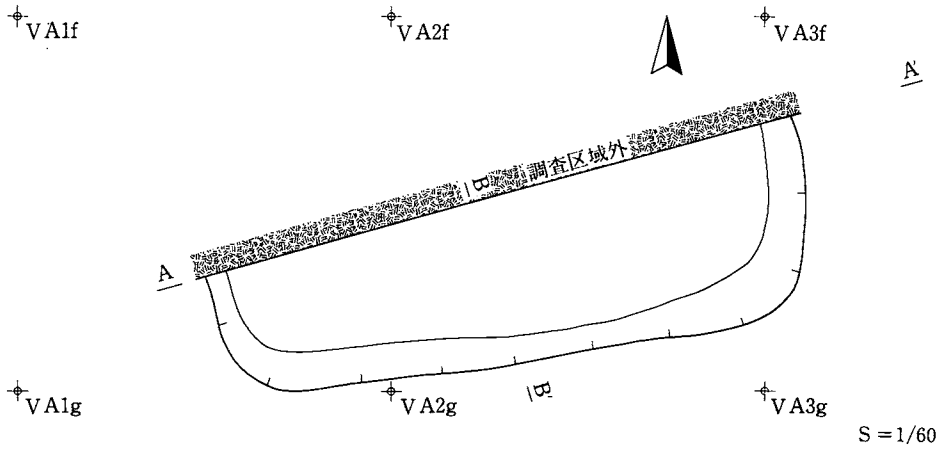
出土遺物（第113図、写真図版97）

670は鉄鏃と推定される鉄製品で、鏃及び柄に欠損部分がみられる。残存長は8.9cmである。671は角釘と思われる鉄製品である。断面形は長方形で残存長は5.7cmである。672は埋土から出土した磨石で、全面が使用されていたと思われるが欠損部分があり、詳細は不明である。

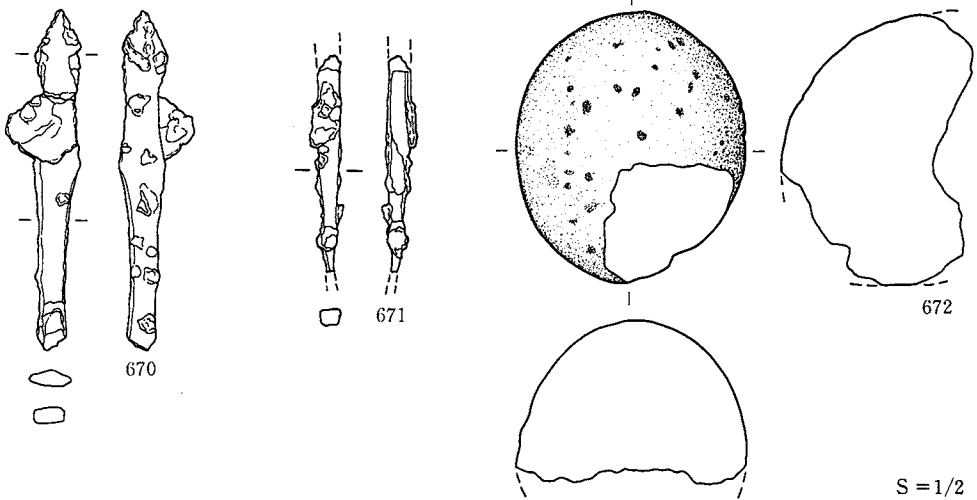
本遺構は主体となる部分が調査区域外にあり、遺物の出土も少ないため時期を特定することは難しいが、検出面、遺構の形状、埋土状況などから平安時代の住居跡と推定される。

V A 9 f 住居跡（第114・115図、写真図版48）

遺構は、調査区東寄りのV A 8 e～8 g・VIA 1 e～1 gラインのグリットの範囲に位置する。南東側にVIA 1 h住居跡、南側にV A 0 j住居跡、南西側にV A 7 j住居跡が隣接する。遺構の南側と東側は沢状に落ちこむ斜面に構築されているため、遺構上部の大半は流失してい



1. 10Y R3/2黒褐色土 表土 しまっている 粘性なし 草根が多数混入する
2. 10Y R2/1黒色土 かたくしまっている 粘性なし
3. 10Y R2/3黒褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 10Y R4/4-4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
5. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 小角礫を混入する
6. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり
7. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性なし
8. 10Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 炭化材を少量混入する
9. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり



第113図 VA1f住居跡遺構・遺物

る。特に南壁と東壁は顕著であり、壁高は低い。また北側の一部は調査区域外に延びており、詳細は不明である。

検出状況は、表土を除去した時点で方形に近い黒色土の広がりを確認した。検出面はⅢ層上面である。住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡と思われる。

遺構が調査区域外に続くため平面形の詳細は不明であるが、検出部分から隅丸方形を呈すると推定される。規模は、東-西方向 706 cm である。

埋土は、調査区域外との境界にある埋土断面によると、埋土中央の表土面がやや窪み、埋没しきれない状態が観察された。埋土は遺構上面まで笹根・木根などが入り込み攪乱を受ける箇所が見られるが、やや軟らかい黒色から黒褐色のシルト質土が主体である。埋土下位は焼土、炭化材が多量に混じる。

壁は床面より、ほぼ直に立ち上がる。壁高の最大値は、西壁で 75 cm、南壁では残存値で 8 cm、東壁では残存値で 16 cm である。

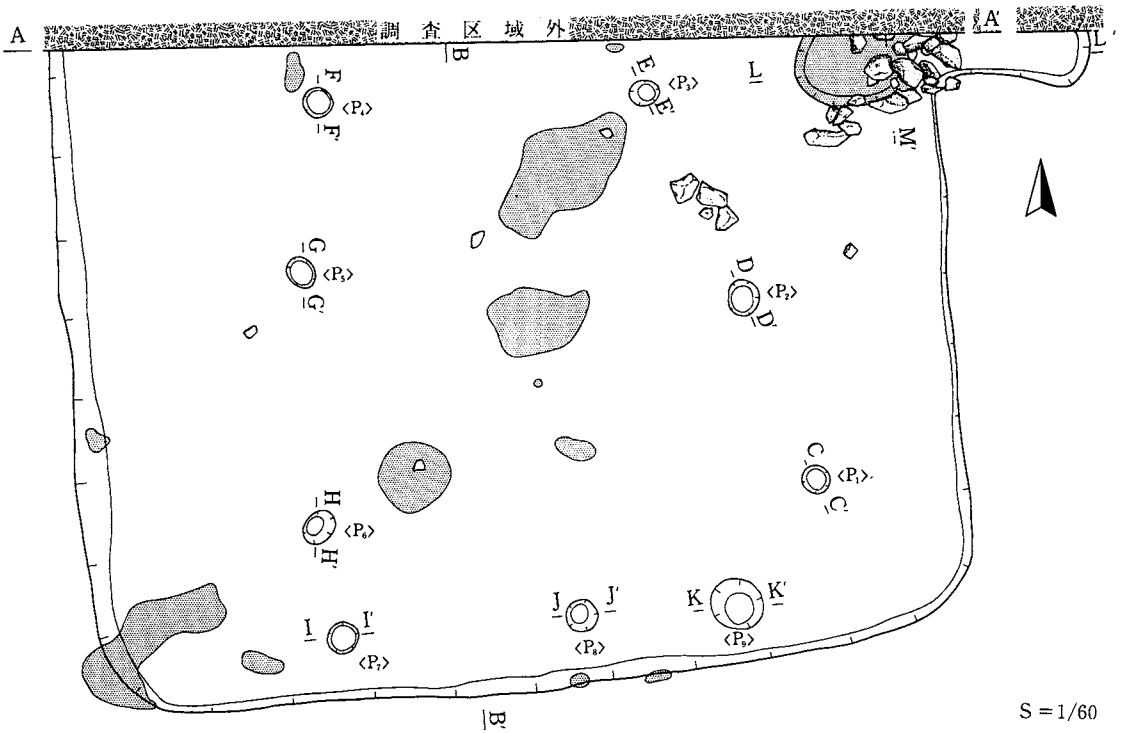
焼土・炭化材は中央部の南北方向と、南西壁角に広がっている。焼土の厚さは 1～3 cm である。床面中央付近から南寄りの 2 基の焼土は、不整の円形のもの径 60 cm、不整の楕円形のもの 55 × 80 cm の規模をもつ。焼土は堅く締まり、厚さ約 5 cm の浅皿状で、地床炉の使用も推測される。

柱穴は 9 基検出されている。平面形は不整の円形で、規模は径 21 × 23 ～ 41 × 46 cm、深さ 12 ～ 51 cm である。柱穴間は 140 ～ 200 cm と等間隔ではない。

カマドは東壁中央部から北寄りに構築され、調査区域外との境界で検出された。長軸方向は E-4°-N である。カマドの上部と袖部周辺には多量の大小の垂角礫が散乱しており、住居廃棄の際に完全に破壊された可能性がある。そのためカマドの残存状態は不良である。カマドの袖部跡の左右に、芯材に使用された長方形の垂角礫が残っており、左側の垂角礫の一部は調査区域外にあるが 5 × 15 × 29 cm、右側の垂角礫は 10 × 16 × 26 cm の大きさである。燃焼部には赤褐色の堅く締まった焼土が径 46 × 80 cm の規模に楕円状に存在し、層厚 11 cm 浅い皿状に形成されており、その中央に支脚に利用されたとと思われる 20 × 16 × 18 cm の礫がある。煙道部は調査区域外との境界にある埋土断面により、割り貫き式の状態が観察されている。煙道は燃焼部からの長さが 230 cm で、煙出し部へ緩やかに上る。煙出し部は円形で底面がやや丸く窪み、規模は推定値で径 30 cm、深さ 15 cm である。

出土遺物（第 115 図、写真図版 97）

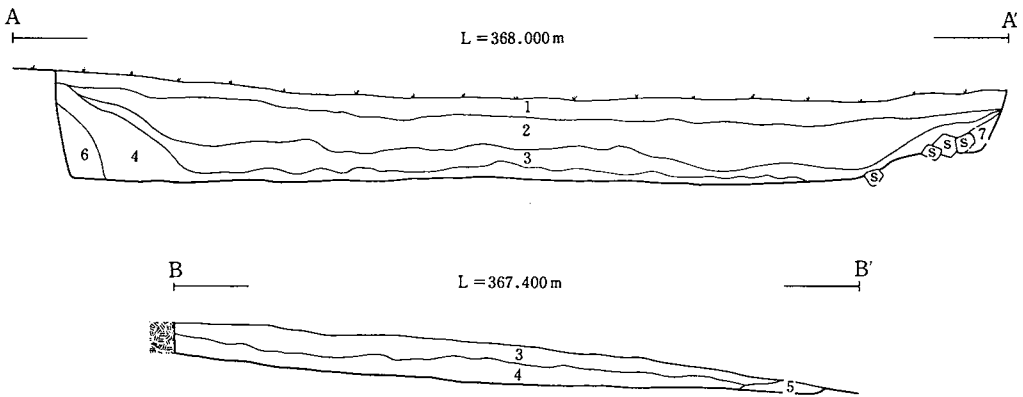
本遺構からの出土遺物は少なく、しかも細片での出土である。673・675 はロクロ不使用の甕の体部破片で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施されている。674 はロクロ不使用の甕の底部破片で、底部には木葉痕が見られる。676 は鉄滓である。本遺跡からは鍛冶遺構等は



VA9h

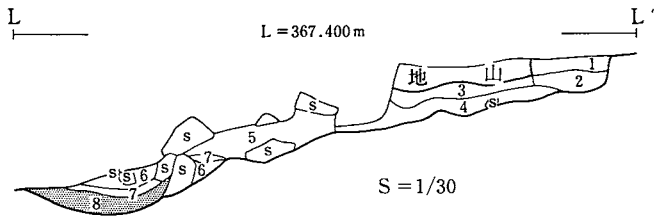
VA0h

VIA1h

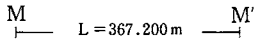


1. 10Y R2/3黒褐色土 表土 草根・木根が挿生 やわらかい 粘性なし
2. 10Y R2/2黒褐色土 しまっている 粘性なし
3. 10Y R3/2黒褐色土 しまっている 粘性なし
4. 10Y R4/4褐色土 しまっている 焼土・炭化材が少量混入する 粘性あり
5. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性あり
6. 10Y R5/6黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり 角礫が混入する
7. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性あり

第114図 V A9f住居跡(1)

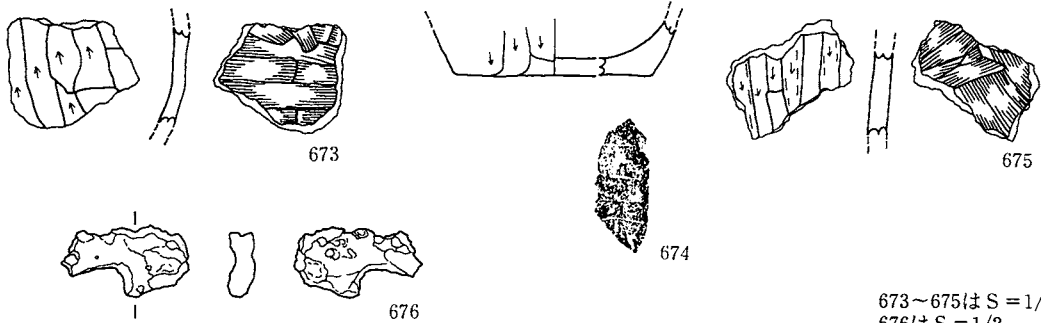
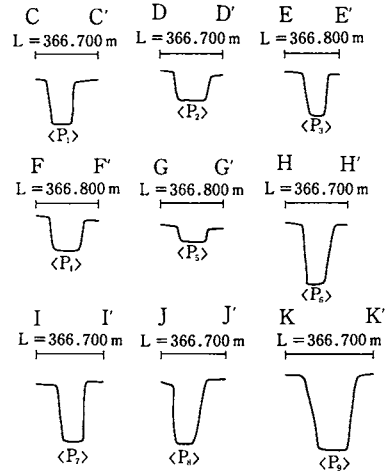


1. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
2. 7.5Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性あり 焼土・炭化材を多量に混入する
3. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり 焼土・炭化材を含む
4. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている 焼土粒・炭化材をまだらに混入する
5. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている 焼土を混入する カマド上部の崩壊土
6. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている 焼土を混入する 粘性あり
7. 7.5Y R4/8褐色土 かたくしまっている 焼成をうける 焼土・炭化材を多く含む
8. 2.5Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 燃焼部 小礫が多量に混入する



S = 1/30

1. 2.5Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 小礫が多量に混入する



673~675は S = 1/4
676は S = 1/2

第115図 V A9f住居跡(2)遺物

検出されていないが、付近に存在するものと推定される。

本遺構は時期を特定できる遺物は出土していないが、検出面、遺構の形状、埋土状況から平安時代の住居跡と推定される。

VA0j 住居跡（第116図、写真図版49）

本遺構は、調査区東側の南斜面上にあり、VA8j～VB8b・VA0j～VB0bラインのグリットの範囲に位置しており、カマドの煙道部から煙出し部がVB0aグリットにある。北側にはVIA1h住居跡、北西側にはVA9f住居跡、西側にはVA7j住居跡が隣接する。本遺構は平安時代の竪穴住居跡としては一番東側に位置している。

検出は、表土を除去した時点で方形の黒褐色土の広がりを確認したことによる。検出面はⅢ層上面である。遺構は尾根頂部から南側斜面にかけて構築されているため、南壁上部が流失しているが、残存状況は良好である。住居跡内の壁面と床面に、焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は不整の隅丸方形を呈する。規模は、北-南方向が464cm、東-西方向432cmである。

埋土状況は、遺構中位まで笹根・木根などが入り込み攪乱を受けている箇所が見られるが、やや軟らかい黒褐色のシルト質土が主体である。埋土下位は焼土、炭化材が混じる。

壁は床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は北壁が最大124cm、南壁が30cmである。

焼土・炭化材は、カマド付近と北壁沿いに密に分布している。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリで、一部に針葉樹（スギ？）がみられる。

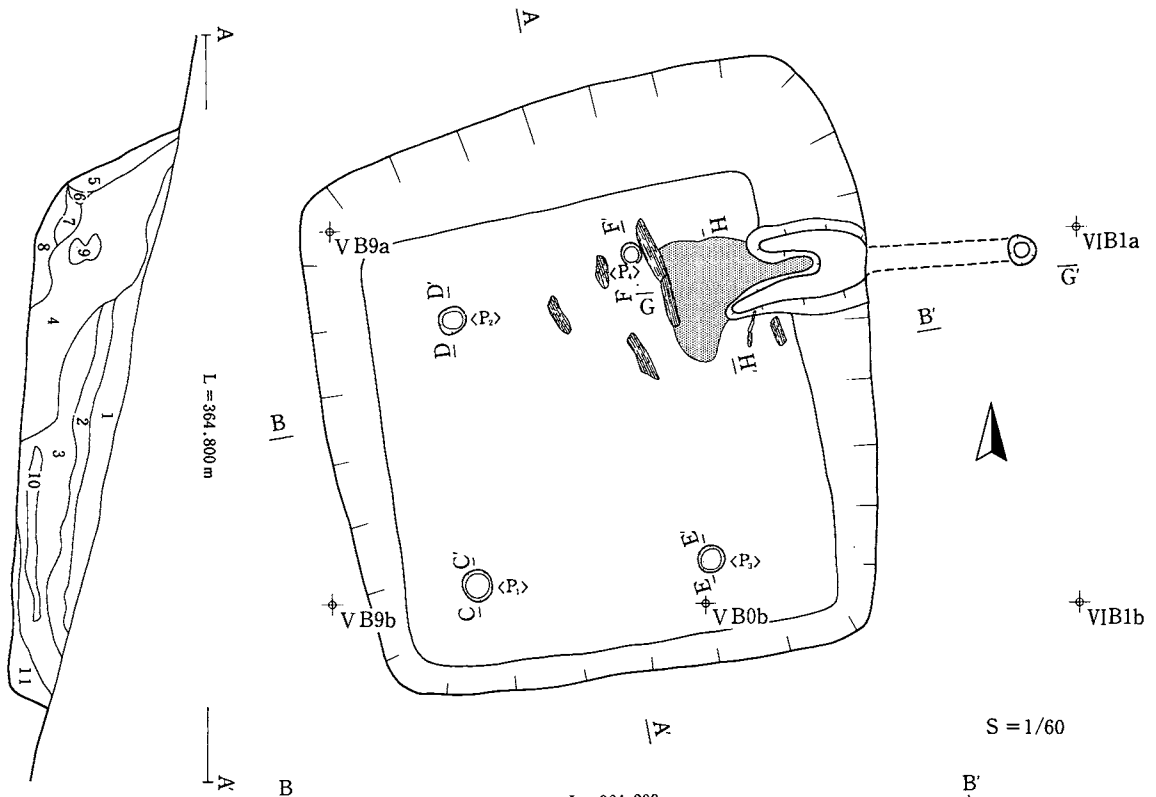
床面は基盤層の褐色土中であって堅く締まり、全体的には平坦で、比高差は約10cmである。貼り床や周溝は検出されなかった。

柱穴は住居内の角に近い場所から4基検出されている。平面形は不整の円形で、規模は径16×16～23×24cm、深さ14～35cmである。柱穴間は155～250cmと等間隔ではない。

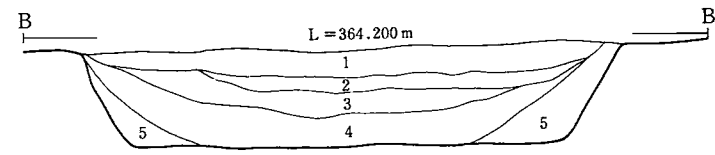
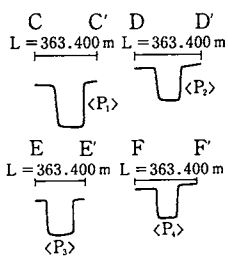
カマドは東壁中央から北側に寄った所に構築されている。カマドの長軸方向はE-3°-Nである。カマドの上部と袖部周辺は住居廃棄の際に破壊された可能性があり、構築礫などが散在するが、南袖部が僅かに残存している。燃焼部は暗赤褐色の堅く締まった焼土が、径40×60cmの規模で楕円状に存在し、層厚8cmの浅い皿状に形成されている。煙道部は削り貫き式である。煙道は燃焼部からの長さが295cmで、燃焼部から煙道部へは急傾斜で移り、煙道部中央から煙出し部へ移る箇所段を持った後、煙出し部へ向かって緩やかに立ち上がる。煙出し部の平面形は円形で、径は15cm、深さは35cmである。

出土遺物（第117図、写真図版97）

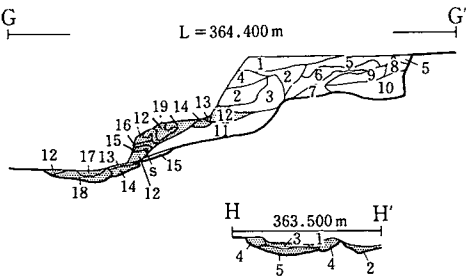
677はロクロ不使用の甕の体部で、口縁部と底部を欠いている。調整は外面が縦位のヘラケ



S = 1/60



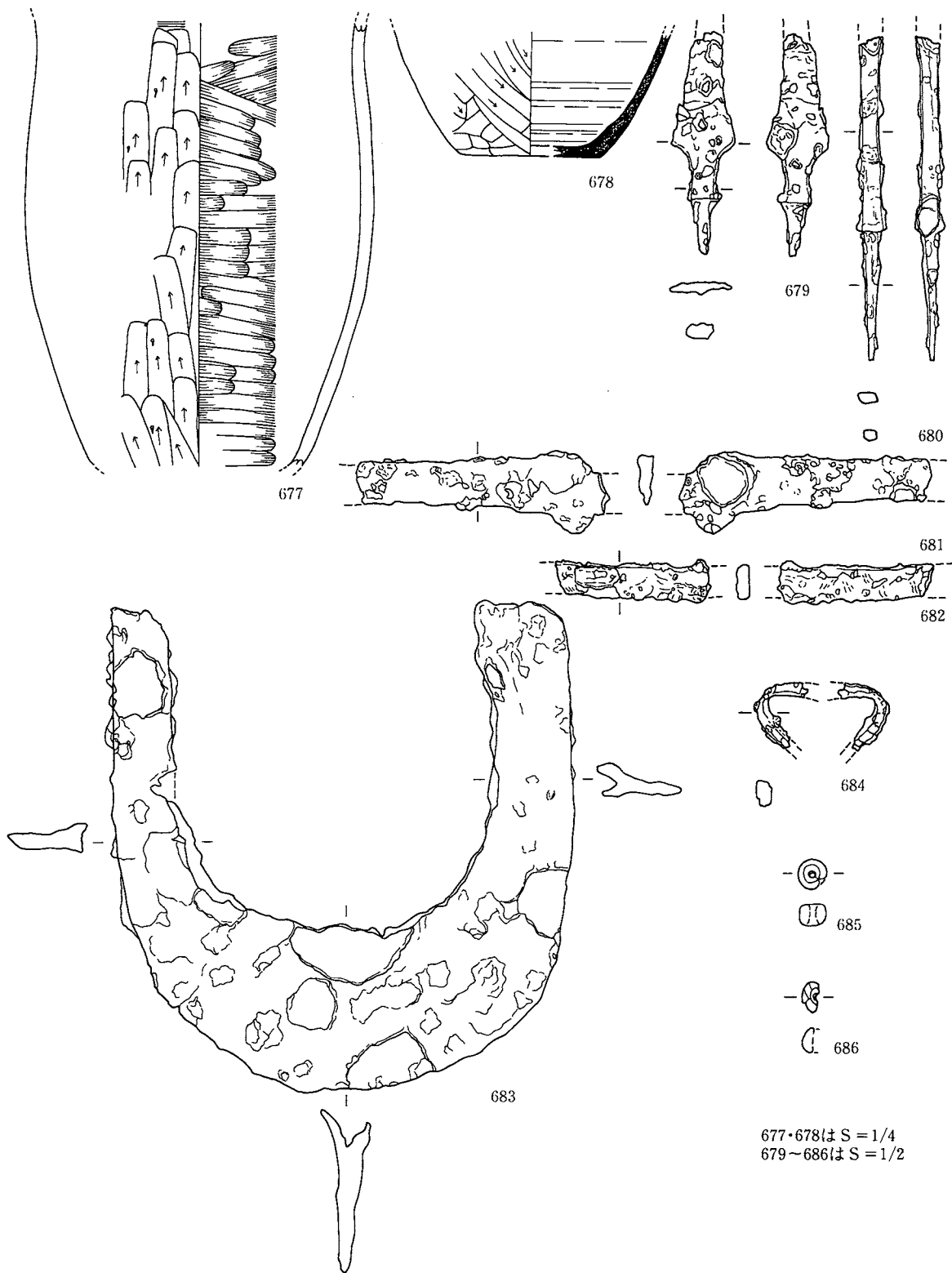
- 1. 7.5Y R3/1黒褐色土 かたくしまっている 粘性なし
- 2. 10Y R2/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし
- 3. 7.5Y R2/2黒褐色土 やわらかい 粘性なし
- 4. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり
- 5. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
- 6. 7.5Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
- 7. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり
- 8. 7.5Y R4/4褐色土 やわらかい やや粘性あり
- 9. 10Y R3/1黒褐色土 しまっている やや粘性あり
- 10. 10Y R3/2褐色土 しまっている 粘性あり
- 11. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり



- 1. 5Y R3/6暗褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 2. 5Y R4/6赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 3. 5Y R5/6明赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 4. 5Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 5. 2.5Y R3/6暗褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

- 1. 5Y R2/4極暗赤褐色土 やわらかい 粘性あり
- 2. 5Y R2/4極暗赤褐色土 やわらかい 粘性あり 黒色土・焼土粒を混入する
- 3. 5Y R2/4極暗赤褐色土 やわらかい 粘性あり 黒色土をまだらに混入する
- 4. 7.5Y R4/4褐色土 やわらかい 粘性あり
- 5. 7.5Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性あり 少量の炭化材を含む
- 6. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性あり 少量の焼土粒を含む
- 7. 7.5Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり ごく少量の細礫を含む
- 8. 5Y R3/6暗赤褐色土 やわらかい やや粘性あり 少量の焼土粒を含む
- 9. 5Y R3/3暗赤褐色土 やわらかい やや粘性あり 少量の焼土粒を含む
- 10. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性あり
- 11. 7.5Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性あり 焼土粒を含む
- 12. 7.5Y R4/6褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり
- 13. 5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 14. 5Y R4/6赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし
- 15. 7.5Y R4/4褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 16. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 焼土粒・炭化材を含む
- 17. 5Y R5/6明赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 18. 2.5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし
- 19. 2.5Y R4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

第116図 V AOj住居跡



677・678は S = 1/4
 679～686は S = 1/2

第117 図 VAOj住居跡遺物

ズリ、内面が横位のヘラナデである。678 はロクロ使用の須恵器の甕の体部下半で、外面は不規則なヘラケズリ調整が施されている。679 は鉄鏝で、鏝の先端部と柄の部分を除く。680 は鉄鏝の柄の部分と推定されるが詳細は不明である。681・682 はともに刀子と思われる鉄製品で、共に両端部を欠いている。683 は鋤先と推定される鉄製品で、埋土下位から出土している。684 は器種不明の鉄製品である。断面形は長方形で、くの字に曲がっている。685・686 は琥珀玉で南東の壁際から出土したものである。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

VB2c 住居跡（第118図、写真図版50）

本遺構は調査区中央部の南斜面上にあり、VB1c～3c・VB1e～3eラインのグリットの範囲に位置し、北東壁角の一部がVB3bグリット、カマドの煙道部から煙出し部がVB3cグリットにある。本住居跡の東側にはVB4b住居跡が隣接し、VB4b住居跡とは煙出し部から煙道部が重複関係にある。

本遺構の検出は表土面を除去した時点で方形の黒褐色土の広がりを確認したことによる。検出面はⅢ層上面である。遺構は南側斜面に構築されているため南東壁角が流失しており、遺構の詳細は不明な点が多い。住居跡内の壁面と床面には焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡と思われる。

平面形は隅丸長方形を呈する。規模は北-南方向435cm、東-西方向497cmである。

埋土状況は、遺構中位まで笹根・木根などが入り込み攪乱を受ける箇所も見られるが、やや軟らかい黒褐色から暗褐色のシルト質土が主体である。埋土下位は焼土、炭化材が混じる。

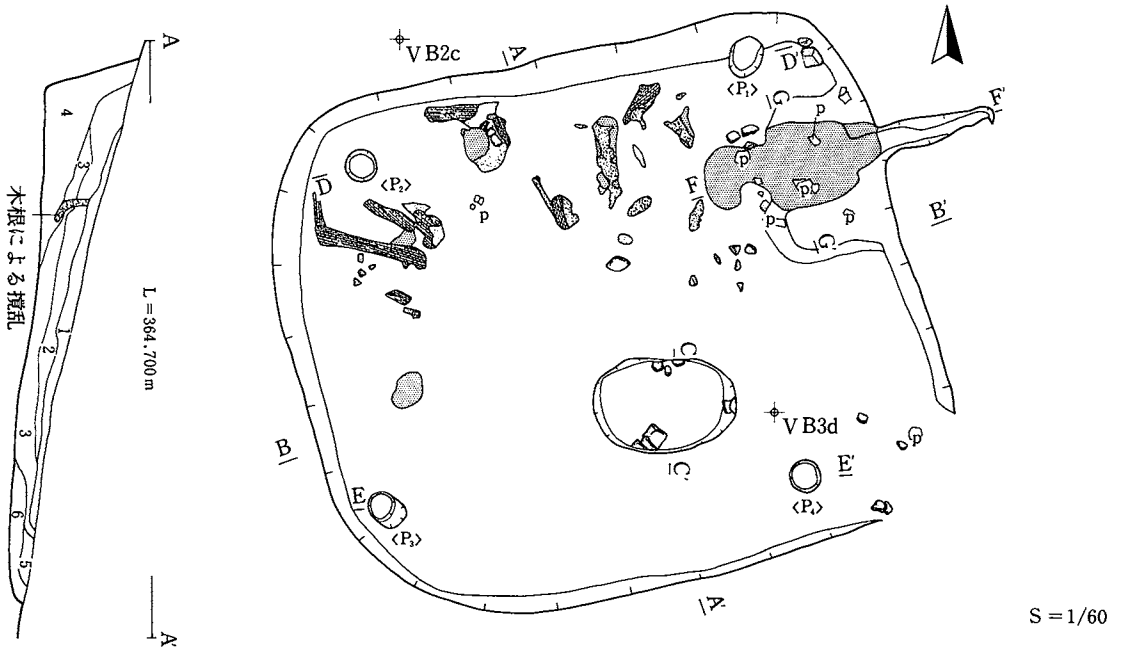
壁は床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は北壁が最大80cm、南壁が最大10cmである。

焼土・炭化材は、カマド付近と北壁沿いに密に分布している。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリで一部に針葉樹が見られる。

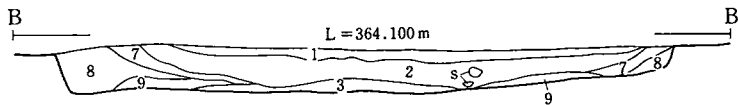
床面は基盤層の褐色土中であって強く締まっており、全体的には平坦で比高差は約10cmである。貼り床・周溝は検出されなかった。

柱穴は住居内の壁に近い場所から3基、壁に接触して1基検出されている。柱穴の平面形は不整の円形で、規模は径20×20～25×33cm、深さ15～28cmである。柱穴間は275～320cmと等間隔ではない。

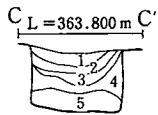
土坑は、遺構中央部からやや南によった地点から1基検出されている。平面形は不整の楕円形で、断面形は箱形を呈する。規模は径73×116cm、深さ50cmである。埋土の上位は炭化材・焼土を多量に含む暗褐色のやや軟らかいシルト質土、中位から下位にかけてはやや粘性を持つシルト質土が主体である。



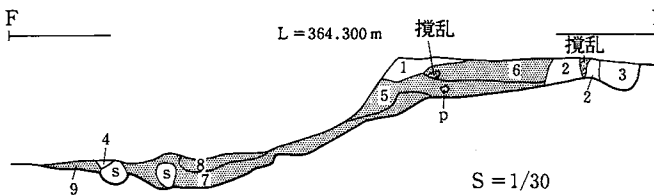
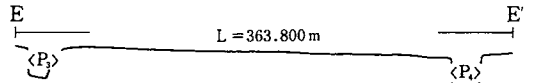
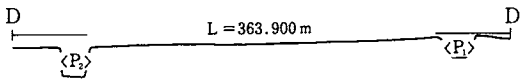
S = 1/60



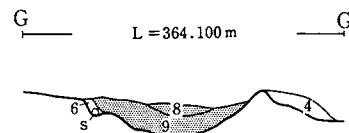
- | | |
|----------------------------------|--|
| 1. 10Y R2/3黒褐色土 しまっている 粘性なし | 6. 10Y R5/4にふい黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性なし |
| 2. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし | 7. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし |
| 3. 10Y R4/3にふい黄褐色土 しまっている やや粘性あり | 8. 10Y R4/4 褐色土 かたくしまっている 粘性なし |
| 4. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり | 9. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし 少量の焼土が混入する |
| 5. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性なし | |



- | |
|--|
| 1. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性あり 炭化材・焼土を含む |
| 2. 7.5Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 砂礫を多く含む |
| 3. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり 炭化材を少量含む |
| 4. 7.5Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり 2層をブロックで含む |
| 5. 7.5Y R4/3褐色土 しまっている 粘性あり 砂礫を含む |



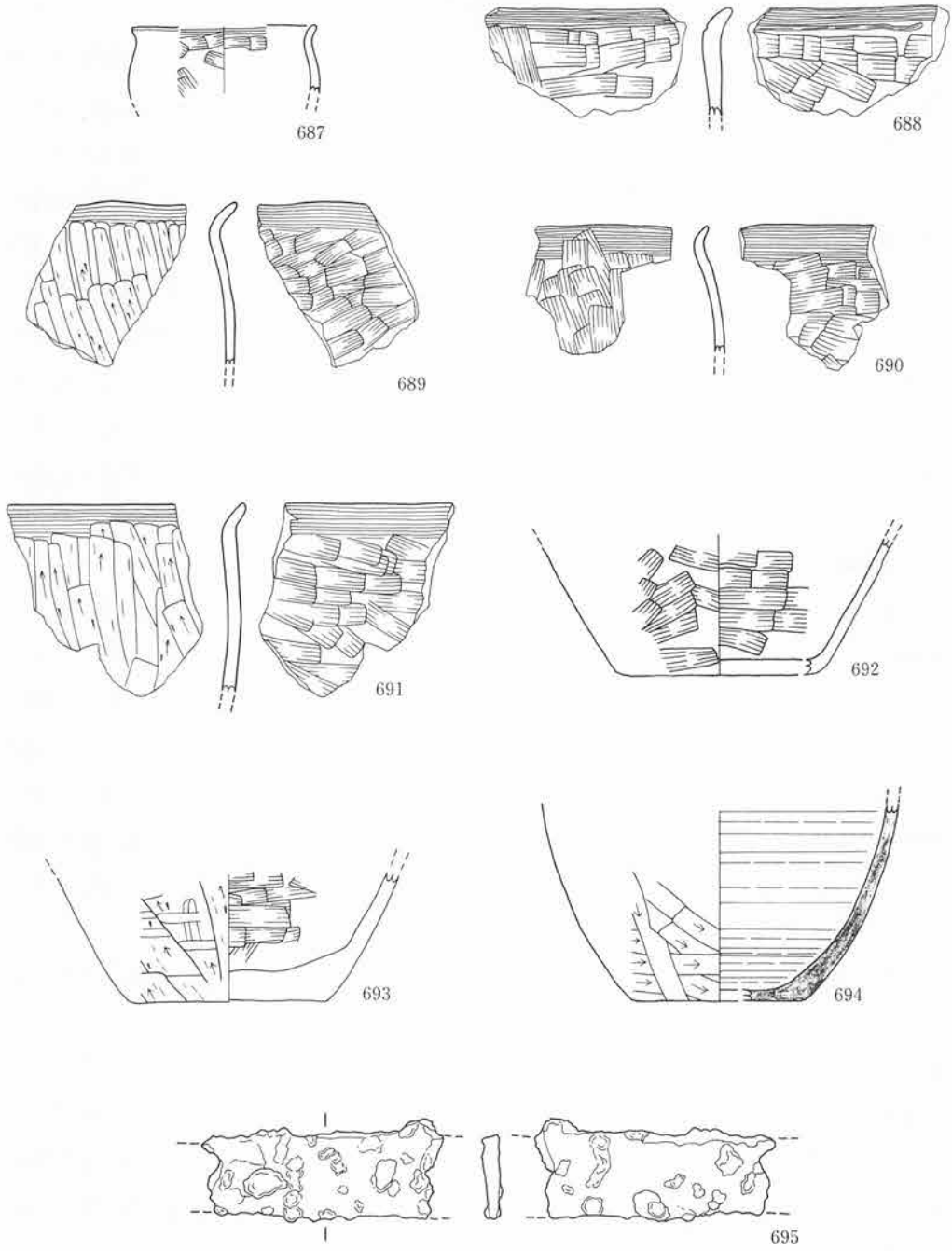
S = 1/30



S = 1/30

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. 7.5Y R4/4褐色土 かたくしまっている 粘性なし 焼土粒を少量含む | 6. 5Y R4/6赤褐色土 しまっている 粘性なし |
| 2. 5Y R4/6赤褐色土 かたくしまっている 粘性なし 焼土粒を含む | 7. 5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性あり |
| 3. 5Y R4/8赤褐色土 かたくしまっている 粘性なし 焼土粒を含む | 8. 5Y R5/6明赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし |
| 4. 5Y R4/8赤褐色土 やわらかい 粘性なし 焼土粒を多量に含む | 9. 2.5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし |
| 5. 5Y R3/6暗赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし | |

第118図 V B2c住居跡



687~694は S = 1/4
 695は S = 1/2

第119図 V B2c住居跡遺物

カマドは東壁中央から北に寄った所に構築されている。カマド本体はほとんど残存せず、構築に使用したと思われる亜角礫が周辺に散在している。南側は袖部が僅かに残存する。カマドの長軸方向はE-11°-Nである。カマドの上部と袖部周辺は、住居廃棄の際に破壊や流失などにより残存状況は不良である。また煙出し部と煙道部もV B 4 b住居跡の煙出し部及び煙道部と重複関係にあり詳細の不明な点が多い。燃焼部は赤褐色の堅く締まった焼土が径65×133cmの規模で存在し、層厚15cmの浅い皿状に形成されている。煙道部の作りは残存部分からは不明である。煙道は燃焼部からの長さが238cm、燃焼部から煙道部へはやや急角度で移り、煙道部中央から煙出し部に移る箇所段を持った後、煙出し部へ向かって緩やかに立ち上がる。煙出し部の平面形は円形で、規模は径が15cm、深さ15cmである。東側にあるV B 4 b住居跡とは、煙出し部から煙道部が重複関係にあり、本遺構の煙道部がV B 4 b住居跡の煙道部に切られている。このことからV B 4 b住居跡より本遺構が時期的には古いものと思われる。

出土遺物（第119図、写真図版98）

本遺構の出土遺物は、土師器・須恵器・鉄製品である。687～691はロクロ不使用の甕の口縁部破片で口縁部は短く外傾して立ち上がる。687・688・690の調整は口縁部内外ともヨコナデ、体部は内外ともヘラナデである。689・691は口縁部が内外ともヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ調整である。692・693はロクロ不使用の甕の体部下半から口縁部で、692は内外面ともヘラナデ調整が施され、693は外面がヘラケズリ主体で一部にヘラミガキ調整が見られる。内面はヘラナデ調整である。694はロクロ使用の須恵器の甕である。体部外面にはヘラケズリ調整が施されている。695は刀子と推定される鉄製品で、両端部が欠損しており、残存長は6.8cmである。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

V B 4 b住居跡（第120図、写真図版51）

本遺構は、調査区中央の南斜面上にあり、V B 3 b～5 b・V B 3 c～5 cラインのグリットの範囲に位置している。カマドの煙道部から煙出し部はV B 3 cグリットにある。北側にV B 2 b住居跡、西側にV B 2 c住居跡が隣接する。西側にあるV B 2 c住居跡とは、煙出し部から煙道部が重複関係にある。

検出は表土を除去した時点で暗褐色土の方形の広がりを確認したことによる。検出面はⅢ層上面である。遺構は南側斜面に構築されているため南壁の大半が流失しており、残存状態は極めて不良である。住居跡内の壁面と床面に焼土・炭化材が散在しており、焼失住居跡である。

平面形は不整の隅丸方形を呈すると推定されるが、南壁を欠くため全体の形状は不明である。規模は、東-西方向が550cmである。

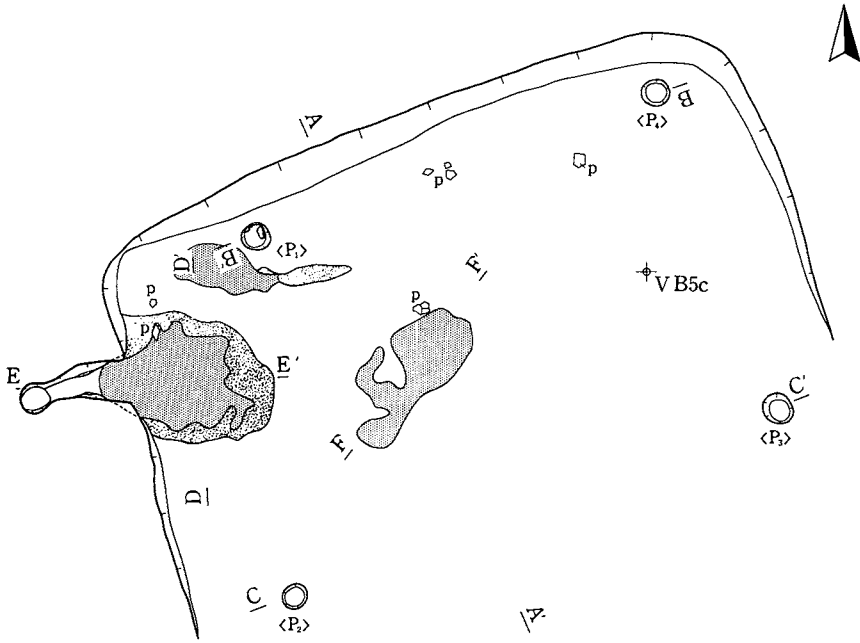
†V B3b

†V B4b

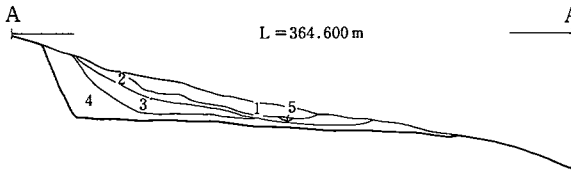
†V B5b

†V B3c

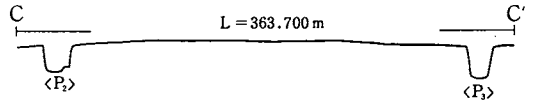
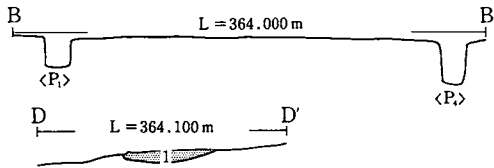
†V B5c



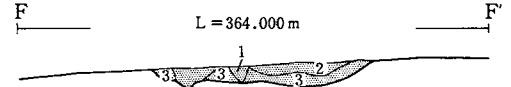
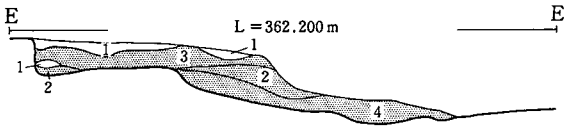
S = 1/60



1. 10 Y R 3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 草根が混入する
2. 10 Y R 3/4暗褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10 Y R 4/6褐色土 やわらかい やや粘性あり
4. 10 Y R 4/6褐色土 やわらかい やや粘性あり 炭化材が混入する
5. 5 Y R 3/4暗褐色土 焼土 しまっている 粘性なし



1. 2.5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり



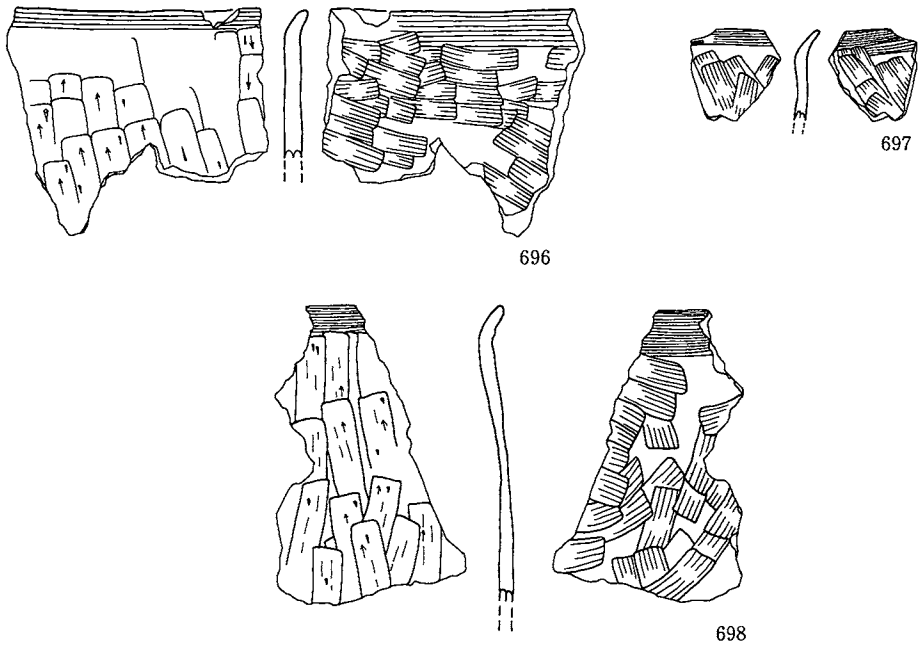
S = 1/30

S = 1/30

1. 5 Y R 3/6暗赤褐色土 やわらかい 粘性あり 焼土粒・細礫を含む
2. 5 Y R 5/8明赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし
3. 5 Y R 5/8明赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし
4. 2.5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている やや粘性あり

1. 5 Y R 3/6暗赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性あり
2. 5 Y R 5/8明赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし
3. 2.5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 しまっている やや粘性あり

第120図 V B4b住居跡



第121図 V B4b住居跡遺物

S=1/4

埋土状況は、遺構中位まで笹根・木根などが入り込み攪乱を受けている箇所も見られるが、やや軟らかい暗褐色のシルト質土が主体である。埋土下面は焼土、炭化材が混じる。

壁は床面からやや外傾して立ち上がる。壁高は北壁が最大 60 cm である。

焼土・炭化材は、カマド付近と北壁寄り及び床面中央付近に密に分布している。分布している炭化材の樹種はほとんどがクリである。

床面は基盤層の褐色土中であって強く締まり、ほぼ平坦で比高差は約 10 cm である。

柱穴は住居内の壁に近い場所から 4 基検出されている。平面形は不整の円形で、規模は径が 20 × 21 ~ 25 × 24 cm、深さは 20 ~ 35 cm である。柱穴間は 270 ~ 480 cm と等間隔ではない。

カマドは西壁中央から北に寄った所に構築されている。カマドの長軸方向は W-15°-S である。カマドの上部と袖部周辺は住居廃棄の際に破壊された可能性がある。また煙出し部と煙道部が V B 2 c 住居跡の煙出し部から煙道部と重複関係にあり残存状態は極めて不良である。燃焼部は赤褐色の強く締まった焼土が径 70 × 105 cm の規模で楕円状に存在し、層厚 10 cm の浅い皿状に形成されている。煙道は燃焼部からの長さが 165 cm で、燃焼部から煙道部へやや急傾斜で移り、煙道部中央部から煙出し部に移る箇所を段を持った後、煙出し部へ向かって緩やかに立ち上がる。煙出し部は円形で、径が 25 cm、深さは 15 cm である。西側にある V B 2 c 住居

跡との重複関係は、本遺構の煙道部がV B 2 c住居跡の煙道部を切って構築されている。このことからV B 2 c住居跡より本遺構が時期的に新しいものと思われる。

出土遺物（第121図、写真図版98）

床面中央部から北側部分にかけて少量の土師器片が出土しているが、実測可能な破片は3点のみである。3点ともロクロ不使用の甕の口縁部破片で、696は口縁部が極端に短く外傾して立ち上がる。調整は口縁部内外がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。697は小型の甕で、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。調整は口縁部が内外ともがヨコナデ、体部は内外ともヘラナデである。698は口縁部がヨコナデで、体部外面には縦位のヘラケズリが、内面には不整のヘラナデ調整が施されている。

本遺構は検出面、遺構の形状、埋土状況、出土遺物から平安時代の住居跡と推定される。

2. 土坑

I C 8 i 土坑（第122図、写真図版52）

本土坑は、調査区西側の斜面下の平場に位置している。検出は黒色の耕作土除去後の褐色土上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径が252×229cm、底部径が230×197cm、深さは16～33cmである。壁は急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、しまっている。底部には10～36cmの礫が散在し、やや凹凸が見られる。埋土は4層に細分され、上位は堅くしまった暗褐色土、下位は堅くしまった粘土質の褐色土が主体である。

本遺構は埋土及び床面の礫が人為的に置かれた痕跡があること、礫と礫の間に土器が設置されていたこと、規模が他の土坑に比べて大きいことなどから住居跡あるいは土壌の可能性も考えられる。

出土遺物（第129図、写真図版99）

699は深鉢形の土器の口縁部破片で、口唇部には押圧痕がみられ、口縁部には貝殻によるとみられる圧痕が施されている。700は小さな山形の突起をもつ土器の口縁部で、粘土紐が貼り付けられている。701は沈線によってU字状の文様が描かれる。702は沈線によって逆U字状に区画され、区画内に縄文が充填されている。703は縦位の隆沈線が施されている。704は粗製の土器の体部破片で、撚糸文が施されている。705は粗製の深鉢形土器で口縁部付近にはLR横回転、体部にはLR縦回転の単節斜行縄文が施され、底部には網代痕がみられる。706は粗製の深鉢形土器の体部下半でRL縦回転の単節斜行縄文が施され、底部には木葉痕がみられる。

本遺構は出土遺物に時期的な差があるため、構築時期は不明である。

I D 7 d 土坑（第123図、写真図版53）

本土坑は、調査区西端に位置している。検出は黒色の耕作土除去後の暗褐色土上面における黒色土の広がりによる。

平面形は南北方向に長い不正楕円形、断面形は浅鉢状を呈する。規模は開口部径 207 × 131 cm、底部径 179 × 59 cm、深さ 25 ～ 27 cm である。壁は 40 度前後の勾配で外傾して立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、しまっている。埋土は 3 層に分かれ、上位から中位にかけて黒色土が見られ、壁際には壁の崩落土と思われる黒褐色土と褐色土が見られる。本遺構は遺物を伴わず時期不明である。

I D 9 a 土坑 (第 123 図、写真図版 53)

本土坑は、調査区西端に位置している。検出は褐色土中における極暗褐色土の円形の広がりによる。

平面形は円形で、断面形はほぼピーカー状を呈するが、やや底部が広がる。規模は開口部径 118 × 112 cm、底部径 129 × 110 cm、深さ 76 ～ 77 cm を測る。壁はほぼ直に立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、しまっている。埋土は 7 層に細分されるが上位は極暗褐色土、中位から下位にかけては黒褐色土及び暗褐色土が層となり、底部の壁際には褐色土が見られる。遺物は出土せず、時期不明である。

II C 6 i 土坑 (第 123 図、写真図版 53)

本土坑は、調査区西側の斜面中位に位置している。検出はⅢ層上面における暗褐色土の楕円形の広がりによる。

平面形は楕円形で、断面形は斜面下方が流失しているため詳細は不明であるがピーカー状を呈すると思われる。規模は開口部径 163 × 121 cm、底部径 143 × 96 cm、深さは斜面上方が 65 cm、斜面下方が 21 cm である。壁は 70 度前後で外傾して立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、斜面下方部分がやや高くなる。埋土は基本的には暗褐色土 1 層で、壁際に壁の崩落土と思われる褐色土が見られる。

出土遺物 (第 129 図、写真図版 99)

707 は体部破片で粘土紐を貼り付けた上に原体が押圧されており、それに平行して半截竹管による刺突が施されている。708 は隆帯によって口縁部が区画され、口縁部は無文となっている。709 は沈線によって渦巻文が描かれている。710 ～ 712 は沈線によって区画され、縄文が充填される文様をもつ土器である。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期の土坑と推定される。

II C 7 e 土坑 (第 123 図、写真図版 53)

本土坑は調査区西側の斜面上方に位置し、ⅡC7e住居跡と重複関係にある。構築時期はⅡC7e住居跡より古い。検出はⅡC7e住居跡の床面精査中にかたさの異なる面を検出したことによる。

平面形は円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径152×151cm、底部径132×129cm、深さは62cmを測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成され、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅣ層を掘り込んでおり、ほぼ平坦である。埋土は5層に細分され、上位は褐色土、中位から下位にかけては黄褐色土が主体となる。下位は非常にかたくしまっており、小角礫が多数混入する。遺物は出土しておらず、時期不明である。

ⅡC7e-2土坑（第124図、写真図版57）

本土坑は調査区西側の斜面上方に位置するⅡC7e住居跡の床面に重複して検出された。構築時期は本土坑の方が古い。検出は炭化材と焼土粒混じりの褐色土の円形の広がりによる。平面形は楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が179×156cm、底部径が170×143cm、深さが78cmを測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成され、ほぼ直に立ち上がるが、東壁はやや内湾する。底部はⅣ層を掘り込んであり、ほぼ平坦である。埋土は7層に細分され、上位は粘土質の褐色土と黄褐色土とともに炭化材と焼土粒を混入する。中位は粘土質の褐色土が主体でかたくしまっている。下位は粘土質の黄褐色土でやわらかい。遺物は出土せず、時期不明である。

ⅡC8e土坑（第124図、写真図版54）

本土坑は調査区西側の斜面上方に位置し、ⅡC7e住居跡およびⅡC8d住居跡と重複関係にある。構築時期はⅡC7e住居跡より新しく、ⅡC8d住居跡より古いものと思われる。検出はⅡC7e住居跡の精査中に住居跡の東壁に土坑の埋土を確認したことによる。平面形は住居跡によって西側が切られているため詳細は不明であるが、残存部分から円形を呈するものと推定される。断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が54cm、底部径が128×108cmで、深さは75cmを測る。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されている。底部はⅣ層を掘り込んであり、平坦でかたくしまっている。埋土は上位は褐色土主体で微小な炭化材および焼土が混入する。中位は粘土質の褐色土で、下位は粘土質の黄褐色土である。出土遺物はなく、時期不明である。

ⅡC8f-1土坑（第124図、写真図版54）

本土坑は調査区西側の斜面上方に位置し、南側のⅡC8f-2土坑と重複関係にある。構築時期は本土坑の方が新しい。本土坑の北側にはⅡC8d住居跡が、東側にはⅡC9e住居跡が、西側にはⅡC7f住居跡が存在する。検出は、Ⅲ層上面における暗褐色土の円形の広がりによ

る。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径が140×125 cm、底部径が114×99 cmで、深さは45 cmを測る。壁はⅢ層中に形成され外傾して立ち上がる。底部もⅢ層中において平坦でしまっている。埋土は暗褐色土が主体で、壁際に褐色土がみられる。

出土遺物（第129図、写真図版99）

713は土器の突起部分で、突起には貫通孔が開けられている。また突起から斜めに弧を描くように粘土紐が貼り付けられ、その両側に細い棒状の工具によって刺突が施されている。714・715はともに不定形石器で、714は2つの刃部が隣り合い、715は1つの側辺にのみ刃部をもつ。

本遺構は出土遺物が少なく、時期を特定することができない。

ⅡC8f-2土坑（第124図、写真図版54）

本土坑は調査区西側の斜面上方に位置し、北側がⅡC8f-1土坑と重複関係にある。構築時期は本土坑の方が古い。他の遺構との位置関係はⅡC8f-1土坑と同様である。検出はⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。規模・形態はⅡC8f-1土坑によく似ており、平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径124 cm、底部径が98 cmで、深さ34 cmを測る。壁および底部はⅢ層中に形成され、壁は外傾して立ち上がる。底部はほぼ平坦でしまっている。埋土は暗褐色土が主体で、壁際に褐色土がみられる。

出土遺物（第130図、写真図版99）

716は棒状の工具による刺突と貝殻圧痕文が施された早期の土器で、埋土からの出土のため流れ込みの遺物と考えられる。717は突起付きの口縁部破片で、突起から斜めに粘土紐が貼り付けられ、その両側に角棒状の工具によって刺突が施されている。718は体部破片で縦位の沈線によって区画され、区画内に縄文が充填されている。

本遺構は出土遺物が乏しく、時期不明である。

ⅢB5h土坑（第124図、写真図版54）

本土坑は調査区西側の緩斜面に位置し、ⅢB3g-2住居跡と重複関係にある。構築時期は本土坑の方が古い。検出はⅢB3g-2住居跡精査時に壁面に暗褐色土の広がりが確認されたことによる。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は、開口部径が重複によって計測不能であるが120 cm前後と推定される。底部径は172×163 cm、深さは101 cmを測る。壁はⅢ層中にあり、底部から50 cm程のところまでは内湾し、その後検出面まではほぼ直に立ち上がる。底部はⅢ層中に形成され、平坦でしまっている。埋土は5層に細分され上位はシルト質の暗褐色土、下位は粘土質の褐色土が主体で、底部の壁際に黄褐色土がみられる。

出土遺物（第130図、写真図版99）

719 は口縁部破片で、隆帯によって渦巻文が施文されている。720・721 は縦位の沈線によって区画され、区画内に縄文が充填されている。722 は横位及び逆U字状の沈線によって区画され、内部に縄文が充填されている。723 は粗製の深鉢形土器で、体部にはLR縦回転の単節斜行縄文が施文されており、底部には網代痕がみられる。

出土遺物は少ないが、縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

Ⅲ B 8 f 土坑（第 125 図、写真図版 55）

本土坑は調査区西側の緩斜面上方に位置し、Ⅲ B 8 f 住居跡の床面に重複して検出された。構築時期はⅢ B 8 f 住居跡の方が新しい。検出はⅢ B 8 f 住居跡の床面において黄褐色土の円形の広がりを確認したことによる。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。検出規模は開口部径が 185 × 181 cm、底部径が 238 × 235 cm、深さ 84 cm を測る。壁はⅣ層中にあり、東側は底部から 70 cm 程のところまで内湾し、その後検出面までは急角度で外傾して立ち上がる。西側は底部から 40 cm 程のところまでは外傾し、その後底部から 70 cm 程のところまで内湾した後ほぼ直に立ち上がる。底部はⅣ層中に形成されており、小さな凹凸があるもののほぼ平坦でかたくしまっている。埋土は 8 層に細分され、黄褐色土が主体となる。なお、埋土中にはⅢ B 8 f 住居跡の炉の焼土がみられる。

出土遺物（第 130 図、写真図版 99）

724 は深鉢形の土器の体部下半から底部で、体部上半を欠くため詳細は不明であるが、逆U字状の沈線区画内に縄文が充填される文様をもつものと思われる。

本遺構は遺物が乏しく、時期を特定することができない。

Ⅲ C 1 c 土坑（第 125 図、写真図版 55）

本土坑は調査区西側の緩斜面に位置し、Ⅲ C 1 b 住居跡と重複関係にある。構築時期は本土坑の方が古い。検出はⅢ C 1 b 住居跡の床面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が 152 × 144 cm、底部径が 204 × 191 cm、深さが 142 cm である。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成され、底部から 80 cm 程のところまで内湾し、その後検出面まではほぼ直に立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、やや中央が窪むもののほぼ平坦でかたくしまっている。埋土は上位から中位にかけてはシルト質の暗褐色土と褐色土が主体で壁際に黄褐色土がみられる。下位は粘土質の褐色土が主体で中央部付近には黄褐色土および褐色土のやわらかい層がみられる。

出土遺物（第 131・132 図、写真図版 99）

725 は横位の隆帯によって区画され、口縁部が無文帯になっている。726 は沈線によって区画

された無文帯をもつ土器である。727は横位に粘土紐と平行沈線が施され、粘土紐の上には刺突がみられる。728は口縁部が内湾する形の深鉢形土器の破片で、粘土紐を貼り付けて施文されている。729～731は沈線によって楕円あるいは逆U字状に区画され、内部に充填縄文が施される土器である。732は粗製土器で、R L R縦回転の複節縄文が施文されている。733は石棒である。4つに分割して出土しており、1つはⅢC 1 b住居跡の埋土からの出土である。石質は輝石安山岩で、残存長は45.5 cmである。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

ⅢC 2 c 土坑（第126図、写真図版55）

本土坑は調査区西側の緩斜面に位置し、ⅢC 1 b住居跡の床面に重複して検出された。構築時期は本土坑の方が古い。検出はⅢC 1 b住居跡の床面においてⅢ層とは色調の異なる褐色土の円形の広がりを確認したことによる。

平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が174×165 cm、底部径が209×206 cmで、深さは158 cmである。壁はⅢ層からⅤ層にかけて形成されており、底部から60 cm程のところまでは内湾し、その後ほぼ直に立ち上がる。底部はⅤ層中に形成され、細かな凹凸がみられるが平坦で非常にかたくしまっている。埋土は11層に細分され、上位は褐色土が主体で微小な炭化材が少量混入する。中位はやわらかな暗褐色土で微量の焼土粒が混じる。下位は粘土質の黄褐色土で底部に少量の焼土がみられる。

出土遺物（第131・132図、写真図版100）

734は口縁部が強く内湾する器形の深鉢形土器の口縁部で、沈線により波状文が描かれている。736～739は沈線区画の充填縄文帯が文様を構成する土器で、738・739は刺突を伴う。740は鱗状突起が貼り付けられている。741・742は楕円あるいは逆U字状に沈線によって区画され、内部に縄文が充填される文様をもつ土器である。743はR L R縦回転の複節縄文が施されている。744は無文の土器の底部破片で、底部には木葉痕がみられる。745・746はともに単節斜行縄文が施されている。747は磨石で、ほぼ全面を使用している。

本遺構は出土遺物から縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

ⅢC 3 c 土坑（第126図、写真図版55）

本土坑は調査区西側の緩斜面に位置し、ⅢC 3 b住居跡と重複関係にあると思われるが、新旧関係は不明である。検出はⅢ層中における黄褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径が161×141 cm、底部径が176×164 cm、深さは170 cmを測る。壁はⅢ層からⅤ層にかけて形成されており、底部から55 cm程のところまでは

内湾し、その後はほぼ直に立ち上がる。底部はⅤ層中に形成され、細かな凹凸がみられるが平坦で非常にかたくしまっている。埋土は8層に細分され、黄褐色土が主体で、中位に微小な炭化材と焼土粒を少量含む褐色土が存在する。

出土遺物（第132図、写真図版100）

748は横位に粘土紐が貼り付けられている。749～751は沈線によって楕円あるいは逆U字状に区画され、区画内に縄文が充填される文様をもつ土器である。754は粗製土器の体部で、RLR縦回転の複節縄文が施されている。753は磨石である。ほぼ全面が使用されている。754は石棒で、中央部付近は断面形が円形で先端部は断面形が楕円形となる。欠損部分があり、残存長は24.7cmである。

本遺構は出土遺物、検出面から縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

IV B 2 h 土坑（第127図、写真図版56）

本土坑は調査区西側の緩斜面上方に位置している。本土坑の南側にはIV B 3 i 土坑が存在する。検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が120×118cm、底部径が122×115cm、深さが67cmである。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、ほぼ直に立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、平坦でかたくしまっている。埋土は7層に細分され、上位はシルト質の暗褐色土、中位は同じくシルト質の褐色土、下位は粘土質の明褐色土とやわらかいシルト質の暗褐色土である。また、埋土上位には若干の焼土粒と微小な炭化材および火山灰がみられる。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

IV B 3 i 土坑（第127図、写真図版56）

本土坑は調査区西側の緩斜面上方に位置している。本土坑の北側にはIV B 2 h 土坑が存在する。検出は表土除去後のⅢ層上面における褐色土の円形の広がりによる。平面形は円形で、断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部径が150×146cm、底部径が135×128cm、深さが44cmである。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、やや南側に傾くが平坦でしまっている。埋土は5層に細分され、上位は褐色土、下位は小角礫を若干含むにぶい黄褐色土が主体である。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

VIA 5 j 土坑（第127図、写真図版56）

本土坑は調査区東側斜面の中位に位置している。本土坑の北東側にはIV A 7 i 土坑が占地し

ている。検出は表土除去後のⅢ層上面において暗褐色土の円形の広がりを確認したことによる。平面形は円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が160×144 cm、底部径が116×110 cm、深さが138 cmである。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、ほぼ平坦でかたくしまっている。埋土は10層に細分され、上位は暗褐色土が主体でにぶい黄褐色土・黒褐色土が混入する。中位は褐色土主体で壁際には黄褐色土がみられる。下位は黄褐色土をブロック状に含む褐色土でかたくしまっている。

本遺構は遺物が出土せず、時期不明である。

VIA 7 i 土坑（第128図、写真図版56）

本土坑は調査区東側斜面の上方に位置している。本土坑の南西側にはVIA 5 j 土坑が、北東側にはVIA 9 h 土坑が存在する。検出は表土除去後のⅢ層上面における暗褐色土の円形の広がりによる。平面形は楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径が178×163 cm、底部径が81×73 cm、深さが113 cmである。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、ほぼ平坦でかたくしまっている。埋土は7層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の暗褐色土・黒褐色土が主体で、下位には粘土質の黄褐色土および褐色土がみられる。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

VIA 9 i 土坑（第128図、写真図版57）

本土坑は調査区東側斜面の上方に位置している。本土坑の南西側にはVIA 7 i 土坑が存在する。検出は表土除去後のⅢ層上面におけるやわらかな褐色土の円形の広がりによる。平面形は楕円形で、断面形はピーカー状を呈する。規模は開口部径159×127 cm、底部径が101×75 cm、深さが90 cmである。壁はⅢ層からⅣ層にかけて形成されており、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅣ層中にあり、ほぼ平坦でかたくしまっている。埋土は8層に細分され、上位から中位にかけてはシルト質の褐色土でやわらかい。下位は粘土質の黄褐色土でかたくしまっている。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

IV B 7 b 土坑（第128図、写真図版57）

本土坑は調査区東側の斜面下方に位置している。検出は表土除去後のⅢ層上面における黒褐色土の円形の広がりによる。平面形は楕円形で、断面形は浅いピーカー状を呈する。規模は開口部径が174×125 cm、底部径が125×105 cm、深さが47 cmである。壁はⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がる。底部はⅢ層中にあり、ほぼ平坦でしまっている。また、開口部の北

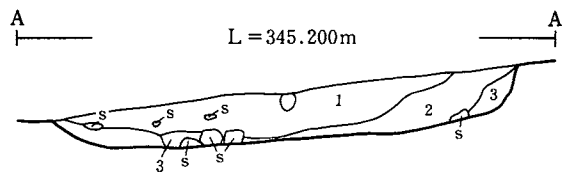
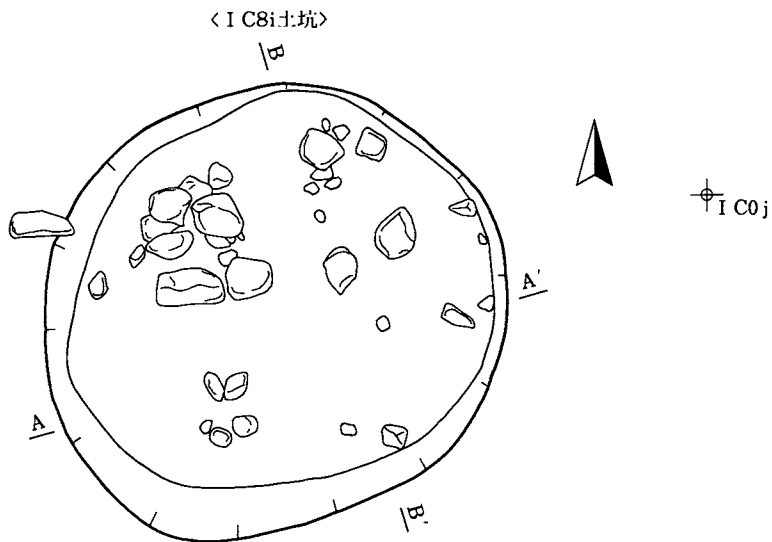
側には径 20 cm 前後の礫が存在するが、自然のものか人為的なものかは不明である。埋土は 4 層に細分され、上位はシルト質の黒褐色土、中位はシルト質の褐色土、下位は粘土質の黄褐色土でかたくしまっている。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

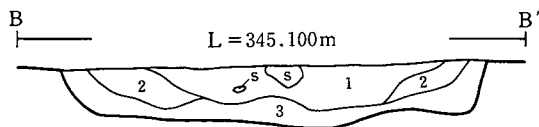
VII A 4 j 土坑（第 128 図、写真図版 57）

本土坑は調査区東側の畑跡に位置している。本土坑の南側には VII B 4 a 焼土および VII B 4 a-2 焼土が存在する。検出は耕作土除去後の III 層上面における黒褐色土の半円状の広がりによる。本土坑は長芋栽培のためのトレンチャーによって西側が攪乱をうけている。また、上部も耕作のため削平をうけている。したがって平面形の詳細は不明であるが、残存部分から円形あるいは楕円形を呈するものと思われる。断面形は浅いピーカー状である。規模は開口部径が 114 cm、底部径が 103 cm、深さが 37 cm である。壁は III 層中にあり、ほぼ直に立ち上がる。底部は III 層中に形成され、ほぼ平坦でしまっている。埋土はシルト質の黒褐色土の単層で褐色土が小ブロックで混入する。

本遺構は出土遺物がなく、時期不明である。

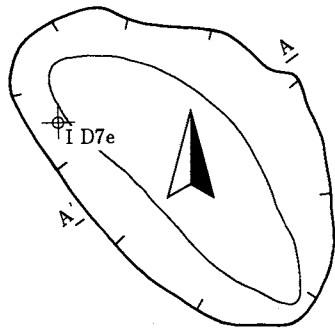


1. 7.5Y R3/3暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし
2. 7.5Y R3/2暗褐色土 かなかしまっている 粘性なし
3. 7.5Y R4/3褐色土 粘土質 かたくしまっている やや粘性あり

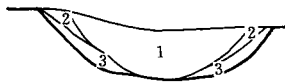


1. 7.5Y R3/3暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし
2. 7.5Y R4/3褐色土 粘土質 かたくしまっている やや粘性あり
3. 7.5Y R4/4褐色土 粘土質 かたくしまっている やや粘性あり
4. 7.5Y R4/4暗褐色土 粘土質 かたくしまっている 粘性あり

第122図 土坑(1)

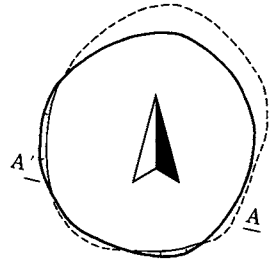


A — L = 343.600m — A'

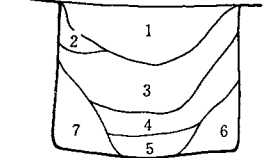


1. 7.5Y R1.7/1黒色土 やわらかい やや粘性あり
2. 7.5Y R3/2黒褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 7.5Y R4/6褐色土 なたくしまっている やや粘性あり

< I D7d土坑 >

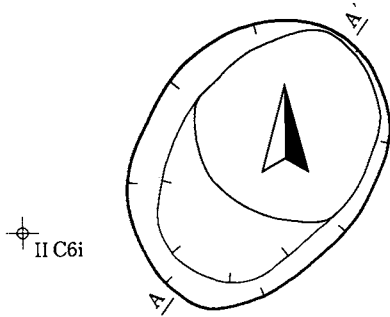


A — L = 344.800m — A'

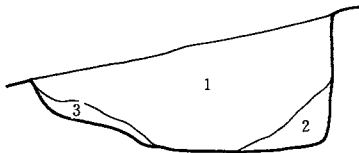


1. 7.5Y R2/3極暗褐色土 やわらかい 細かい礫を多く含む
2. 7.5Y R3/4暗褐色土 やわらかい 細かい礫を多く含む
3. 7.5Y R3/2黒褐色土 やわらかい 細かい礫を多く含む
4. 7.5Y R2/3極暗褐色土 やわらかい 浮石質の細礫を含む
5. 7.5Y R2/2黒褐色土 やわらかい 浮石質の細礫を含む
6. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 浮石質の細礫を含む
7. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 礫を含む

< I D9a土坑 >

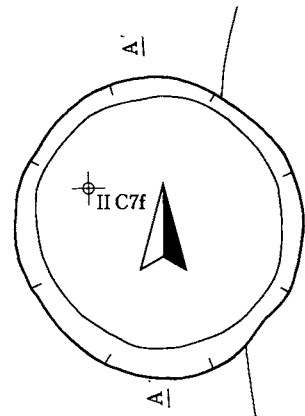


A — L = 357.100m — A'

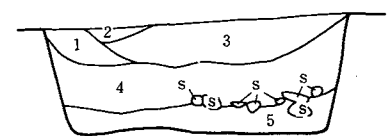


1. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10Y R4/6褐色土 非常にかたくしまっている やや粘性あり
小角礫が混入する
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり

< II C6i土坑 >

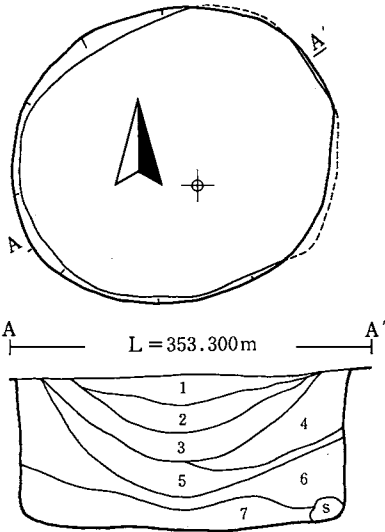


A — L = 353.300m — A'



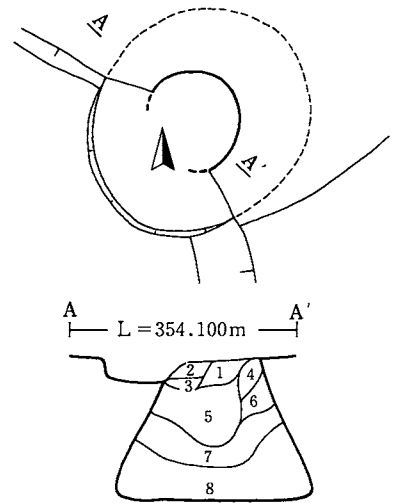
1. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり
2. 10Y R黄褐色土 やわらかい 粘性あり
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり
5. 10Y R5/6黄褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり

< II C7e土坑 >



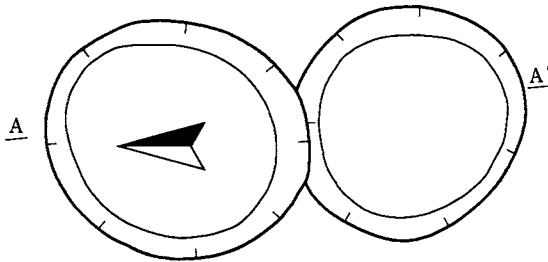
1. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 炭化材・焼土が混入する
2. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 炭化材が少量混入する
3. 10Y R4/4-4/6褐色土 しまっている 粘性あり
4. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり
5. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり
6. 10Y R4/4褐色土 かたくしまっている 粘性あり
7. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり

〈II C7e-2土坑〉



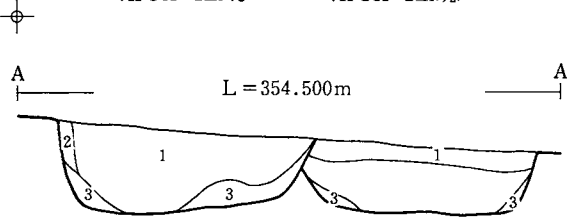
1. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり 炭が混じる
2. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 炭が混じる
3. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり 炭・焼土が混じる
4. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている やや粘性あり 炭が混じる
5. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり 6層がまだらに混じる
6. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり
7. 10Y R4/6褐色土 やわらかい 粘性あり
8. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり

〈II C8e土坑〉



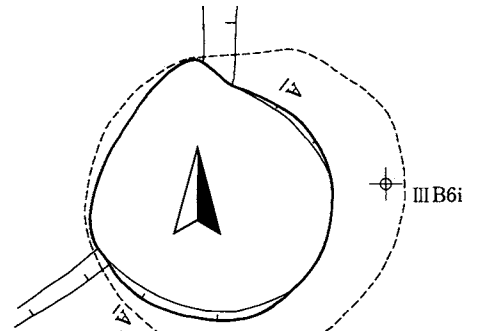
〈II C8f-1土坑〉

〈II C8f-2土坑〉

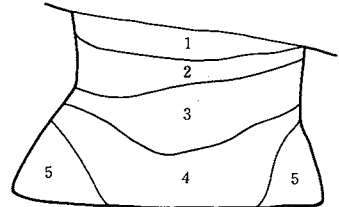


1. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり
2. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
4. 10Y R3/3暗褐色土 やわらかい やや粘性あり

〈II C8f-1土坑・II C8f-2土坑〉



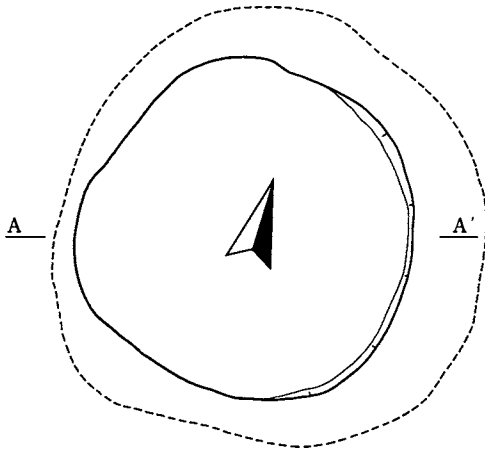
III B6i
L = 358.600m



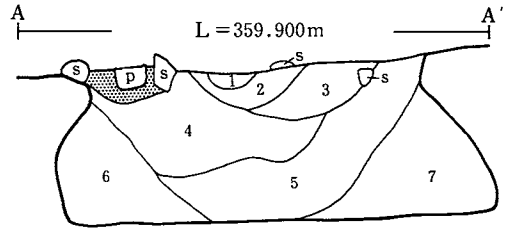
1. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし 少量の炭が混入する
2. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性あり 少量の炭が混入する
3. 10Y R3/4-4/4暗褐～褐色土 かたくしまっている 粘性いり
4. 10Y R4/4褐色土 かたくしまっている 粘性あり
5. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

〈III B5h土坑〉

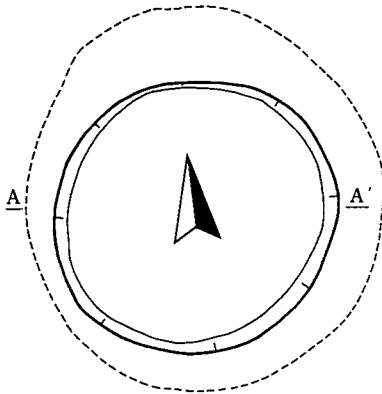
第124図 土坑(3)



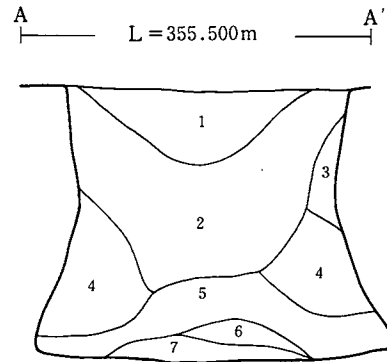
〈III B8f土坑〉



1. 10 Y R 3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり
2. 10 Y R 4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10 Y R 5/8黄褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 10 Y R 5/6黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり ごく少量の炭が混入する
5. 10 Y R 5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり にぶい黄褐色土と小角礫が混入する
6. 10 Y R 5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり にぶい黄褐色土をブロックで混入する
7. 10 Y R 5/4にぶい黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり 小角礫を混入する
8. 5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている III B8f住居跡の炉



〈III C1e土坑〉

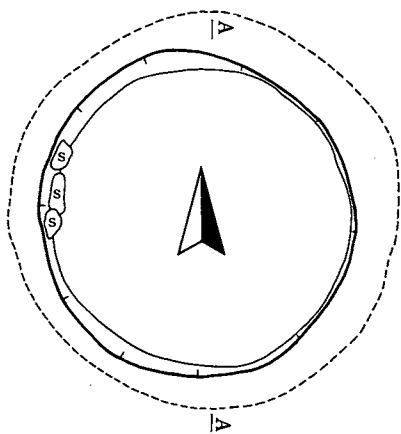


1. 10 Y R 3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり
2. 10 Y R 4/4褐色土 やわらかい 粘性あり 微小な炭が混入する
3. 10 Y R 5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり
4. 2層と3層の混合土 しまっている 粘性あり 微小な炭と焼土を含む
5. 10 Y R 4/6褐色土 しまっている 粘性あり
6. 10 Y R 5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり
7. 10 Y R 4/4褐色土 やわらかい 粘性あり

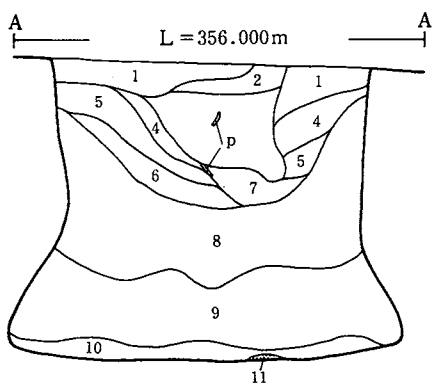
S = 1/40

第125図 土坑(4)

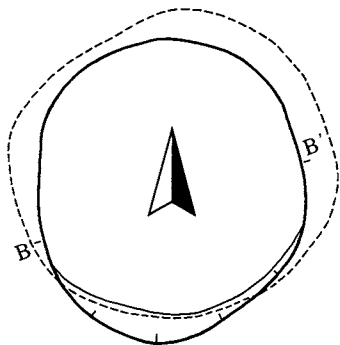
III C3c



〈III C2c土坑〉

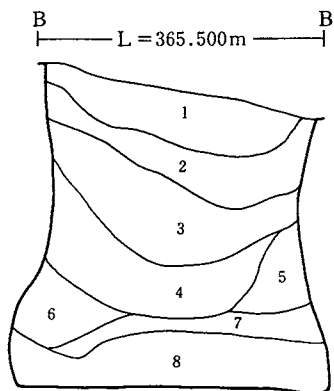


1. 10Y R4/4褐色土 かたくしまっている 粘性なし
2. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 粘性なし 少量の微小な炭が混入する
3. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 微小な炭と焼土が混入する
4. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性なし 微小な炭が混入する
5. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 褐色土がまだらに混入する 粘性なし
6. 7.5Y R4/6褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
7. 7.5Y R4/4褐色土 かたくしまっている 粘性あり
8. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 焼土が少量混じる
9. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている 粘性あり
10. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり
11. 5Y R5/8明赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし



〈III C3c土坑〉

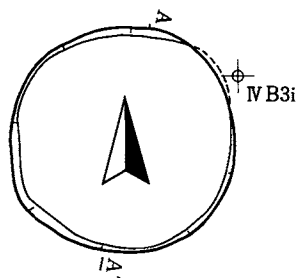
III C4d



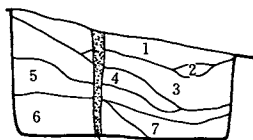
1. 10Y R5/6黄褐色土 しまっている やや粘性あり
2. 10Y R5/4にふい黄褐色土 しまっている 粘性あり
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり 微小な炭・焼土が混入する
4. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり
5. 10Y R5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり 3層が混入する
6. 10Y R5/6黄褐色土 やわらかい 粘性あり
7. 10Y R5/8黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり
8. 10Y R5/8黄褐色土 やわらかい 粘性あり 水分を多く含む

S = 1/40

第126図 土坑(5)



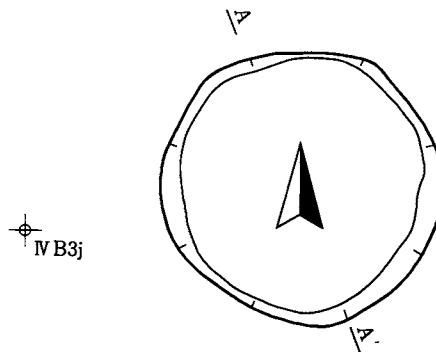
L = 361.500m



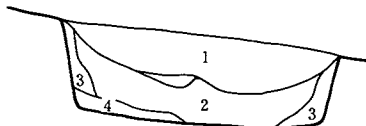
木根による攪乱

1. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし
2. 7.5Y R4/4褐色土 やわらかい 粘性なし 少量の焼土が混入する
3. 7.5Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性なし 微小な炭と火山灰が帯状に混じる
4. 7.5Y R4/6褐色土 しまっている 粘性なし 微小な炭と火山灰がまだらに混じる
5. 7.5Y R4/6褐色土 しまっている 粘性なし 微小な炭と火山灰が少量混入する
6. 7.5Y R5/4明褐色土 しまっている やや粘性あり 小礫が多数混入する
7. 7.5Y R3/3暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 微小な炭が混入する

<IV B2b土坑>

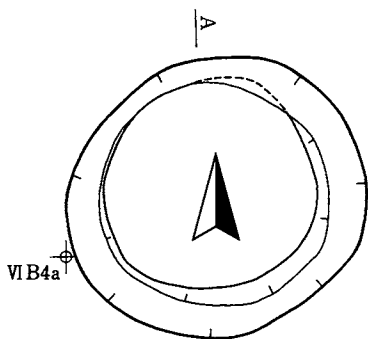


L = 361.200m



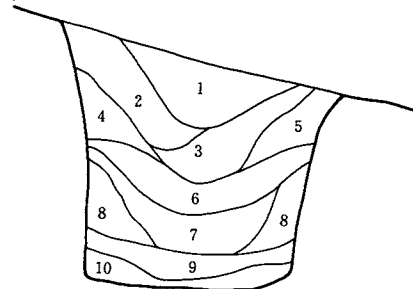
1. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10Y R4/3-4/4にふい黄褐-褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 10Y R4/6褐色土 しまっている やや粘性あり
4. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり 礫が混入する
5. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり 微小な炭が混入する

<IV B3i土坑>



<VI A5j土坑>

L = 364.700m

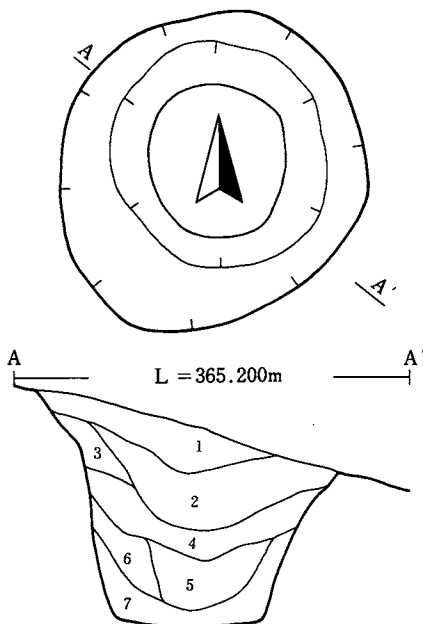


1. 10Y R3/3暗褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10Y R4/3にふい黄褐色土 しまっている 粘性なし
3. 10Y R3/2黒褐色土 しまっている 粘性なし 暗褐色土がブロックで混入する
4. 10Y R4/3にふい黄褐色土 2層に褐色土がブロックで混入する
5. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり
6. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
7. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり
8. 10Y R5/6黄褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
9. 10Y R4/6褐色土 かたくしまっている 黄褐色土をブロックで混入する 粘性あり
10. 10Y R4/6褐色土 非常にかたくしまっている 黄褐色土をブロックで混入する

S = 1/40

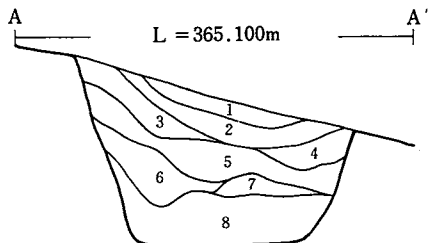
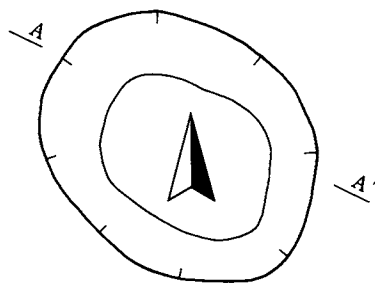
第127図 土坑(6)

VI A7i



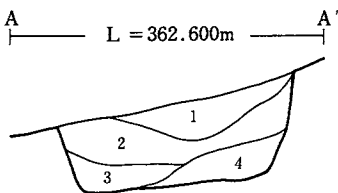
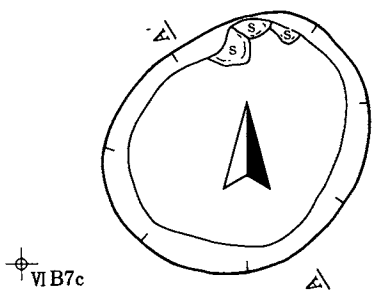
1. 10 Y R 3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし
2. 10 Y R 2/3黒褐色土 しまっている 粘性なし
3. 10 Y R 3/4暗褐色土 やわらかい 粘性なし
4. 10 Y R 3/3暗褐色土 しまっている やや粘性あり
5. 10 Y R 3/4暗褐色土 かたくしまっている やや粘性あり
6. 10 Y R 5/6黄褐色土 非常にかたくしまっている やや粘性あり
7. 10 Y R 4/6褐色土 非常にかたくしまっている 粘性あり

<VI A7i 土坑>



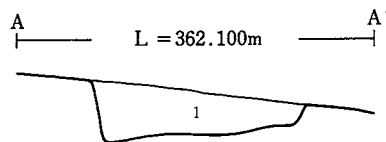
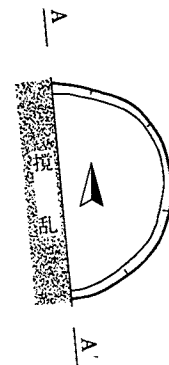
1. 10 Y R 4/4~4/6褐色土 やわらかい 粘性なし 黒褐色土が混入する
2. 10 Y R 4/4~4/6褐色土 やわらかい 粘性なし
3. 10 Y R 4/6褐色土 やわらかい 粘性あり 少量の暗褐色土が混入する
4. 10 Y R 4/6褐色土 やわらかい 粘性あり
5. 10 Y R 5/8黄褐色土 やわらかい 粘性あり
6. 10 Y R 4/4褐色土 やわらかい 粘性あり
7. 10 Y R 5/8黄褐色土 しまっている 粘性あり
8. 10 Y R 5/6黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり

<VI A9i 土坑>



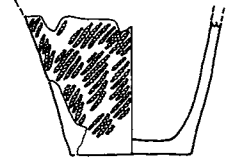
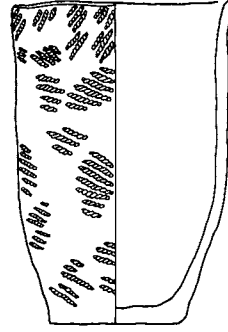
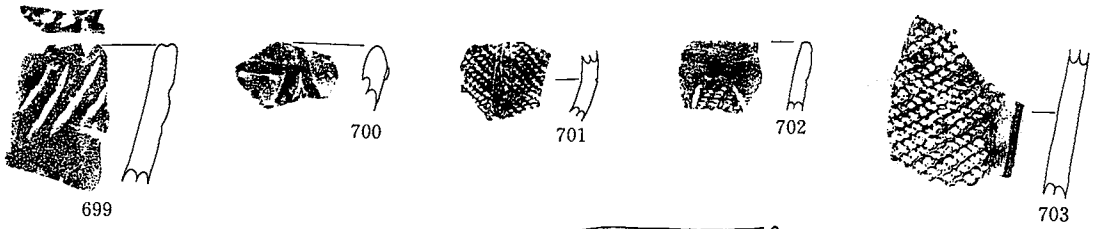
1. 10 Y R 3/2黒褐色土 やわらかい やや粘性あり
2. 10 Y R 4/6褐色土 しまっている 粘性あり 黄褐色土を少量混入する
3. 7.5 Y R 4/6褐色土 やわらかい 粘性あり
4. 10 Y R 6/8黄褐色土 かたくしまっている 粘性あり 礫を含む

<VI B7b 土坑>



1. 10 Y R 2/2黒褐色土 しまっている 粘性なし 褐色土がブロックで混入する

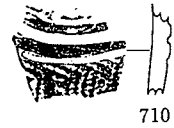
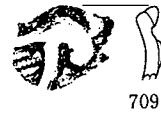
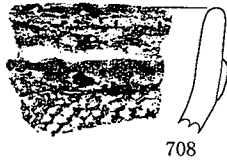
<VII A4j 土坑>



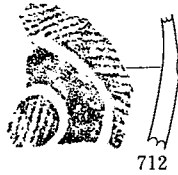
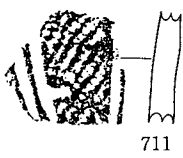
< I C8i 土坑 >

699~704は S = 3/1
705・706は S = 1/4

705

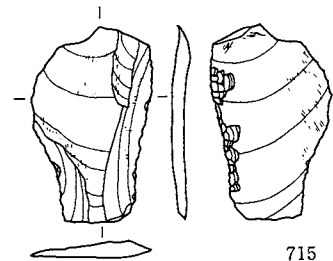
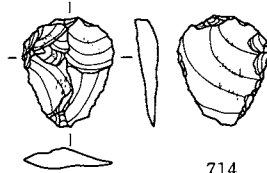
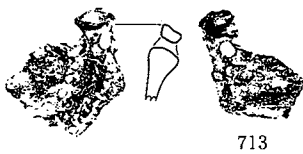


< II C6i 土坑 >



S = 1/3

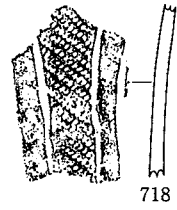
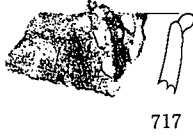
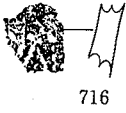
< II C8f-1 土坑 >



S = 1/2

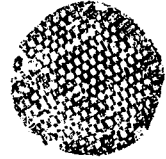
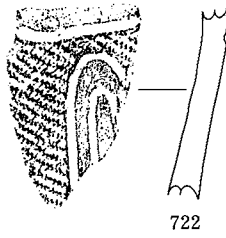
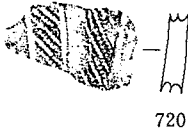
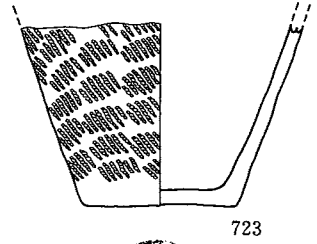
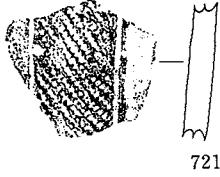
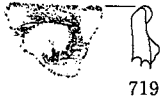
第129図 土坑内出土遺物(1)

<II C8f-2土坑>



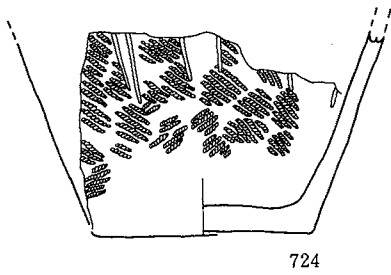
S = 1/3

<III B5h土坑>



S = 1/4

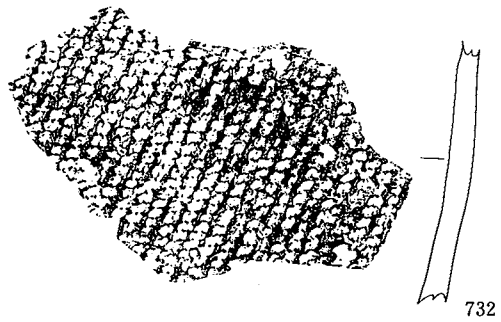
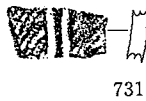
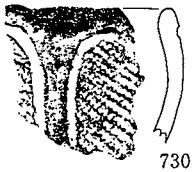
<III C1C土坑>



S = 1/4

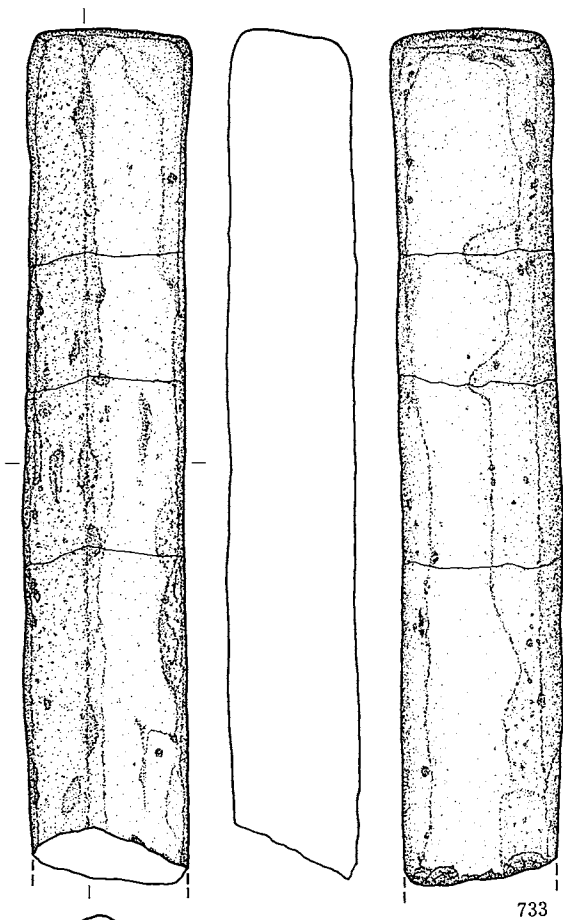


<III B8f土坑>



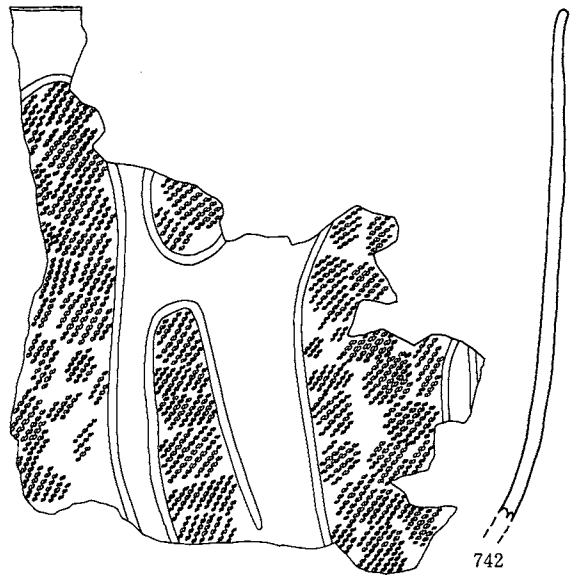
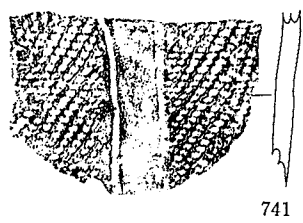
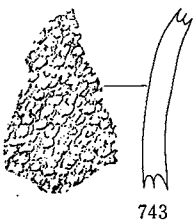
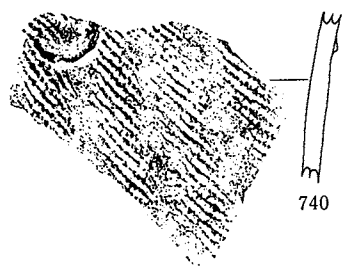
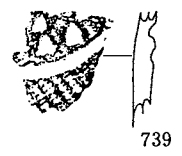
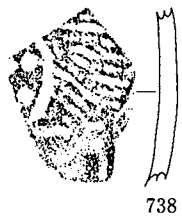
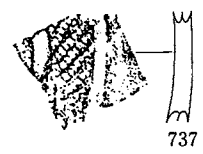
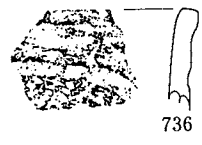
S = 1/3

第130图 土坑内出土遗物(2)



S = 1/4

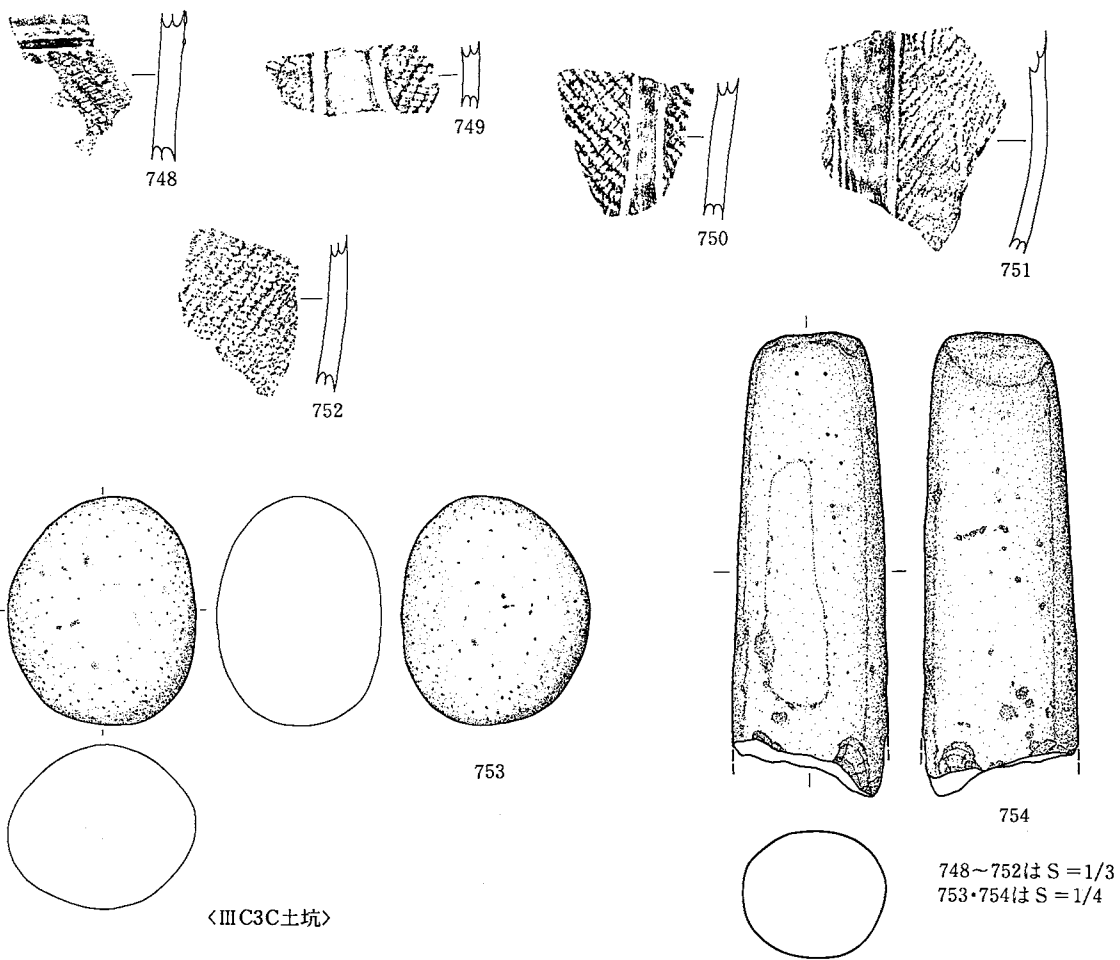
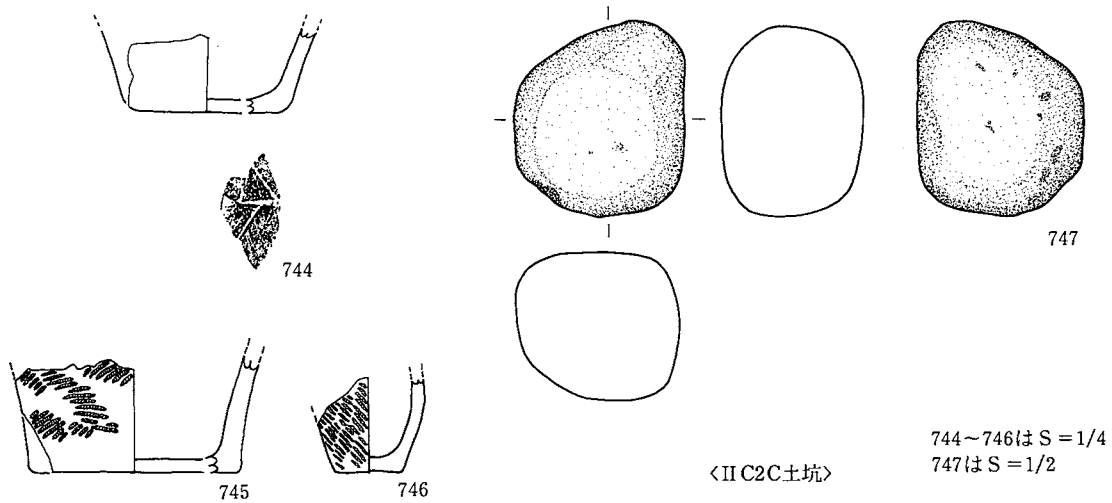
<III C1C土坑>



734~741・743は S = 1/3
742は S = 1/4

<III C2C土坑>

第131図 土坑内出土遺物(3)



第132図 土坑内出土遺物(4)

3. 土 壙 (第 133 ~ 138、写真図版 58 ~ 62)

土壙は調査区西側の斜面下方及び斜面から続く平坦地に集中して存在する。現況は畑地で、耕作土である黒色土及びその下の暗褐色土を除去したところ、暗褐色土の小判状あるいは楕円状の広がりが確認された。平面形は小判状あるいは楕円状を呈し、断面形は箱状や皿状、ピーカー状などである。但し、斜面に存在するものは下方が流失しており、平坦地に存在するものは耕作による攪乱を受けている。そのため詳細は不明なものが多い。

規模は開口部径が長軸方向で 89 ~ 170 cm、短軸方向で 56 ~ 113 cm、深さは最大値で 22 ~ 80 cmを測る。20 基のうち 4 基を除き長軸方向がほぼ東を指す。

埋土は 1 ~ 4 層に分けられ、締まったシルト質の暗褐色土及び粘土質の褐色土が主体で、人為的に埋め戻された形跡のあるものも見られる。埋土からは人骨等の墓としての性格を示す遺物は出土していない。壁はほとんどがⅢ層中にあり、急角度で外傾して立ち上がるものが多い。床面はほぼ平坦であるが、垂角礫が散在するものもみられる。

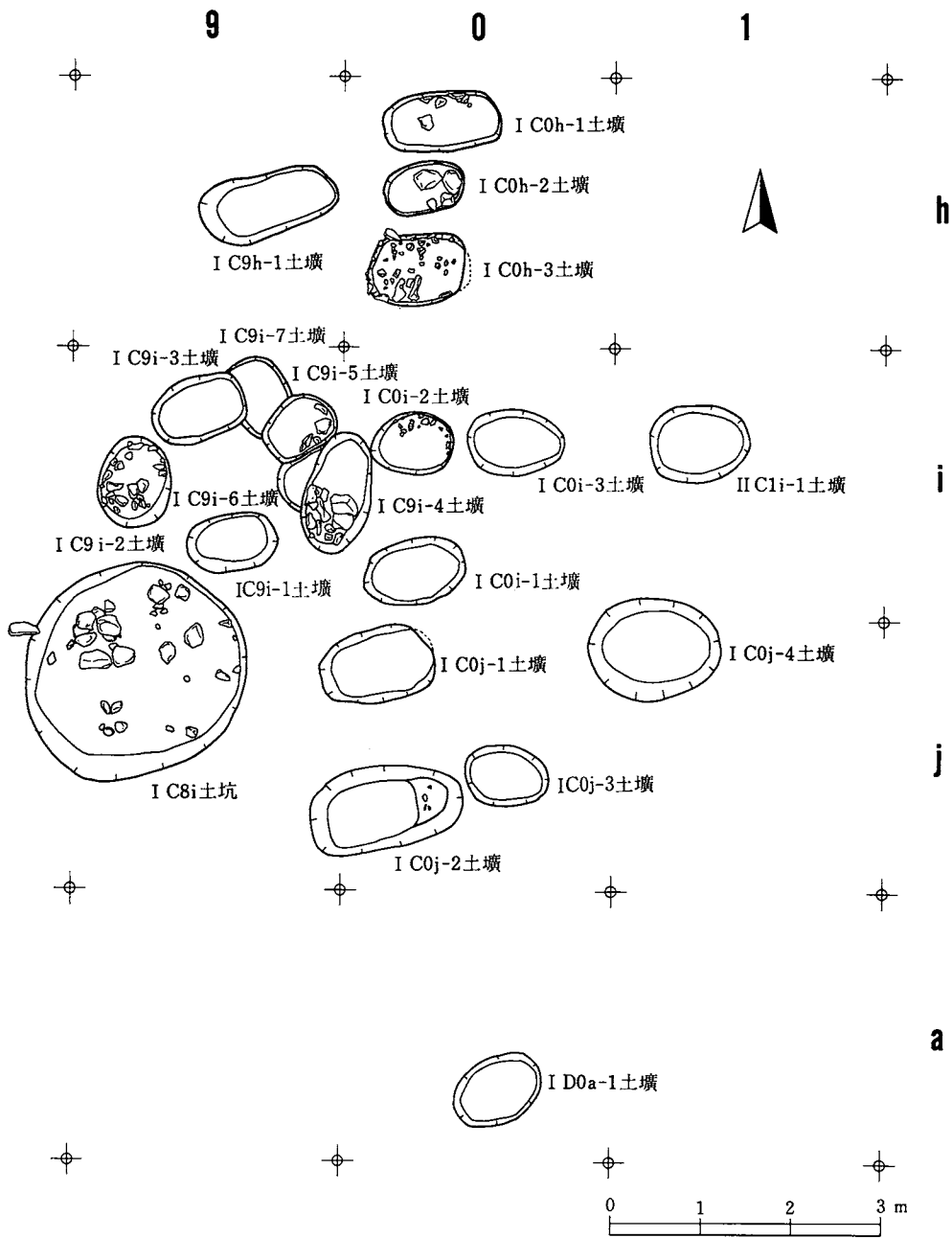
出土遺物 (第 138 図、写真図版 100)

遺物は IC9h-1 土壙から 3 点出土したが、他の土壙からは出土していない。755 は沈線区画の無文帯が文様を展開する土器の破片で、無文帯の一部に鱗状の突起が貼りつけられる大木 10 式の特徴をもつ土器で、縄文時代中期末葉の土器と推定される。756 は口縁部が小波状となる深鉢形土器で、貝殻を押圧して縦に連続してハの字状の文様が施されている。文様の特徴から縄文時代早期の土器と推定される。757 は底部の破片で、底部がワインのビンの底のように凸状となっており、不規則な縄文がみられる。

IC9h-1 土壙からの遺物は時期的にばらつきがあり、他の土壙からは遺物が出土していないことから、本遺跡で検出された土壙の時期を特定することはできない。

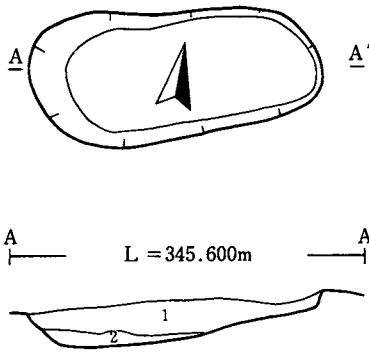
土 壙 名	開口部径	底部径	深さ	土 壙 名	開口部径	底部径	深さ
IC9h-1 土壙	156×66	131×53	22	IC0h-3 土壙	110×78	107×78	41
IC9i-1 土壙	101×64	80×48	26	IC0i-1 土壙	114×73	98×57	30
IC9i-2 土壙	102×80	81×65	27	IC0i-2 土壙	93×68	80×61	32
IC9i-3 土壙	108×66	95×55	49	IC0i-3 土壙	108×74	96×55	55
IC9i-4 土壙	135×75	120×60	30	IC0j-1 土壙	128×82	115×64	57
IC9i-5 土壙	(82)×(67)	(74)×(54)	25	IC0j-2 土壙	170×93	102×65	47
IC9i-6 土壙	(70)×(57)	(62)×(45)	22	IC0j-3 土壙	95×68	83×53	43
IC9i-7 土壙	(86)×(62)	(78)×(54)	53	IC0j-4 土壙	147×113	119×78	80
IC0h-1 土壙	131×67	120×57	57	ID0a-1 土壙	102×72	89×60	40
IC0h-2 土壙	89×56	84×50	25	IC1i-1 土壙	110×86	95×67	34

表 3 土壙計測表



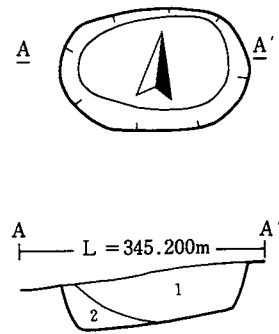
第133图 土壤配置图

< I C9h-1土壌 >



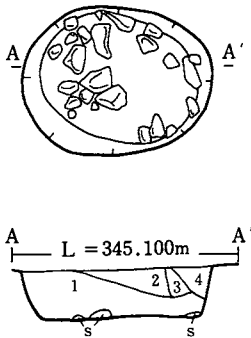
1. 10Y R4/3暗褐色土: かたくしまっている 粘性あり
2. 10Y R4/6褐色土: 粘土質 かたくしまっている 粘性あり

< I C9i-1土壌 >



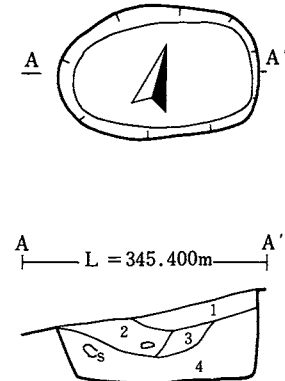
1. 10Y R4/4褐色土: しまっている 粘性なし
2. 10Y R3/4暗褐色土: しまっている やや粘性あり

< I C9i-2土壌 >



1. 10Y R4/6褐色土: やわらかい やや粘性あり
2. 10Y R4/4褐色土: しまっている やや粘性あり
3. 10Y R5/8黄褐色土: 粘土質 しまっている やや粘性あり
4. 10Y R3/2黒褐色土: しまっている 粘性あり

< I C9i-3土壌 >

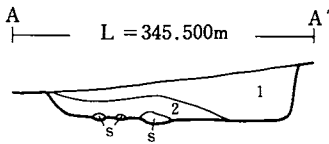
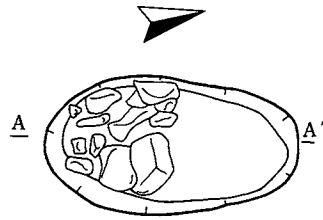


1. 10Y R3/2黒褐色土: しまっている 粘性あり
2. 10Y R4/4褐色土: しまっている やや粘性あり
3. 10Y R3/4暗褐色土: やわらかい 粘性なし
4. 10Y R4/6褐色土: 粘土質 しまっている 粘性あり

S = 1/40

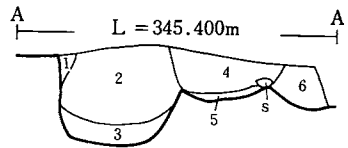
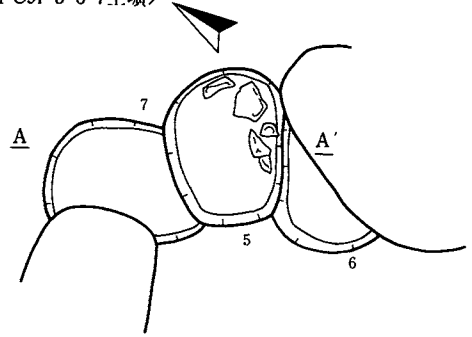
第134図 土壌(1)

< I C9i-4土壌 >



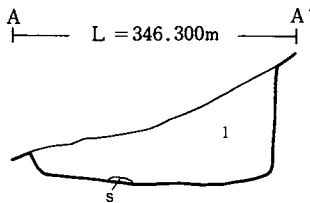
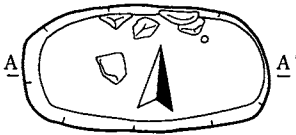
1. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい やや粘性あり 黄褐色土がまだらに混入
2. 10Y R5/6黄褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり

< I C9i-5・6・7土壌 >



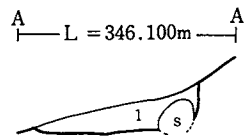
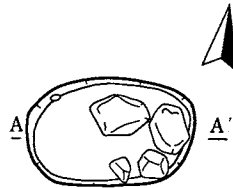
1. 10Y R4/6褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり
2. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり 褐色土がまだらに混入
3. 10Y R4/4褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり
4. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし
5. 10Y R4/4褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり
6. 10Y R4/6褐色土 粘土質 しまっている やや粘性あり

< I C0h-1土壌 >



1. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている やや粘性あり

< I C0h-2土壌 >

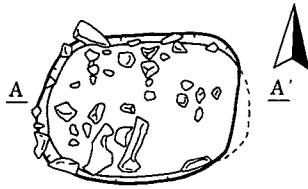


1. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている やや粘性あり

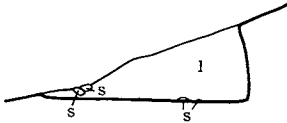
S = 1/40

第135図 土壌(2)

< I C0h-3土壌 >

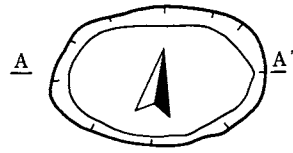


A — L = 346.100m — A'

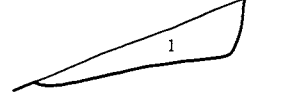


1. 10Y R3/4暗褐色土 かたくしまっている やや粘性あり

< I C0i-1土壌 >

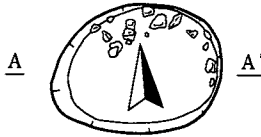


A — L = 345.800m — A'

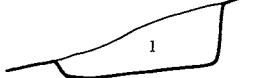


1. 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし しまっている 褐色土がブロック状に混入する

< I C0i-2土壌 >

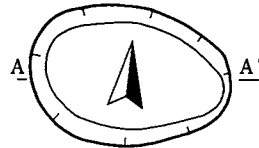


A — L = 354.800m — A'

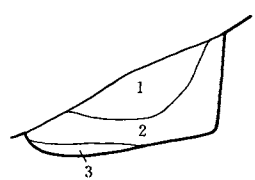


1. 10Y R4/6褐色土 粘土質 かたくしまっている 粘性あり
径 2 cm 程度の小石が混入する

< I C0i-3土壌 >



A — L = 346.600m — A'

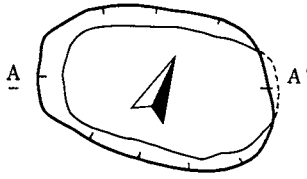


1. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり
2. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている やや粘性あり
3. 10Y R5/6黄褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり

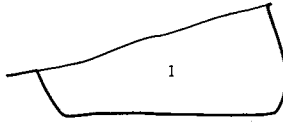
S = 1/40

第136図 土壌(3)

< I C0j-1土壌 >

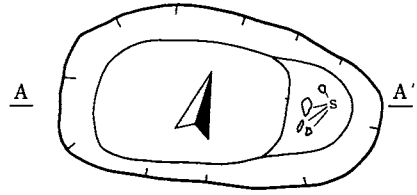


A — L = 345.600m — A'

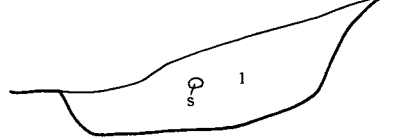


1. 10Y R3/3暗褐色土 かたくしまっている 粘性なし 小角礫及び褐色土がまだらに混入する

< I C0j-2土壌 >

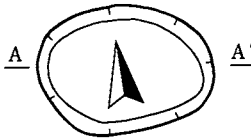


A — L = 345.600m — A'

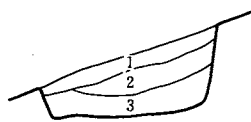


1. 10Y R3/4暗褐色土 しまっている 粘性なし 褐色土が少量ブロック状に混入する

< I C0j-3土壌 >

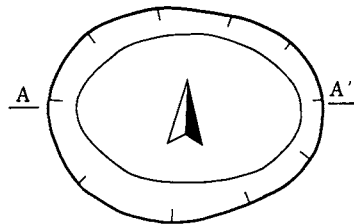


A — L = 346.100m — A'

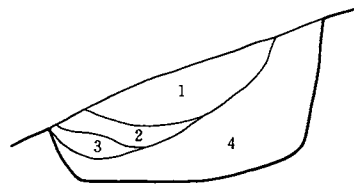


1. 10Y R3/4暗褐色土 やわらかい 粘性なし
 2. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり
 3. 10Y R4/6褐色土 粘土質 やわらかい 粘性あり

< I C0j-4土壌 >



A — L = 347.100m — A'

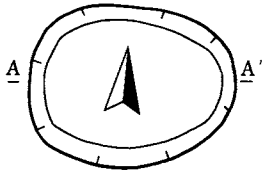


1. 10Y R4/4褐色土 しまっている 粘性あり
 2. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり
 3. 10Y R4/4褐色土 やわらかい やや粘性あり
 4. 10Y R5/6黄褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり 下部で褐色土が混入

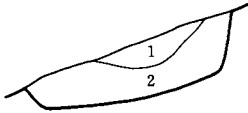
S = 1/40

第137図 土壌(4)

< II C1i-1土壌 >

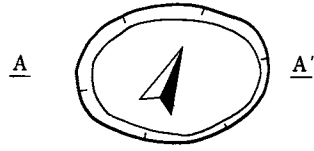


A — L = 347.400m — A'

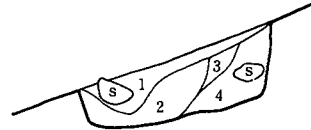


- 1. 10Y R4/4褐色土 しまっている やや粘性あり
- 2. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり

< I D0a-1土壌 >



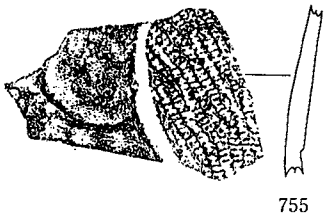
A — L = 345.800m — A'



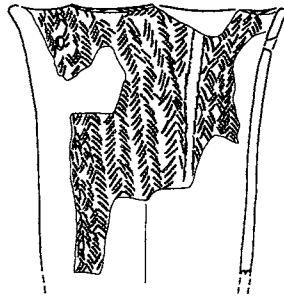
- 1. 10Y R3/3暗褐色土 やわらかい 粘性なし 黄褐色土が混入する
- 2. 10Y R4/4褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり 黄褐色土との混合土
- 3. 10Y R5/8黄褐色土 粘土質 しまっている 粘性あり
- 4. 10Y R4/6褐色土 しまっている 粘性あり

S = 1/40

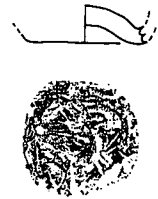
< I C9h-1土壌遺物 >



755



756



757

755はS = 1/3

756、757はS = 1/4

第138図 土壌(5)・土壌内出土遺物

4. 焼土遺構

ⅡC 0 e 焼土遺構 (第139図、写真図版62)

本遺構は調査区中央からやや西に寄った緩斜面上に位置する。検出はⅢ層上面と同レベルのⅡC 9 d 住居跡の埋土上である。南側にはⅡC 9 e 住居跡が隣接する。

平面形は不整な楕円形を呈し、比較的軟らかな赤褐色土が33×25cmの規模で広がっている。焼土は6cm程の厚さで皿状に発達しており、付近に炭化材等の分布は見られなかった。

本遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ⅣB 8 b 焼土遺構 (第139図、写真図版62)

本遺構は調査区中央の南斜面に位置し、南西側には平安時代のⅣB 6 d 住居跡が、西側には同じく平安時代のⅣB 3 a 住居跡とⅣB 3 d 住居跡が隣接する。検出面はⅢ層上面である。

平面形は不整形で、焼土の北側と南側に微小な炭化材が分布している。規模は40×33cm程で、赤褐色の焼土が堅くしまって存在する。焼土の厚さは5cm程で、浅い皿状に発達している。

本遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ⅦB 4 a - 1・ⅦB 4 a - 2 焼土遺構 (第139図、写真図版62)

2基の焼土遺構は調査区東側に位置している。ⅦB 4 a - 1 焼土遺構の南側には20cm程離れてⅦB 4 a - 2 焼土が存在する。また北側にはⅦA 4 j 土坑が隣接している。遺構の位置する地点は現況が畑地で、長芋栽培のためのトレンチャーによって周囲が攪乱を受けている。検出面はⅢ層上面である。

平面形は両遺構とも不整な楕円形を呈する。規模はⅦB 4 a - 1 焼土遺構が35×22cm、ⅦB 4 a - 2 焼土遺構が34×27cmである。両遺構とも焼土はあまり発達しておらず、赤褐色の締まりのある焼土が深さ3cm程の厚さで薄く形成されている。炭化材等の分布は見られない。

両遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ⅦA 6 i 焼土遺構 (第139図、写真図版62)

本遺構は調査区東側に位置している。ⅦB 4 a - 1・ⅦB 4 a - 2 焼土遺構と同様に付近はトレンチャーによる攪乱を受けており、残存状態は不良でトレンチャーによる溝の間にかろうじて残っていた程度である。検出は耕作土を除去したⅢ層上面である。

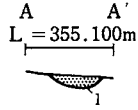
平面形は不整形を呈し、規模は40×30cmを測る。焼土は赤褐色で、層厚5cm程で広がっている。付近からの炭化材等の分布は見られなかった。

本遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。



<II C0e焼土>

III C1f

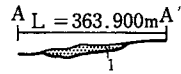


1. 5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし



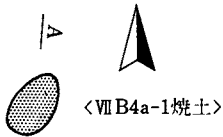
<IV B8b焼土>

IV B9c

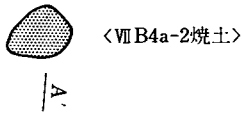


1. 5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 かたくしまっている 粘性なし

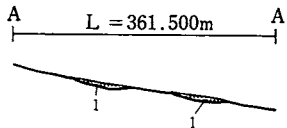
VII B5a



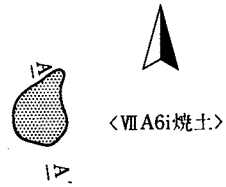
<VII B4a-1焼土>



<VII B4a-2焼土>

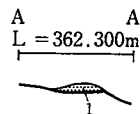


1. 5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 しまっている 粘性なし



<VII A6i焼土>

II A7j



1. 5 Y R 4/8赤褐色土 焼土 やわらかい 粘性なし

S = 1/40

5. 配石遺構群（第140・141図、写真図版62）

配石遺構群は調査区西側斜面下方の平場に位置する。配石遺構群の南側及び東側には土壌が多数存在する。また、南西側にはIC7j住居跡とIC8i土坑が占地している。

配石遺構群が位置する場所の現況はとうもろこし畑で、検出は黒色及び暗褐色の耕作土を除去した褐色土（Ⅲ層）上面において垂角礫の集まりを確認したことによる。自然堆積の礫の可能性も考えられるが、隣接する土壌群と検出面が同じであること、南側には礫がほとんど存在しないことなどから配石遺構と判断した。なお配石遺構群の北側は調査区域外であり、配石遺構の主体は調査区域外に存在するものと推定される。

遺構群は礫の集中する地点によってIC9h-1～4とIC9i・IC8iの6基に分けられる。形状はIC9h-3配石がやや円弧状に礫が並べられているほかは、礫の配置に規則性はなく、集石の形態をとっている。

規模はIC8i配石が最大でおよそ2.5×2.5mの範囲に礫が配置され、最小はIC9i配石でおよそ1.2×1.2mの範囲に礫が置かれている。

礫の大きさはIC9i配石に使用されたものが最大で80×80×30cmの規模をもつ。他は20cm前後の礫が主体となっている。使用されている礫の石質はほとんどが安山岩である。

この配石遺構群の位置する地点からは2基の土壌が検出されている（土壌の詳細は「3. 土壌」の項に記述）。IC9i配石の下からはIC9i-7土壌が検出されているが、この土壌は他の土壌と重複関係にあるため配石に伴うものかどうかは不明である。また、IC9h-1～4配石によって囲まれた地点からはIC9h-1土壌が検出されているが、これも配石との関係は不明である。下に土壌を伴う礫以外はすべて地山である褐色土上に配置されている。

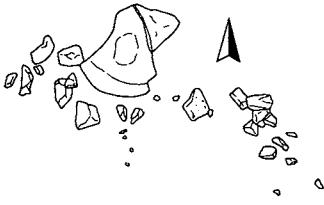
配石遺構の上面の黒色土及び暗褐色土からは少量の縄文早期と中期の土器が出土しているが、配石遺構に伴うと思われる遺物は出土しておらず、配石の性格及び時期は特定できない。

また南側に集中する土壌群との関係も、配石遺構群が調査区域外に続いていると考えられることから不明である。

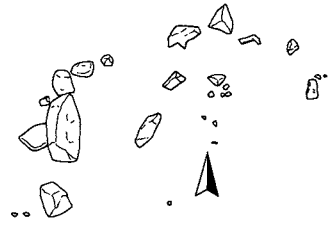


S = 1/40

第140図 配石遺構群(1)



I C9h-1配石



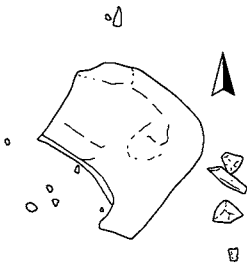
I C9h-2配石



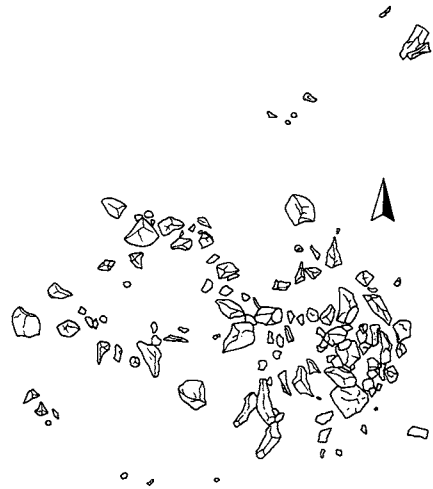
I C9h-3配石



I C9h-4配石



I C9i配石



I C8i配石

第141図 配石遺構群(2)

S = 1/40

6. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、土師器、須恵器、石器、土製品、石製品、鉄器である。出土量は大コンテナ8箱ほどである。これらはほとんどがⅡ層下位からⅢ層上面において出土したものである。

(1) 縄文土器

第Ⅰ群土器……早期に属する土器を一括する。

1類……貝殻文をもつ土器。

a 貝殻腹縁文が「ハ」の字状に左右の斜位に施文される土器

758 は山形の口縁をもつ深鉢形土器の口縁部付近の破片で、口唇部には刻目がつけられている。759 は指頭圧痕状の口唇部をもつ。760 は貝殻文と無文帯を区画するように横位の刺突が施されている。刺突は角棒状の工具によると思われるが、施文の仕方は粗雑である。761・762 は口唇部に角棒状の工具による刺突が施されている。また、761 は2カ所に補修孔をもつ。763 は横位に棒状の工具による刺突がめぐり、その下部には貝殻条痕文が施文されている。764 は口唇部に丸い棒状の工具による押圧痕が見られる。765 は口唇部に指頭圧痕が施されている。773 は山形の口縁をもつ深鉢形土器で、口縁部が角棒状の工具による横位の刺突によって区画され、上部には「ハ」の字状および横位の貝殻腹縁圧痕文が施され、下部は無文となっている。

b 貝殻腹縁文が「く」の字状に左右の斜位に施文される土器。

766 は裏面に貝殻による条痕が見られる。767 は口唇部が丸棒状の工具の押圧によって鋸歯状になっている。768 は口唇部に角棒状の工具による押圧痕が見られる。貝殻の圧痕は粗雑である。769 は口唇部に刺突をもつほか、体部に貝殻によるとみられる横位の刺突が施されている。

c 貝殻腹縁文の施文に規則性のないもの。

770 は縦横及び斜位に貝殻圧痕が施されるほか、口唇部にも貝殻による圧痕がみられる。

d 横方向に連続した貝殻文が施される土器。

771 は口唇部にも斜位の連続した貝殻圧痕文が施文されている。772 は貝殻の一方の端を支点として交互に若干ずらしながら文様を施している。774・775 は狭い幅で連続して施文される。

776 は山形の口縁部をもつ土器で、貝殻によるとみられる押圧痕がやや幅をとって連続して施されている。

e 貝殻条痕文が施された土器。

777・778 は縦方向を基調とするが、横位及び斜位にも貝殻による条痕が施文されている。

2類……刺突によって文様が施される土器。

779 は指頭圧痕状の口唇部をもつ深鉢形の土器で、角棒状の工具によって連続する山形の文

様が描かれている。

3類……無文の土器。

780 は口唇部が棒状工具の押圧によって鋸歯状になり、口唇部下には補修孔をもつ。781 は口唇部にやや斜めに指頭圧痕が施されている。782 は山形の口縁をもつ土器で、口唇部には角棒状の工具によって刺突がつけられている。783 は尖底土器の底部破片である。

II 群土器……中期の土器を一括した。

1類……中期前葉の土器。

a 粘土紐を貼り付け、その上に原体が圧痕される土器。

784 は山形の突起をもつ土器で、口唇部及び突起の頂部から垂直に粘土紐が貼り付けられており、その上に原体が圧痕されている。786 は口唇部に粘土紐が貼られ、原体が圧痕される。体部には網目状に原体が圧痕されている。787 は口唇部に幅広く粘土紐が貼り付けられ、縦方向の原体圧痕が見られる。795 は粘土紐が把手状に貼られている。799 は口唇部に粘土紐が厚く貼り付けられ突起状になっている。800 は口唇部付近に粘土紐が波状に貼り付けられ、その上に原体が圧痕されている。

b 原体を折り曲げて押圧したC字状の原体圧痕が施される土器。

789・790 は横位の2条の原体圧痕間にC字状の圧痕が連続して施されている。790 は口唇部にも原体圧痕が見られる。791 は口唇部からのびる原体を押圧した隆帯間にC字状の圧痕が施されている。793 は山形の口縁をもつ土器で、曲折して貼られた粘土紐の間にC字状の圧痕が見られる。974 は瘤状の粘土から放射状に広がって貼り付けられた原体圧痕の付いた粘土紐の間にC字状の圧痕が付けられている。797・798 は口唇部と横位の粘土紐の間にC字状の圧痕が連続して施されている。

c 半截竹管による刺突が施される土器

796 は原体圧痕の隆帯間に連続して半截竹管による刺突が施されている。

d 粘土紐が貼られず、原体圧痕が施される土器。

785 は口唇部と体部に原体の圧痕が見られ、体部には「ハ」の字状に押圧が施されている。788 は口縁部に横位の原体圧痕が4条見られる。

e 瘤状の粘土を貼り付けた土器。

801 は突起をもつ土器で、突起の頂部下に瘤状の粘土が貼り付けられている。瘤状の粘土の裏側には凹みがつけられている。また、一部剥落しているが口唇部には粘土紐が貼り付けられている。

2類……中期中葉の土器。

a 沈線によって波状文が描かれる土器。

802 は口縁部が内湾する器形の土器で、波状文と2本の横位の沈線が施文されている。803 は口縁部付近の破片と思われ、沈線による波状文が2段にわたって描かれている。

b 隆帯によって波状文が描かれる土器。

805 は口縁部が強く内湾する器形の土器で口唇部と口縁部に隆帯による波状文が施されている。806 は体部破片で、横位の隆帯間に波状文が施文されている。807 は口唇部下に隆帯による波状文が施されている。波状文の下には棒状工具による刺突が施される。

c 隆帯上に刺突が施される土器。

808 は横位の隆帯上に篋状の工具によって斜めの刻目状に刺突が施されている。809 は横位の隆帯上に細い棒状工具による刺突がなされている。810 は曲折する隆帯上に細い棒状工具による刺突が施されている。

d 沈線による曲折文が施される土器。

811 は平行する縦位及び横位の沈線と曲折する沈線が描かれており、器形は口縁部がやや内湾きみとなる。812 は平行する縦位の沈線と逆U字状の沈線が接続するように文様が施されている。813 は縦位の沈線が施されているが、全体の文様は不明である。824 は沈線によって曲折する文様と円弧状の文様が描かれている。

e 貫通孔をもつ突起を有する土器。

814 は菱形を呈する突起部で、中央に貫通孔をもち、その下部には渦巻状の原体圧痕が施されている。815 は突起部が渦巻状に形作られ、その中央に貫通孔をもち、突起の下には沈線及び隆沈線によって曲折する文様が描かれている。

f 渦巻文が施された土器

816 は口唇部が厚く作り出され、隆帯による渦巻文の部分がやや突起状に盛り上がっている。817 は波状の口縁をもつ土器で、隆沈線によって渦巻文が描かれている。818 は隆帯によって曲折文と渦巻文が施文されている。819・820 は沈線によって渦巻文が描かれている。820 は平縁の土器で、横位にめぐる刺突の下部に渦巻文が描かれている。821 は隆沈線による渦巻文から縦方向に向かって隆沈線が伸びる。822・823 はいずれも口縁部に山形の小突起をもつ土器で、口縁部に篋状の工具による刺突が施され、そこから縦方向に伸びる隆沈線の渦巻文が描かれている。

g 隆沈線によって四角に区画される文様をもつ土器。

825・826 は二重の隆沈線によって四角に区画され区画内には縄文が充填されている。825 には複節の縄文が充填される。

3類……中期後葉から末葉の土器

a 楕円あるいは逆U字状の沈線区画をもつ土器。

827 は区画内にR L縦回転の単節斜行縄文が充填されている。また、口縁下部に二重に刺突が施される。828 は波状の口縁をもつ土器で、区画内には刺突が施されている。829 は区画内に撚糸文が施文されている。830 は頸部に二重の刺突がめぐり、体部には沈線によって逆U字あるいは逆J字状の文様が施され、一部が磨り消されている。

b 沈線区画の充填縄文帯がアルファベット状の曲折文を展開する土器

832 は区画内にL R縦回転の単節斜行縄文が、833 はR L縦回転の単節斜行縄文がそれぞれ施されている。835 は体部中央が波状の沈線によって区画され、体部上半に充填縄文の沈線区画帯で文様が施されている。

c 無文の沈線区画帯（背景に斜行縄文を充填した沈線区画の無文帯）がアルファベット状の文様を展開する土器。

831 はC字状の文様が展開すると推定される。834 は口縁部が無文帯となる。837 は口縁部が隆帯によって区画され、無文帯となっている。また、隆帯に沿って竹管による刺突が施されている。837 は波状の口縁をもつ土器で、口縁部が無文帯となっている。一部の沈線上半に半截竹管による刺突が施される。また、波状口縁の頂部裏側には鱗状の隆帯が貼り付けられている。845・846 は沈線区画の一部に半截竹管による刺突をもつ。また845 は口縁部の無文帯に、846 は体部の無文帯にそれぞれ鱗状の隆帯が貼り付けられている。838～844 は小破片であるため詳細は不明であるが、無文帯内あるいは背景の縄文内に竹管等による刺突が施される土器である。

Ⅲ群土器……後期の土器を一括する。いずれも後期初頭の土器と思われる。少量の出土であり、類別は行わない。

847 は口縁部に小突起をもつ深鉢形の土器で、口縁部が沈線によって区画され無文帯となっている。体部には沈線によって曲折する文様が描かれている。地文はR L R縦回転の複節縄文である。848 は山形の突起を有する土器で、口唇部には連続する刺突が施されている。体部には沈線によって曲折文が描かれる。849 は撚糸文の地文上に沈線によって曲線の文様が施されている。850 は網目状撚糸文の地文に平行する沈線が施文されている。853 は口唇部に籠状の工具により細かな刺突がなされ、口縁部には5条の平行する沈線が施されている。

Ⅳ群土器……無文の土器を一括した。

856 は口唇部に沈線が施され、口縁部断面がY字状になる。857・858 には単節の撚糸文が、859 には網目状撚糸文が施文されている。860・863 はL R縦回転の単節斜行縄文が施され、底

部に網代痕をもつ。861はR L R縦回転の複節縄文が施されている。862は浅鉢形の土器で、口縁が内湾し無文帯となっている。地文はL R縦回転の単節斜行縄文である。864は深鉢形土器の体部でL R縦回転の単節斜行縄文が施されている。865は頸部が横位の原体圧痕により区画され、口縁部は無文で体部にはL R縦回転の単節斜行縄文が施文されている。また、底部には網代痕をもつ。

(2)土師器 (第149図、写真図版105)

遺構外からの土師器の出土量は非常に少ない。866はロクロ不使用の甕の口縁部である。器面調整は口縁部が内外ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。867はロクロ不使用の甕で、口縁部は短く外傾して立ち上がる。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。868もロクロ不使用の甕で、口縁部は短く外傾して立ち上がる。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部は外面が縦位のヘラナデ、内面が横位のヘラナデである。

(3)須恵器 (第149図、写真図版105)

須恵器の出土量は遺構内外とも非常に少なく、実測に耐えられるものは以下の3点のみである。869～871はいずれもロクロ使用の甕の体部破片である。器面調整は、外面がヘラケズリで内面にはロクロ調整痕が残っている。

(4)石器 (第150図～第157図、写真図版106～110)

石器は石鏃、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器、石斧、凹石、石皿、砥石が出土している。石鏃：矢の先に付けて用いたと考えられる小型の石器

中茎の有および欠損状況で三つに大別される。

第I群 無茎鏃……中茎のないもの。基部の形態によって三つに細分される。

1類 平基……中心線に対して基部がほぼ直交するもの。身部と基部の形態によって二つに細分される。

a 全体の形がほぼ二等辺三角形になるもの。 (872,873)

b 両端が丸みを帯びるもの。 (874,875)

2類 凹基……基部に抉入のあるもの。抉入の状態によって三つに細分される。

a 抉入が大きくゆるい弧を描くもの。 (876)

b 抉入が直線的となり、基部の両端がハの字状に開くもの。 (877,878)

c 抉入が逆U字状を呈するもの。 (879,880,881)

3類 円基……基部全体が丸みを帯びるもの。(882)

1類bと3類の違いは、1類bは基部が直線的に作り出され、その両端部のみが丸みを帯びるのに対し、3類は基部全体を丸く作り出しているものである。

第Ⅱ群 有茎鏃……中茎のあるもの。基部の形態によって二つに細分される。

1類 凸基……中茎が明瞭に作り出されているもの。身部の形態によって二つに細分される。

a 身部の形態がほぼ正三角形のもの。(883)

b 身部の形態がほぼ二等辺三角形になるもの。(884,885,886,887,
888,889,890)

2類 尖基……中茎の作り出しが不明瞭で、基部が尖るもの。二つに細分される。

a 両端部から中茎の先端部へ直線的にすばまるもの。(891)

b 全体が棒状で両先端がすばまるもの。(892,893)

第Ⅲ群 一部が欠損しており、分類不能のもの。(894,895)

遺跡全体から出土した石鏃のなかでは無茎鏃の数が多いが、遺構外から出土した石鏃の中では身部が二等辺三角形を呈する凸基有茎鏃の割合が高い。これらは最小のものが2.0 cm、最大のものが4.1 cm、平均3.4 cmと他の遺構外出土石鏃の平均値2.6 cmに比べ大型になっている。

石質は珪質泥岩、硬質泥岩、粘板岩、チャート質粘板岩、泥質細粒凝灰岩などである。また、形態的に凹基有茎鏃が遺構内外から1点も出土していないのは本遺跡の特徴といえる。

尖頭器：ものを突き刺すことを主たる目的として、先端を鋭利に尖らせた石器のうち、石鏃と石錐を除いたもの。形状によって二つに分けられる。(遺構外からは出土していない)

第Ⅰ群 槍先形……断面形が厚く、棒状をなすもの。二次調整が全面に施され、鋭い刃部が作り出されているもの。

第Ⅱ群 木葉形……偏平で基部が丸みを帯びるもの。側面に二次調整が施され、鋭い刃部を作り出しているもの。(896)

石鏃との違いは基本的には大きさによったが、小型のものでも石鏃に分類できないものは尖頭器として扱った。

石錐：身部の先端を細身に尖らせた打製石器で、孔を穿つのに用いられたと思われるもの。

身部の作り出しによって二つに分けられる。

第Ⅰ群 身部が明瞭に作り出され、かつ一定の長さ太さを有するもの。(897,898)

第Ⅱ群 身部が明瞭には作り出されず、つまみ部の一部を身部とするもの。(899,900)

石錐の形態の違いは、用途(土器の補修孔を穿つ、革の穿孔する等)と穿つ孔の大きさによ

るものと思われる。

石匙：両側辺からノッチを入れることによって作り出されたつまみを有し、刃部を有する打製石器。

剥片の種類と使用法によって二つに分けられる。

第Ⅰ群 縦長石匙……つまみ部を上にしたとき、主要な刃部が縦となり、側辺となるもの。刃部の数と全体の形状によって三つに分けられる。

1類 両側辺と末端（つまみの反対側）の三辺に刃部を有するもの。 (901,902)

2類 両側辺に刃部を有するもの。 (903,904)

3類 末端が尖り、両側辺ないし一側辺に刃部があるもの。 (905)

第Ⅱ群 横長石匙……つまみ部を上にしたとき、主要な刃部が横となるもの。身部の形状によって三分される。

1類 身部が二等辺三角形を呈するもの。 (906)

2類 直角三角形を呈するもの。 (908)

3類 隅丸長方形を呈するもの。 (909)

遺跡全体から見た出土量は縦長の石匙の方が約2倍出土している。中でも刃部が片刃となるものが多くなっている。石質は珪質泥岩、硬質泥岩、泥質細粒凝灰岩などである。

不定形石器：剥片石器のうち石鏃、尖頭器、石錐、石匙、篋状石器を除いたもの。形状、刃部加工の仕方によって細分される。

第Ⅰ群 連続する二次調整を加えて刃部を形成するもの。

1類 ほぼ全縁に二次調整を加えて刃部を形成するもの。 (907,910,911,912, 913)

2類 刃部が全縁には施されないもの。

a 一つの側辺にのみ刃部を形成するもの。

イ 二次調整が片面のみから施されるもの。 (914,915,916,917, 918)

ロ 二次調整が両面から施されるもの。 (919)

b 二つの刃部が隣り合うもの。

イ 二次調整が片面のみから施されるもの。 (920)

ロ 二次調整が両面から施されるもの。 (921)

ハ 二つの刃部のうち一方が片刃、他方が両刃のもの。(遺構外からは出土せず。)

- c 二つの刃部が直接には隣り合わないもの。
 - イ 二次調整が片面のみから施されるもの。(922)
 - ロ 二次調整が両面から施されるもの。(遺構外からは出土していない。)
 - ハ 二つの刃部のうち一方が片刃、他方が両刃のもの。(遺構外からは出土せず。)
 - ニ 二次調整が両片面から施されるもの。(923)
- d 三つの刃部が「コ」の字形に配されるもの。
 - イ 二次調整が片面のみから施されるもの。(925,926,927,928,929,930)
 - ロ 二次調整が両片面から施されるもの。(924)

第Ⅱ群 縁辺の一部に抉入の刃部を形成するもの。(遺構外からは出土していない。)

第Ⅲ群 微小剝離を有するもの。(925,926,927,928,929,930)

微小剝離を有する不定形石器は他にも出土しているが、数が多いため6点のみを掲載した。また、このほかにフレイク類も多数出土している。石質は硬質泥岩、珪質泥岩、チャート、泥質細粒凝灰岩などである。

石斧：斧状の石器。本遺跡から出土した石斧はすべて磨製石斧で打製石斧は出土していない。(936,937,938,939,940,941,942,943,944,945)

石斧はほとんどが破損しての出土である。936は他の石斧に比べて非常に小型であり、ミニチュアの石斧と考えられる。石質は粘板岩、凝灰岩、細粒凝灰岩、両輝石安山岩、玢岩である。

磨石：摩擦痕を有する礫石器。

第Ⅰ群 球状あるいはやや偏平な円礫の全面をまんべんなく使用しているもの。(946,947)

第Ⅱ群 やや偏平な円礫の両面を使用しているもの。(948,949,950,951,952,953)

第Ⅲ群 垂角礫を使用しているもの。(遺構外からは出土していない。)

器形が球状で全面を使用しているものは、偏平な円礫を使用しているものに比べ小型である。951には片面の中央部付近に敲打痕があり、磨石の他に敲石としての用途も考えられる。磨石の石質は両輝石安山岩と凝灰岩である。

凹石：小型の楕円または偏平な自然石の片面・両面・側面などに擦りくぼめるか、または敲打して作った凹みのある石器 (954)

遺跡全体を通して1点の出土である。中央のくぼみは敲打して形成したものである。石質は両輝石安山岩である。

石皿：中央をくぼめた皿状の石器 (955)

955 は四角の礫を皿状にくぼめたもので一部欠損している。中央部にはやや凹凸が見られる。石質は両輝石安山岩である。

砥石：研磨することを目的としたと思われるもので、平坦あるいは溝状の研磨痕を有する礫石器 (956)

956 は四角の流紋岩が使用されており、4面に研磨痕が見られる。

(5)石製品 (第157図、写真図版110)

957・958 は石棒の一部と思われる石製品で、957 は両端と半面が失われている。958 は一方の端が欠損している。石質は957 が両輝石安山岩、958 は輝石安山岩である。

959 は管状の石製品で、一部欠損しているが長さ3.4 cm、直径1.5 cmほどの円筒形の石に径0.4 cmほどの孔が穿たれている。石質は細粒凝灰岩である。

(6)土製品 (第157図、写真図版111)

960 は管状の土製品で、一方の端を欠いている。残存長は2.4 cm、径は1.6 cmほどで、孔の径は0.4 cmである。

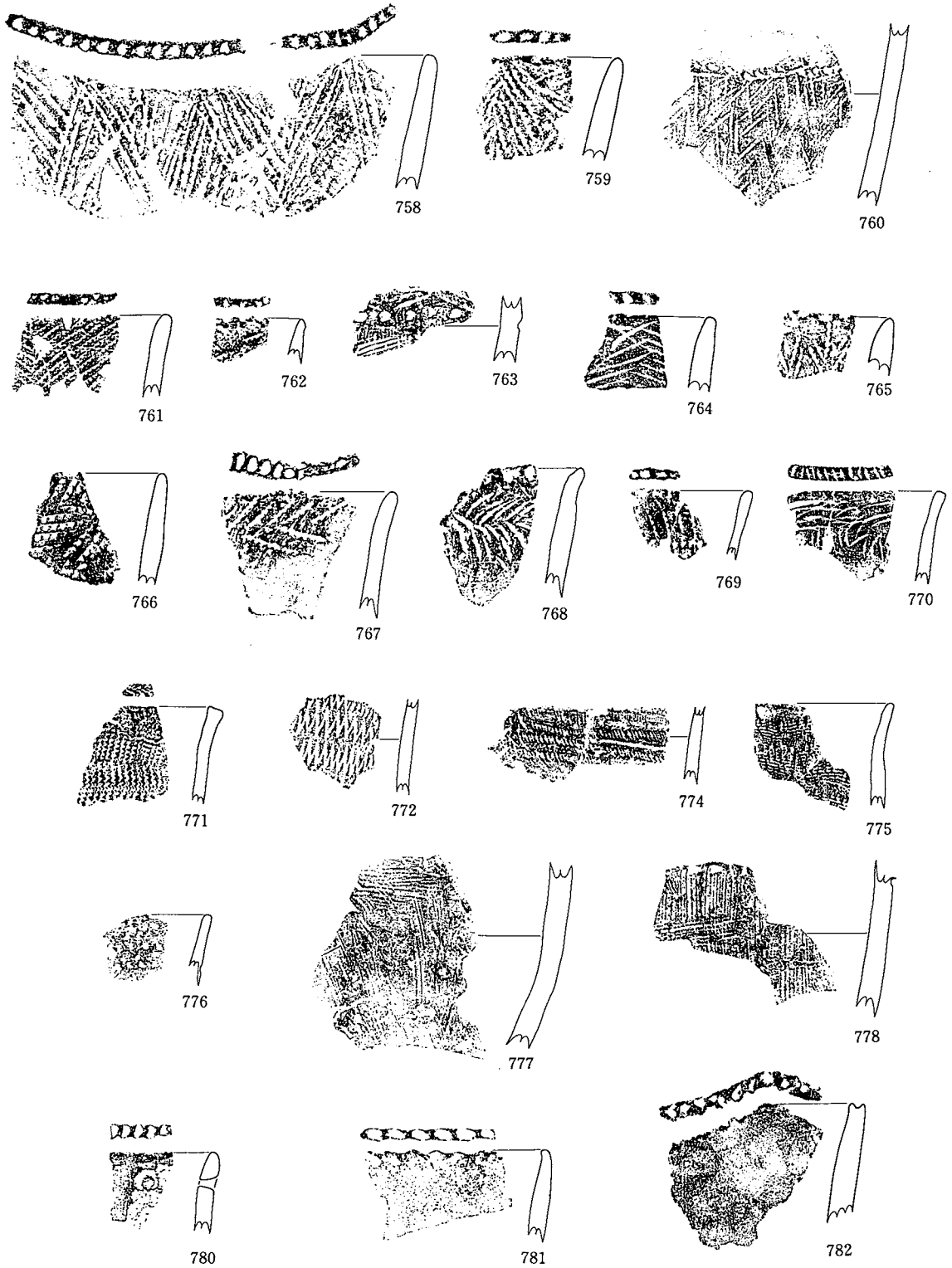
961 は環状の土製品の一部と考えられる。幅は4.2 cmで、径は推定で7 cm前後と思われる。

962 は斧形の土製品で一部が欠損しているが、全体の形は磨製石斧状に先端部にいくほど厚みが減り、楔状になる。表裏には単節の斜行縄文が施されている。

963・964 は円盤状土製品である。双方とも土器片を二次利用したもので、963には単節斜行縄文と沈線が、964には複節縄文が見られる。

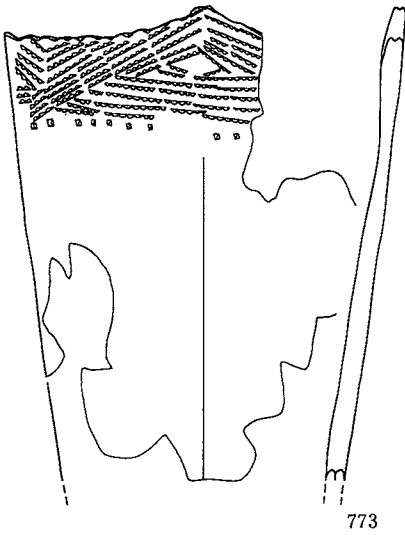
(7)鉄器

965・966 はともに刀子の一部と推定される鉄器で、ともに両端部を欠いている。965 は幅が1.0 cmほど、966 は2.0 cmほどである。

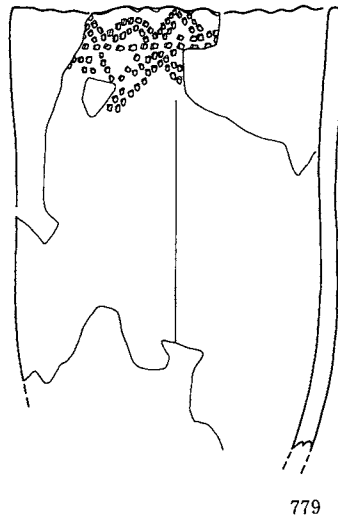


第142図 遺構外出土遺物(土器1)

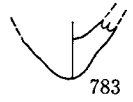
S = 1/3



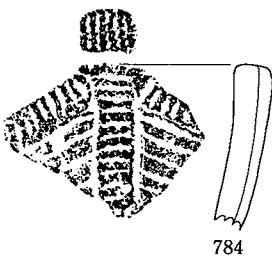
773



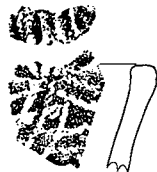
779



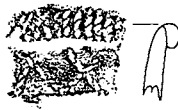
783



784



785



786



787



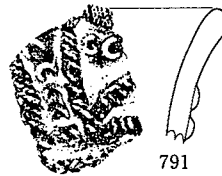
788



789



790



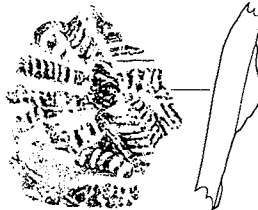
791



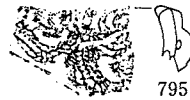
792



793



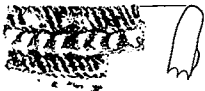
794



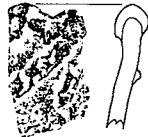
795



797



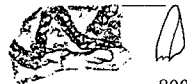
798



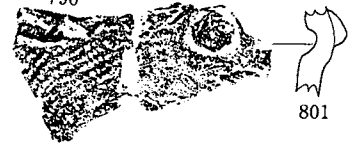
799



796



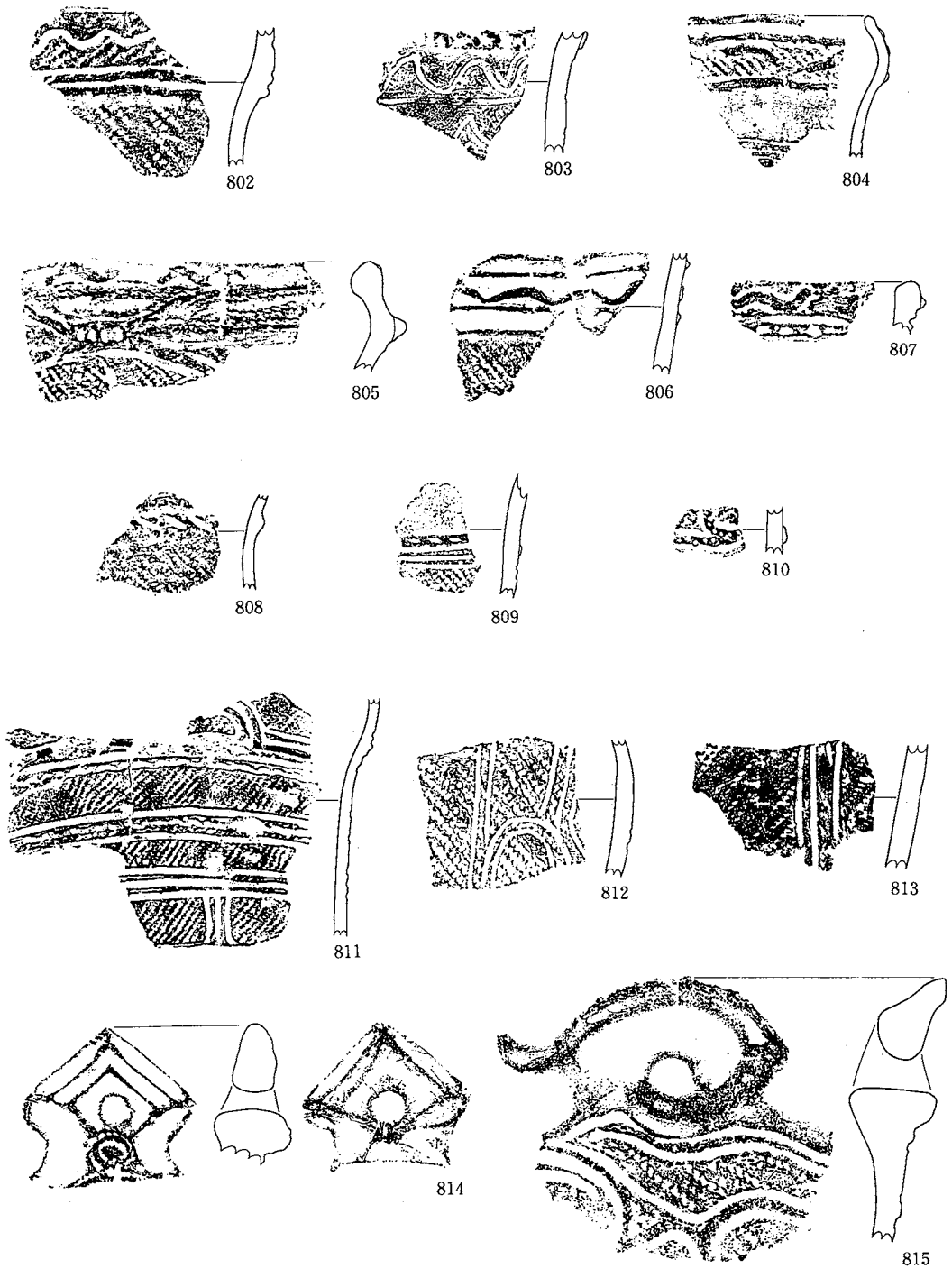
800



801

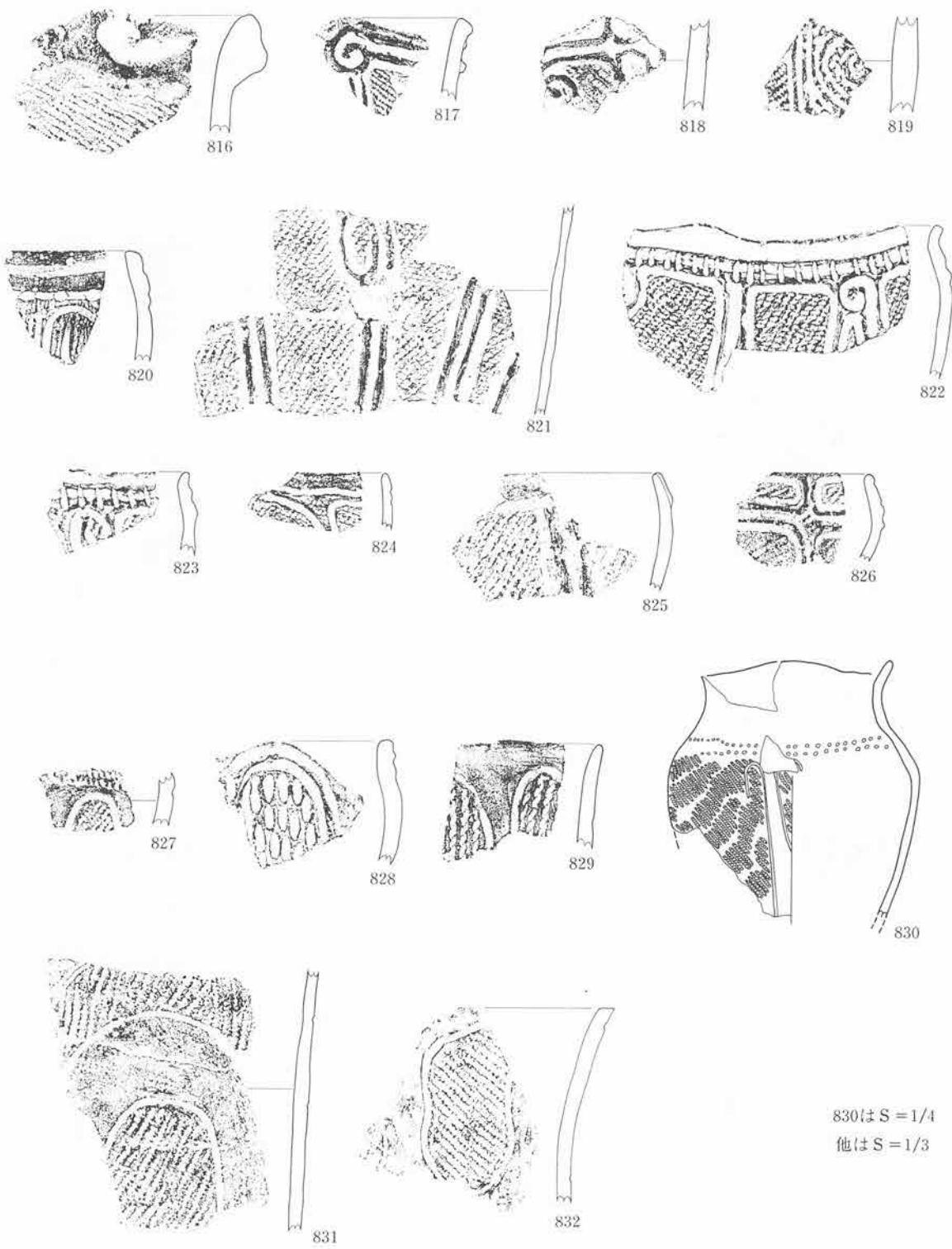
773・779・783は S = 1/4
他は S = 1/3

第143図 遺構外出土遺物(土器2)



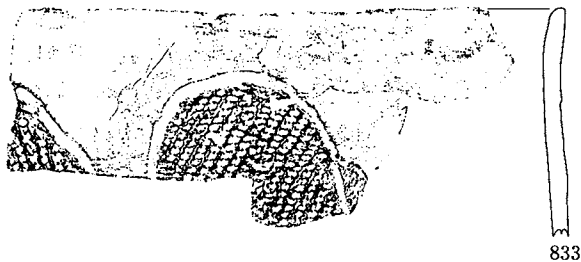
S = 1/3

第144図 遺構外出土遺物(土器3)

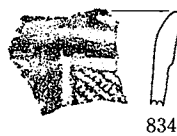


830は S=1/4
 他は S=1/3

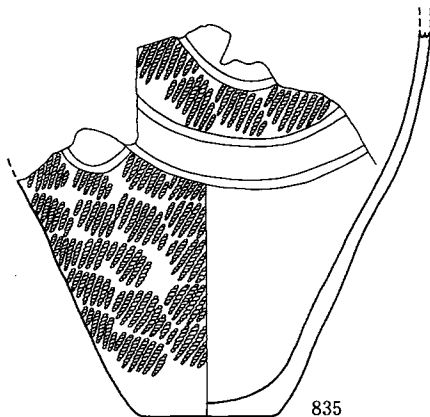
第145図 遺構外出土遺物(土器4)



833



834



835



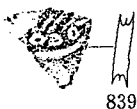
836



837



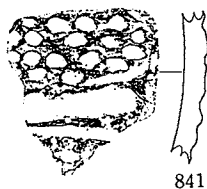
838



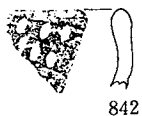
839



840



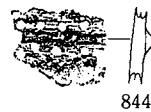
841



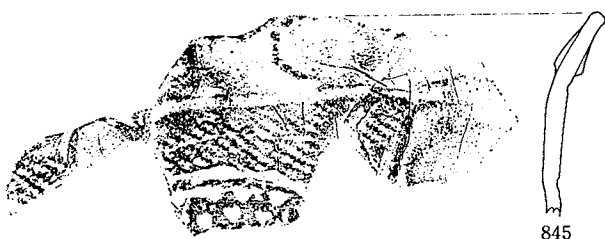
842



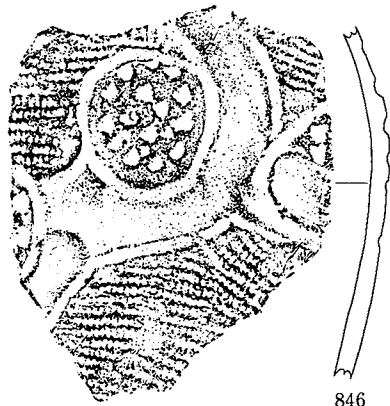
843



844



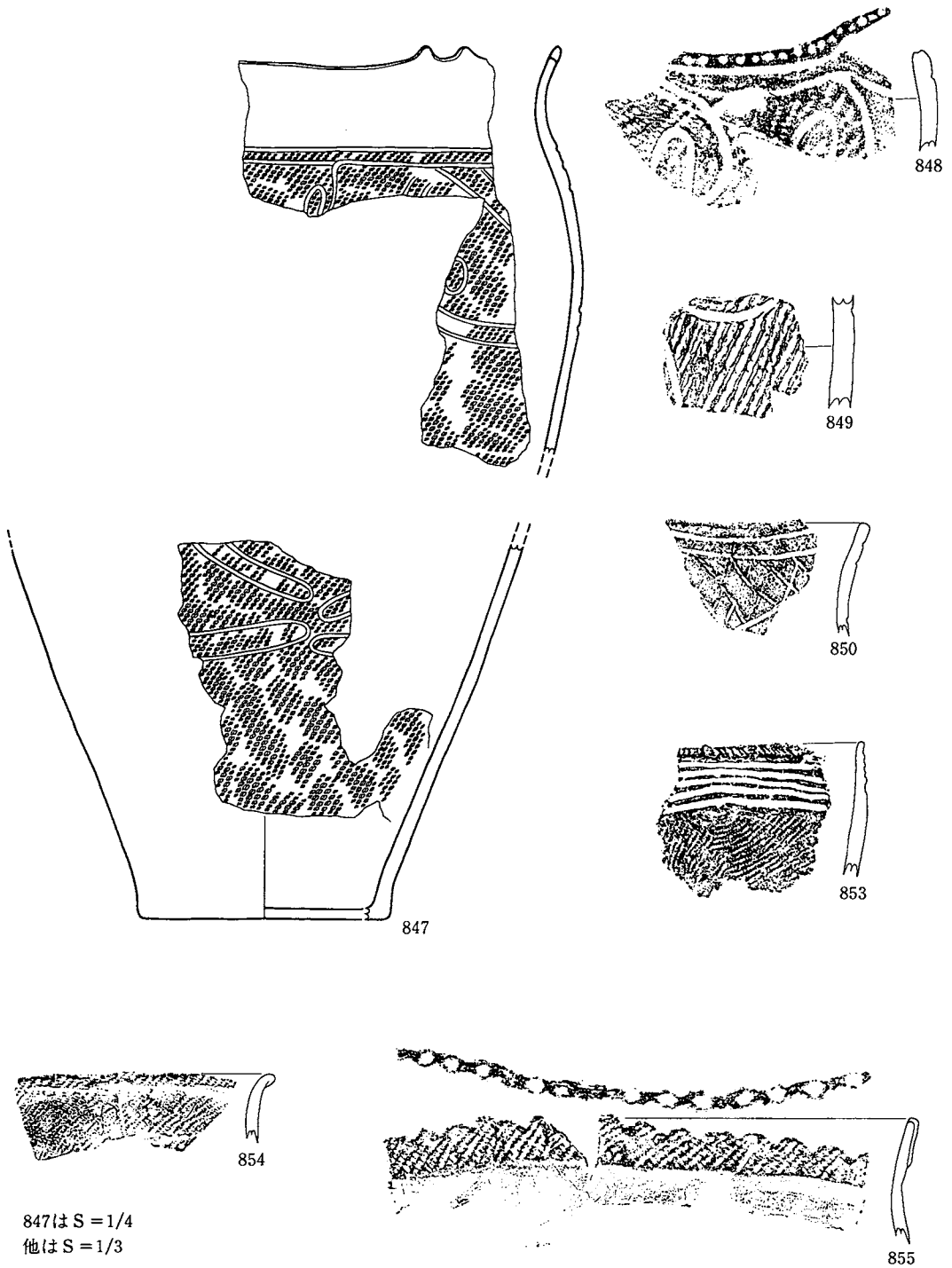
845



846

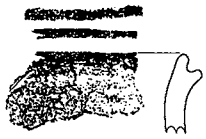
835は S = 1/4
他は S = 1/3

第146図 遺構外出土遺物(土器5)



847は S = 1/4
 他は S = 1/3

第147図 遺構外出土遺物(土器6)



856



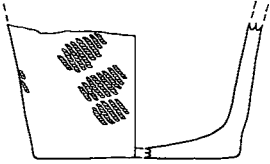
857



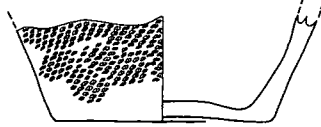
858



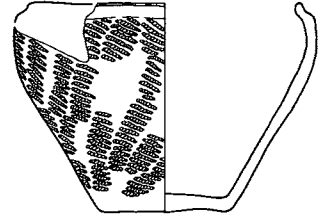
859



860



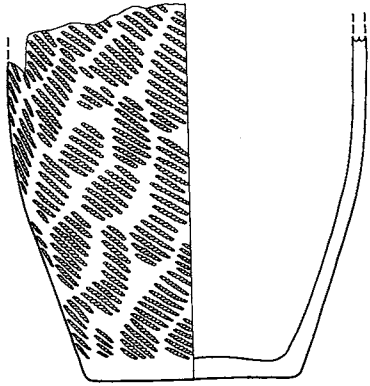
861



862



863

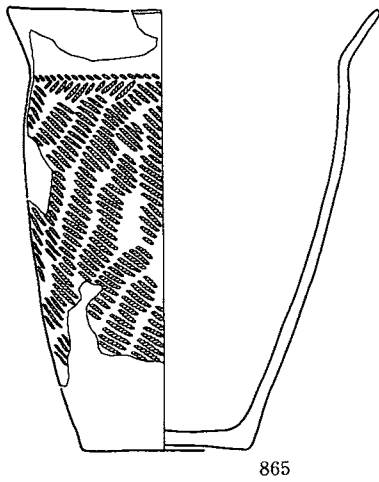


864

856~859は S = 1/3

860~864は S = 1/4

第148図 遺構外出土遺物(土器7)



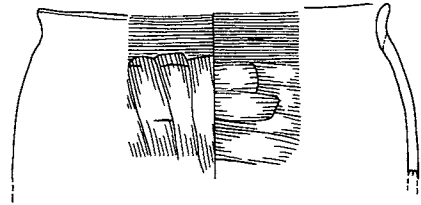
865



866



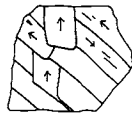
867



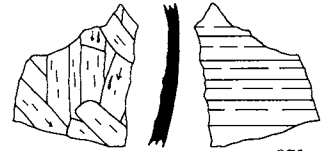
868



869



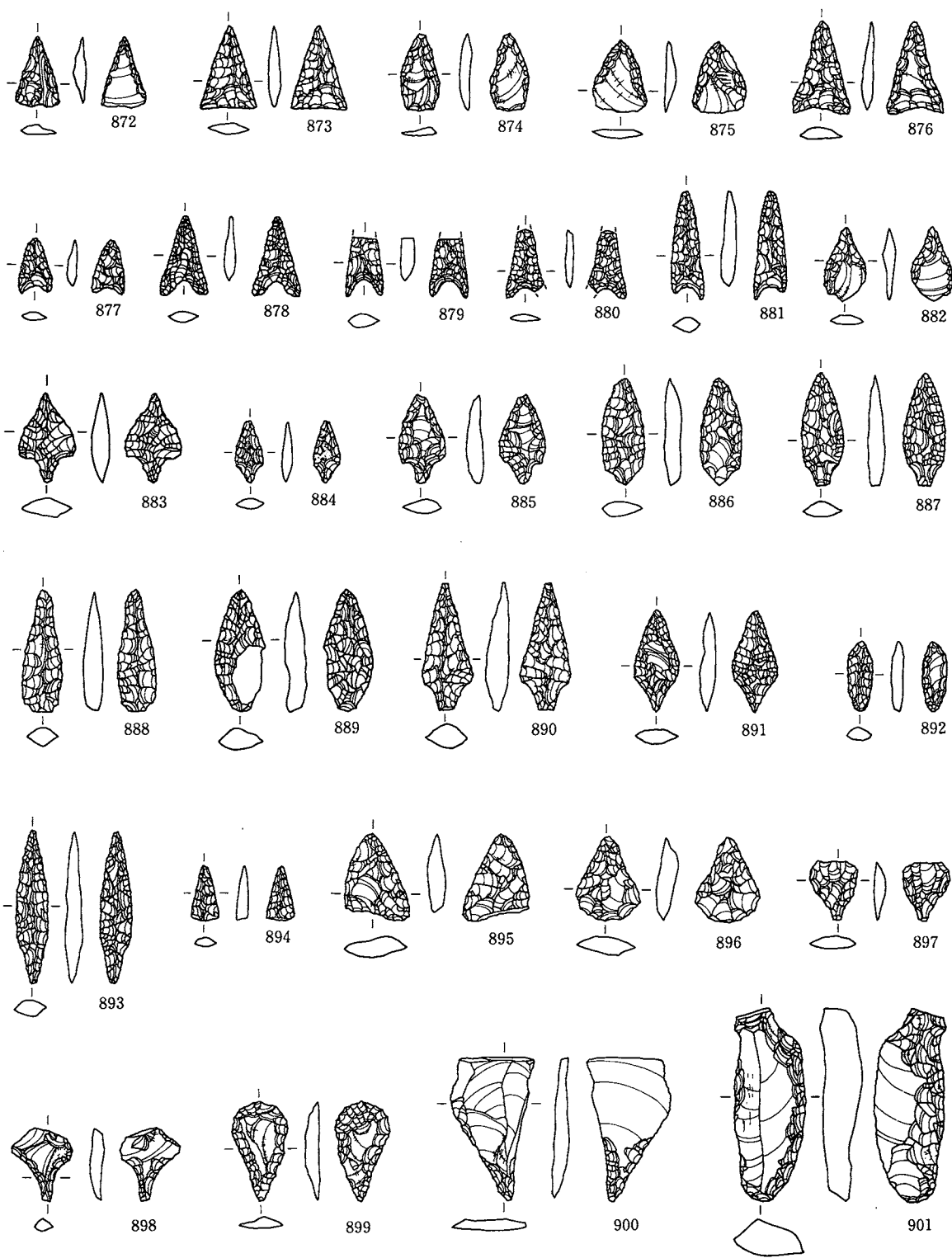
870



871

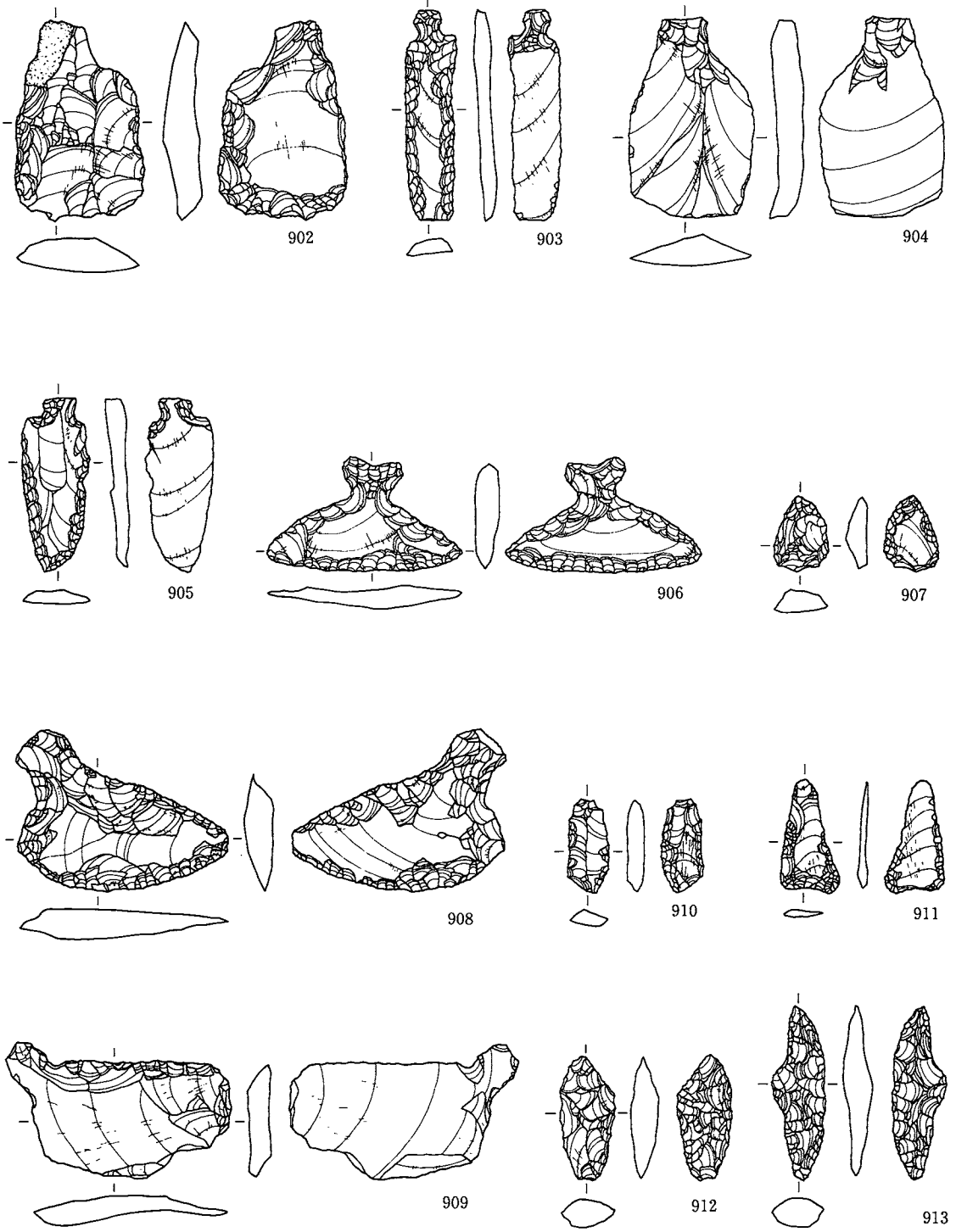
S = 1/4

第149图 遺構外出土遺物(土器8)



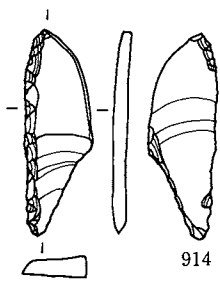
S = 1/2

第150图 遺構外出土遺物(石器 1)

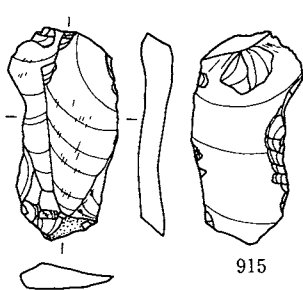


S = 1/2

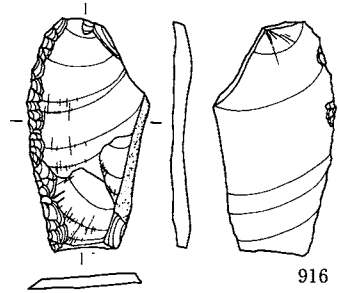
第151图 遺構外出土遺物(石器2)



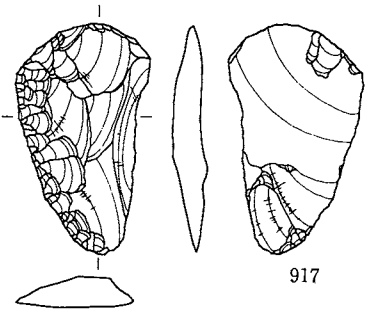
914



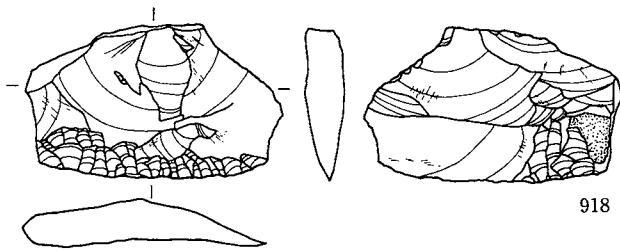
915



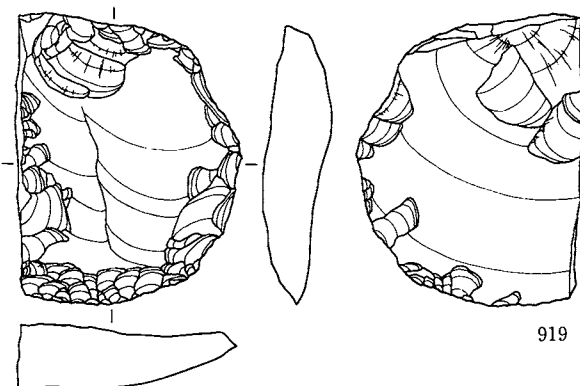
916



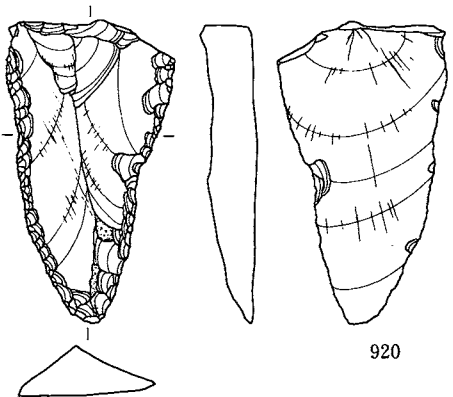
917



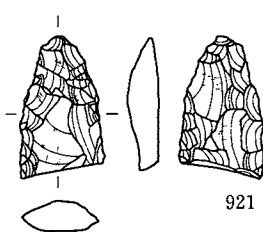
918



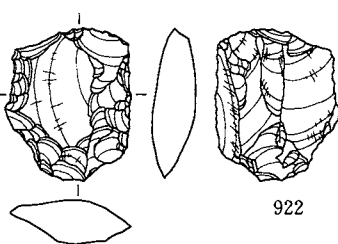
919



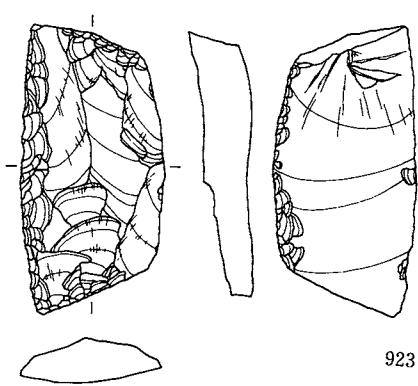
920



921



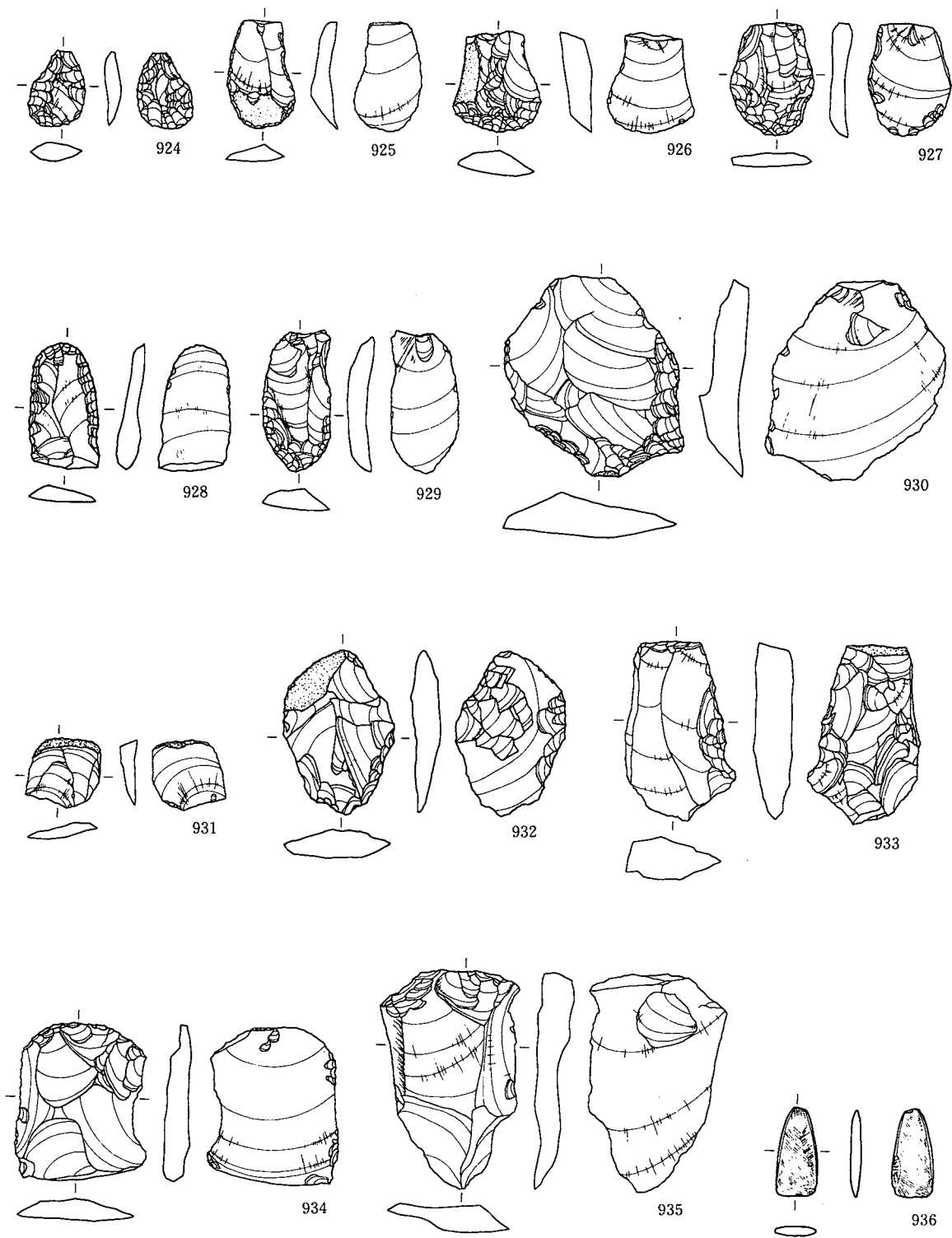
922



923

S = 1/2

第152図 遺構外出土遺物(石器3)



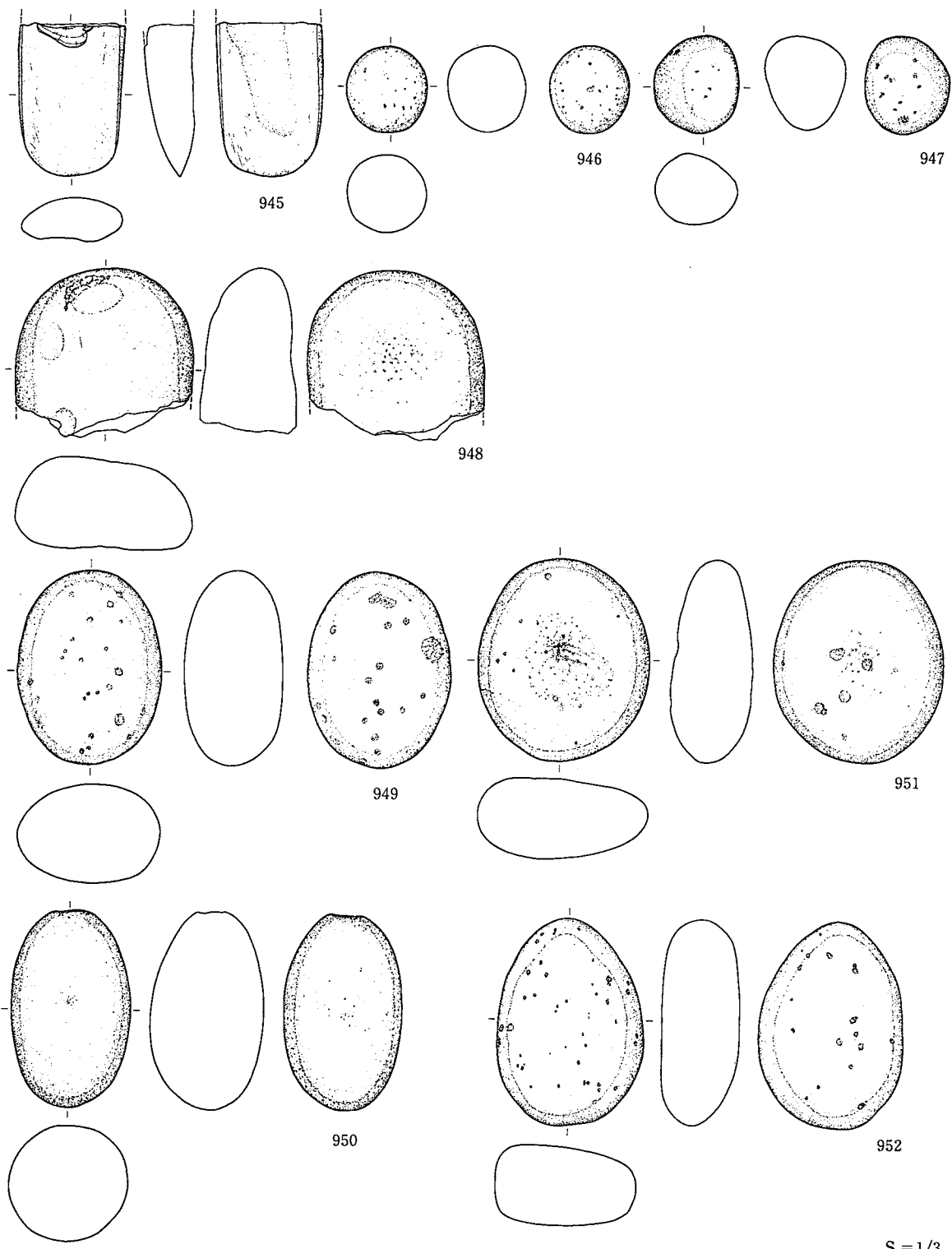
S = 1/2

第153圖 遺構外出土遺物(石器4)



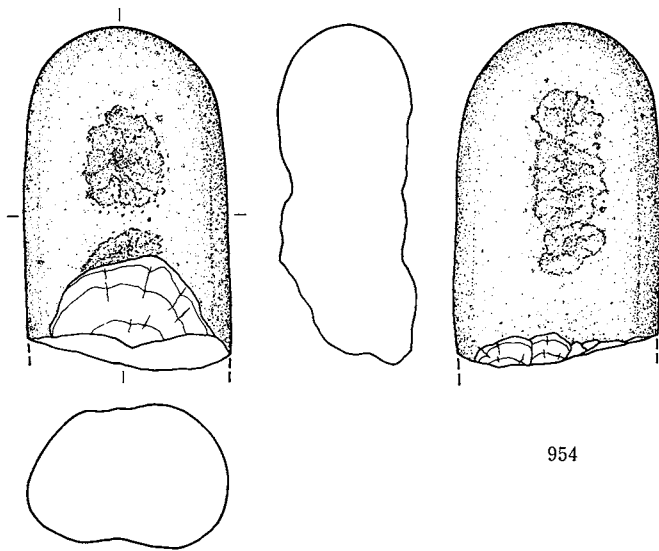
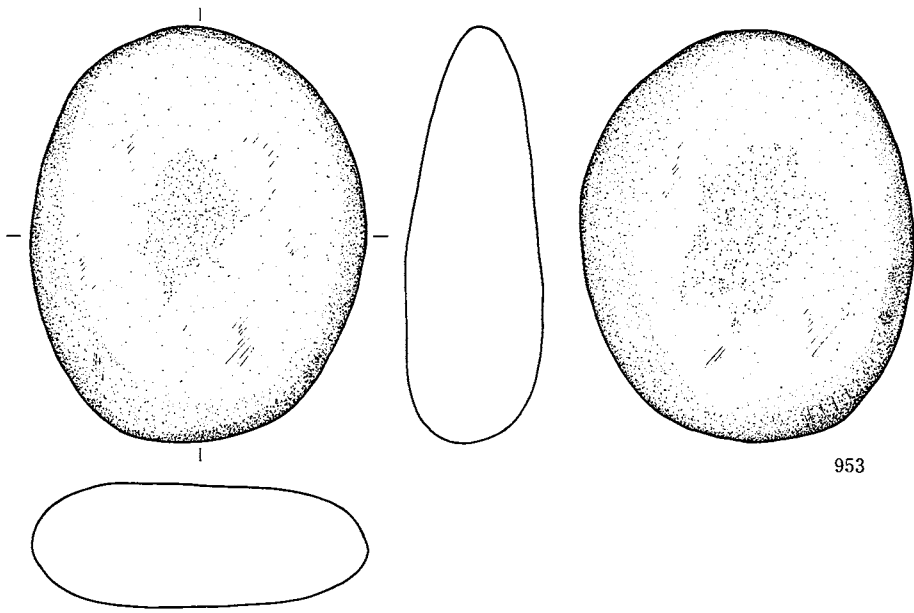
S = 1/2

第154图 遺構外出土遺物(石器5)



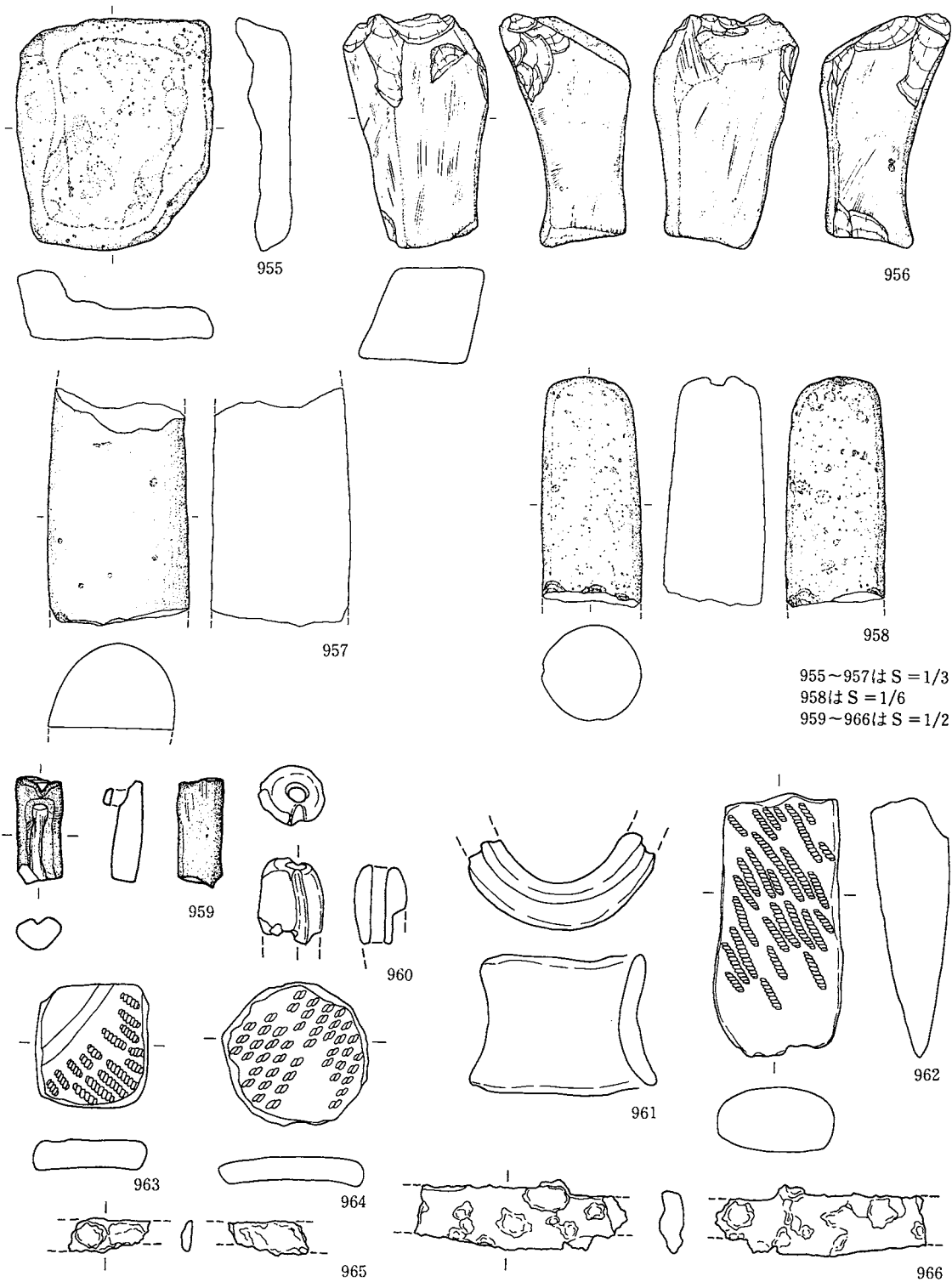
S = 1/3

第155図 遺構外出土遺物(石器6)



S = 1/2

第156图 遺構外出土遺物(石器7)



955~957は S = 1/3
 958は S = 1/6
 959~966は S = 1/2

第157図 遺構外出土遺物(石器8、石製品、土製品、鉄器)

V ま と め

1. 遺構

本遺構の調査区域は西側から東側に向かって延びる尾根とそれに続く平坦地からなっている。調査区域から検出された遺構の種類別の占地を見ると、西側の尾根が斜面となって落ち込む地点とそれに続く狭い平坦地からは主に土壌と配石遺構が検出され、遺跡のほぼ中央部にあたる尾根の緩斜面からは縄文時代の住居跡と土坑が多数検出されている。また、尾根の頂部にあたる調査区東寄りの地点からは平安時代の住居跡が集中して検出されている。

(1) 縄文時代の住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は、炉・柱穴をもたない竪穴住居跡状遺構も含めて 37 棟検出されている。検出面はⅢ層上面及びⅢ層中である。平面形は円形あるいは不整な円形を呈するものが圧倒的に多く、楕円形を呈するものは 2 棟のみである。

規模はⅢ B 2 e 住居跡が最大で径 9.4 m を測る。最小は V B 2 b 住居跡で 2.3 × 2.2 m である。平均してみると径が 4 m 前後のものと 5 m 前後のものが多い。

柱穴は不明なものが多く、確認できたのは 16 棟である。柱穴の径は 30 ~ 40 cm のものが多い。柱痕の径は確認できなかった。

炉は 32 棟から検出されている。形態的な内訳は、地床炉をもつ住居跡が 12 棟、石囲炉・石組炉をもつ住居跡が 12 棟、土器埋設炉をもつ住居跡が 3 棟、複式炉をもつ住居跡が 3 棟、土器埋設石囲炉をもつ住居跡が 1 棟、石囲炉と土器埋設炉をもつ住居跡が 1 棟である。複式炉には垂角礫を H 字状に組んだもののほか石囲炉の外側に土器を埋設しているものや石囲炉の一辺に他の炉を構成する石より大きな石を置き、その外側に焼土が厚く形成されているものも含めた。地床炉のなかには床面を若干掘り窪めたものも見られる。

住居跡同士の重複関係にあるものは 19 棟で、新旧関係は不明のものが多いが、出土した土器から推定するとほとんどが中期後葉から末葉にかけての建て替えと考えられ、あまり時期幅はない。なかにはⅢ B 5 g-1・2・3 住居跡のようにほぼ同じ場所に同程度の規模の住居跡が建て替えられたものもみられる。土坑と重複関係にある住居跡は 7 棟である。Ⅱ C 6 g 住居跡内の土坑については形状から土壌とも考えられるが埋土や遺物から重複関係が確認できなかったため住居内土坑とした。

住居跡の構築された時期としては出土遺物から中期中葉に属すると思われるものが 4 棟、後葉と思われる住居跡が 12 棟、中期であるが詳細が不明である住居跡が 12 棟、不明なものが 9 棟である。

(2) 平安時代の住居跡

平安時代の住居跡は11棟検出され、そのうち4棟については地表面から窪地となって確認された。これは尾根の頂部に位置するため、土砂の流入が少なく埋まり切らなかったものと思われる。このように古代の住居跡が埋まり切らずに窪地として残る例としては岩手町の仙波堤・今松遺跡が知られており、一方井地区には比較的多く存在する。本遺跡の調査区域に隣接する山林内でも同様の窪地が確認されており、住居跡の存在が推定される。

本遺跡で検出された住居跡は平面形がすべて隅丸方形で、規模は4.5 m前後のものが多い。

柱穴は10棟から1～9基確認されたが、4基のものが7棟と最も多い。住居内の土坑は7棟から検出されている。場所はカマド脇と床面中央部付近で、なかでも床面中央部付近の土坑は6棟から検出されている。

カマドは東壁に設置されている住居跡が7棟、南壁に設置されている住居跡が1棟、西壁に設置されている住居跡が1棟、北西隅に設置されている住居跡が1棟、不明1棟である。煙道の作りは掘り込み式のものが1棟、削り貫き式のものが5棟で、他は不明である。カマドの残存状況はどの住居跡も不良で、検出された住居跡がすべて焼失住居であることを考え合わせると住居廃棄の際に破壊された可能性が高い。

重複関係にある住居跡はV B 2 c住居跡とV B 4 b住居跡で、煙道部が切り合っている。新旧関係はV B 4 b住居跡の方が新しい。

(3) 土坑

土坑は21基検出されている。このうち平面形が円形を呈するものが14基、楕円形を呈するものが7基である。断面形はピーカー状を呈するもの11基、フラスコ状6基、皿状3基、浅鉢状を呈するもの1基である。

規模は開口部径が150～180 cmのものが多い。深さは最も浅いものが25 cmで、最も深いものが170 cmである。形状からみると調査区西寄り緩斜面から検出された3基のフラスコ状の土坑は他の土坑に比べ規模が大きい。構築時期については縄文中期後葉から末葉にかけての土坑が3基、中期に属すると思われる土坑が1基あるほかは遺物が少なく時期不明である。

(4) 土壇・配石遺構

土壇と配石遺構は調査区の西側において集中して検出されている。検出された地点は尾根の斜面が平坦になる縁の部分で、尾根を取り巻くように並んでいる。

平面形はすべて小判型で、断面形は浅いピーカー状を呈する。土壇の規模は開口部径が長軸方向で89～170 cm、短軸方向で56～113 cm、深さは22～80 cmを測る。埋土からの人骨等の出土はなかった。

調査区域の他の場所からは土壇が検出されず、その場所からのみ土壇が集中して検出された

こと及び配石が存在することからその地点が墓域として利用されていたものと推定できる。また、軸方向が同一なことは土壙の構築にあたって何らかの意図あったことが推定される。長軸方向の異なる土壙には長軸方向が東を向く土壙との重複が見られるが、長軸方向が同一のものには重複がみられない。このことから長軸方向を同一とする土壙にはそれほど構築時期に差がなかったものと考えられる。

構築時期については出土遺物がほとんどないため不明であるが、尾根上の縄文時代中期の集落との関連が考えられる。

2. 遺物

(1) 縄文土器

縄文土器は早期・中期・後期のものが出土している。早期の土器は出土量が少なく、すべて遺構外からの出土である。器形としてはいわゆる砲弾型を呈すると思われ、口縁部は山形となるもの平縁になるものがみられる。口唇部は指頭状の圧痕が施されるもの、貝殻腹縁文が施されるもの、刺突が施されるものなどが見られる。文様は貝殻腹縁文・貝殻条痕文及び刺突文が見られ、貝殻腹縁文は山形・横位の羽状・縦位に施される。また貝殻腹縁連続波状文が施文される土器が1点出土している。これらの特徴をもつ土器は県内では二戸市の馬立I遺跡からからも出土している。

中期前葉の土器としては弁状の突起をもち、原体を押圧した隆帯が貼り付けられ、隆帯間に原体を折り曲げて先端を押圧したC字状の文様が施されるものが主体である。これらは円筒上層b式に比定される。他に円筒系の土器としては中葉から後葉の土器であるが、隆帯間に半截竹管による刺突が施される円筒上層c式の土器、突起の下部に瘤状の粘土が貼り付けられる円筒上層d式の土器が数点出土している。

中葉から末葉にかけての土器としては大木系の土器が主体で、大木8 a式から10式までが出土している。なかでも9式及び10式の出土量が多い。9式の土器は楕円あるいは逆U字状の沈線区画内に縄文が充填されるものと刺突が施されるものが主体である。10式の土器は沈線区画の充填縄文帯がアルファベット文状の曲折文を展開するものと沈線区画の磨消縄文あるいは背景に斜縄文を充填した沈線区画帯が文様を展開するものが主体で、後者には鱗状の隆帯が貼り付けられるものも見られる。

後期の土器は沈線による曲線文が主体である。出土量はごく僅かで遺構外からの出土である。

(2) 土師器・須恵器

土師器・須恵器の出土量は遺構内外とも非常に少ない。土師器はすべてロクロ不使用の甕で口縁部が短く外傾して立ち上がるものが多い。器面調整は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデ

のものがほとんどである。坏は1点も出土しなかった。須恵器はロクロ使用の甕の体部と思われる破片が数点出土しているのみである。

(3) 石器・石製品

石器類は石鏃、石匙、石錐、尖頭器、篋状石器、不定形石器、磨石、石斧、石皿、砥石、凹石、石棒、有孔石製品、管状石製品が出土している。定形の剥片石器では石鏃の割合が高く57点出土しており、なかでも無茎鏃の方が若干多い。石匙は縦長の方が圧倒的に多く、19点中16点出土している。不定形石器は一つの側辺にのみ刃部を形成するものが多く出土している。二次調整は片面のみから施されるものが多い。なお微小な剥離を有する石器やフレークが多数出土しているが紙面の都合上割愛した。礫石器では石斧と磨石の出土が多く、石斧はすべて磨製石斧である。磨石はやや扁平な円礫の両面を使用しているものが多く、亜角礫を使用するものは少ない。

おわりに

倍田IV遺跡に隣接する黒内Ⅷ・XⅢ遺跡からは縄文時代前期から晩期までの遺物が出土し、中期の住居跡が検出されている。また隣接する尾根からは多数の土器や石器が表採されており、本遺跡周辺が長期にわたって集落として利用されていたことが推定される。今後詳細な調査を行うことにより土壌群や配石遺構を含めた集落構造が明らかになるとと思われる。

《引用・参考文献》

- 青森県立郷土館『小田野沢 下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』
青森市蚩沢遺跡発掘調査団（1979）：『蚩沢遺跡』
岩手県企画開発室（1975）：土地分類基本調査『沼宮内』
岩手県埋蔵文化財センター（1984）：『長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）』岩埋文報告書第77集
岩手県埋蔵文化財センター（1984）：『川口Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第83集
岩手県埋蔵文化財センター（1985）：『川口Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第84集
岩手県埋蔵文化財センター（1985）：『小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第85集
岩手県埋蔵文化財センター（1988）：『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第123集
岩手県埋蔵文化財センター（1985）：『黄金堂遺跡発掘調査報告書』岩埋文報告書第86集
岩手町教育委員会（1970）：『仙波堤・今待遺跡』
岩手町史編纂委員会（1976）：『岩手町史』
小林達雄・小川忠博（1989）：『縄文土器大観1』
高橋昭治（1970）：『北上川上流地域の考古学資料(1)』
高橋昭治（1973）：『北上川上流地域の考古学資料(4)』
高橋昭治（1975）：『北上川上流地域の考古学資料(5)』
名久井文明（1981）：『貝殻文尖底土器』縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ

図版番号	出土地点・産地	器種	石 材	産 地・時 期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版
16-35	ⅡC4d住埋土	尖頭器Ⅱ	硬質泥岩	雲石 中新統	4.2	2.8	1.1	10.88	65-35
16-36	ⅡC4d住埋土	石鏝Ⅰ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	2.4	2.6	0.9	4.44	65-36
16-37	ⅡC4d住埋土	石鏝Ⅰ-3	粘板岩	北上山地 中・古生界	8.1	3.1	0.9	19.97	65-37
16-38	ⅡC4d住埋土	不定形石器Ⅰ-1	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.0	1.8	0.8	4.68	65-38
16-39	ⅡC4d住埋土	砥石	両輝石安山岩(燧岩)多孔質	岩手火山 第四系	12.1	9.7	2.0	250	65-39
22-76	ⅡC7e住埋土	石斧	玢岩	北上山地 中生界	(6.4)	(4.7)	3.4	156	66-76
22-77	ⅡC7e住埋土	磨石Ⅰ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	7.8	5.3	4.1	200	66-77
26-109	ⅡC7f住埋土	石鏝Ⅱ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	2.9	1.2	0.5	1.73	68-109
26-110	ⅡC7f住埋土	石鏝Ⅱ-2-a	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.4	1.5	0.4	1.31	68-110
26-111	ⅡC7f住埋土	石鏝Ⅱ-2-b	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	3.7	1.3	0.9	3.05	68-111
26-112	ⅡC7f住埋土	石皿	両輝石安山岩(燧岩)多孔質	岩手火山 第四系	15.0	(9.6)	7.3	900	68-112
26-113	ⅡC7f住埋土	有孔石製品	石質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統	5.4	4.9	2.3	53	68-113
26-114	ⅡC7f住埋土	管状石製品	細粒凝灰岩	奥羽山地 鮮新統	4.9	2.5	1.6	16	68-114
34-186	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅰ-2-b	硬質泥岩	雲石 中新統	2.7	1.7	0.5	1.57	71-186
34-187	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅱ-1-b	硬質泥岩	雲石 中新統	2.6	1.2	0.5	1.33	71-187
34-188	ⅡC9a住埋土	尖頭器Ⅰ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	5.5	2.1	0.9	8.75	71-188
34-189	ⅡC9a住埋土	尖頭器Ⅱ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	3.5	2.8	1.2	9.86	71-189
34-190	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅰ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	4.7	3.1	1.1	7.91	71-190
34-191	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅱ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	4.1	2.7	0.7	6.83	71-191
34-192	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅱ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	3.8	3.1	0.5	4.84	71-192
35-193	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅰ-1	硬質泥岩	雲石 中新統	5.7	1.7	0.6	4.35	71-193
35-194	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅰ-1	珧質泥岩	雲石西部 中新統	4.2	2.3	0.6	2.78	71-194
35-195	ⅡC9a住埋土	石鏝Ⅰ-3	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	3.5	1.3	0.8	1.95	71-195
35-196	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	3.7	2.0	0.5	3.81	71-196
35-197	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	4.2	3.4	0.9	10.23	71-197
35-198	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	5.0	4.1	1.0	18.63	71-198
35-199	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	硬質泥岩	雲石 中新統	3.7	5.2	1.3	22.33	71-199
35-200	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	粘板岩	北上山地 中・古生界	60	3.7	1.0	28.33	71-200
35-201	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-ロ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.3	2.8	0.7	4.31	71-201
35-202	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-ロ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	4.2	2.7	1.1	10.20	71-202
35-203	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-ロ	硬質泥岩	雲石 新統	5.0	2.8	0.7	7.37	71-203
35-204	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-イ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	8.4	5.6	0.9	71.63	71-204
35-205	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-ロ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	4.2	3.1	1.0	11.92	71-205
35-206	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-ロ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	3.1	2.9	1.1	6.59	72-206
35-207	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-ハ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.8	3.0	0.8	8.61	72-207
36-208	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-c-ロ	硬質泥岩	雲石 中新統	4.8	3.6	0.9	13.64	72-208
36-209	ⅡC9a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	4.6	3.4	1.1	16.01	72-209
36-210	ⅡC9a住埋土	石斧	粘板岩	北上山地 中生界	(4.8)	1.4	0.8	11	72-210
36-211	ⅡC9a住埋土	磨石Ⅰ	凝灰岩	北上山地 中・古生界	7.6	5.1	3.8	250	72-211
36-212	ⅡC9a住埋土	磨石Ⅰ	デイサイト	北上山地 中生界	12.3	8.5	5.9	900	72-212
36-213	ⅡC9a住埋土	磨石Ⅱ	プロピライト	奥羽山地 中新統	13.7	7.4	4.3	600	72-213
36-214	ⅡC9a住埋土	石皿	安山岩	北上山地 中生界	(24.3)	(16.9)	(6.7)	3000	72-214
36-215	ⅡC9a住埋土	有孔石製品	細粒凝灰岩	奥羽山地 鮮新統	8.4	5.1	2.2	94	72-215
39-229	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-1-a	硬質泥岩	雲石 中新統	2.0	1.5	0.35	0.91	73-229
39-230	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-2-a	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	2.0	1.2	0.25	0.45	73-230
39-231	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-2-b	チャート	北上山地 中・古生界	2.0	1.4	0.4	0.56	73-231
39-232	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-2-b	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.4	1.3	0.4	0.78	73-232
39-233	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-2-c	珧質泥岩	雲石西部 中新統	1.9	1.4	0.4	0.49	73-233
39-234	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-3	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.7	1.4	0.4	1.55	73-234
39-235	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅱ-2-a	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.7	1.05	0.5	1.18	73-235
39-236	ⅡC9d住埋土	尖頭器Ⅰ	チャート質粘板岩	北上山地 中生界	3.2	1.8	0.9	4.42	73-236
39-237	ⅡC9d住埋土	尖頭器Ⅱ	珧質泥岩	雲石西部 中新統	4.6	4.1	1.2	20.86	73-237
39-238	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.0	2.5	0.7	3.57	73-238
39-239	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(雲石) 中新統	3.3	2.4	0.6	3.57	73-239
39-240	ⅡC9d住埋土	石鏝Ⅰ-3	珧質泥岩	雲石西部 中新統	2.9	1.5	0.5	3.27	73-240

表4 石器・石製品計測表(1)

図版番号	出土地点・産地	器 類	石 材	産 地・時 期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版
39-241	ⅡC9d住埋土	不定形石器Ⅰ-1	硬質泥岩	磐石 中新統	3.4	2.4	0.8	7.56	73-241
39-242	ⅡC9d住埋土	不定形石器Ⅰ-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.7	1.8	0.7	3.31	73-242
39-243	ⅡC9d住埋土	不定形石器Ⅰ-1	硬質泥岩	磐石 中新統	2.7	1.7	0.6	2.46	73-243
39-244	ⅡC9d住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-□	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.0	2.4	0.8	4.43	73-244
39-245	ⅡC9d住埋土	不定形石器Ⅱ	粘板岩	北上山地 中・古生界	2.2	1.6	0.3	1.09	73-245
39-246	ⅡC9d住埋土	石斧	細粒凝灰岩	北上山地 中・古生界	(3.8)	(3.6)	(1.7)	22	73-246
39-247	ⅡC9d住床面	石皿	デイサイト質凝灰角礫岩	奥羽山地 中新統	25.3	(21.0)	(7.0)	3100	73-247
42-266	ⅡC9e住埋土	石鏢Ⅰ-1-a	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.4	1.8	0.7	2.71	74-266
42-267	ⅡC9e住埋土	石鏢Ⅰ-1-a	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	2.9	1.8	0.6	2.66	74-267
42-268	ⅡC9e住埋土	石鏢Ⅰ-2-c	粘板岩	北上山地 中・古生界	1.9	1.3	0.3	0.44	74-268
42-269	ⅡC9e住埋土	石鏢Ⅰ-3	硬質泥岩	磐石 中新統	3.4	1.7	0.8	4.53	74-269
42-270	ⅡC9e住埋土	石鏢Ⅰ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.2	2.1	0.7	2.32	74-270
42-271	ⅡC9e住土坑	篋状石器	硬質泥岩	磐石 中新統	8.7	4.0	1.9	50.32	74-271
42-272	ⅡC9e住埋土	不定形石器Ⅰ-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.7	1.6	0.6	2.54	74-272
42-273	ⅡC9e住埋土	石斧	珩岩	北上山地 中生界	(5.3)	(4.2)	(2.5)	92	74-273
42-274	ⅡC9e住埋土	磨石Ⅲ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	(9.3)	(6.1)	4.5	400	75-274
43-275	ⅡC9e住埋土	磨石Ⅲ	輝石安山岩	奥羽山地(七時雨) 鮮新統	(17.1)	9.4	7.6	1600	75-275
43-276	ⅡC9e住埋土	石皿	デイサイト質凝灰角礫岩	奥羽山地 中新統	(26.4)	23.2	6.6	2900	75-276
45-300	ⅢB2i住埋土	石鏢Ⅰ-1-b	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	3.1	5.6	0.4	1.99	76-300
45-301	ⅢB2i住埋土	石鏢Ⅰ-2-a	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.1	1.6	0.5	1.25	76-301
45-302	ⅢB2i住埋土	石鏢Ⅰ-2-b	チャート	北上山地 中生界	2.5	1.3	0.35	0.70	76-302
45-303	ⅢB2i住埋土	石鏢Ⅱ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.8	1.8	0.9	3.45	76-303
45-304	ⅢB2i住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-□	珪質泥岩	磐石西部 中新統	4.0	2.6	0.8	5.94	76-304
48-316	ⅢB2j住埋土	石鏢Ⅰ-2-c	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.5	1.3	0.3	0.60	77-316
48-317	ⅢB2j住埋土	石鏢Ⅱ-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.3	0.9	0.4	1.15	77-317
48-318	ⅢB2j住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-□	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	4.4	2.5	1.0	9.82	77-318
48-319	ⅢB2j住埋土	磨石Ⅱ	凝灰岩	北上山地 中・古生界	12.4	7.9	4.7	800	77-319
51-340	ⅢB3g住埋土	尖頭器Ⅱ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.1	2.7	0.6	4.41	78-340
51-341	ⅢB3g住埋土	不定形石器Ⅰ-2-d-□	硬質泥岩	磐石 中新統	3.3	1.4	0.3	1.74	78-341
54-357	ⅢB3g-2住埋土	石鏢Ⅱ-1-b	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.3	1.2	0.4	1.31	79-357
56-369	ⅢB5g住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-□	珪質泥岩	磐石西部 中新統	4.0	4.4	1.0	17.12	80-369
59-375	ⅢB5g-3住埋土	石鏢Ⅱ-2-a	チャート質粘板岩	北上山地(磐石) 中新統	3.9	1.3	0.7	2.16	80-375
59-376	ⅢB5g-3住炉跡	尖頭器Ⅱ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	3.6	2.6	0.8	5.98	80-376
59-377	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅰ-2-a-1	硬質泥岩	磐石 中新統	7.8	5.5	1.5	59.80	80-377
59-378	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅰ-2-a-□	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	5.6	3.7	1.3	20.50	80-378
59-379	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅰ-2-a-□	硬質泥岩	磐石 中新統	6.2	3.8	1.1	26.08	80-379
59-380	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅲ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.8	2.8	1.3	18.17	81-380
59-381	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅲ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.7	3.9	1.6	30.74	81-381
59-382	ⅢB5g-3住炉跡	不定形石器Ⅲ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	7.7	5.5	1.5	44.01	81-382
63-397	ⅢB8f住埋土	磨石Ⅱ	花崗斑岩	北上山地 中・古生界	10.6	7.6	5.3	600	81-397
67-407	ⅢC1b住埋土	石鏢Ⅰ-2-b	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	2.1	1.3	0.2	0.46	82-407
67-408	ⅢC1b住埋土	石鏢Ⅰ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.0	2.3	1.2	11.33	82-408
	ⅢC1b住埋土	石鏢		733と接合					
70-428	ⅢC2a住埋土	石鏢Ⅰ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.0	2.2	0.5	2.49	83-428
70-429	ⅢC2a住埋土	石鏢Ⅰ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.4	2.2	0.5	3.72	83-429
70-430	ⅢC2a住埋土	石鏢Ⅰ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.0	1.3	0.5	1.87	83-430
70-431	ⅢC2a住埋土	石鏢Ⅰ	チャート	北上山地 中・古生界	5.7	2.3	0.4	4.02	83-431
70-432	ⅢC2a住埋土	石鏢Ⅱ	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.1	2.8	0.6	3.69	83-432
70-433	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.8	2.1	0.5	3.10	83-433
70-434	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-1	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.1	5.4	0.9	8.65	83-434
71-435	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-□	チャート	北上山地 中・古生界	4.9	3.2	1.1	15.16	83-435
71-436	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.9	3.1	0.9	6.58	83-436
71-437	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-1	硬質泥岩	磐石 中新統	3.9	2.9	1.1	8.61	83-437
71-438	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-□	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.4	4.2	1.1	11.64	83-438
71-439	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-□	珪質泥岩	磐石西部 中新統	5.4	3.6	0.8	15.01	83-439

表5 石器・石製品計測表(2)

図版番号	出土地点・産地	器種	石材	産地・時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版
71-440	ⅢC2a住埋土	不定形石器1-2-c-1	硬質泥岩	磐石 中新統	4.4	10.0	1.2	34.43	83-440
71-441	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅲ	チャート	北上山地 中新統	4.7	2.4	0.7	10.50	83-441
71-442	ⅢC2a住埋土	不定形石器Ⅲ	チャート	北上山地 中・古生界	4.7	2.9	1.0	9.75	83-442
71-443	ⅢC2a住埋土	石斧	チャート質凝灰岩	北上山地 中生界	4.1	4.0	2.3	51.10	83-443
71-444	ⅢC2a住埋土	磨石Ⅲ	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	23.5	17.2	13.9	400.50	83-444
71-445	ⅢC2a住埋土	磁石	角礫石安山岩(燻岩) 多孔質	岩手火山 第四系	12.4	9.9	5.1	500	83-445
78-512	ⅢC2e住埋土	石鏢I-1-a	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.8	1.9	0.5	2.56	88-512
78-513	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	硬質泥岩	磐石 中新統	1.8	1.3	0.3	0.50	88-513
78-514	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	チャート	北上山地 中・古生界	1.9	1.2	0.3	0.56	88-514
78-515	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	チャート	北上山地 中・古生界	1.9	1.3	0.2	0.42	88-515
78-516	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	1.9	1.5	0.3	0.45	88-516
78-517	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.1	1.3	0.25	0.54	88-517
78-518	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	2.1	1.3	0.3	0.48	88-518
78-519	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.4	1.5	0.2	0.64	88-519
78-520	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.5	1.5	0.3	0.95	88-520
78-521	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-b	流紋岩	北上山地 中生界	2.9	1.4	0.3	0.58	88-521
78-522	ⅢC2e住埋土	石鏢I-2-c	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.1	1.4	0.3	0.73	88-522
78-523	ⅢC2e住埋土	石鏢Ⅱ-2-a	チャート	北上山地 中・古生界	2.7	0.9	0.5	1.27	88-523
78-524	ⅢC2e住埋土	尖頭器Ⅱ	粘板岩	北上山地 中・古生界	4.2	2.9	0.9	10.33	88-524
78-525	ⅢC2e住埋土	石鏢I	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.0	1.5	0.6	1.23	88-525
78-526	ⅢC2e住埋土	石鏢I	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.0	2.4	0.5	1.71	88-526
78-527	ⅢC2e住埋土	石鏢I	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.5	2.1	1.0	6.93	88-527
78-528	ⅢC2e住埋土	石鏢Ⅱ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	4.8	2.5	0.8	4.16	88-528
78-529	ⅢC2e住埋土	石鏢Ⅱ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.9	2.1	0.8	2.91	88-529
79-530	ⅢC2e住埋土	石鏢I-1	粘板岩	北上山地 中・古生界	6.8	2.4	1.1	28.25	88-530
79-531	ⅢC2e住埋土	石鏢I-3	硬質泥岩	磐石 中新統	6.5	2.0	0.6	6.05	88-531
79-532	ⅢC2e住埋土	竪状石器	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	5.8	3.1	1.3	20.96	88-532
79-533	ⅢC2e住埋土	不定形石器I-1	硬質泥岩	磐石 中新統	2.8	1.1	0.5	1.49	88-533
79-534	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-a-1	硬質泥岩	磐石 中新統	4.7	2.5	0.8	7.05	88-534
79-535	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-a-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	7.1	2.9	0.8	12.71	88-535
79-536	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-a-2	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	4.7	1.9	0.5	4.57	89-536
79-537	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-a-2	硬質泥岩	磐石 中新統	4.2	3.8	0.7	8.99	89-537
79-538	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-b-2	珪質泥岩	磐石西部 中新統	5.0	3.3	0.7	9.21	89-538
79-539	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-c-1	硬質泥岩	磐石 中新統	3.8	4.5	0.9	12.95	89-539
79-540	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-c-1	硬質泥岩	磐石 中新統	5.4	2.4	0.4	5.63	89-540
79-541	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-c-2	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	4.5	4.6	1.2	22.09	89-541
79-542	ⅢC2e住埋土	不定形石器1-2-d-1	硬質泥岩	磐石 中新統	4.3	1.4	0.9	3.52	89-542
80-543	ⅢC2e住埋土	不定形石器Ⅱ	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.0	1.5	0.5	1.33	89-543
80-544	ⅢC2e住埋土	不定形石器Ⅱ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.7	1.7	0.6	2.07	89-544
80-545	ⅢC2e住埋土	石斧	粘板岩	北上山地 中生界	5.4	1.3	0.95	15	89-545
80-546	ⅢC2e住埋土	磨石Ⅲ	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	23.5	17.2	13.9	7100	89-546
85-559	ⅢC4b住埋土	不定形石器1-2-a-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.7	4.4	0.7	10.98	90-559
85-560	ⅢC4b住埋土	不定形石器1-2-a-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	5.8	5.2	1.3	28.32	90-560
85-561	ⅢC4b住埋土	不定形石器1-2-a-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	4.5	5.9	1.2	30.21	90-561
85-562	ⅢC4b住埋土	磨石I	角礫石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	10.1	9.1	6.7	900	90-562
87-580	ⅢC4d住埋土	石鏢I-2-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	2.7	1.3	0.3	0.74	91-580
87-581	ⅢC4d住埋土	石鏢Ⅱ-2-a	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.7	1.7	0.5	1.14	91-581
87-582	ⅢC4d住埋土	石鏢Ⅲ	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	2.5	1.2	0.3	0.61	91-582
87-583	ⅢC4d住埋土	石鏢I	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.4	1.8	0.8	4.32	91-583
87-584	ⅢC4d住埋土	石鏢I	チャート	北上山地 中・古生界	6.6	1.7	1.2	5.38	91-584
87-585	ⅢC4d住埋土	石鏢I-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	5.1	3.5	0.6	8.45	91-585
87-586	ⅢC4d住埋土	石鏢I-2	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	6.9	1.6	0.9	7.60	91-586
87-587	ⅢC4d住埋土	石鏢I-2	粘板岩	北上山地 中・古生界	7.1	2.3	1.8	17.07	91-587
87-588	ⅢC4d住埋土	不定形石器1-2-a-1	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.9	3.1	0.6	6.89	91-588
89-594	ⅢC5a住埋土	不定形石器1-2-b-1	チャート質粘板岩	磐石西部 中・古生界	5.5	3.6	1.1	15.54	92-594

表6 石器・石製品計測表(3)

図版番号	出土地点・産地	器種	石材	産地・時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版
89-595	ⅢC5a住埋土	不定形石器Ⅲ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.6	2.5	1.2	13.14	92-595
89-596	ⅢC5a住跡跡	磨石Ⅱ	デイサイト	北上山地 中生界	10.2	5.8	3.5	350	92-596
89-597	ⅢC5a住埋土	石棒	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	(33.7)	(10.3)	7.5	3200	92-597
91-608	ⅢC7b住埋土	石鏃Ⅰ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.2	2.0	0.75	3.56	92-608
91-609	ⅢC7b住埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-イ	チャート質粘板岩	北上山地 中新統	4.0	4.1	1.0	17.80	92-609
91-610	ⅢC7b住埋土	石斧	凝灰岩	北上山地 中・古生界	(4.5)	(3.8)	(2.2)	61	92-610
91-611	ⅢC7b住埋土	石斧	細粒凝灰岩	北上山地 中・古生界	(8.0)	5.5	(3.0)	264	92-611
93-616	ⅤA7j住埋土	石錐Ⅱ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	4.4	2.9	0.8	6.50	93-616
93-617	ⅤA7j住埋土	石皿	両輝石安山岩 (燄岩) 多孔質	岩手火山 第四系	48.9	32.5	9.6	7500	93-617
96-624	ⅤA1h住埋土	不定形石器Ⅰ-2-c-ハ	チャート質粘板岩	北上山地 中新統	9.1	4.8	1.5	71.53	93-624
108-656	ⅣB3d住埋土	磨石Ⅱ	デイサイト	北上山地 中生界	11.8	5.1	5.2	500	96-656
113-672	ⅤA1f住埋土	磨石Ⅰ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	7.2	6.1	(5.0)	150	97-672
129-714	ⅡC8f-1土坑埋土	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	硬質泥岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	5.2	3.2	0.5	8.40	99-714
129-715	ⅡC8f-1土坑埋土	不定形石器Ⅰ-2-b-イ	チャート	北上山地 中生界	2.9	2.4	0.6	3.20	99-715
131-733	ⅢC1c土坑埋土	石棒	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	(45.5)	9.1	6.7	4500	99-733
	ⅢC1c土坑埋土	石棒		733と接合					
132-747	ⅢC2c土坑埋土	磨石Ⅰ	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	5.2	4.5	4.9	110	100-747
132-753	ⅢC3c土坑埋土	磨石Ⅰ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	12.2	10.0	8.7	1500	100-753
132-754	ⅢC3c土坑埋土	石棒	輝石安山岩	奥羽山地 (七時雨) 鮮新統	(24.7)	(8.3)	6.8	1800	100-754
150-872	ⅡC4hⅢ層	石鏃Ⅰ-1-a	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.3	1.4	0.4	0.90	106-872
150-873	ⅤA5hⅢ層	石鏃Ⅰ-1-a	硬質泥岩	磐石 中新統	2.6	1.8	0.4	1.28	106-873
150-874	ⅡC7hⅢ層	石鏃Ⅰ-1-b	硬質泥岩	磐石 中新統	2.5	1.3	0.3	1.08	106-874
150-875	牧草地掘堀	石鏃Ⅰ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	2.3	1.8	0.3	1.20	106-875
150-876	ⅢC1eⅢ層	石鏃Ⅰ-2-a	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	3.0	2.8	0.4	1.23	106-876
150-877	ⅢB2fⅢ層	石鏃Ⅰ-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	1.8	1.1	0.3	0.49	106-877
150-878	ⅣB8fⅢ層	石鏃Ⅰ-2-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.5	1.6	0.35	0.75	106-878
150-879	ⅠD8bⅡ層	石鏃Ⅰ-2-c	粘板岩	北上山地 中・古生界	1.9	1.2	0.4	0.99	106-879
150-880	ⅡC7eⅢ層	石鏃Ⅰ-2-c	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.2	1.2	0.2	0.55	106-880
150-881	ⅠD7bⅡ層	石鏃Ⅰ-2-c	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.5	1.1	0.5	1.57	106-881
150-882	ⅢC3dⅢ層	石鏃Ⅰ-3	珪質泥岩	磐石 中新統	2.4	1.4	0.4	0.80	106-882
150-883	ⅣB4dⅢ層	石鏃Ⅱ-1-a	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.9	1.8	0.6	2.03	106-883
150-884	ⅢB5hⅢ層	石鏃Ⅱ-1-b	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.0	0.9	0.3	0.50	106-884
150-885	ⅠD7aⅡ層	石鏃Ⅱ-1-b	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.9	1.5	0.5	1.81	106-885
150-886	ⅡC0jⅢ層	石鏃Ⅱ-1-b	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.5	1.3	0.5	2.62	106-886
150-887	ⅡC9dⅢ層	石鏃Ⅱ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.7	1.4	0.5	2.67	106-887
150-888	ⅡC4fⅢ層	石鏃Ⅱ-1-b	粘板岩	北上山地 中・古生界	3.9	1.3	0.6	2.92	106-888
150-889	ⅣB8fⅢ層	石鏃Ⅱ-1-b	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	3.9	1.6	0.7	3.89	106-889
150-890	牧草地北側トレンチ	石鏃Ⅱ-1-b	珪質泥岩	磐石西部 中新統	4.1	1.7	0.8	3.91	106-890
150-891	ⅢC0aⅢ層	石鏃Ⅱ-2-a	珪質泥岩	磐石西部 中新統	3.3	1.4	0.5	1.87	106-891
150-892	ⅢC8dⅢ層	石鏃Ⅱ-2-b	硬質泥岩	磐石 中新統	2.3	0.8	0.4	0.84	106-892
150-893	ⅡC5fⅢ層	石鏃Ⅱ-2-b	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	4.9	1.0	0.6	2.24	106-893
150-894	ⅠD9cⅠ層	石鏃Ⅲ	硬質泥岩	磐石 中新統	7.1.8	0.9	0.3	0.48	106-894
150-895	ⅢC1dⅢ層	石鏃Ⅲ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.8	2.1	0.6	3.12	106-895
150-896	ⅢC8dⅢ層	尖頭器Ⅱ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	2.7	2.1	0.7	3.08	106-896
150-897	ⅢC8dⅢ層	石錐Ⅰ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	1.9	1.5	0.4	1.13	106-897
150-898	ⅡC0jⅢ層	石錐Ⅰ	珪質泥岩	磐石西部 中新統	2.4	2.0	0.5	1.55	106-898
150-899	ⅢC1eⅢ層	石錐Ⅱ	硬質泥岩	磐石 中新統	3.2	1.85	0.4	2.18	106-899
150-900	ⅢC5dⅢ層	石錐Ⅱ	硬質泥岩	磐石 中新統	4.6	2.7	0.6	4.58	106-900
150-901	ⅢC4dⅢ層	石匙Ⅰ-1	珪質泥岩	磐石西部 中新統	6.2	2.3	1.3	19.20	106-901
151-902	ⅠD9cⅠ層	石匙Ⅰ-1	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	6.3	4.1	1.1	31.03	106-902
151-903	牧草地北側トレンチ	石匙Ⅰ-2	硬質泥岩	磐石 中新統	6.6	1.6	0.6	8.12	106-903
151-904	ⅡB4dⅢ層	石匙Ⅰ-2	流紋岩	北上山地 中生界	6.3	3.9	1.1	25.31	106-904
151-905	ⅢC3cⅢ層	石匙Ⅰ-3	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 中・古生界	5.5	2.2	0.7	7.06	107-905
151-906	ⅡC3fⅢ層	石匙Ⅱ-1	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地 (磐石) 中新統	3.6	6.1	0.8	12.19	107-906
151-907	牧草地北側トレンチ	不定形石器Ⅰ-1	チャート質粘板岩	北上山地 中・古生界	2.4	1.7	0.8	2.89	107-907

表7 石器・石製品計測表(4)

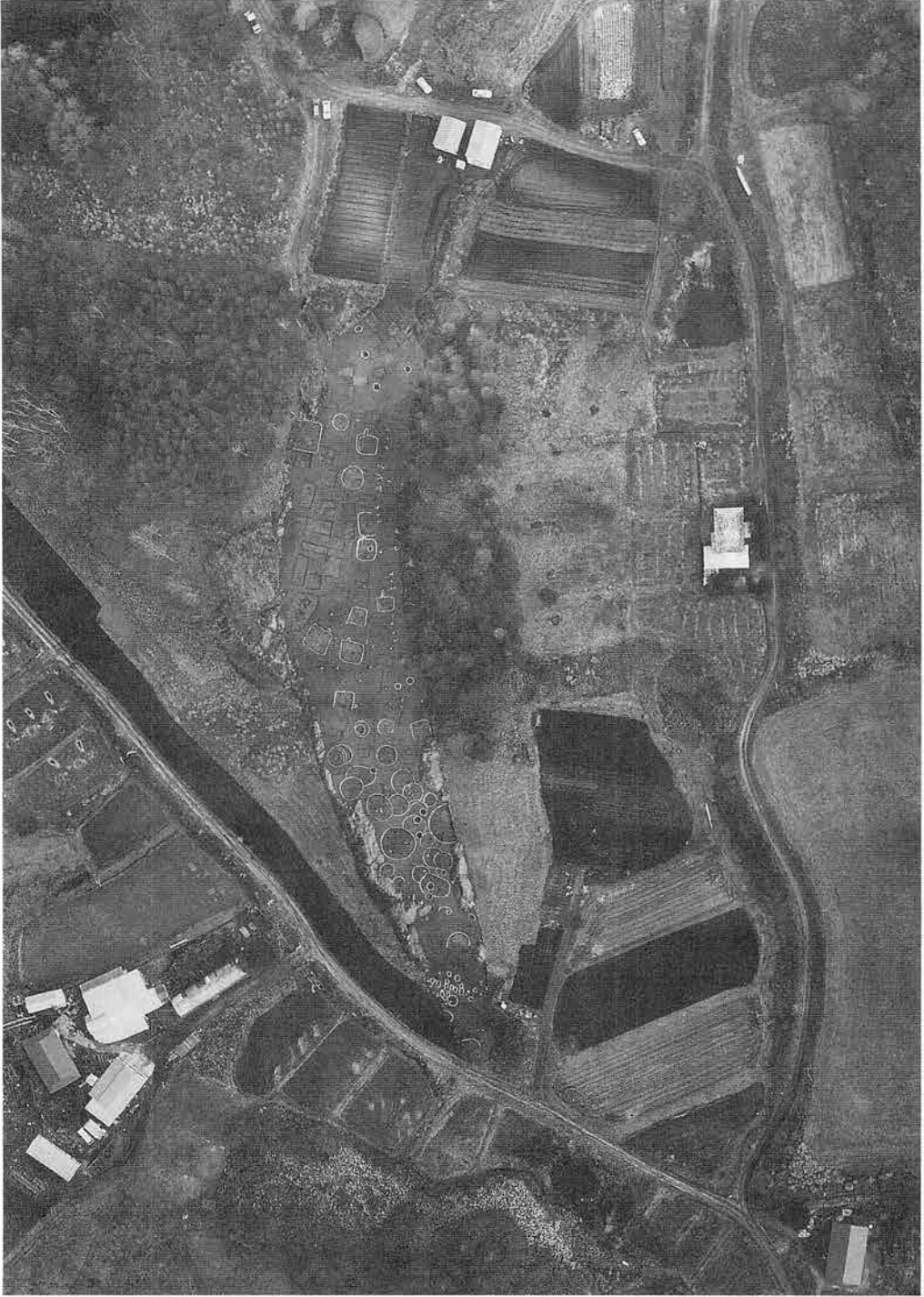
図版番号	出土地点・産地	器 種	石 材	産 地・時 期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版
151-908	ⅢC6cⅢ層	石匙Ⅱ-2	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	5.1	6.7	0.9	26.07	107-908
151-909	ⅡB5dⅢ層	石匙Ⅱ-3	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	4.3	7.1	1.0	24.39	107-909
151-910	ⅡC8dⅢ層	不定形石器Ⅰ-1	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	2.9	1.3	0.5	2.67	107-910
151-911	ⅣB8fⅢ層	不定形石器Ⅰ-1	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	3.5	1.8	0.3	1.76	107-911
151-912	ⅢC1dⅢ層	不定形石器Ⅰ-1	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	4.0	1.8	0.9	5.89	107-912
151-913	ⅡC7gⅢ層	不定形石器Ⅰ-1	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	5.5	1.7	0.9	6.28	107-913
152-914	ⅡC9eⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	硬質泥岩	磐石 中新統	5.4	1.9	0.6	5.92	107-914
152-915	ⅡC3gⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	硬質泥岩	磐石 中新統	5.6	3.0	0.9	11.94	107-915
152-916	ⅢC4cⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	硬質泥岩	磐石 中新統	6.2	3.3	0.6	12.34	107-916
152-917	ⅡC9eⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	6.1	3.6	0.9	18.24	107-917
152-918	牧草地北側トレンチ	不定形石器Ⅰ-2-a-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	4.1	6.9	1.3	31.10	107-918
152-919	ⅡC7hⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-a-ロ	硬質泥岩	磐石 中新統	7.7	6.0	1.9	105.10	107-919
152-920	ⅡC7gⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-b-イ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	8.1	4.5	1.6	40.93	108-920
152-921	ⅡC4iⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-b-ロ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	3.9	2.3	0.9	7.03	108-921
152-922	ⅢC6bⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-c-イ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	4.1	3.4	1.2	16.49	108-922
152-923	ⅢC3cⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-c-2	粘板岩	北上山地 中・古生界	7.8	3.8	1.7	47.67	108-923
153-924	牧草地北側トレンチ	不定形石器Ⅰ-2-d-ロ	チャート	北上山地 中・古生界	2.5	1.9	0.6	2.37	108-924
153-925	ⅡC7gⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	チャート	北上山地 中・古生界	3.5	2.2	0.9	5.22	108-925
153-926	ⅡD7jⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	3.3	2.8	1.0	9.38	108-926
153-927	ⅢC4cⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	3.6	2.7	0.7	7.43	108-927
153-928	ⅢB4i~4jⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	4.1	2.3	1.0	7.15	108-928
153-929	牧草地北側トレンチ	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	4.6	2.2	0.9	8.41	108-929
153-930	ⅡC6hⅢ層	不定形石器Ⅰ-2-d-イ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	6.4	5.8	1.5	49.19	108-930
153-931	ⅡC6eⅢ層	不定形石器Ⅲ	黒曜石	奥羽山地 鮮新統	2.3	2.4	0.5	2.48	108-931
153-932	ⅡC6hⅢ層	不定形石器Ⅲ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	5.3	3.6	1.0	15.68	108-932
153-933	ⅤB9aⅢ層	不定形石器Ⅲ	埴貫泥岩	磐石西部 中新統	5.8	3.6	1.4	29.66	108-933
153-934	ⅤB8cⅢ層	不定形石器Ⅲ	泥質細粒凝灰岩	奥羽山地(磐石) 中新統	5.1	4.3	0.8	19.24	108-934
153-935	ⅡB4dⅢ層	不定形石器Ⅲ	流紋岩	北上山地 中生界	7.1	4.5	1.2	30.68	108-935
153-936	ⅡC7gⅢ層	石斧	細粒凝灰岩	北上山地 中・古生界	2.9	1.4	0.35	2.8	109-936
154-937	西側畑跡粗掘	石斧	粘板岩	北上山地 中生界	5.5	1.7	1.4	14.0	109-937
154-938	牧草地北側トレンチ	石斧	粘板岩	北上山地 中生界	5.1	2.1	0.9	22.0	109-938
154-939	牧草地北側トレンチ	石斧	凝灰岩	北上山地 中・古生界	5.6	4.1	2.8	81.0	109-939
154-940	ⅢC1eⅢ層	石斧	粘板岩	北上山地 中生界	6.8	4.2	2.6	96.0	109-940
154-941	ⅤB7dⅢ層	石斧	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	8.2	3.5	2.8	93.0	109-941
154-942	ⅤB2aⅢ層	石斧	凝灰岩	北上山地 中・古生界	9.3	4.1	2.5	141.0	109-942
154-943	ⅢC1dⅢ層	石斧	細粒凝灰岩	北上山地 中・古生界	2.8	2.4	0.8	10.0	109-943
154-944	牧草地北側トレンチ	石斧	細粒凝灰岩	北上山地 中・古生界	3.5	4.9	2.2	49.0	109-944
155-945	ⅡC1hⅢ層	石斧	玢岩	北上山地 中生界	7.5	5.3	2.4	182.0	109-945
155-946	西側畑跡粗掘	磨石Ⅰ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	4.2	3.9	3.9	86.0	109-946
155-947	ⅠC9iⅠ層	磨石Ⅰ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	4.7	4.1	3.9	95.0	109-947
155-948	ⅢC3cⅢ層	磨石Ⅱ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	8.3	8.7	4.7	500.0	109-948
155-949	出土地不明	磨石Ⅱ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	9.5	7.1	4.8	400.0	109-949
155-950	ⅠD9cⅡ層	磨石Ⅱ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	9.7	5.8	5.7	400.0	110-950
155-951	ⅠD9cⅠ層	磨石Ⅱ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	9.8	8.4	4.0	500.0	110-951
155-952	ⅢB7hⅢ層	磨石Ⅱ	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	10.2	7.2	4.0	400.0	110-952
156-953	ⅠD9cⅠ層	磨石Ⅱ	凝灰岩	北上山地 中・古生界	11.0	8.9	3.7	500.0	110-953
156-954	ⅡB0jⅢ層	凹石	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	9.1	5.5	3.7	250.0	110-954
157-955	ⅡC4jⅢ層	石皿	輝石安山岩	奥羽山地(七時雨) 鮮新統	10.9	9.3	3.2	500.0	110-955
157-956	ⅣB3aⅢ層	砥石	流紋岩	北上山地 中生界	11.1	6.9	6.3	500.0	110-956
157-957	ⅢB0jⅢ層	石棒	両輝石安山岩	七時雨・西岳 鮮新統	11.2	6.7	4.2	500.0	110-957
157-958	ⅡC2iⅢ層	石棒	輝石安山岩	奥羽山地(七時雨) 鮮新統	21.8	9.5	9.6	2600.0	110-958
157-959	牧草地北側トレンチ	有孔石製品	細粒凝灰岩	奥羽山地 鮮新統	3.4	1.5	1.2	6.0	110-959

表8 石器・石製品計測表(5)

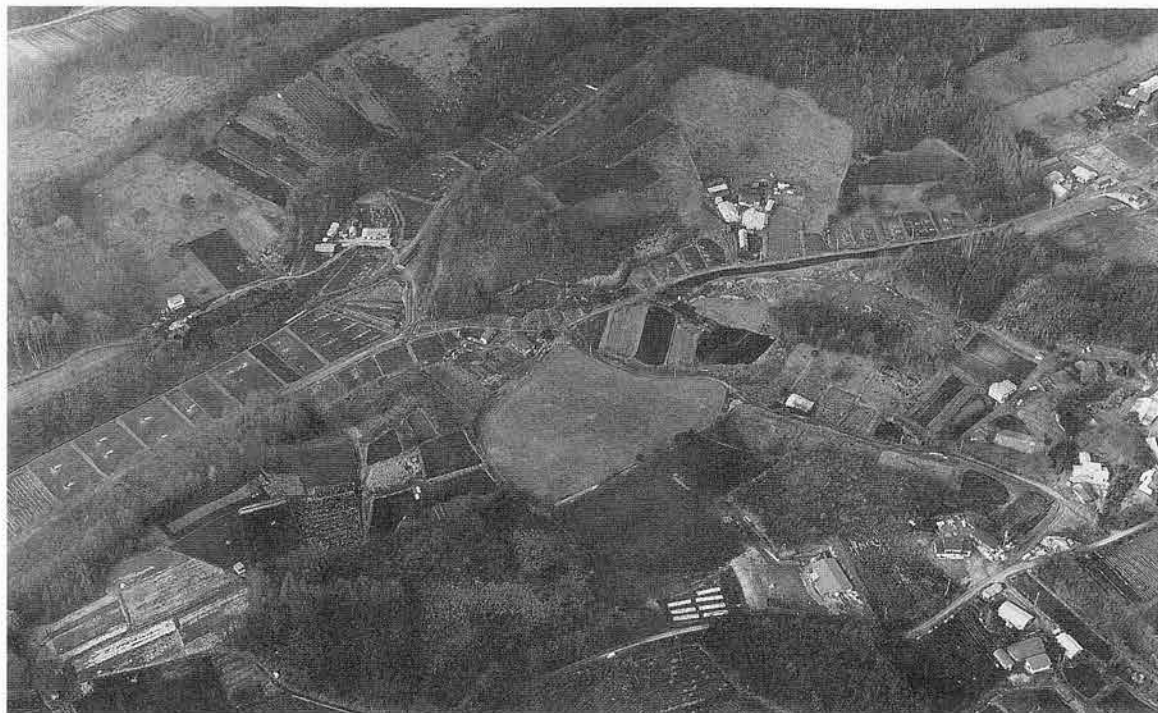
図版番号	器種	遺構名	出土層位	大きさ (cm)			重さ (g)	写真図版
				長さ	幅	厚さ		
104-647	鉄滓	IV B 3 a 住居跡	床面直上	9.4	7.5	2.0	146.5	95-647
105-648	刀子	IV B 3 a 住居跡	埋土下部	3.5	1.2	0.5	1.5	95-648
105-649	鉄鏃	IV B 3 a 住居跡	床面直上	7.6	1.8	0.3	7.4	95-649
105-650	鉄鏃	IV B 3 a 住居跡	埋土下部	10.4	1.4	0.5	11.8	95-650
105-651	鎌?	IV B 3 a 住居跡	埋土下部	10.7	3.1	0.7	26.8	95-651
108-657	鏃	IV B 3 d 住居跡	埋土下部	15.1	2.0	1.7	7.2	96-657
108-658	鉄鏃?	IV B 3 d 住居跡	住居内土坑	7.9	0.7	0.4	6.8	96-658
108-659	刀子?	IV B 3 d 住居跡	埋土下部	3.0	1.0	0.3	1.6	96-659
113-670	鉄鏃	VA 1 f 住居跡	埋土下部	8.9	1.9	0.4	10.7	97-670
113-671	角釘?	VA 1 f 住居跡	埋土下部	5.7	0.8	0.4	3.2	97-671
115-676	鉄滓	VA 9 f 住居跡	埋土下部	3.4	1.7	0.6	3.6	97-676
117-679	鉄鏃	VA 0 j 住居跡	埋土下部	7.2	2.1	0.4	7.9	97-679
117-680	鉄鏃?	VA 0 j 住居跡	埋土下部	10.5	1.0	0.4	7.6	97-680
117-681	刀子?	VA 0 j 住居跡	埋土下部	8.1	2.5	0.5	16.4	97-681
117-682	刀子?	VA 0 j 住居跡	埋土下部	5.0	1.4	0.4	3.4	97-682
117-683	鋤先	VA 0 j 住居跡	埋土下部	16.0	15.1	1.4	192.8	97-683
117-684	角釘?	VA 0 j 住居跡	埋土下部	2.1	0.8	0.5	2.3	97-684
119-695	刀子?	VB 2 c 住居跡	埋土下部	6.8	2.8	0.5	21.2	98-695
157-965	刀子?	VB 2 d グリット	Ⅲ層上面	2.2	1.1	0.3	1.1	111-965
157-966	刀子?	VB 2 c グリット	Ⅲ層上面	6.5	2.2	0.6	14.3	111-966

表9 鉄器・鉄滓計測表

写 真 图 版



写真図版1 遺跡全景(空中写真)

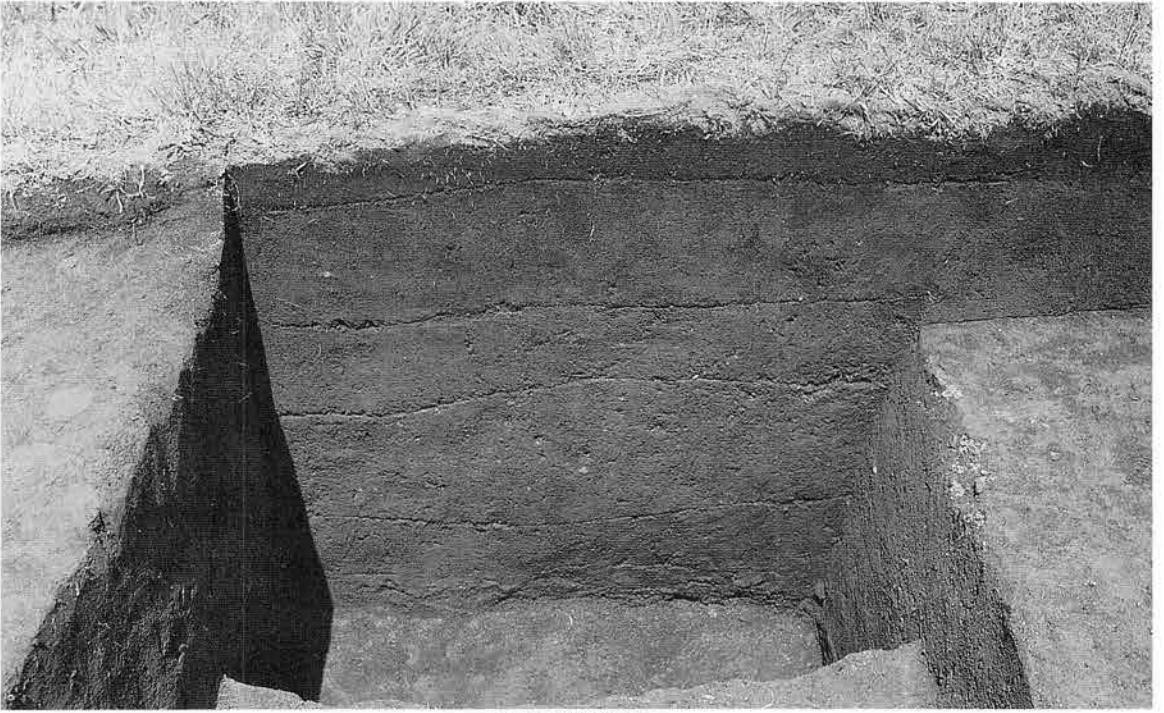


空中写真（南から）

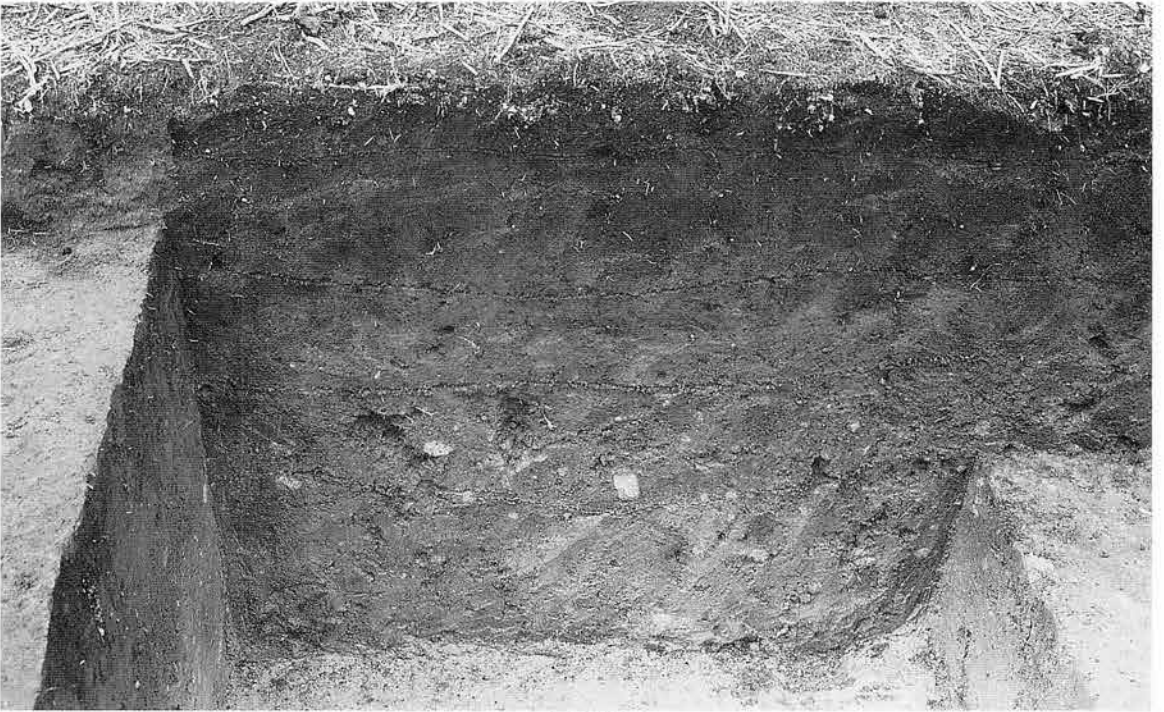


空中写真（西から）

写真図版2 遺跡全景



牧草地深掘断面



山林部深掘断面

写真図版3 土層断面

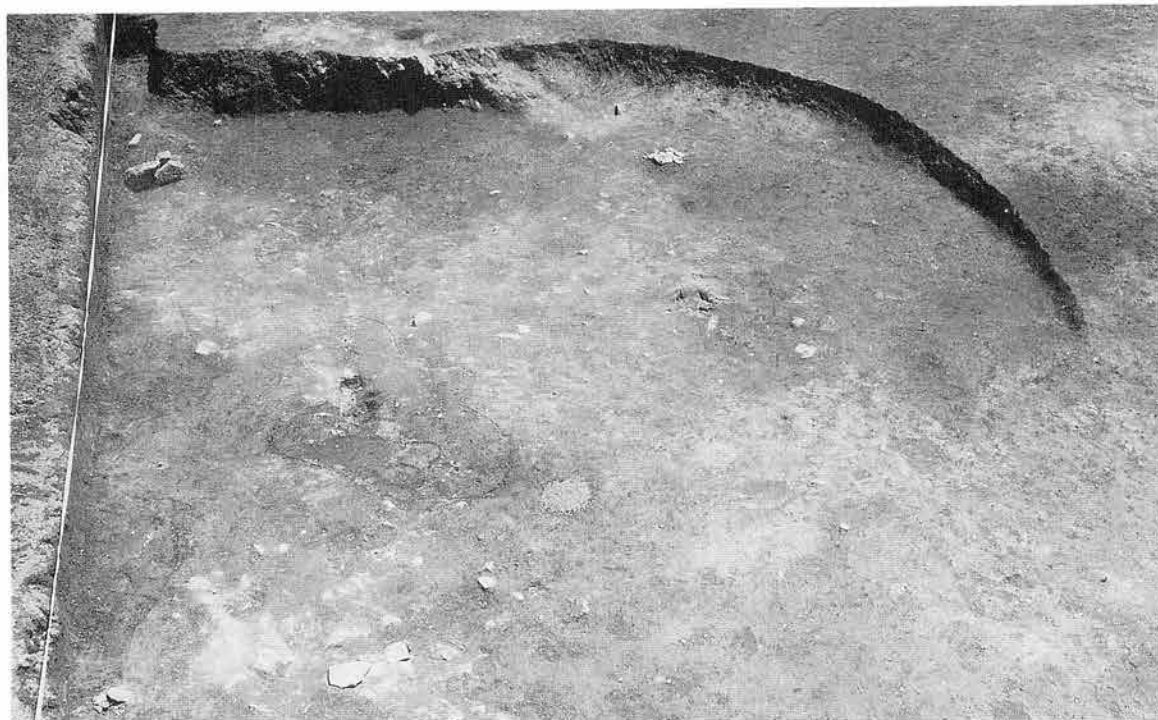


平面（南から）



断面（東西）

写真図版4 I C7j 住居跡



平面（西から）



断面（南から）

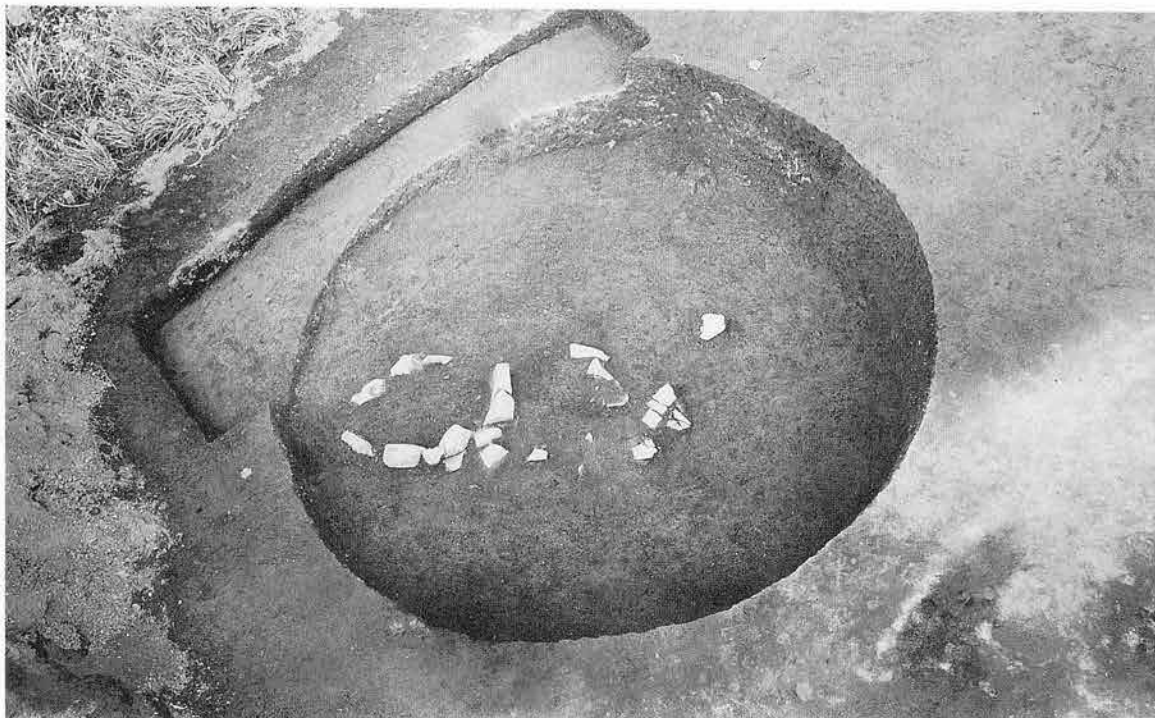


炉跡平面（西から）

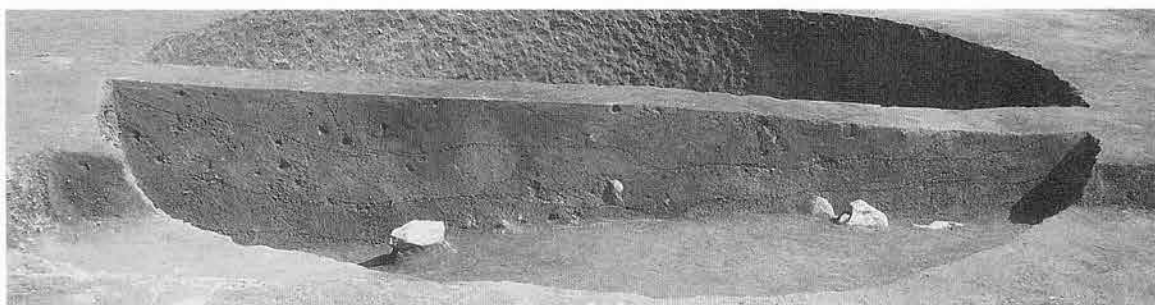


炉跡断面（南から）

写真図版5 I D6a住居跡



平面（南西から）



断面（北から）



炉跡平面（西から）



埋設土器（東から）

写真図版6 II B9i 住居跡



平面（西から）



断面（南から）



炉跡断面（西から）

写真図版7 II C3i 住居跡

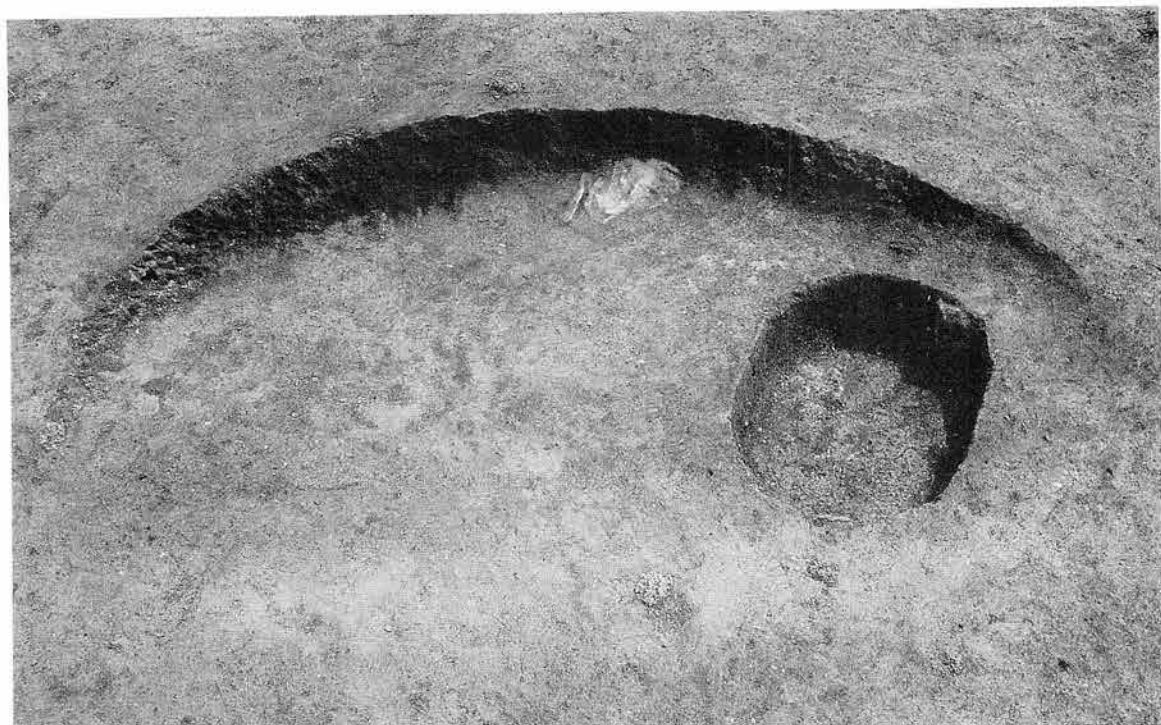


平面（南西から）

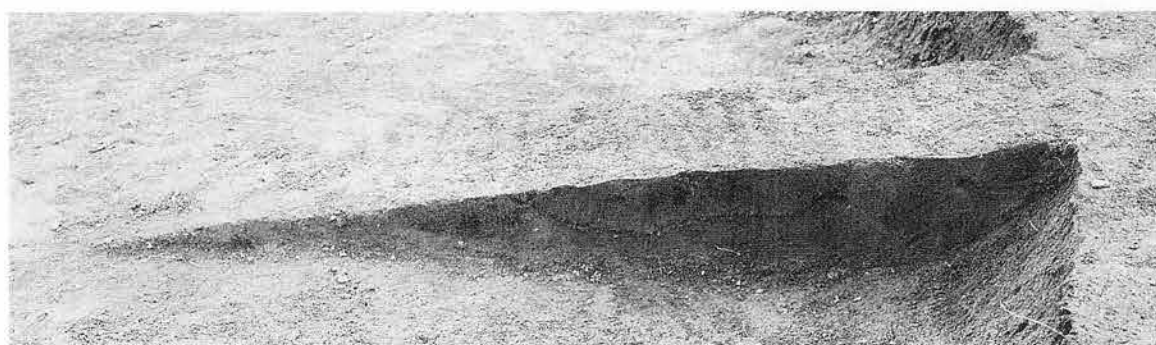


断面（南から）

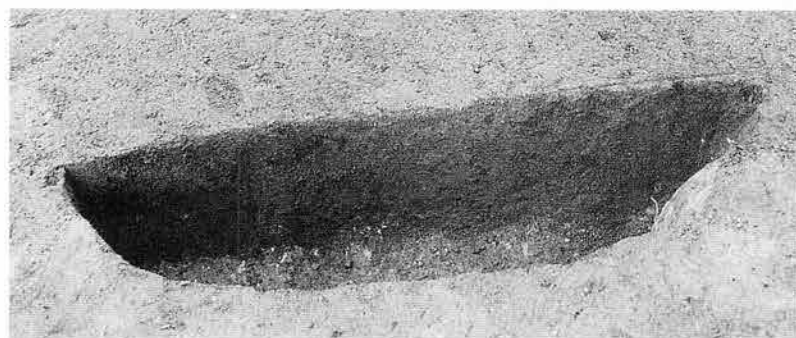
写真図版8 II C4d住居跡



平面（西から）



断面（南から）

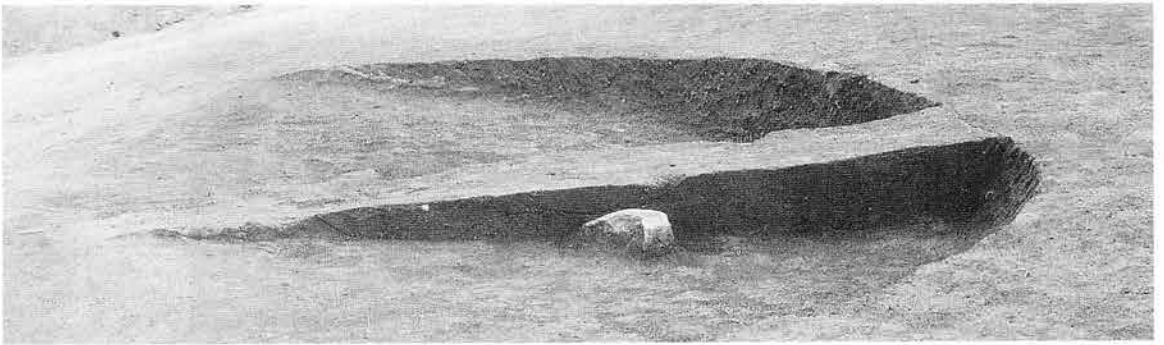


住居内土坑断面（南から）

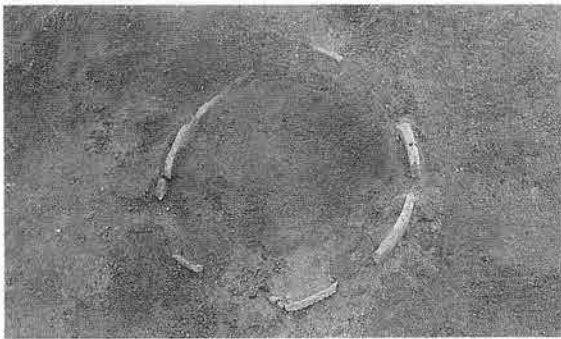
写真図版9 II C6g住居跡



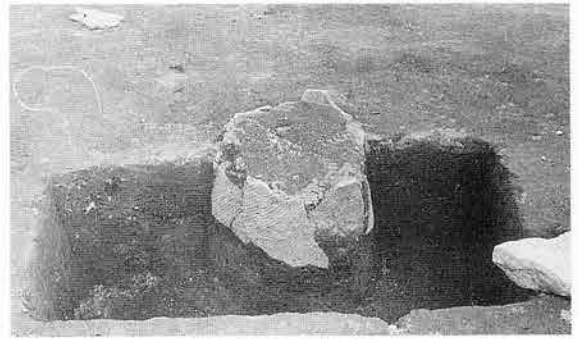
平面（西から）



断面（南から）

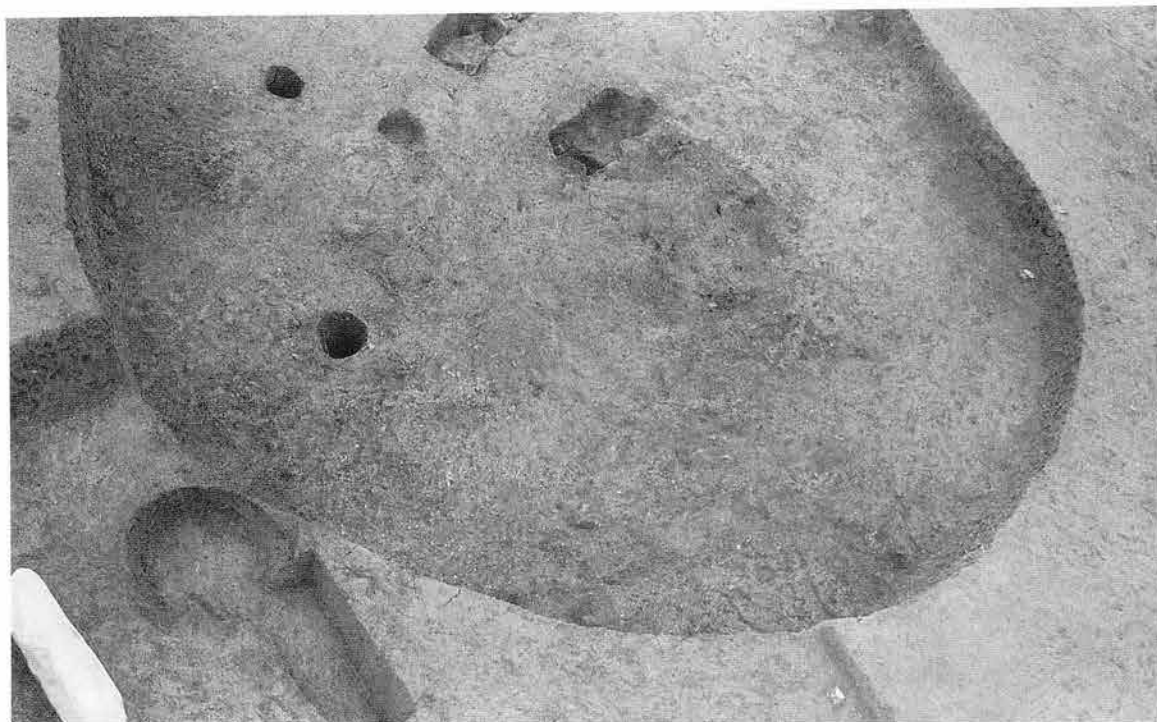


炉跡平面（西から）

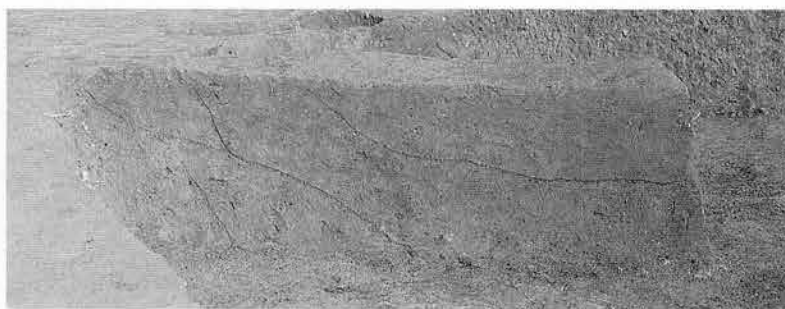


炉跡断面（西から）

写真図版10 II C7c住居跡



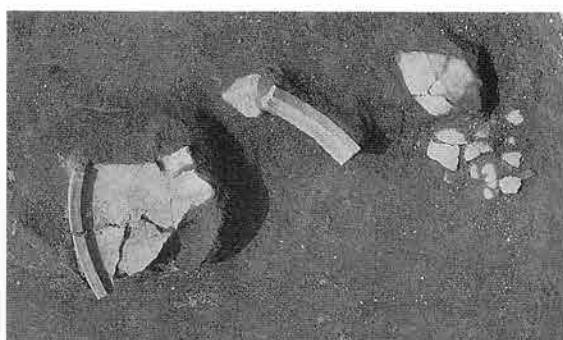
II C7e住居跡平面（北東から）



II C7e住居跡断面（西から）



II C7f住居跡埋設土器

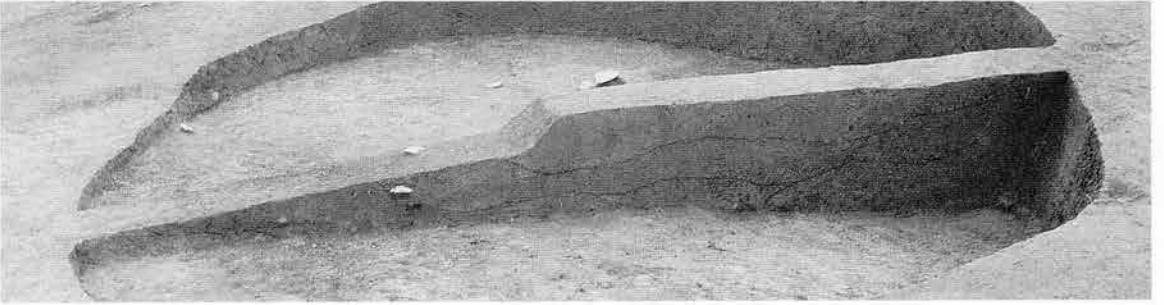


II C7f住居跡土器出土状況

写真図版11 II C7e住居跡・II C7f住居跡



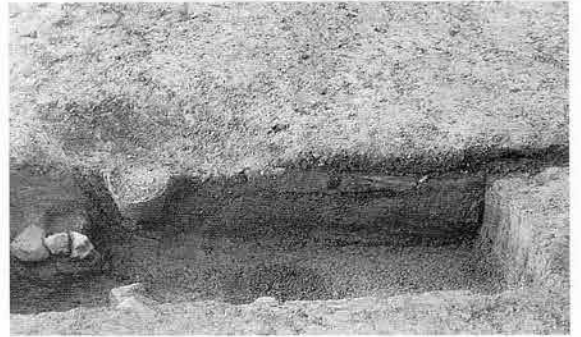
平面（西から）



断面（南から）

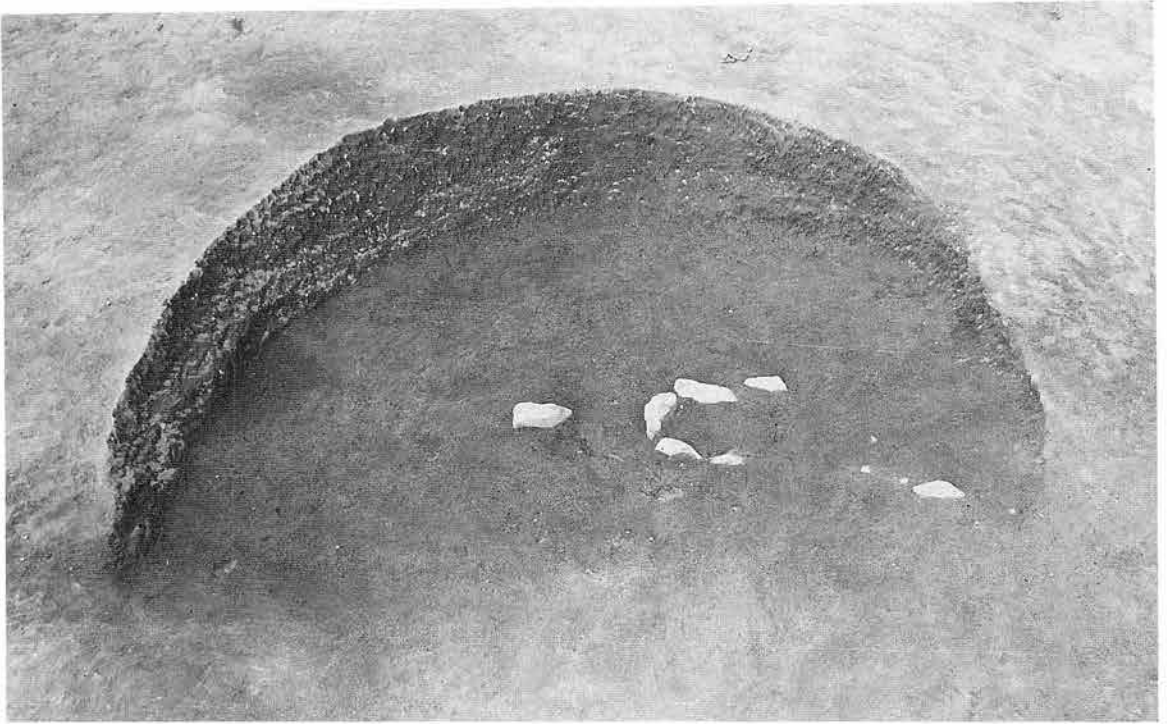


炉跡平面（東から）

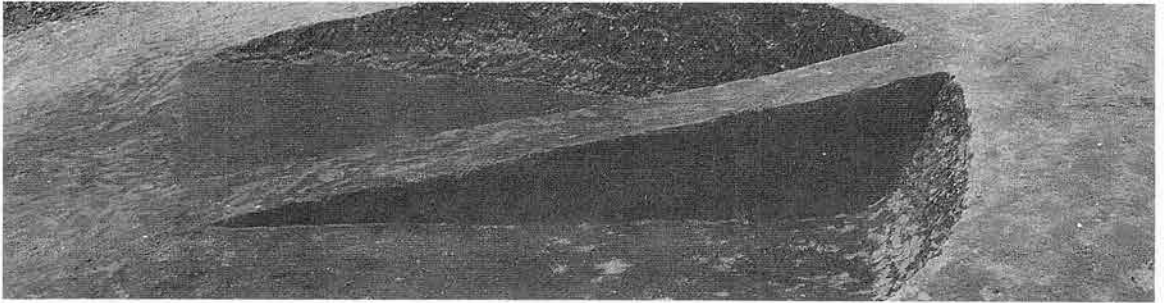


土器埋設状況（南から）

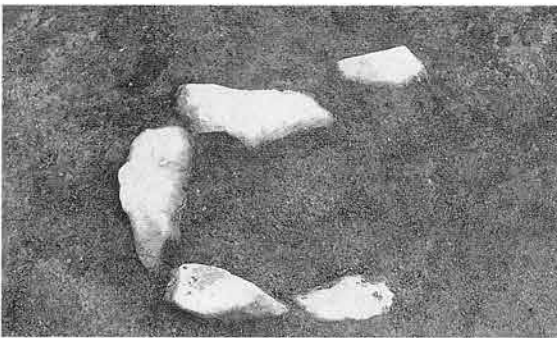
写真図版12 II C7f住居跡



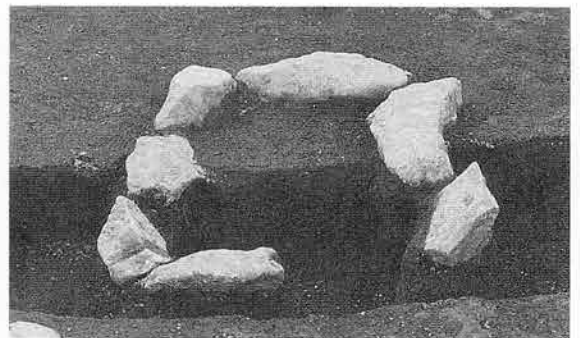
平面（西から）



断面（南から）



炉跡平面（西から）

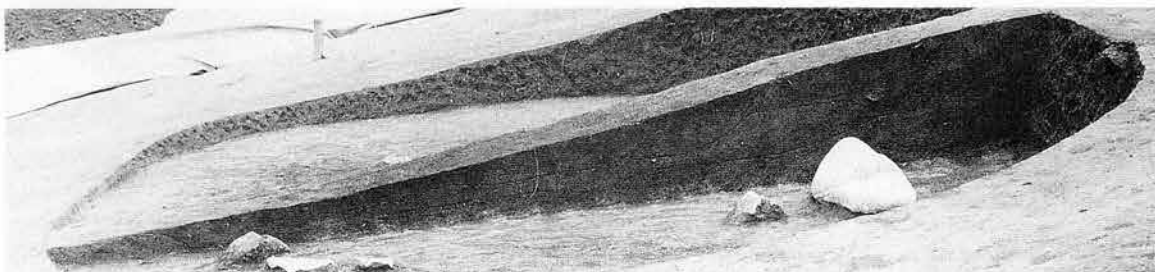


炉跡断面（南から）

写真図版13 II C8a住居跡



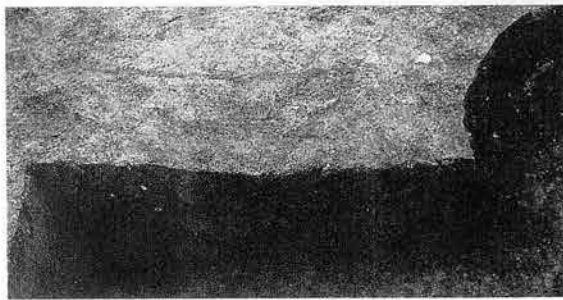
平面（西から）



断面（南から）



住居内土坑断面（西から）



炉跡断面（西から）

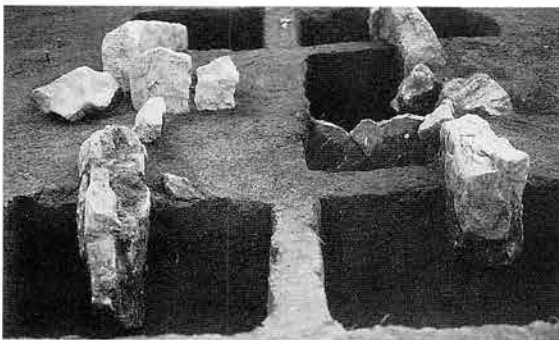
写真図版14 II C8d住居跡



平面（西から）



断面（南から）



炉跡断面（北から）

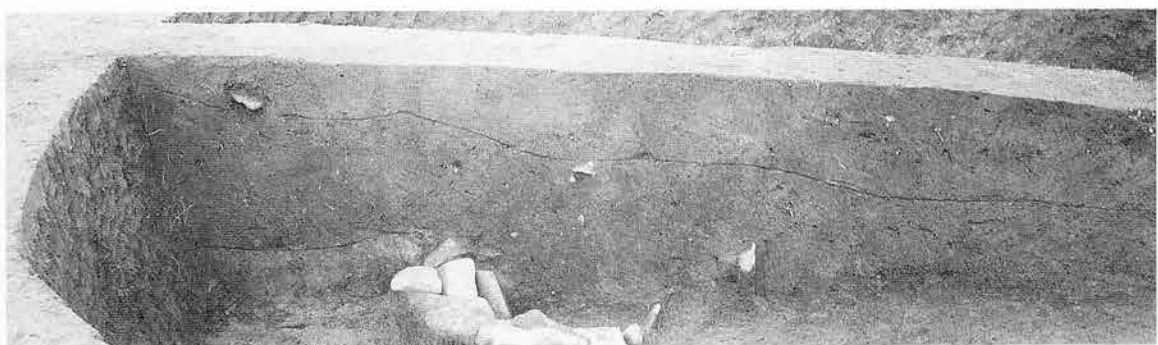


炉跡断面（西から）

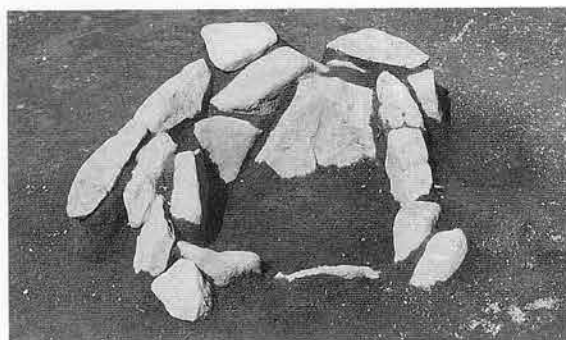
写真図版15 II C9a住居跡



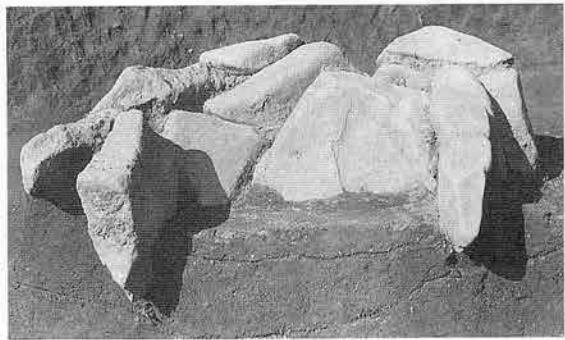
平面（南から）



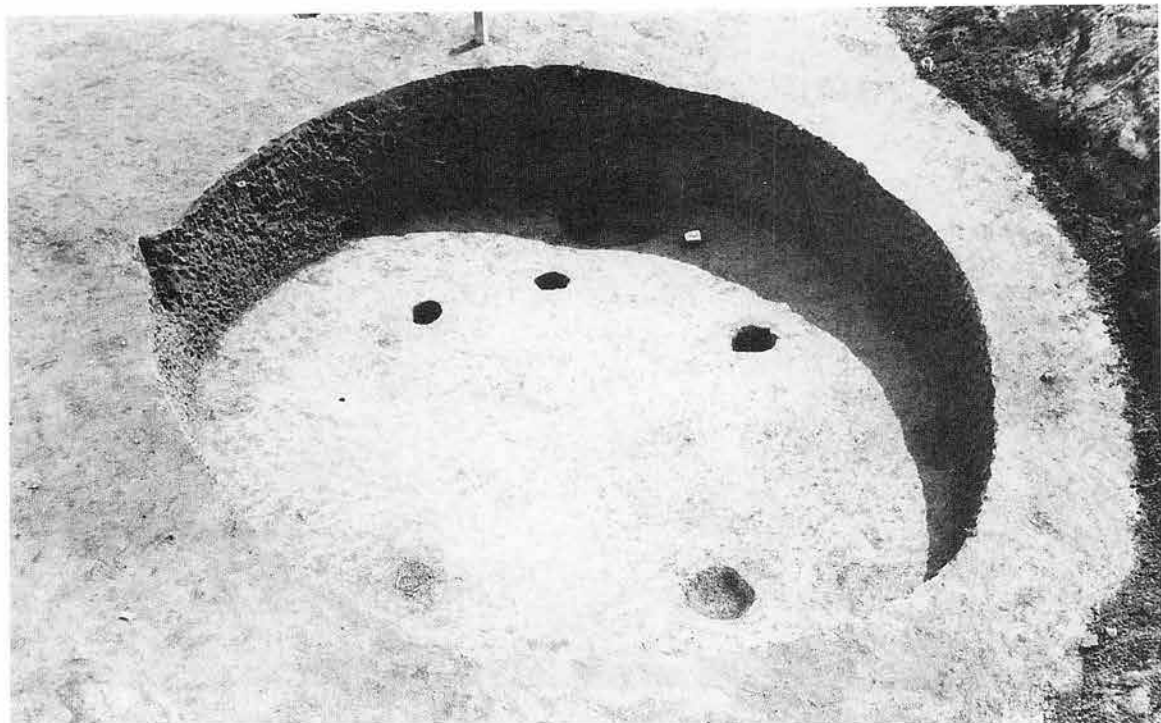
断面（西から）



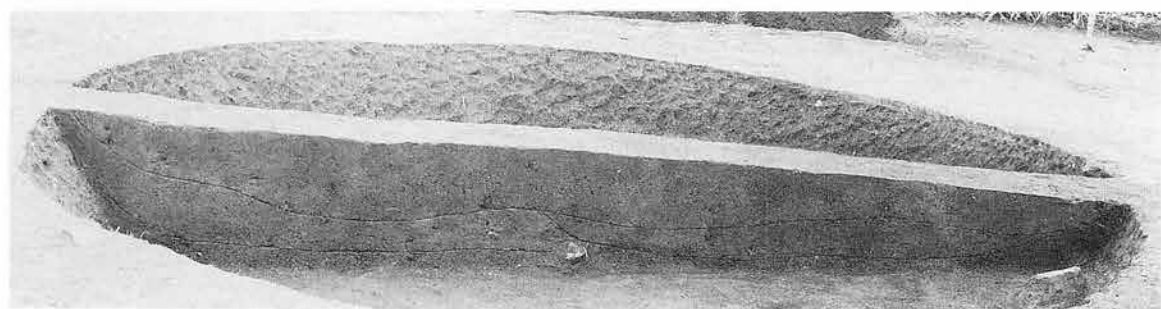
炉跡平面（南から）



炉跡断面（南から）



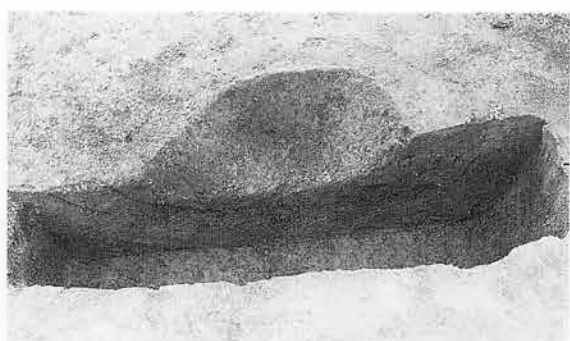
平面（西から）



断面（北から）



埋設土器（東から）

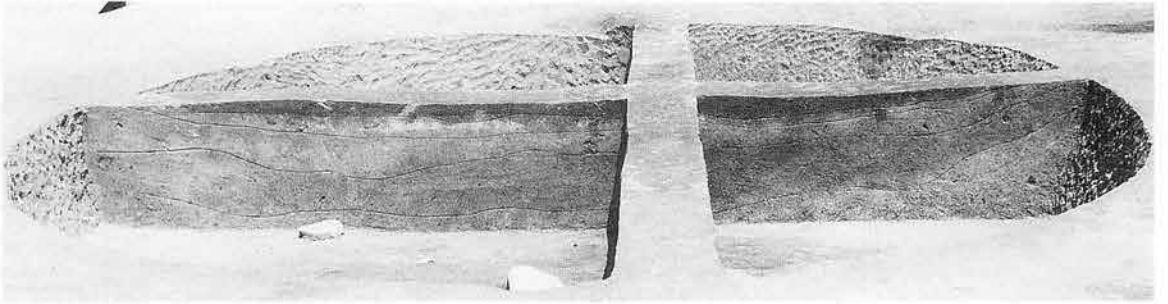


炉跡断面（北から）

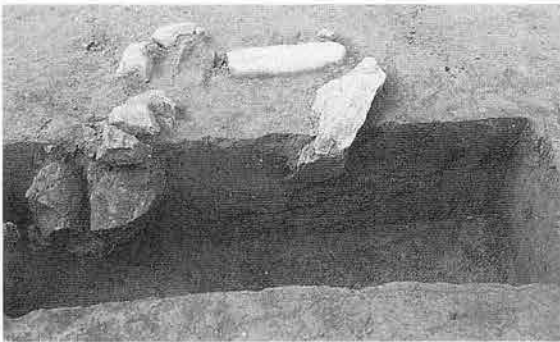
写真図版17 II C9e住居跡



平面（西から）



断面（西から）



炉跡断面（東から）

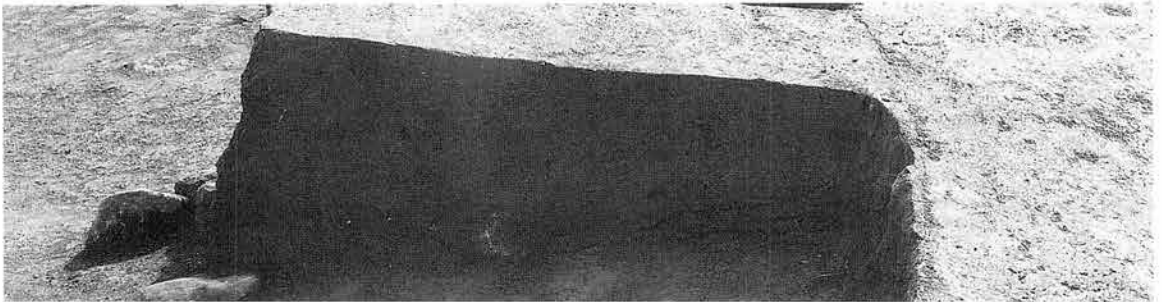


炉跡断面（北から）

写真図版18 III B2i 住居跡



平面（西から）



断面（西から）



炉跡平面（北から）

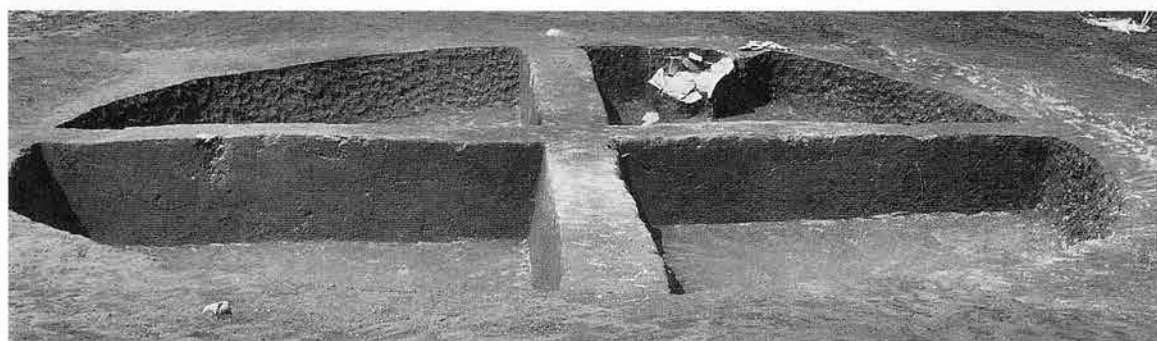


炉跡断面（北から）

写真図版19 III B2j 住居跡



平面（西から）



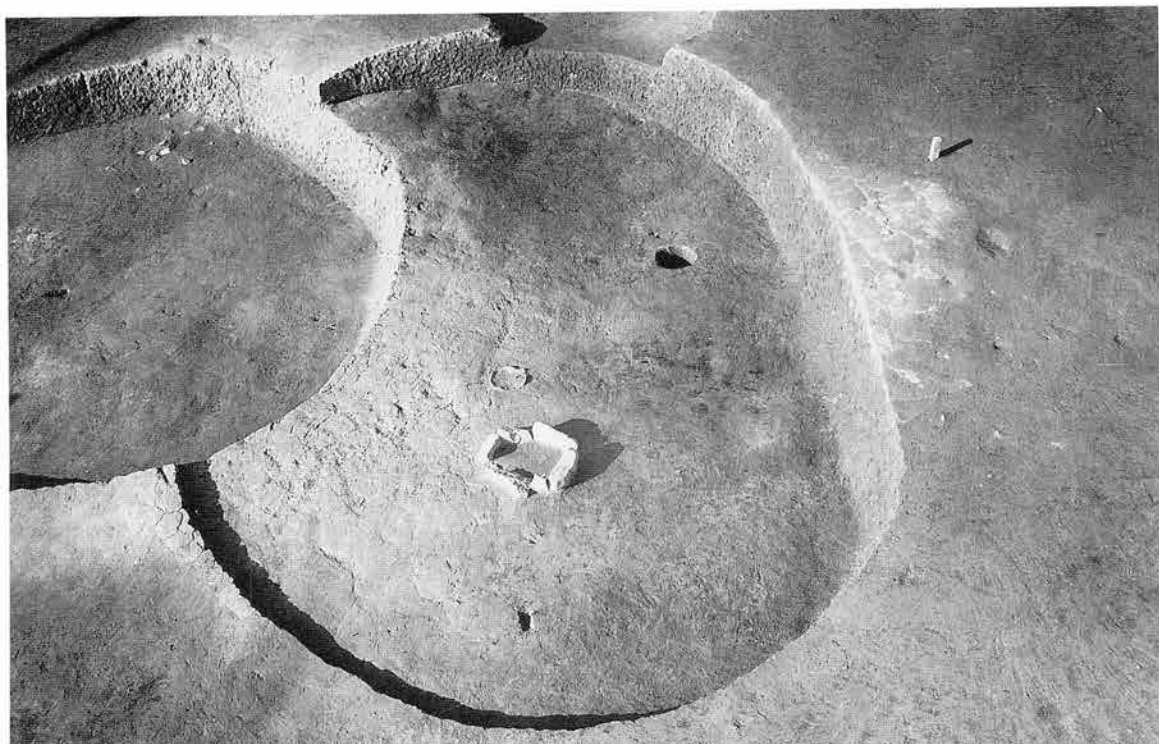
断面（東から）



炉跡平面（東から）



炉跡断面（南から）



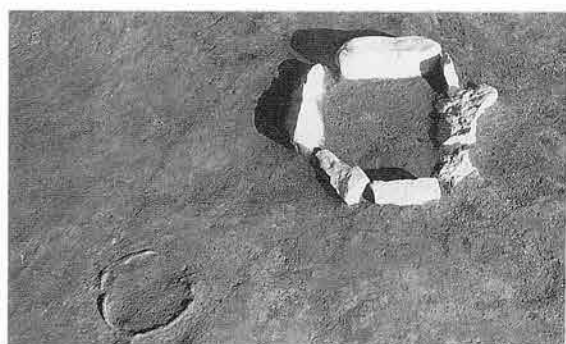
平面（南から）



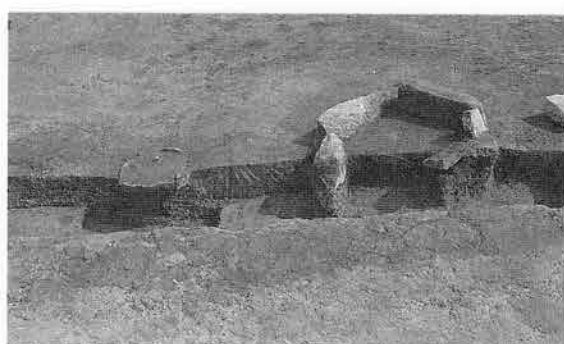
断面（南から）



土器出土状況（北から）



炉跡断面（西から）

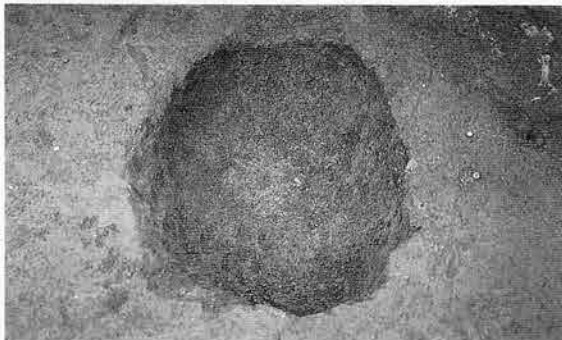


炉跡断面（西から）

写真図版21 III B3g-2住居跡



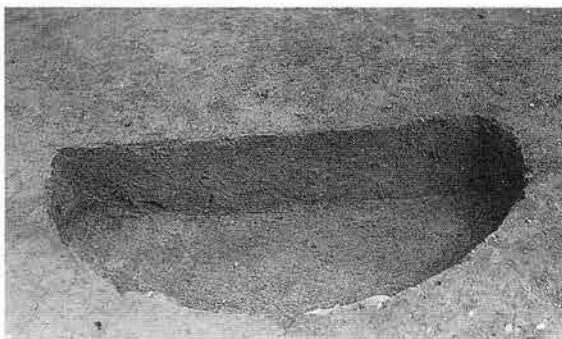
平面（南から）



住居内土坑1平面（東から）



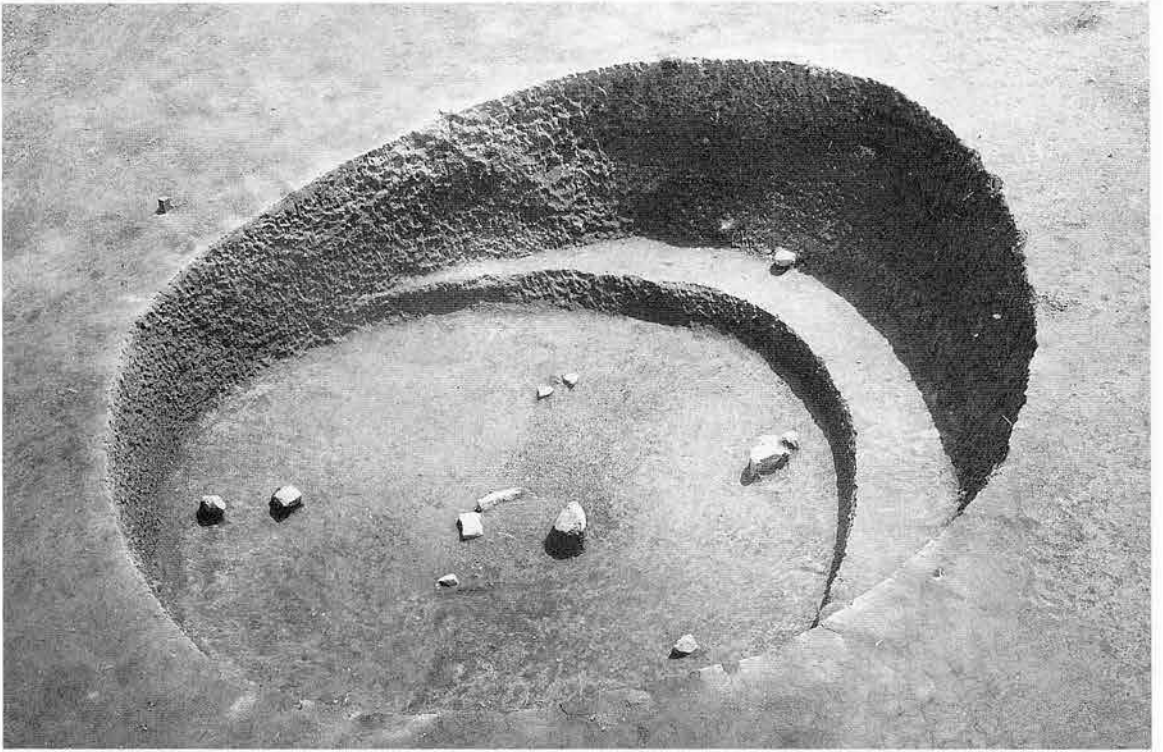
炉跡断面（南から）



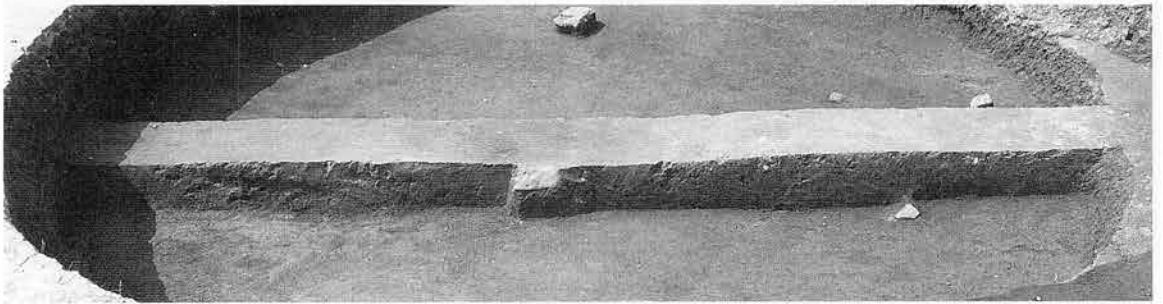
住居内土坑2断面（南から）



住居内土坑1・2平面



平面（南から）



断面（南から）



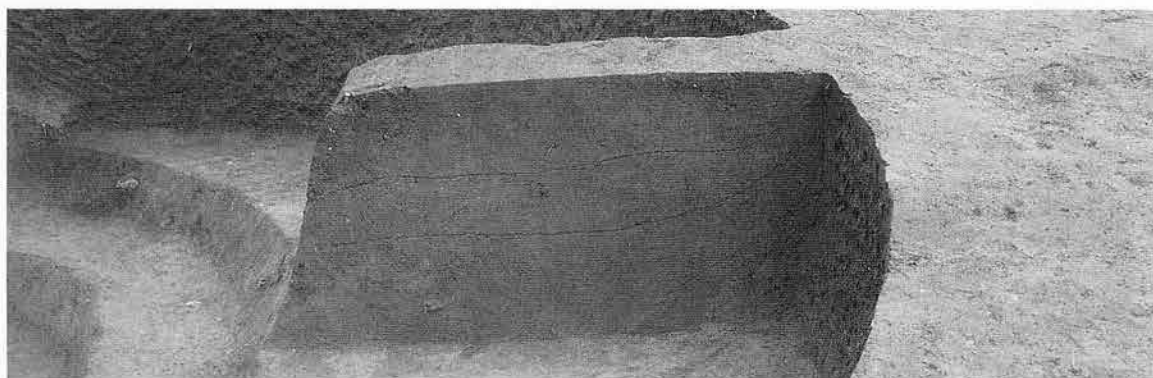
炉跡平面（南西から）



炉跡断面（南東から）



平面（北西から）



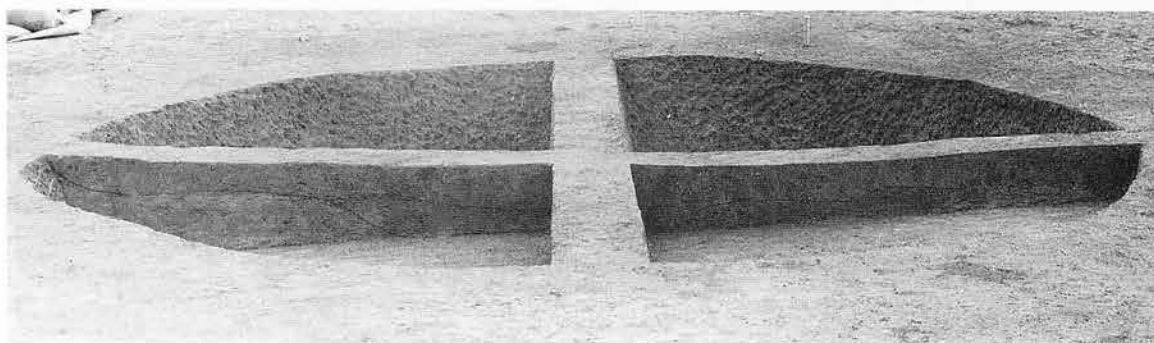
断面（南西から）



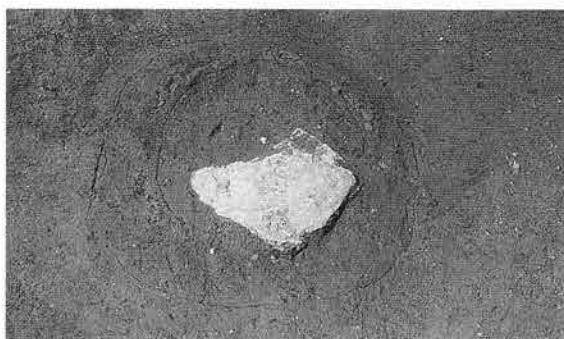
炉跡断面（北から）



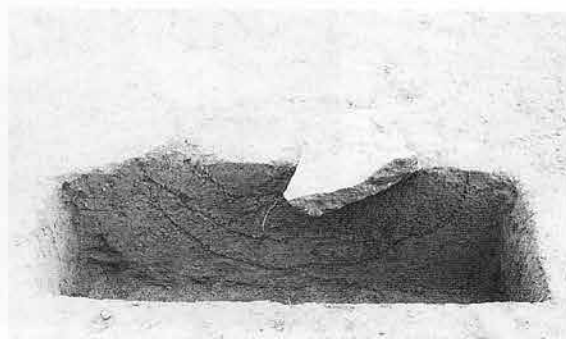
平面（西から）



断面（西から）

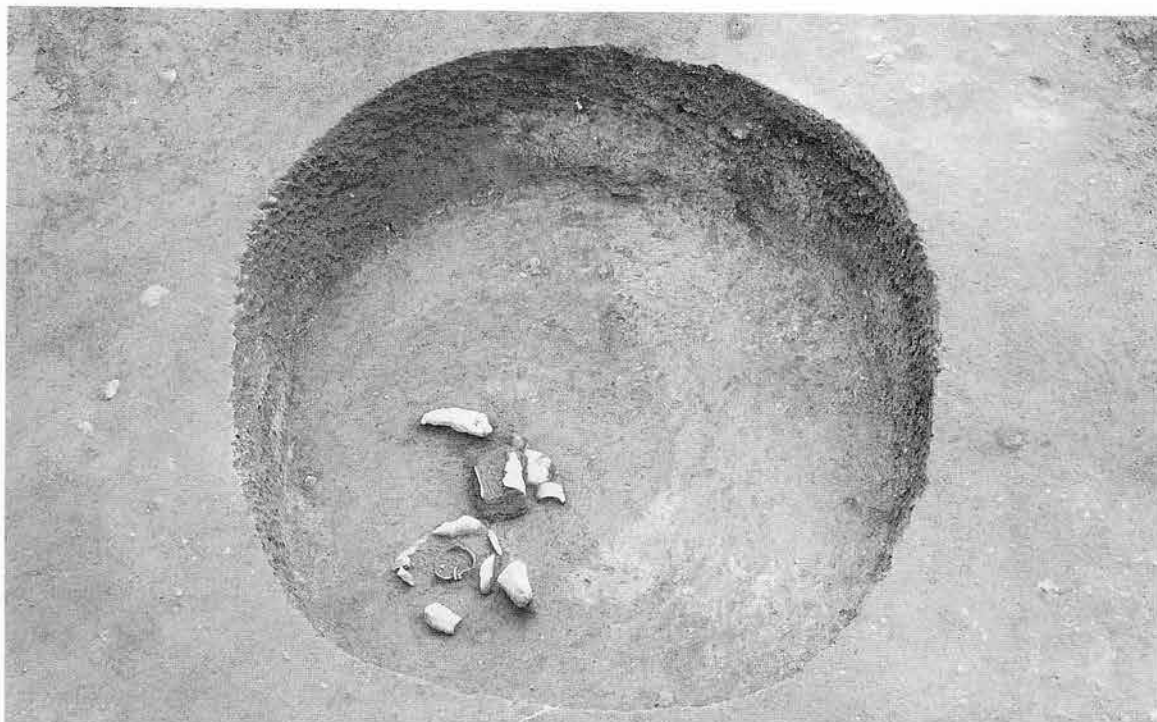


炉跡平面（西から）

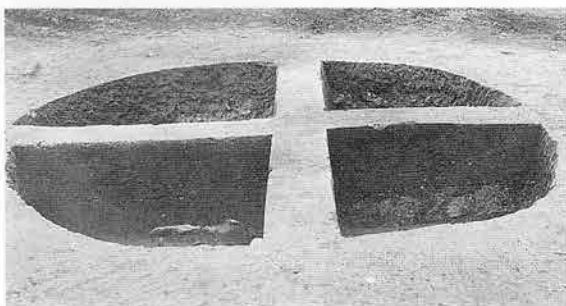


炉跡断面（南から）

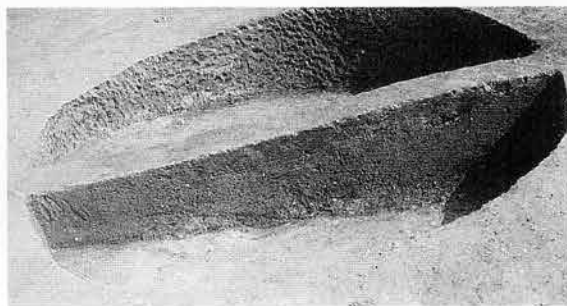
写真図版25 III B6i 住居跡



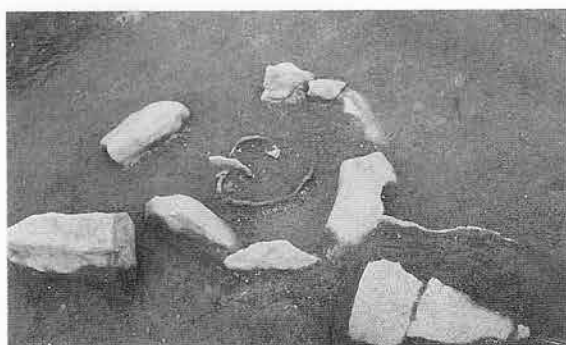
平面（西から）



断面（西から）



断面（南から）



炉跡平面（南から）



炉跡断面（南から）

写真図版26 III B8f住居跡



平面（西から）



断面（西から）



断面（南から）

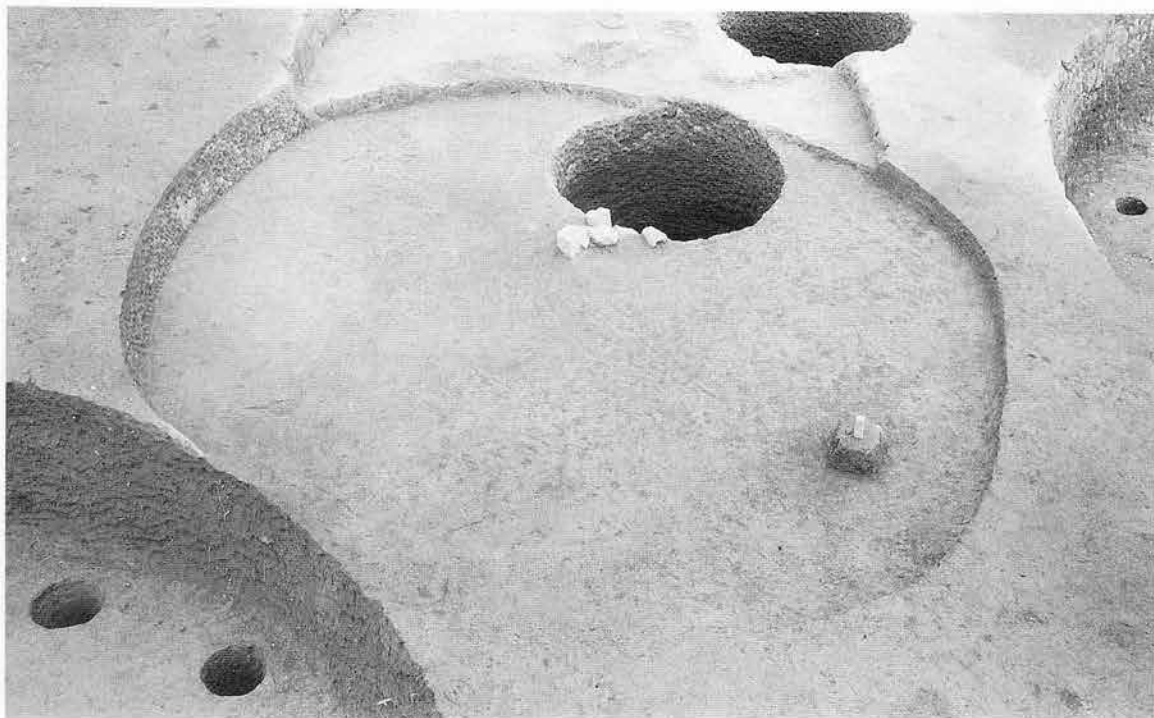


炉跡平面（西から）



炉跡断面（西から）

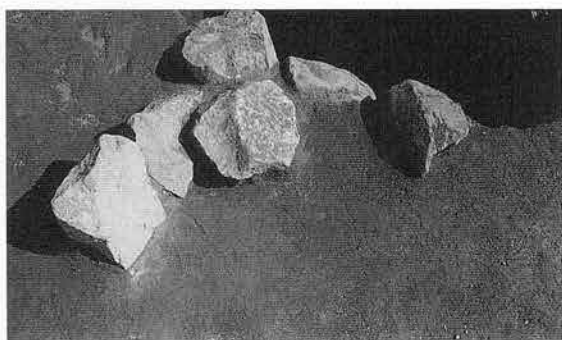
写真図版27 III B9h住居跡



平面（西から）



断面（南から）



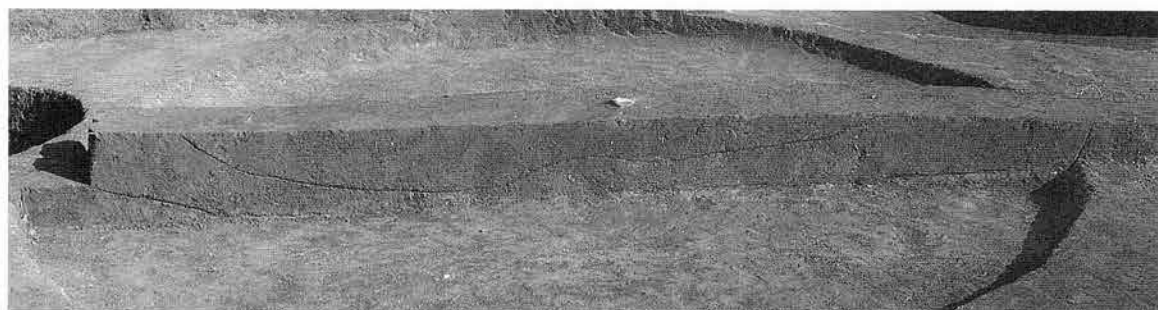
炉跡平面（西から）



炉跡断面（西から）



平面（北から）



断面（西から）



炉跡断面（南から）

写真図版29 III C I d住居跡



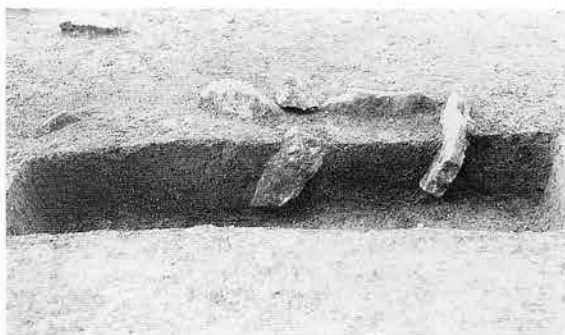
平面（西から）



断面（南から）



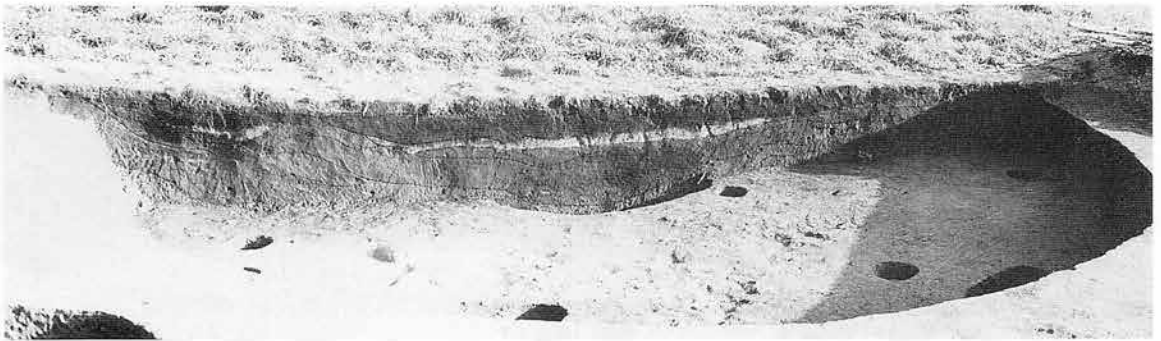
炉跡平面（西から）



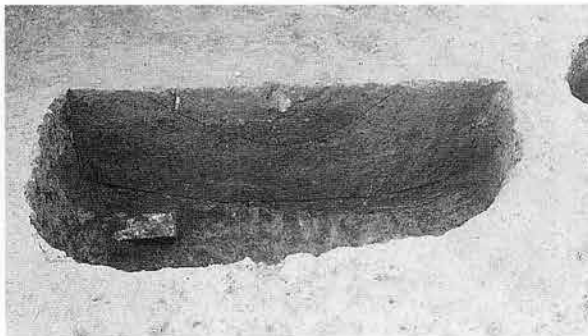
炉跡断面（南から）



平面（東から）



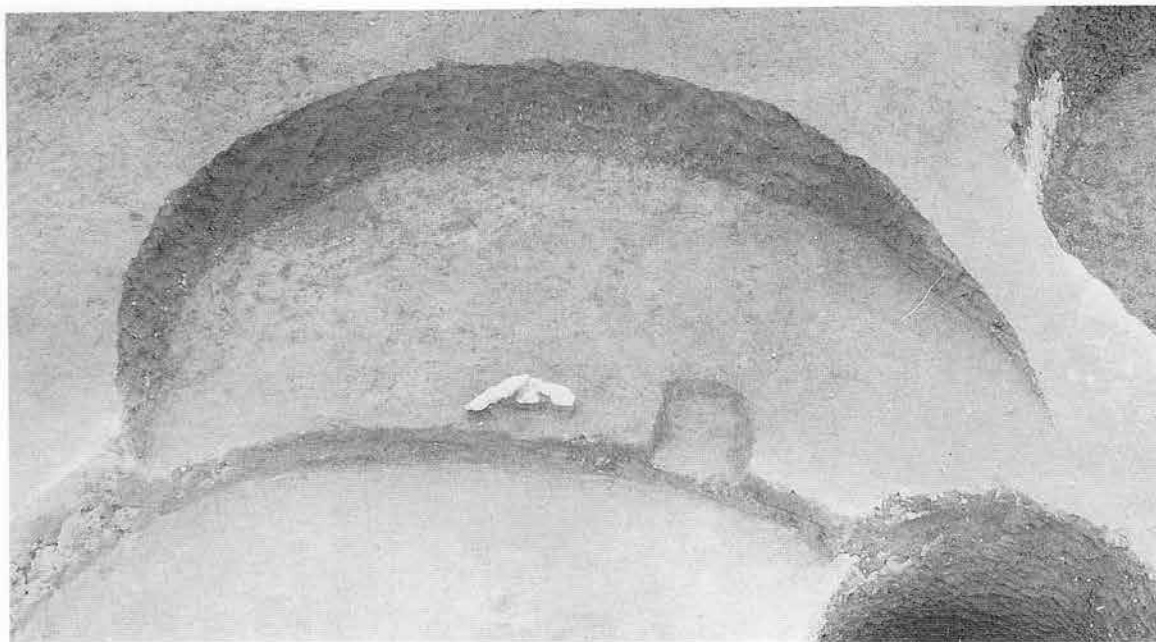
断面（北から）



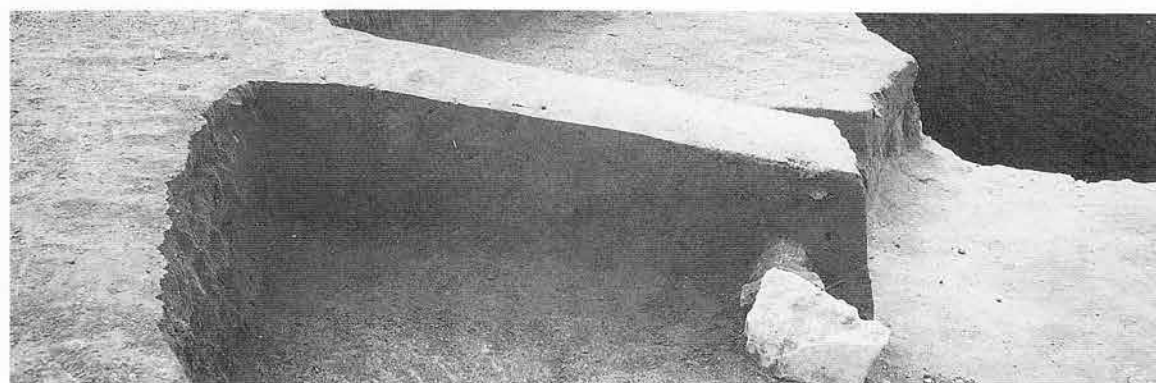
住居内土坑2断面（東から）



住居内土坑2平面（南から）



平面（西から）



断面（北から）



炉跡断面（西から）



写真図版32 III C3b住居跡



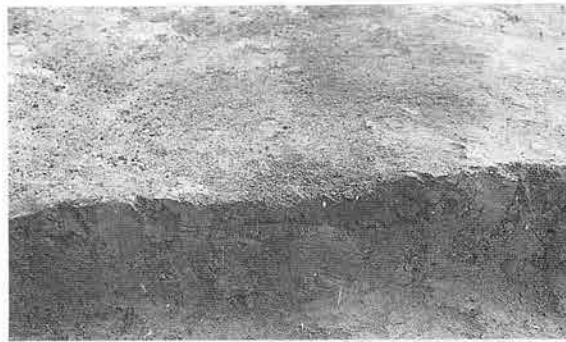
平面（西から）



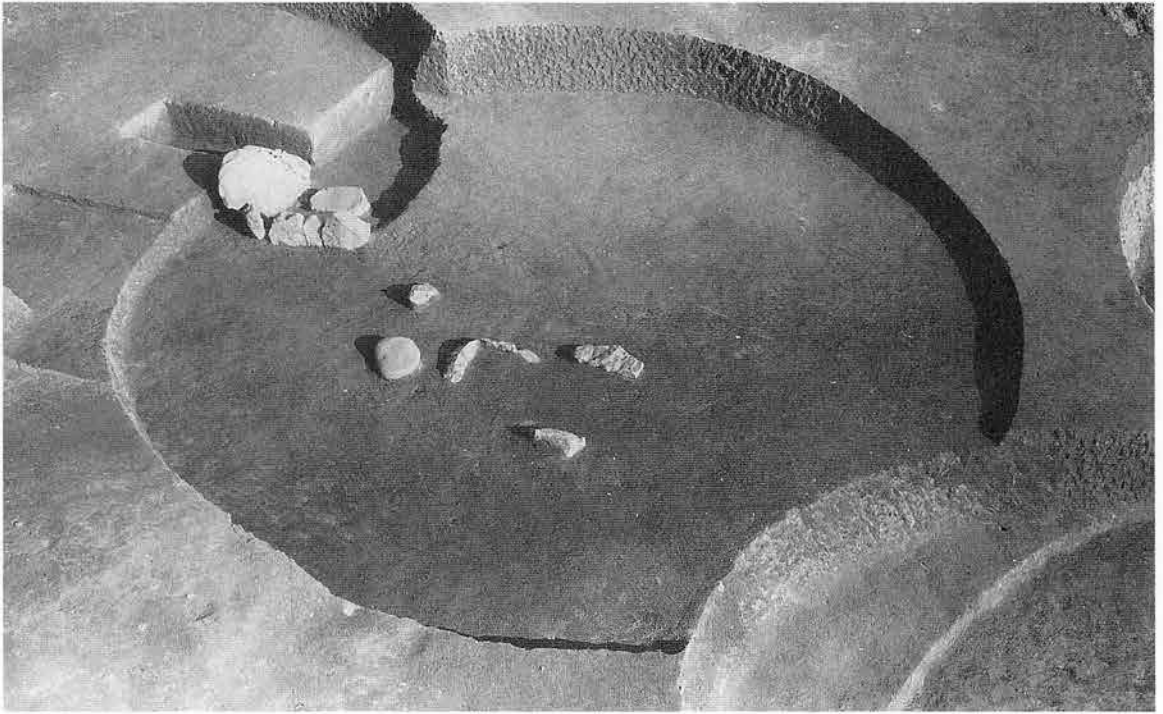
断面（南から）



炉跡平面（西から）



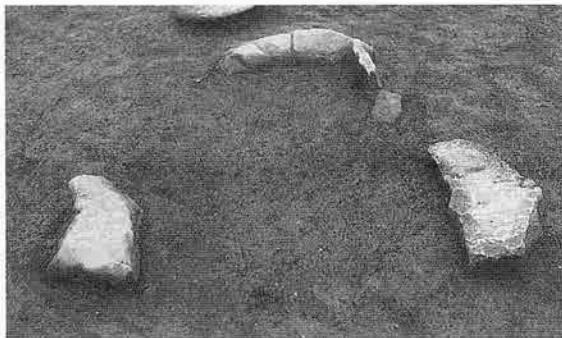
炉跡断面（西から）



平面（北から）



断面（北から）



炉跡平面（西から）



炉跡断面（西から）



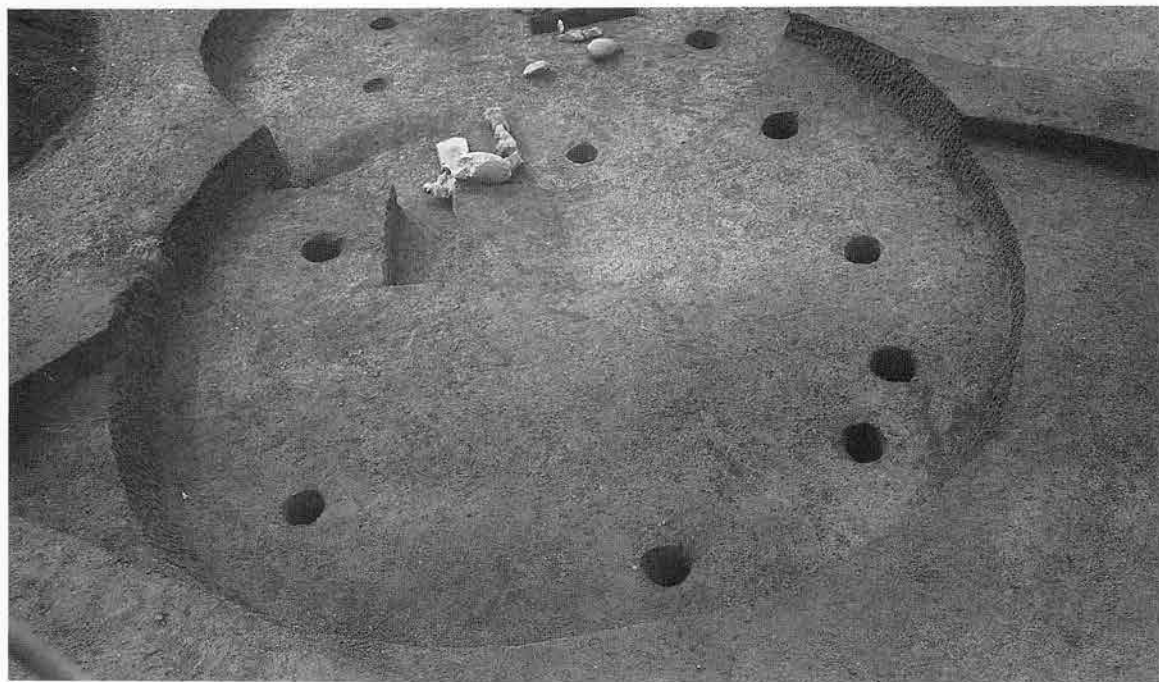
平面（南から）



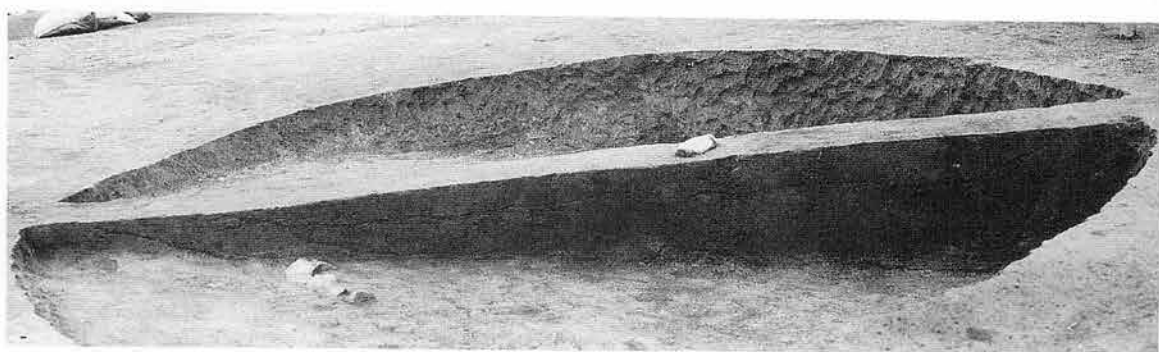
断面（南から）



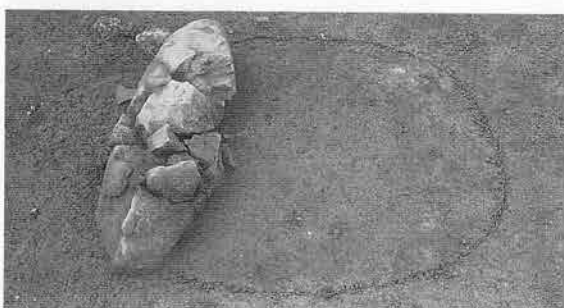
写真図版35 III C4d住居跡



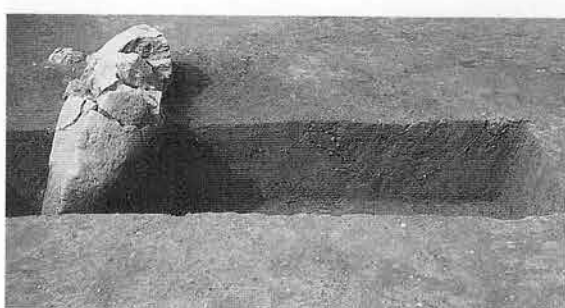
平面（東から）



断面（南から）

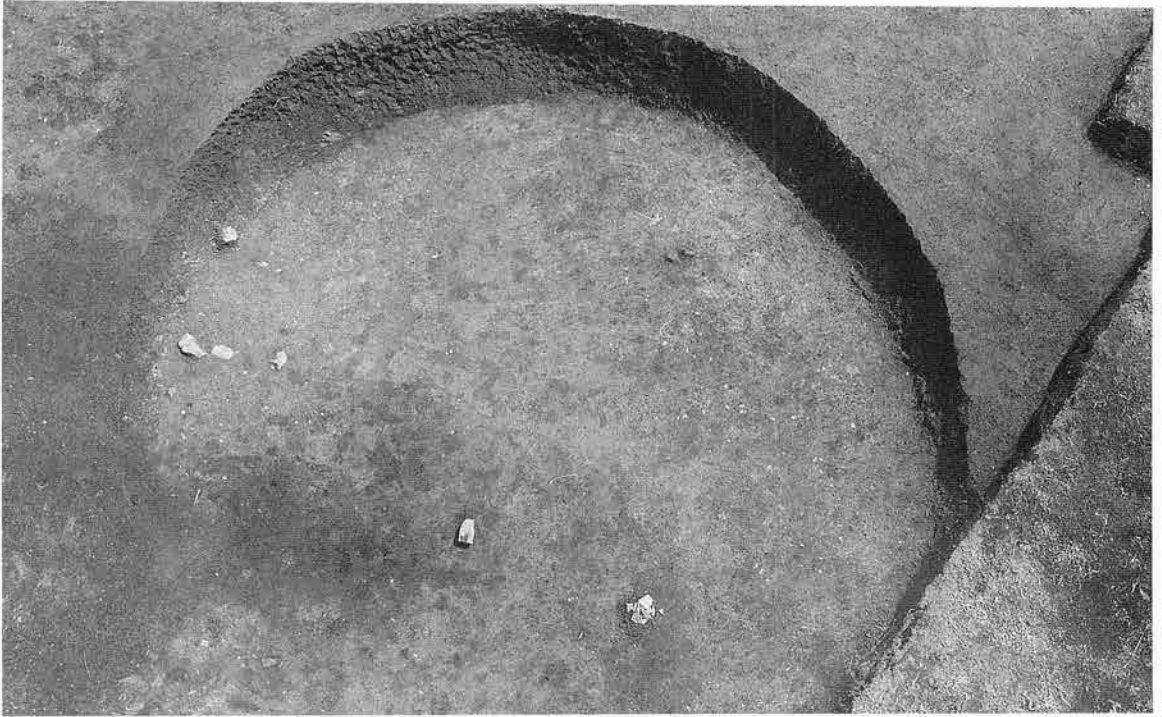


炉跡平面（南から）

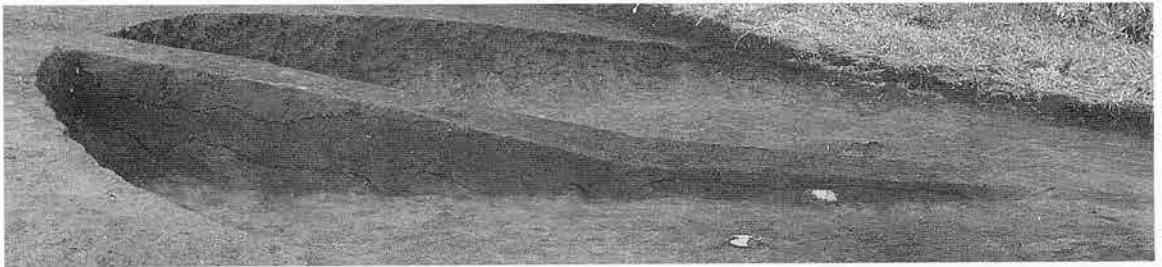


炉跡断面（南から）

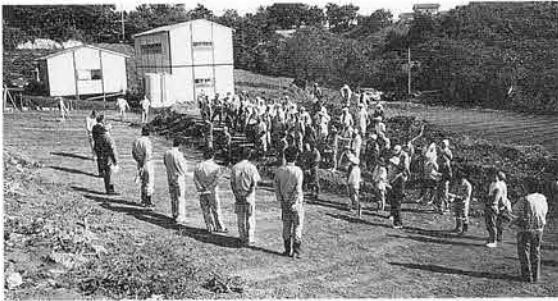
写真図版36 III C5a住居跡



平面（西から）



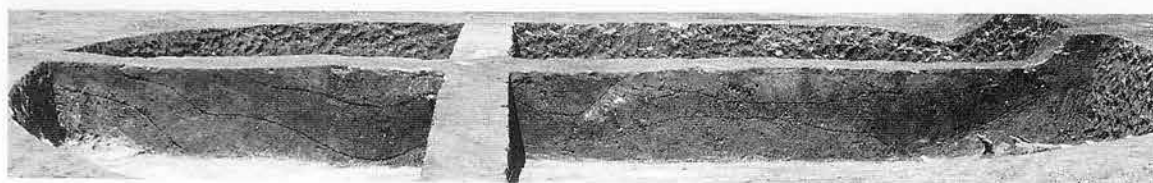
断面（北から）



現地説明会



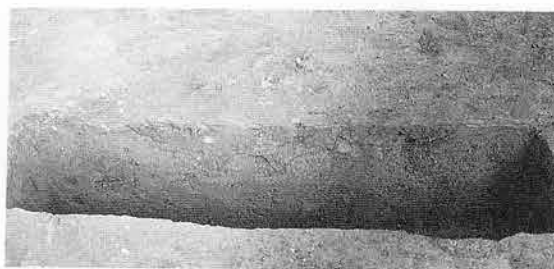
平面（南から）



断面（南から）



炉跡平面（南から）



炉跡断面（西から）



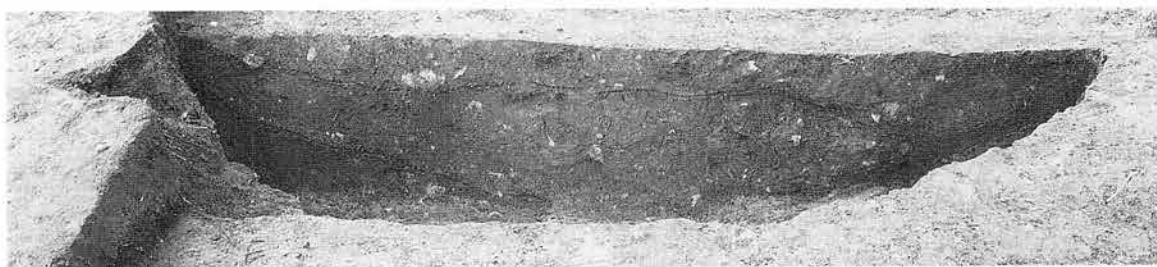
土器出土状況（西から）



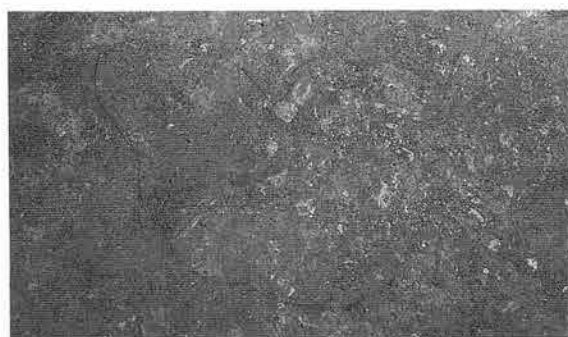
石皿出土状況（東から）



平面（東から）



断面（東から）

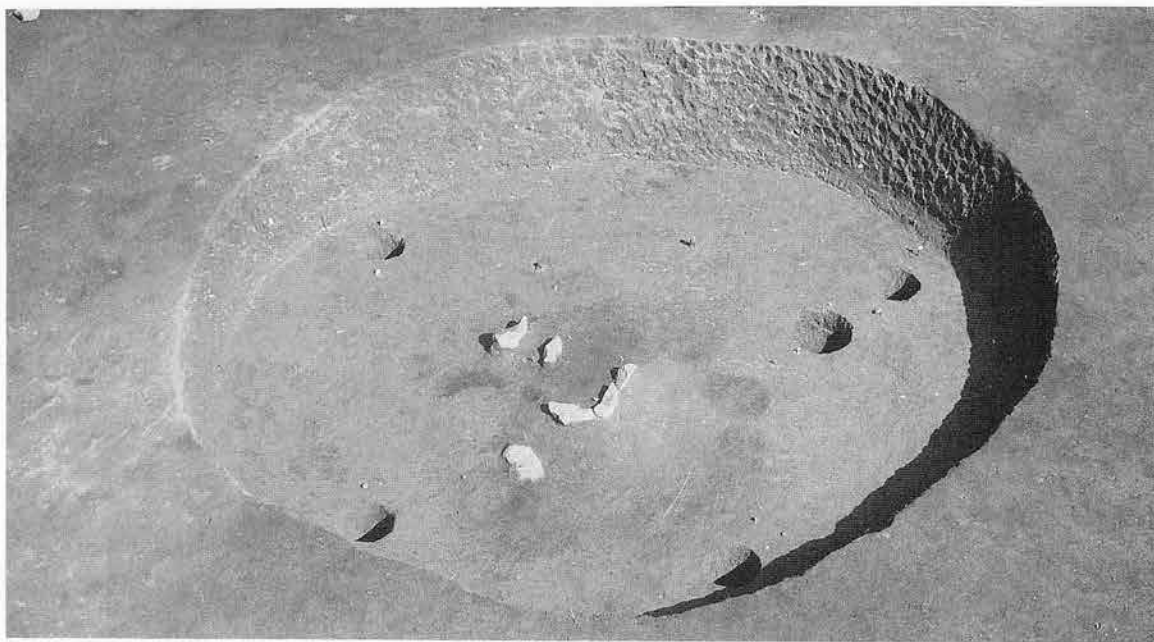


炉跡平面（南から）



炉跡断面（東から）

写真図版39 VB2b住居跡



平面（南から）



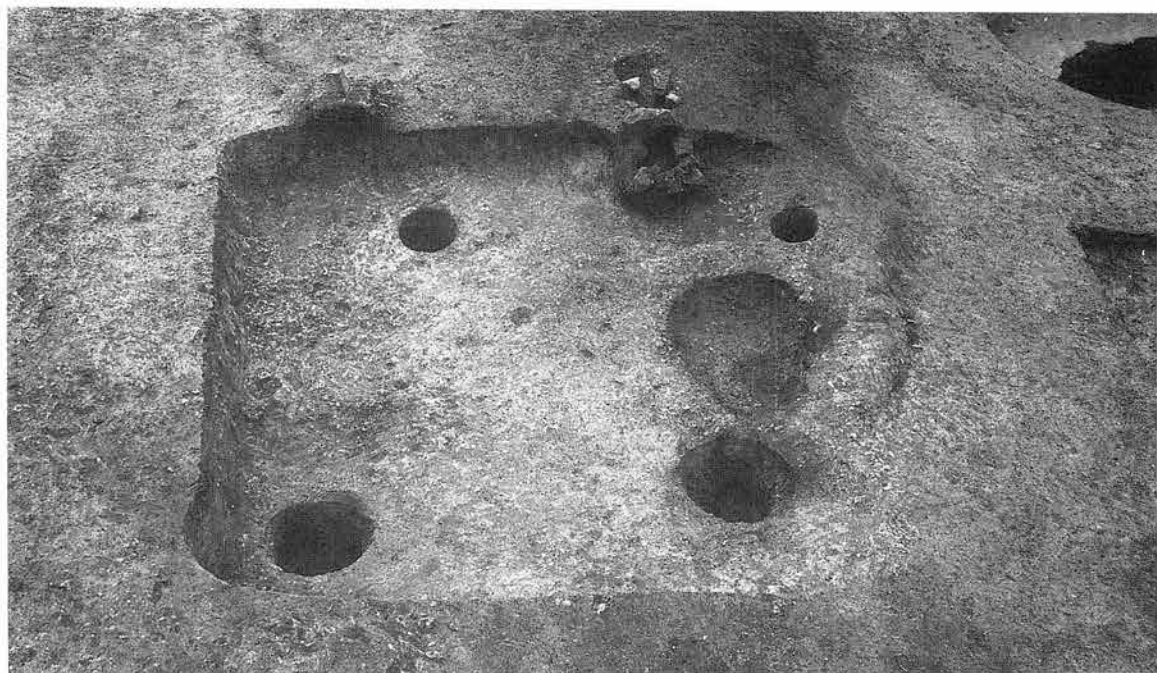
断面（東から）



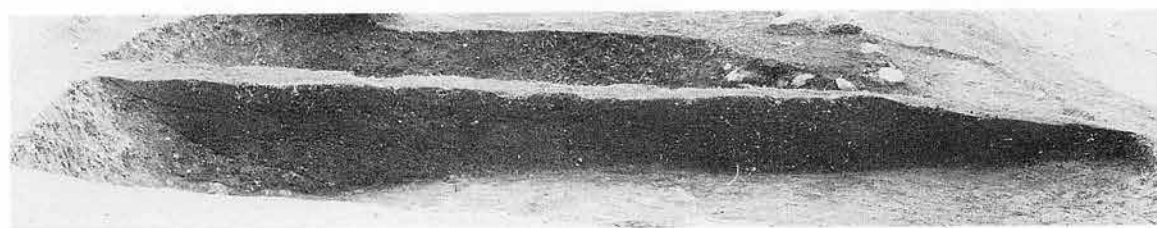
炉跡平面（西から）



土器出土状況（東から）



平面（北から）



断面（北から）



カマド煙道部断面（西から）



カマド断面（北から）



住居内土坑断面

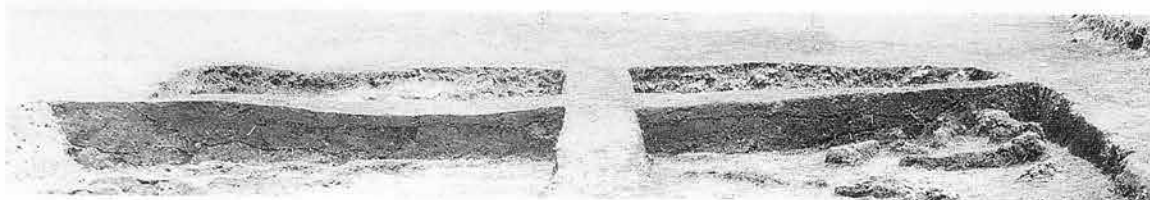


カマド平面（北から）

写真図版41 III B9d住居跡



平面（西から）



断面（西から）



カマド断面（西から）



カマド断面（南から）



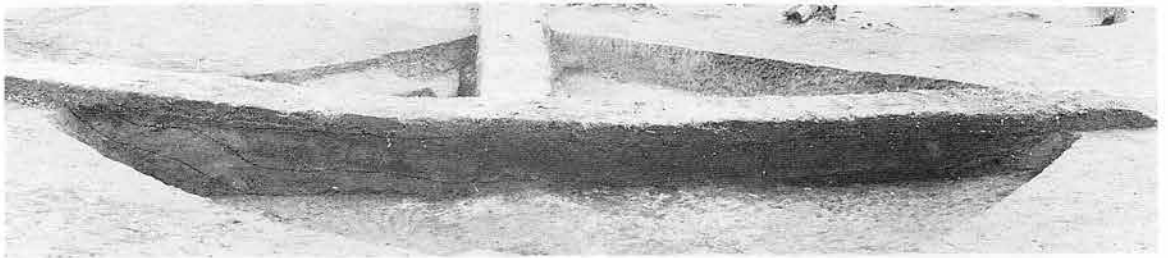
住居内土坑断面（南から）



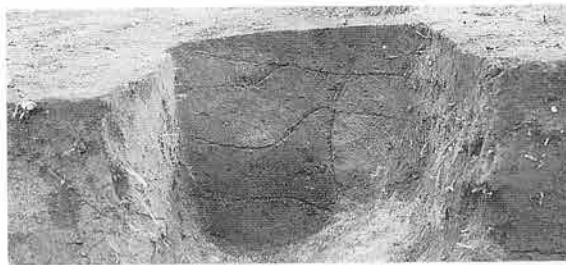
住居内土坑平面（南から）



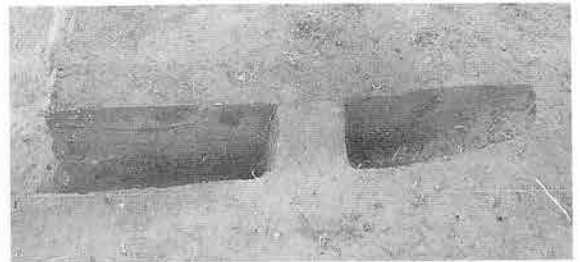
平面 (西から)



断面 (南から)



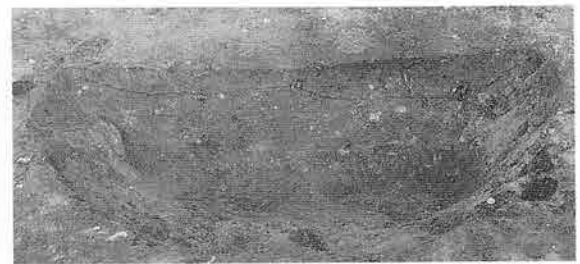
煙道部断面 (西から)



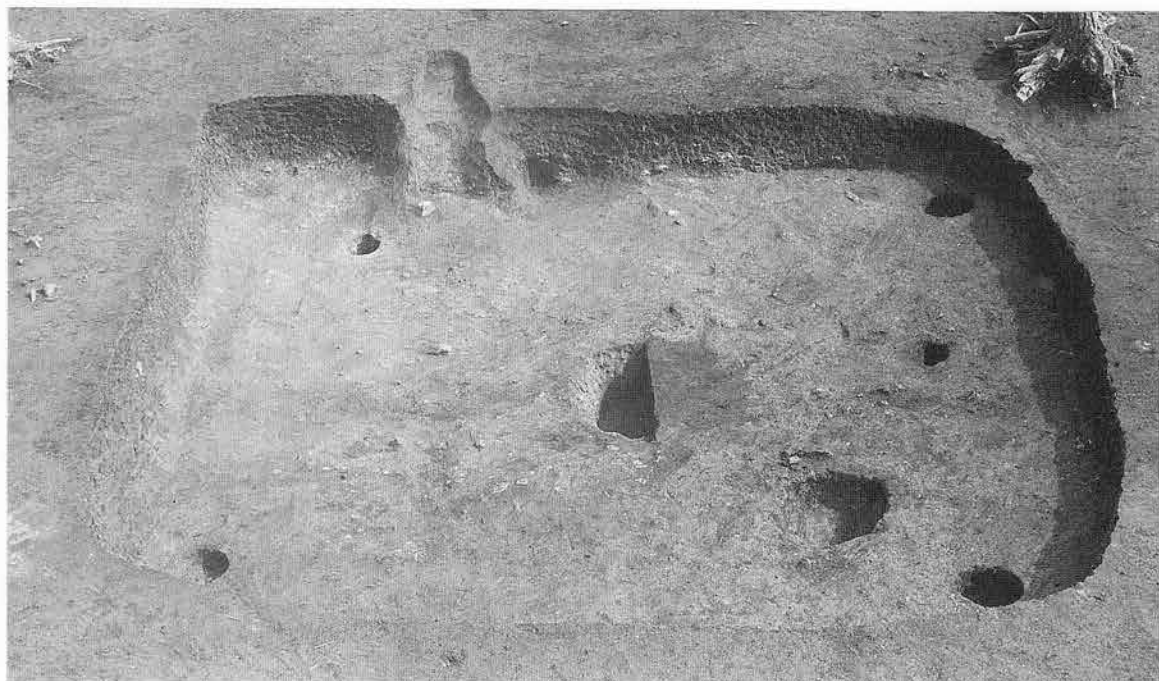
煙道部断面 (南から)



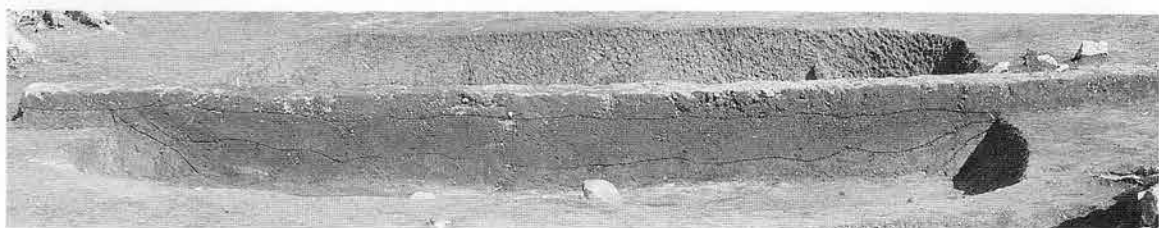
カマド燃焼部断面 (西から)



住居内土坑2断面 (南から)



平面 (西から)



断面 (南から)



カマド燃焼部断面 (南から)



カマド断面 (西から)



カマド断面 (南から)

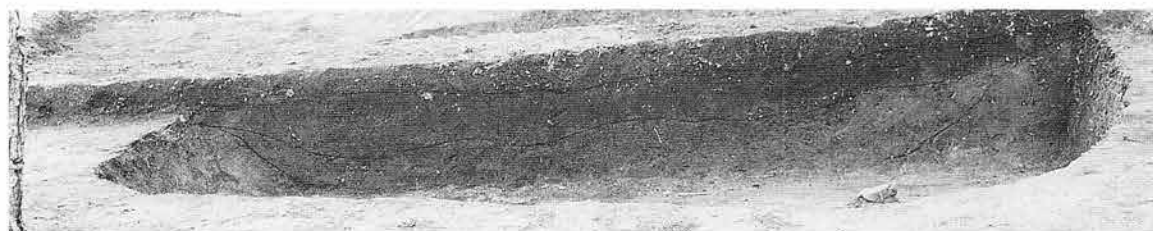


カマド平面 (西から)

写真図版44 IVB3d住居跡



平面（南から）



断面（南から）



煙道部断面（西から）



カマド断面（西から）



カマド断面（南から）



カマド平面（南から）

写真図版45 IVB6d住居跡



平面（西から）



断面（西から）



カマド平面（西から）

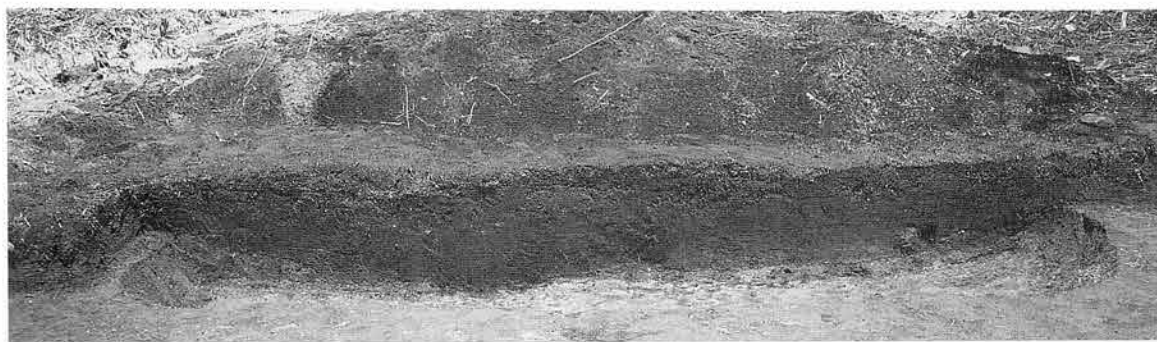


カマド断面（南から）

写真図版46 IVB8f住居跡



平面（南から）



断面（南から）



現地説明会

写真図版47 V A I f住居跡



平面（西から）



断面（南から）



カマド煙道部断面（南から）



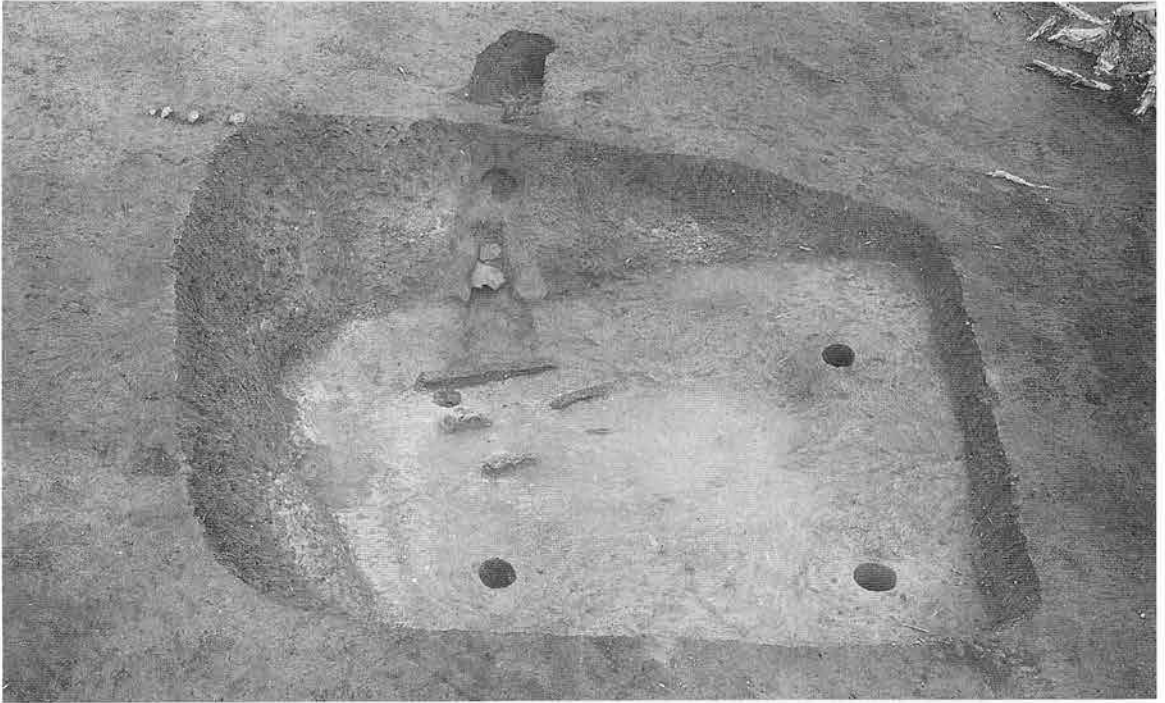
カマド断面（南から）



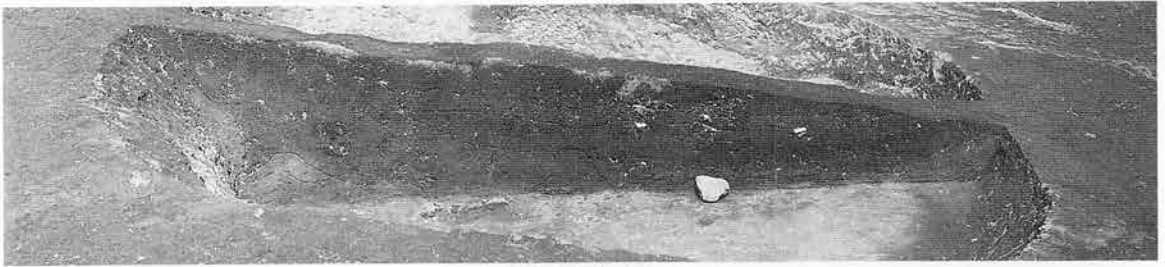
カマド断面（西から）



カマド平面（西から）



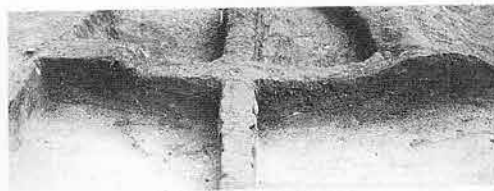
平面（西から）



断面（西から）



カマド煙道部（西から）



燃焼部断面（西から）

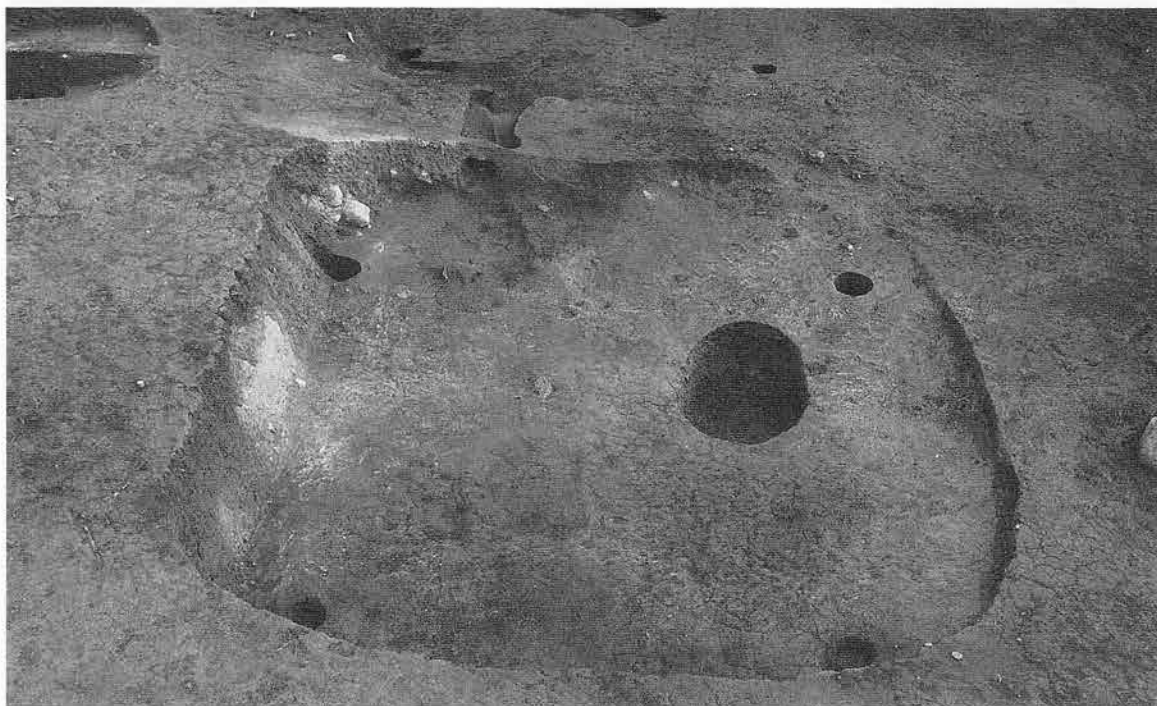


燃焼部断面（南から）



カマド平面（西から）

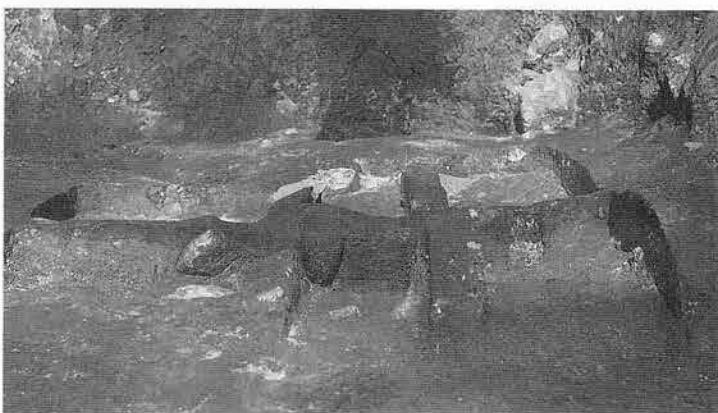
写真図版49 VAOj住居跡



平面（西から）



断面（西から）



燃焼部断面（西から）

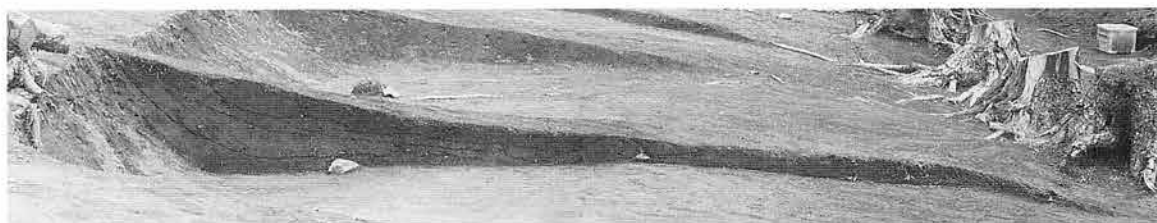


カマド平面（西から）

写真図版50 VB2c住居跡



平面（東から）



断面（西から）



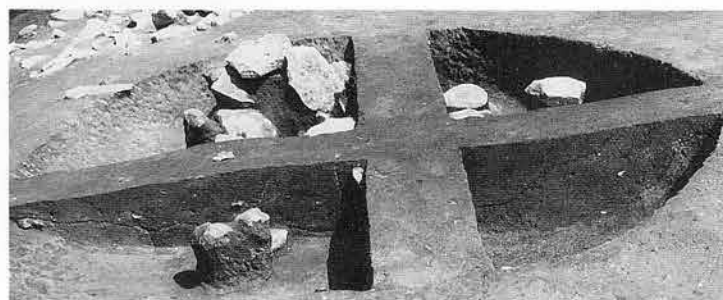
カマド断面（南から）



カマド平面（東から）



平面 (西から)



断面 (南から)



完掘1次 (西から)



断面 (東から)



土器出土状況 (北から)

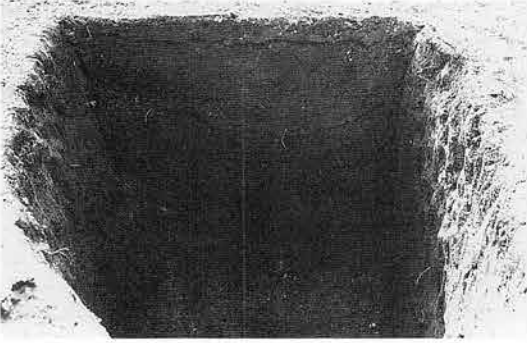
写真図版52 土坑(1) (IC8i 土坑)



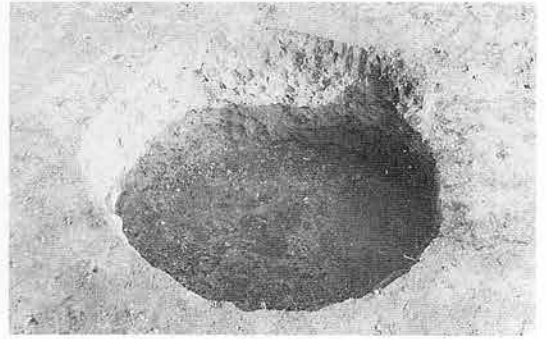
I D7d土坑断面（北から）



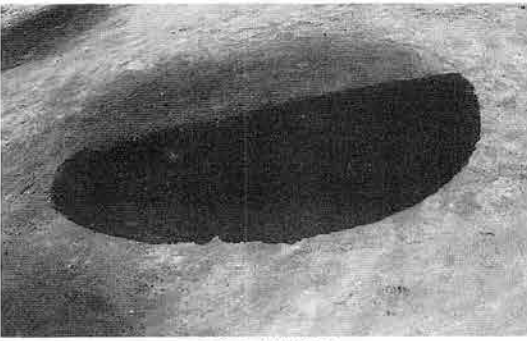
I D7d土坑平面（西から）



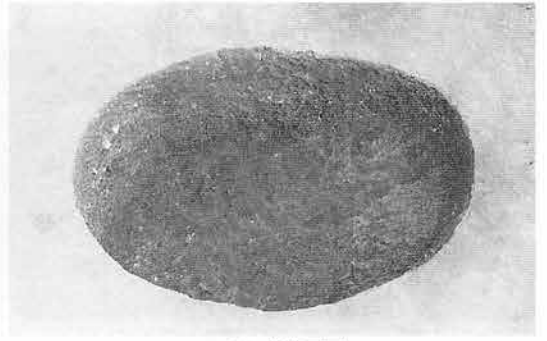
I Da土坑断面（北から）



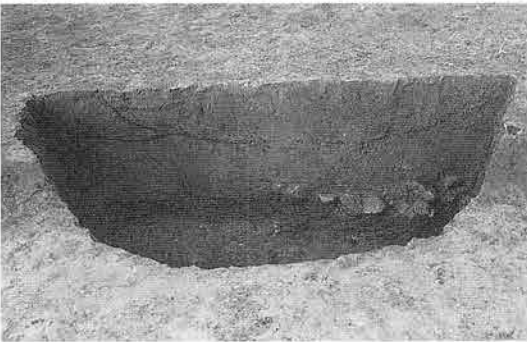
I D9a土坑平面



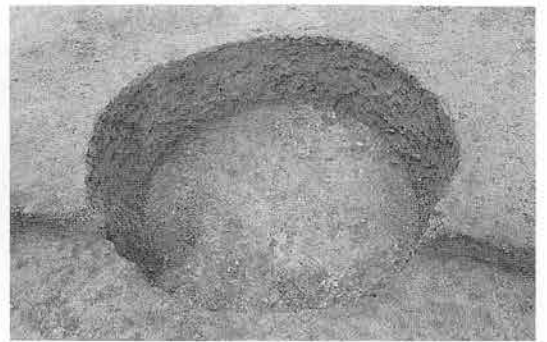
II C6i土坑断面



II C6i土坑平面



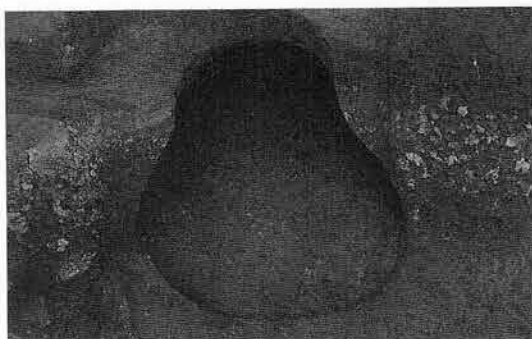
II C7e土坑断面



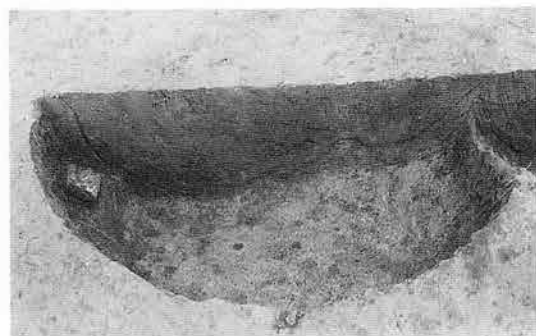
II C7e土坑平面



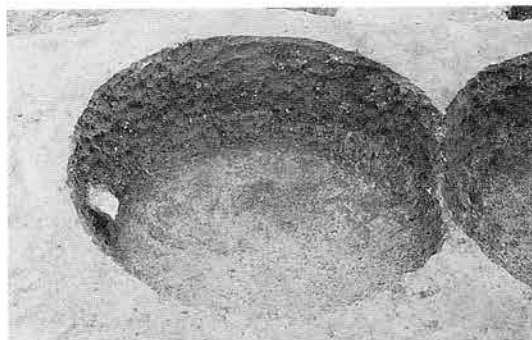
II C8e土坑断面



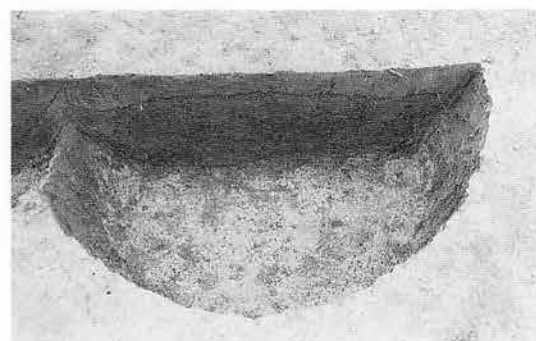
II C8e土坑平面



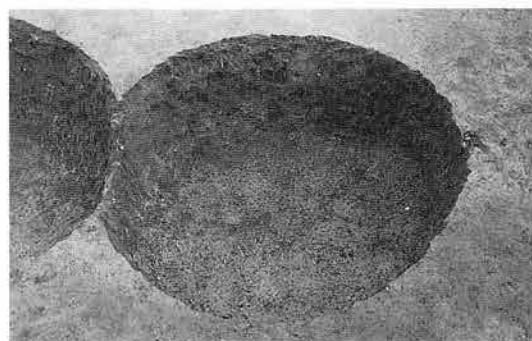
II C8f-1土坑断面



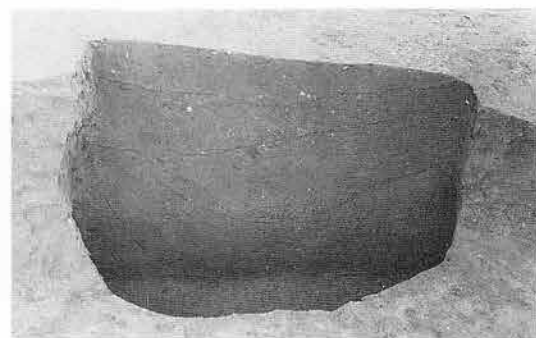
II C8f-1土坑平面



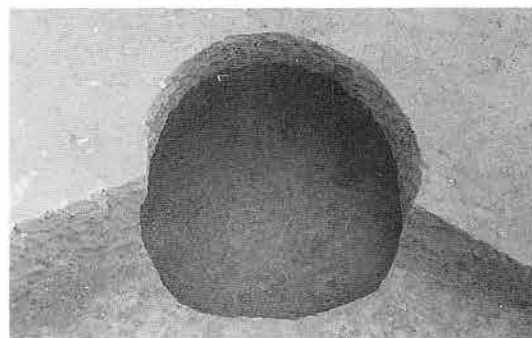
II C8f-2土坑断面



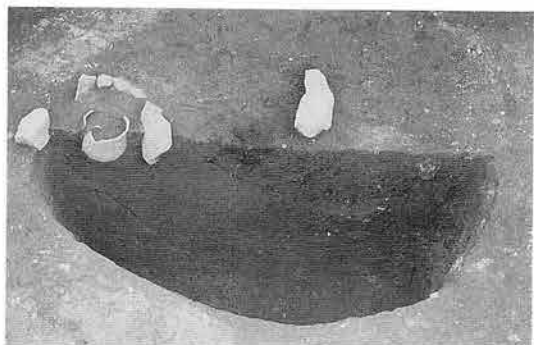
II C8f-2土坑平面



III B5h土坑断面



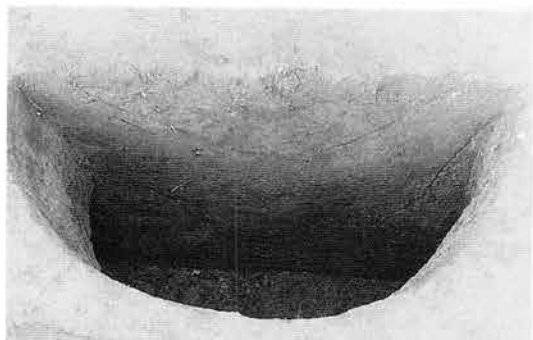
III B5h土坑平面



III B8f土坑断面



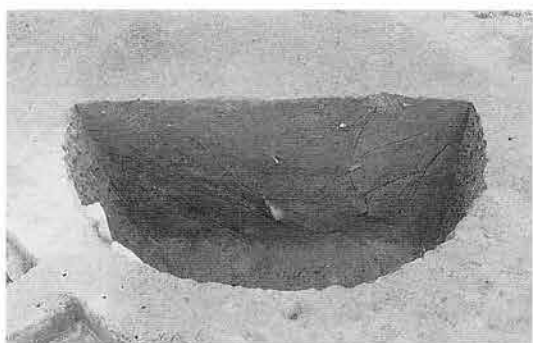
III B8f土坑平面



III C1c土坑断面



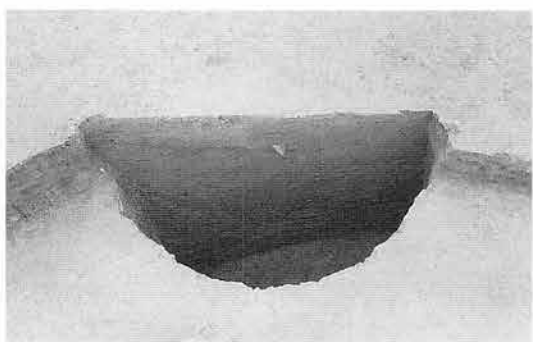
III C1c土坑平面



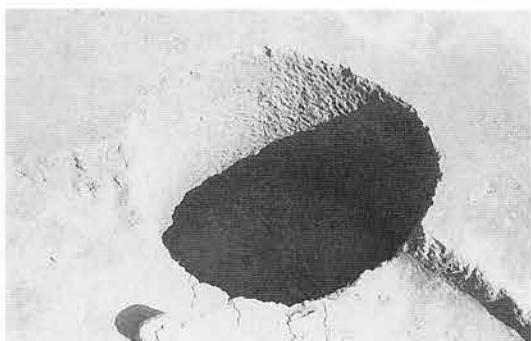
III C2e土坑断面



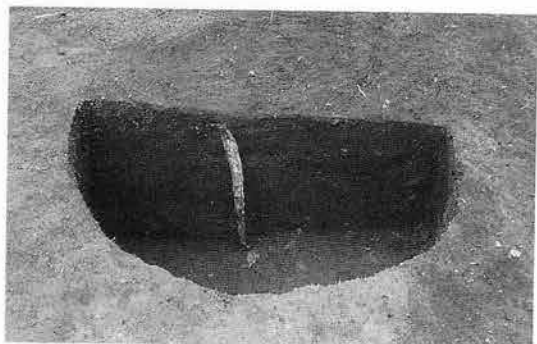
III C2e土坑平面



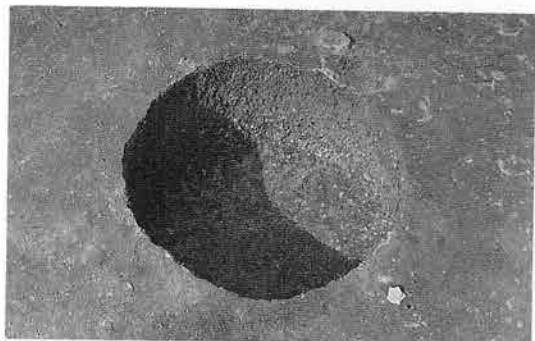
III C3e土坑断面



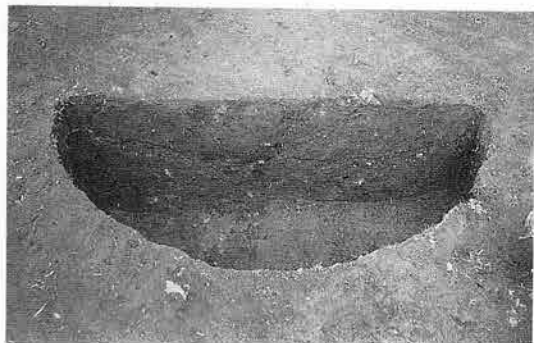
III C3e土坑平面



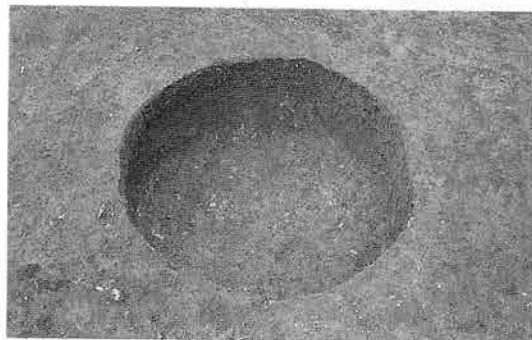
IV B2h土坑断面



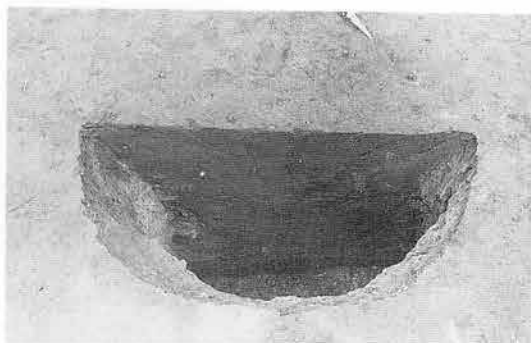
IV B2h土坑平面



VI B3i土坑断面



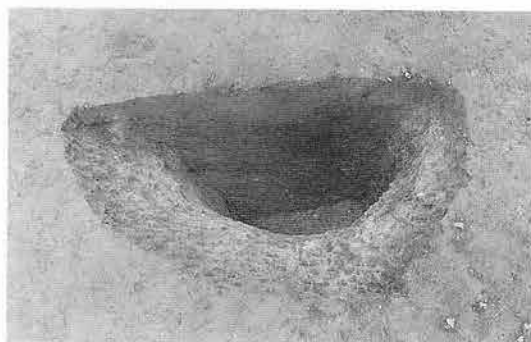
VI B3i土坑平面



VI A5j土坑断面



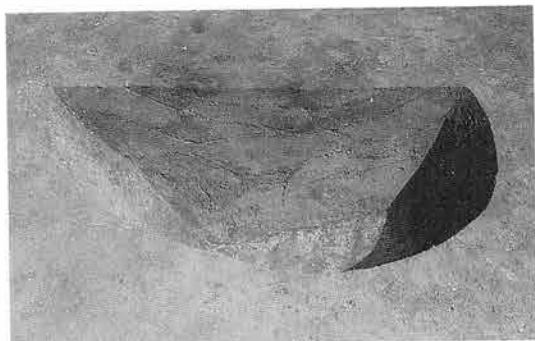
VI A5j土坑平面



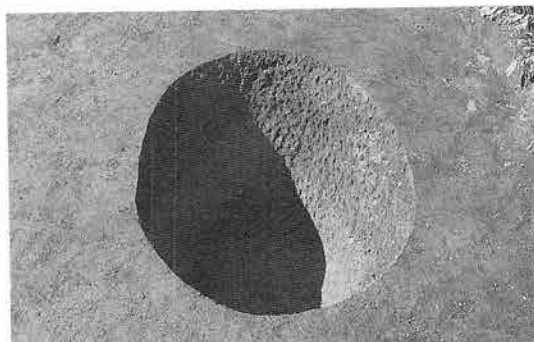
VI A7i土坑断面



VI A7i土坑平面



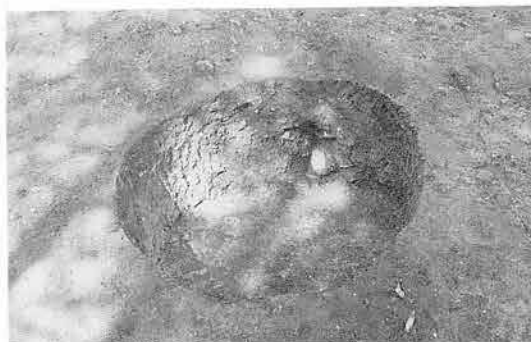
VI A9i土坑断面



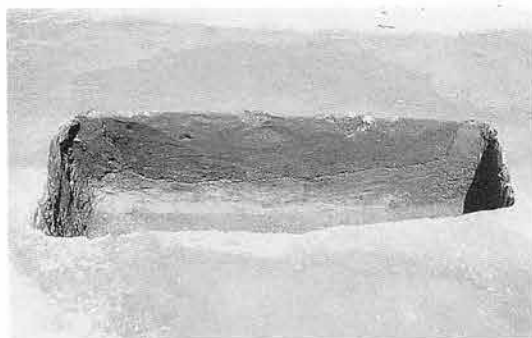
VI A9i土坑平面



VI B7b土坑断面



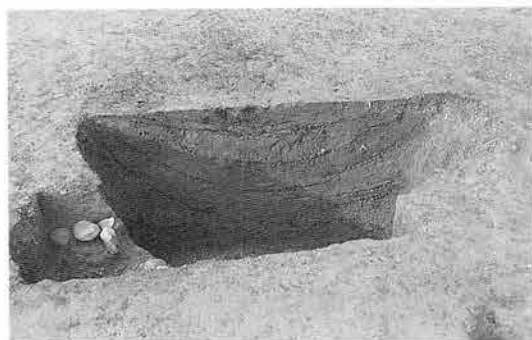
VI B7b土坑平面



VII A4j土坑断面



VII A4j土坑平面



II C7e-2土坑断面



久保小学校児童見学



I C9h-1 土坑断面



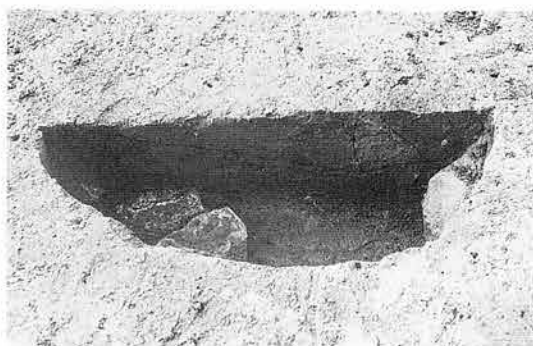
I C9h-1 土坑平面



I C9i-1 土坑断面



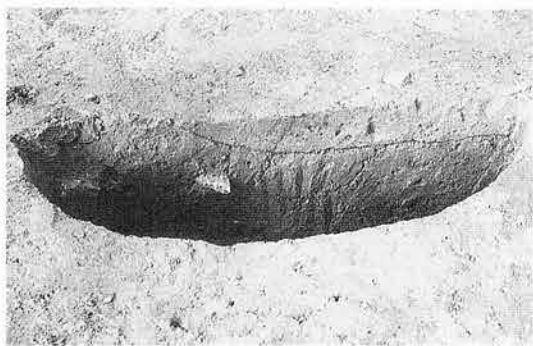
I C9i-1 土坑平面



I C9i-2 土坑断面



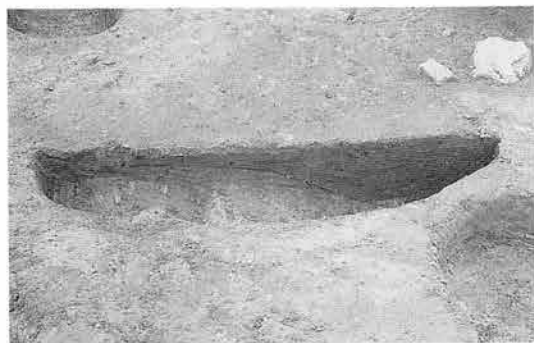
I C9i-2 土坑平面



I C9i-3 土坑断面



I C9i-3 土坑平面



I C9i-4土壤断面



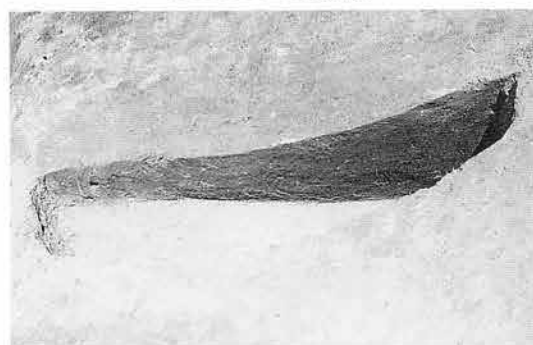
I C9i-4土壤平面



I C9i-5.6.7土壤断面



I C9i-5.6.7土壤平面



I C0h-1土壤断面



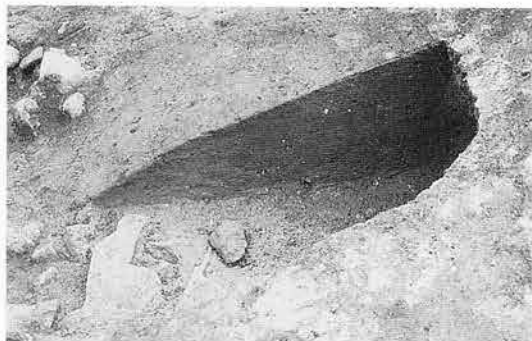
I C0h-1土壤平面



I C0h-2土壤断面



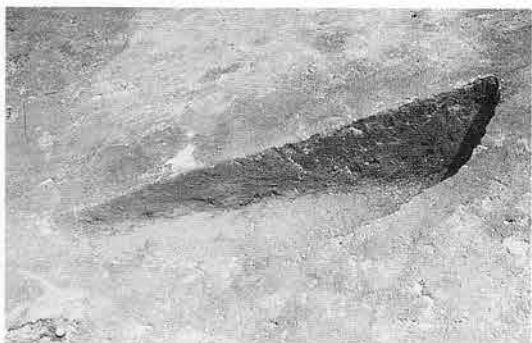
I C0h-2土壤平面



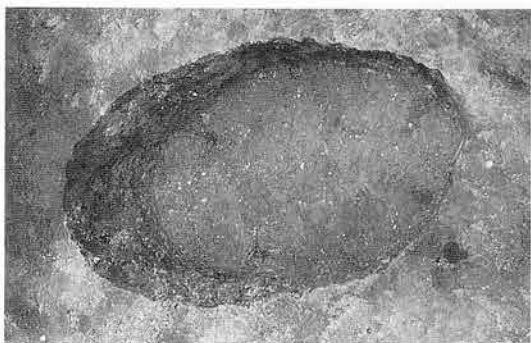
I C0h-3土壤断面



I C0h-3土壤平面



I C0i-1土壤断面



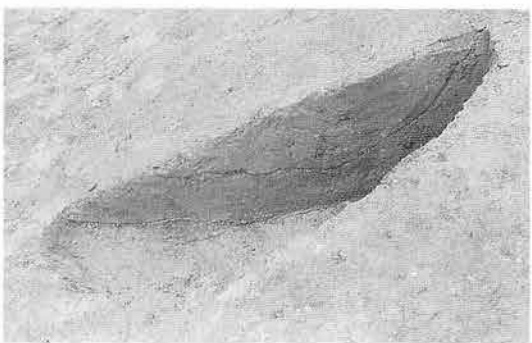
I C0i-1土壤平面



I C0i-2土壤断面



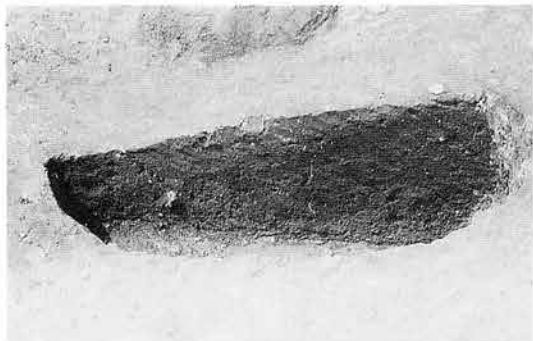
I C0i-2土壤平面



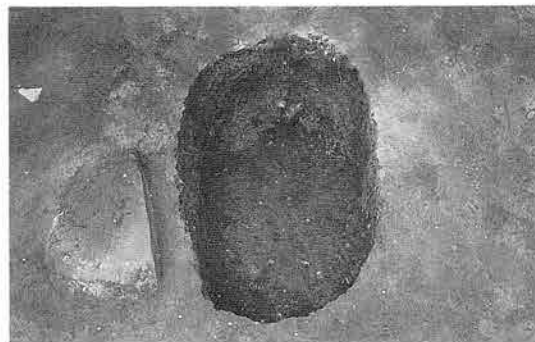
I C0i-3土壤断面



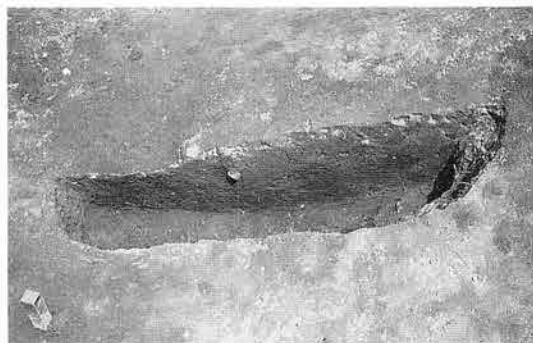
I C0i-3土壤平面



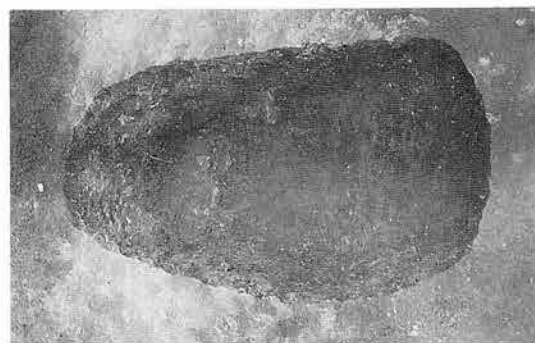
I C0j-1土壤断面



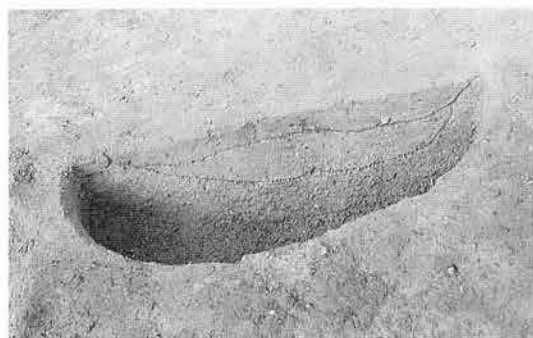
I C0j-1土壤平面



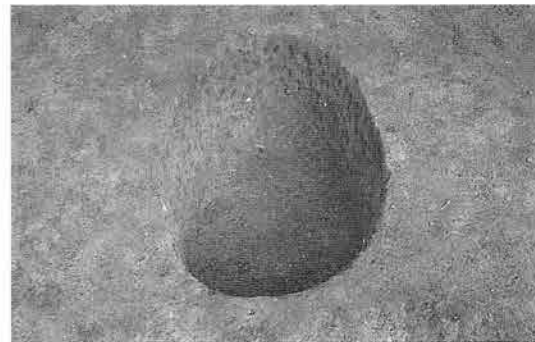
I C0j-2土壤断面



I C0j-2土壤平面



I C0j-3土壤断面



I C0j-3土壤平面



I C0j-4土壤断面

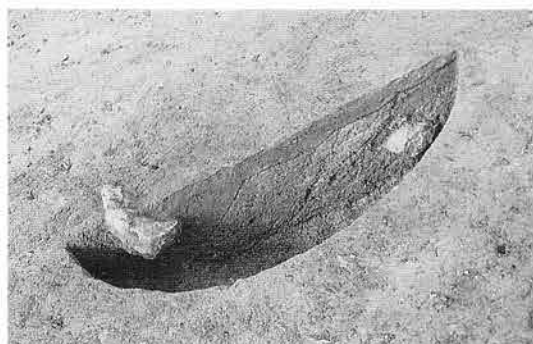


I C0j-4土壤平面

写真図版61 土壤(4)



II C1i-1土城断面



I D0a-1土城断面



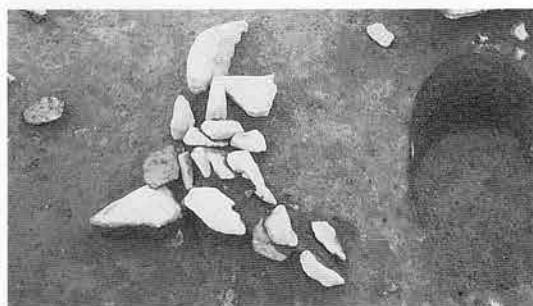
配石遺構



I C9i配石



I C8i配石



I C9h-3配石



I C8i配石 (断面)



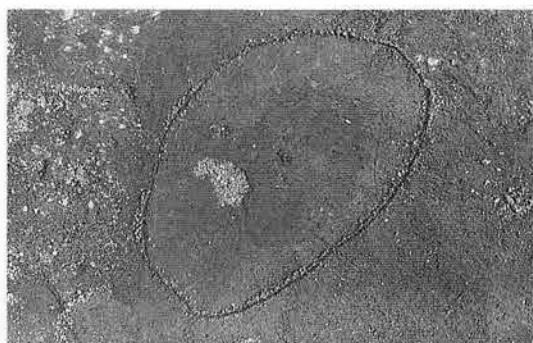
VI B8b 烧土平面



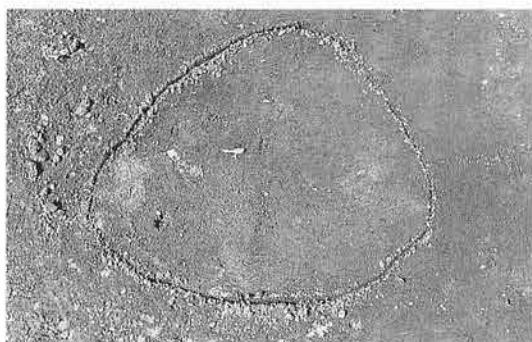
IV B8b 烧土断面



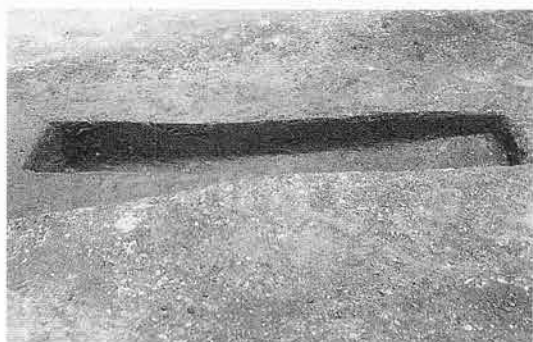
II C0e 烧土平面



VII B4a-1 烧土平面



VII B4 a-2 烧土平面



VII B4a-1·2 烧土断面

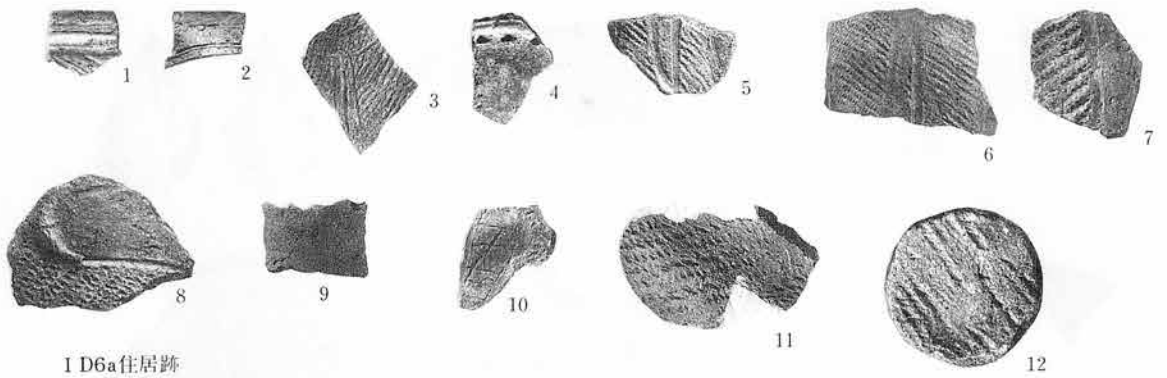


VII A6i 烧土平面



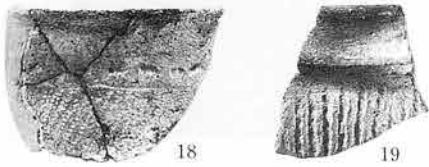
VII A6i 烧土断面

写真图版63 烧土遺構



I D6a住居跡

II B9i住居跡

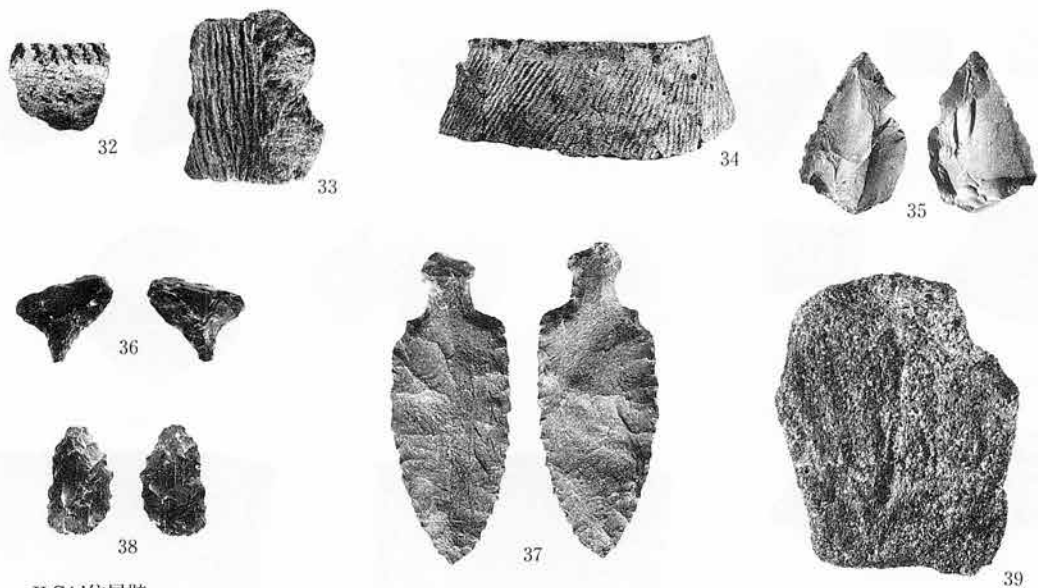


II C3i住居跡

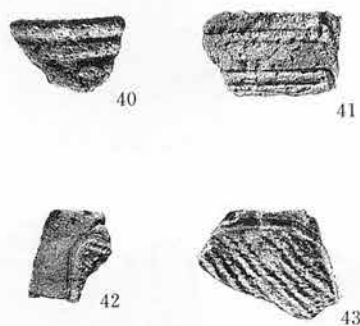
II C4d住居跡



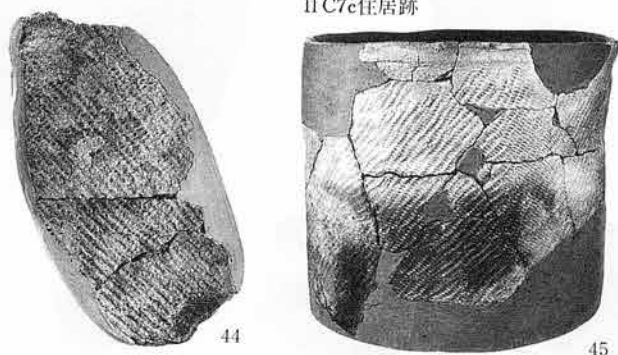
写真図版64 I D6a・II B9i・II C3i・II C4d住居跡遺物



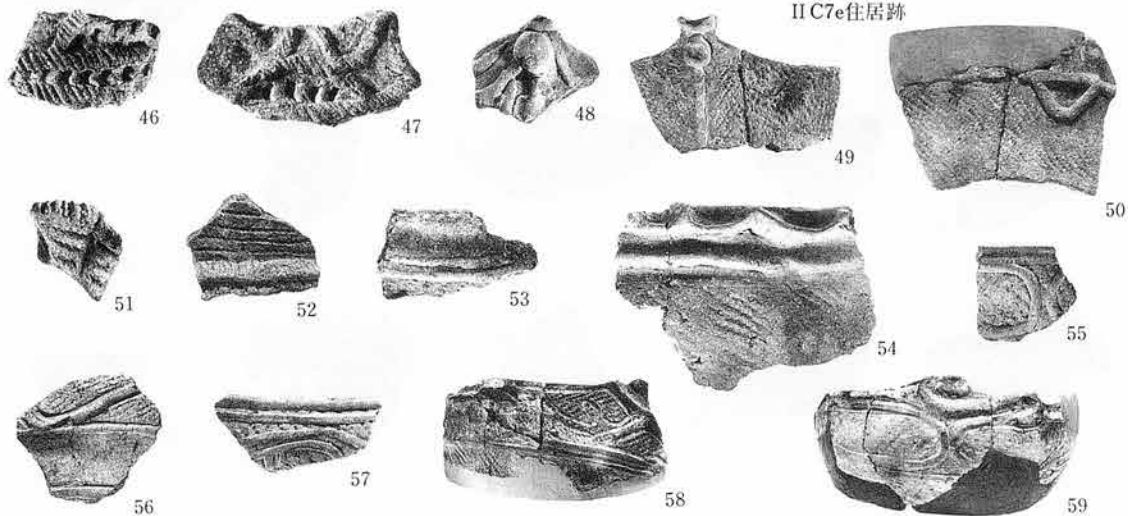
II C4d住居跡



II C6g住居跡

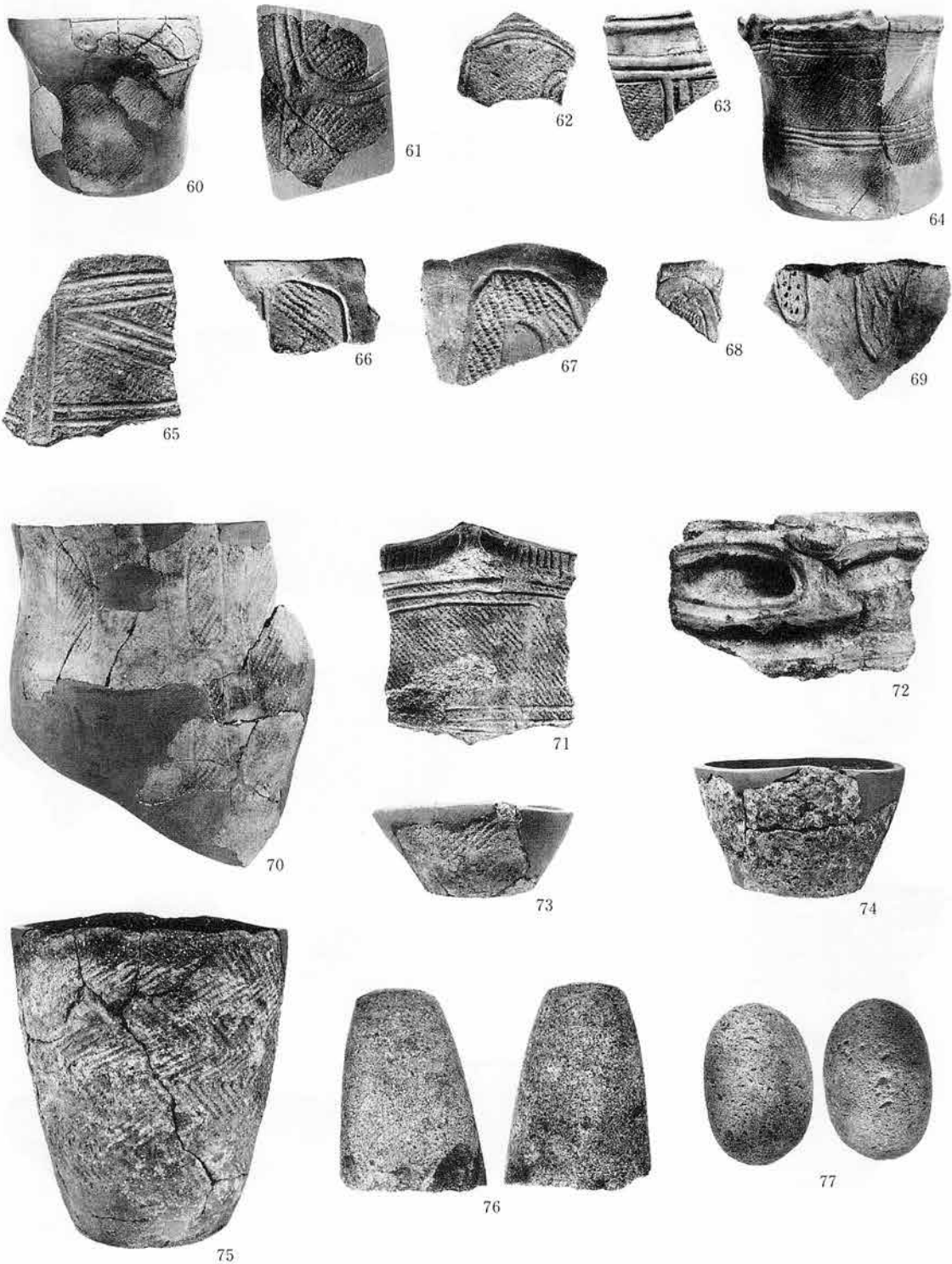


II C7c住居跡

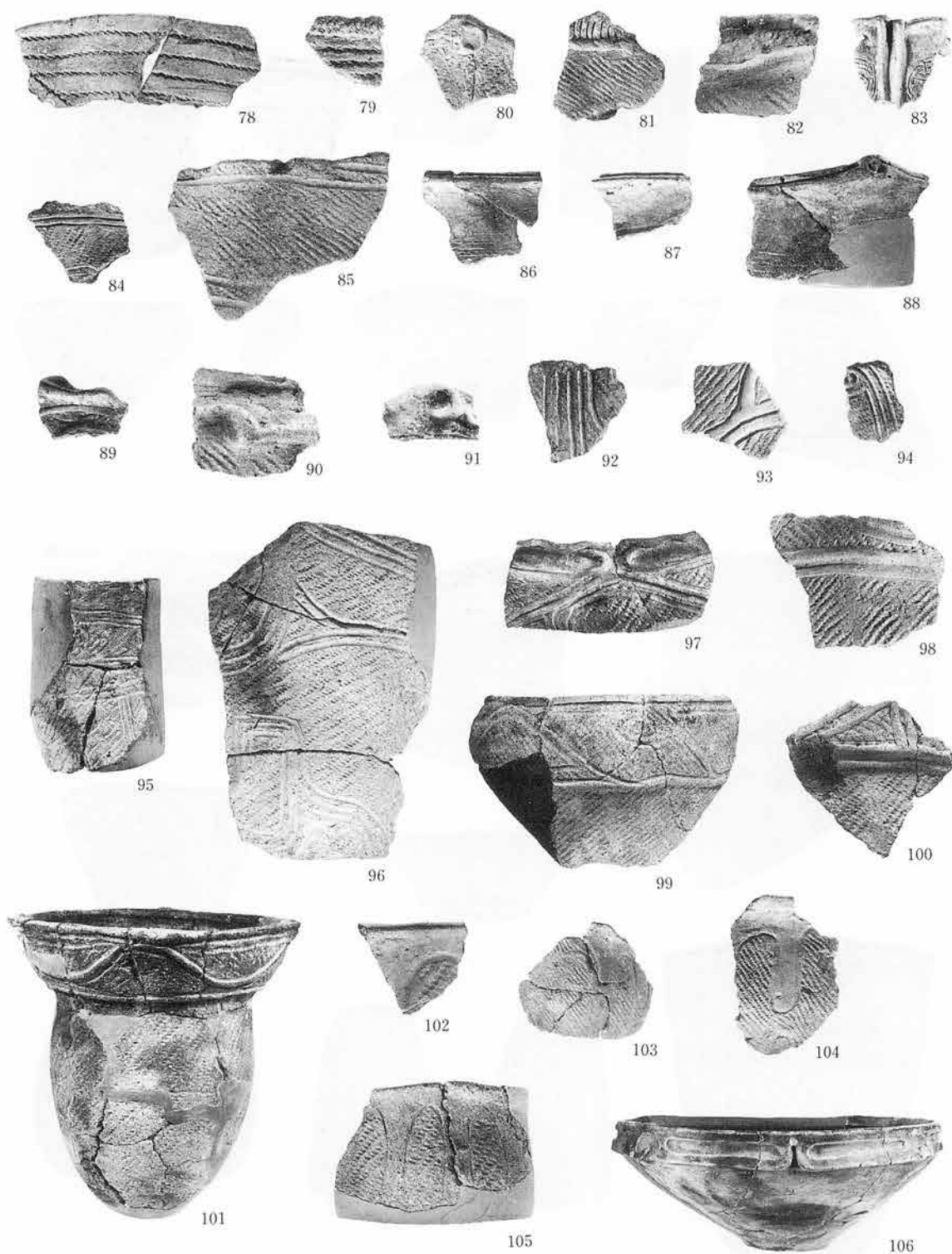


II C7e住居跡

写真図版65 II C4d・II C6g・II C7c・II C7e住居跡遺物



写真図版66 II C7e住居跡遺物



写真图版67 II C7f住居跡遺物



107



108



109



110



111



112



113



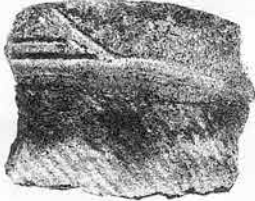
114



II C7f住居跡

II C8a住居跡

II C8d住居跡



115



116



117



118



119



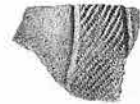
120



121



122



123



124

II C9a住居跡



125



126

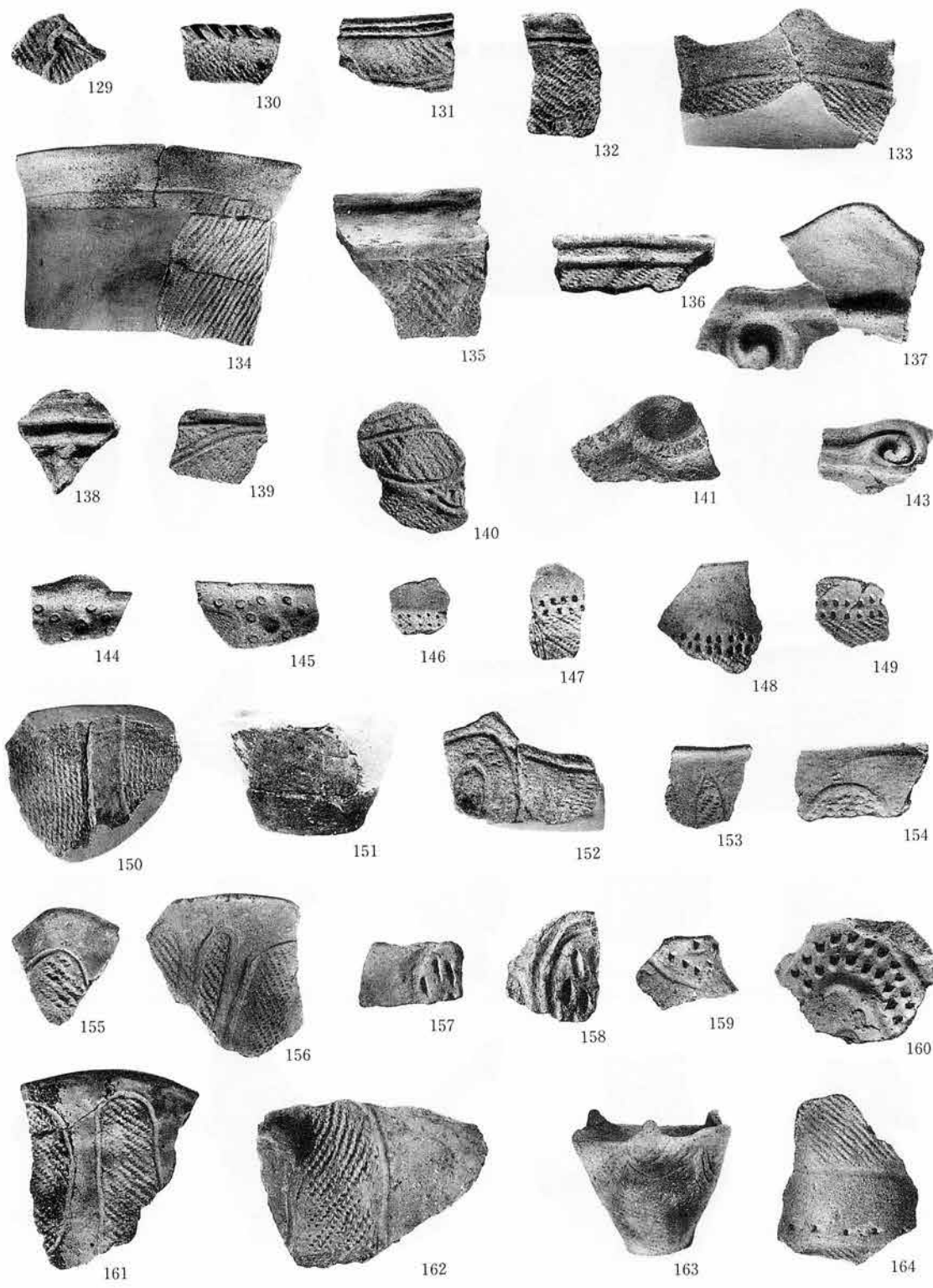


127

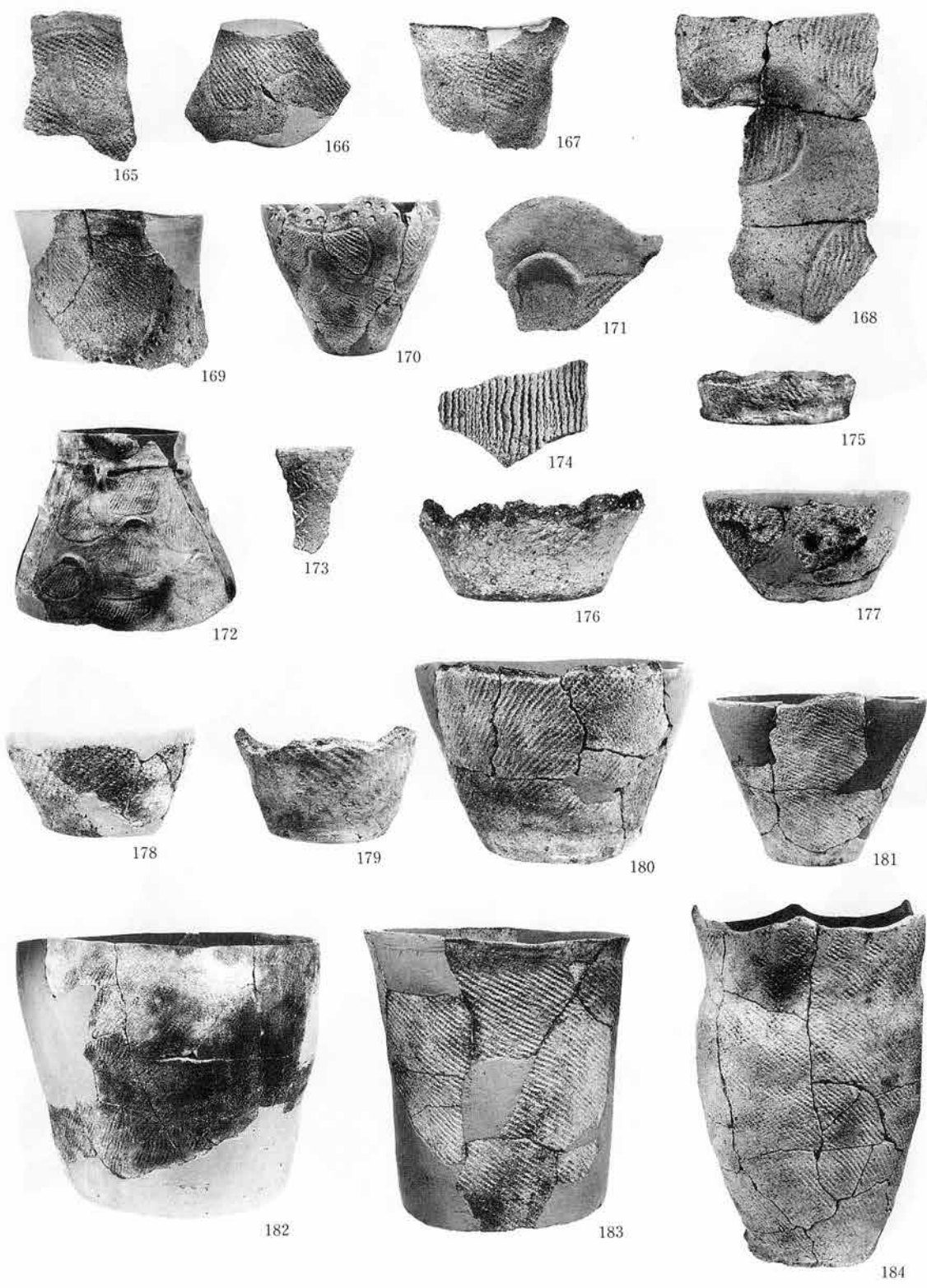


128

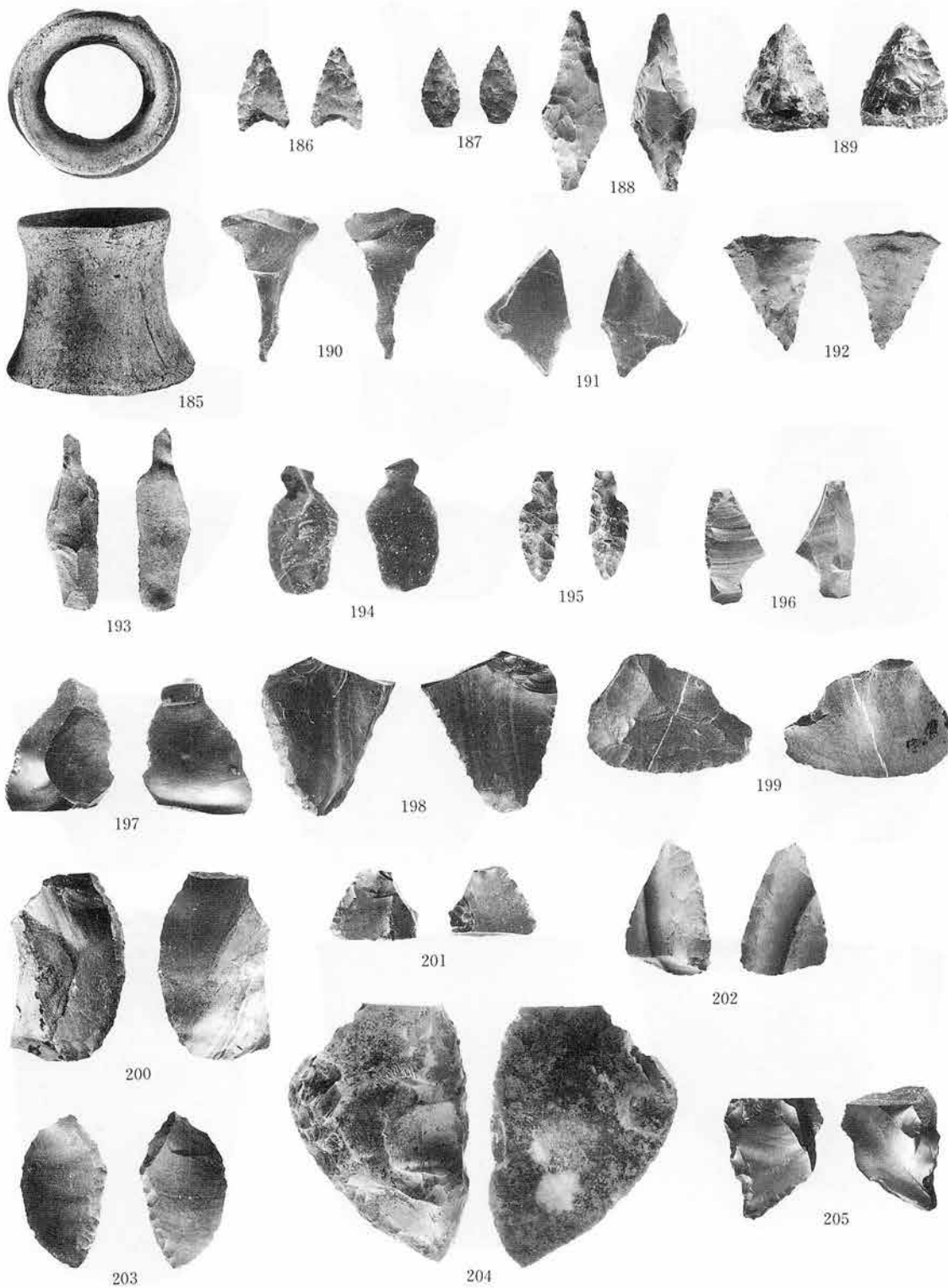
写真図版68 II C7f・II C8a・II C8d・II C9a住居跡遺物



写真図版69 II C9a住居跡遺物

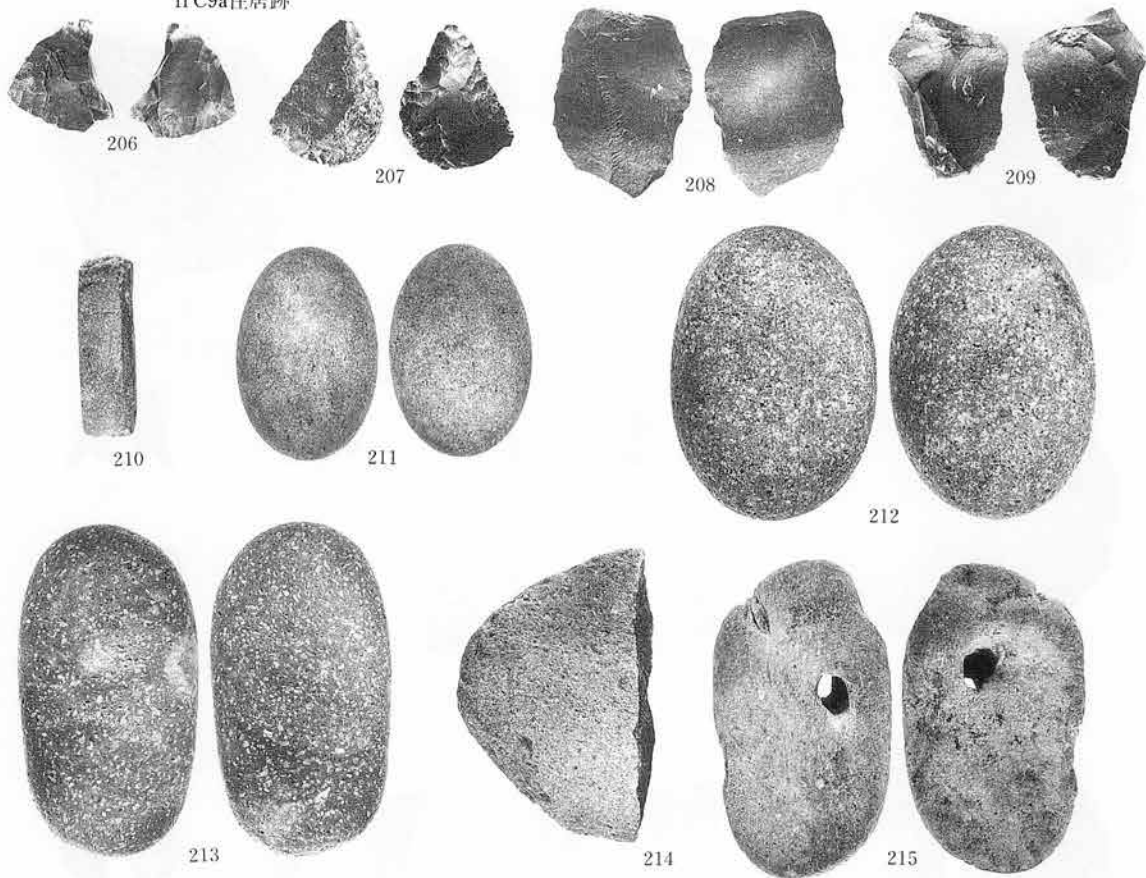


写真図版70 II C9a住居跡遺物

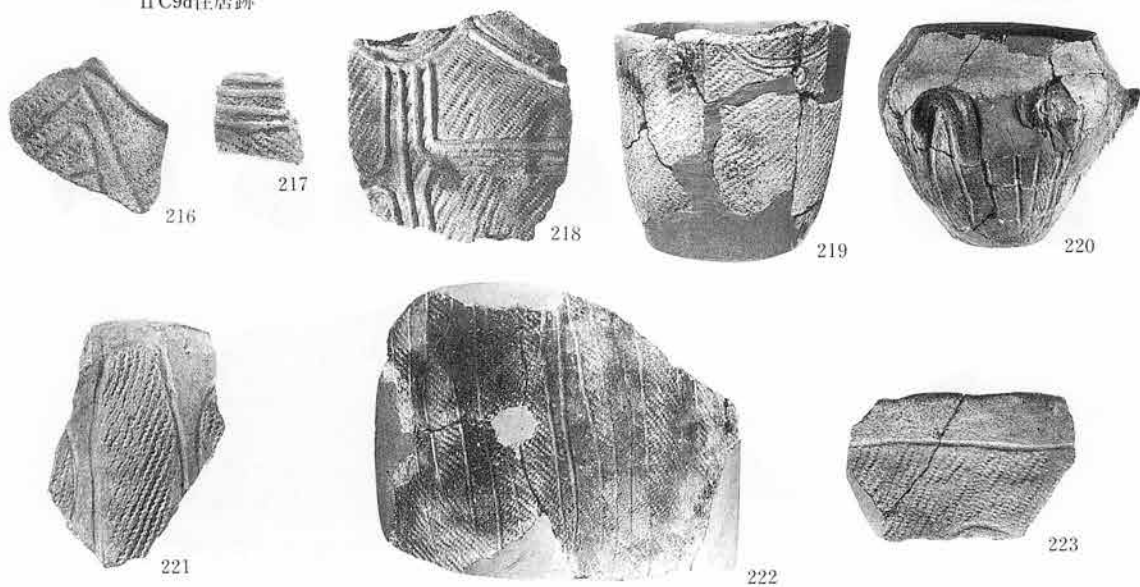


写真図版71 II C9a住居跡遺物

II C9a住居跡



II C9d住居跡



写真図版72 II C9a・II C9d住居跡遺物



224



225



226



227



228



229



230



231



232



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



245

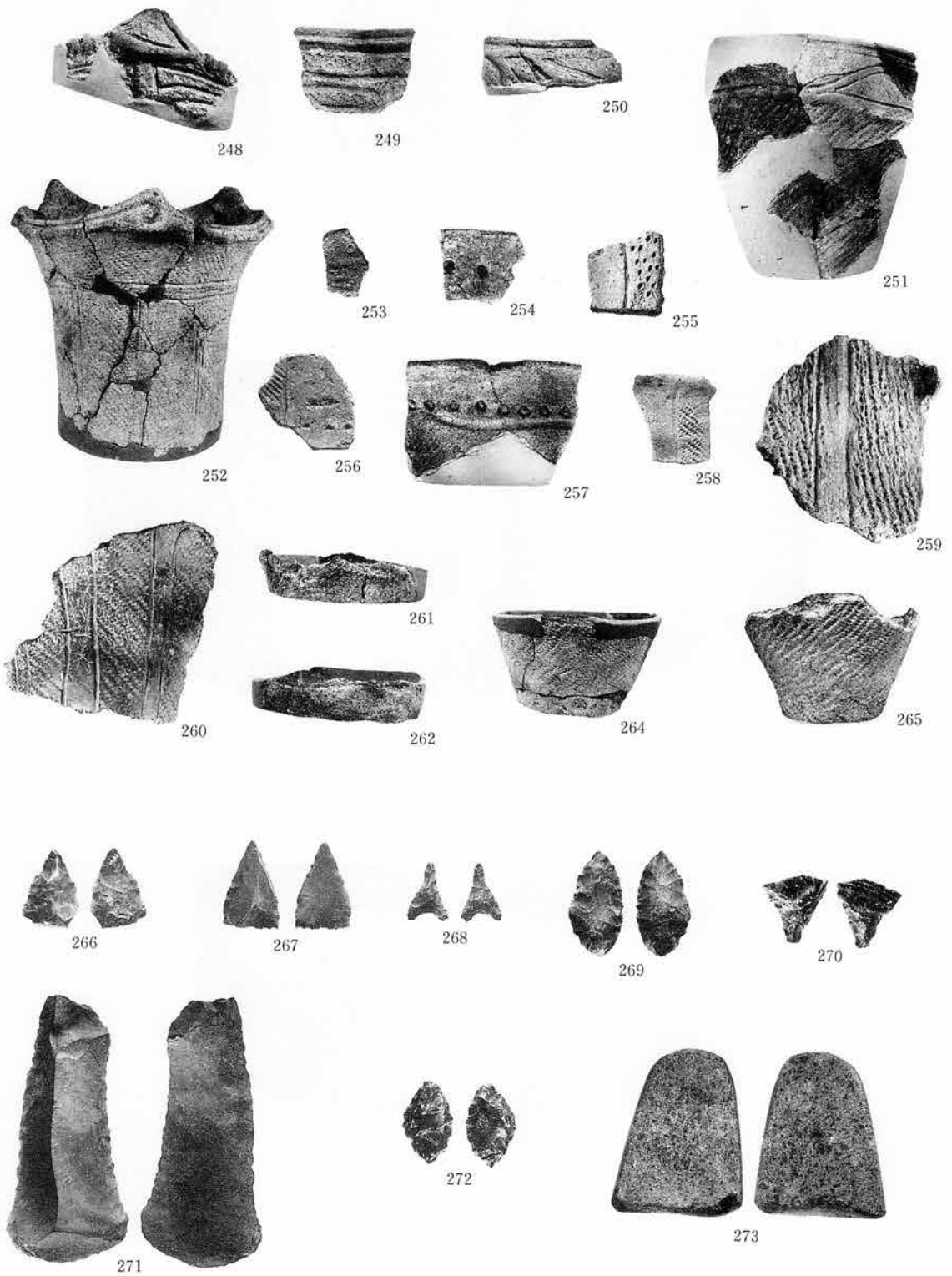


246

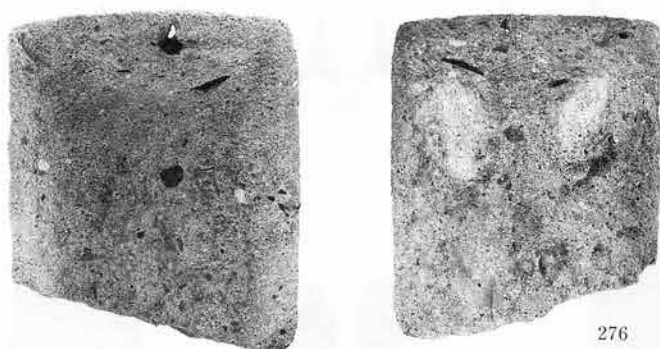
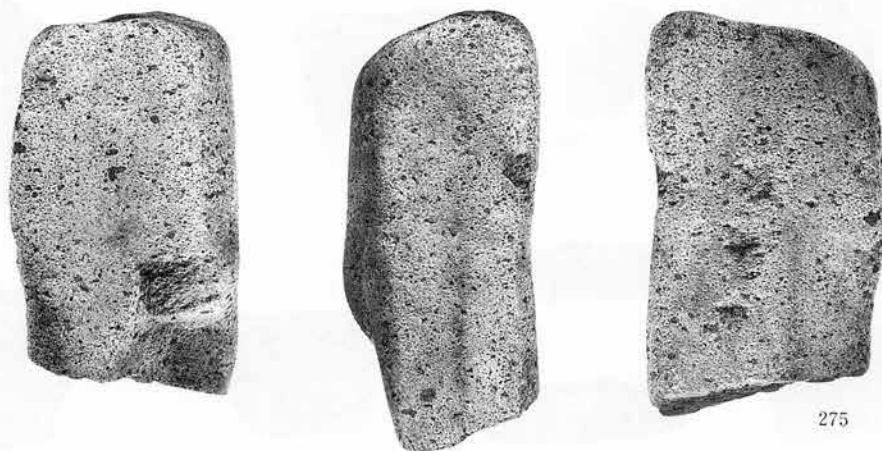
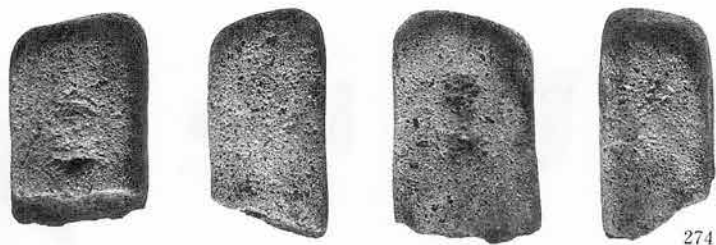


247

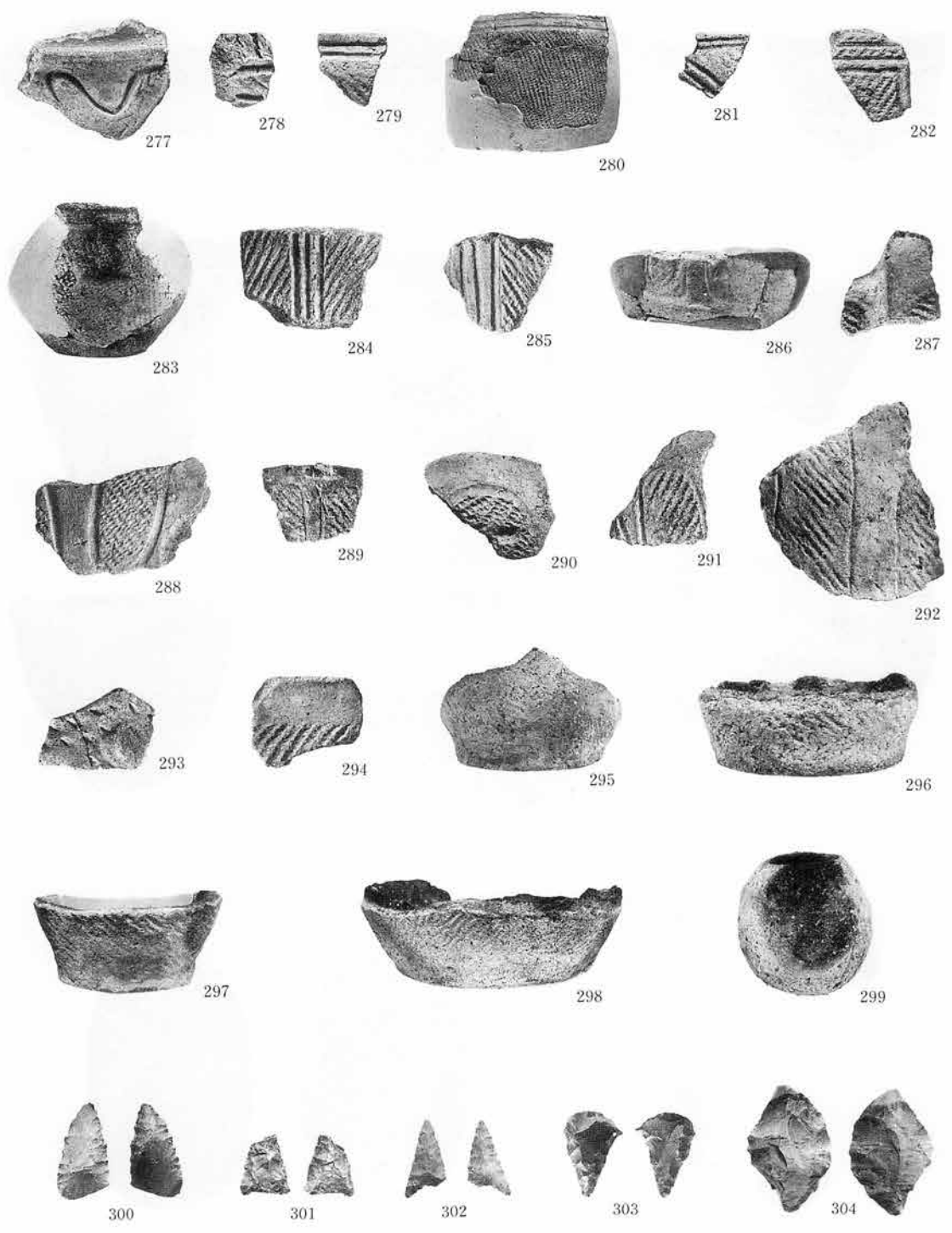
写真図版73 II C9d住居跡遺物



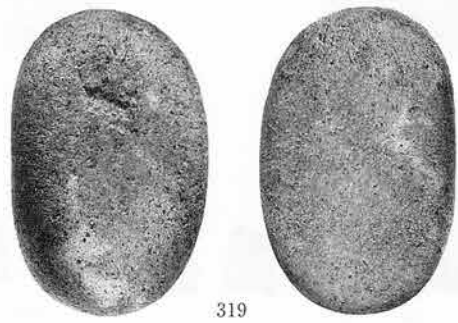
写真図版74 II C9e住居跡遺物



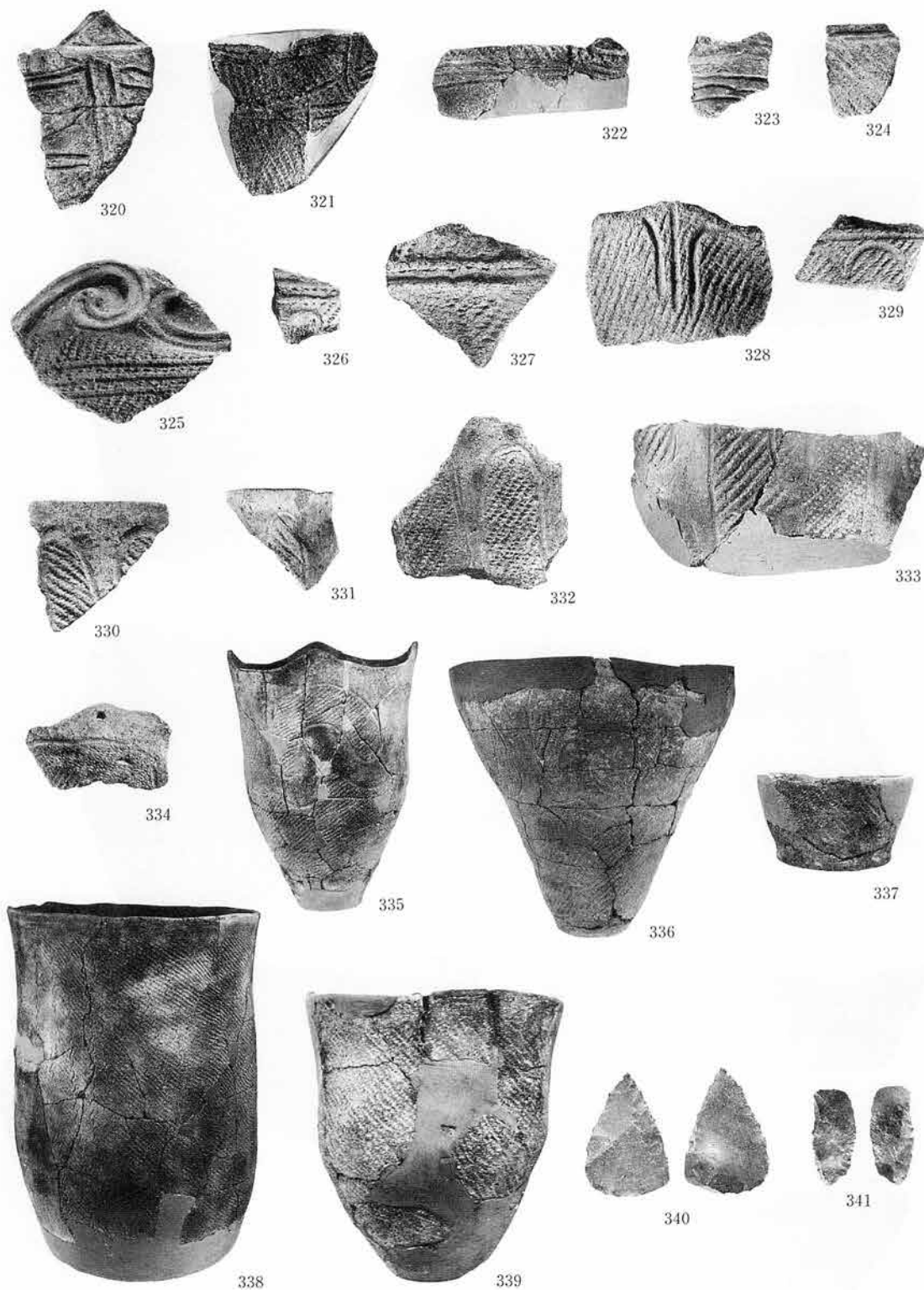
写真図版75 II C9e住居跡遺物



写真図版76 III B2i住居跡遺物



写真図版77 III B2j住居跡遺物

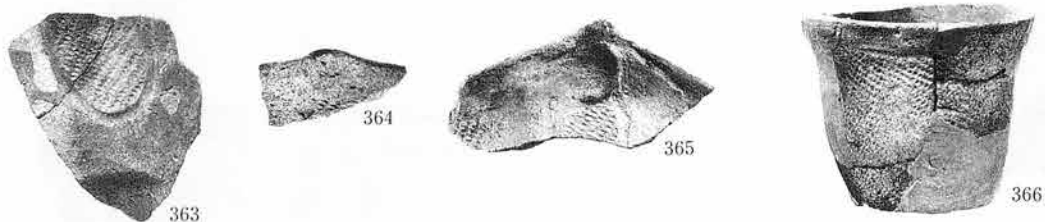


写真図版78 III B3g住居跡遺物

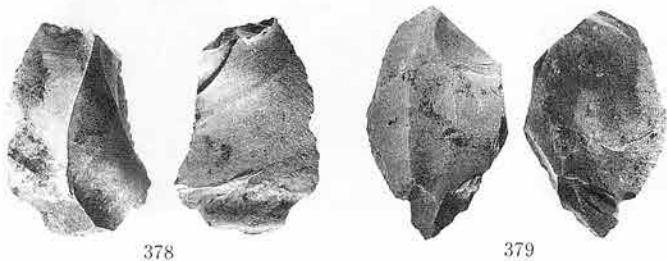


写真図版79 III B3g-2住居跡遺物

ⅢB5g住居跡



ⅢB5g-2住居跡



ⅢB5g-3住居跡

写真図版80 ⅢB5g-1・2・3 住居跡遺物



380



381



382

ⅢB5g-3住居跡



383



384



385



386

ⅢB6i住居跡



387



388



389



390



391



392



393

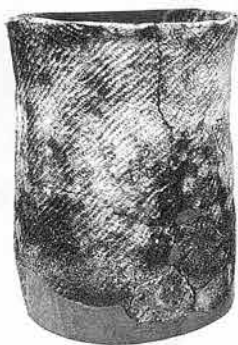
ⅢB8f住居



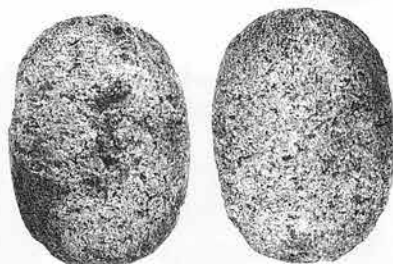
394



395



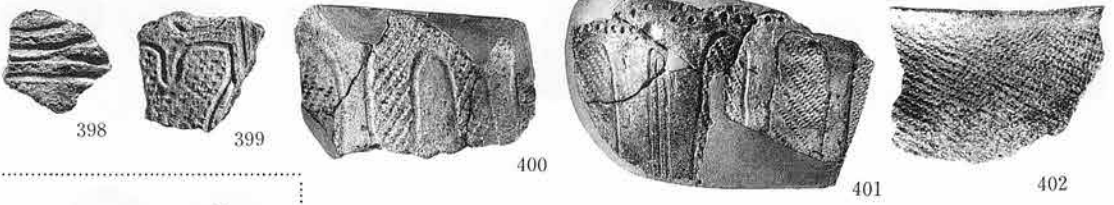
396



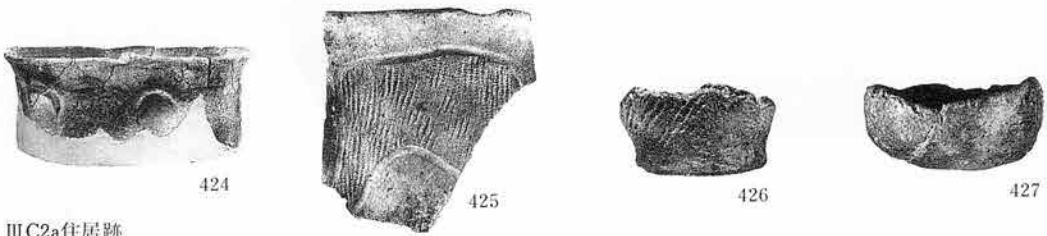
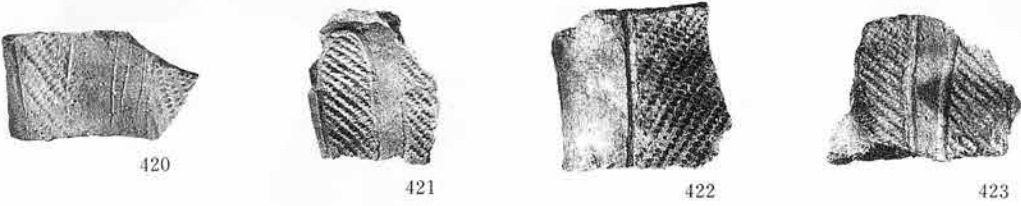
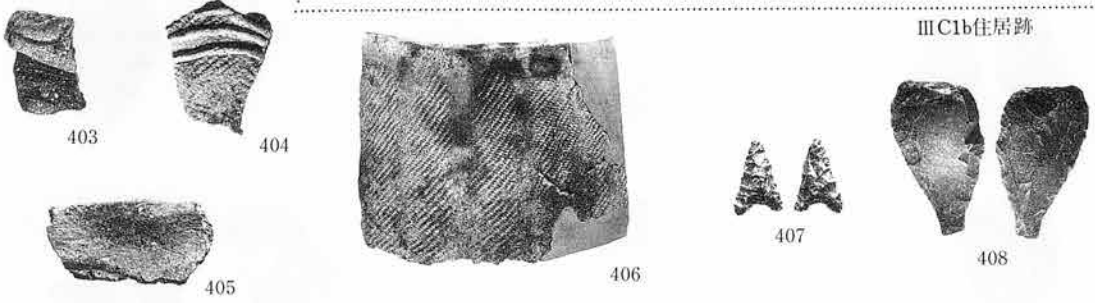
397

写真図版81 ⅢB5g-3・ⅢB6i・ⅢB8f住居跡遺物

ⅢB9h住居跡

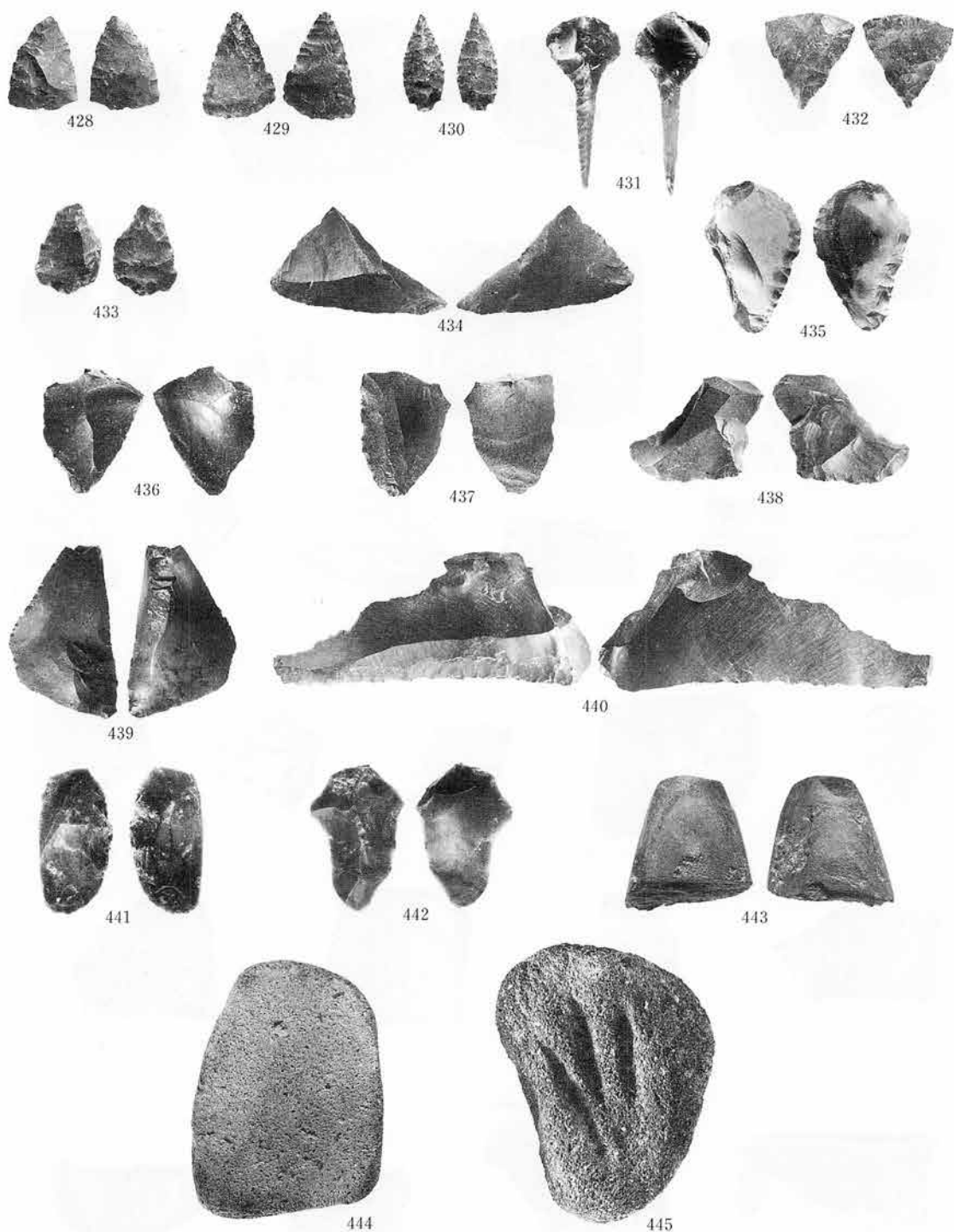


ⅢC1b住居跡

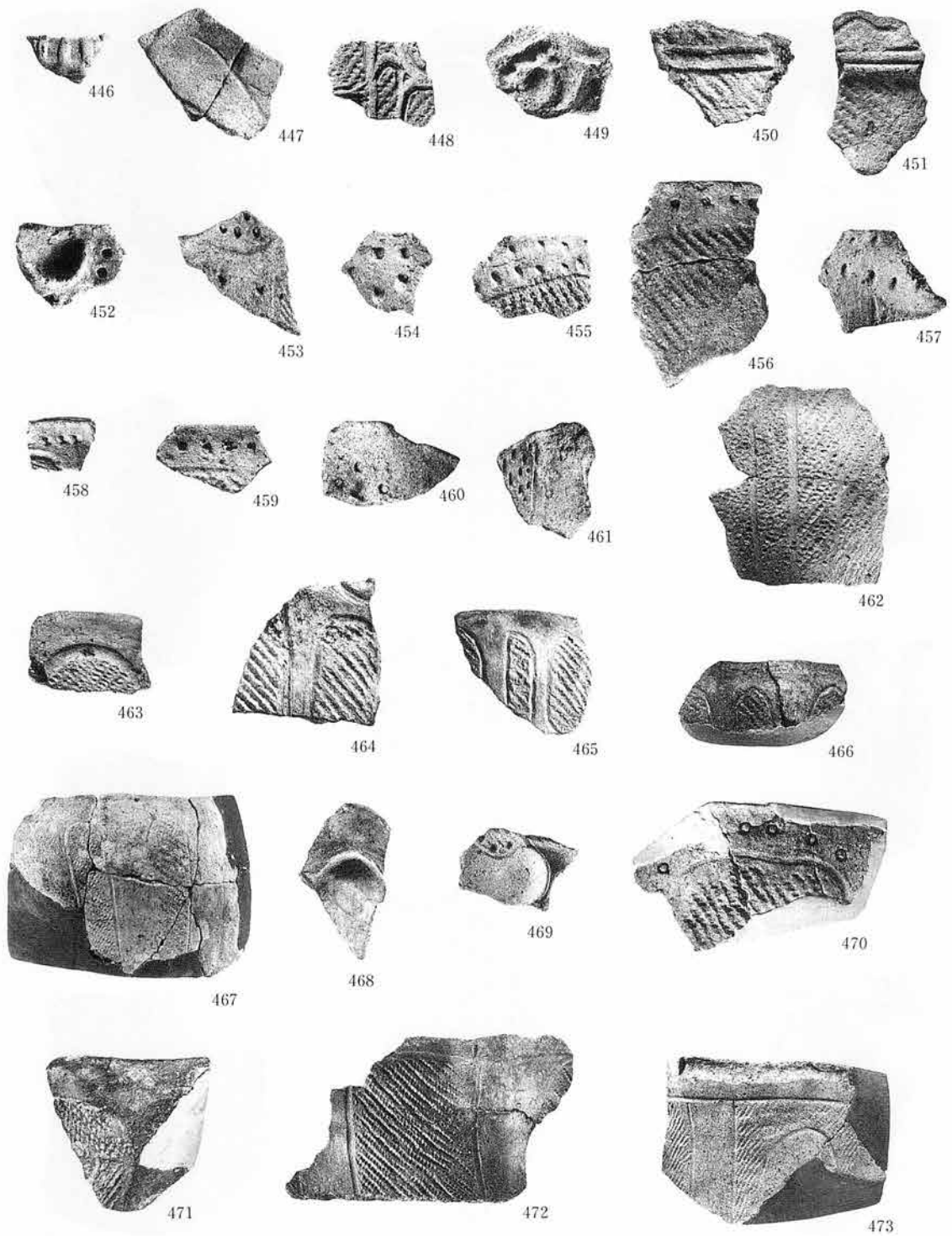


ⅢC2a住居跡

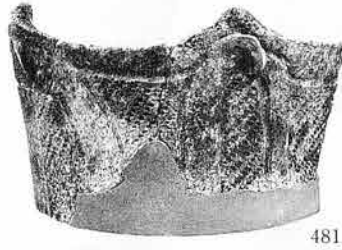
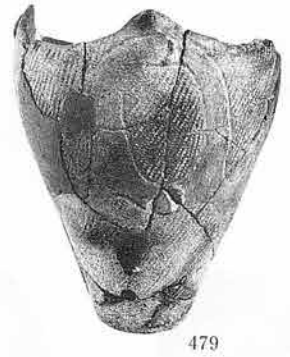
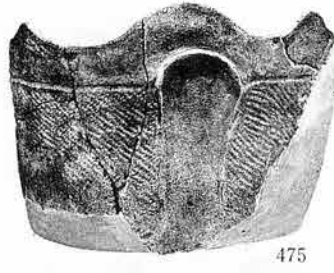
写真図版82 ⅢB9h・ⅢC1b・ⅢC2a住居跡遺物



写真图版83 III C2a住居跡遺物



写真図版84 III C2e住居跡遺物



写真图版85 III C2e住居跡遺物



486



487



488



489



490



491



492



493



496



497



494



495



494



498



499



500



500



501



502

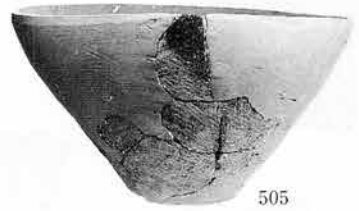
写真図版86 III C2e住居跡遺物



503



504



505



506



507



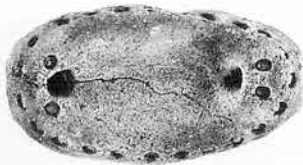
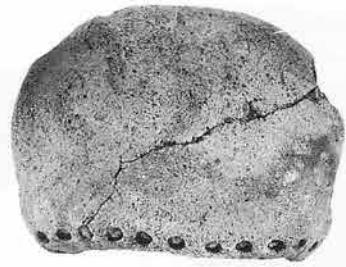
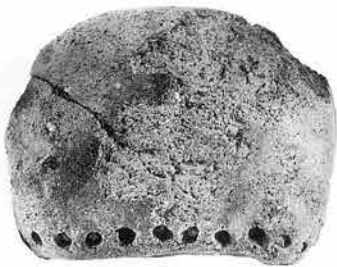
508



509

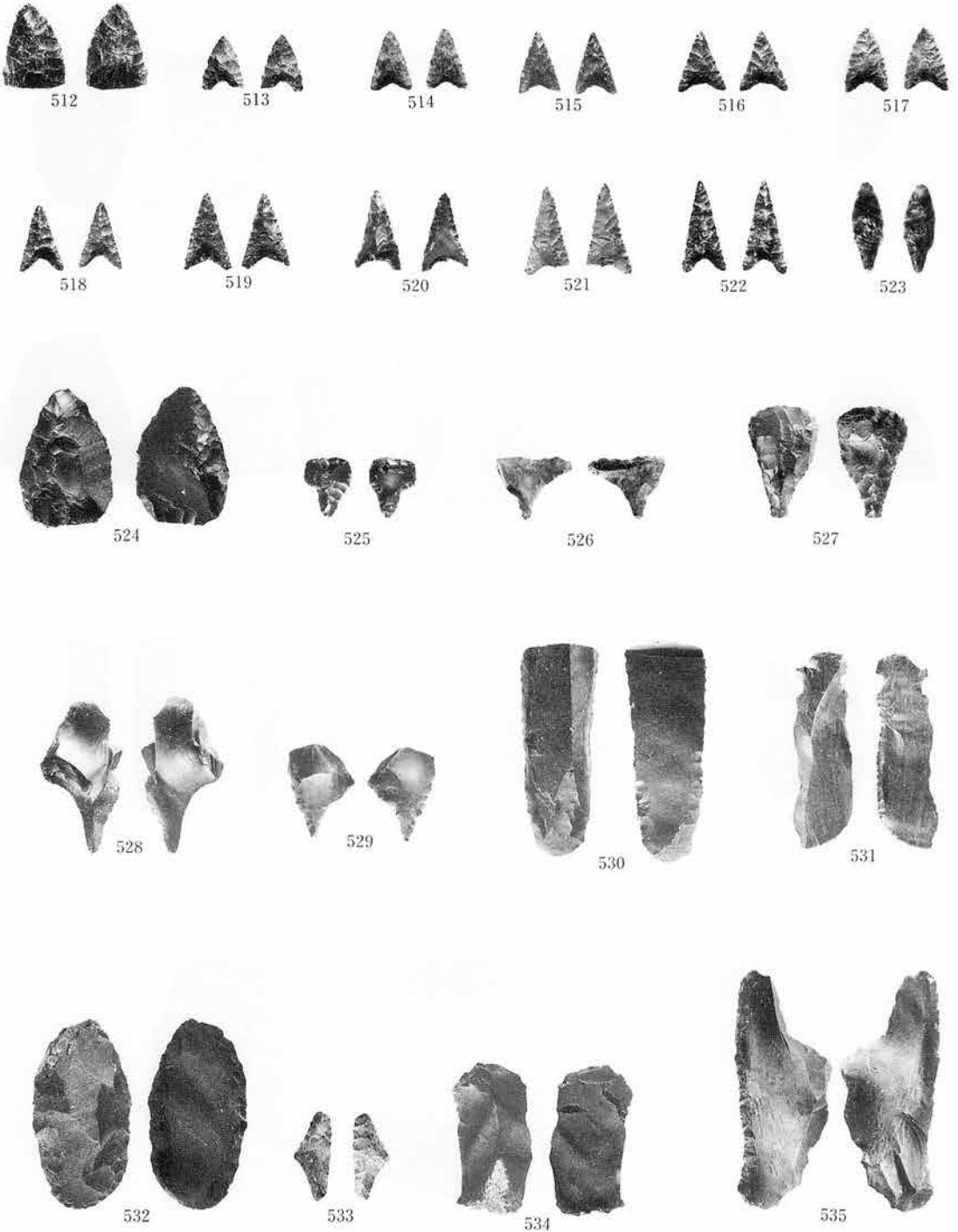


510



511

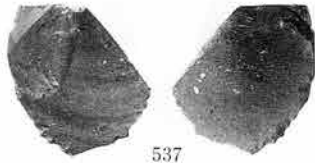
写真図版87 III C2e住居跡遺物



写真図版88 III C2e住居跡遺物



536



537



538



539



540



541



542



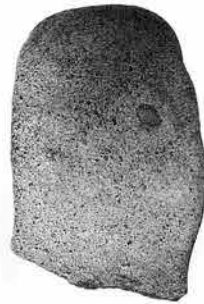
543



544



545



546

写真図版89 III C2e住居跡遺物



547



548



549



550



551

ⅢC3b住居跡



552

ⅢC3b-2住居跡



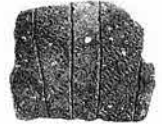
553



554



555



556

ⅢC4b住居跡



557



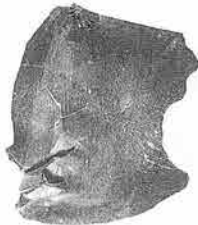
558



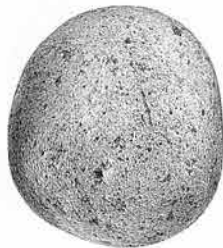
559



560



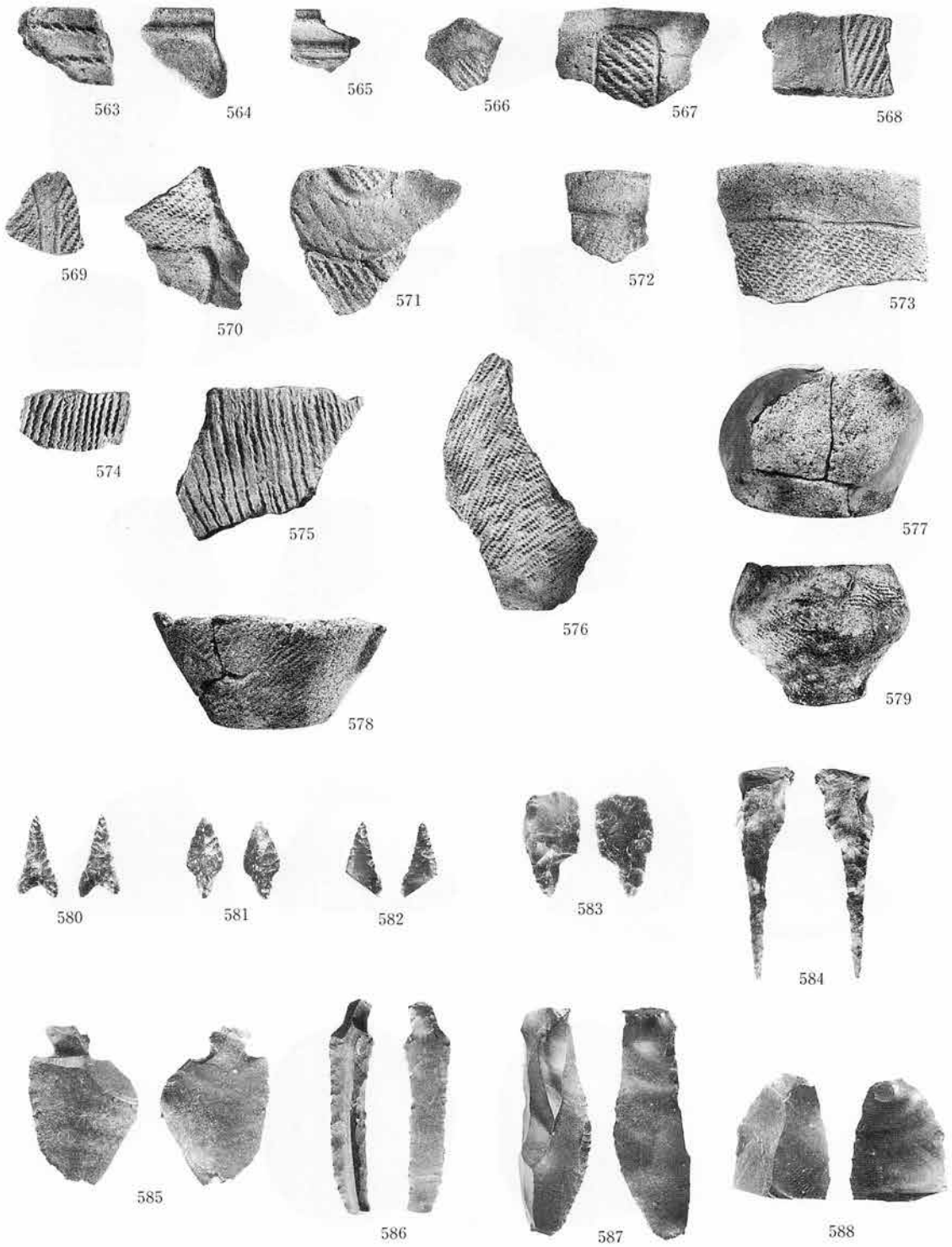
561



562



写真図版90 ⅢC3b・ⅢC3b-2・ⅢC4b住居跡遺物



写真図版91 III C4d住居跡遺物

III C5a住居跡



589



590



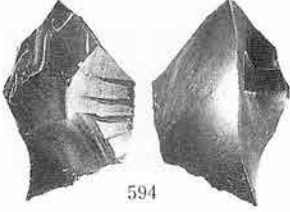
591



592



593



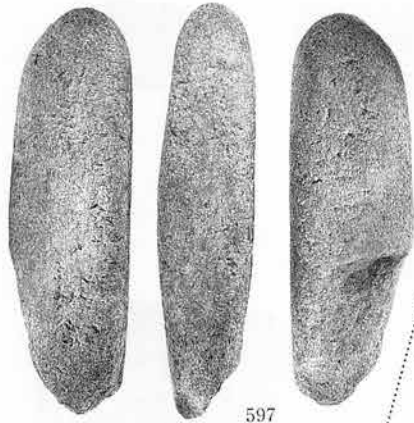
594



595



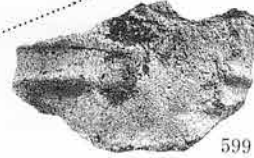
596



597



598



599



600



601



602



603



604

III C7b住居跡



605



606



607



608



609



610



611



写真図版92 III C5a・III C7b住居跡遺物



612



613



614



616

V A7J住居跡



615



617

V B2b住居跡



618

IV A1h住居跡



619



620



621



622



623



624



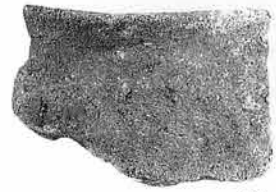
写真図版93 V A7j・V B2b・IV A1h住居跡遺物



625



626



627



628



629



630



631



632



633



634



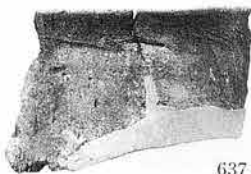
635

写真図版94 III B9d住居跡遺物

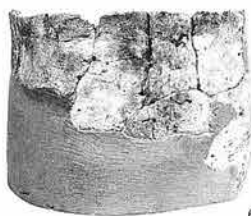
III COa住居跡



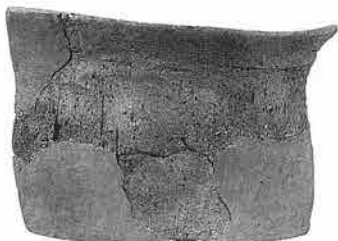
636



637



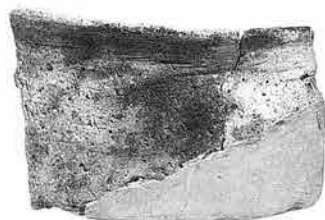
638



639



640



641



642



643



644



645



646



647



649



650



648

IV B3a住居跡

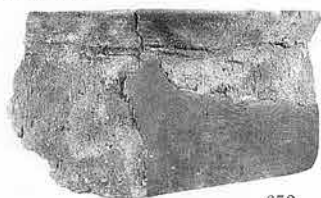


651



写真図版95 III COa・IV B3a住居跡遺物

IV B3d住居跡



652



653



654



655



656



657



658



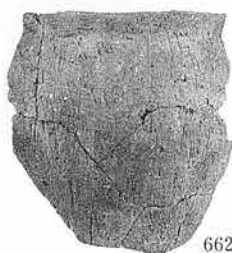
659



660



661



662



663

IV B8f住居跡



664



665



666



667



668



669

IV B6d住居跡

写真図版96 IV B3d・IV B6d・IV B8f住居跡遺物

V A1f住居跡



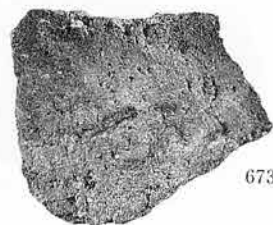
670



671



672



673

V A9f住居跡



674



675



676

V A0j住居跡



677



678



679



680



681



683



682



684



685



686

写真図版97 V A1f・V A9f・V A0j住居跡遺物

V B2c住居跡



687



688



689



690



691



692



693



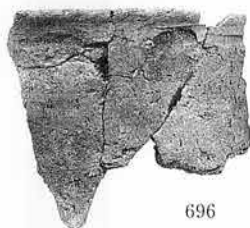
694



695



V B4b住居跡



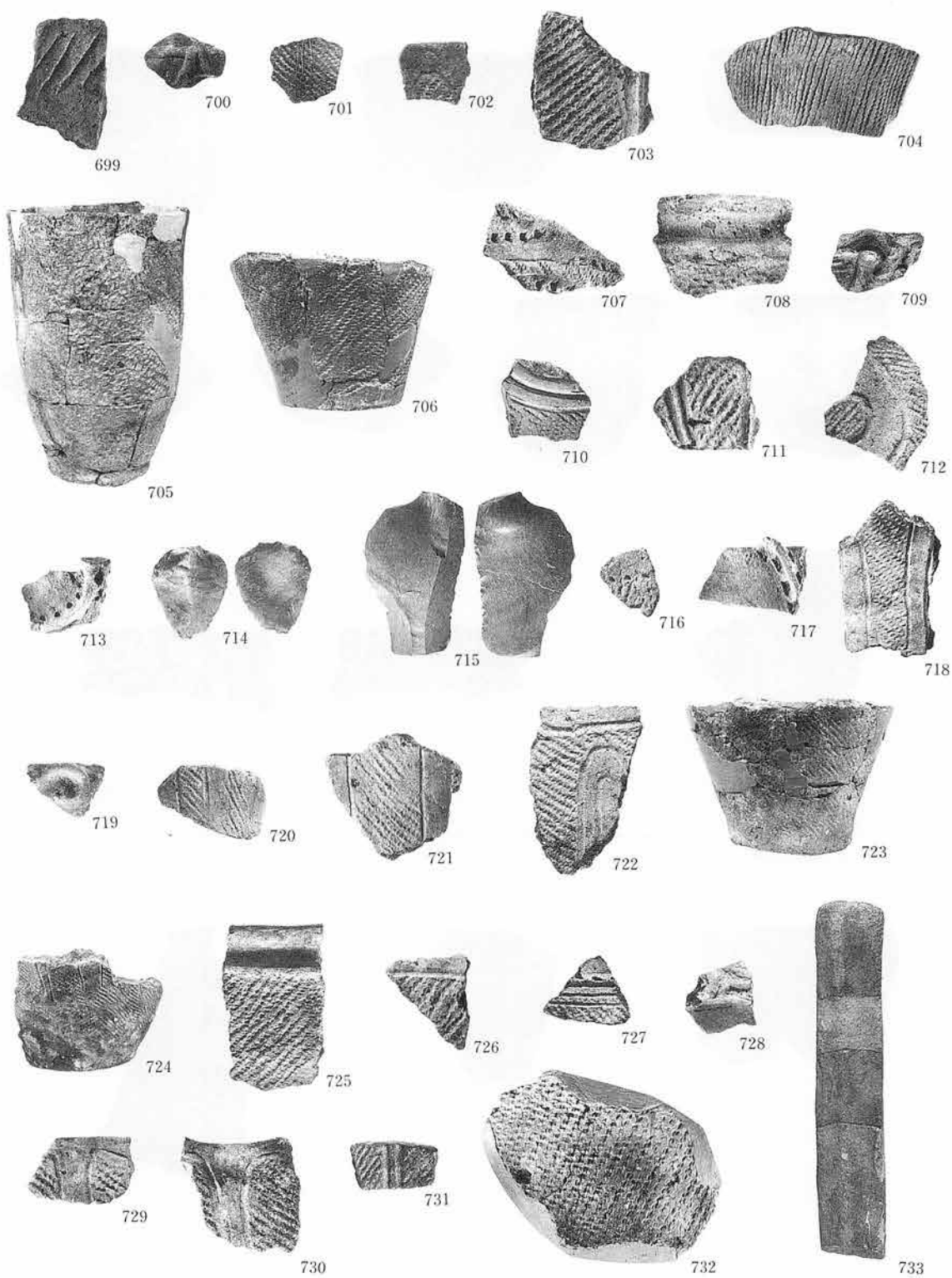
696



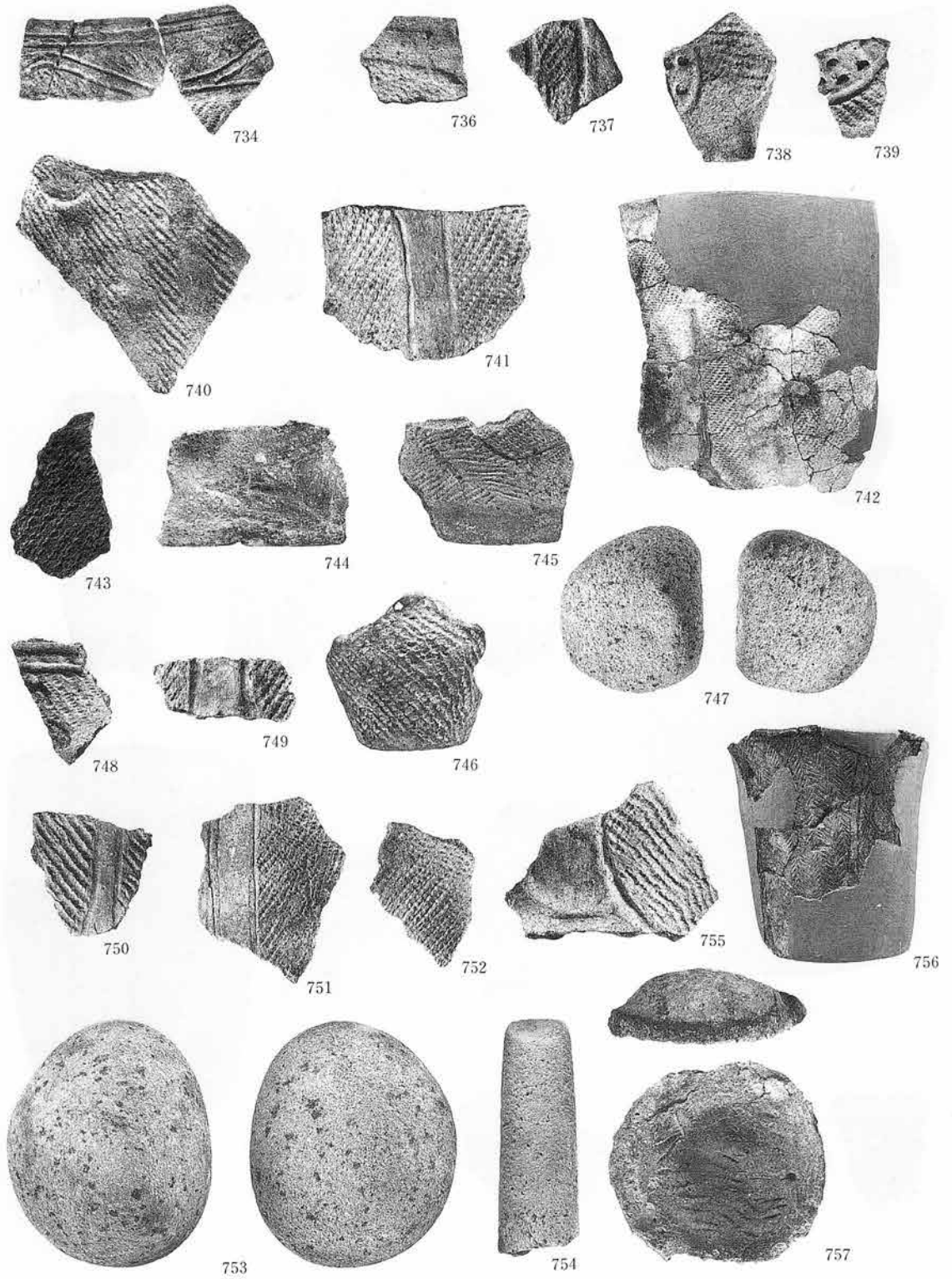
697



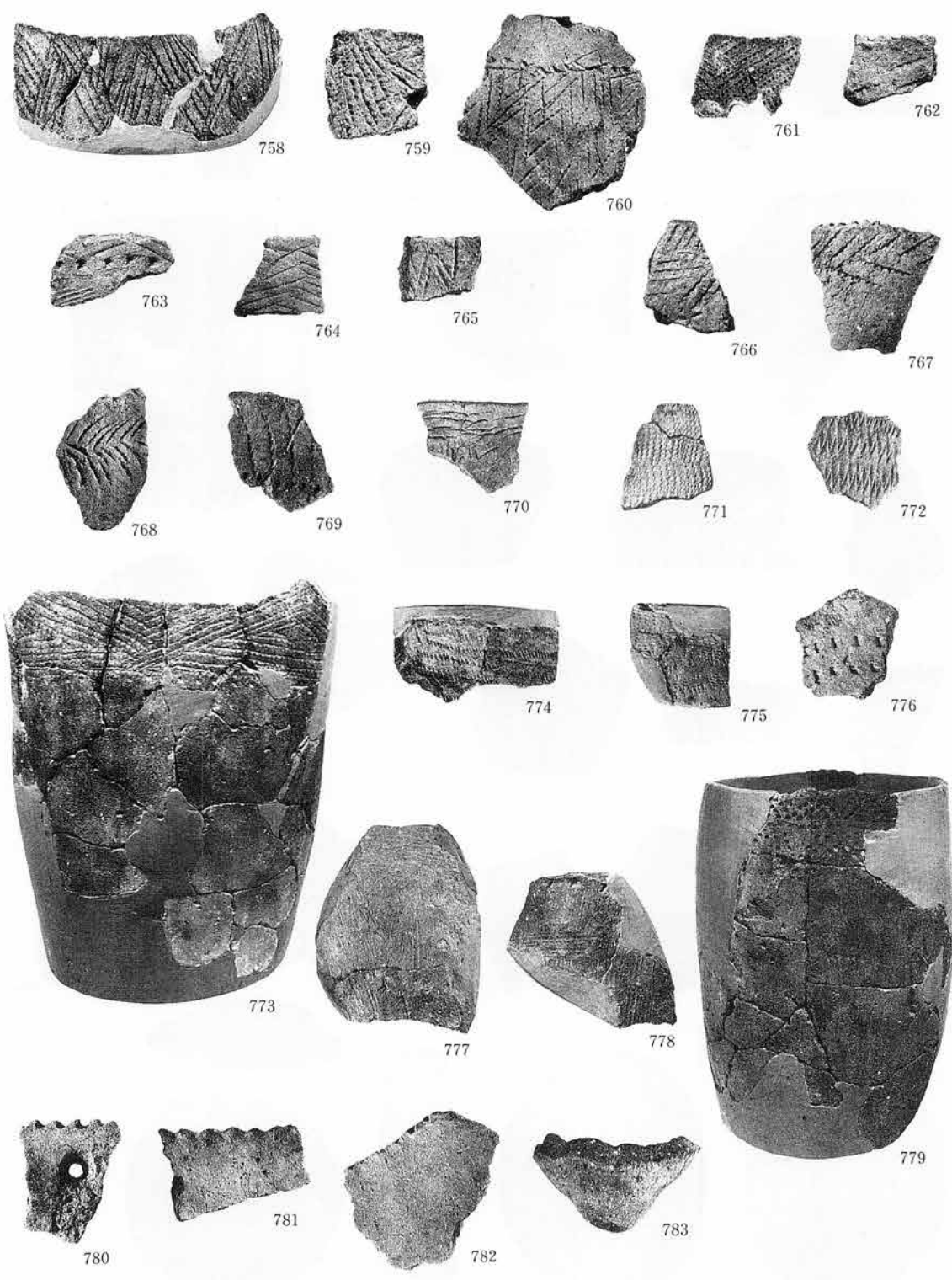
698



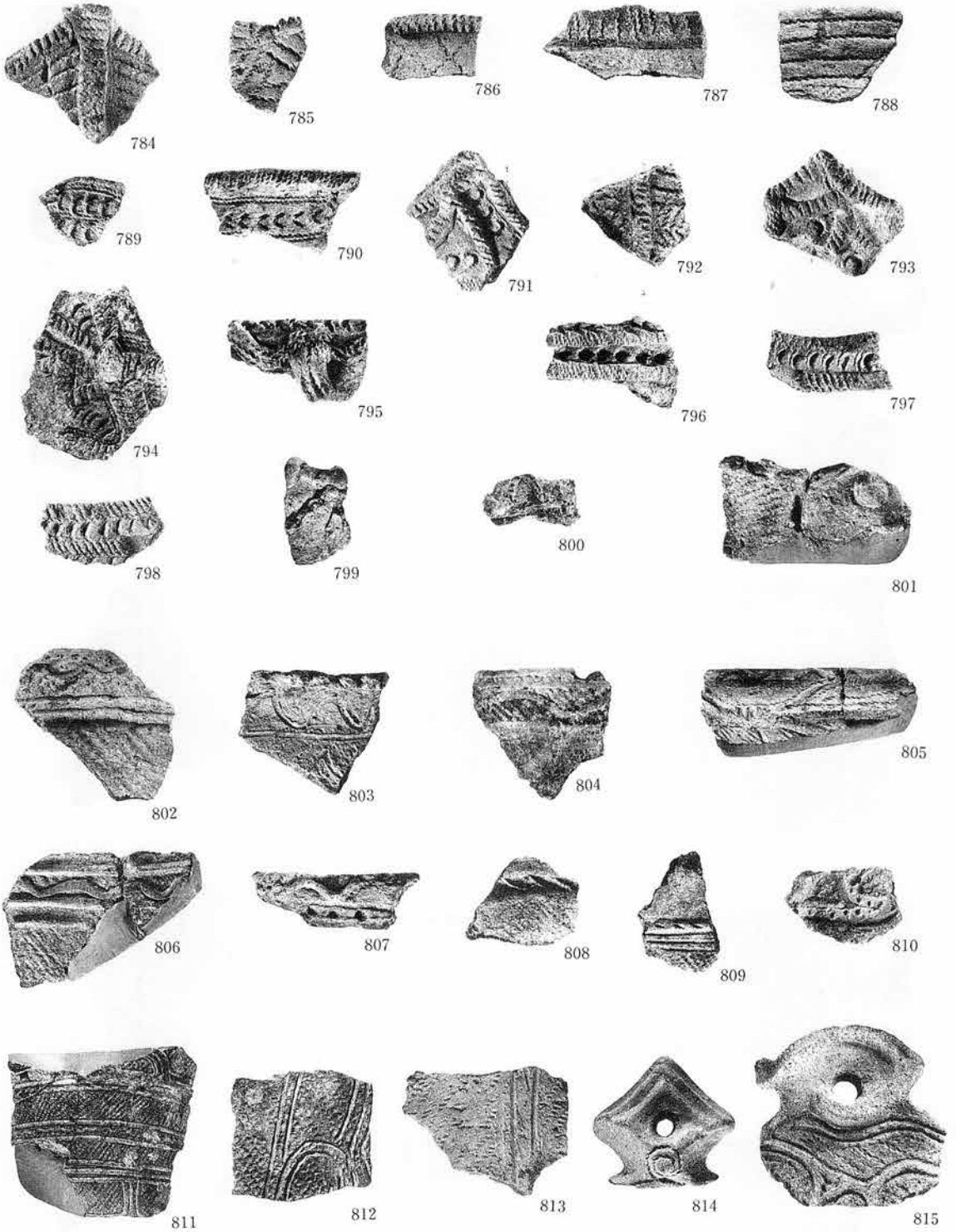
写真图版99 土坑内出土遺物(1)



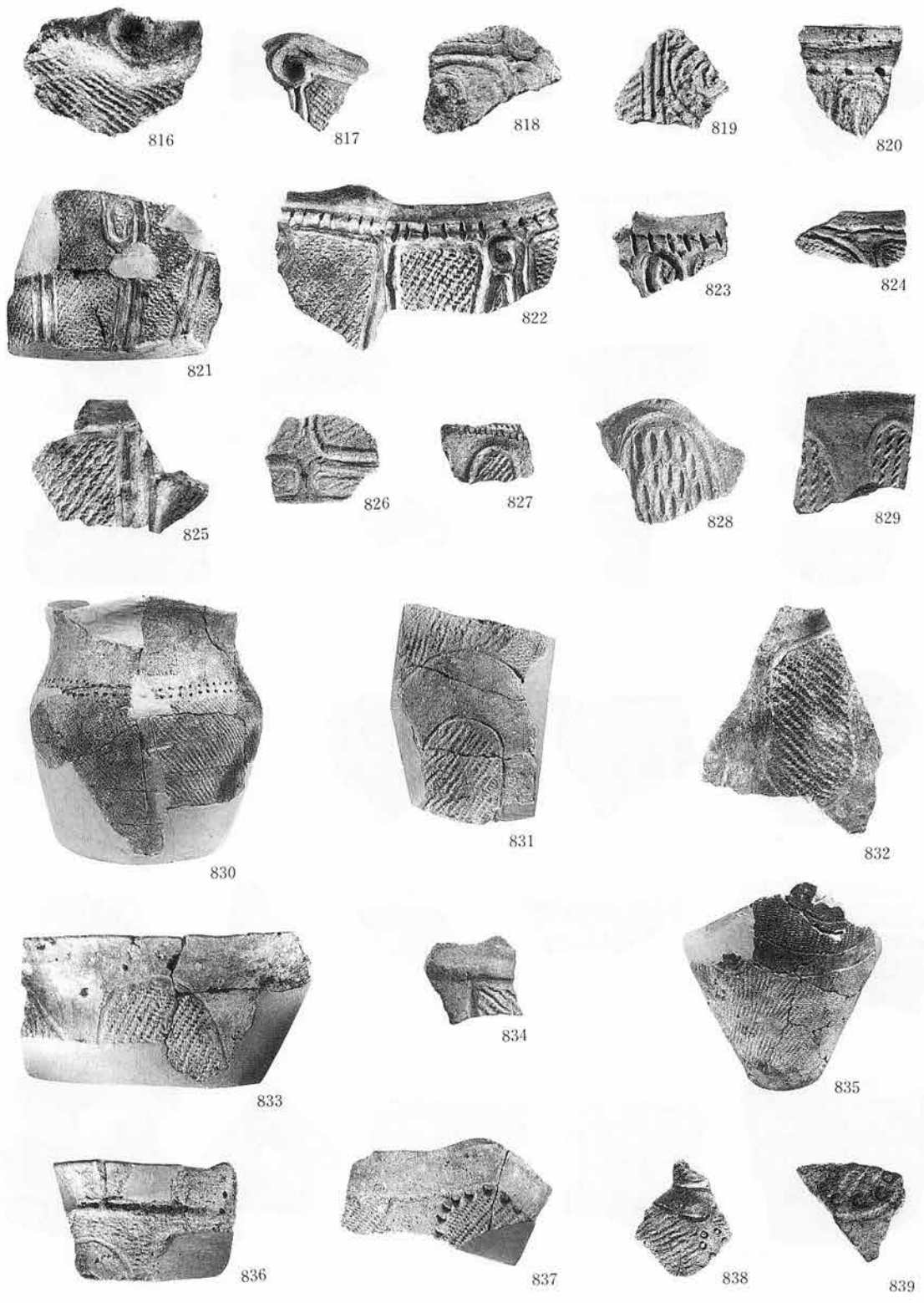
写真図版100 土坑内出土遺物(2)・土壙内出土遺物



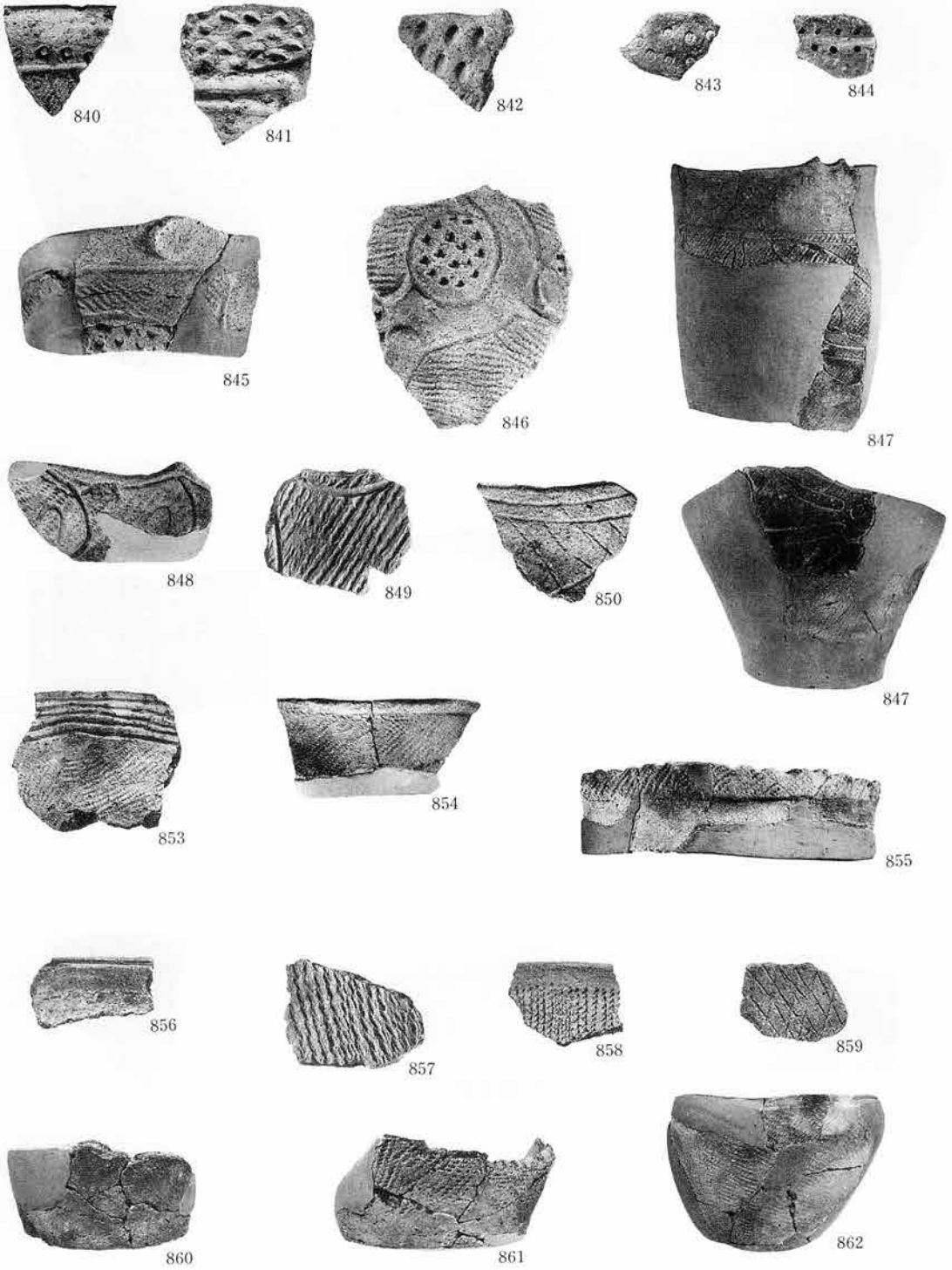
写真図版101 遺構外出土遺物(土器 1)



写真図版102 遺構外出土遺物(土器2)



写真図版103 遺構外出土遺物(土器3)



写真図版104 遺構外出土遺物(土器4)



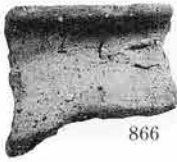
863



864



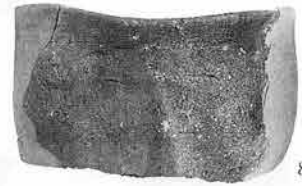
865



866



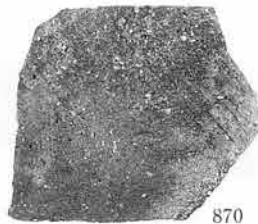
867



868



869

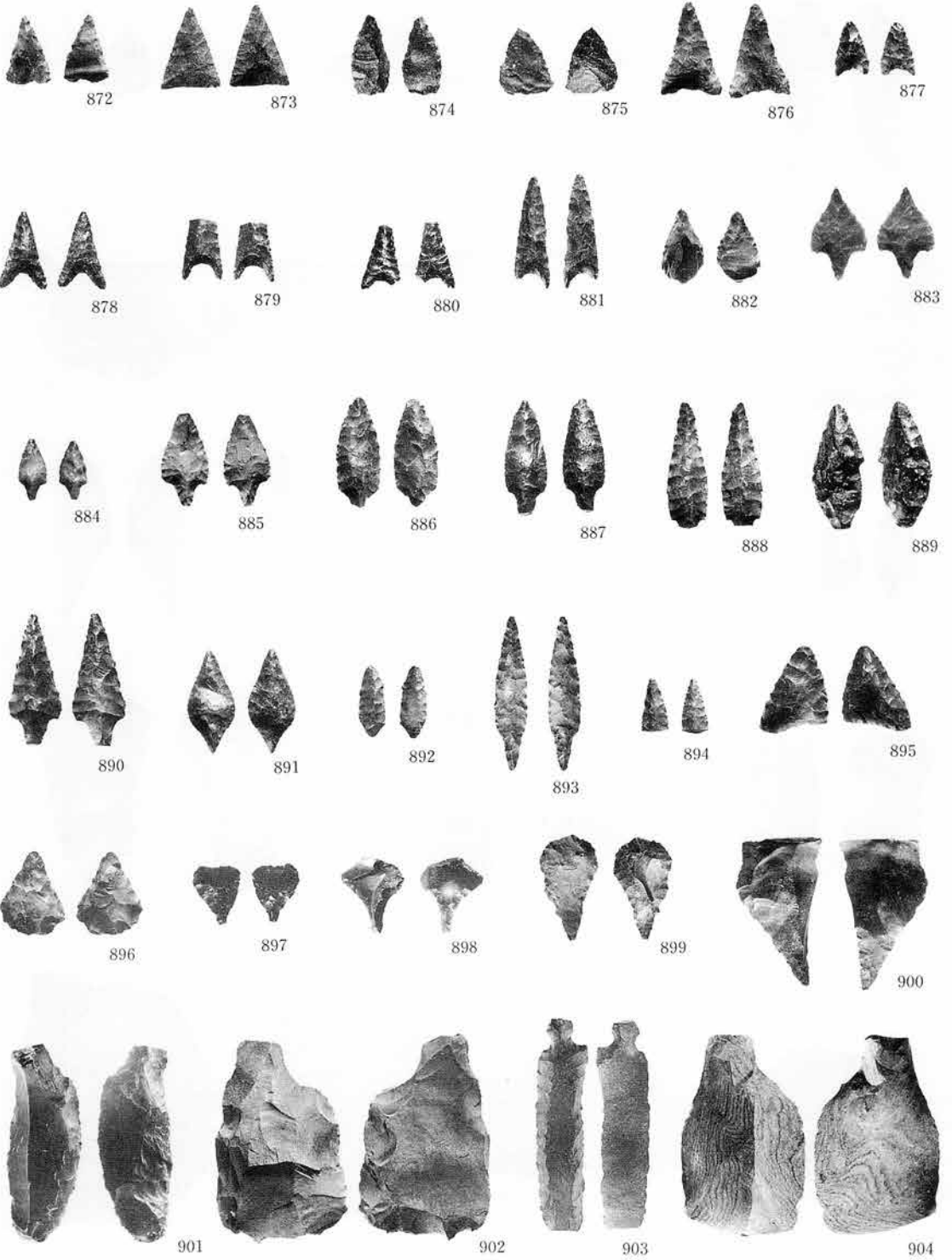


870



871

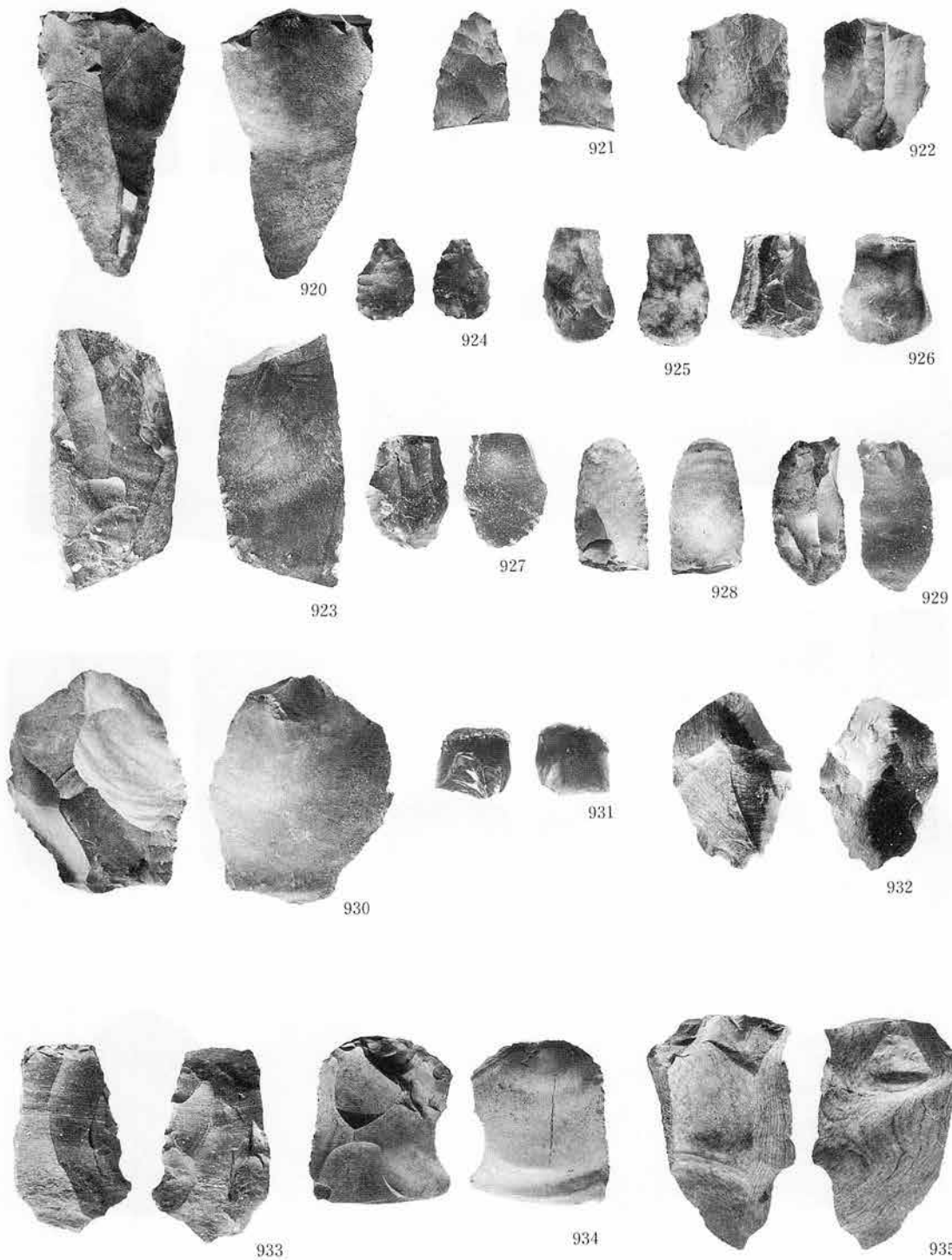
写真図版105 遺構外出土遺物(土器5)



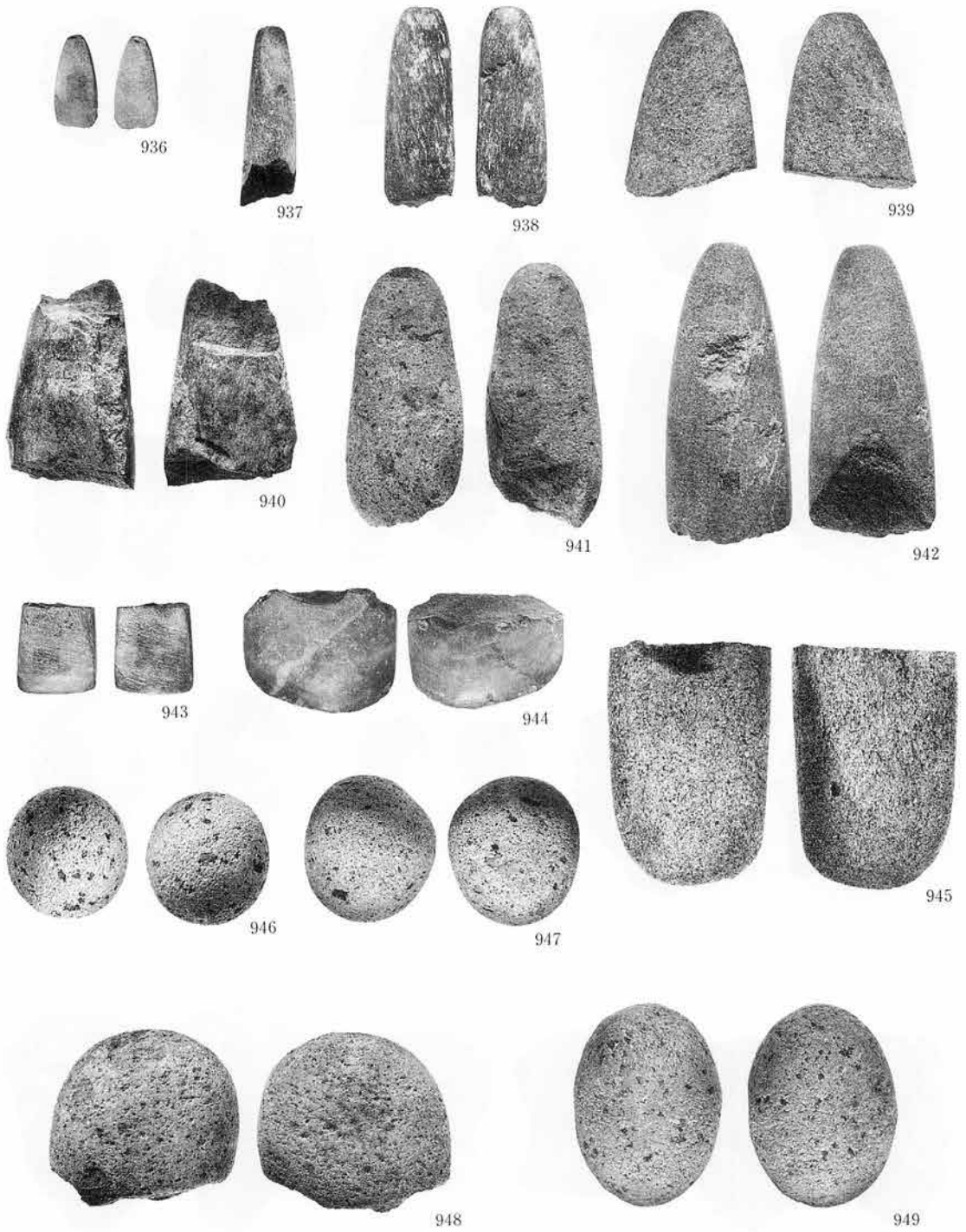
写真図版106 遺構外出土遺物(石器1)



写真図版107 遺構外出土遺物(石器2)



写真図版108 遺構外出土遺物(石器3)



写真図版109 遺構外出土遺物(石器4)



950



954



955



951



956



952



953



957



958



959

写真図版110 遺構外出土遺物(石器5、石製品)



960



961



962



963



964



965



966

写真図版111 遺構外出土遺物(土製品、鉄器)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 高 橋 重 實

副 所 長 高 橋 敬 明

[管理課]

管 理 課 長 澤 田 寛

主 事 佐 藤 理

“ 久保田 幸 恵

嘱 託 吉 田 十 次 夫

“ 野 崎 他 夫

[調査課]

調 査 課 長 鈴 木 恵 治

課 長 補 佐 三 浦 謙 一

“ 高橋 與右衛門

主任文化財 菊 池 強 一

専門調査員 “ 渡 辺 洋 一

“ 高 橋 正 之

“ 工 藤 利 幸

“ 中 川 重 紀

“ 佐々木 清 文

“ 高 橋 義 介

文 化 財 斎 藤 實

専門調査員 “ 千 葉 孝 雄

“ 川 村 均

“ 鈴 木 貞 行

“ 伊 東 格

“ 吉 田 充

“ 斎 藤 邦 雄

“ 神 敏 明

“ 高 橋 一 浩

“ 小 原 眞 一

“ 酒 井 宗 孝

“ 鎌 田 勉

“ 小山内 透

文 化 財
専門調査員

松 本 建 速

笹 平 克 子

花 坂 政 博

佐々木 務 彦

金 子 昭 彦

濱 田 宏

阿 部 勝 則

星 雅 之

羽 柴 直 人

高 木 晃

村 上 拓

期 限 付
専門職員

鎌 田 精 造

柳 田 磨

千 葉 悟

高 橋 英 樹

溜 浩 二 郎

佐 藤 修 一

稲 垣 雅 宏

田 畑 博 之

八重座 のり子

杉 沢 昭 太 郎

平 澤 祐 子

[資料課]

資 料 課 長 村 松 義 夫

主任文化財 駒 嶺 高 幸

専門調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第207集

倍田IV遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備関連遺跡発掘調査

印刷 平成6年3月25日

発行 平成6年3月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185
TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業株式会社
〒020 岩手県盛岡市本町通2-13-8
TEL (0196) 23-3351